

# 千代オオキダ遺跡

一般国道8号小松バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006.3

石川県小松市教育委員会



# 千代オオキダ遺跡

一般国道8号小松バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2006.3

石川県小松市教育委員会



# 例 言

1. 本書は、国土交通省が実施する一般国道8号小松バイパス建設工事に伴い、小松市教育委員会が実施した千代オオキダ遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査及び出土品整理は、国土交通省の委託を受けて、小松市教育委員会が行った。
3. 発掘調査の調査地、面積、調査期間、担当者は次のとおりである。
  - 《調査地》 小松市千代町地内
  - 《調査面積》 平成11年度 2,500m<sup>2</sup>  
平成12年度 8,500m<sup>2</sup>
  - 《調査期間》 平成11年度 平成11年8月5日～平成12年3月7日  
平成12年度 平成12年5月22日～平成13年3月19日
  - 《担当者》 平成11年度 宮田 明・坂下義視・川畑謙二  
平成12年度 宮田 明・坂下義視・川畑謙二・岩本信一
4. 発掘調査は、(社)小松市シルバー人材センターより作業員の派遣を受けて実施し、一部臨時作業員も雇用した。遺構の実測は、各担当者が行い、以下の協力を得た。(50音順)  
坂 俊彦、松本 敦子
5. 出土品整理及び報告書作成は、望月精司統括のもと、川畑が担当し、下記各氏の協力を得た。  
埋蔵文化財調査室員 宮田明(石製品について)、下濱貴子(弥生土器について)  
千代オオキダ遺跡出土品整理作業員(50音順)  
池端美貴・上口広子・川口有美子・国本久美子・谷敷和加子・山崎有規・山本美紀
6. 航空測量は平成11年度、平成12年度とも、日本海航測(株)が行った。
7. 木製品の保存処理は、(株)東都文化財保存研究所が行った。また、鉄製品の保存処理は、(財)元興寺文化財保存研究所が行った。
8. 写真撮影は、遺構は各調査担当者が、遺物は川畑が担当した。
9. 本書の執筆・編集は、川畑が担当した。
10. 本書で示す方位は、全て座標北である。水準高は海拔高(m)で示している。
11. 本書に示す土色は、マンセル表色系に準拠している。土性は、土層記録中の「土」=「壤土」、「砂」=「砂土」、「シルト」・「粘性土」=「埴土」と読み替えた上での相対的な表記であり、土性の判定は行っていない。なお、「埴土」に関しては、「粘性が非常に強い」と注記があるものは「重埴土」に、それ以外は「軽埴土」に分けて標記した。
12. 本調査において出土した遺物をはじめ、遺構・遺物の実測図、写真等の資料は、小松市教育委員会が保管している。
13. 発掘調査と報告書作成にあたっては、次の方々から御協力・御指導を賜った。御芳名を記して、感謝の意を表したい。(敬称略、50音順)  
岡崎晋明、木立雅朗、出越茂和、菱田哲郎、藤田邦雄

# 目 次

## 例 言

第1章 遺跡の位置と環境 .....	1
第1節 遺跡の位置及び地理的環境 .....	1
第2節 歴史的環境 .....	1
第2章 調査に至る経緯と調査経過 .....	8
第1節 調査に至る経緯等 .....	8
第2節 調査の経過 .....	10
第3節 遺跡の範囲と既往の調査 .....	12
第3章 遺 構 .....	15
第1節 遺構確認面と層序 .....	15
第2節 遺跡概観 .....	23
第3節 縄文時代後期中葉から弥生時代中期の遺構 .....	26
第4節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構 .....	27
第5節 古墳時代後期後半から古代の遺構 .....	51
第6節 中世の遺構 .....	119
第4章 遺 物 .....	169
第1節 はじめに .....	169
第2節 縄文時代後期中葉から弥生時代中期の遺物 .....	169
第3節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺物 .....	169
第4節 古墳時代後期後半から古代の遺物 .....	208
第5節 中世の遺物 .....	279
第6節 特殊遺物 .....	320
第5章 総 括 .....	342
第1節 縄文時代後期中葉から古墳時代前期 .....	342
第2節 古 代 .....	345
第3節 中 世 .....	355

写真図版 1～60

報告書抄録

# 第 1 章 位置と環境

## 第 1 節 位置及び地理的環境

千代オオキダ遺跡は、小松市千代町に所在する。千代町は、梯川と鍋谷川が合流する地点から西側右岸の標高約 4 m を測る自然堤防上に位置している。梯川は白山山系の大日連峰を源に発し、西俣川、大杉谷川、郷谷川、滓上川、鍋谷川、八丁川などが合流して安宅町において日本海に注いでいる。上流域では、河岸段丘地帯を形成し、中下流域では、潟埋積平野である小松・江沼平野が形成されている。東には能美丘陵とその背後の能美山地が存在し、南に小松東部丘陵が連なっていて、最奥部には白山を遠望することができる。その秀麗な容姿は現在まで変わることはなく、古代・中世期を通じて信仰と対象となっている。前述のとおり、河川の合流地点であることから、水害の多い地域でもあった。故に、背後に肥沃な後背湿地を抱える結果となり、古来より農業の盛んな地域となっている。このことは、遺跡が長期に渡って広範囲に分布する一つの要因といえるだろう。近



第 1 図 小松市の位置

世期には、米の他に大豆や菜種、茶・生糸・実綿・麻の産地として知られている。現在は、調査要因でもあった国道 8 号バイパスが完成しており、やや様変わりした感はあるが、集落の周辺には田園風景がひろがっており、米作りが盛んに行われている。明治 16 年に梯川の渡船が廃止され、舟場橋が架けられるまで、左岸との行き来は舟が重要な交通手段だった。梯川を媒介とし安宅港及び日本海とも繋がっており、水運による物資の交流が伺われる。一方で、前述のとおり、この地域は台風や集中豪雨時の梯川増水の度に水害の危機に晒されていた。現在においても護岸工事が行われており、町民有志により水防訓練も行われている。鍋谷川は、昭和 23 年に鍋谷川を東側へ約 40 m 移して、梯川との合流地点まで直線化するまでは蛇行していたことが知られている。実際に、石川県埋蔵文化財センターが行った千代地区の調査において、蛇行した鍋谷川の流路が検出されており、当時の景観を物語っている。また、今回の千代オオキダ遺跡の調査や、千代・能美遺跡対岸の佐々木遺跡の調査等において、旧河道の跡が検出されており、梯川や鍋谷川の本流から派生したものと考えられる。この地域に暮らした人々は、これら旧河道を生活用水や灌漑用水として利用してきたものと推察され、旧河道の間の微高地上に集落が形成されていた景観が復元される。これらの旧河道は、時代によって頻繁に流路を変えていることが分かっており、各時代において集落が移動する要因の一つであろう。ただし、これらの旧河道は中世段階に下るものは検出されていないことから、中世期にはある程度灌漑水路が整備されたことが想定される。

## 第 2 節 歴史的環境

### 第 1 項 旧石器～縄文時代の環境

旧石器時代の遺跡は、後期旧石器時代から認められる。灯台笹遺跡や八里向山遺跡群・河田山遺跡

などが確認されており、高位段丘上に立地している。縄文時代の遺跡は、梯川左岸地域では軽海西方寺遺跡で、縄文時代前期後葉の土器片が見つっている。縄文時代中期前葉～中葉の麦口遺跡や中期前葉～後葉の中海遺跡も確認されている。右岸地域でも、八里向山遺跡群、里川D遺跡、河田館遺跡、宮谷寺屋敷遺跡、南野台遺跡など縄文中期を中心とする遺跡が確認されている。これらは丘陵縁辺部の平地に立地している。既に縄文時代には、梯川や鍋谷川本流以外に、当調査区においても旧河道の形成が確認されている。当遺跡では縄文時代後期後葉における遺構・遺物が、それら旧河道周縁部で確認されるようになる。ただし、単独出土の様相が強く、集落の存在を示すものではない。この時期には平野部への遺跡の進出が認められており、当遺跡周辺には大長野A遺跡、牛島ウハシ遺跡等がみられる。

## 第2項 弥生時代の環境

弥生時代は、前期の遺跡は木場潟・今江潟・柴山潟の三湖周辺地区に分布がある。中期の遺跡は八日市地方遺跡を中心として、松梨遺跡、梯川鉄橋遺跡、白江梯川遺跡、銭畑遺跡など梯川下流域の低湿地帯に分布の中心が移っている。当遺跡では、弥生時代前期及び中期の遺構・遺物が、前代の縄文時代後期後葉と同様、単独的ではあるが検出されている。弥生時代中期の遺物は、近接する千代・能美遺跡でも確認されている。

弥生時代後期以降は、この地域において遺跡数が増加する時期となる。梯川左岸では漆町遺跡を始め、白江梯川遺跡、佐々木ノテウラ遺跡、佐々木アサバタケ遺跡などが認められる。特に漆町遺跡では計画性を持つ溝や掘立柱建物跡が検出されている。右岸では一針C遺跡や当遺跡などが挙げられ、一針C遺跡では後期前半の青銅器鑄造用鑄型も検出されている。当遺跡では、旧河道への土器の大量廃棄跡が検出されている。直線的な溝も検出されているが、住居跡は検出されていない。土器廃棄の主体となった集落は別の地点に存在しているものと考えられる。これらの遺跡は、梯川兩岸の自然堤防上に立地している。弥生時代終末期には、八里向山A遺跡や河田山遺跡のような高地性集落も営まれている。

## 第3項 古墳時代の環境

古墳時代には、能美丘陵から小松東部丘陵にかけて、丘陵先端部に多くの古墳が築造されるようになる。能美丘陵では、和田山・末寺山・寺井山・秋常山・西山の独立丘陵に、約60基からなる能美古墳群が形成されている。秋常山1号墳は全長110mを測る、県内最大の前方後円墳である。また、これら古墳群に先行する月影期（漆町編年3・4群）の墳墓が検出されており、当遺跡を含む梯川流域の遺跡群との係わりも指摘されている。小松東部丘陵には河田山古墳群があり、総数61基からなる大古墳群である。形態は、前方後円墳・円墳・方墳・前方後方墳があり、特に12号墳は、アーチ状の天井を持つ切石積横穴式石室をもつ方墳で、類例のない終末期古墳である。その他、八里向山C・D・F遺跡や埴田後山、八幡古墳群などが存在する。これら古墳群全体の時期は前期～終末期のほぼ全期にわたる。

古墳以外では、近年石川県埋蔵文化財センターによって調査された千代・能美遺跡が注目される。古墳時代前期（3世紀後半～4世紀前半）の首長クラスの居館と考えられており、出土した装飾木製品の様式から畿内との繋がりも指摘されている。前述の古墳群における造墓主体とも考えられており、梯川流域の集落群の中でも特に注目される存在となっている。このように丘陵部の古墳との関係が注目されているなかで、当遺跡の調査において、漆町編年5～8群（3世紀後半～4世紀中頃）の墳墓群が検出されたことが特筆される。この結果によって、梯川右岸平野部において墓域を持つ首長層の存在が浮かびあがってきた。墳墓は方墳主体で、一部造り出し部分を持つものも存在している。その他、漆町編年10～13群（4世紀後半～5世紀後半頃）の集落跡が荒木田遺跡で検出されている。



この古墳時代前期に隆盛した集落群も、この時期を境に縮小傾向となるようで、6世紀後半を境に殆ど見られなくなる。ただし、丘陵部における造墓は行われていることから、集落のあり方が大きく変動した時期といえよう。当遺跡でも、大溝内において遺物が散見される程度となる。

#### 第4項 古代の環境

7世紀代に入ると、能美丘陵でも須恵器生産が開始されている。律令国家整備段階の当該地域の集落遺跡動向は、前代に引き続きあまり活発ではないが、軽海遺跡、古府シノマチ遺跡、佐々木ノテウラ遺跡で、7世紀代の遺跡が確認されている。佐々木ノテウラ遺跡では、7世紀前半～8世紀前半の掘立柱建物跡や倉庫跡が検出されている。当遺跡では、石川県埋蔵文化財センターが調査した区域において、鍋谷川右岸に近い地区で7世紀後半代の掘立柱建物跡が検出されているが、当調査区では7世紀後半でも末期に近いころから遺構が確認され始める。大溝の左岸付近に突如として建物跡が出現したような状況であり、同時期の遺物として律令的祭祀遺物である土馬が集中して出土している。また、同時期の能美窯産と考えられる瓦が数点ではあるが出土しており、十九堂山遺跡次ぎ二例目の検出となっている。出土瓦には軒丸瓦が含まれており、北陸地方では類例のない単弁八葉蓮弁文が施されている。集落の開始には律令国家ないし地方豪族の影響も感じられる。十九堂山遺跡は、後の国分寺及びその前進の勝興寺跡とも考えられている遺跡である。また、後述する佐々木遺跡からは8世紀末頃の「財部寺」と記された墨書土器が出土しており、両者との関係が示唆される。

8世紀代に入ると、当遺跡の対岸に位置する佐々木遺跡において、柵と塀に囲まれた区画の中に整然と立ち並ぶ掘立柱建物群が出現する。時期は8世紀中頃を中心とする短期間であり、「野身郷」と記された墨書土器が出土し、律令的要素が強いとされる県内最大級の横板組の井戸も検出されたことから、古代野身郷に関連した公的施設と考えられている。対岸の当遺跡でも、佐々木遺跡よりは若干後出するが、ほぼ同時期の横板組の井戸と建物跡が検出されている。しかし、建物群のあり方の違いから遺跡の性格は異なると判断される。また、条里制の施行とも関連するような、東西に伸びる直線的な溝も検出されている。荒木田遺跡では、律令期村落の特徴を持つ、8世紀初頭～9世紀中頃までの掘立柱建物群が検出されている。さらに、墨書土器による祭祀が行われた水場遺構が検出されていることが特筆される。

9世紀に入り弘仁14年(823年)には、越前国から加賀郡と江沼郡の2郡が分立し、加賀国となった。程なくして、江沼郡より能美郡が、加賀郡より石川郡が分出し、当地域は能美郡の所屬となった。立国当初の国府の所在地については諸説あるが、当遺跡東方に位置する国府地区の台地上が有力視されている。国衙等の施設はやや遅れた9世紀中頃から整備されたという意見もあり、その視点に立てば、当該地域の集落遺跡が活性化する時期と合致する。先述の佐々木ノテウラ遺跡・古府シノマチ遺跡に加え、古府遺跡・漆町遺跡・佐々木遺跡等があり、再び梯川の自然堤防上に集落が多く形成されている。漆町遺跡からは10世紀前半代の「庄」と記された墨書土器も出土しており、荘園開発が行われた可能性も指摘されている。一方で、荒木田遺跡はこの時期に集落の中心部を移動しているようで、この地域では大きな集落の再編があったようである。この時期の集落は断続的ではあるが、12世紀までは維持される。ただし、多くの集落が、10世紀の後半段階に衰退傾向になっており、この時期にも、集落再編の様相が見える。当遺跡では、逆に10世紀後半～11世紀代に建物数が増加しており、活性化している様相にある。当遺跡や漆町遺跡などは、広大な遺跡範囲を持つことから、10世紀後半代は衰退傾向というよりは、遺跡範囲内で移動したものと考えられる。

一方で、丘陵地には、9世紀前葉以降に山林寺院が成立する。里に程近い丘陵の、やや奥まった所に立地する特徴を持つ。八里向山B遺跡の9世紀前葉が古く、次いで里川E遺跡、浄水寺遺跡が成立する。前二者は成立後約半世紀で廃絶するのに対して、後者は寺院規模を拡大し、中世へと存続している。浄水寺遺跡では9世紀後葉～10世紀前半にかけて、大溝への墨書土器の多量廃棄が行われ、中国製磁器や国産施釉陶器を持つなど隆盛期を迎えていた。「浄水寺」は雨乞い信仰との関わりが考えら

れており、国分寺の成立事情が承和年間（834～848年）に起こった大旱魃による飢饉にあるため、両者の関係性が指摘され、隆盛の大きな要因であったことが推測される。国府は、内部施設には変化があったことは考えられるが、「平家物語」や「源平盛衰記」の加賀国守目代と白山中宮八院衆徒らとの対立抗争である安元事件の記載により、12世紀末ころまでは確実に存在していることがわかる。当遺跡では、12世紀前半には、調査区の南端から県道をまたぐ地点に建物群が移動している。また、鍋谷川に近い地点にも集落が成立している。

## 第5項 中世の環境

中世においても、当該地域では活発な集落の動きがみられる。12世紀代には白江梯川遺跡・佐々木ノテウラ遺跡・荒木田遺跡・漆町遺跡（白江ネンブツドウ東地区、白江チョウジャワリ地区、金屋ヤシキダ地区、金屋サンバワリ地区）及び当遺跡が見られる。荒木田遺跡は14世紀前半頃までの、漆町遺跡は金屋サンバワリ地区を除き14世紀後半まで継続する集落である。佐々木ノテウラ遺跡は13世紀代に断絶して、14世紀～15世紀代に集落遺跡として再び成立している。当遺跡や白江梯川遺跡（16世紀代）、漆町遺跡金屋サンバワリ地区（15世紀代まで）は中世期を通じて存続する集落跡である。

13世紀代には、軽海西方寺遺跡・軽海遺跡・佐々木アサバタケ遺跡が成立する。前二者は概ね15世紀代まで、後者は、16世紀代まで存続している。特に白江梯川遺跡及び、佐々木アサバタケ遺跡は大規模集落であり、前者では多数の掘立柱建物跡、70基を超える井戸、堀、祠跡及び、多量の陶磁器類等が出土しており、後者では南面する屋敷地が3面並立する構造が復元されており、多数の掘立柱建物跡、井戸及び、多量の陶磁器類等が出土している。有力名主層の存在が推定されており、これらの遺跡は中世荘園である「南白江荘」や「得橋郷」に係わる遺跡と考えられる。他の集落遺跡も、荘園開発に係わる中で成立したものと考えられる。当遺跡でも市調査区部分と鍋谷川寄りの2ヵ所で中世集落が確認されている。この2極化の傾向は中世期を通じて見られるものであるが、現集落もニュータウンと呼ばれる地区を除くと能美町寄りの地区と、鍋谷川寄りの地区に別れていることがわかる。この傾向は中世集落成立期の12世紀頃から確認されるものであり、現集落形態の原型が中世期から見られることは興味深い。

ところで、当遺跡に関しては、立地から能美荘に属すと考えられる。能美荘は建久二年（1191年）に長講堂（後白河院の持仏堂）領（本家識）として成立した荘園である。領家識は成立時の知行国守及び加賀守であった平親宗・親国父子の氏寺である尊重寺が持っていた。荘域は手取川南岸の旧辰口町北西部から旧寺井町西部と、南部（能美惣荘）の八幡、能美町、一針町、長田町にかけて散在していたものと推定されている。文永六年（1269年）頃までに領家識が石清水八幡宮と分割されており、能美町、一針町、八幡一帯が石清水八幡宮領となったとされる。13世紀代の同荘関連資料には、地頭識として板津（長野）氏や橘（八幡）氏の名が見え、在地武士の台頭も窺える。その後、同荘に対し分割や寄進が行われるが、荘名は永禄12年（1569年）まで認めることができる。この頃には既に、一向一揆の支配が及んでいたようである。

16世紀代になると遺跡の動向は不明瞭になり、捕捉不可能となる。16世紀代も認められる当遺跡や、佐々木アサバタケ遺跡・白江梯川遺跡でも既に衰退傾向にあり、当該期のある時点で各遺跡が現集落部分へ集約化していったものと考えられる。前述のとおり、当遺跡の中世集落単位の立地形態が現集落配置に通ずることも傍証しているように思われる。中世期の集落動向をまとめると、12世紀代に中世集落が成立し、13世紀に発展・拡散したものが14世紀代は継続する。15世紀代には拠点的な集落以外は廃絶し集約化され、16世紀代に現集落の地点へと移動し現在まで引き継がれるという大まかな流れが観察される。ただし、16世紀代（特に後半）に関しては、戦乱で焼かれたという状況も考慮する必要があるため、現集落部分への移動という流れには断絶期間があることも考えられる。

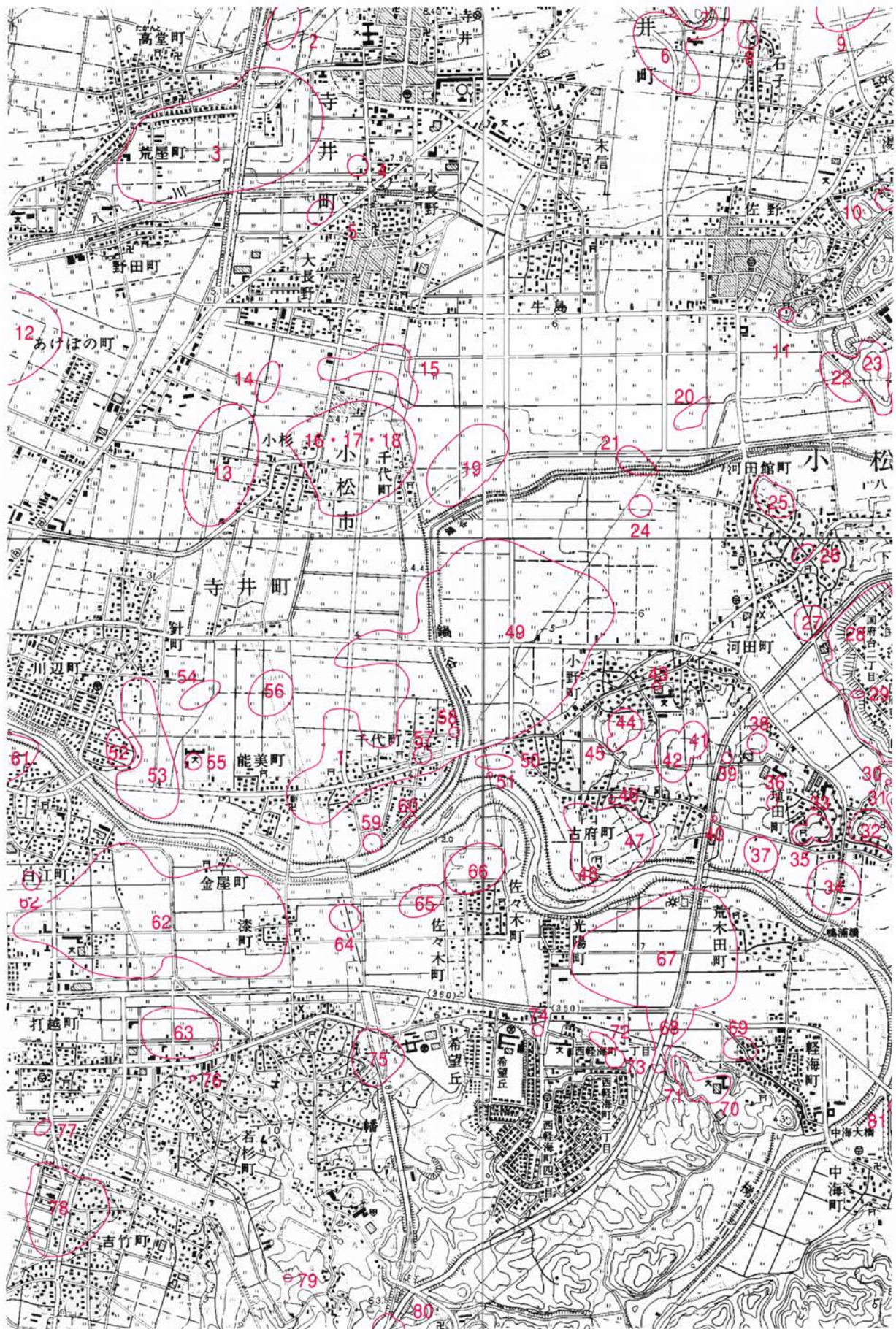
16世紀代の集落動向は不明瞭だが、現専照寺がある地点に「千代城」という城館があったという伝承がある。永禄年間（1558～1570年）に一向一揆方の武将徳田志摩が築き、天正八年（1580年）には

柴田勝家家臣拜郷五左衛門がおかれたという。既に、天正三年（1575年）には、江沼・能美の各村が信長勢に対し降伏していることから、千代はその支配下にあったと考えられる。千代城に関しては、立地から梯川・鍋谷川の両河川を天然の要害として造られたと推定されるが、付近には「北堀」・「西城」・「水ノ手」等の地名が残るのみで詳細は不明である。

また、当調査区のすぐ西隣には正賢寺という寺があったが、そこに伝わる伝承も重要である。寛正六年（1465年）に刀匠藤原将監家次が蓮如の弟子となったとあり、六代家次の貞享年中（1684～1688年）に家業を廃して道場を開いたとある。この伝承に拠れば当遺跡付近に、15世紀後半頃以降には蓮如に帰依した刀匠が代々いたことになる。残念ながら今回の調査では、多くの砥石が出土しているが、刀匠が存在したかどうかまでは断定できなかった。

### 引用参考文献

- 浅香年木他1981年『角川日本地名大辞典』17石川県 角川書店  
浅香年木1993年「加賀国」『講座 日本荘園史6』 吉川弘文館  
石川県埋蔵文化財センター1986年『佐々木ノテウラ遺跡』  
石川県埋蔵文化財センター1986年『漆町遺跡Ⅰ』  
石川県埋蔵文化財センター1988年『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』  
石川県立埋蔵文化財センター1989年『浄水寺墨書資料集』  
石川県埋蔵文化財センター1992年『千代』  
石川県埋蔵文化財センター1996年『荒木田遺跡』  
（財）石川県埋蔵文化財センター2001年「発掘調査略報 千代・能美遺跡」『石川県埋蔵文化財情報』第6号  
小松市教育委員会1996年『荒木田遺跡』  
小松市教育委員会2003年『八日市地方遺跡Ⅰ』  
小松市教育委員会2003年『千代・能美遺跡』  
小松市教育委員会2004年『佐々木遺跡』  
小松市教育委員会2004年『八里向山遺跡群』  
北陸中世土器研究会編 1997年『中・近世の北陸—考古学が語る社会史』 桂書房  
1923年『石川県能美郡誌』石川県能美郡役所  
2002年『新修小松市史』資料編4 国府と荘園 石川県小松市



第2図 周辺遺跡の分布 (S=1/25,000)

第1表 周辺の遺跡

番号	遺跡名称	時代	番号	遺跡名称	時代
1	千代オオキダ遺跡	縄文～中世	42	小野遺跡	平安
2	高堂四万堂[ヨモド]遺跡	弥生	43	十九堂山[ジクドウヤマ]遺跡	平安・中世
3	高堂遺跡	弥生～中世	44	小野古窯跡	近世
4	小長野遺跡	不祥	45	十九堂山中世墓群	中世
5	小長野B遺跡	古墳	46	古府横穴	不祥
6	和田山下遺跡	縄文・古墳	47	南野台遺跡	縄文・古墳
7	和田山1～24号墳	古墳	48	古府シマ遺跡	平安・中世
8	石子遺跡	中世	49	古府しのまち遺跡	古墳～平安
9	秋常遺跡	平安	50	古府遺跡	平安
10	湯谷遺跡	古墳前期	51	古府フドンド遺跡	鎌倉
11	狭野神社前遺跡	平安	52	一針遺跡	縄文
12	長田遺跡	弥生末～平安	53	一針B遺跡	弥生・古墳
13	大長野A遺跡	弥生後期～古墳	54	一針C遺跡	弥生・古墳
14	大長野B遺跡	不祥	55	定地坊跡	室町
15	牛島宮の島遺跡	平安	56	千代・能美遺跡	古墳～中世
16	千代デジロA遺跡	弥生・古墳・中世	57	千代城跡	室町
17	千代デジロB遺跡	弥生・古墳・平安	58	千代小野町遺跡(小野町遺跡)	古墳
18	千代デジロC遺跡	古墳・平安	59	千代本村遺跡	古墳
19	牛島ウハシ遺跡	古墳前期・奈良・平安	60	横地遺跡	縄文
20	佐野八反田遺跡	奈良・平安	61	白江梯川遺跡	弥生・中世
21	佐野A遺跡	弥生	62	漆町遺跡	弥生～中世
22	河田向山下遺跡	縄文・平安	63	打越遺跡	弥生～中世
23	河田向山古墳群	古墳	64	佐々木遺跡	奈良・平安
24	下出地割遺跡	不祥	65	佐々木ノテウラ遺跡	弥生～中世
25	河田館遺跡	縄文・中世	66	佐々木アサバタケ遺跡	弥生～中世
26	谷内横穴	不祥	67	荒木田遺跡	古墳～中世
27	河田C遺跡	不祥	68	軽海西芳寺遺跡	縄文・古墳～中世
28	河田山遺跡・河田山古墳群	旧石器・弥生・古墳	69	西芳寺遺跡	平安・中世
29	河田B遺跡	奈良	70	軽海廃寺	平安
30	御菩提所[オボダイショ]古墳	古墳	71	軽海中世墓群	中世
31	埴田山古墳群	古墳	72	軽海遺跡	弥生～近世
32	埴田後山古墳群	古墳	73	亀山[ガメヤマ]玉造遺跡	古墳
33	宮谷寺屋敷遺跡	縄文・室町	74	大谷口遺跡	弥生
34	埴田遺跡	奈良・平安	75	八幡遺跡・八幡古墳群・八幡若杉窯	縄文～近世
35	埴田フルカワ遺跡	古墳	76	若杉古窯跡	近世末期
36	埴田ミヤンタン遺跡	不祥	77	吉竹B遺跡	古墳
37	埴田ウラムキ遺跡	平安・中世	78	吉竹遺跡	古墳
38	埴田ミヤケノ遺跡	不祥	79	若杉オソボ山1号窯跡	古墳
39	前田利常公灰塚	近世	80	浄水寺跡	古墳・奈良・中世
40	埴田の虫塚	近世	81	ブッシュウジヤマ古墳群	古墳
41	小野スギノキ遺跡	平安・中世			

## 第 2 章 調査に至る経緯と調査経過

### 第 1 節 調査に至る経緯等

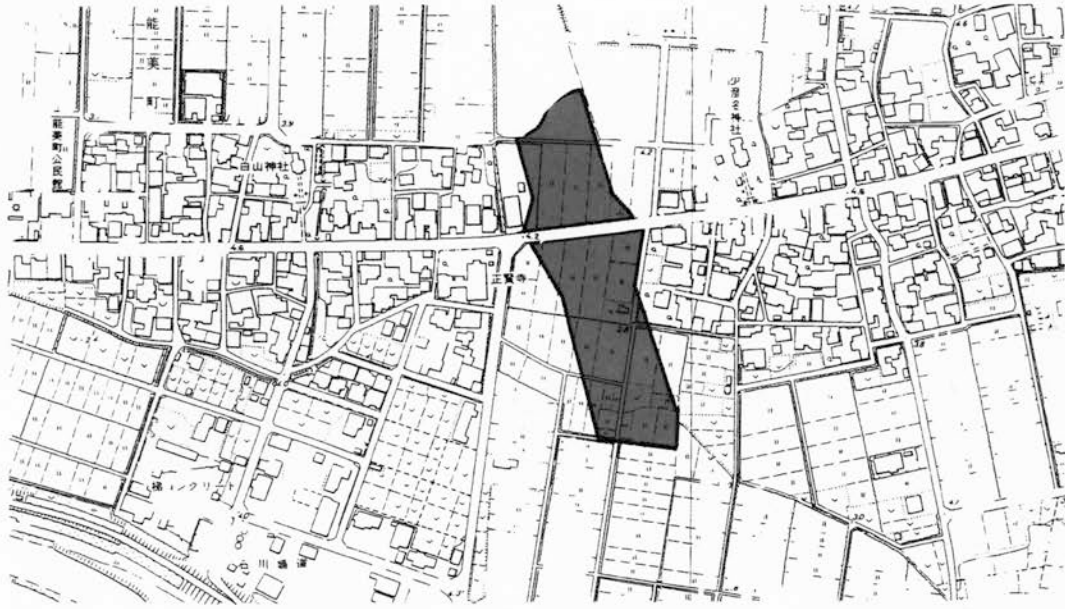
建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所（現国土交通省 北陸地方整備局 金沢河川国道事務所、以下省略）が実施する一般国道8号小松バイパス建設工事に伴い行われたのが、千代オオキダ遺跡の発掘調査である。事前の埋蔵文化財確認調査は、建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所の依頼により、石川県埋蔵文化財センター 企画整理課（当時）が、平成2年5月22日と平成5年3月8日～9日に実施した。その結果、当該地には弥生時代～中世にかけての複合遺跡が所在していることが確認されている。

確認調査から約5年の月日が経過した頃、平成10年度中に石川県教育委員会 文化財課より、同じ調査要因で行っていた佐々木遺跡の調査が、平成11年度半ばで終了することを受けて、引き続き千代オオキダ遺跡の発掘調査も受託できないかとの打診があった。小松市教育委員会において協議した結果、この申し出を受ける結果となった。このときの協議で、平成11年度調査面積は、当該年度に入ってから協議の上決定することとなった。

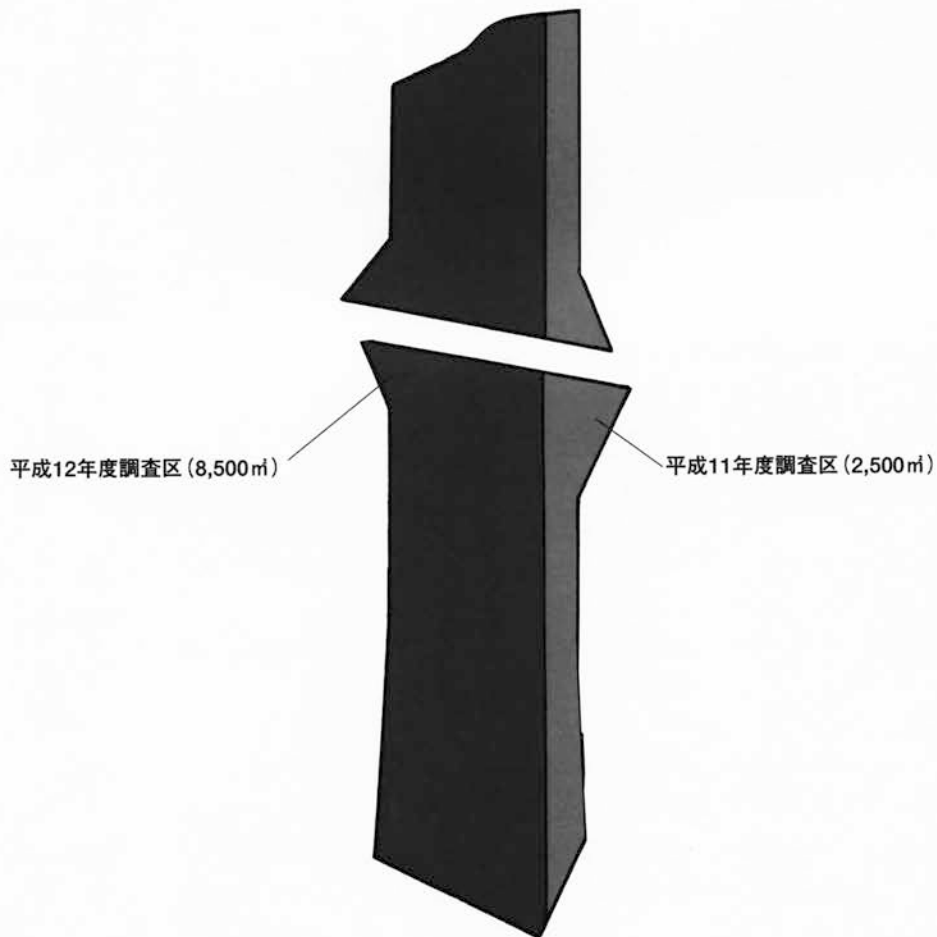
平成11年4月1日付けで、石川県教育委員会 文化財課から、平成11年4月2日付けで、建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所から、仮に調査面積を4,000㎡とする依頼が出された。これを受けて、小松市教育委員会、建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所、石川県教育委員会 文化財課の3者による協議が開始された。その結果、平成11年度は梯川橋脚部分の工事を先行して行う必要から、そのための工事車両通行用の側道部分約2,500㎡を先行して行い、残り8,500㎡の調査を、平成12年度に4,400㎡、平成13年度に4,100㎡行う計画が立てられた。この協議の結果を受けて、平成11年6月7日付けで、平成11年度調査面積を2,500㎡とした調査依頼が、建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所と石川県教育委員会 文化財課双方から提出された。これを受けて、小松市教育委員会より、平成11年6月21日付けで発掘調査事業計画書を両者に提出した。その後、平成11年6月23日付けで、建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所と小松市の間で発掘調査委託契約書を締結するに至った。平成11年8月3日付けで、小松市教育委員会から、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知（当時）を文化庁に提出した。平成12年3月9日付けで、小松市教育委員会から現地調査の終了通知を、同年3月31日付けで、小松市より委託事業執行結果報告書を建設省 北陸地方整備局 金沢工事事務所に提出した。

平成12年度は、諸般の事情から、一般国道8号小松バイパス建設工事を急ぐ必要性が生じたため、残り8,500㎡を1年で調査してほしいという、建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所の意向を受けて、小松市教育委員会として調査員4名体制で行うこととなった。ただし、小松市教育委員会の人員配置の関係上、当初から4名体制とはならなかった。

平成12年4月3日付けで、調査依頼が建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所と石川県教育委員会 文化財課双方から提出された。これを受けて、小松市教育委員会より、平成12年4月4日付けで発掘調査事業計画書を両者に提出し、同日付で、建設省 北陸地方建設局 金沢工事事務所と小松市の間で発掘調査委託契約書を締結するに至った。平成11年5月12日付けで、小松市教育委員会から、文化財保護法第98条の2第1項の規定による埋蔵文化財発掘調査の通知（当時）を文化庁に提出した。平成13年1月6日付けで、省庁統合により、国土交通省 北陸地方整備局 金沢工事事務所が設置されたことから、同省に契約が引き継がれた。平成13年3月21日付けで、小松市教育委員会から現地調査の終了通知を、同年3月31日付けで、小松市より委託事業執行結果報告書を国土交通省 北陸地方整備局 金沢工事事務所に提出し、現地調査を終えた。



第 3 図 調査区の位置 (S=1/5,000)



第 4 図 年度別調査区

## 第2節 調査の経過

### 第1項 グリッドの設定

平成11年度調査区は面積2,500m<sup>2</sup>、平成12年度調査区は面積8,500m<sup>2</sup>であり、南北ラインで分割している。グリッドは調査区北端東端を起点として、計画道路ラインに沿う形で5m×5mのメッシュを設定している。両年度とも共通グリッドを使用している。同時に基準点測量も行うことにより、国土座標にも対応させている。グリッド呼称は、南北ラインには北から南へ番号数字を振り当て、東西ラインには東から西へアルファベットを振っている。水準点に関しては、3級水準点測量を行い、調査区外にベンチマークを設定した。

### 第2項 現地調査の概要

現地調査は、平成11年度・平成12年度とも、道路建設予定が差し迫っていることもあり、冬季間も中断せずに、ほぼ一年間通して行った。

表土及び水田床土は厚さ20cm程度であり、過去の圃場整備及び耕作によって包含層及び地山上面は既に失われていると判断されたため、調査員立会いのもと水田の床土が若干のこる高さまで重機で除去し、その後人力による遺構検出作業を行っている。湧水対策のため、調査区内外周に排水溝を掘削し、24時間体制でポンプによる汲み上げを行った。遺構検出時に出土した遺物は、グリッドごとに取り上げた。包含層は既に失われているものの、便宜上一括して包含層遺物として扱っている。遺構は、任意の箇所に適時土層観察用のアゼを設定し掘り下げた。遺物については、基本的には層位で取り上げることとし、必要に応じて遺物出土状況図やドットマップを作成した。遺構番号は、調査区が大きく県道（当時、現在は市道。以下省略）によって分断されており、作業中に連絡を取り合うことは、時間的ロスが大きく生じることとなるため、県道北側調査区では、偶数桁を、県道南側調査区では奇数桁を使用することで対応した。報告において遺構番号を振り直すことは困難であるため、基本的には現場での呼称をそのまま使用している。遺構の実数は、県道北側調査区 土坑74基・溝61基、県道南側調査区 土坑125基・溝97基であるが、全体的に遺構番号の整理が行うことができなかったことはお詫び申し上げる。ただし、井戸側を持つ井戸及び、掘立柱建物跡については、逆に誤解を生じる結果となるため、報告に際し遺構番号を改定している。墳墓に関しても、現場では溝番号としてカウントしていたため、報告に際し新たに遺構番号を与えている。

仕方がなかったこととはいえ、平成11年度調査区が非常に細長いものとなってしまったため、平成12年度調査区との接合部分で、一部に整合性を欠く結果となってしまったことは、反省点として挙げられる。また、ごく一部だが、生活廃水路部分や、通学路部分において分断することが不可能な箇所は調査対象から除外している。調査区内外周に掘った排水溝についても同様で、遺物回収を行ったのみである。

各年度の概要は以下のとおりである。

#### 平成11年度調査

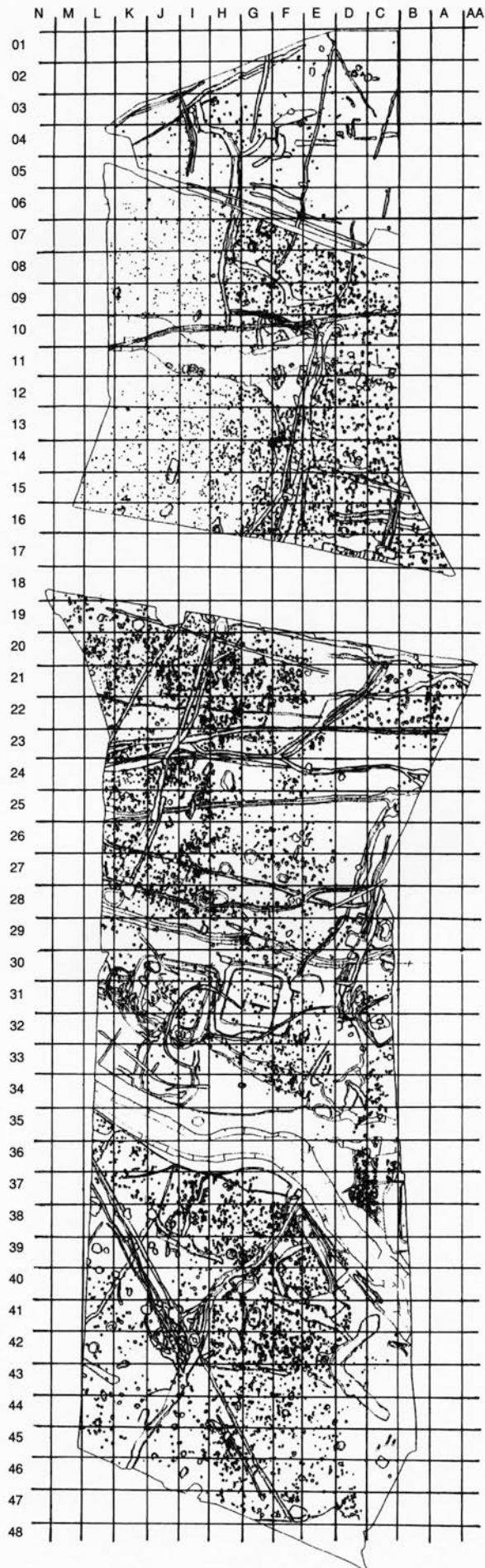
調査期間：平成11年8月5日～平成12年3月7日 調査面積：2,500m<sup>2</sup>

平成11年8月5日、現地調査に着手する。調査は、川畑調査員が先行して入り、調査区北端から遺構確認作業を行っていった。遺構の掘削深度が浅く、削平を受けていることが判明した。

平成11年8月23日より、宮田調査員が合流し、県道南側調査区北半の調査を開始した。この調査区も、すでに削平を受けていたが、県道北側調査区よりは残存状況がよかった。

平成11年11月10日より、坂下調査員が合流し、県道南側調査区南半の調査を開始した。この区域は、以前の水田の用水路によって大きく攪乱を受けており、特に調査区南端に近づくにつれ、非常





第5図 グリッド配置図 (1/1,000)

に残存状態の悪い状況となった。

平成12年2月10日に、遺構掘削が完了したため、航空写真測量を行った。その後、平成12年3月7日まで、細部の測量調査等を行い、現地作業を終了した。

#### 平成12年度調査

調査期間：平成12年5月22日～平成13年3月19日 調査面積：8,500m<sup>2</sup>

平成12年5月22日、現地調査に着手する。調査は、川畑調査員・坂下調査員の2名が先行して入り、県道北側調査区に所在する、小学校の通学路の移設工事を優先する必要性から、移設用地となる通学路南側から遺構確認作業を行っていった。昨年度と同様に、遺構の掘削深度が浅く、削平を受けていた。特に、調査区西端に近づくと遺構分布が薄くなることから、遺跡の縁辺にあたるのかもしれない。

平成12年6月2日より、宮田調査員が合流した。平成12年6月12日より、岩本調査員が合流し、県道南側調査区の調査を開始した。この時点で、4名体制が整い、調査終了時までこの体制が維持された。

平成12年9月15日に、県道北が調査区（通学路以南部分）の遺構掘削が完了したため、第1回目の航空写真測量を行った。その後、調査区が引き渡され、通学路移設工事が行われた。平成12年10月11日より、通学路下部分を含む北側の調査を開始した。

平成12年2月23日に、遺構掘削が完了したため、航空写真測量を行った。その後、平成12年3月19日まで、旧河道の調査を行い、現地作業を終了した。

### 第3項 出土品整理・報告書刊行

平成12年1月より、出土品の整理を実施している。各年度の作業期間と作業内容は以下のとおりである。

平成12年1月11日～平成12年3月31日	遺物洗浄、注記
平成12年4月6日～平成13年3月28日	遺物洗浄、注記、分類
平成13年4月5日～平成14年3月28日	遺物洗浄、注記、分類、接合
平成14年4月3日～平成15年3月26日	注記、分類、接合
平成15年4月10日～平成16年3月30日	分類、接合、実測
平成16年4月7日～平成17年3月31日	実測、遺構・遺物図面製図
平成17年4月18日～平成18年3月31日	実測、遺構・遺物図面製図、報告書作成

### 第3節 遺跡の範囲と既往の調査

千代オオキダ遺跡は、今回の調査以前に昭和62年度～平成元年度にかけて、発掘調査が石川県立埋蔵文化財センター（現財団法人石川県埋蔵文化財センター）によって行われている。その結果、弥生時代～中世に至るまでの大規模な複合遺跡であることが確認されている。遺跡の範囲は、南を梯川右岸付近、西を今回市が調査したバイパス用地付近、東を鍋谷川右岸、北を鍋谷川が東へ90度折れる箇所約200m手前付近を境としている。この県の行った調査は、まとまった広範囲を調査したものではなく、農業用水路・排水路に限定して行われたものである。調査区の幅は約2m程度と狭く、遺跡の詳細な状況を把握するのは困難だが、広大な千代オオキダ遺跡の分布範囲にトレンチを入れた状態であり、各時代の遺跡の分布状況を把握するための好材料をもたらす結果となっている。その結果、各時代の遺跡が、全面に分布しているのではなく、いくつかのまとまりをもって存在していることが判明している。また、千代能美遺跡の分布範囲との間には、空白部分が存在している。遺跡は、弥生時代前期、弥生時代後期、古墳時代前期～後期、7世紀後半～8世紀中頃、9世紀前半～10世紀前半、12世紀～13世紀代、13世紀～15世紀代に分けることができる。概ね、市調査区の重複状況と合致する

ものといえる。

以下、分布状況を簡単に触れておきたい。

#### **弥生時代前期**

平成元年度調査区B区からの落込み状遺構の単独検出であるが、当該期と考えられる土器がまとまった量で出土している。

#### **弥生時代後期**

昭和62年度調査区C区、昭和63年度調査区23号溝区、平成元年度調査区D区に分布している。

#### **古墳時代前期～後期**

古墳時代前期～中期の遺跡が、平成元年度調査区A区に、古墳時代中期～後期の遺跡が、平成元年度調査区B区に分布している。古墳時代後期の遺跡が、やや離れた昭和63年度調査区38号水路区に分布している。

#### **7世紀後半～8世紀中頃**

昭和63年度調査区23号水路区、38号水路区、平成元年度調査区A区、D区に分布している。平成元年度調査区A区からは、掘立柱建物跡と考えられる柱穴跡が検出されている。

#### **9世紀前半～10世紀前半**

昭和63年度調査区27号溝区、平成元年度調査区B区、D区に分布している。

#### **12世紀～13世紀代**

平成元年度調査区A区、B区、D区に分布している。

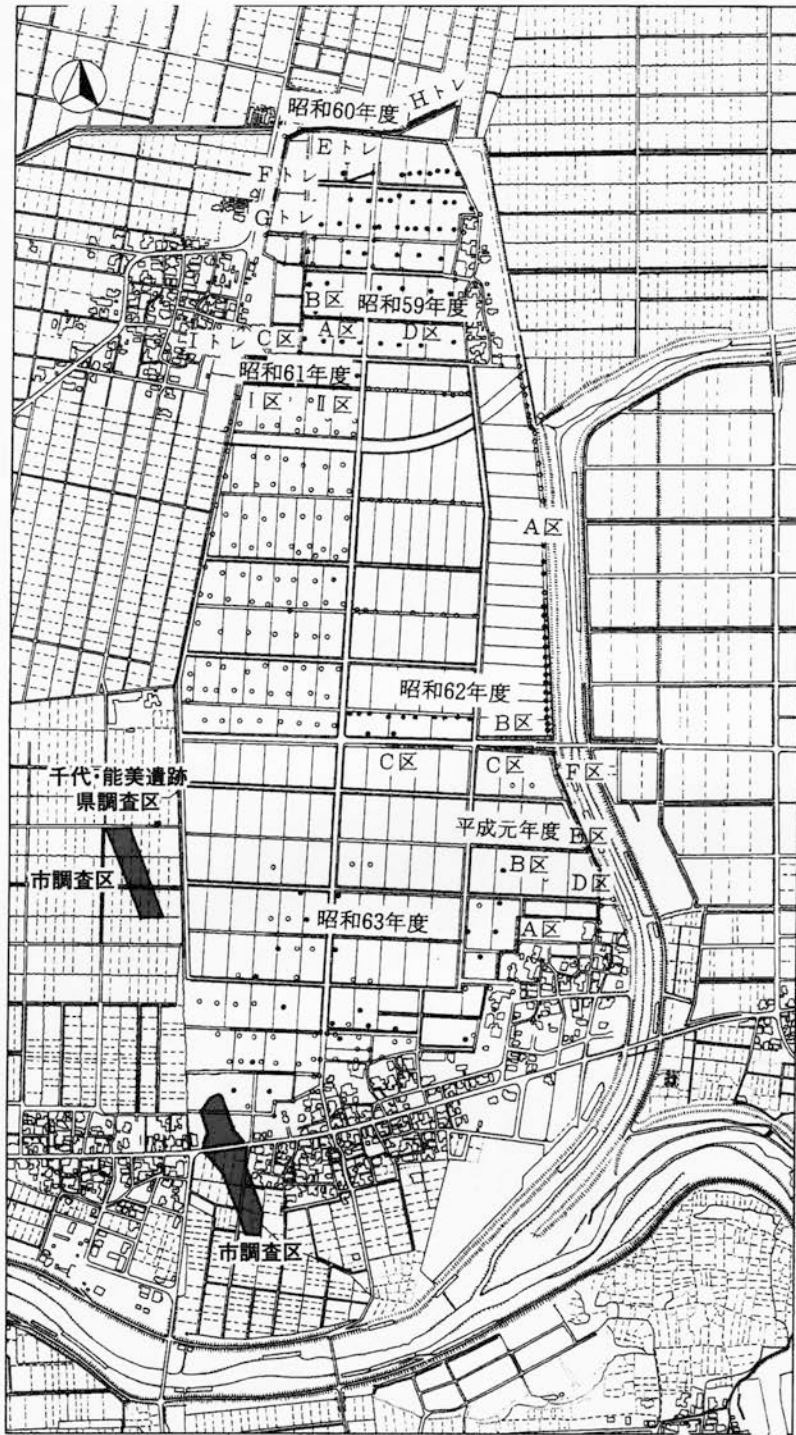
#### **13世紀～15世紀代**

昭和62年度調査区A区に集中して分布している。

以上の分布状況からみれば、9世紀前半～10世紀前半に画期がありそうである。それまで微高地状に広がって分布していた状態から、それ以降は、鍋谷川右岸に近接した範囲に集中する傾向が見出せる。また、12世紀～13世紀代の遺跡は、13世紀～15世紀代遺跡の分布地へ移動した可能性が高い。調査から、少なくとも中世段階までは、鍋谷川がかなり蛇行していたことが判明している。それにもかかわらず、遺跡が川沿いに集中する様相は何を意味するのだろうか。水害が多いこの地域では、全時期を通じて、この地点が集落を形成する上で好条件を備えた場所であったのであろう。もちろんその他の要因も考えられるが、現時点では不明であり、今後の課題とされる。

#### **引用参考文献**

石川県埋蔵文化財センター1992『千代』



第6図 市調査区と県調査区の位置 (S=1/12,500)  
 (「千代」1992年 県埋蔵文化財センターP.9より転載、一部加筆)

## 第 3 章 遺 構

### 第 1 節 遺 構 確 認 面 と 層 序

#### 第 1 項 概 要

今回発掘調査を行った範囲は梯川左岸の微高地上であり、旧地形では三角州の微高地上の南北約 240m、東西約 50m の範囲であり、ほぼ平坦な地形をしている。標高は、遺構確認面で 3m 前後を測る。ただし、後世の耕地整理により地表面は削平されており、遺構の深度は概して浅い。この傾向は、市道より北側の調査区で顕著であり、南側に行くほど残りが良い状況となる。しかし、43グリッド以降になると、再び攪乱により遺構の残存状況は悪くなる。遺構確認面とした黄褐色粘土層は、遺跡範囲北端に近づくほど厚さを減じ、農道以北では、2cm 程度しか残っていない。その層の下位は、分厚い黒色粘土層帯となるため、遺構の確認は不可能となる。以上から、遺跡範囲北端の境は、既に黄褐色埴土層が失われ、表土を剥ぐと、直に黒色土層帯となる部分で線引きされている。黄褐色粘土層は、南に行くほど厚くなる傾向があるため、北端付近は元々堆積も薄かったものと考えられる。遺跡範囲南端は、前述のとおり一定範囲ごとに梯川に向かって階段状に下がる状態で、水田が造成されている。一段目は前述の 43グリッドから始まり、47グリッドの地点で 2 段目が始まり、遺構残存高よりも深く削られていることから、この地点が遺跡範囲南端となっている。本来なら、対岸の佐々木遺跡のように、梯川の氾濫原付近まで遺跡は存在した可能性も考えられる。前述のとおり、現況は水田だが、遺構確認面までは極めて浅く、平均 20cm 程度の深度しかない。耕作土及び床土の直下が遺構確認面である。そのため、遺跡は、多くの攪乱を受けた状態である。耕地整理前の用水路が東西南北に走り、ゴミ捨て穴と考えられる直径 3m を超える大きな穴も処々に掘られている。さらに、表層が浅いがために、耕耘による攪乱も直に受ける状況にあった。よって、この調査範囲内では包含層は存在せず、表土内には遺構上層内の遺物が多分に含まれる状況にある。さらに、削平された深度の浅い遺構では、各時代の遺物が混入する可能性が大いにあり、時期判定の困難さを増している。本報告では、出土遺物の時代を第一判定基準としているが、最新の遺物の時期と遺構の切り合い関係が合致しない場合は、切り合い関係を重視して矛盾のない遺物の時期を比定している。

#### 第 2 項 旧河道について

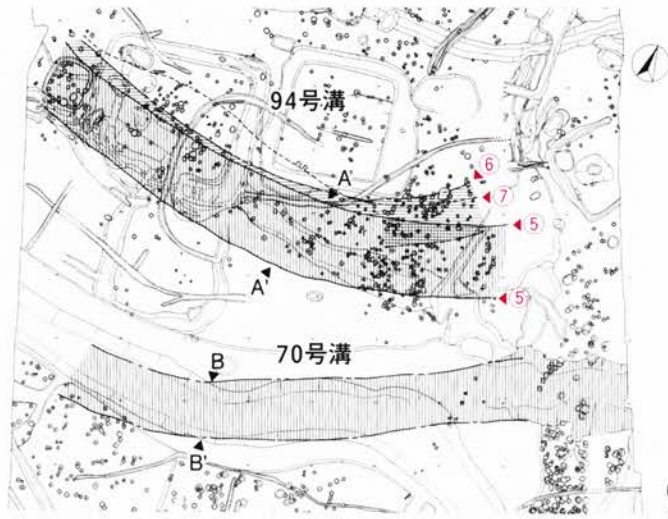
千代オオキダ遺跡の調査において、旧河道の痕跡を 3ヶ所で確認している。地形から東から西への流れが判断される。何れも現梯川の流れに並行する流れといえる。北から「旧河道Ⅰ」「旧河道Ⅱ」「旧河道Ⅲ」として報告する。

##### 旧河道Ⅰ

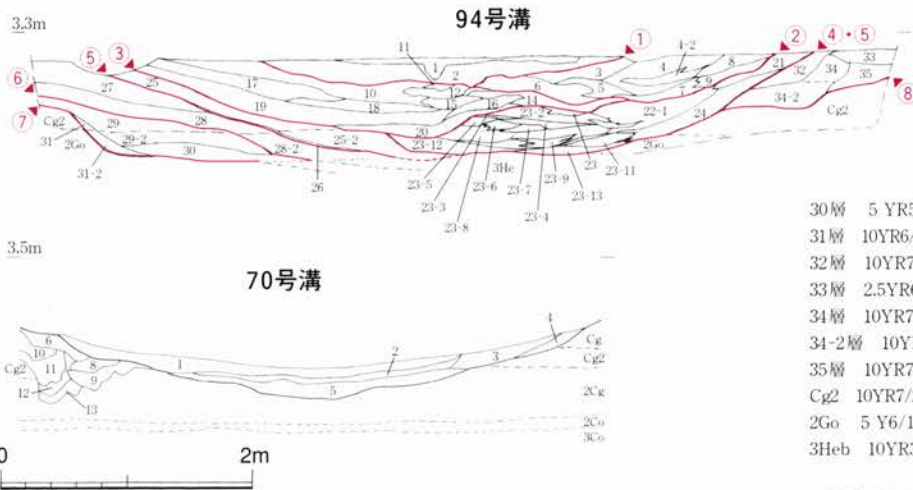
県道北側調査区で確認した 28号溝のことである。遺物が出土していることから詳細は第 3 節で報告する。幅 5m 程度で、3回の流路変更を確認している。上位のⅠ-1 は出土遺物から弥生時代中期頃が考えられる。下位のⅠ-2・Ⅰ-3 はそれ以前の流路となる。その流路下底直下に黒色地山層を確認している。

##### 旧河道Ⅱ

県道南側調査区で確認した 94号溝のことである。八回以上の流路変更が確認された。幅は 4m 程度である。最上層のⅡ-1 は法仏～月影Ⅰ期の土器がまとまって出土していることから第 4 節で報告する。上限は弥生時代後期であり、それ以下の河道堆積土からは、遺物が全く出土していない。よって、その時期は、弥生時代後期より相対的に古いとしかいいようがない。Ⅱ-2 とⅡ-4・5 の時期には、粗砂の堆積が目立ち、ある程度の水流があったと考えられる。Ⅱ-6 の時期にピート層の堆積が見ら



丸数字は旧河道床面ライン



- 30層 5 YR5/1 灰色 微砂質埴土
- 31層 10YR6/1 褐灰色 微砂質埴土(斑鉄混じる。)
- 32層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 33層 2.5YR6/2 灰黄色 埴壤土(斑鉄富む。)
- 34層 10YR7/2 鈍い黄褐色 軽埴土(斑鉄含む。)
- 34-2層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(斑鉄含む。)
- 35層 10YR7/1 灰白色 微砂質埴土(斑鉄含む。)
- Cg2 10YR7/2 鈍い黄褐色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 2Go 5 Y6/1 灰色 微砂質埴土
- 3Heb 10YR3/2 黒褐色 泥炭

旧河道

94号溝下層

- 1層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 2層 10YR6/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。)
- 3層 10YR7/1 灰白色 粗砂質埴土(炭化物混じる。)
- 4層 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂(斑鉄含む。炭化物混じる。)
- 4-2層は中砂。
- 5層 10YR6/1 褐灰色 粗砂(斑鉄富む。)
- 6層 10YR7/1 灰白色 中砂(斑鉄含む。)
- 7層 10YR7/1 灰白色 粗砂
- 8層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 9層 10YR8/1 灰白色 軽埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。)
- 10層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 11層 10YR7/1 灰白色 砂混軽埴土(斑鉄混じる。)
- 12層 10YR7/1 灰白色 中砂質埴土(斑鉄混じる。)
- 13層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 14層 10YR6/2 暗灰黄色 中砂(斑鉄含む。)
- 15層 10YR7/2 鈍い黄褐色 中砂質埴土(斑鉄混じる。)
- 16層 10YR6/1 褐灰色 粗砂(斑鉄混じる。)
- 17層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄含む。)
- 18層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(斑鉄含む。)
- 19層 10YR7/2 鈍い黄褐色 軽埴土(斑鉄含む。)
- 20層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 21層 10YR6/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄含む。)
- 22層 10YR6/1 褐灰色 粗砂(斑鉄富む。)

- 22-2層 10YR5/1 褐灰色 粗砂(斑鉄富む。)
- 23層 10YR7/1 灰白色 中砂(斑鉄含む。)
- 23-2層 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂(斑鉄混じる。)
- 23-3層 10YR6/1 褐灰色 中砂(斑鉄混じる。)
- 23-4層 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂(斑鉄含む。)
- 23-5層 10YR6/1 褐灰色 粗砂(斑鉄含む。)
- 23-6層 10YR6/1 褐灰色 粗砂(斑鉄頗る富む。)
- 23-7層 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂(斑鉄頗る富む。)
- 23-8層 10YR5/1 褐灰色 粗砂(斑鉄含む。)
- 23-9層 10YR6/1 褐灰色 粗砂(斑鉄頗る富む。炭化物混じる。)
- 23-10層 10YR6/2 灰黄褐色 粗砂(斑鉄混じる。)
- 23-11層 10YR6/1 褐灰色 粗砂(斑鉄含む。中砂葉状に挟む。)
- 23-12層 2.5YR6/1 黄灰色 粗砂(炭化物混じる。)
- 23-13層 2.5YR6/1 褐灰色 中砂(炭化物混じる。)
- 24層 10YR6/2 灰黄褐色 中砂質埴土(斑鉄混じる。)
- 25層 10YR6/2 灰黄褐色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 25-2層 5 Y6/1 灰色 軽埴土(グライ化。斑鉄混じる。)
- 26層 10YR6/1 褐灰色 軽埴土
- 27層 10YR7/2 鈍い黄褐色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 28層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 28-2層 5 Y5/1 灰色 軽埴土(グライ化。斑鉄混じる。)
- 29層 10YR6/2 灰黄褐色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 29-2層 7.5Y5/1 灰色 軽埴土(グライ化。斑鉄混じる。)

38号溝下層(70号溝)

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 粗砂混埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。)
- 2層 10YR5/3 鈍い黄褐色 粗砂質埴土(斑鉄含む。炭化物混じる。)
- 3層 10YR5/1 褐灰色 粗砂混埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。灰黄褐色砂壤土ブロック頗る富む。)
- 4層 10YR6/2 灰黄褐色 砂壤土(斑鉄混じる。)
- 5層 10YR3/1 黒褐色 軽埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。)
- 6層 10YR6/2 灰黄褐色 軽埴土(斑鉄含む。炭化物混じる。)
- 7層 10YR6/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。)
- 8層 10YR5/1 褐灰色 粗砂混埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。)
- 9層 7.5YR4/4 褐色 粗砂(斑鉄富む。褐灰軽埴土ブロック混じる。)
- 10層 10YR7/2 鈍い黄褐色 軽埴土(斑鉄富む。炭化物混じる。)
- 11層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。)
- 12層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄混じる。炭化物混じる。)
- 13層 7.5YR4/4 褐色 粗砂(斑鉄富む。)
- Cg 10YR6/2 灰黄褐色 砂壤土(斑鉄混じる。)
- Cg2 10YR7/2 鈍い黄褐色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 2Cg 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 2Go 2.5Y5/1 黄灰色 軽埴土(斑鉄混じる。)
- 3Go 2.5Y4/1 黄灰色 軽埴土(斑鉄混じる。)

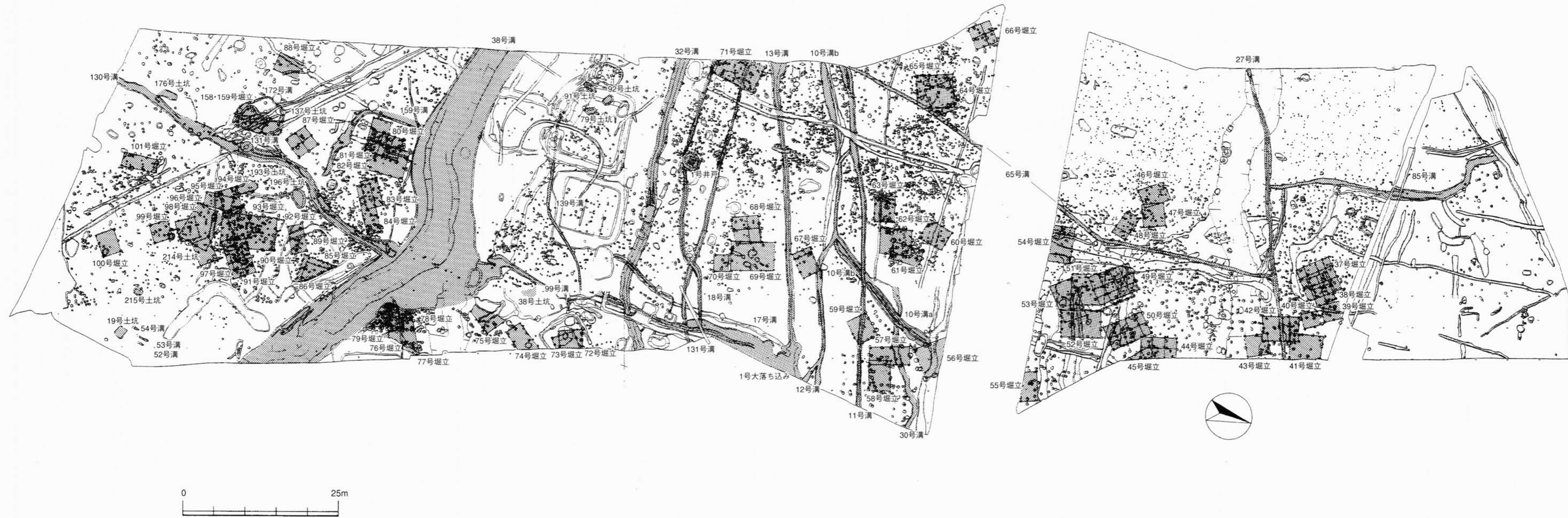
第7図 旧河道(94号溝・70号溝)平面図・断面図(S=1/60)



第8図 縄文時代後期中葉から古墳時代前期の遺構分布図 (S=1/500)

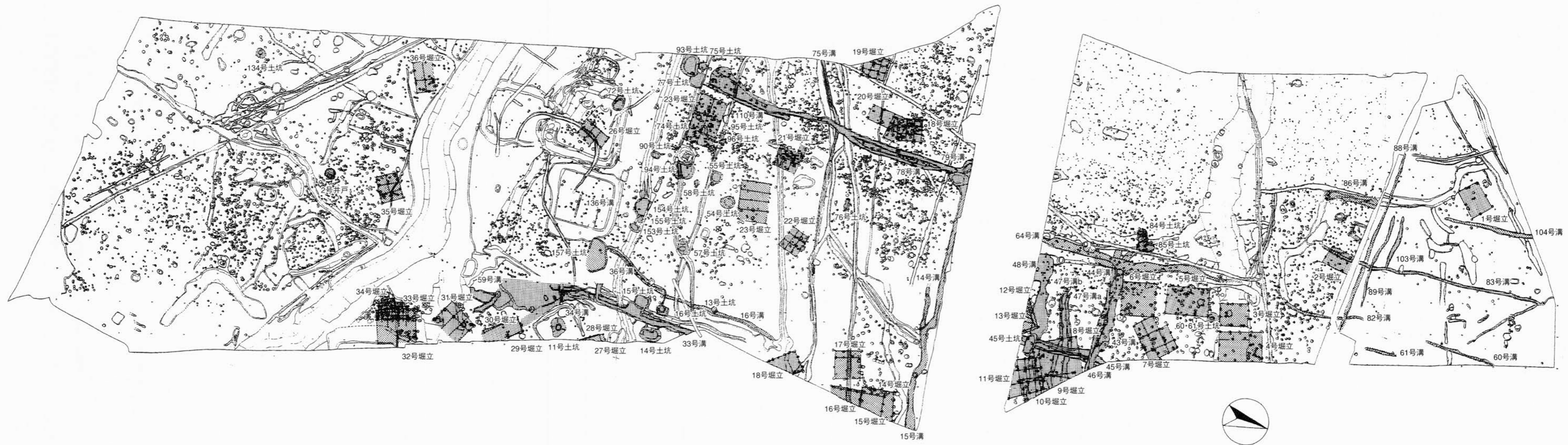






第9図 古墳時代後期後半から古代遺構分布図 (S=1/500)





第10図 中世遺構分布図 (S=1/500)



れることから、周辺が沼地の時期があったのかもしれない。さて、そのピート層の時期については、隣接で行われた別件の調査では、ピート層から弥生時代中期後葉の土器が出土している。しかし、当調査区では、地山Cg層を掘り込む縄文時代後期後葉の土坑が検出されたことから、ピート層はそれ以前の時期の可能性が高い。黒色地山層の堆積は、県道南側調査区ではこの溝が北限であり、これより北では見られない。

### 旧河道Ⅲ

県道南側調査区で確認している。幅10mを測る。遺物の見られた上位層部分Ⅲ-1・2は第4節で38号溝として詳細を報告する。時期は、Ⅲ-1は弥生時代後期～古墳時代前半、Ⅲ-2は古墳時代後期～古代末までが遺物から判断される。下位のⅢ-3（70号溝）からは、遺物は全く出土していないが、前述の縄文時代後期後葉の土坑は、北側肩部より検出されており、対応関係にあるのかもしれない。Ⅲ-3が東西方向の流れであるのに対し、Ⅲ-1・2は、調査区東端で大きく南側に折れ流路を大きく変えている。Ⅲ-1・2と3の間には、時間的間隙がある可能性がある。この地点では、高い位置で黒色地山層が確認できる。

### まとめ

旧河道は、Ⅰが弥生時代中期、Ⅱが弥生時代終末までには埋ってしまっている。弥生時代後期前半から見られるⅢ-2のみが、古代末まで継続するⅢ-1へと続いている。Ⅱ-1とⅢ-2段階では弥生時代終末期までは、両者は同時並存していたようである。しかし、この地が墓域となる古墳時代初頭期には、Ⅲ-2のみになっている。周辺の遺跡の様相をみると、北方に約250m離れた千代能美遺跡では、古墳時代初頭の旧河道が検出されており、梯川対岸の佐々木遺跡でも、弥生時代後期後半の旧河道が検出されている。何れも東西方向の流れであり、現梯川に平行である点が特徴である。また、それらの溝は弥生時代後期～古墳時代前半段階で埋っている。千代オオキダ遺跡旧河道Ⅲ-2も古墳時代中期の遺物は希薄である。少なくとも同じバイパス道路に伴う調査である、3遺跡約1.25kmの範囲では確認されていない。遺跡と遺跡の間を流れていたことも考えられるが、古墳時代前期以降に大きく流路を変えた可能性が考えられる。

## 第2節 遺跡概観

### 第1項 はじめに

遺構は調査区全域に見られ、そのあり方は多様である。時代は、縄文後期中葉から、室町時代後半と長期に渡るものである。遺構の時期は、概ね縄文時代後期中葉から弥生時代中期、弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期後半から古代、中世前半、中世後半に分けて捉えることができる。特に、弥生時代後期から古墳時代前期と、古代前半において、注目される成果が得られている。以下、時期ごとに概観する。

### 第2項 縄文時代後期中葉から弥生時代中期

当該期の遺構・遺物は、散発的であり、各時期単独での出土である。当遺跡最古の縄文時代後期中葉の深鉢は、H-28グリッドのピットから出土したものである。その後も、縄文時代後期後葉の深鉢、柴山出村式の深鉢が単独で出土するのみである。弥生時代中期の遺物は旧河道Ⅰから出土した石鏃である。当調査区西側隣接地の調査において、弥生時代中期後葉の土器が出土しており、対応する可能性はある。しかし、前述の旧河道調査における状況からも、調査区内に集落があったとは考えられない。ただし、遺構自体は比較的旧河道に近い位置から検出されていることが特徴として挙げられよう。遺跡の東側近郊に所在する横地遺跡が縄文時代の遺跡であり、その関係が注目される。

### 第3項 弥生時代後期から古墳時代前期

38号溝における、弥生時代後期から古墳時代前期の土器の集中廃棄や、古墳時代前期前半の墓域が検出されたことが特筆される。38号溝での廃棄行為は、弥生時代後期前半の猫橋期（漆町編年1群前）から見られ、続く法仏期（漆町編年1・2群）にピークを迎え、月影期（漆町編年3～4群）に減少する。当該期の住居遺構は調査区内には検出されず、水路状の溝や、散発的な土坑、溝状遺構が見られるのみである。一方で、それらの遺構は、全て38号溝以南で検出されている。このことから、38号溝が集落域を限る溝であった可能性がある。その後、白江期（漆町編年5～6群）に入ると、38号溝への大量廃棄は見られなくなり、溝の両側で墓が造成されるようになる。墓には、南北軸のグループと、北西-南東軸のグループが存在する。方墳を基本形態とし、前者は周溝が全周するタイプであり、中には造り出し部をもつものも存在する。後者のタイプは、周溝が全周しないのが特徴である。残念ながら、古代・中世遺構の重複や、攪乱によって主体部が全て失われており、詳細は不明である。墓の被葬者層は、当遺跡の様相からは不明だが、北方に約250m離れた千代能美遺跡では、同時期にあたる古墳時代前期（4世紀前半頃）の首長居館と考えられる遺構群が出土しており注目される。今後、より詳細な検討が必要だが、被葬者候補の一つとして挙げられよう。

### 第4項 古墳時代後期後半から古代

古墳時代後期後半は、当該期の遺物が、大溝である38号溝などから単独で出土する傾向にあり、明確な遺構は見出せない。出土量も極少ないものである。ただし、TK-47～MT-15形式の陶器産須恵器坏H蓋が出土している点は注意が必要である。当該期の遺構・遺物が、市調査区北端東側に位置する県昭和63年度調査区第38地点で検出されており、この地点に集落があったのかもしれない。

古代は、遺構が最も多く、分布範囲も広い。当報告では、基本的には田嶋明人氏の古代土器編年に基づくが、10世紀以降は土師器椀・皿類が時期判定の要となるため、出越茂和氏の古代後半土師器食器編年を援用している。両者の対応関係については、観察表凡例を参照して頂きたい。建物の時期でいえば、田嶋編年Ⅱ期～中世Ⅰ-Ⅱ2期まで、出越氏の古代土師器編年ではⅣ-3期まで存在する。Ⅴ-2期～Ⅵ期前半代にやや遺構の薄い時期があり、そこで古代前半と後半に分かれるようで、遺構のあり方にも変化が見られる。また古代末期には、遺構の分布は38号溝より北に移っている。古代前期を通じて、32号溝～38号溝間における7号～99号溝以西のエリアでは、建物跡を見出すことができない。また、地形的には調査区端以南は梯川本流へ向かって下がっていくため、この地点が集落の南限に近いと判断する。また遺構の検出状況を合わせて考えると、西側に広がっていることは考え難く、東側へ広がるものと推察される。

遺構は、掘立柱建物跡・井戸・土坑・溝などである。掘立柱建物跡は全体で65棟を数えたが、全体のピット数からすれば提示した数よりさらに増えることが考えられる。建物は30㎡以下の中・小型建物が主体であり、廂がつく建物も少ない。倉庫的な束柱を持つ「田」の字プランを持つ建物は3棟確認されている。古代末期には総柱建物が主体となっていく。井戸は、2基確認されており、その内一基が南加賀地域では検出例が少ない横板組の井戸である点が注目される。律令的要素が強い遺構である。溝は大溝である38号溝とそれに付随した130号溝を除き、人工的掘られた直線的な溝が多く、何らかの区画を表していることも考えられる。ただし、建物群を区画するものではなく、もっと大きな敷地を区画しているものと考えられる。また、38号溝において、7世紀末頃の土馬を使った祭祀場が検出されたことも注目に値する。

古代前半期（田嶋編年Ⅱ期～Ⅴ期）の建物群は、出現期の溝際に立てられた建物以外は広範囲に散在する傾向にある。時期ごとの変遷は後述するが、近隣に所在する荒木田遺跡のような集住傾向はない。それに対応するかのようには、当該期の土坑は少なく、土器の廃棄は、130号溝や、その西隣に掘られた大型土坑（137号・158号・159号土坑）に集中する。当該期遺構分布は、市調査区より北東の微高

地上に多く分布しており、その中に中核村落が存在した可能性が高い。特に9世紀代には、鍋谷川に近い東寄りの地域に集中するようであり、村落の中心が移ったものと理解される。

古代後半期（田嶋編年Ⅵ期～中世Ⅰ－Ⅱ2期）は、調査区内に散在する傾向は若干残るものの、38号溝以南での建物数が増加する傾向にある。また、建物群に伴う井戸も出現する。土器廃棄場は、引き続き130号溝が担っている。調査区の西側大半の区域には遺構が見られなくなっており、耕地化等の要因が想定でき、集落のあり方に大きな変化が見られる。さらに、前代と違って市調査区から北東の県調査区では、当該期の遺構は非常に希薄になっており、集落の中心が市調査区を含む西南区域に移ったものと考えられる。古代最末期には、再び集落のあり方に変容があったようで、38号溝以南区域には130号溝以外の遺構が見られなくなり、北東区域に中心が移る。中世期には再び調査区内に遺構が散在するようになる。市調査区北東の県調査区でも、12世紀代に入ると平成元年度調査区A区付近で集落が出現している。

## 第5項 中世

当期の遺構は掘立柱建物と井戸が主体をなす。遺構の分布は広範囲に見られるが、38号溝以北～27Grの区域に集中する傾向がある。時期は藤田編年でⅡ－Ⅰ1期（12世紀後半頃）～16世紀後半頃まで認められる。古代最末期（12世紀前半頃）との関係については、建物が集中傾向から散在傾向に転じていることなど違いは存在するが、同地点に建物跡も検出されていることから、連続性は認められよう。中世の掘立柱建物は、柱穴配置も規則的ではなく、柱筋も歪むものも多いため、建物復元は困難さが伴った。よって、確認されたのは、36棟のみであり全体のピット数からすれば提示した数よりさらに増えることが考えられる。特に、中世後期建物の提示は不確定要素が残る。また、図上復元を行ったものもあり、その断面図は柱穴部分のみを復元してある。中世期を通じて県道北調査区の西半分には建物跡は検出されていない。井戸は、9基以上あり、その殆どが前述の遺構集中地区から検出されている。各時期の建物に付随すると考えられる。殆どが円形掘り方を持つものである。その他は、縦板組の井戸側を持つものが1基と、方形掘り方を持つものが1基検出されている。他に、土坑には、竪穴状遺構と考えられるものがある。溝は途中で途切れるものも多く、その性格は判断し難い。ただし、中世期を通して、ほぼ真北に主軸が設定されているのが特徴であり、東西溝との直交部分も見られることから、何らかの区画を表していると考えられる。また、宅地としては広すぎる区画であり、もっと大きな敷地を区画しているものと考えられる。調査区北端で検出された溝の一群は、より小区画を示しており、耕作地の区画等ではないかと考えられる。一方で、中世段階に入る頃には、38号溝や130号溝は埋った状態か、殆ど埋ってしまった状態と考えられる。地盤が悪いためか、湿地帯のような状況であったのか無遺構地帯となっている。さらに、38号溝以南は、遺構が希薄な状態にあり、南限は134号土坑（井戸）である。これ以南は、地形的に梯川本流へ向かって下がっていくため、この地点が集落の南限と判断する。遺物の出土傾向は散漫であり、1箇所集中して検出されるということがなかった。また、藤田編年でⅣ期に該当する遺構・遺物はあるが、建物跡は検出されていない。検出できていないだけの可能性もあるが、概ねこの時点で、中世前期と後期が分かれるようである。よって、報告を中世前半期と後半期で分けて行うこととした。

中世前半期（藤田編年Ⅱ－Ⅰ1期～Ⅲ－Ⅱ2期）の建物群は、広く散在する傾向にある。総柱建物が主体であり、当遺跡では比較的大型の部類に入る建物跡も存在する。井戸は、藤田編年Ⅲ－Ⅰ期頃から増加しており、建物数の増加と呼応している。市調査区から北東区域では、県平成元年度調査区A区付近で集落が出現しており、13世紀代を通して存続するようである。

中世後半期（藤田編年Ⅳ－Ⅰ期～16世紀後半以降）は、前述のとおり建物跡が見出せるのが、藤田編年Ⅴ－Ⅰ期頃からである。調査区東側に偏在する傾向にあり、現集落域側に集住していった可能性が考えられる。市調査区から北東の県調査区域では、鍋谷川沿いの昭和62年度調査区A区～B区において、13世紀～15世紀代の集落が検出されている。14世紀を境に、前述の地点の集落が移動したこと

も考えられる。16世紀には続かないようであり、市調査区域の調査成果も合わせて考えると、15世紀後半～末の間に現集落域に移動していったことが予想され、16世紀代には現集落下へ移ったことが考えられる。中世末期の16世紀後半以降に位置付けられる遺構は非常に少なく、建物跡の時期判定にも疑問が残るため、詳細は不明である。

### 第3節 縄文時代後期中葉から弥生時代中期の遺構

#### 第1項 土坑

##### 250号土坑

I-35グリッドで、38号溝右岸肩部より検出された楕円形の土坑である。長径1.76m×短径1.5m深さ約0.15mを測る。覆土は、鈍い黄橙色軽埴土の単層である。38号溝下位に見られる旧河道に対応する可能性もあるが、旧河道からの遺物の出土はなく詳細は不明である。遺物は縄文時代後期後葉の深鉢の上半1個体分がまとまって出土している。

#### 第2項 溝

##### 156号溝

D・E-40・41グリッドに位置する東西溝で、Dグリッド以東の伸びは、攪乱により不明である。最大幅約2m、深さ15cm程度を測る。上層の灰黄褐色壤土と、下層の明褐灰色埴壤土が主体として埋まっている。特に、下層には濁った状態が観察される。遺物は溝西端の上層覆土上面部に集中して出土している。出土状態から、遺構上面が削られており、もう少し深さがあったと考えられる。ある程度埋った段階で廃棄されたのだろう。弥生時代前期にあたる柴山出村式の深鉢一個体分がまとまって出土している。

##### 28号溝（旧河道I）

C～L-10～12グリッドで検出された東西方向の旧河道である。調査区東端及び西端外に延びており、高低差より東から西への流れが考えられる。最大幅約5m、確認長45mを測る。覆土は灰黄褐色～褐色の粘性の強い埴土が堆積している。5層部分では、黒色系の埴壤土の堆積もある。目立った砂層の堆積も観察されないことから、滞留傾向にあったことが推察される。断面観察から1・2層と3層および4～6層の、計3回流路変更が観察される。遺物の出土量は総じて少なく、時期の判別不可能な土器片数点と打製石鏃2点が出土している。両者とも、最終河床である三次床以上の1層～2層の出土である。時期は、石鏃の形態から、弥生時代中期が考えられる。下位の一次床・二次床部分の堆積土中からは遺物の出土はなく、弥生時代中期以前であること以外は分からない。また、流路内の肩部に近い部分（特にI-11グリッドに集中）で、いくつか土坑が検出されたが、遺物の出土はなくその性格は不明である。

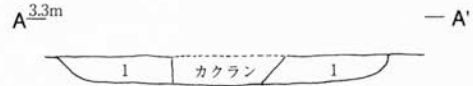
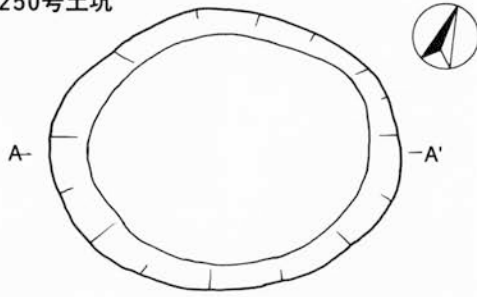
#### 県調査との対応関係

弥生時代前期の遺構・遺物は、千代オオキダ遺跡の分布範囲の中では広範には広がっていない。平成元年度調査区B区SX-02の単独出土であり、市調査区の出方と類似している。

弥生時代中期の遺構・遺物は県調査区の中でも検出されていない。概要で指摘したように、当調査区西側に分布がある可能性がある。



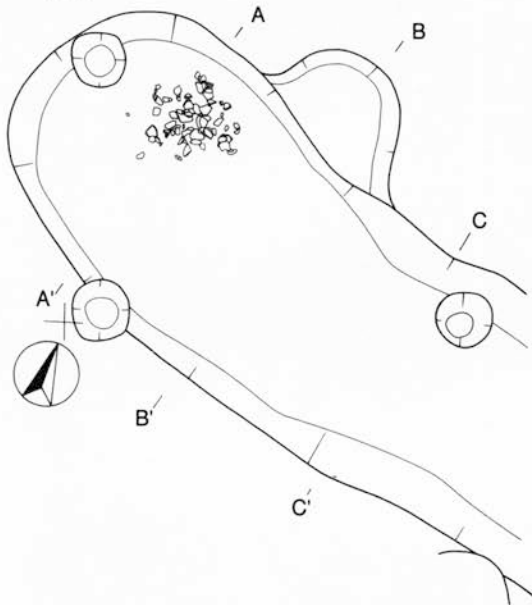
250号土坑



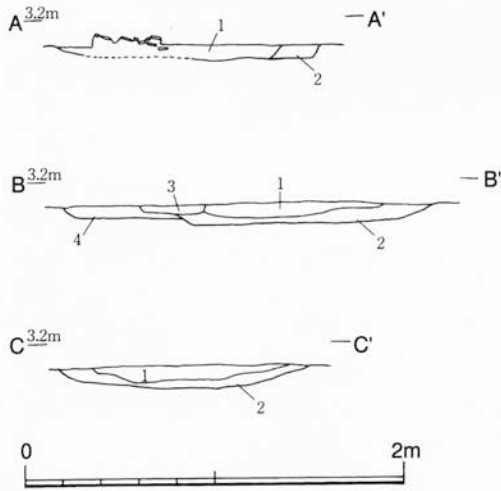
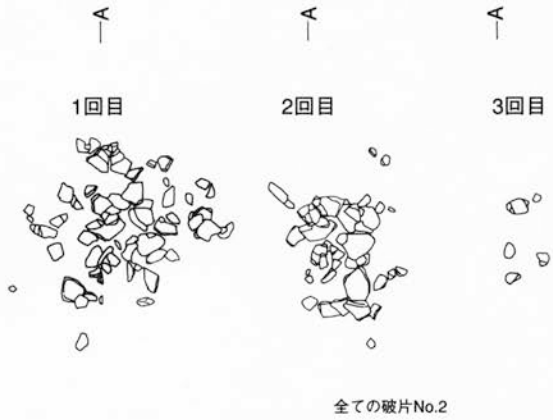
250号土坑土層注

1層 10YR6/4 鈍い黄橙色 軽埴土(10YR6/1褐色 軽埴土極少量混。)

156号溝



遺物出土状況図



156号溝土層注

1層 10YR5/2 灰黄褐色 壤土(10YR6/2~7/2灰黄褐色~鈍い黄橙色 軽埴土ブロック多く含む。炭化物小ブロック少量含む。マンガ斑多い。)  
 2層 7.5YR7/1 明褐色 埴壤土(7.5YR7/1 明褐色 軽埴土ブロック少量含む。)  
 3層 10YR4/1 褐色 壤土(10YR7/2鈍い黄橙色 軽埴土ブロック少量含む。)  
 4層 10YR7/3 鈍い黄橙色 軽埴土(10YR5/2灰黄褐色 軽埴土ブロック少量含む。マンガ斑多い。)

第11図 250号土坑・156号溝平面図・断面図 (S=1/40・1/20)

## 第4節 弥生時代後期から古墳時代前期の遺構

### 第1項 古墳

#### 1. 古墳の立地

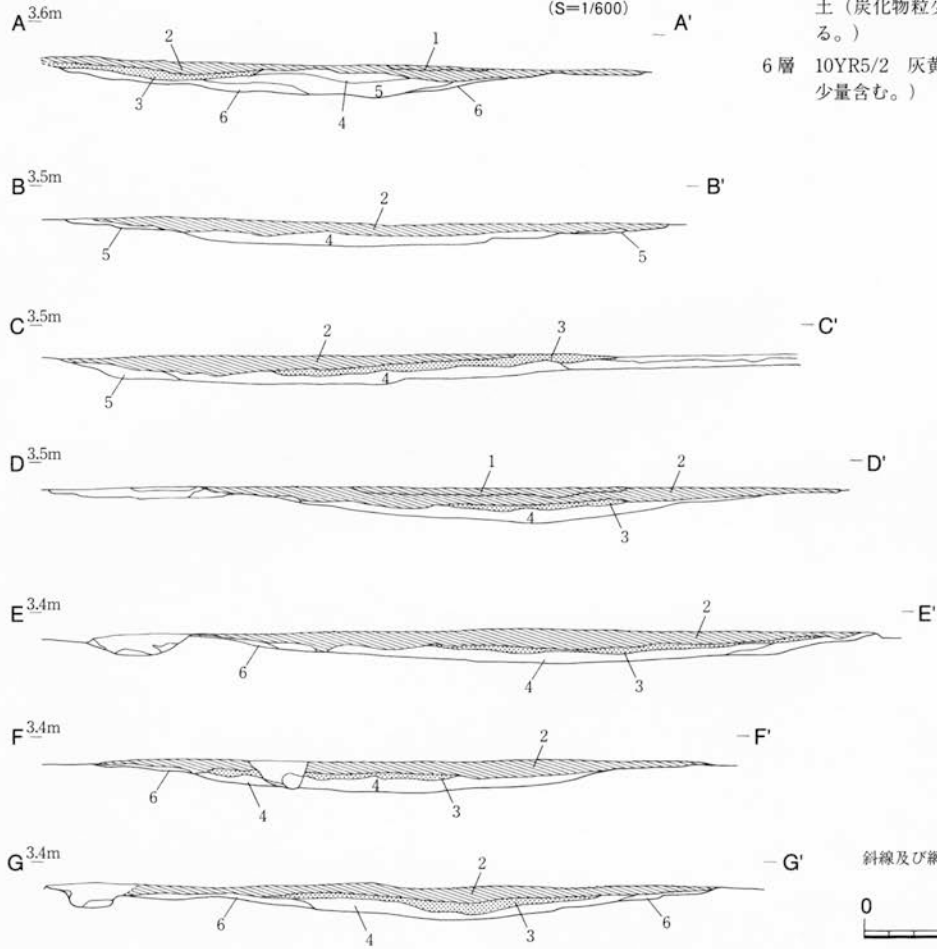
30~44グリッドにかけて、38号溝を中心として、北側5基、南側に1基確認している。南北軸のグループと、北西-南東軸のグループに大別できる。前者は、周溝が全周するのに対し、後者は、周溝

28号土坑



28号溝土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土（炭化物粒極少量含む。）
- 2層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土（炭化物粒少量含む。）
- 3層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土（炭化物粒少量含む。地山粘土少量混。）
- 4層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土（炭化物粒少量含む。）
- 5層 10YR4/2~3/2 灰黄褐色~黒褐色 埴壤土（炭化物粒少量含む。4層土やや流入する。）
- 6層 10YR5/2 灰黄褐色 重埴土（炭化物粒極少量含む。）



第12図 28号溝平面図・断面図 (S=1/60)

がコの字ないしL字形となり途切れる部分があるという特徴が指摘できる。全てにおいて、本来の墳丘は削平されており、古代・中世遺構の重複もあり、主体部は検出できなかった。

## 2. 古墳各説

### 1号墳

#### (1) 遺構

方墳である。墳丘規模は、周溝内の立ち上がりからの計測値で、長軸約8.4m×短軸約8.1mを測る。主軸はほぼ南北軸で、周溝は3号墳により北側部分が不明だが、全周すると考えられ、北西部分がやや狭い。形状は逆台形に近い形状といえるが、aライン及びdライン付近では、なだらかな湾曲状の断面である。周溝幅は、上端1.4m～1.6m、下端0.5m～0.9mを測る。前述の狭い部分では、上端0.8m～0.9m、下端0.5m前後を測る。深さは、0.2m～0.35mを測る。覆土は、地山土に近い土質のもので、地山崩壊土が主体と考えられる。

#### (2) 遺物出土状況

周溝内からは、遺物は出土していない。切り合いのみにより、3号墳より前出であるといえる。2号墳との前後関係は分からない。

### 2号墳

#### (1) 遺構

方墳である。墳丘規模は、周溝内の立ち上がりからの計測値で、長軸約8.6m×短軸約8.3mを測る。主軸はほぼ南北軸で、周溝は全周しており、南西部分及び東辺が広い。形状は逆台形である。周溝幅は、上端1.0m～1.3m、下端0.7m～0.9mを測る。南西部分は、上端2.2m、下端1.8mを測り、東辺部分では、上端2.7m、下端2.4mを測る。深さは、0.2m～0.35mを測る。覆土は、灰黄褐色の堆積土で埋っている。切り合いから、3号墳よりは前出である。

#### (2) 遺物出土状況

周溝内から、94点の破片が出土している。そのうち壺形土器2点、小型壺1点、甕形土器2点、器台型土器1点が復元された。全て床面から10cm程度浮いた状態で出土しており、墳丘上からの転倒と想定される。特に壺1と器台は近接した位置に破片となって、まとまって出土している。小型壺は南辺中央部より出土しており、口縁端部と底部が欠けている。時期は、漆町編年5～6群と考えられる。法仏～月影I期(漆町編年1～3群)に関しては、当該期の94号溝・38号溝が近接した位置にあることから混入と判断する。

### 3号墳

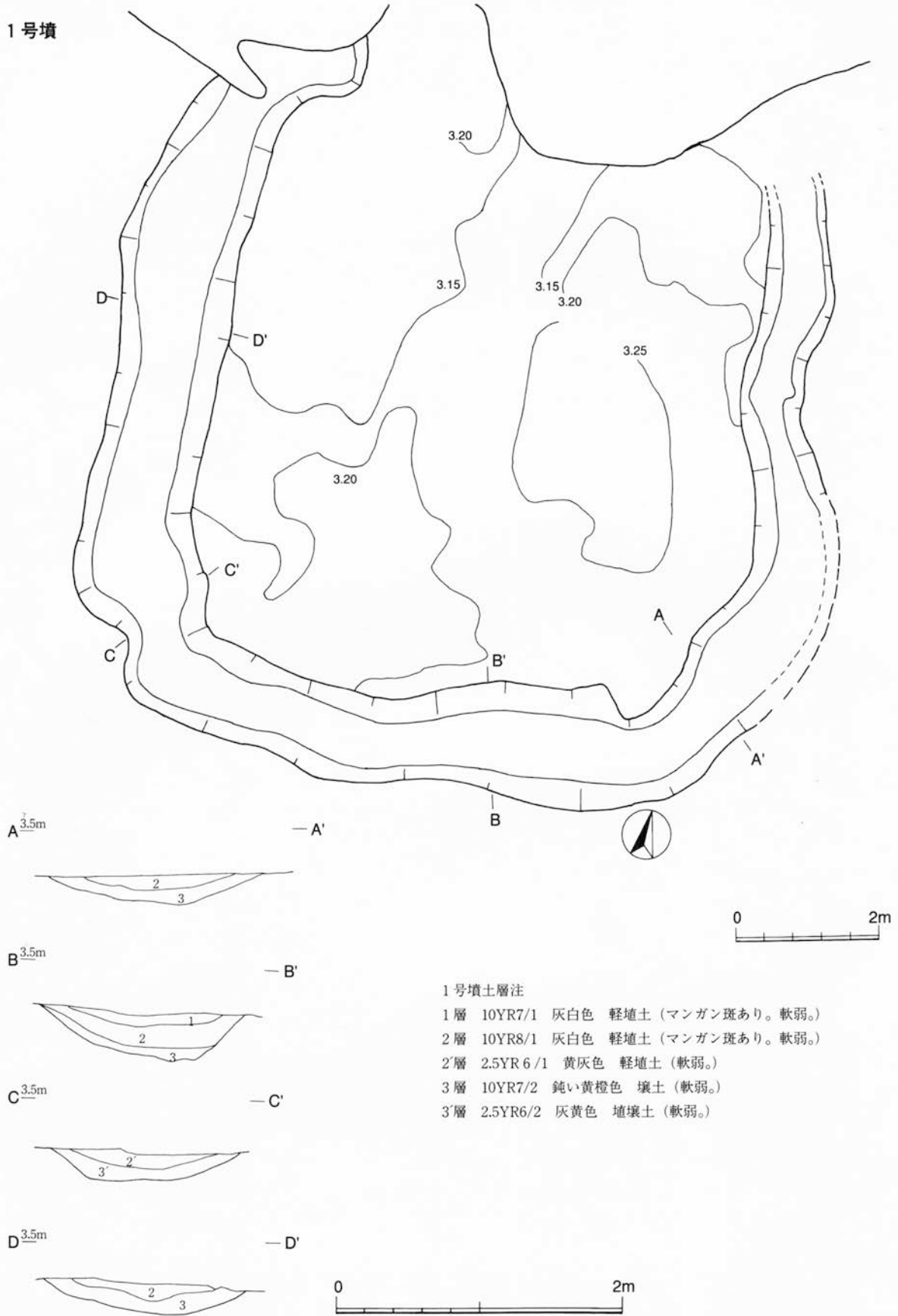
#### (1) 遺構

南側中央部に小規模な造り出し部をもつ前方後方墳である。墳丘規模は、周溝内の立ち上がりからの計測値で、全長12.9m、造り出し部長4.0m、方墳長8.9m、方墳幅10.2m、造り出し部前端幅2.1m、くびれ部幅1.8mを測る。主軸はほぼ南北軸で、周溝は一樣ではなく、南辺の造り出し部は一段落ち込んでいる。また、周溝は全周せずに、造り出し部で途切れる。周溝幅は西辺が広く、南辺部は造り出し部にあわせてさらに広がっている。形状は、基本的には逆台形状を呈す。但し、造り出し部東側は、なだらかな湾曲状の断面である。周溝幅は、北辺部が上端1.4m、下端0.8m～1.0m、東辺部上端1.5～2.0m、下端0.9m～1.1mを測り、西辺部分上端2.5m、下端1.4mを測る。深さは、0.4m～0.5mを測る。造り出し部西側は、上端3.6m・落込み部上端2.5m、下端1.8m、深さ0.7m、造り出し部東側は、上端3.5m、下端2.4m、深さ0.5mを測る。覆土は、大部分は1・2層の褐灰色の堆積土で埋っている。6・7層が地山ないし盛土崩壊土、3・8層は地山の変質部分と考えられる。

#### (2) 遺物出土状況

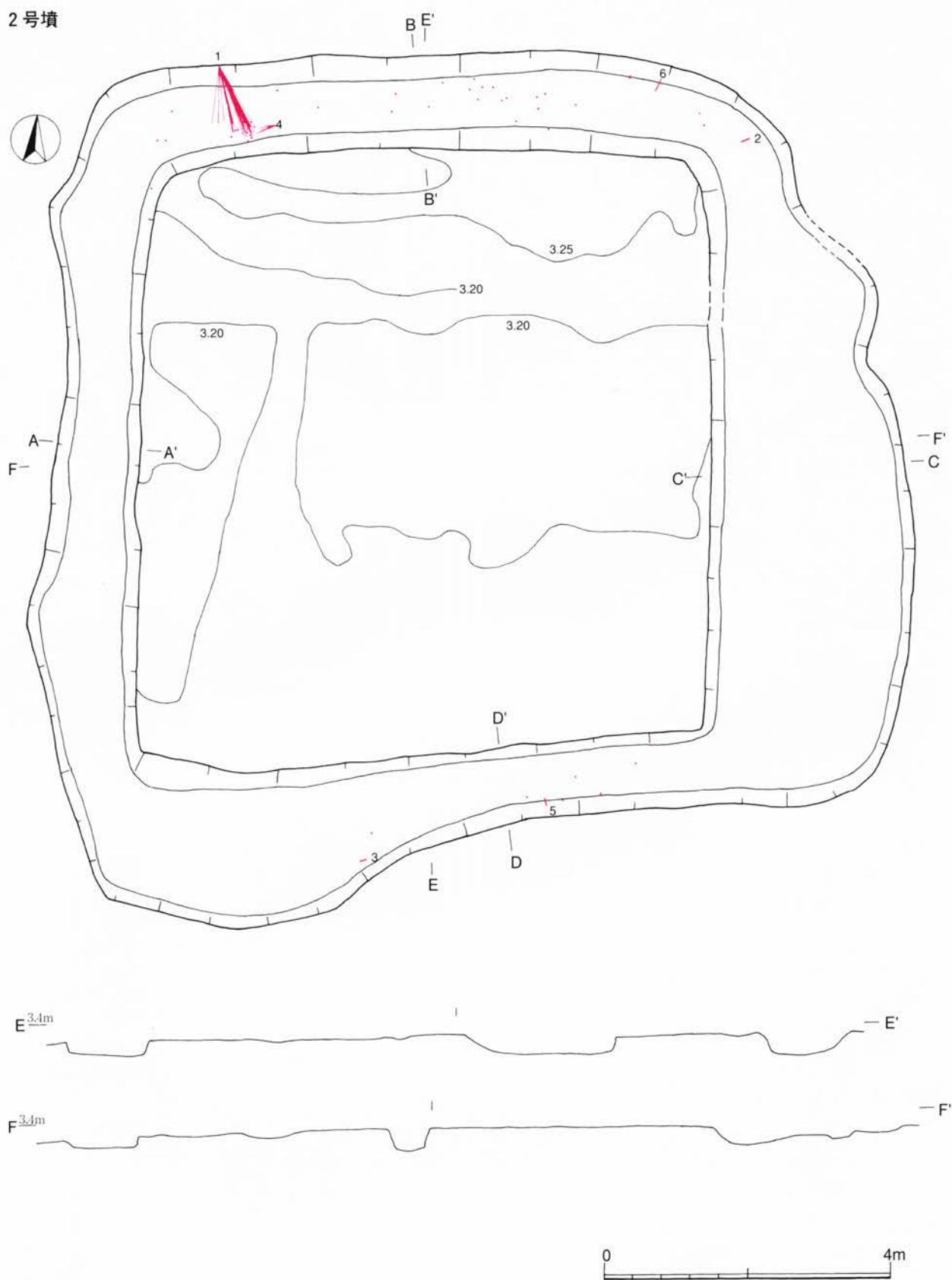
全て周溝内から、出土している。特に、周溝西辺中央部から床直で壺形土器1個体が出土している。29片の破片となってまとまった状態で出土しており、ほぼ完形に復元できる。破片として潰れた状態であるため、墳丘上からの転倒と想定される。同時期の甕形土器は、口縁部から頸部にかけてのみではあるが、前述の壺形土器の付近にまとまって出土しており、墳丘上の破片と接合している。このこ

1号墳

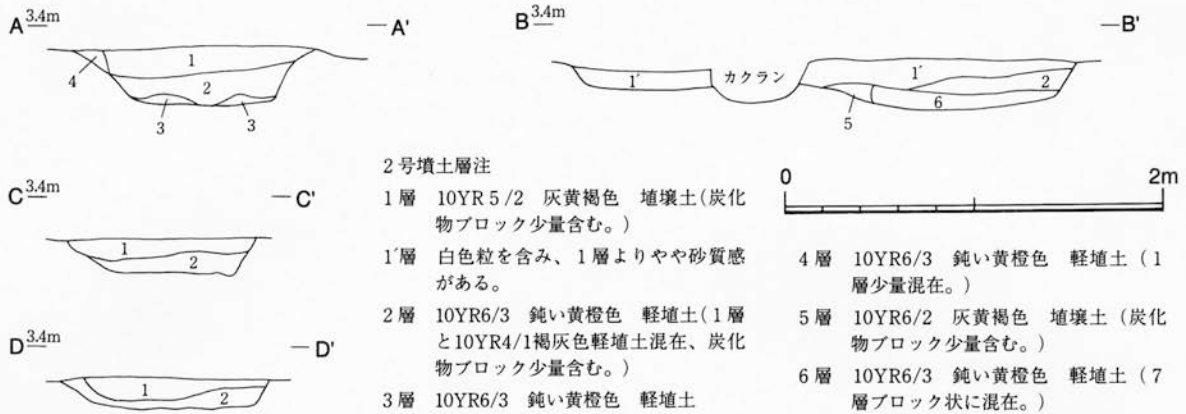


第13図 1号墳平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

2号墳



第14图 2号墳平面図・断面図 (S=1/80)



第15図 2号墳断面図 (S=1/40)

とから、元来は墳丘上にあったものと考えられる。時期は、漆町編年5～6群と考えられる。法仏～月影期(漆町編年1～4群)の壺形土器・甕形土器が多く見られるが、3号墳が当該期の遺構である94号溝上に造成されていることから、混入と判断する。

#### 4号墳

##### (1) 遺構

一部が調査区外に延びるが、方墳であると考えられる。墳丘規模は、周溝内の立ち上がりからの計測値で、長軸約6.1m×短軸約5.7mを測る。主軸は北西～南東軸で、周溝は全周せず、北側コーナ一部から途切れている。形状は西辺が逆台形状であり、北辺・南辺が断面逆三角形形状である。周溝幅は一様ではなく、上端0.5m～1.0m、下端0.2m～0.4mを測る。深さは、0.3m～0.5mを測るが、西辺の南端付近から急に高くなり、0.1m程度の深さとなる。覆土は、灰黄褐～黒褐色の堆積土で埋っている。

##### (2) 遺物出土状況

周溝内の西辺中央付近の西側立ち上がりに近い部分から出土している。床よりやや浮いた地点で、壺形土器1個体分が、27片の破片となってまとまった状態で出土しており、ほぼ完形に復元できる。しかし、口縁端部の部位は欠損する。やや浮いた状態であり、破片として潰れた状態であるため、墳丘上からの転倒と想定される。時期は、古墳時代前期と考えられる。口縁端部形状が不明瞭なため検討の余地を残すが、漆町編年8～10群におさまる資料と考えられる。そのため、法仏末期(漆町編年1～2群)の甕形土器が見られるが、混入と判断する。

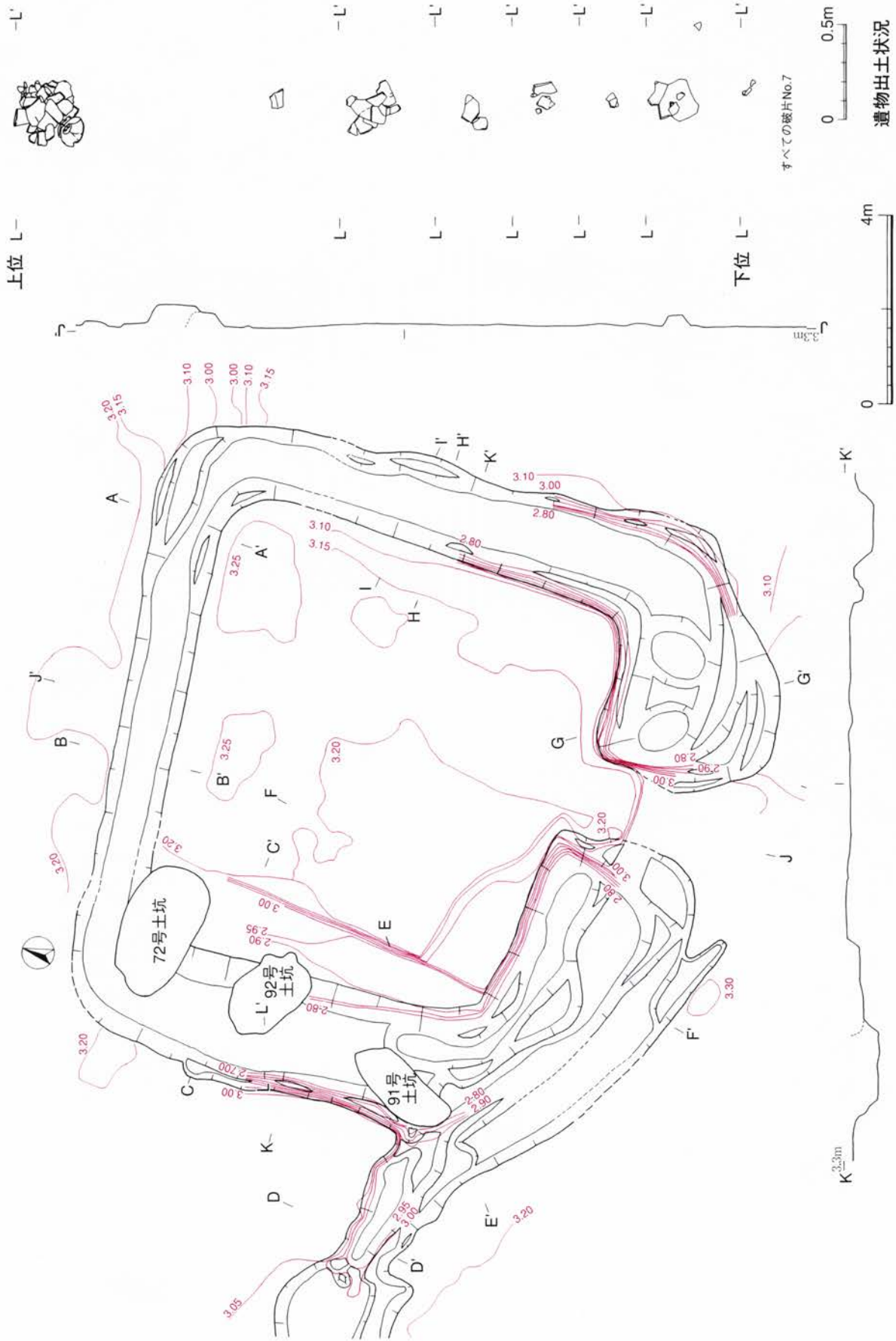
#### 5号墳

##### (1) 遺構

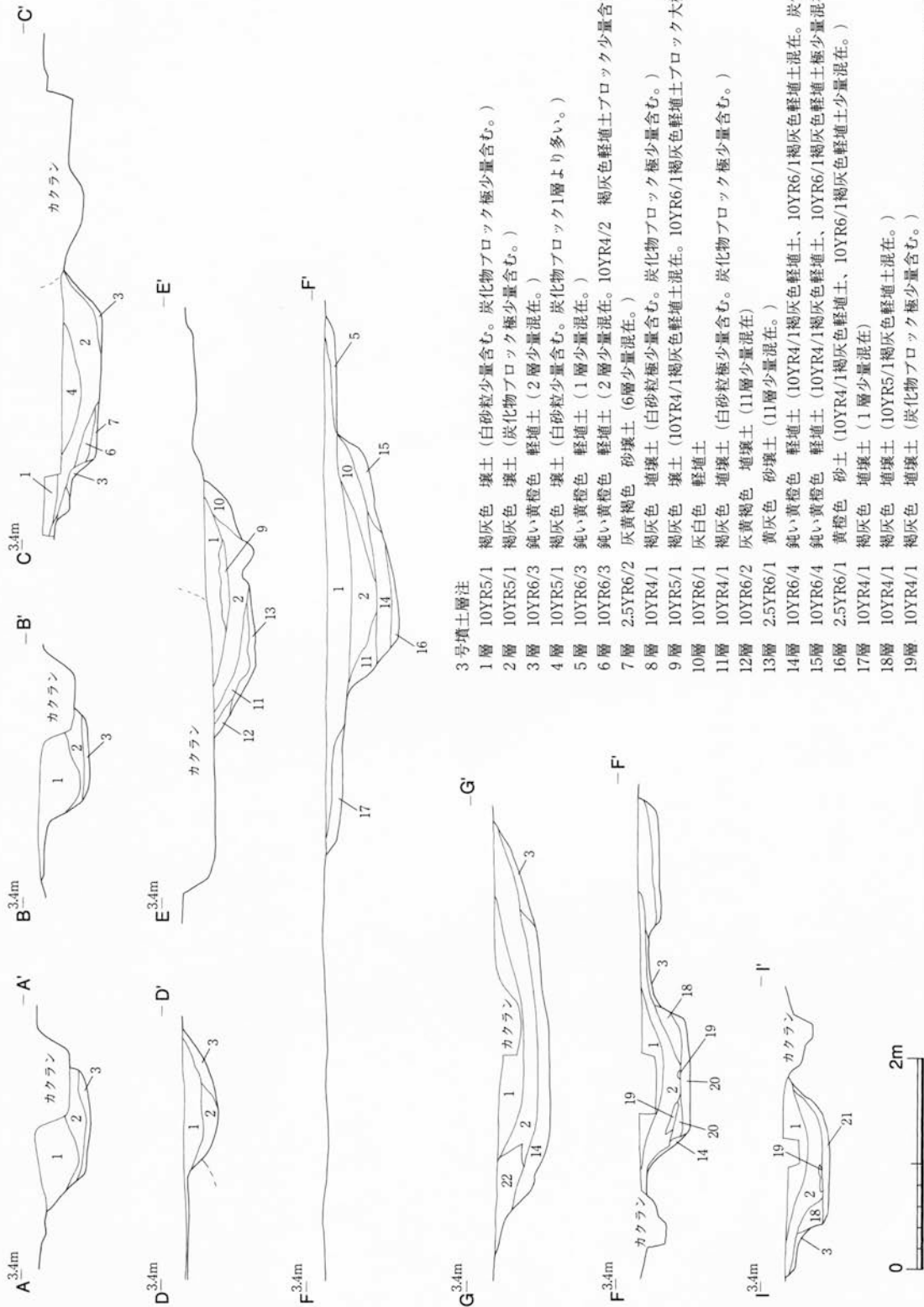
大部分が調査区外に存在するため、墳墓としての位置付けに疑問が残るが、溝の形態と出土遺物から墳墓と判断して報告する。方墳と考えられるが、北辺部分の周溝が広がる形態をとることから、北側に3号墳と同様に造り出し部分を持つ前方後方墳の可能性がある。墳丘規模は、西辺周溝確認長で約15.7mを測る。主軸はほぼ南北軸である。周溝は、前述のとおり西辺の北端コーナ一部より広がっている。形状は、逆台形状を呈す。周溝幅は、南辺で上端1.9m、下端1.4mを測る。西辺は、攪乱溝によって西肩部が失われているため想定になるが、上端で2.8mを測る。深さは浅く、0.2m程度を測る。覆土は、褐灰色の堆積土で埋っている。

##### (2) 遺物出土状況

周溝内から、12点の破片が出土している。そのうち、西辺南端付近のまとまった破片より、高坏型土器1点が復元された。床面から10cm程度浮いた状態であり、墳丘上からの転倒と想定される。時期は、漆町編年5～6群と考えられる。



第16図 3号墳平面図・断面図 (S=1/60)



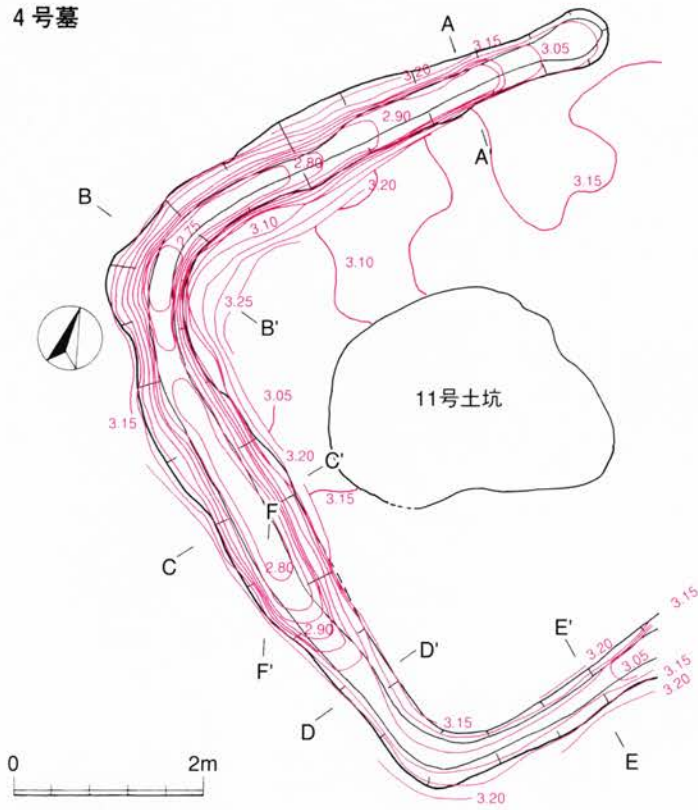
3号墳土層注

- 1層 10YR5/1 褐色 壤土 (白砂粒少量含む。炭化物ブロック極少量含む。)
- 2層 10YR5/1 褐色 壤土 (炭化物ブロック極少量含む。)
- 3層 10YR6/3 純い黄褐色 軽埴土 (2層少量混在。)
- 4層 10YR5/1 褐色 壤土 (白砂粒少量含む。炭化物ブロック1層より多い。)
- 5層 10YR6/3 純い黄褐色 軽埴土 (1層少量混在。)
- 6層 10YR6/3 純い黄褐色 軽埴土 (2層少量混在。10YR4/2 褐色軽埴土ブロック少量含む。)
- 7層 2.5YR6/2 灰黄褐色 砂壤土 (6層少量混在。)
- 8層 10YR4/1 褐色 埴壤土 (白砂粒極少量含む。炭化物ブロック極少量含む。)
- 9層 10YR5/1 褐色 壤土 (10YR4/1褐色軽埴土混在。10YR6/1褐色軽埴土ブロック大極少量含む。)
- 10層 10YR6/1 灰白色 軽埴土
- 11層 10YR4/1 褐色 埴壤土 (白砂粒極少量含む。炭化物ブロック極少量含む。)
- 12層 10YR6/2 灰黄褐色 埴壤土 (11層少量混在)
- 13層 2.5YR6/1 黄褐色 砂壤土 (11層少量混在。)
- 14層 10YR6/4 純い黄褐色 軽埴土 (10YR4/1褐色軽埴土、10YR6/1褐色軽埴土混在。炭化物ブロック極少量含む。)
- 15層 10YR6/4 純い黄褐色 軽埴土 (10YR4/1褐色軽埴土、10YR6/1褐色軽埴土少量混在。)
- 16層 2.5YR6/1 黄褐色 砂土 (10YR4/1褐色軽埴土、10YR6/1褐色軽埴土少量混在。)
- 17層 10YR4/1 褐色 埴壤土 (1層少量混在)
- 18層 10YR4/1 褐色 埴壤土 (10YR5/1褐色軽埴土混在。)
- 19層 10YR4/1 褐色 埴壤土 (炭化物ブロック極少量含む。)
- 20層 10YR5/1 褐色 壤土 (炭化物ブロック極少量含む。10YR6/3純い黄褐色軽埴土、10YR4/1褐色軽埴土ブロック混在。)
- 21層 10YR6/1 褐色 埴壤土 (10YR6/3純い黄褐色軽埴土混在。10YR4/1褐色軽埴土ブロック少量混在。)
- 22層 10YR5/1 褐色 砂壤土 (白砂粒少量含む。炭化物ブロック少量含む。)

第17図 3号墳断面図 (S=1/60)

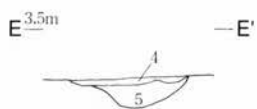
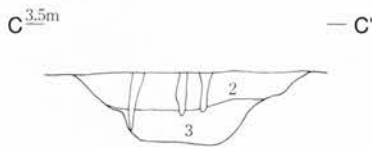
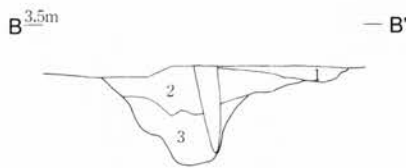
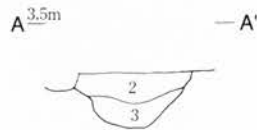


4号墓



4号墳土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土(点状マンガ斑多い。堅く締まる。)
- 2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(点状マンガ斑多い。堅く締まる。)
- 3層 10YR3/1 黒褐色 軽埴土(堅く締まる。)
- 4層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(点状マンガ斑多い。堅く締まる。)
- 5層 10YR4/2 暗褐色 軽埴土(点状マンガ斑多い。堅く締まる。)



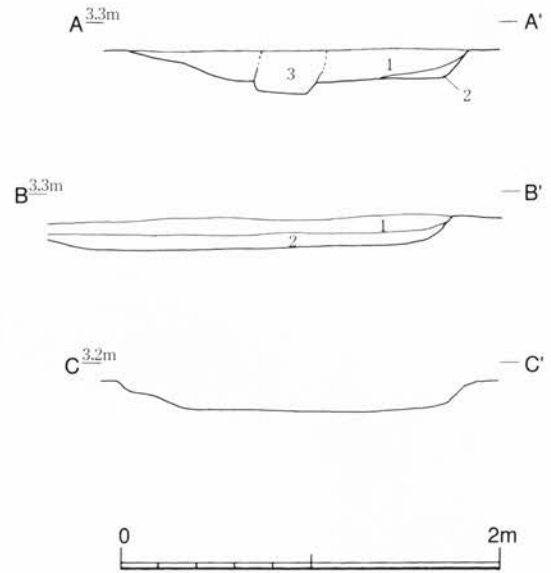
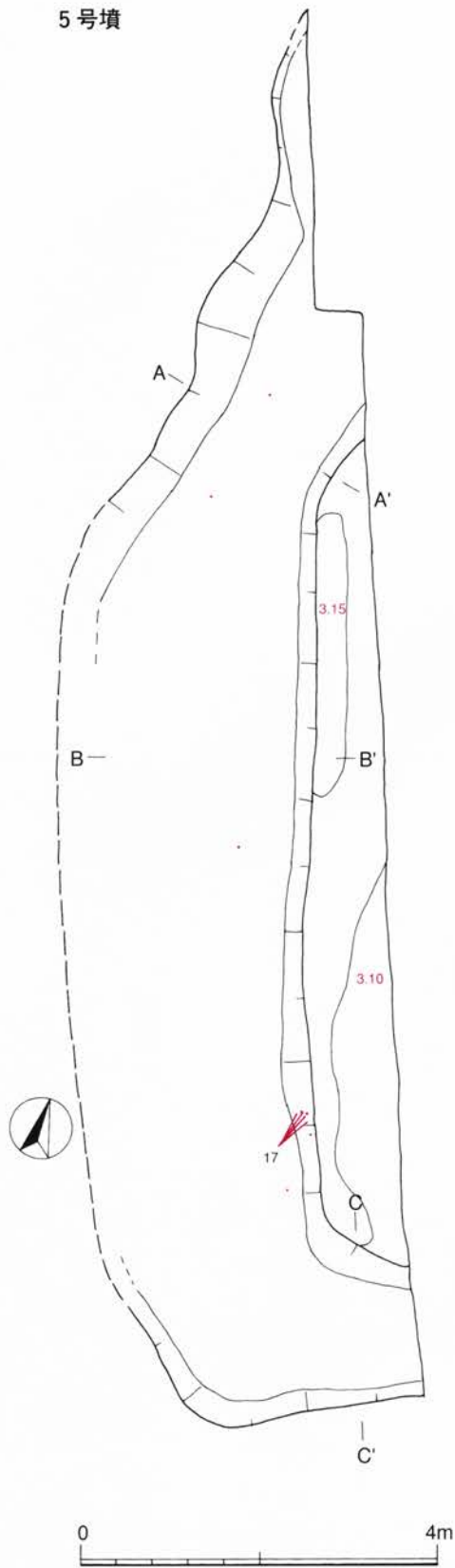
その他の破片はすべてNo.15



( ) は遺物出土状況図に適用

第18図 4号墳平面図・断面図 (S=1/80・1/40・1/20)

5号墳

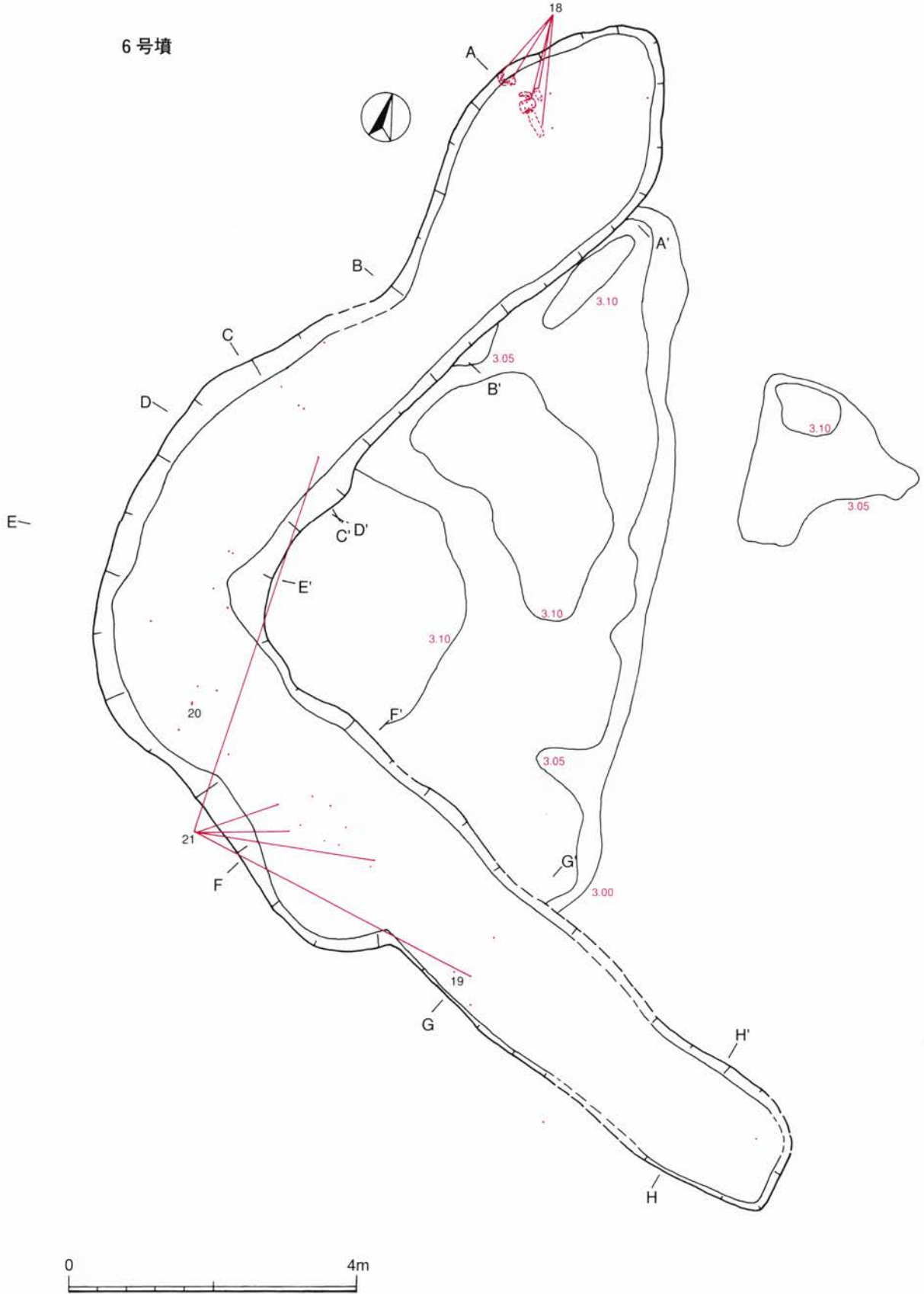


5号墳土層注

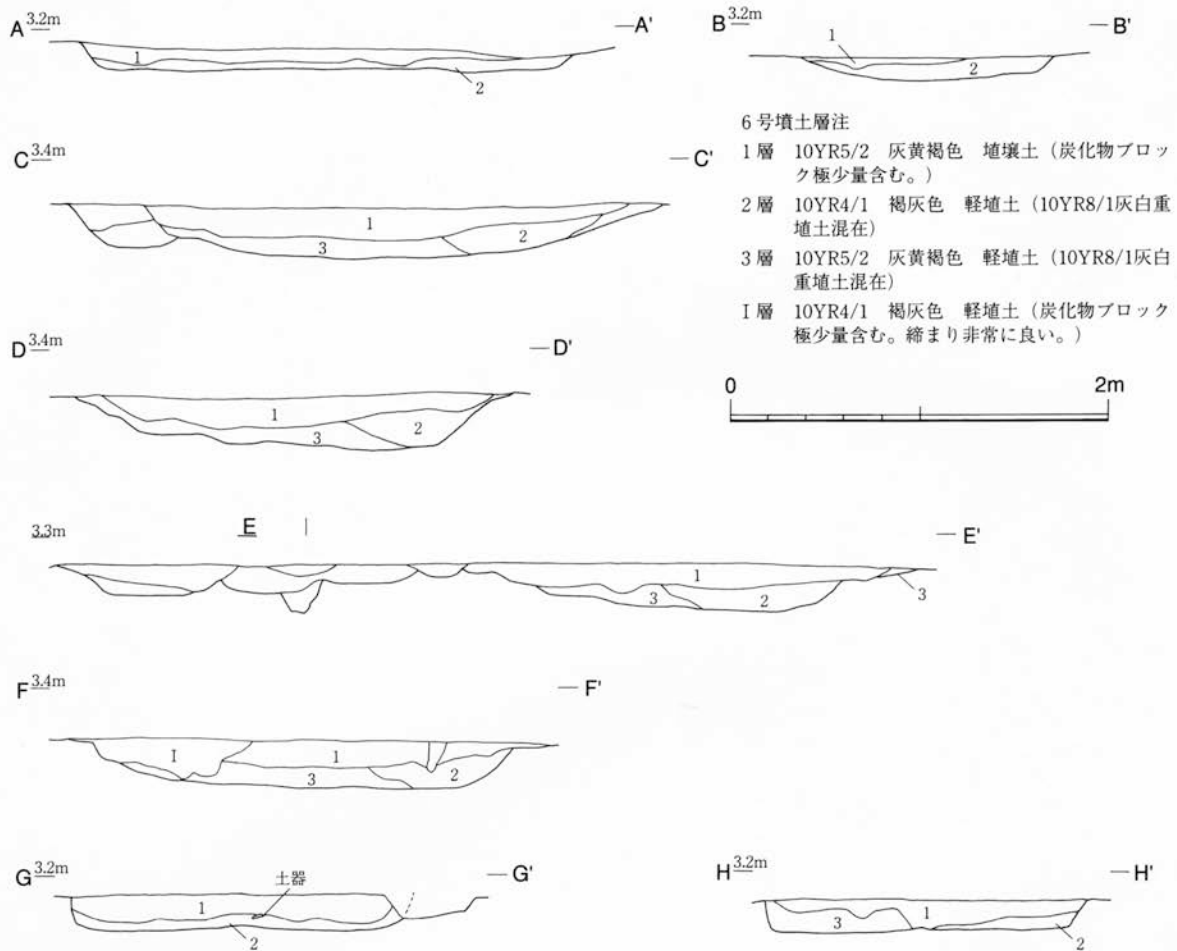
- 1層 10YR6/1 褐灰色 壤土 (炭化物ブロック少量含む。)
- 2層 10YR7/3 鈍い黄橙色 軽埴土
- 3層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土 (炭化物ブロック少量含む。56号溝)

第19図 5号墳平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

6号墳



第20図 6号墳平面図 (S=1/80)



第21図 6号墳断面図 (S=1/40)

## 6号墳

### (1) 遺構

L型の溝のみで、東側大半が攪乱により失われているが、方墳であると考えられる。墳丘規模は、周溝からの復元計測値で、長軸約10.8m×短軸約9.8mを測る。主軸は北西-南東軸で、両側の周溝端部が検出されていることから、全周しないことが分かる。形状は、なだらかな湾曲状の断面である。周溝幅は、上端1.8m~2.6m、下端1.5m~2.4mを測る。一部狭い箇所では、上端1.6m、下端0.9mを測る。深さは、0.2m~0.3mを測る。覆土は、灰黄褐~褐色の堆積土で埋っている。

### (2) 遺物出土状況

周溝内の北端部分に集中して、甕形土器1固体分の破片が出土している。ほぼ完形に復元できるが、底部を欠く。ほぼ床直ではあるが、破片として潰れた状態であるため、墳丘上からの転倒と想定される。時期は、古墳時代前期と考えられ、漆町編年7~8群に収まるものと考えられる。他の破片は、周溝内に疎らに出土している。法仏期(漆町編年1~2群)の甕形土器が見られるが、口縁部のみであり混入と判断する。また、壺の底部破片が2点出土しているが、時期の特定は困難である。

## 第2項 土坑

### 235号土坑

H-45グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径1.3m×短径1.04m、深さ約0.1mを測る。

覆土は、灰黄褐色～褐灰系の軽埴土で埋る。遺物は少ないが、床面から法仏末期（漆町編年2群）の甕形土器の口縁部が出土している。

#### 170号土坑

K-42・43グリッドから検出された瓢箪形の土坑である。長径2.0m×短径（大）1.0m×短径（小）0.55m、深さ約0.3mを測る。覆土は、灰黄褐色軽埴土で埋る。遺物は少ないが、法仏末～月影期（漆町編年2～4群）の甕形土器の口縁部が出土している。

#### 133号土坑

L-42グリッドから検出された円形の土坑である。径1.6m、深さ約0.7m～0.8mを測る。壁面は、ほぼ垂直に立ち上がっており、円筒形の土坑である。覆土は、褐灰色軽埴土で一気に埋め戻されていた。上層は、窪みに溜まった堆積土と考えられる。遺物は少ないが、法仏～月影期（漆町編年1～4群）の甕形土器の底部が出土している。

#### 198号土坑

E-44グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径0.8m×短径0.65m、深さ約0.1mを測る。北端が1段ピット状に深くなっている。覆土は、褐灰色埴土で埋る。2層は地山土の変質と考えられる。遺物は少ないが、法仏末～月影期（漆町編年2～4群）の甕形土器の口縁部が出土している。

#### 174号土坑

J-42グリッドから検出された楕円形の土坑である。上位に古代遺構が重複しており、土坑の下部のみの検出である。長径1.0m×短径0.9m、深さ約0.2mを測る。覆土は、にぶい黄褐色軽埴土で埋る。覆土上面より高坏形土器の頸部が出土している。時期は、法仏期（漆町編年1～2群）と考えられる。

#### 197号土坑

D・E-44グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径1.1m×短径0.7m、深さ約0.1mを測る。3・4層の堆積後、土坑南端が深く掘り込まれており、深さ約0.3mを測る。覆土は、浅い部分が褐灰色埴土で埋り、深く掘られた部分は、下層が褐灰色埴土、上層は黒褐色埴土～壤土が堆積している。遺物は、深く掘られた部分に集中して出土している。破片はまとまりをもっており、底部付近を欠く2/3個体分の壺形土器に復元できる。上半も口縁部が全周せず、他の破片も見られることから、廃棄土坑と判断する。時期は、漆町編年5～6群と考えられる。

#### 2・3号土坑

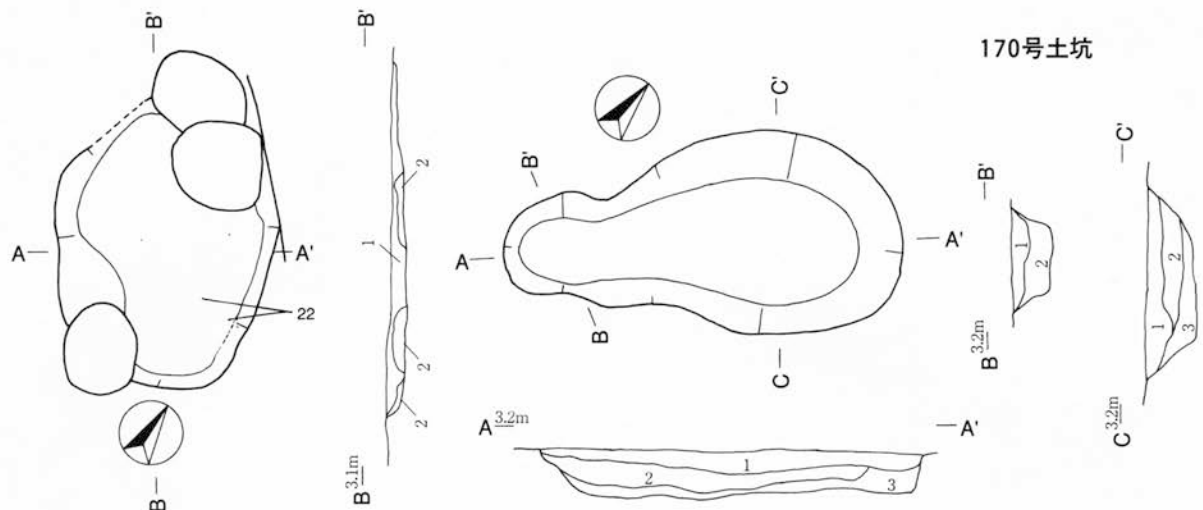
C・D-02グリッドから検出された楕円形の土坑である。2号土坑は長径1.15m×短径0.54m、深さ約0.06m程度しか残存していない。覆土は、灰黄褐色埴土で埋り、東端部分はその跡に掘り込まれている。その部分は、褐色壤土で埋っている。3号土坑は長径1.35m×短径1.08m、深さ約0.1m程度しか残存していない。覆土は、灰黄褐色埴土で埋っている。遺物は床面から疎らに検出されている。3号土坑から古墳時代前期の壺形土器の口縁部が出土している。3号土坑に切られている2号土坑は、それ以前ということになる。

#### 5・6号土坑

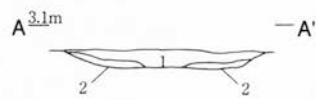
D-02グリッドから検出された楕円形の土坑である。5号土坑は長径1.12m×短径0.86m、深さ約0.1m程度しか残存していない。覆土は、褐灰色埴土で埋る。3号土坑は長径1.0m×短径0.88m、深さ約0.08m程度しか残存していない。中央部が1段下がる形態をとっている。覆土は、灰黄褐色埴土で埋っている。遺物は疎らに検出されており、5号土坑から古墳時代前期（漆町編年7～8群頃か）の高坏の脚部が出土している。5号土坑に切られている6号土坑は、それ以前ということになる。

#### 1号落ち込み

E・F-03・04グリッドから検出された溝状の凹みであり、通常の土坑の形態とは異なるため落ち込みとした。長径7.1m、短径1.8m、深さ約0.7m～0.8mを測る。覆土は、褐灰色埴土で埋っている。遺物は少ないが、法仏～月影期（漆町編年1～4群）の高坏の脚部が出土している。

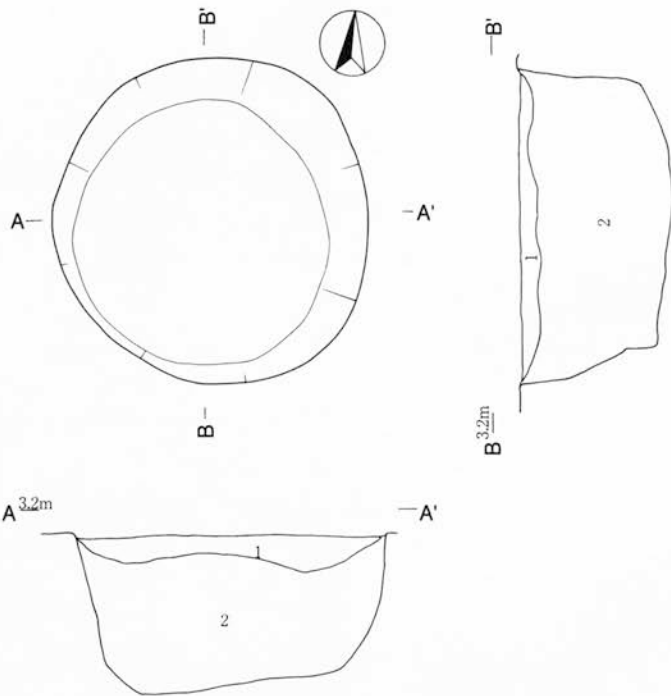


170号土坑



235号土坑

133号土坑



235号土坑土層注

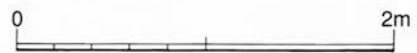
- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土（地山軽埴土ブロック少量含む。）
- 2層 1層と10YR6/6 明黄褐色 軽埴土との混在層

170号土坑土層注

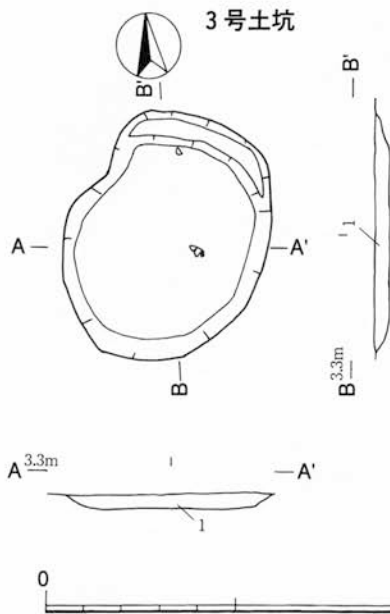
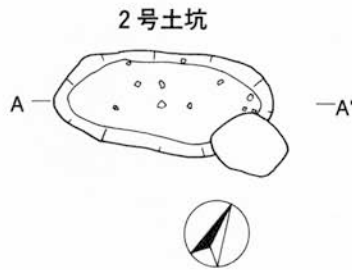
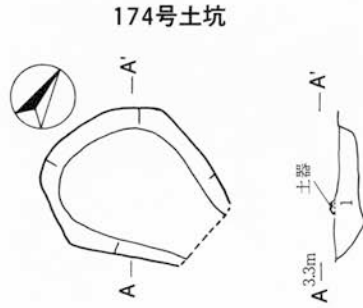
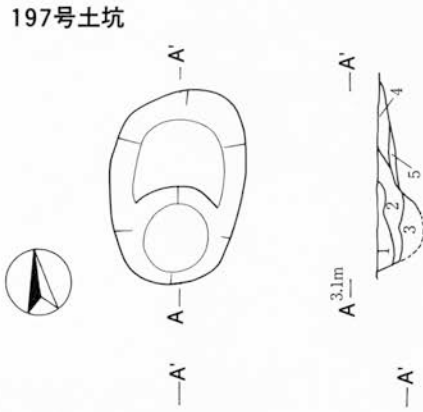
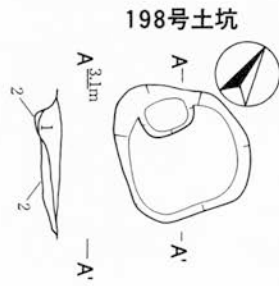
- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土（軟弱。）
- 2層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土（軟弱。）
- 3層 10YR4/3 鈍い黄褐色 軽埴土（軟弱。）

133号土坑土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土（軟弱。）
- 2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土



第22図 235号・170号・133号土坑平面図・断面図 (S=1/40)



( ) は遺物出土状況図に適用

第23図 198号・174号・197号・2号・3号土坑平面図・断面図 (S=1/40・1/20)

197号土坑遺物出土状況図



すべての破片はNo.27

198号土坑土層注

- 1層 10YR4/1 埴壤土 (下位で白色粘土少量混在。)
- 2層 10YR7/1 鈍い黄橙色 軽埴土

197号土坑土層注

- 1層 10YR3/1 黒褐色 埴壤土 (炭化物ブロック含む。強く締まる。遺物包含。)
- 2層 10YR3/1 黒褐色 壤土 (炭化物ブロック含む。遺物包含。)
- 3層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土 (10YR7/1灰白色軽埴土、10YR7/6明黄褐色軽埴土混在。遺物包含。)
- 4層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土 (10YR7/1灰白色軽埴土ブロック少量含む。強く締まる。)
- 5層 10YR5/4 鈍い黄橙色 軽埴土 (10YR4/1褐灰色埴壤土少量混在。)

174号土坑土層注

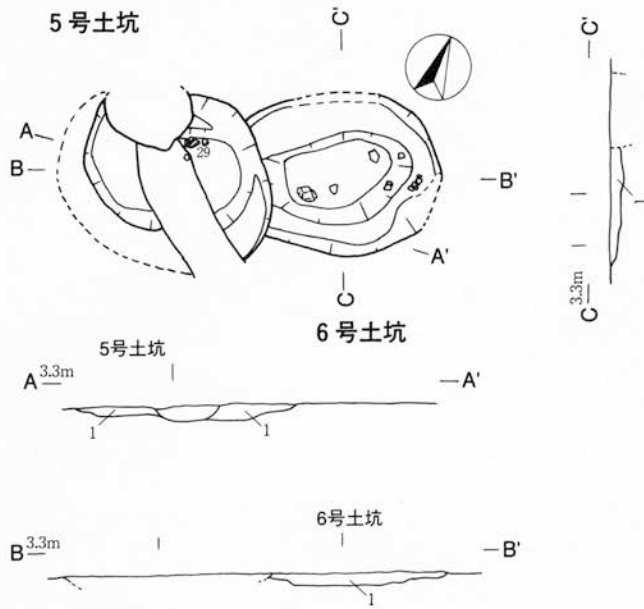
- 1層 10YR7/2 鈍い黄橙色 軽埴土 (軟弱。)

2号土坑土層注

- 1層 10YR4/1 褐灰色 壤土 (炭化物粒・ブロック少量含む。)
- 2層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土 (炭化物ブロック少量含む。)

3号土坑土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土 (炭化物ブロック多く含む。遺物包含。)

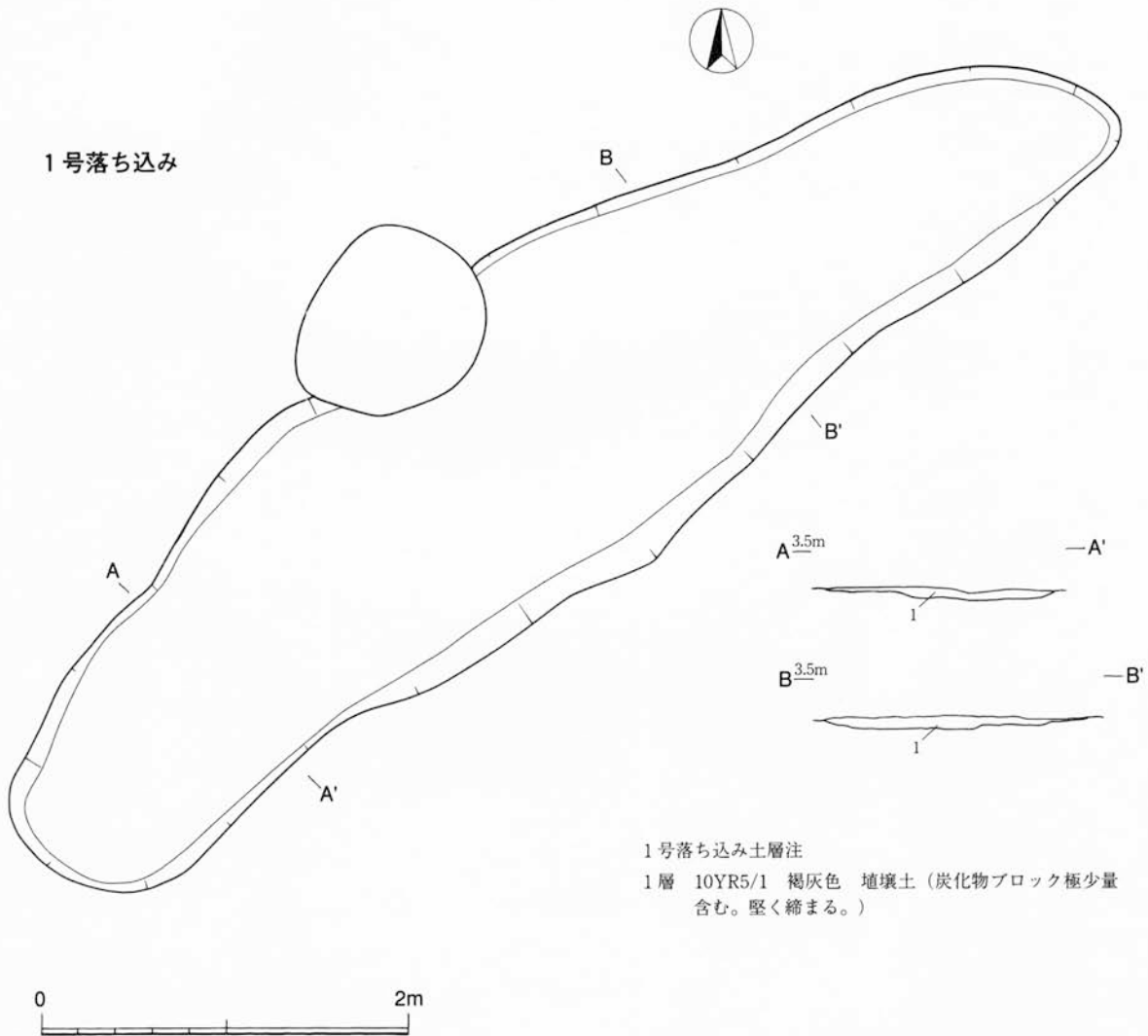


5号土坑土層注

1層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (10YR7/2鈍い黄橙色軽埴土ブロック極少量含む。炭化物粒少量含む。)

6号土坑土層注

1層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土 (炭化物ブロック大含む。遺物包含。)



1号落ち込み土層注

1層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土 (炭化物ブロック極少量含む。堅く締まる。)

第24図 5号・6号土坑・1号落ち込み平面図・断面図 (S=1/40)



### 第3項 溝

#### 94号溝（旧河道Ⅱ-1）

旧河道の箇所でも若干ふれたが、遺物の出土が認められるため、最上層部分に限って、ここで取り上げるものとする。F-34グリッドからL-31グリッドへ流れる東西方向の溝である。F-34グリッド以東は、遺構の切り合い、攪乱等により不明であるが、調査区外に延びるものと予想する。幅約2～3m、深さ0.2m～0.3mのみを確認しており、上面は削平されたものと考えられる。覆土は、褐灰色の埴土で埋り、所々で砂が混入している。遺物は全体から出土しており、小片が多いが、特にK-31・32グリッド部分で集中して出土しており、ほぼ完形に復元される壺形土器の破片がまとまって出土している。時期は、法仏～月影Ⅰ期であり、また、古墳時代前期前半の3号墳の周溝である91号溝に切られていることから、弥生時代後期後半～終末が考えられる。

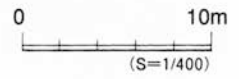
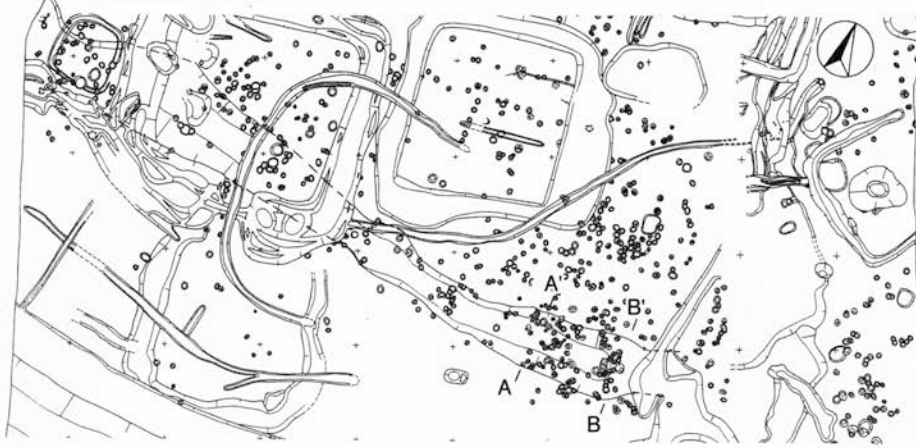
#### 38号溝（旧河道Ⅲ-2）

旧河道の箇所でも若干ふれたが、ここでは当該時期の遺物を含む旧河道Ⅲ-2の報告を行う。古代遺物を伴う旧河道Ⅲ-3については、次節で報告するものとする。B-39グリッドからL-34・35グリッドへ流れる溝である。北西方向に向かって流れていた流れが、G-35・36グリッドで西へと転換している。調査区を横断しており、調査区外に延びている。幅約10～11m、深さ約0.5m～0.7mを測る。覆土は、下層（17層）が褐灰色の埴土で埋り、上層（8層）が灰黄褐埴土で埋っている。断面図から上層堆積段階で、一度河道が埋りかけたことが考えられる。その上層を削る形で流れが復活しており、古代段階の河道となる。遺物は全体から出土しているが、基本的には、殆どが8層・17層からの出土であり、まとまった廃棄行為が観察され、壺形土器、甕形土器、高坏型土器、器台型土器、蓋型土器、鉢型土器や、特殊品としてミニチュア土器や山陰型甌の把手が出土している。特に、B・C-41・42グリッド、D-39グリッド、E・F-37グリッド、I-36グリッド、J-35・36部分に集中箇所がみられる。また、河道の左岸（南側）寄りに主体があり、その方向からの廃棄行為がなされたことが考えられる。さらに破片の接合関係を検討しても、最大でも10m程度の距離であり、多くが比較的近い位置で接合していることから、この場で廃棄行為がなされたものと判断する。破片は、略完形に復元できるものは多数あるが、何れかの部位を欠き、完全な形にはならない。よって、破損品の廃棄ではないかと考えられる。古代段階覆土から出土したものは、8層を削った流れが発生した段階で、混入したものと判断する。時期は、猫橋期（漆町編年1群前）の遺物から見られ、それ以前の遺物は見られない。法仏期（漆町編年1～2群）の遺物をもっとも多く、月影期には減少傾向に転ずる。白江～古府期（漆町編年5～7群）になると、激減する。それは、この地が墓域として設定されたことの影響と考えられる。しかし、溝自体は並存していた。その時期以降の遺物は見られなくなる。特に、法仏～月影期（漆町編年2～4群）の廃棄行為の主体となった集落は、この調査範囲内では検出されていない。この溝の上流が位置すると考えられる調査区の東側（以前の千代マエダ遺跡）にあったと想定される。

#### 115・170号溝

L-36グリッドからF-47グリッドにかけて検出された直線の溝である。西側に併走する溝が数条みえるが、この溝のみがやや深く水路状に掘削されており、他は浅いものであり、時期も異なっている。軸は、北西-南東軸であり、両端とも調査区外へ延びる。130号溝を境に北側を115溝、南側を170号溝として調査したが、同一線上にあり、1条の溝と考えられる。攪乱を受けている箇所は、幅0.5m、深さ0.2～0.3m程度であるが、攪乱をあまり受けていないと考えられるa-a'付近では上端幅0.8m、下端幅0.4m、深さ0.45mを測る。覆土は、褐灰色の埴土、軽埴土で埋り、170号溝側には、最下層に黒褐色軽埴土の堆積が見える。遺物は、両溝から出土しており、115号溝側から法仏期（漆町編年1～2群）の甕形土器ないし壺形土器の底部、白江期（漆町編年5～6群）の壺形土器口縁部と口縁部を欠く部（両者は別個体）が、170号溝側から法仏～月影期（漆町編年1～4群）の壺形土器の底部および高台坏鉢、白江～古府期（漆町編年5～7群）の小型壺の口縁部が出土している。両者と

94号溝(最上位)



A <sup>3.3m</sup>

-A'

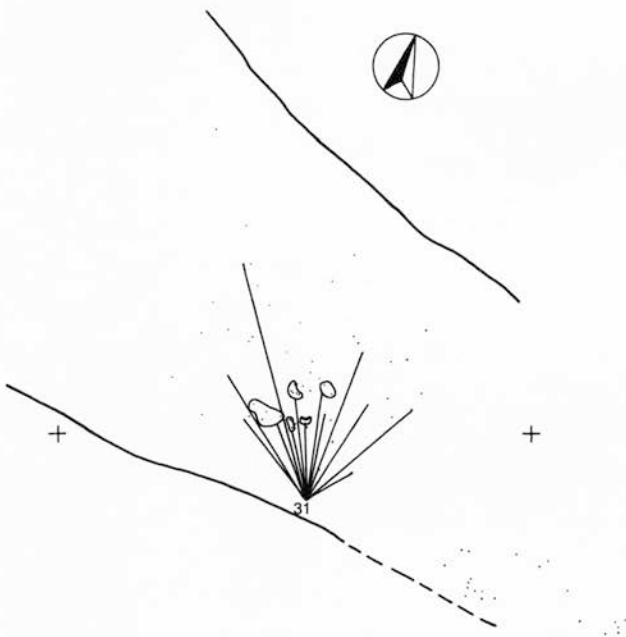


B <sup>3.3m</sup>

-B'



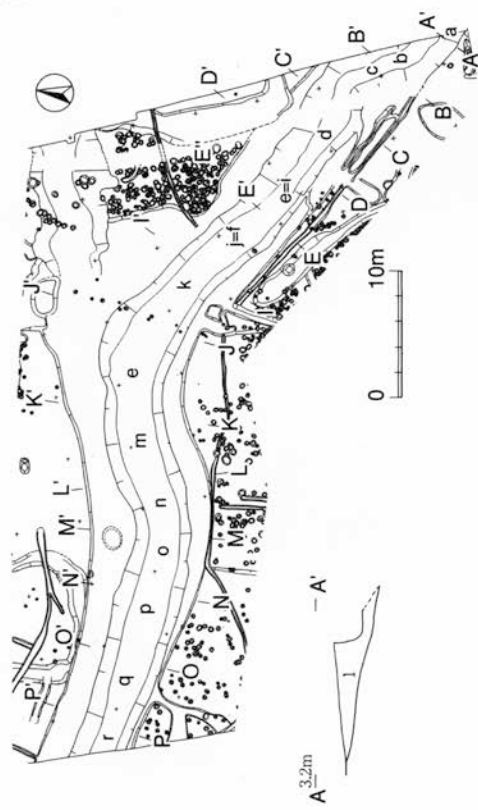
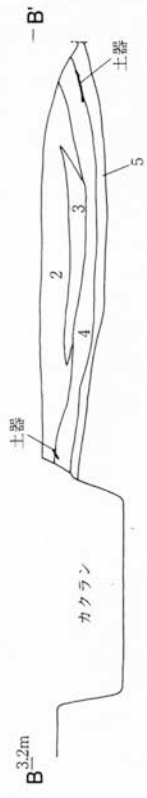
[土層注は旧河道94号溝1・2層を参照]



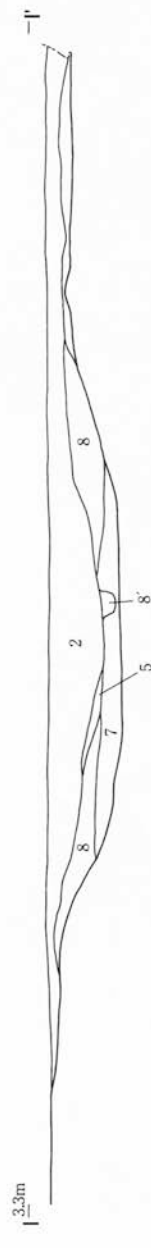
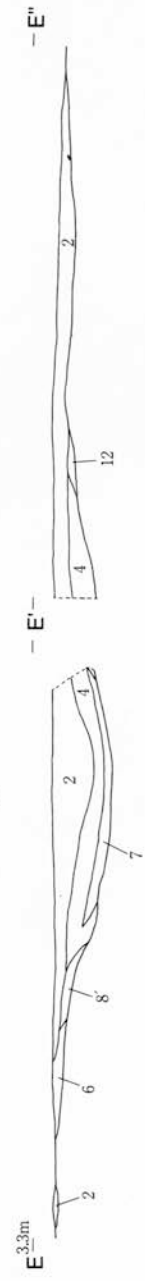
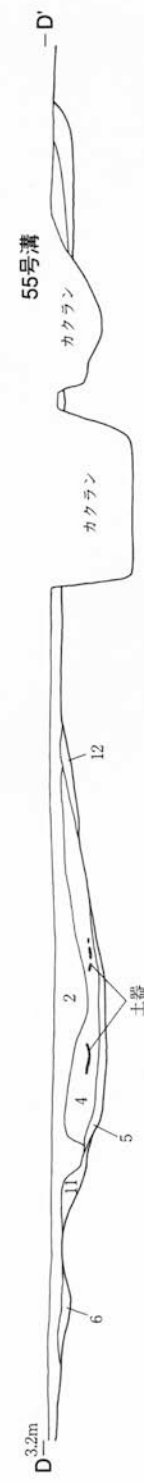
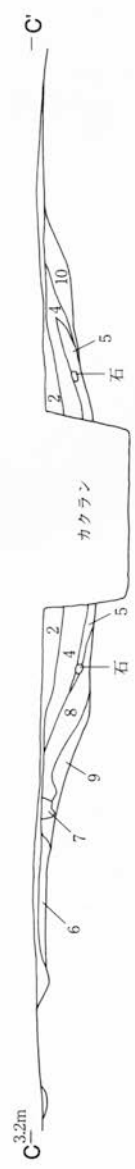
94号溝遺物出土状況図



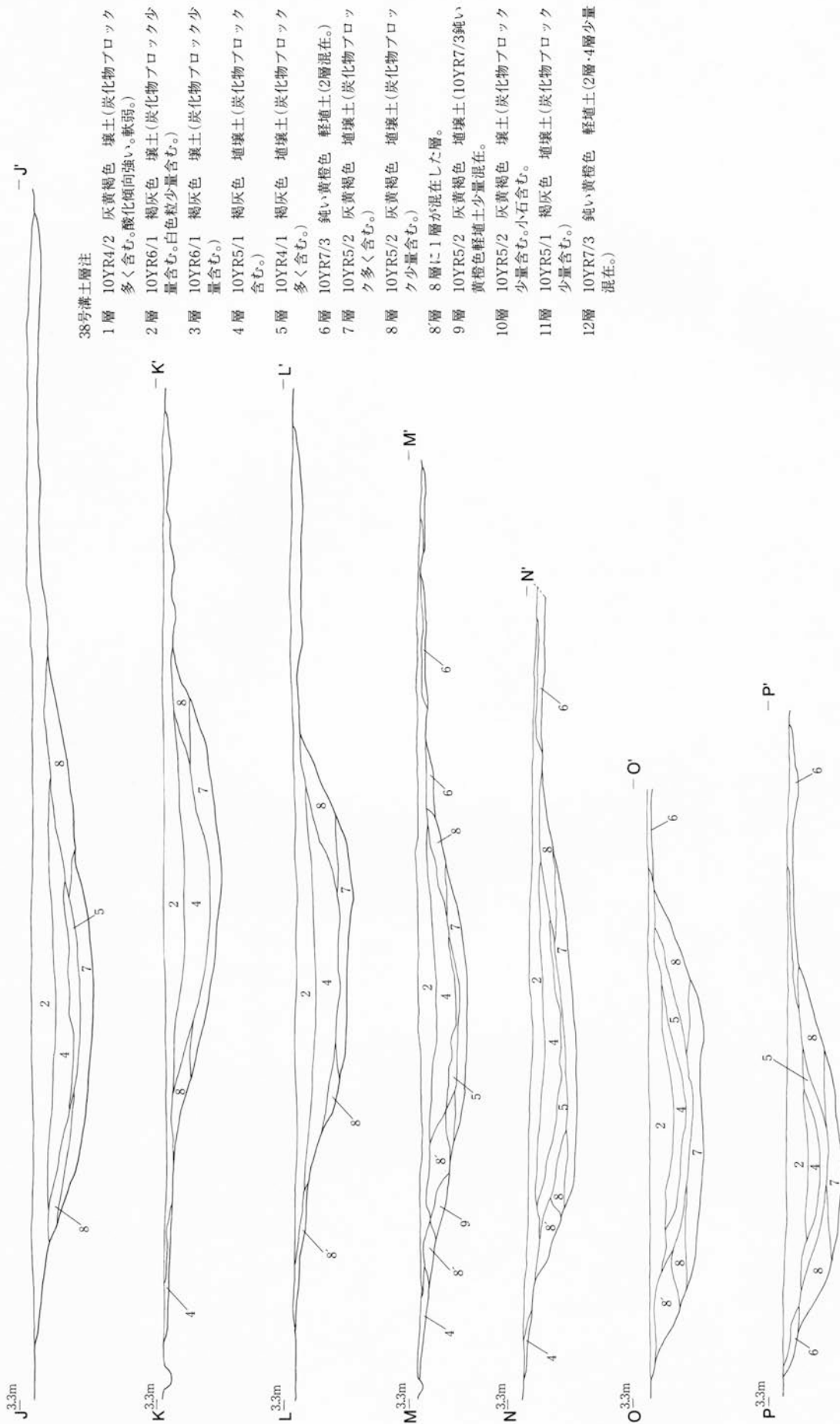
第25図 94号溝平面図・断面図 (S=1/80・1/40)



(アルファベット小文字は遺物取り上げ区割り)

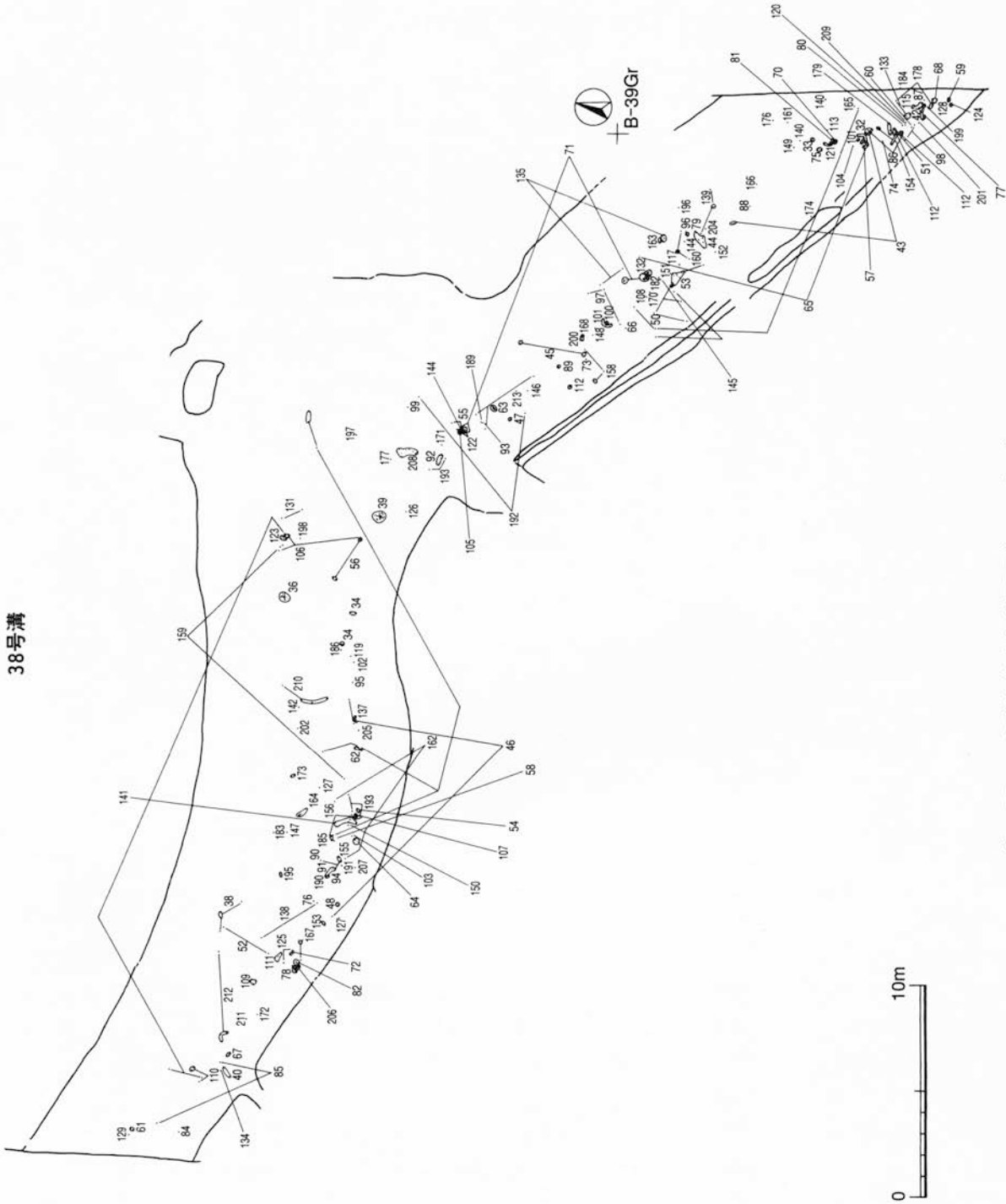


第26図 38号溝断面図 (S=1/60)



第27図 38号溝断面図 (S=1/60)

38号溝



第28図 38号溝遺物出土状況図 (S=1/300)

も同じ時期幅を持つ。I-42グリッドで130号溝に切られているが、他の併走する溝は、130号溝以南には伸びていない（その内1条は、171号溝と繋がる可能性はある）。また、溝の底面の高低差のみの根拠となるが、170号溝が他の併走する溝と同様に、北西～南東方向への流れであるのに対し、115号溝は逆に南東～北西方向へ低く傾斜している。そのため、仮に地形に沿って、北西～南東方向への流れであるとするならば、115号部分では非常に流れの悪い状態となっている。

#### 157・158 (114) 号溝

158 (114) 号溝は、L-38グリッドからI-43グリッドにかけて検出された直線の溝である。軸は、北西～南東軸であり、130号溝以南には伸びないが、前述のとおり、171号溝に続く可能性がある。幅0.3～0.4m、深さ0.1～0.2m程度であるが、I-43グリッド付近では、上端幅0.8m、下端幅0.4m、深さ0.3mを測る。覆土は、灰黄褐色の軽埴土で埋る。底面の高低差からは、北西～南東方向への流れであると考えられる。157号溝は、I・J-42グリッドから検出された溝状の遺構である。土層断面図から、157号溝を158 (114) 号溝が切っている。幅0.5m、深さ0.2mを測る。覆土は、灰白色の軽埴土で埋る。遺物は、両溝が切り合う箇所から出土しており、157号溝から法仏期（漆町編年1～2群）の甕形土器、口縁部を欠く壺形土器、法仏～月影期（漆町編年1～4群）の高坏形土器が出土している。158 (114) 号溝は、これを切ってはいるが、115号溝に切られる116号溝に切られていることから、115号溝よりは新しくならないと考える。

#### 113号溝

L-36グリッドからI-42グリッドにかけて検出された直線の溝である。軸は、北西～南東軸であり、両端とも調査区外へ伸びる。130号溝以南には伸びないが、前述のとおり、この溝も171号溝に続く可能性がある。攪乱を受けている箇所は、幅0.2～0.3m、深さ0.08～0.2m程度であるが、残存状況の良い部分では、上端幅0.7m、下端幅0.5m、深さ0.25mを測る。覆土は、褐灰色の埴土、軽埴土で埋る。底面の高低差からは、北西～南東方向への流れであると考えられる。遺物は、少量だが、古府～高島期（漆町編年7～9群）の小型の鉢形土器が出土している。遺構の切り合い関係とも矛盾せず、一番新しい段階の溝といえる。

#### 151号溝

F-38グリッドからE-40グリッドにかけて検出された溝状の遺構である。軸は、北西～南東軸であり、115号溝等の一群とほぼ同じである。上端幅1.8m、下端幅1.4m、深さ0.2～0.35mを測る。c-c'より南側は、狭くなり、上端幅1.4m、下端幅0.4m、深さ0.25mを測る。覆土は、上層が灰黄褐色の埴土、下層が明褐色の軽埴土で埋る。底面の高低差は、南東方向がやや低い程度であり、意識されているとはいえない。遺物は、少量だが、法仏末～月影期（漆町編年1～4群）甕形土器の底部が出土している。

#### 174号溝

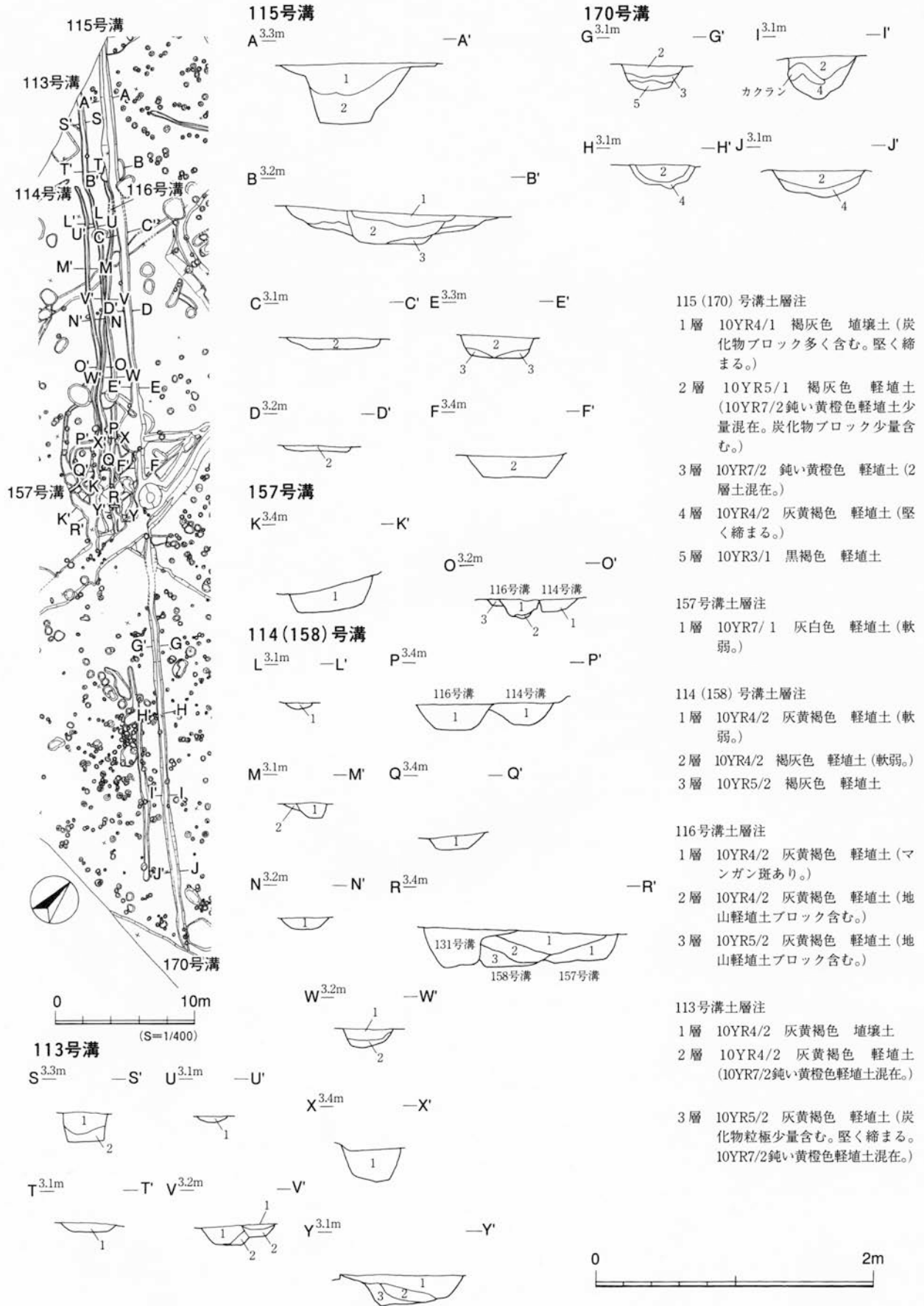
H-44グリッドから検出された溝状とも土坑状ともいえる遺構である。軸は、東～西軸であり、西端部分が狭く、幅0.35m、深さ0.08mを測るのに対し、東側はやや広がり、幅0.8m、深さ0.1mを測る。覆土は、上層が黒褐色の埴土、下層が灰白色の軽埴土で埋る。遺物は、少量だが、法仏期（漆町編年1～2群）壺形土器の底部が出土している。

#### 95号溝

K-33・34グリッドで検出された溝である。軸は、東～西軸であり、上端幅0.7m、下端幅0.54m、深さ0.15mを測る。Kグリッド以西は、削平により検出できなかった。覆土は、上層が褐灰色の埴土、下層が鈍い黄橙色の砂埴土で埋る。底面の高低差は、東から西へ低くなっている。遺物は、少量だが、月影～白江期（漆町編年3～6群）甕形土器の口縁部が出土している。

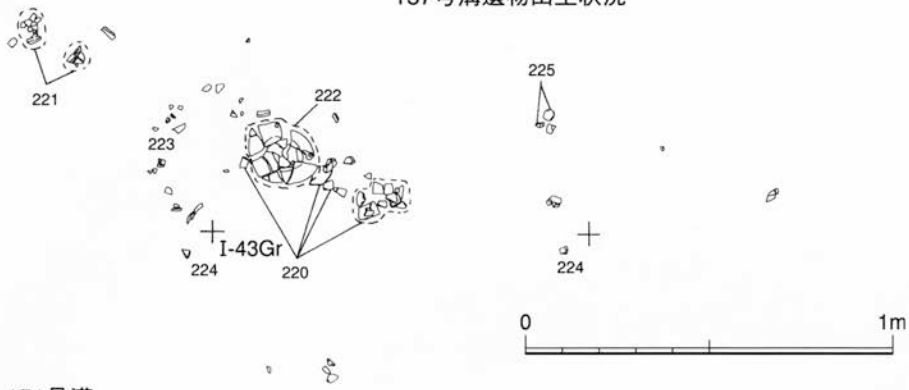
#### 県調査との対応関係

弥生時代後期の遺構・遺物は、昭和62年度調査区C区、昭和63年度調査区23号溝区、平成元年度調査区D区で検出されている。いずれも建物跡等ではなく、土坑・溝である点は市調査区と共通してい

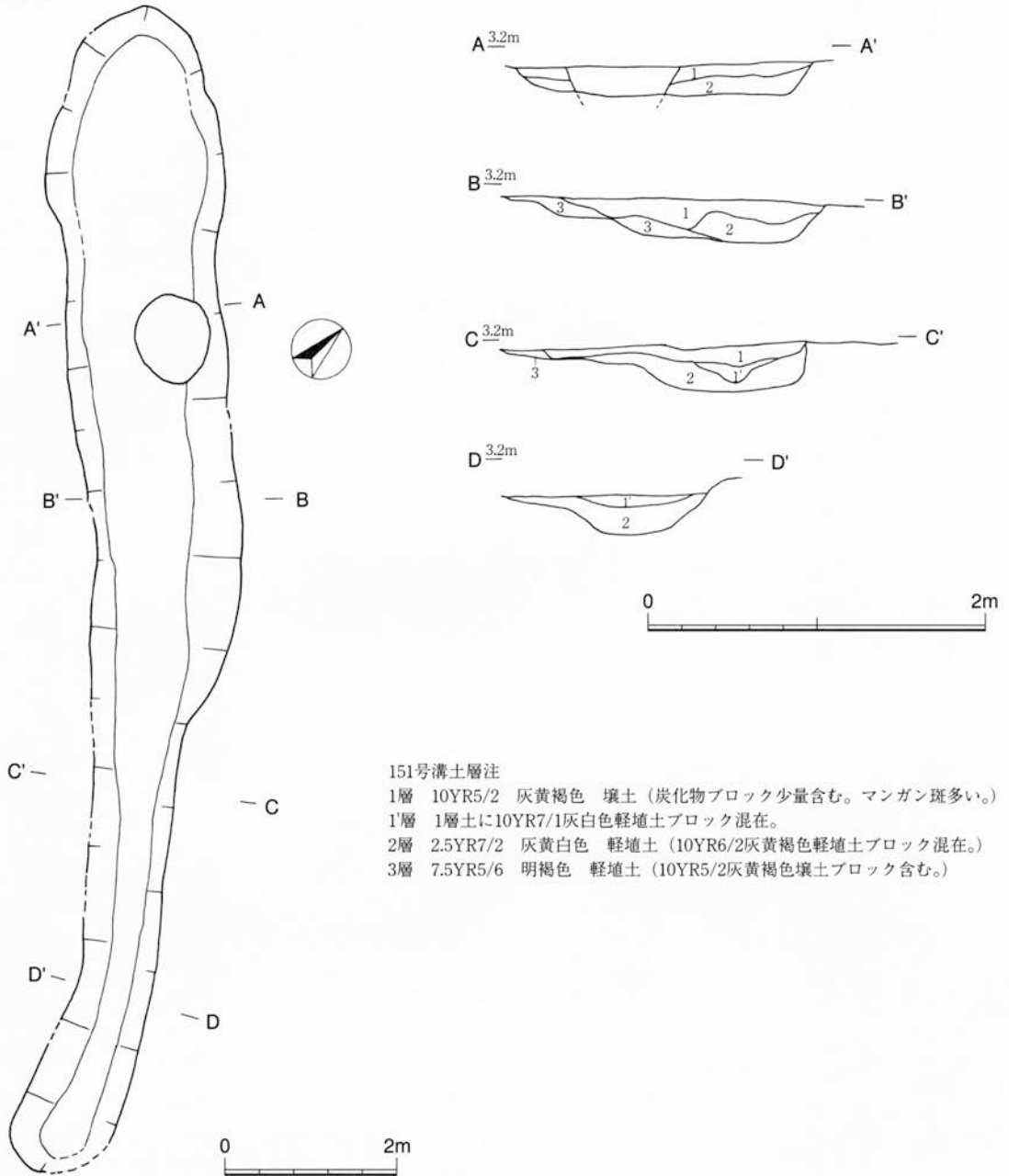


第29図 115 (170) 号溝・157号溝・114 (158) 号溝・113号溝平面図・断面図 (S=1/40)

157号溝遺物出土状況

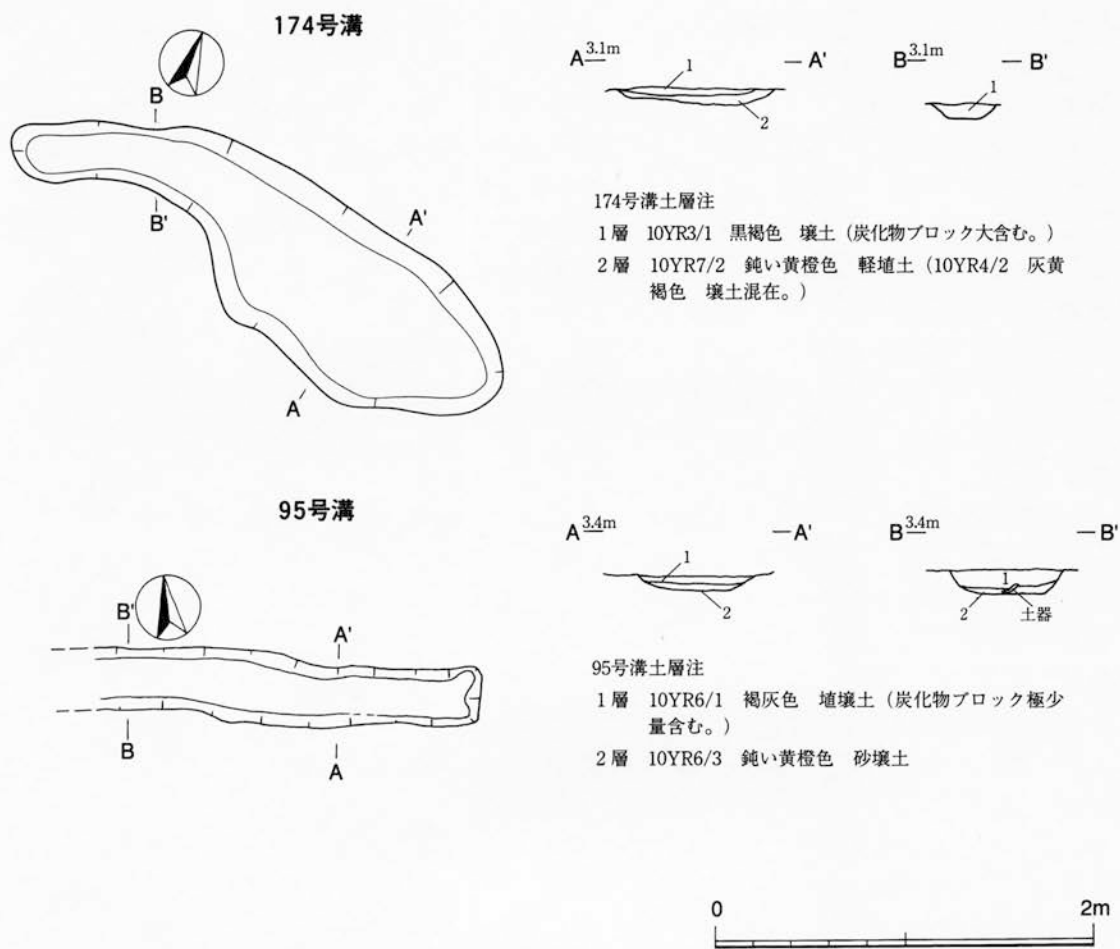


151号溝



第30図 157号溝遺物出土状況 (S=1/20) ・ 151号平面図・断面図 (S=1/80・1/40)





第31図 174号溝・95号溝平面図・断面図（S=1/40）

る。昭和62年度調査区C区では、集落の存在も指摘されているが、前述のとおり、38号溝の土器廃棄状況の検討から、市調査区検出遺構・遺物は旧千代マエダ遺跡側との関係性の方が高いといえる。

古墳時代前期の遺構・遺物は、平成元年度調査区A区のみで確認されている。建物跡は検出されおらず、市調査区検出の墳墓の母体となる集落遺跡ではないと考える。

## 第5節 古墳時代後期後半から古代

### 第1項 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は65棟検出している。古代末期～中世初頭の建物については、年代比定に出越編年を主に使用したこともあり、非ロクロ土師器出現以前を古代末期と捉え、この節に含めて述べることにする。掘立柱建物跡の主体は側柱建物であり、総柱建物は10棟のみである。そのなかで、「田」の字型の倉庫的プランをもつものは3棟のみである。比較的大型の建物ほど規格性が高い傾向にある。調査区は、前述の通り攪乱を受けた箇所も多く、一部柱穴が欠けた建物もある。特に、県道北側調査区の柱穴は総じて浅く、建物認定には疑問点も残る。但し、古代後半期以降の包含層遺物が北側調査区でも多く出土する状況や、県道南側調査区の建物の柱穴が、一部の建物を除き極端に深さに差が出る状況でもないため、ここでは建物跡として報告する。庇付建物は、2棟検出されているが、建物の大きさなどに問題があり、間仕切りや、束柱のような別の解釈も考える必要がある。また、検出されたピット数を考えると、全てを抽出できていないと考えられるが、これ以上現状では認識することができ

なかった。以下、個別の掘立柱建物跡の解説を行うが、詳細は掘立柱建物跡寸法表を参照して頂きたい。

#### 37号掘立

北より西方向に主軸を向けた建物で、3×4間の総柱建物である。柱筋は比較的通ってはいるが、桁行の3間目の柱間が、他が比較的均等なのに比べ広がっている。よって、南北それぞれ2×3間、1×3間の建物に分かれる可能性もある。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、49号・50号掘立とほぼ同一主軸であることから、同時期に位置付け可能と考える。

#### 38号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×3間の総柱建物である。梁行の南辺中央部の柱穴は検出できなかったが、柱間寸法は均等である。出土遺物は皆無に近く、時期不祥である。位置が重複する37号掘立よりは先行すると考える。

#### 39号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×?間の小型側柱建物である。北辺が調査区間の繋ぎ部分へ延びる影響から、検出することができなかったが、桁行も2間程度と考えられる。柱間寸法は、梁行・桁行とも140cm程度の均等値を示す。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、切り合い関係から、38号掘立より先行することがいえる。

#### 40号掘立

39号掘立とほぼ同方向に主軸を向けた1×2間の小型側柱建物である。出土遺物は無く、時期不祥であるが、同一主軸関係から、39号掘立と同時期ないし、相前後する時期を想定したい。

#### 41号掘立

主軸を北より西方向に若干向けた?×3間の側柱建物である。東側が調査区外へと延びるため、梁行・桁行方向は確定できていない。仮に桁行きとした西辺は比較的柱筋が通っており、柱間寸法も180cm前後の均等な値を示す。それに対し、梁行は2間分のみを確認しているが、若干の歪みが観察される。出土遺物は土師器食器片が出土している。細片であり時期不祥ではあるが、当遺跡で土師器食器が定量出土してくる10世紀後半以降と考えられる。92号掘立と同一主軸であり、その点からも妥当といえよう。

#### 42号掘立

主軸を北より西方向に若干向けた3×3間の側柱建物であり、北側梁行部分に廂を持つが、建物規模が小さいため、明確に廂と判断できるか若干疑問が残る。柱筋が通った建物ではあるが、南北辺の梁行で、柱間寸法が若干異なる配置をとり、北辺の2間目の間隔が広がっている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、VI-1期頃に比定される27号溝に切られていることから、それ以前と判断でき、ほぼ同一主軸である69号掘立と同時期に位置付けられよう。

#### 43号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×2間の側柱建物である。梁行・桁行とも片側が広めの柱配置をとる形態をとる。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である68号掘立と同時期が推察される。

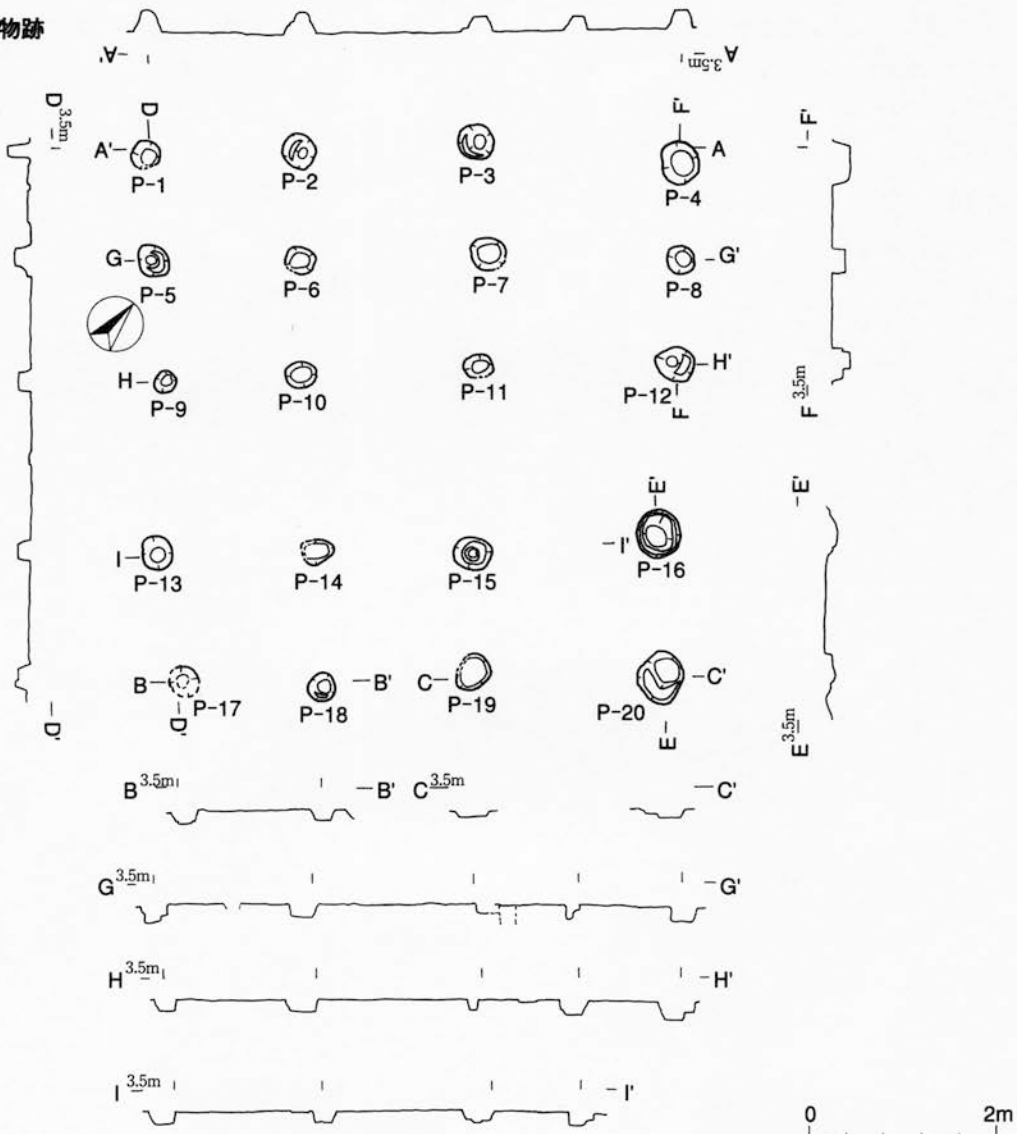
#### 44号掘立

主軸を北より西方向に若干向けた?×3間の総柱建物である。東側が調査区外へと延びるため、梁行方向は確定できていない。桁行方向では、南側3間目の柱間寸法が狭い間隔となっているが、柱筋の通った建物である梁行は確認部分では均質な柱間寸法を測る。出土遺物は無く、時期不祥であるが、総柱建物の形態と、92号掘立と同一主軸であることから、ほぼ同時期に位置付けられると考えられる。

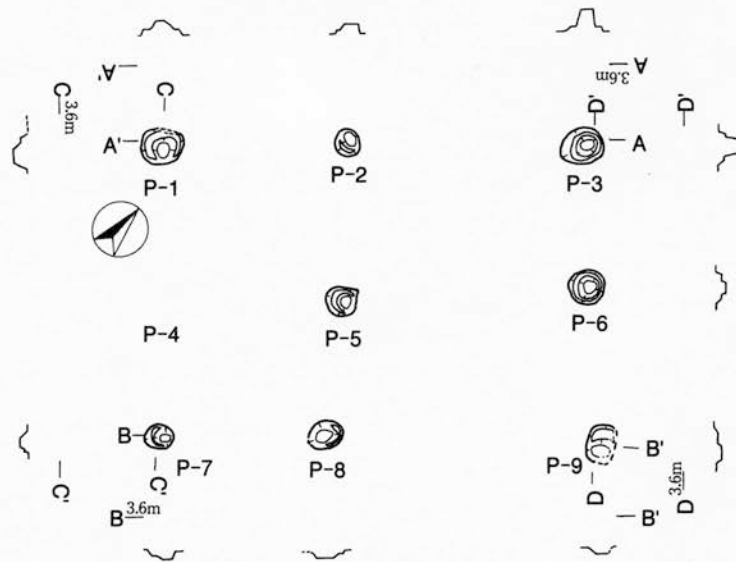
#### 45号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×4間以上の総柱建物である。ただし、建物の北西端部を検出したのみで、大部分が調査区外に位置するため、総柱建物として不確定な部分を残す。桁行2間目の内側

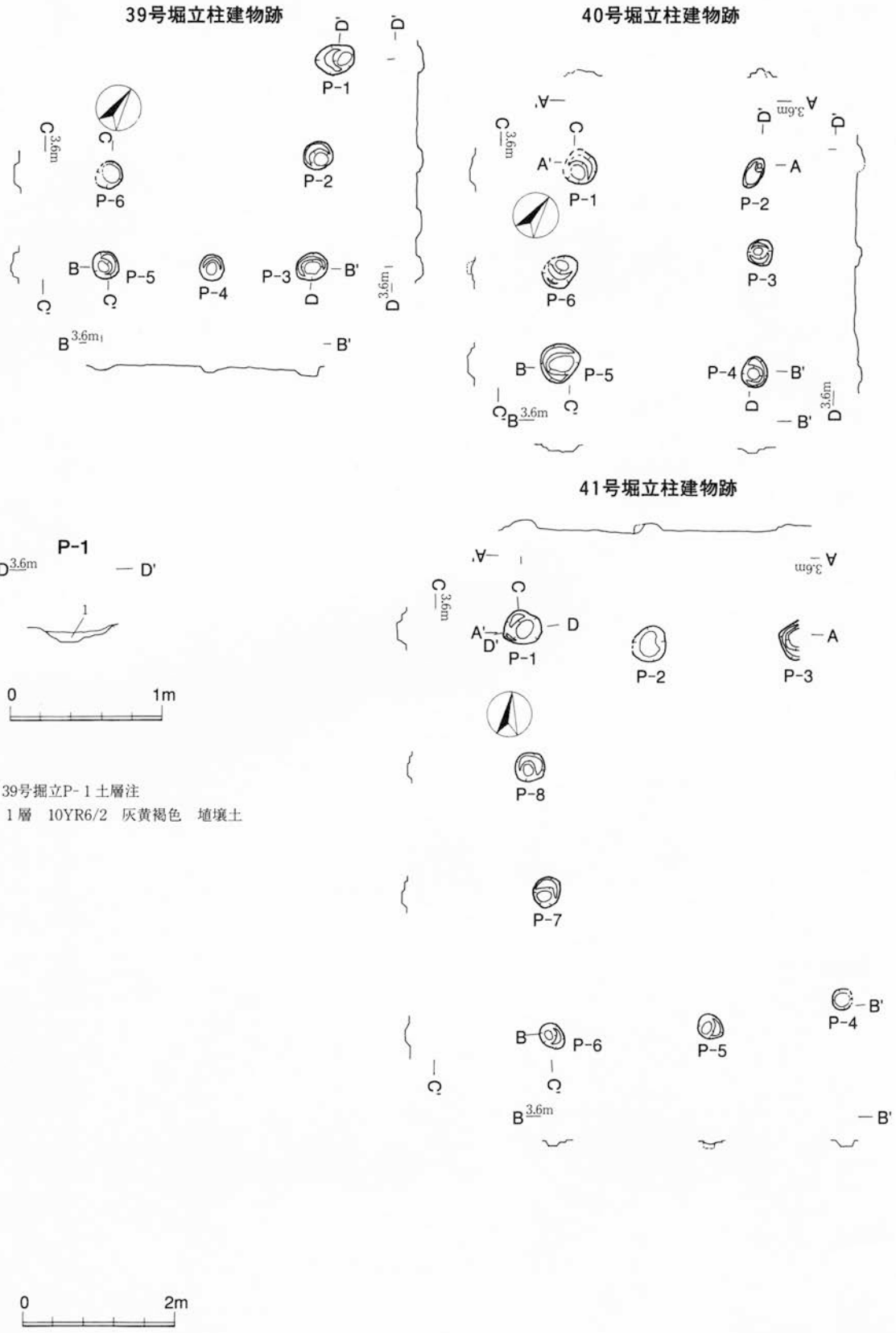
37号堀立柱建物跡



38号堀立柱建物跡

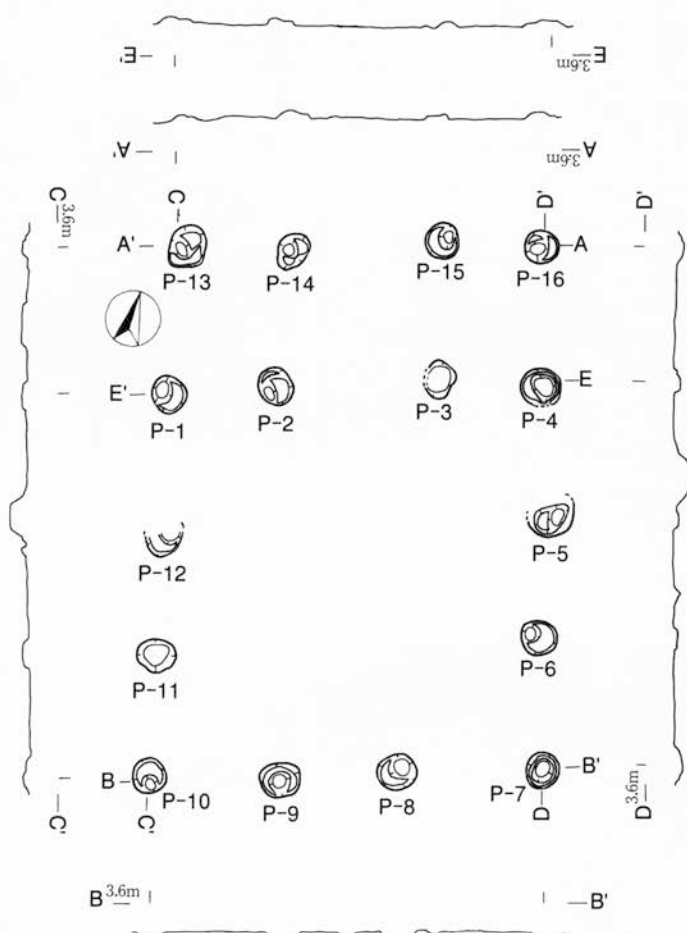


第32图 37号・38号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

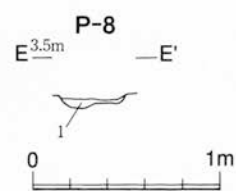
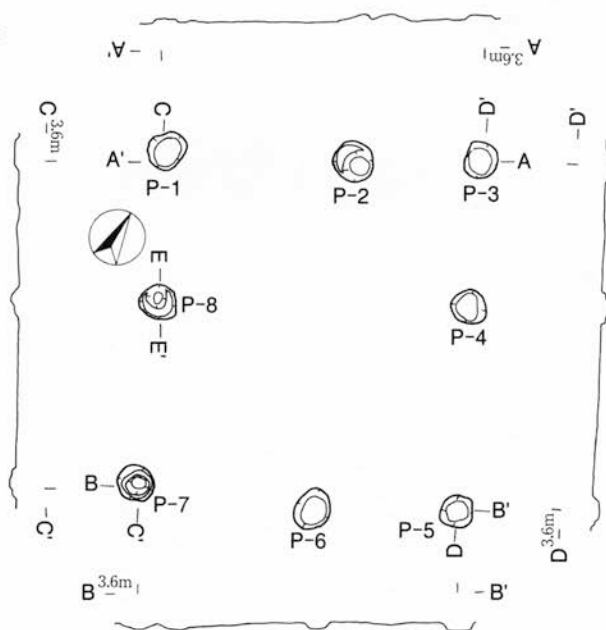


第33図 39号・40号・41号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

42号掘立柱建物跡



43号掘立柱建物跡

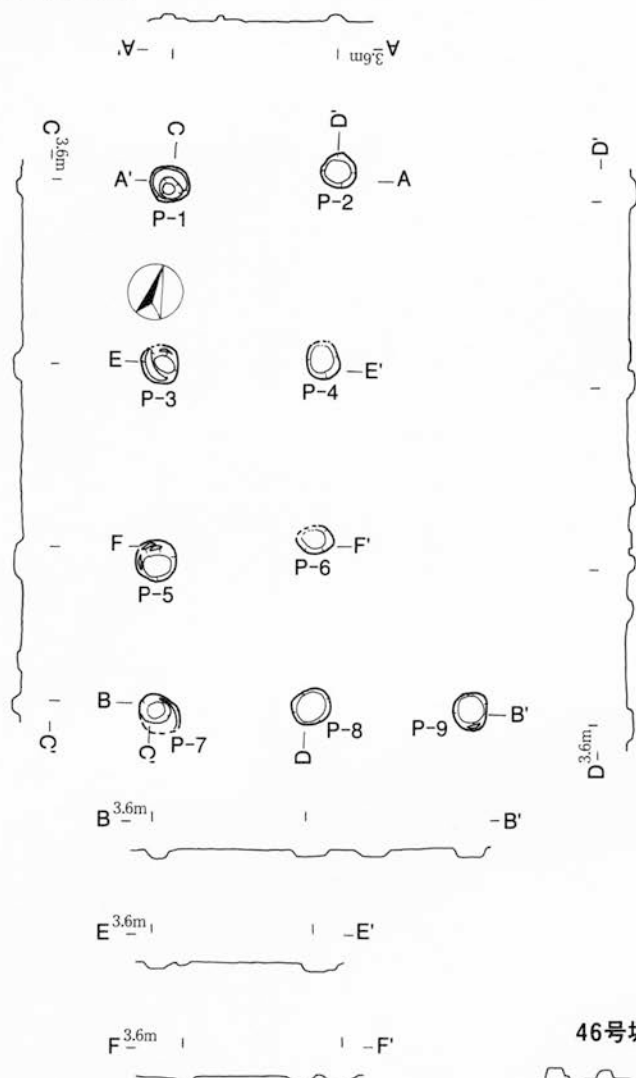


43号掘立P-8土層注  
1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土

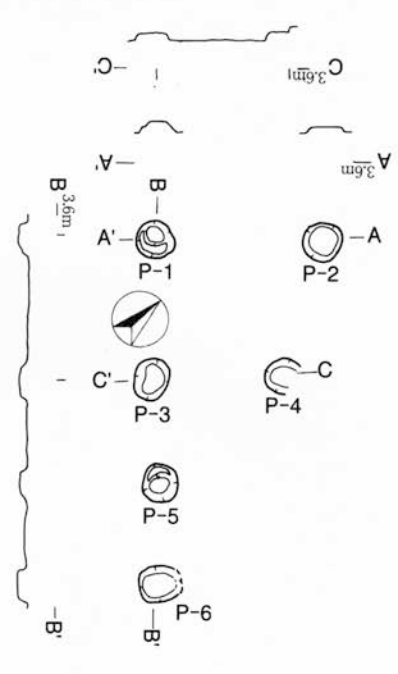


第34图 42号・43号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

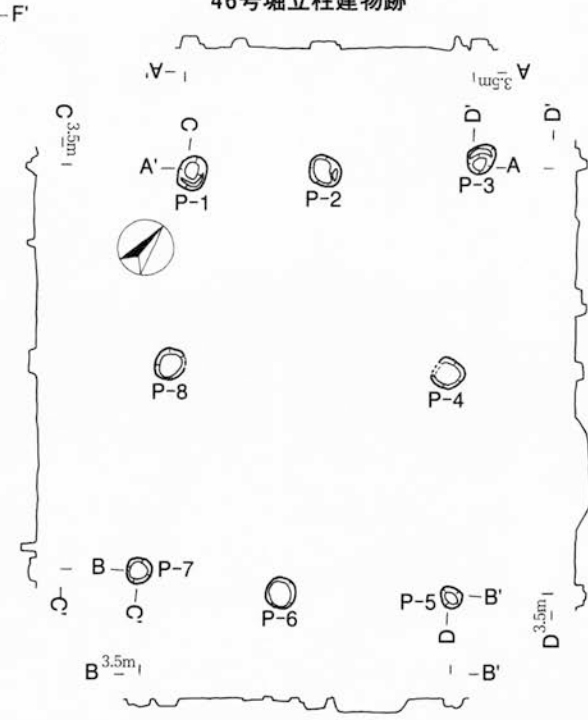
44号掘立柱建物跡



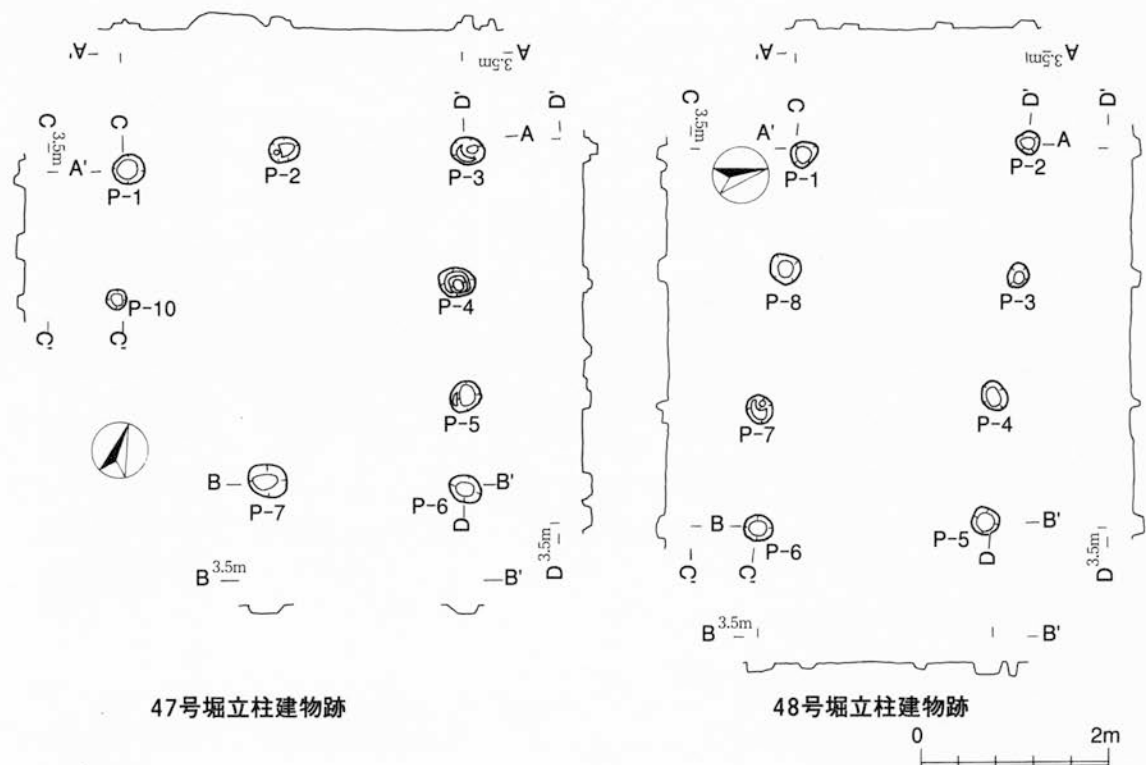
45号掘立柱建物跡



46号掘立柱建物跡



第35图 44号・45号・46号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)



第36図 47号・48号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

の柱が若干西側へ外れることからいえる。柱間寸法は、北側1間分が広く、他がやや狭い間隔配置となっている。出土遺物は無く、時期不祥であるが、すぐ西隣にほぼ同軸・同規模と考えられる50号掘立があり、同時期に位置付け可能と判断している。

#### 46号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×2間の側柱建物である。桁行の柱間寸法が広い建物である。46号～48号掘立は、径が小さめのピットが主体であるが、これは県道北側調査区では西側へ行くほど攪乱を受けた度合いが強くなることの影響を受けたものと考えられる。梁行北辺の東隅柱穴がやや外側に位置することから、若干歪んだプランとなる。出土遺物は無く、時期不祥である。

#### 47号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×3間の側柱建物である。攪乱により南西隅部の柱穴2つが失われているが、東側桁行においてしっかりとした柱列が検出されたため、建物跡と認定している。梁行中央の柱間穴は、やや西寄りに位置し、桁行南側1間分がやや狭い柱間寸法となっている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である68号掘立と同時期が推察される。

#### 48号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、1×3間の側柱建物である。比較的均質な柱間寸法をとる建物ではあるが、全体にやや歪んでいる。よって、建物認定にはやや疑問が残る。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、96号建物とほぼ同一軸の建物グループと考えられ、同時期と推察される。

#### 49号掘立

北より西方向に主軸を向けた3×4間の総柱建物である。梁行の南辺北東隅部から2番目の柱穴は確認できなかった。桁行の柱筋は比較的通るが、柱間寸法が不均質なため、梁行方向の内部の柱列配

置は歪む。ただし、北から2列目を例外として、柱筋自体は通っている。梁行の柱間寸法において、西側1間分が他に比べ間隔が開いているため、廂状を呈すことも考えられる。出土遺物は無く、時期不祥であるが、すぐ東隣にはほぼ同軸・同規模と考えられる50号掘立があり、同時期に位置付け可能と判断している。

#### 50号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×5間の総柱建物である。桁行の中央柱筋に歪みが認められるが、それ以外の柱筋は、桁行・梁行ともしっかり通っている。柱穴の大きさは比較的揃っており、柱間寸法も両側の桁行で歪みは見られない。西側にもう1間分の柱列が認められるが、西辺から280cmと大きく離れている。深い廂とも考えられるが、梁行方向の柱筋に関して、ややズレも認められることから、身舎部分と切り離して捉えことが妥当であると考えられる。その場合、隣接する49号掘立との境に設置された塀等の解釈が考えられる。出土遺物は、内面が黒色処理された土師器小皿と、土師器柱状高台小皿が出土している。出越編年におけるⅣ-1～2期頃と考えられる。

#### 51号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた3×3間の側柱建物である。比較的柱筋の通った建物で、正方形に近い形態をとる。梁行の中央2本の柱穴は隅柱よりも中央に寄った配置である。出土遺物は、須恵器甕胴部破片と土師器食器片が出土しているが、細片であり時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である69号掘立と同時期と推察される。

#### 52号掘立

51号建物と同様に、北より西方向に若干主軸を向けた2×4間の側柱建物である。柱筋の通った建物である。桁行の柱間寸法が比較的均等であるのに対し、梁行では中央の柱穴が西側に寄った配置をとっている。出土遺物は、須恵器坏破片と土師器片が出土しているが、細片であり時期不祥である。ただし、隣接する51号掘立と同様に、ほぼ同一主軸である69号掘立と同時期と推察される。梁行の間数は異なるが、69号掘立とは形態も類似しており、一回り小さくしたような建物である。

#### 53号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×3間の側柱建物である。梁行の北西隅部の柱穴が、やや外側に位置していることから、若干形態に歪みが生じている。桁行は、西側1間分の柱間寸法が広くとられている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸である87号掘立と同時期と推察される。

#### 54号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた2×?間の側柱建物である。南側が調査区外へと延びるため、桁行方向は確定できていない。柱穴は、中世遺構の重複の影響を受けている。全体的に柱間寸法を広く取る傾向があり、当遺跡の中では大型の部類に入る建物と予想される。西辺側にもう1間分柱列があり、梁行柱間寸法が120cmと身舎部分に比して短く、柱穴も一回り小さいため、浅い廂がつくものと予想される。出土遺物は、内面が黒色処理された土師器碗Bが出土している。出越編年におけるⅢ期頃と考えられる。

#### 55号掘立

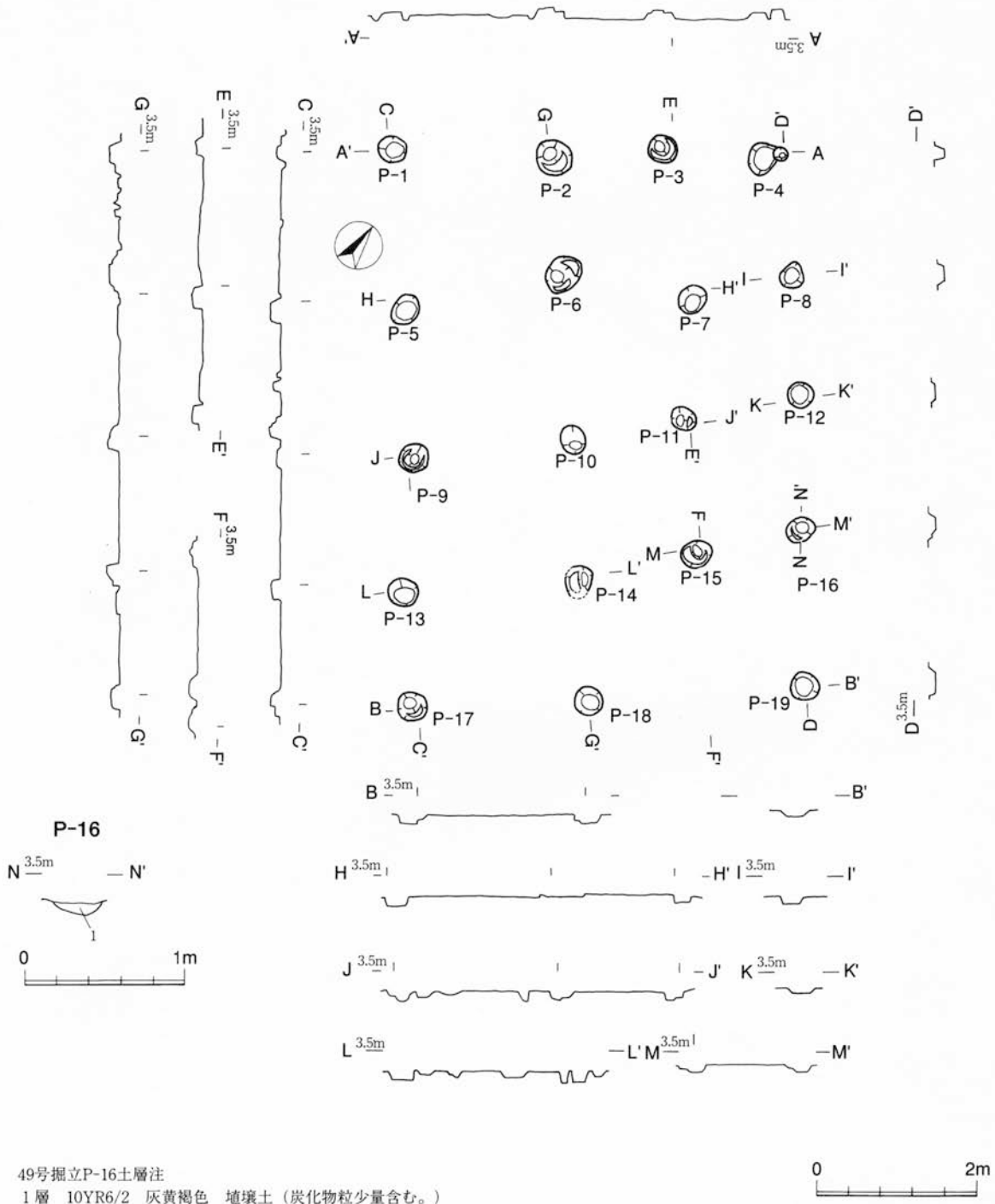
北より西方向に主軸を向けた2×?間の側柱建物である。南側大部分が調査区外へと延びるため、桁行方向は確定できていない。主軸方位は異なるが、建物形態的には、52号掘立と類似している。出土遺物は土師器食器片が出土しているが、細片であり時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である68号掘立と同時期が推察される。

#### 56号掘立

北より西方向に主軸を向けた3×?間の側柱建物である。北側大部分が調査区外へと延びるため、桁行方向は確定できていない。1m弱の大型の掘り方を持つ建物で、柱筋の良く通った建物である。柱間寸法も梁行の中央2本がやや近い以外は均等であり、大型の建物が予想される。出土遺物は、須恵器坏と土師器食器が出土している。細片であり詳細な時期は判定できないが、坏の重ね焼き痕から、

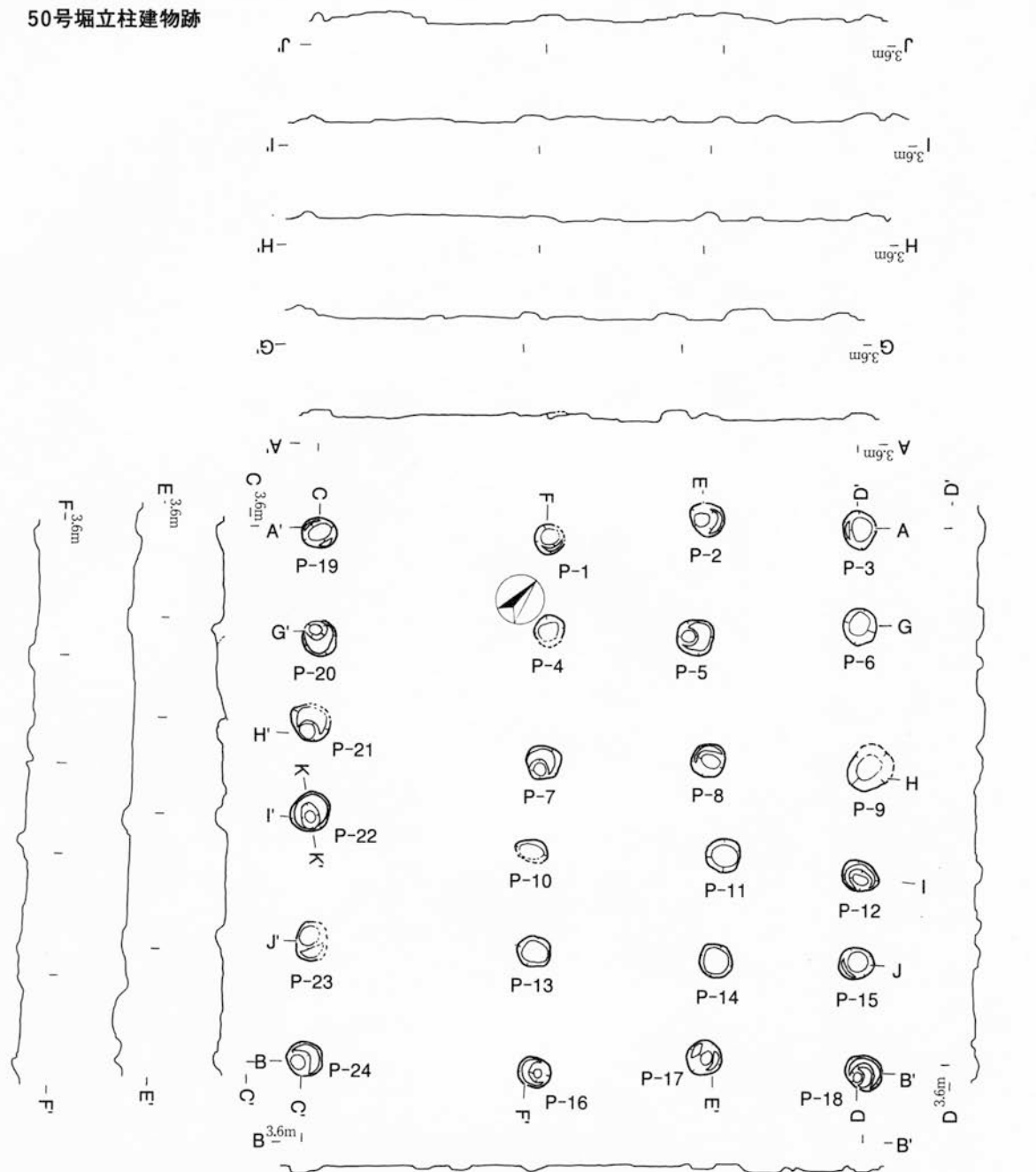


49号掘立柱建物跡



第37图 49号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

50号堀立柱建物跡



P-22  
K—<sup>3.6m</sup>—K'



0 1m

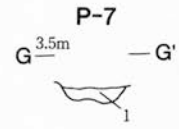
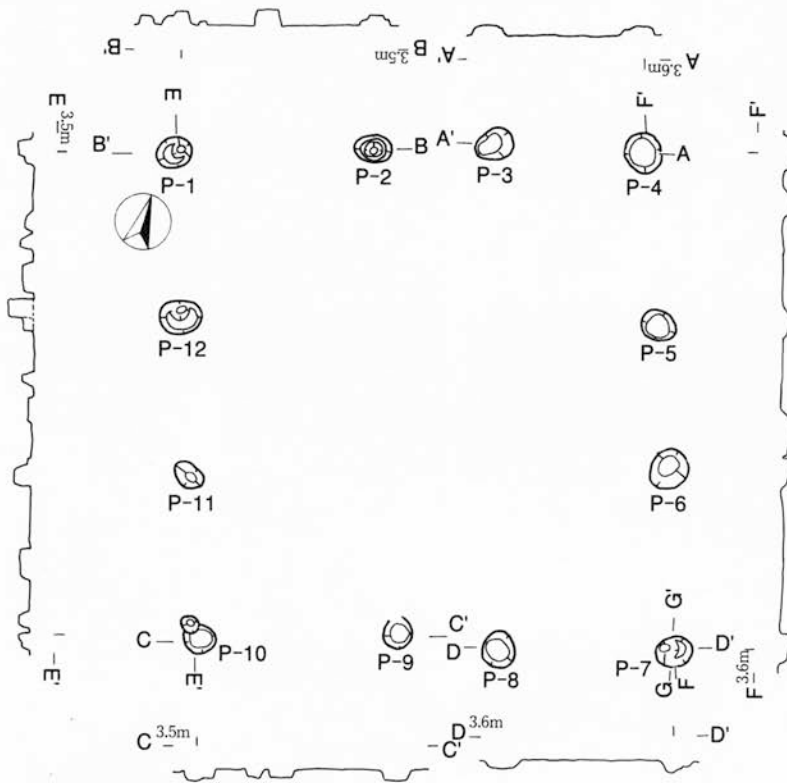
50号掘立P-22土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土 (炭化物含む。)
- 2層 明褐色粘土ブロック主体の層 (掘り方埋土)

0 2m

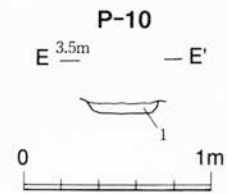
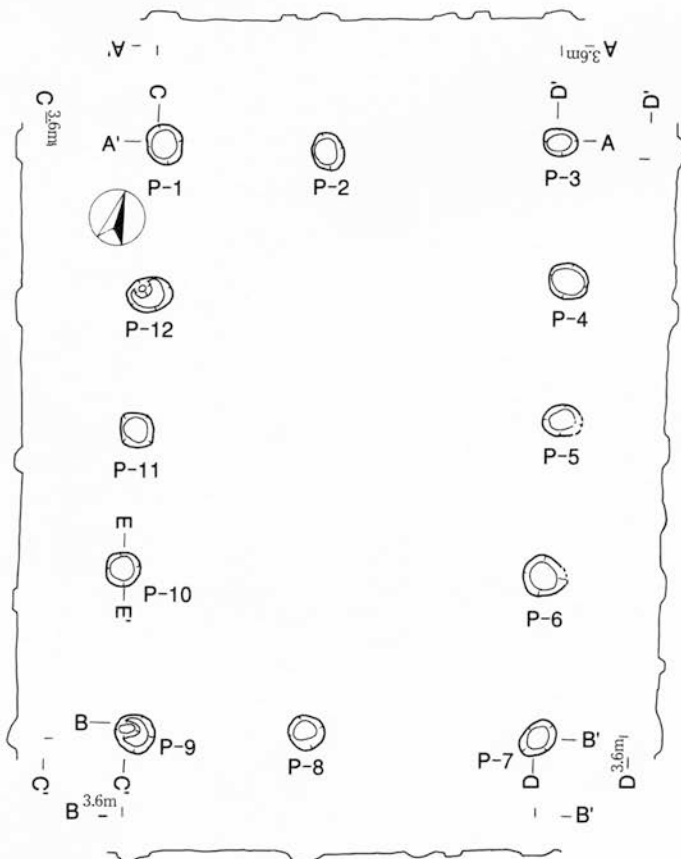
第38図 50号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

51号堀立柱建物跡

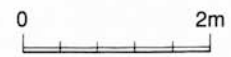


51号掘立P-7土層注  
1層 10YR6/2 灰黄褐色 埴壤土

52号掘立柱建物跡

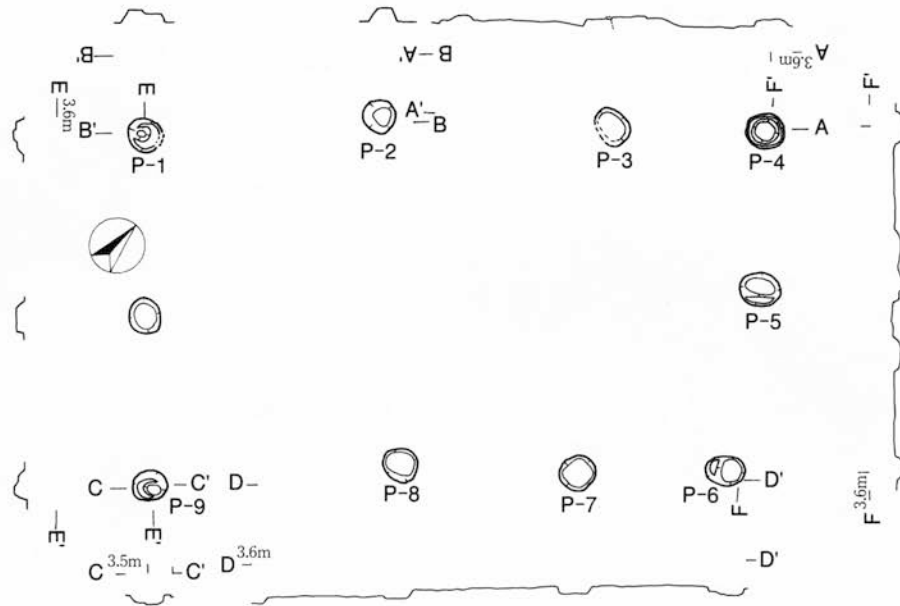


52号掘立P-10土層注  
1層 10YR6/2 灰黄褐色  
埴壤土と10YR5/2 灰黄褐色  
埴壤土の混在層

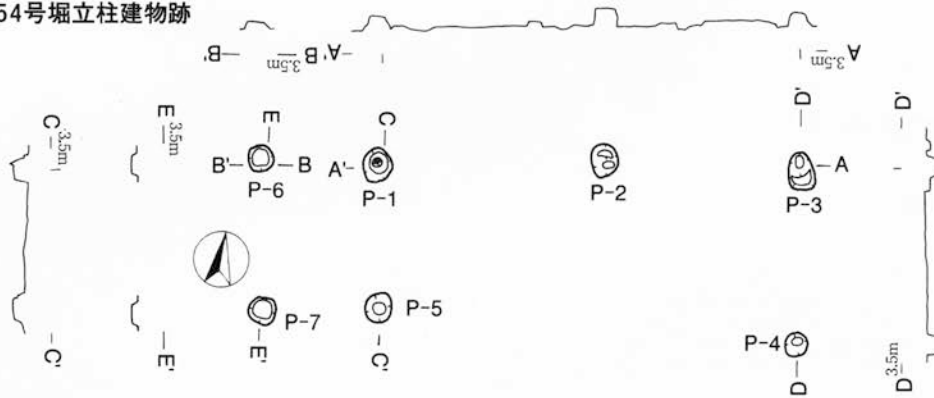


第39図 51号・52号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

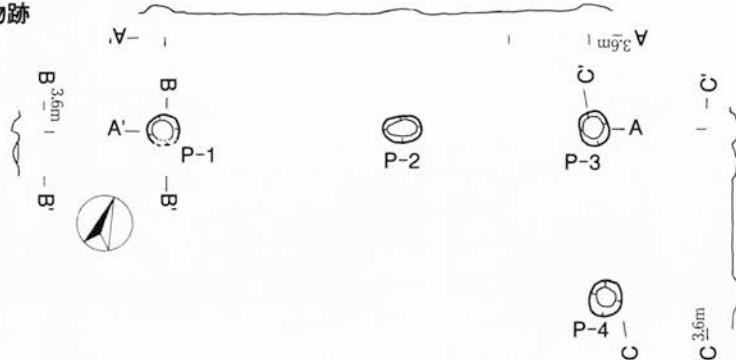
53号掘立柱建物跡



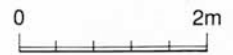
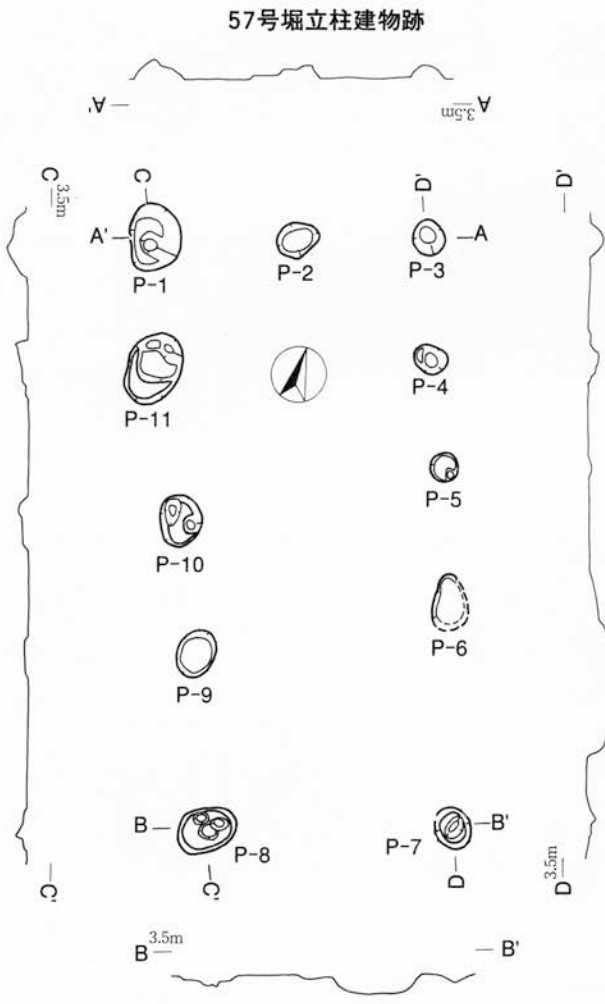
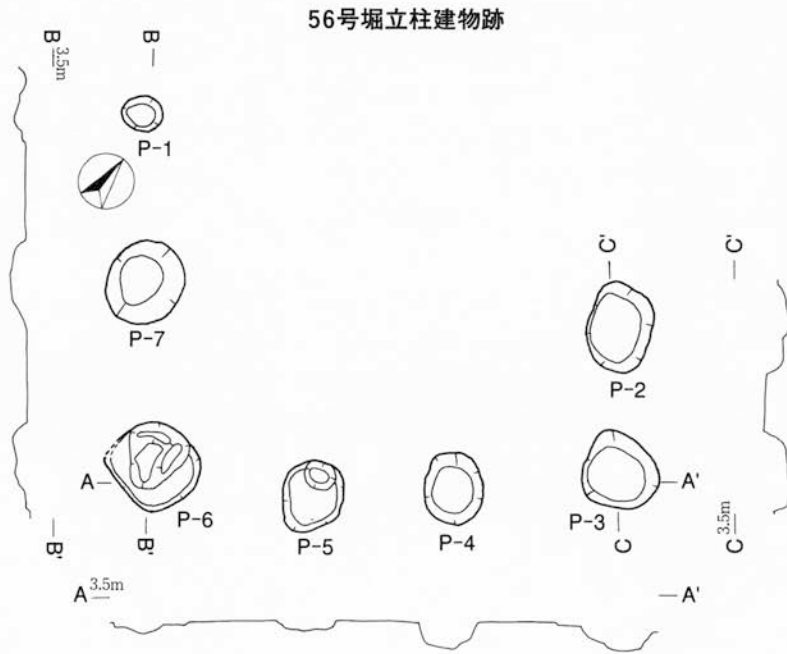
54号掘立柱建物跡



55号掘立柱建物跡



第40图 53号・54号・55号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)



第41图 56号·57号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

田嶋編年におけるⅣ期頃以降が考えられる。また、P-5からは骨が出土している。

#### 57号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた2×4間の側柱建物である。80cm程度の大型の掘り方を持つが、それは南側の桁行に偏る。東側は小さな柱穴が並び、柱穴にやや不揃いの観がある。柱間寸法は南端の桁行が広い。南側梁行の中央柱穴が攪乱により失われており、梁行幅もやや狭く歪みが生じている。出土遺物は、土師器小皿が出土している。出越編年におけるⅣ-2・3期頃と考えられる。

#### 58号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、3×5間の側柱建物である。柱間寸法が短く、柱数が多くなるタイプの建物である。柱筋の通りもやや悪く、歪みがある。ただし、桁行の柱間寸法は、100cm前後に保たれており、均等である。南西隅部2箇所柱穴が攪乱により失われている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸である92号掘立と同時期と推察される。

#### 59号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、4×?間の側柱建物である。この建物も58号建物と同様に、柱間寸法が短く、柱数が多くなるタイプの建物である。柱筋の通りは良いが、西側梁行を含む南西隅部が失われている。東側梁行の南隅部は、11号溝によって切られている。柱間寸法は梁行90cm前後、桁行110cm前後の値に集中し、統一されている。出土遺物は土師器食器片が出土しているが、細片であり時期不祥である。前述の11号溝との切り合い関係から、田嶋編年Ⅳ-2期以前の年代が考えられる。

#### 60号掘立

北より東方向に若干主軸を向けた3×4間の側柱建物である。梁行北側の西から2本目の柱穴は検出されなかった。柱筋にはやや歪みが生じている。桁行の柱間寸法は、比較的均等である。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸である71号掘立と同時期と推察される。

#### 61号掘立

真北に主軸をとる2×3間の側柱建物である。1m強の大型の掘り方を持つ建物で、柱筋の良く通っており、柱間寸法も均等な建物である。攪乱により東側桁行の北より2本目の柱穴が失われている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、真北付近の主軸をとる建物は当遺跡では特徴的であることから、同一主軸である80号～82号掘立の一群と同時期であると推察される。

#### 62号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた3×?間の側柱建物である。建物南端部分は攪乱により失われている。梁行の柱間寸法は比較的均等だが、梁行ではやや不揃いの傾向がある。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸である92号掘立と同時期と推察される。

#### 63号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた3×3間の側柱建物である。梁行の南1間分がやや狭い配置となっている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸である92号掘立と同時期と推察される。

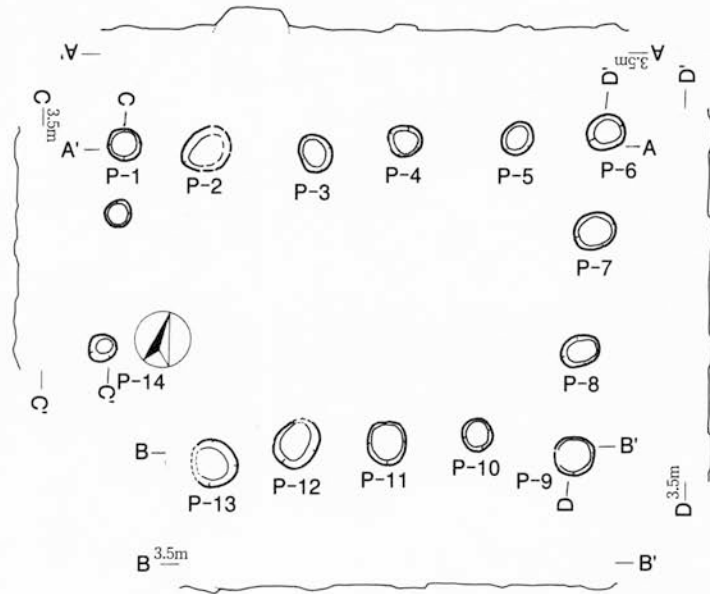
#### 64号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、3×3間の側柱建物である。ほぼ正方形に近い形態をとる建物であり、柱間寸法もほぼ均等な配置をとっている。柱筋の通りも良い。出土遺物は須恵器食器片が出土しており、古代前半期に該当することは判断できる。よって、ほぼ同一主軸である56号掘立と同時期が推察される。

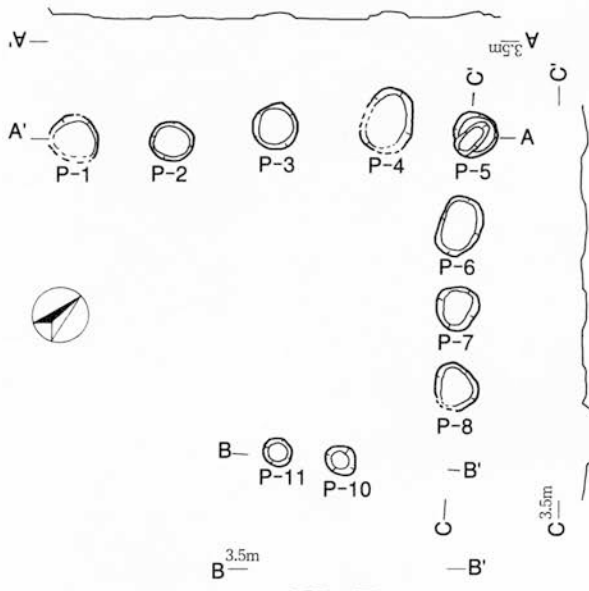
#### 65号掘立

北より西方向に主軸を向けた4×4間の側柱建物である。ほぼ正方形に近いプランをもった建物である。概ね柱筋は通っているが、南東隅部が若干歪む。また、桁行きの柱配置が、東側が4間であるのに対して、西側が5間と変則的になっている。出土遺物は無く、時期不祥であるが、64号掘立を切っていることから、それ以降の建物であることがいえる。同一主軸である68号掘立と同時期が推察さ

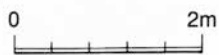
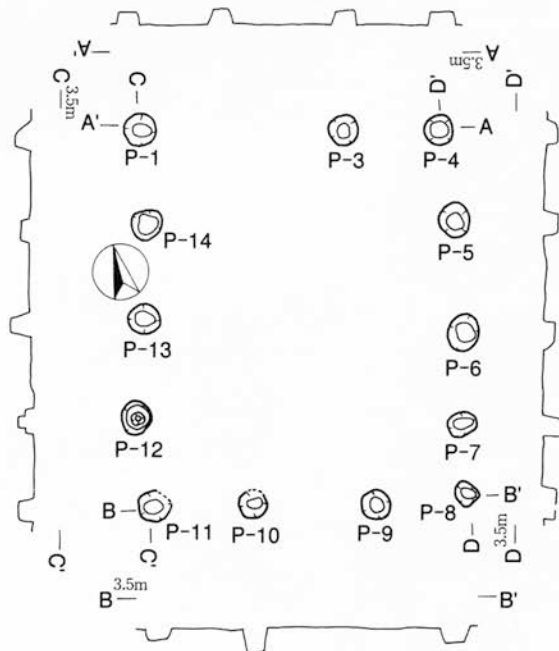
58号堀立柱建物跡



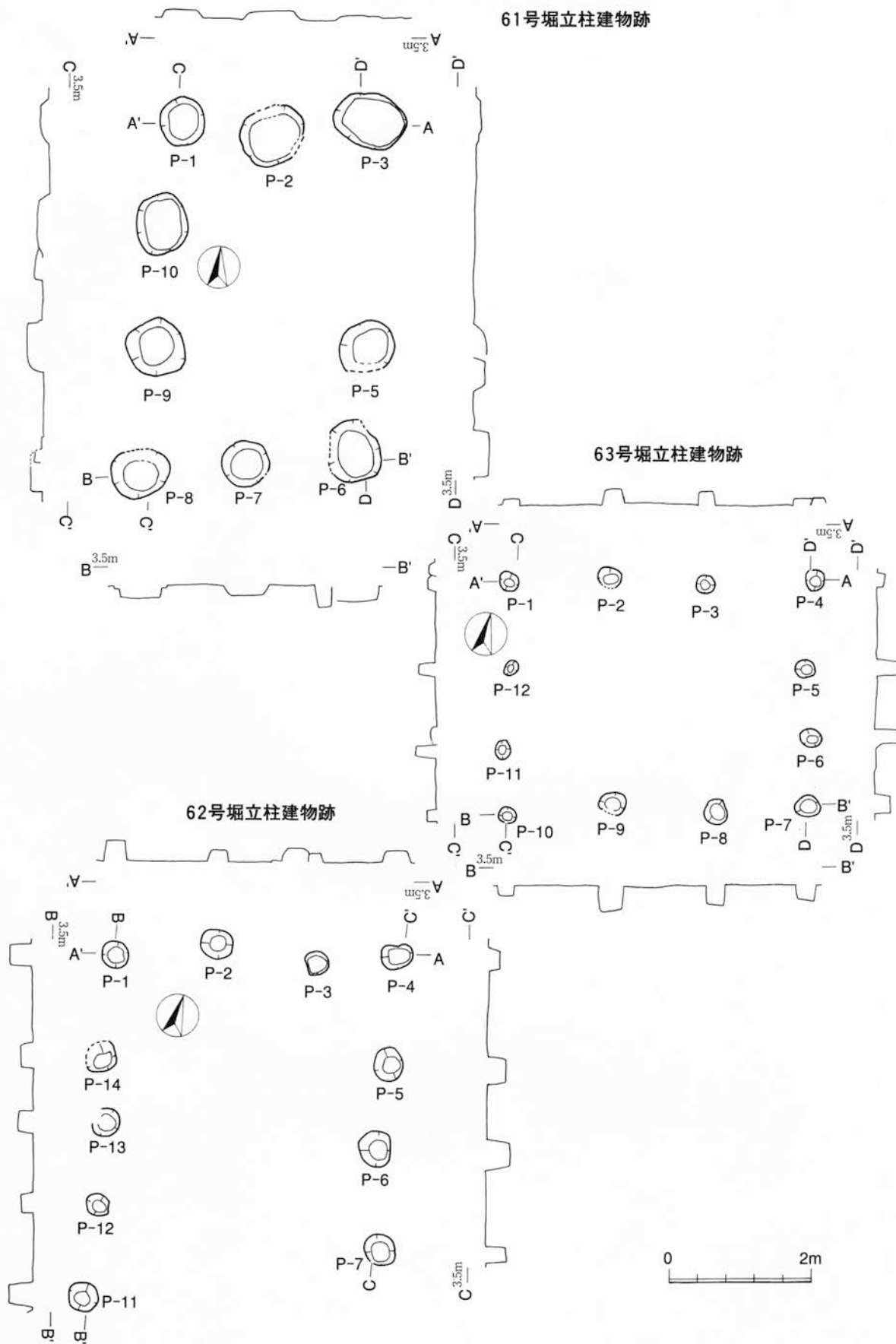
59号堀立柱建物跡



60号堀立柱建物跡



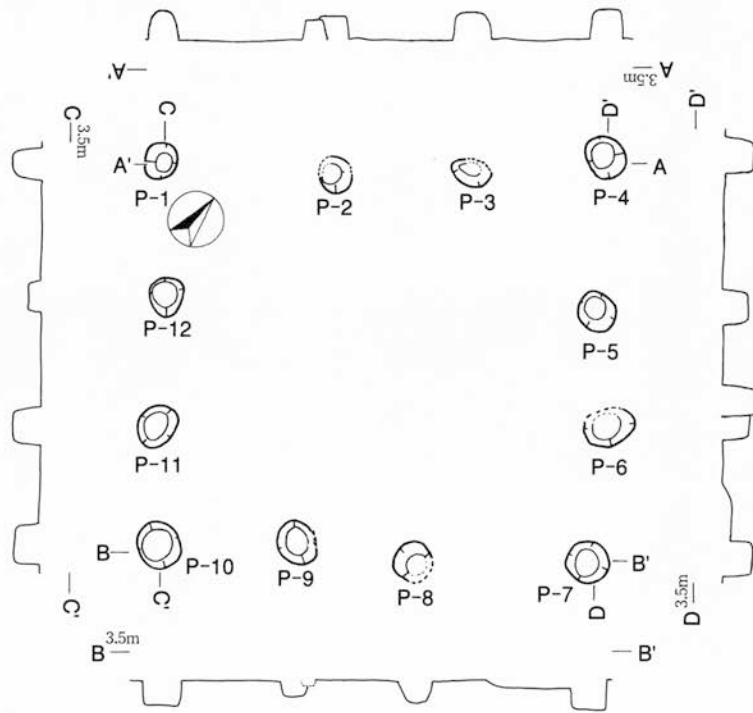
第42图 58・59・60号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)



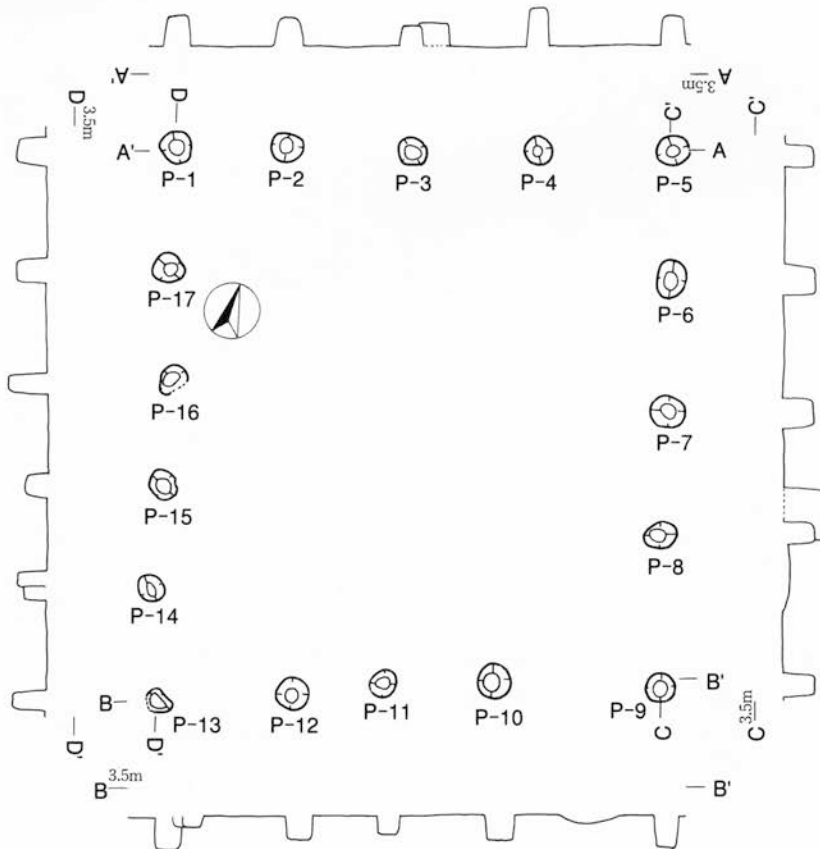
第43图 61·62·63号掘立柱建物跡平面图·断面图 (S=1/80)



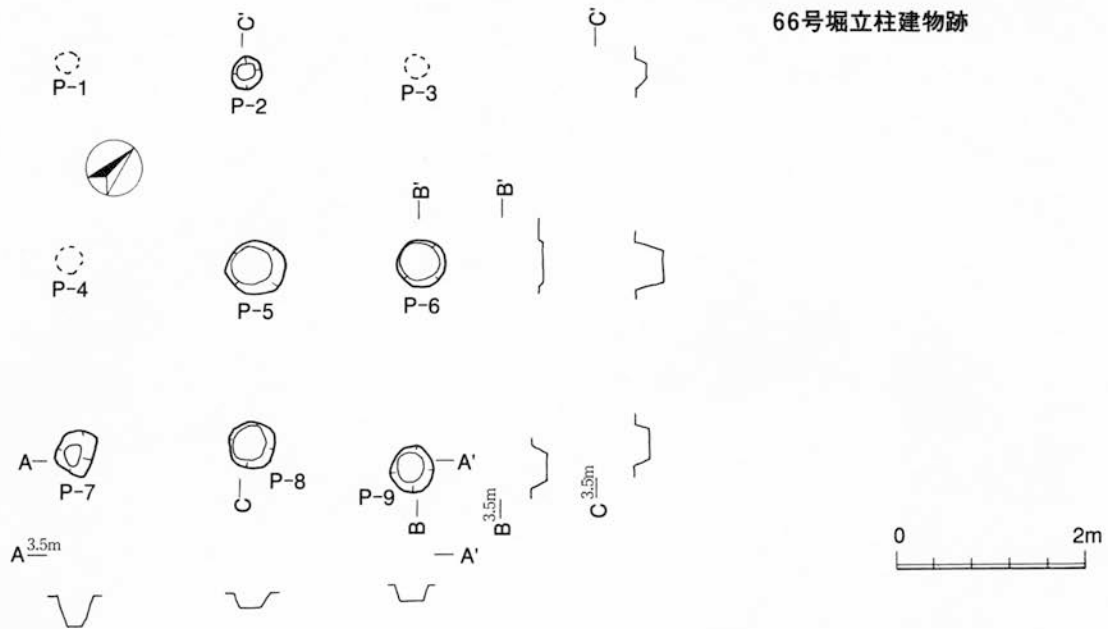
64号堀立柱建物跡



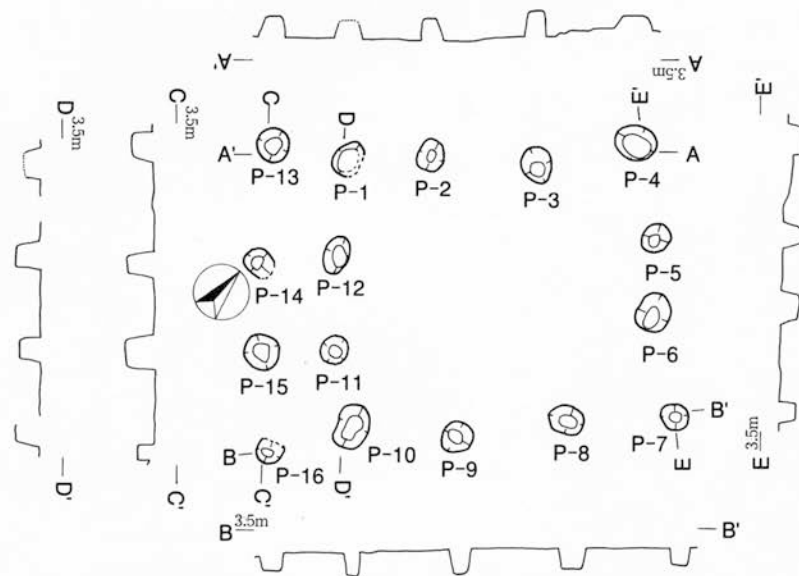
65号堀立柱建物跡



第44图 64・65号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)



66号掘立柱建物跡



67号掘立柱建物跡

第45図 66・67号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

れる。

### 66号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×2間の総柱建物である。調査区の北西端部に位置するため、攪乱等の影響により、2/3の柱穴しか検出できなかった。柱間寸法が均等であり、比較的大き目の掘り方を持つことから、「田」の字プランの倉庫的な建物と推定している。ただし、南西方向には伸びる可能性はある。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸である64号掘立と同時期が推察される。

### 67号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、3×3間の側柱建物である。柱間寸法は比較的均等だが、東側梁行の柱筋が歪んでいる。小型の建物である点で疑問がのこるが、西側に廂状の1間が付設されている。出土遺物は無く、時期不祥であるが、13号溝を切っていることから、それ以降の建

物であることがいえる。同一主軸である91号掘立と同時期が推察される。

#### 68号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×2間の総柱建物である。比較的大き目の掘り方を持ち、「田」の字プランの倉庫的な建物と考えられる。柱間配置は、梁行において、中央の柱が西側によった配置をとる。また、桁行の南東隅部の柱が内側に入り込んでいるため、歪みが生じている。出土遺物は無く、時期不祥であるが、柱穴の切り合いから69号建物より前段階に位置付け可能である。

#### 69号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた3×4間の側柱建物であり、当遺跡では大型の部類に入る。柱穴は小さめのものが主だが、柱筋の通った建物である。柱間寸法は、柱間寸法も梁行の中央2本がやや近い配置をとる。梁行は、南側2間分がやや狭い設定である。出土遺物は、須恵器坏Bが出土している。田嶋編年におけるⅣ-2期～Ⅴ-1期頃の範疇に比定可能である。

#### 70号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた1×1間の小型側柱建物である。69号掘立に近接し、同一出軸であることから、付属小屋的な性格を考えている。ただし、1×1間であることや、近接し過ぎていることなど疑問点も残る。

#### 71号掘立

北より東方向に若干主軸を向けた3×3間?の側柱建物である。ただし、西側半分以上が調査区外にあるため、横向き配置で西側にさらに延びた建物である可能性がある。柱穴は略方形の比較的大き目のものであり、柱間寸法も梁行・桁行とも均等配置されている。柱筋も良く通った、規格性の高い建物である。出土遺物は、須恵器甕の胴部破片が出土している。古代前期に位置付けられると判断されるが、詳細な時期は不祥である。同一主軸では96号掘立があり、同時期と推察される。また、横板組の井戸である1号井戸と同一主軸でもあり、位置も近接していることから、両者の関係性が指摘されよう。

#### 72号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、4?×?間の側柱建物である。東側は調査区外へ延びており、また、西側も中世遺構の重複を受けるため柱穴が一部失われており、詳細は不明である。柱間寸法が短く、柱数が多くなるタイプの建物であるといえ、柱間寸法は均等である。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、主軸方位からは、92号掘立と同時期と推察されるが、疑問は残る。

#### 73号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2?×?間の側柱建物である。72号掘立と同様、東側は調査区外へ延びており、また、西側も中世遺構の重複を受けるため柱穴が一部失われており、詳細は不明である。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、主軸方位からは、91号掘立と同時期と推察されるが、疑問は残る。

#### 74号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×?間の側柱建物である。桁行に比べ梁行が狭い細長タイプの建物と推察されるが、東側が調査区外に延びるため、桁行方向は確定できない。柱間寸法は梁行方向で、北側がやや狭い配置となる。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸である87号掘立と同時期と推察される。

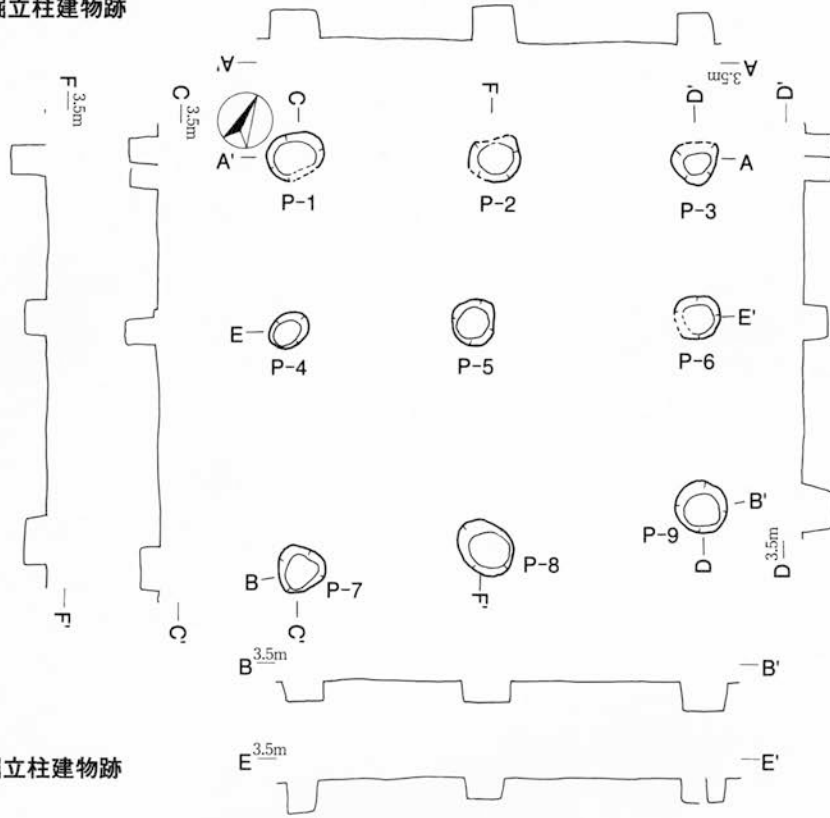
#### 75号掘立

北より西方向に主軸を向けた側柱建物と推察されるが、建物の大部分が、中世溝によって切られているため詳細は不明である。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、近接する74号掘立とはほぼ同一主軸であり、同時期のものではないかと考える。

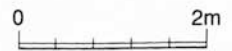
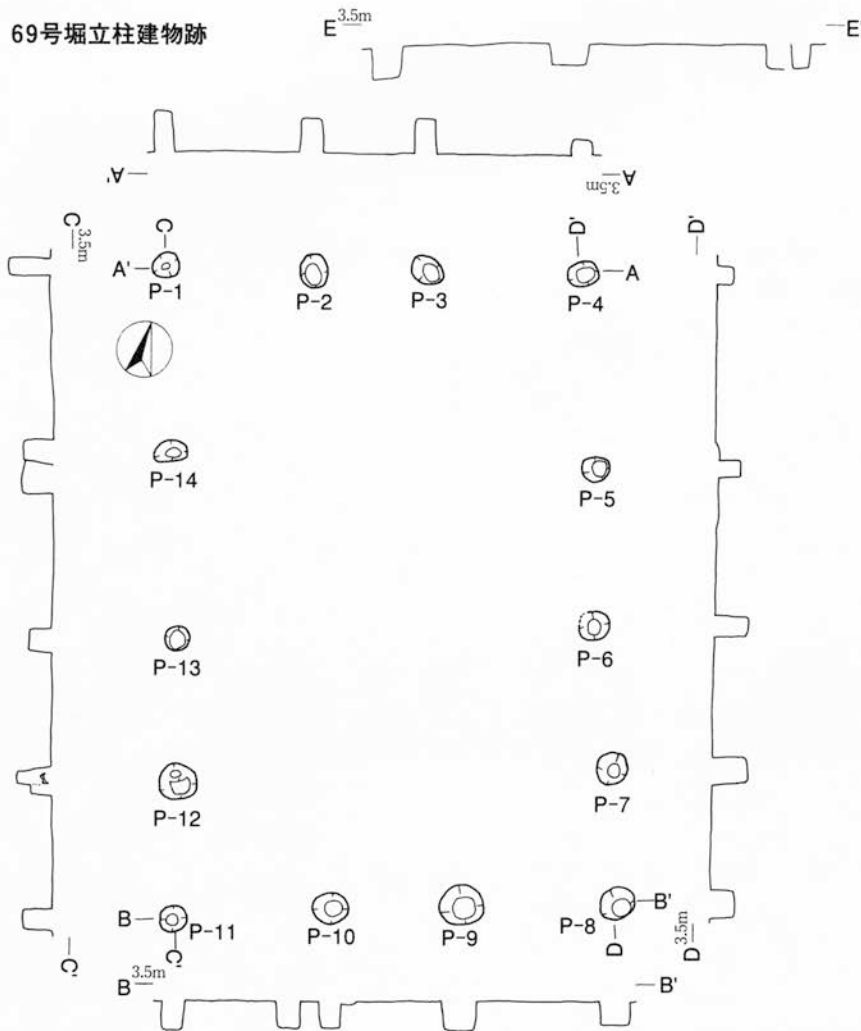
#### 76号掘立

北より西方向に主軸を向けた側柱建物と推察されるが、建物の大部分が、攪乱等により失われているため詳細は不明である。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、近接する74号・75号掘立とは

68号掘立柱建物跡

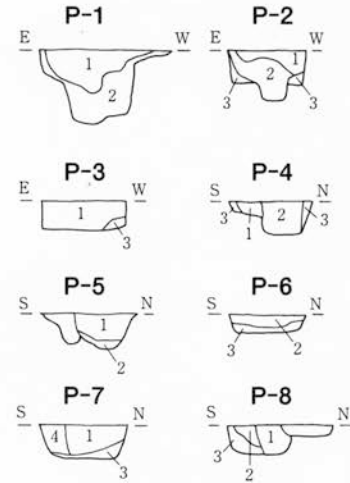
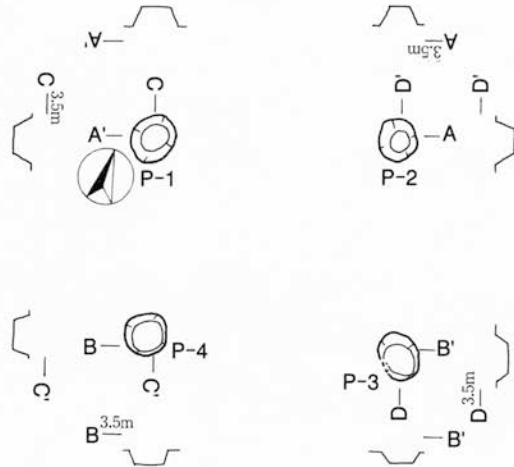


69号掘立柱建物跡

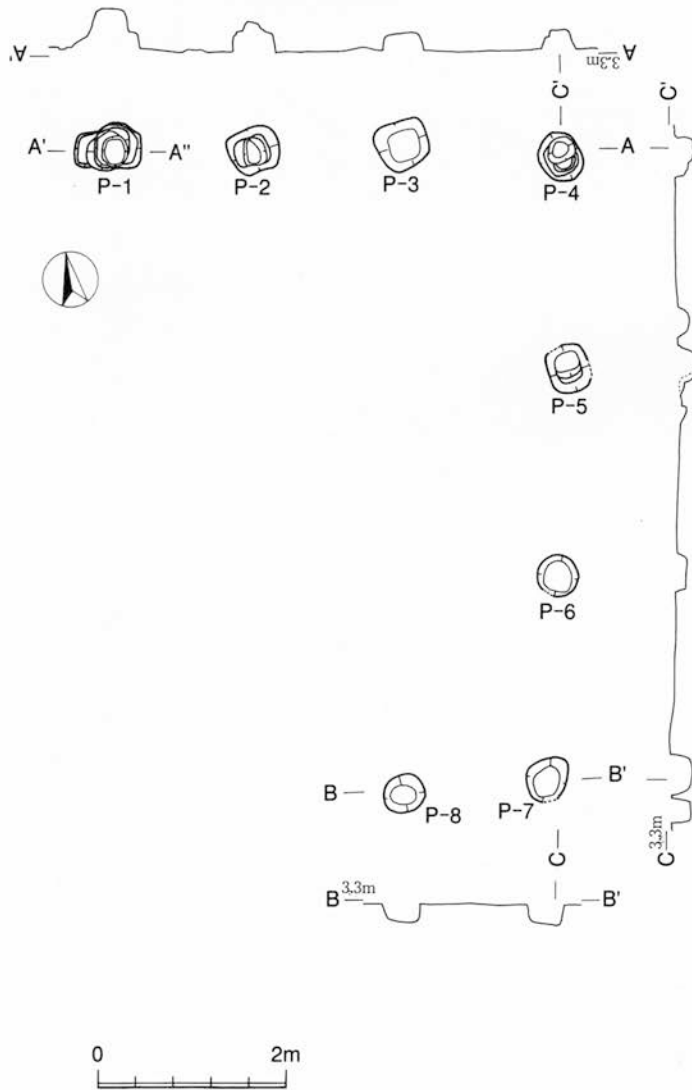


第46图 68・69号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

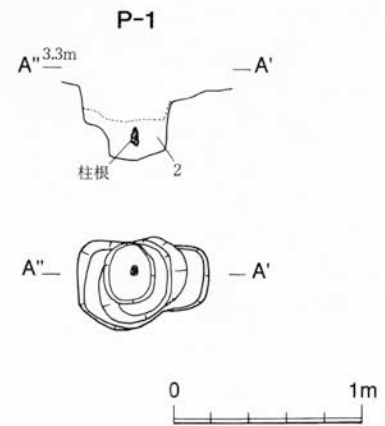
70号堀立柱建物跡



71号堀立柱建物跡



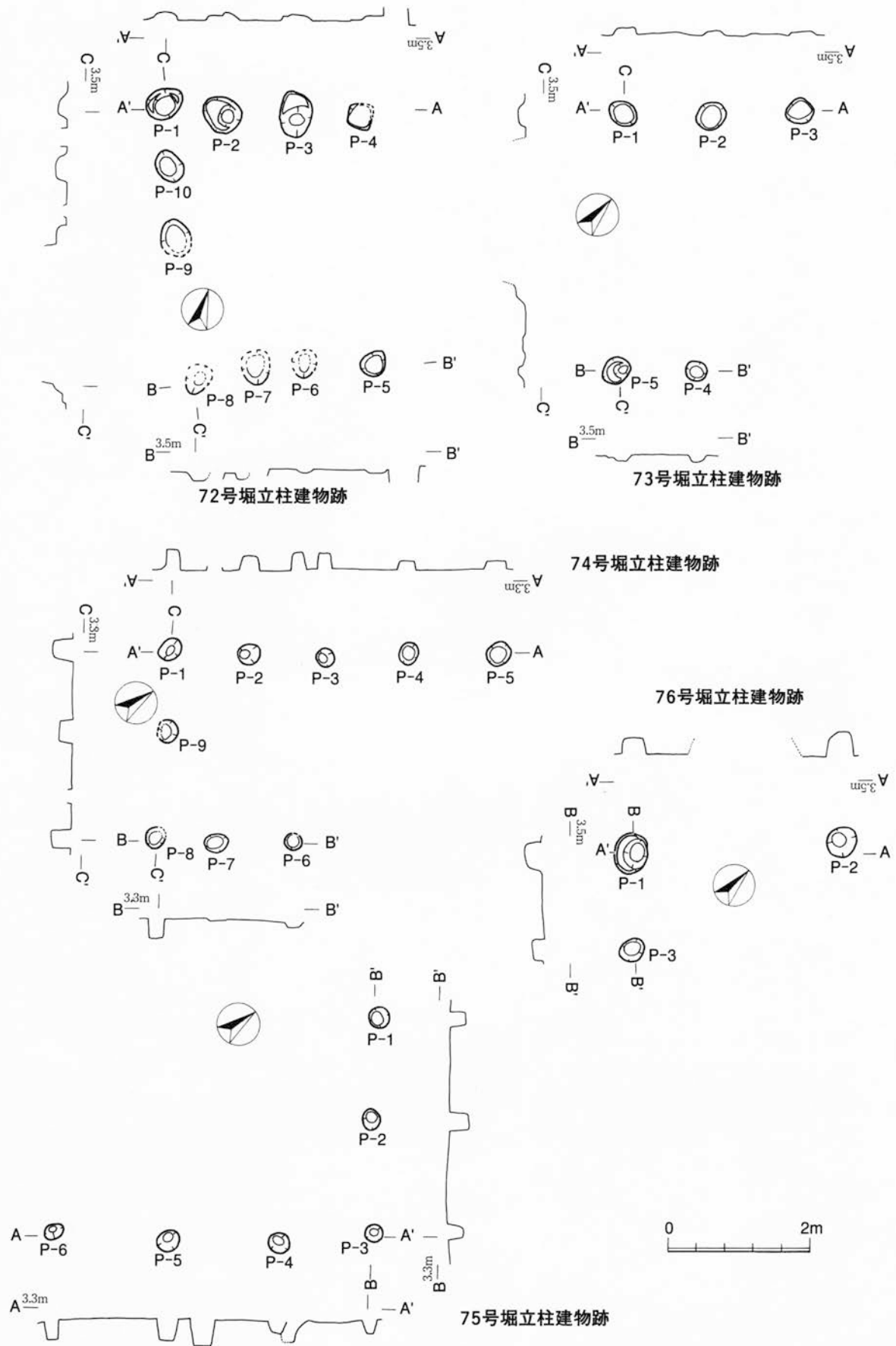
71号堀立柱建物跡柱穴土層断面



71号掘立柱穴土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土(炭化物ブロック、10YR7/2 にぶい黄橙色粘土ブロック極少量含む。)
- 2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック極少量含む。10YR7/2 にぶい黄橙色粘土ブロック多く含む。)
- 3層 10YR6/2 灰黄褐色 埴壤土(炭化物ブロック少量含む。)
- 4層 10YR6/3 にぶい黄橙色 壤土(マンガン斑含む。)

第47図 70号・71号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)



第48图 72号·73号·74号·75号·76号掘立柱建物跡平面图·断面图 (S=1/80)

ほぼ同一主軸であり、同時期のものではないかと考える。

#### 77号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、3×?間の側柱建物である。攪乱等により、建物の東南部分が失われている。桁行北側の西から3本目の柱穴も攪乱により失われている。比較的大きめの柱穴を持ち、柱筋も通っている。柱間寸法も均等配置されている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸である68号掘立と同時期と推察される。

#### 78号掘立

北より西方向に主軸を向けた側柱建物と推察されるが、建物の大部分が中世溝によって切られているため詳細は不明である。出土遺物は無く、時期不祥である。西に大きく振る主軸であることから、近接する76号掘立とほぼ同時期か相前後するものではないかと考えるが、疑問は残る。

#### 79号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた側柱建物であると推察されるが、建物の大部分が38号溝に切られているため、詳細は不明である。柱間寸法は比較的均等配置されていることはいえる。古代を通じて存在する38号溝に切られていることを考えると、これ以上は南西方向に延びるとは考えにくく、小型の建物であることが予想される。また、古代後半期の建物とも考えにくく、同一主軸である69号掘立と同時期と推察される。

#### 80号掘立

ほぼ東西軸に主軸を向け、横向き配置をとる、2×3間の側柱建物である。梁行の柱間寸法は均等ではあるが、桁行方向ではやや不揃いである。そのため、桁行南側が若干長く、建物がやや歪む。出土遺物は無く、時期不祥である。真北方向の主軸をとる建物群は非常に限定されるため、同一グループに属すると考えられる。そのなかでも、重複関係にある81号・82号掘立より、切り合いによって古いことが確認される。

#### 81号掘立

ほぼ真北に主軸をとる2×3間の総柱建物である。比較的大きめのしっかりした柱穴をもつが、柱配置はやや不揃いである。東側桁行がやや長くなるため、建物南東端部が外側に歪む。出土遺物は土師器食器片が出土しているが、細片であり時期不祥である。真北主軸から、80号・82号掘立と同一グループと考えられ、そのなかでも、切り合いにより80号掘立より新しいことがいえる。

#### 82号掘立

真北に主軸をとる3×3間の側柱建物である。大型のしっかりした柱穴をもち、柱筋の良く通った建物である。柱間寸法も梁行の中間2本の柱が中央にやや寄る以外は、均等配置をとる。出土遺物は、須恵器坏蓋が出土している。端部破片ではないため詳細な時期は不明ではあるが、その形態から田嶋編年におけるⅡ期の範疇におさまるものと考えられる。80号～82号掘立の一群は、立替による変遷と考えられる。また、建物敷地が幅1m程度の、西辺と南辺をL字に巡る溝によって区画されていることが特徴である。他のどの時期の建物にも見られない特徴であり、何か特別な建物だった可能性も考えられる。時期的には38号溝における土馬を使った祭祀が行われた時期に合致し、祭祀が行われた場所に近接していることから、祭祀の主体者との関わりが考えられる。

#### 83号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×3間の側柱建物である。柱筋はやや歪む。柱間寸法は、桁行東側1間がやや狭い配置となっている。北東隅部の柱穴のみが細長い形状であるのは、中世建物の柱穴とほぼ同位置に重なりあった結果と考えている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である98号掘立と同時期が推察される。

#### 84号掘立

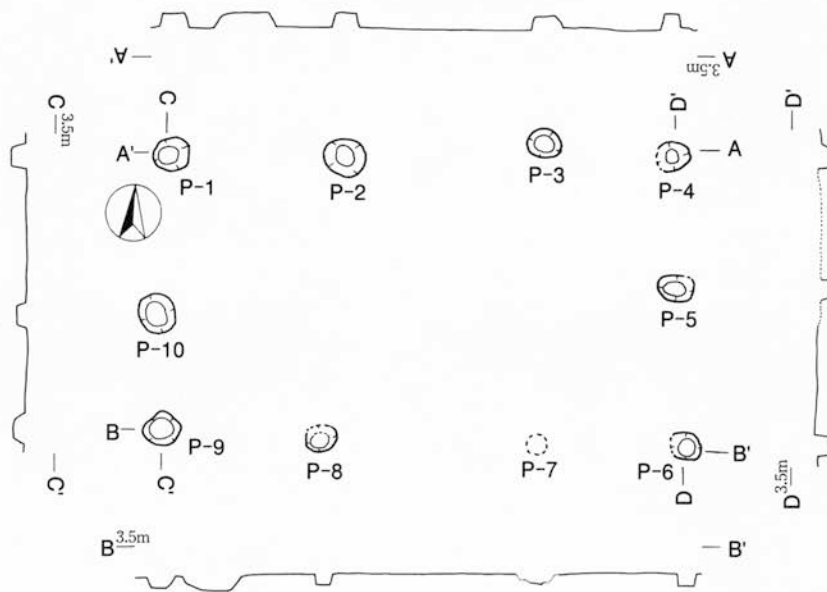
北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、1×3間の側柱建物である。柱間寸法の大きい横長の建物である。北側桁行の柱穴の方が大きく南側が小さいため、やや不揃いではある。ただし、柱筋は通った建物である。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である90号掘立と



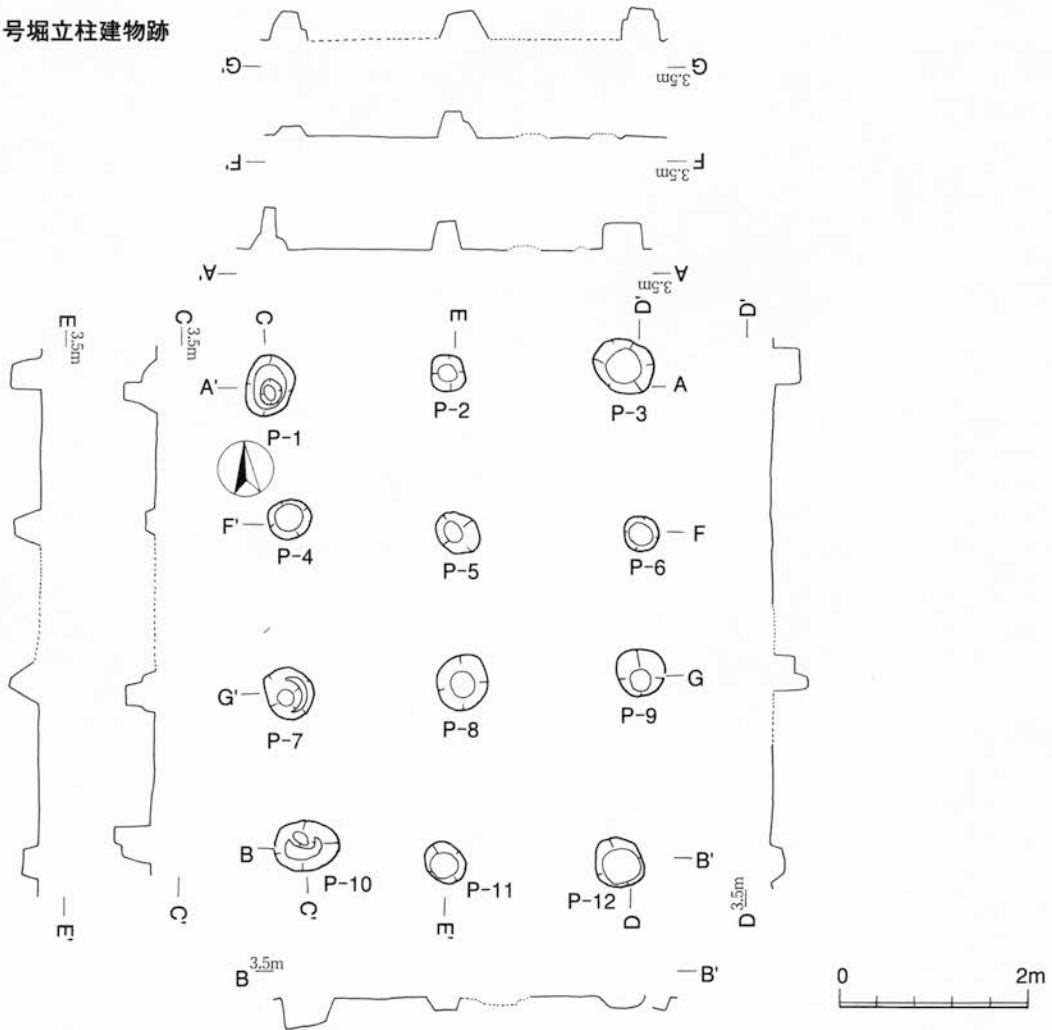
第49图 77号·78号·79号掘立柱建物跡平面图·断面图 (S=1/80)



80号掘立柱建物跡

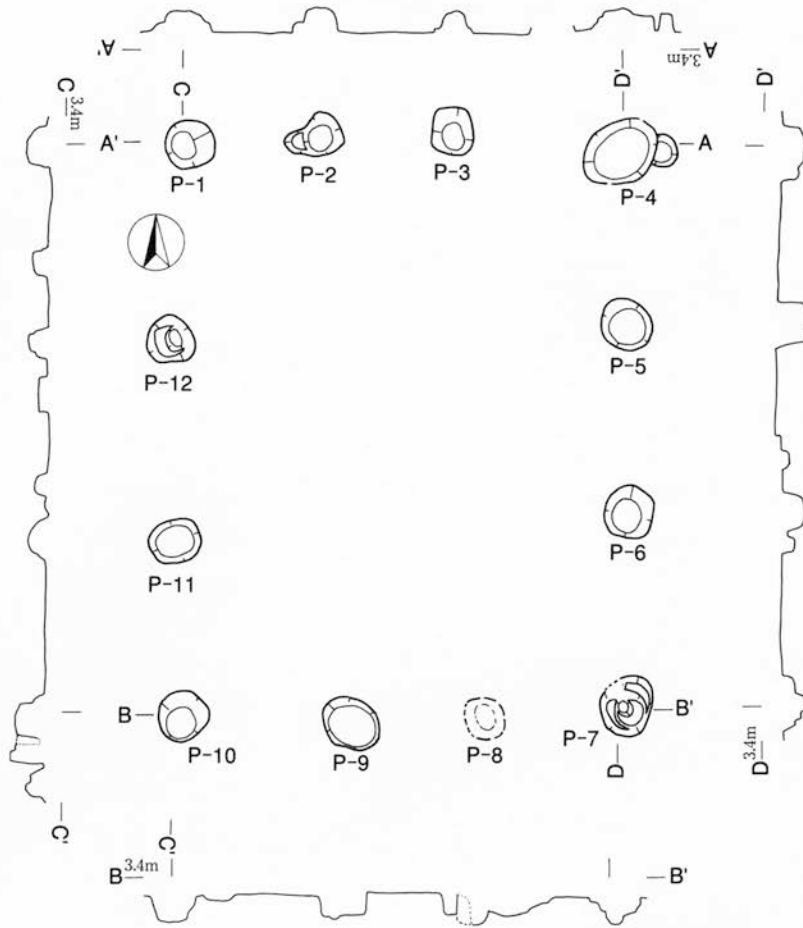


81号掘立柱建物跡

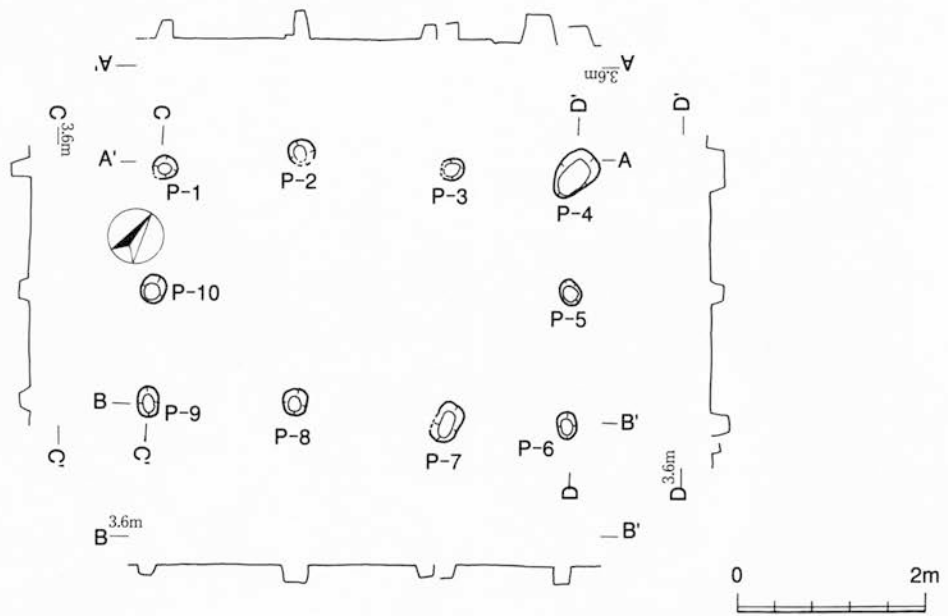


第50图 80号・81号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

82号堀立柱建物跡

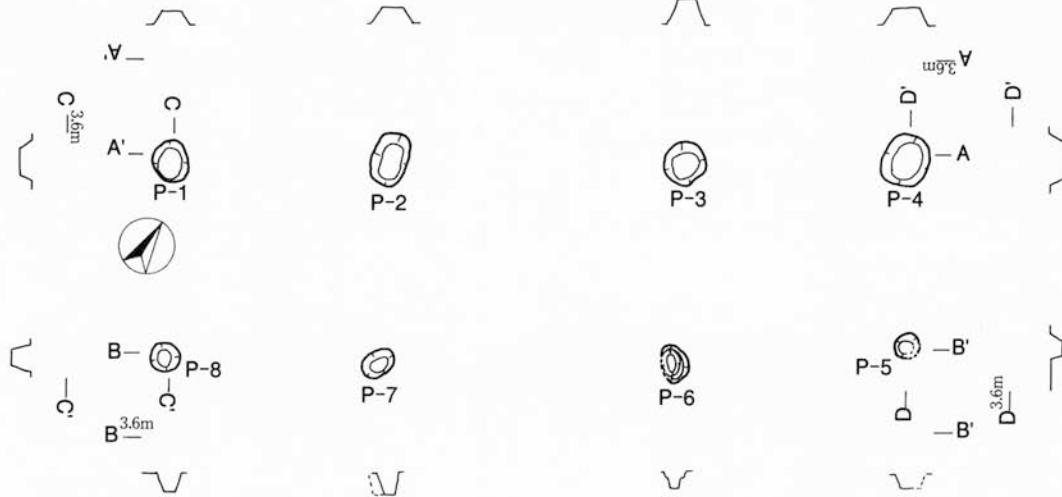


83号堀立柱建物跡

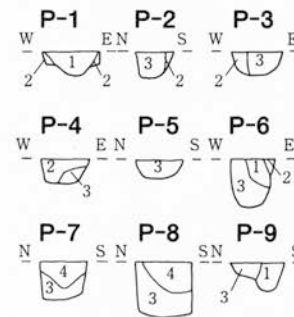
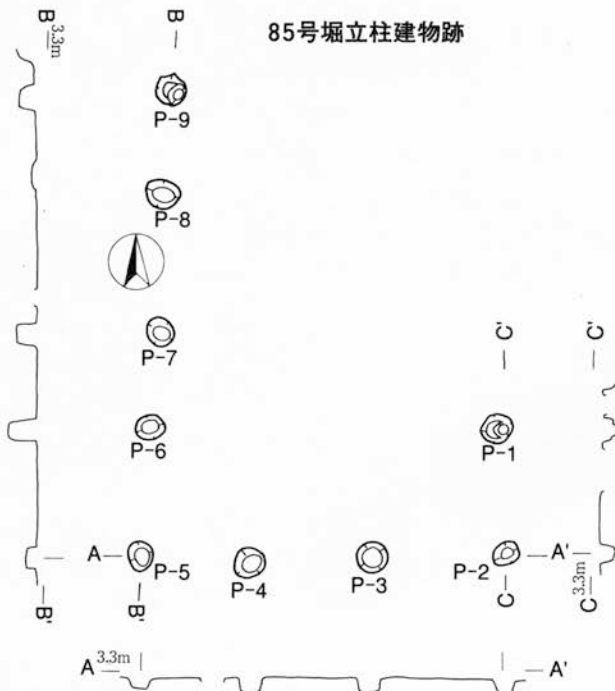


第51图 82号・83号堀立柱建物跡平面图・断面图 (S=1/80)

84号堀立柱建物跡



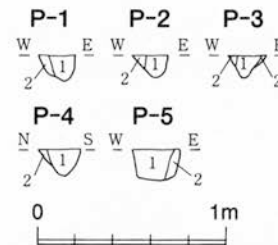
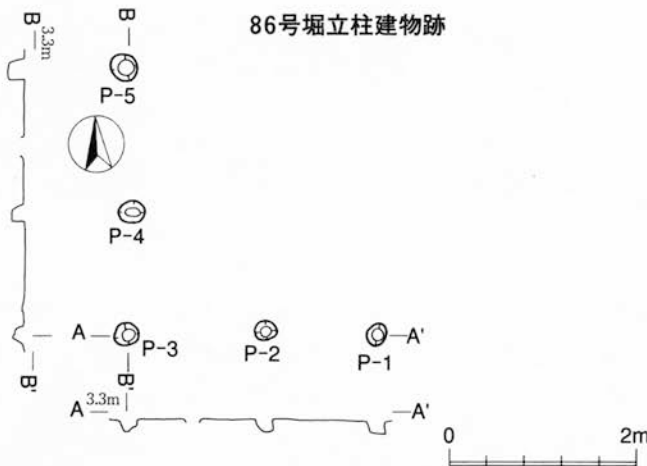
85号堀立柱建物跡



85号堀立柱穴土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土 (炭化物ブロック極少量含む。マンガン斑多く含む。)
- 2層 10YR6/3 褐灰色 埴壤土 (マンガン斑少量含む。白色粘土ブロック少量含む。)
- 3層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土 (マンガン斑多く含む。白色粘土ブロック多く含む。)
- 4層 10YR6/2 灰黄褐色 軽埴土 (マンガン斑多く含む。)

86号堀立柱建物跡



86号堀立柱穴土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土 (炭化物ブロック、10YR7/2 白色粘土ブロック少量含む。マンガン斑多く含む。)
- 2層 10YR6/1 灰黄褐色 埴土 (マンガン斑少量含む。)

第52図 84号・85号・86号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

同時期が推察される。

#### 85号掘立

ほぼ真北に主軸をとる3×?間の側柱建物である。建物北東部分の柱穴は、遺構の重複関係によって検出することができなかった。検出部分においては柱筋が通った建物であり、柱間寸法も均等に配置されている。出土遺物は無く、時期不祥である。真北主軸の建物であるため、82号掘立と同時期であることが推察されるが、柱間寸法も狭く、柱穴も小さいなど建物のタイプは異なるようである。当該期属するとするならば、土馬を使った祭祀が行われた場所からもっとも近い位置に立地することとなる。

#### 86号掘立

ほぼ真北に主軸をとる2×?間の側柱建物である。85号掘立と同様、建物北東部分の柱穴は、遺構の重複関係によって検出することができなかった。出土遺物は無く、時期不祥である。85号掘立と同タイプの建物と考えられ、両者は立替関係にあると推察される。切り合い関係が見出せないため、前後関係は不明である。

#### 87号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×2間の総柱建物である。柱間寸法が180cm設定された、均等配置をとる建物であり、「田」の字プランの倉庫の建物と考えられる。柱間穴の大きさや深さはやや不揃いだが、攪乱の影響と考えられ、柱穴底の水準値では大差なく、比較的揃っている。出土遺物は、須恵器盤Bが出土している。田嶋編年におけるIV-2古期に比定可能である。

#### 88号掘立

北より東方向に若干主軸を向けた1×2間の側柱建物である。柱間寸法は、均等配置されている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である96号掘立が同時期と推察される。

#### 89号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、1×2間の側柱建物である。柱間寸法の大きい横長の建物であり、84号掘立と同タイプと考えられる。柱間寸法は、桁行中央の柱がやや東側に寄った配置となっている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である98号掘立と同時期が推察される。

#### 90号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、1×2間の小型側柱建物である。南西隅部の柱穴が若干内側に入っているため、やや歪みが生じている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である98号掘立と同時期が推察される。

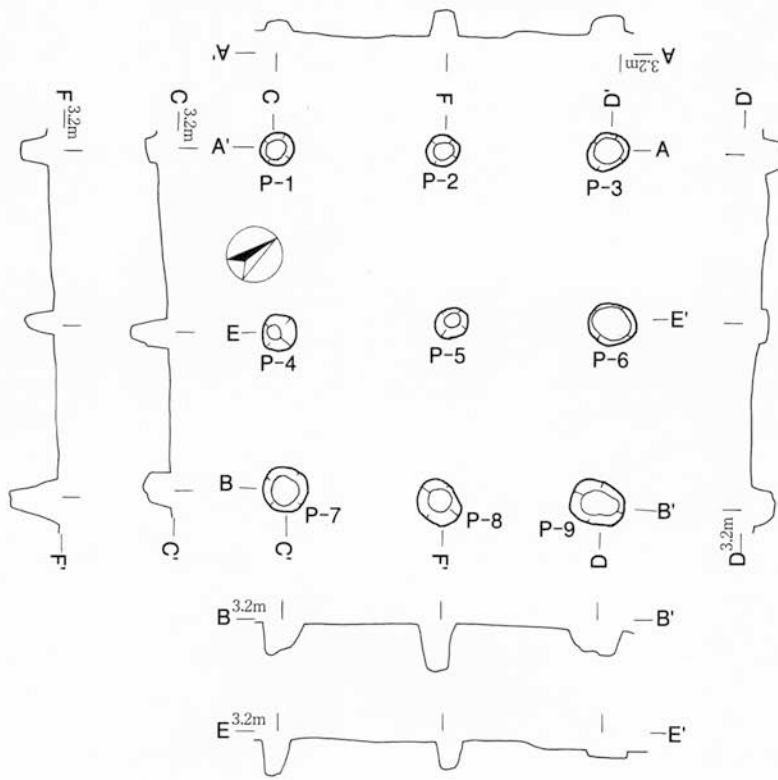
#### 91号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×3間の側柱建物である。北側桁行東側から1番目の柱が外側に位置するなど、柱筋はあまり良くない。柱間寸法は比較的均等である。ただし、桁行東側1間分が広く設定されており、廂ないし間仕切りの存在が想定される。柱穴から比較的多くの遺物が出土しており、須恵器甕胴部破片や、内面を黒色処理されたものを含む土師器椀や小皿片が出土している。その中で、椀形鉢と考えられる土師器の大型品が出土している。時期は、出越編年におけるII-3期～III-1期頃と考えられる。土師器食器類は、破片が多く、略完形にも復元される個体が存在しないため、埋納されたとは考え難い。

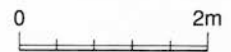
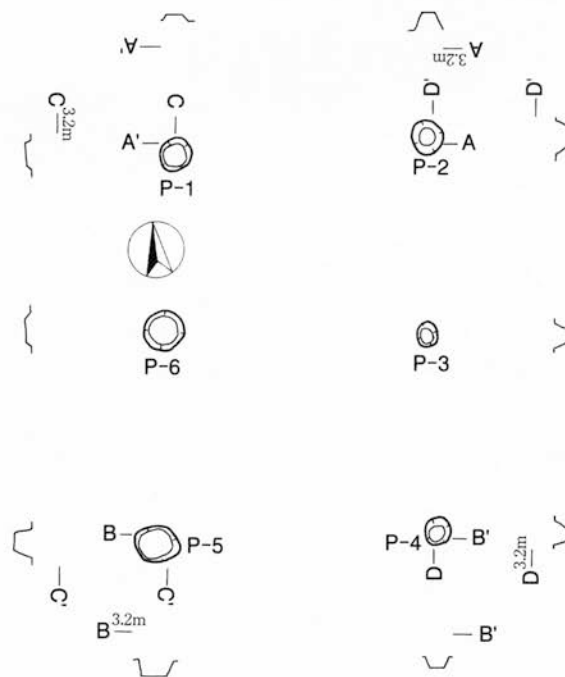
#### 92号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた1×4間の側柱建物である。当遺跡内で最大級の建物である。建物の大きさの割に、柱穴の大きさは60cm程度と小さめだが、略方形の均質なものであり、柱間寸法もほぼ均等な間隔となっている。桁行の柱筋がよく通ったものであるため、柱筋が外れた柱穴は認めがたく、梁行は530cmあるが、1間で支える構造であるといえる。柱穴から多くの遺物が出土しており、殆ど全てが土師器食器類である。90号掘立とは異なり、略完形復元可能な個体が多く、埋納されたものだといえる。特に、図示した通りP-5からは多くの土師器食器が出土しており、その出土状態から、

87号堀立柱建物跡

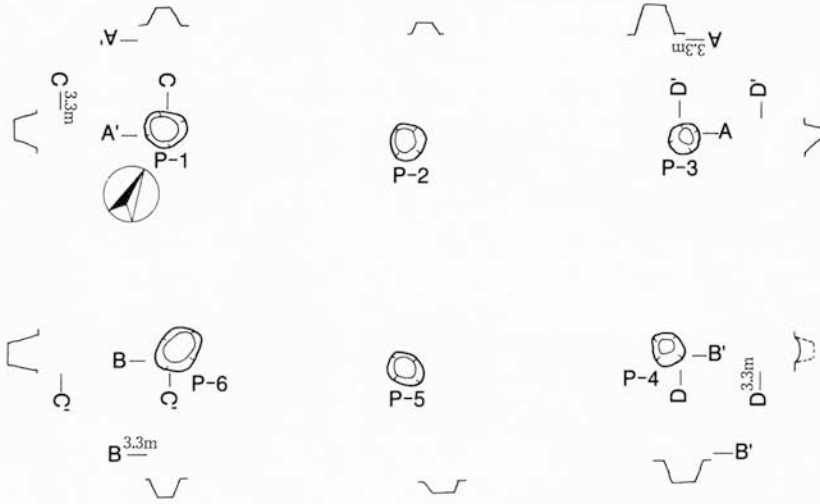


88号堀立柱建物跡

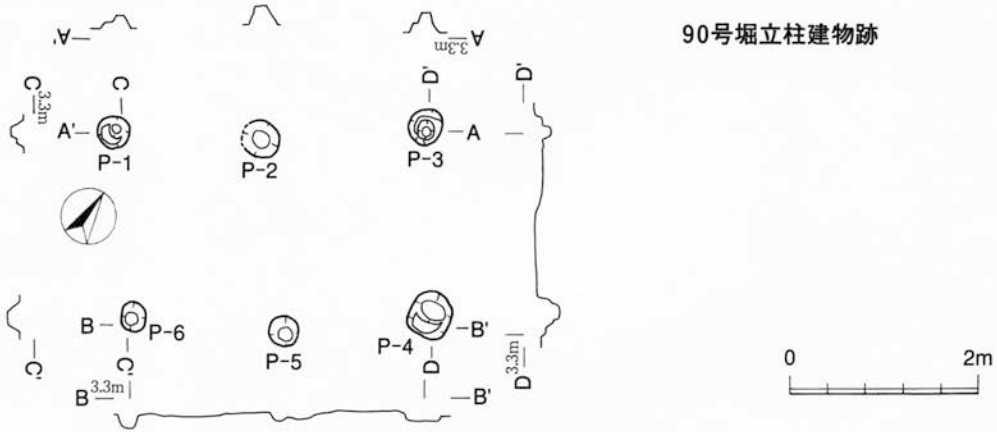


第53图 87号・88号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

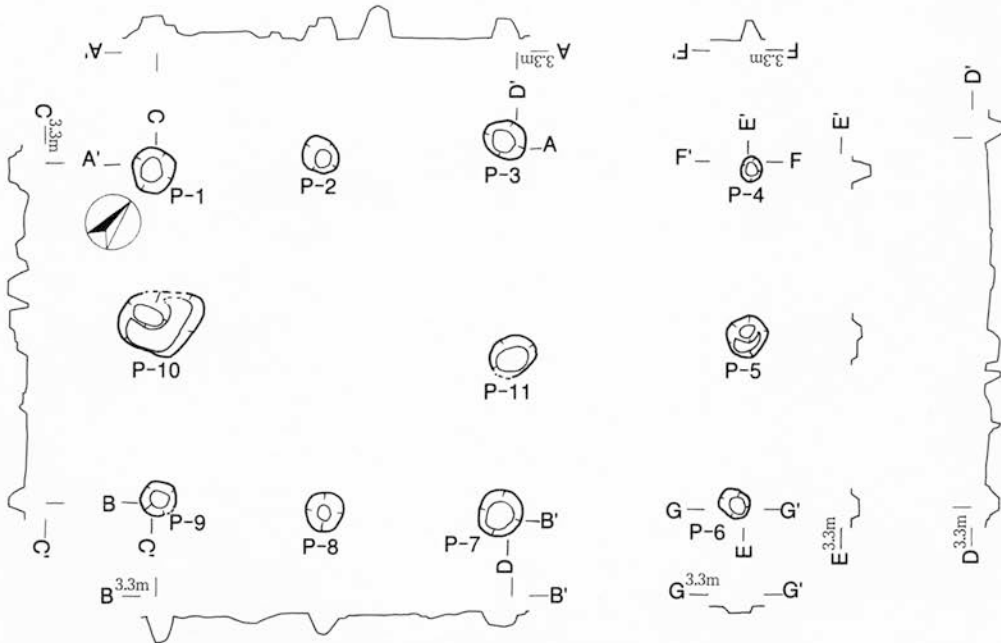
89号掘立柱建物跡



90号掘立柱建物跡

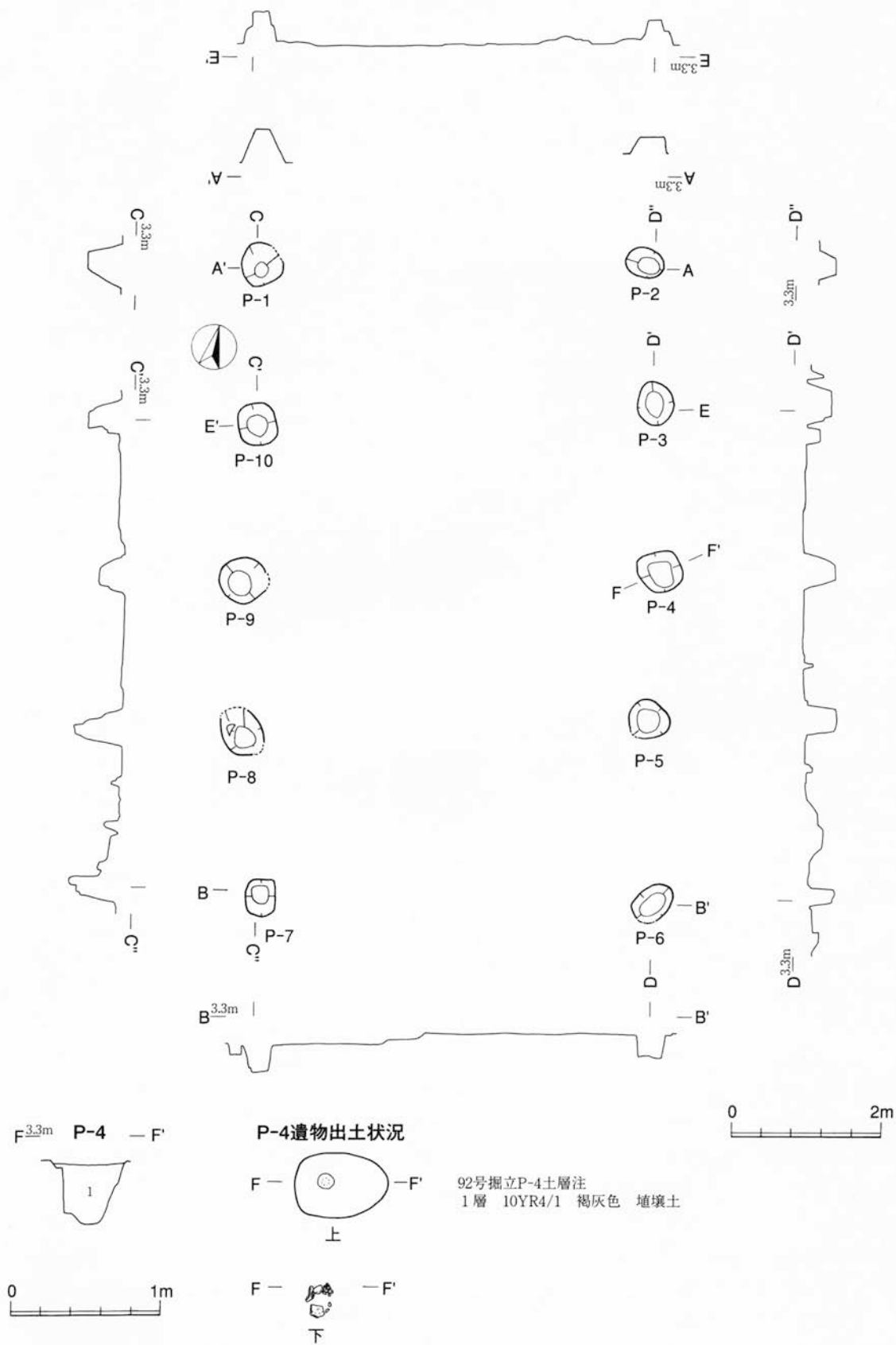


91号掘立柱建物跡



第54图 89号·90号·91号掘立柱建物跡平面图·断面图 (S=1/80)

92号掘立柱建物跡



第55図 92号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

柱を抜き取った後に埋納されたことが分かる。時期は、出越編年におけるⅢ-1・2期頃と考えられる。

#### 93号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×3間の側柱建物である。北側桁行が若干長めであるため、柱筋はやや歪む。柱間寸法は、西側1間分が広い間隔となっている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、ほぼ同一主軸である98号掘立と同時期が推察される。

#### 94号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、1×2間の側柱建物である。桁行の東側の柱間寸法がやや広くとられている。南側桁行中央の柱穴がやや内側へ入り、柱筋が悪くなっている。切り合いから、92号掘立より古い建物であることがいえる。

#### 95号掘立

真北からほんの少しだけ東へ主軸を向けた1×2間の側柱建物である。柱穴の大きさが比較的均質で、略方形であることが特徴である。柱筋は通っているが、柱間寸法は桁行南側1間分が広くとられている。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、同一主軸で、同じ柱穴の特徴を持つ建物は101号掘立のみであることから、同時期が推察される。

#### 96号掘立

北より西方向に主軸を大きく向けた横向き配置をとる、3×4間の側柱建物である。やや柱穴の大きさが不揃いではあるが、柱筋が通った建物である。柱間寸法は、梁行では中央2本間がやや狭い間隔だが、桁行は統一感のある均等な間隔となっている。出土遺物は、土師器のロクロ甕片と、須恵器の特殊な形態をした坏の完形品が出土している。柱抜き取り後に埋納された可能性が高い。定型品ではないので時期比定は難しいが、田嶋編年におけるⅣ-2～Ⅴ-1期と考えられる。主軸方位から、71号掘立と同時期と推察される。

#### 97号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、1×2間の側柱建物である。柱筋は通っているが、柱間寸法は桁行東側1間分が広くとられている。攪乱を受けている南西隅部の柱穴を除き、他の隅部に位置する柱穴が、比較的深く掘削されていることが特徴である。出土遺物は、土師器小皿片が出土している。詳細な時期は判断できないが、古代後半時以降のものと考えられる。ほぼ同一主軸である91号掘立と同時期が推察される。

#### 98号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、1×2間の側柱建物である。正方形に近いプランを持つ建物である。柱間寸法は、桁行東側1間分が広くとられている。出土遺物は、土師器椀Bが出土している。出越編年におけるⅢ-3期頃以降と考えられる。

#### 99号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×2間の側柱建物である。桁行は均質な大きさをもつ柱穴で構成されている。柱間もほぼ均質な間隔で配置されている。梁行中央の柱は、他に比べ径が小さいため、補助的な性格が考えられる。北東隅部柱穴は土坑と重複しており、柱穴を検出せずに掘ってしまったと考えられる。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、主軸や建物の形態及び立地から98号掘立と同時期が推察される。

#### 100号掘立

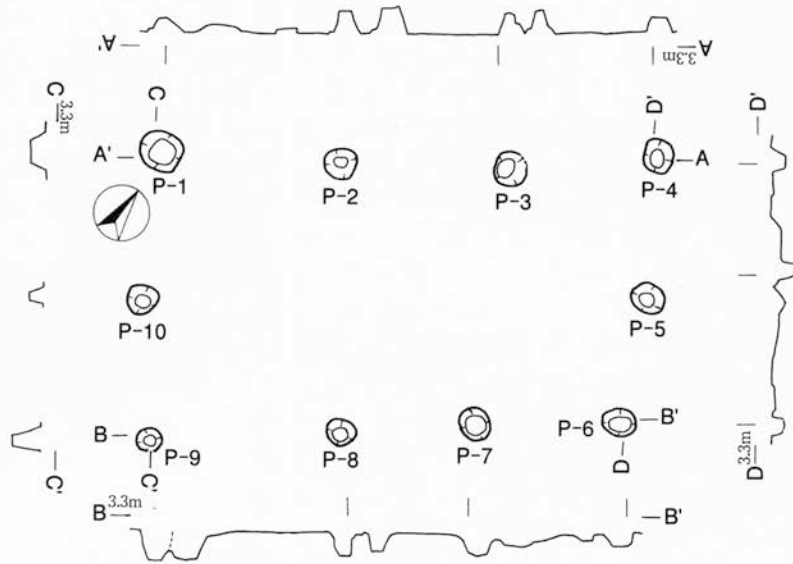
北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、1×2間の側柱建物である。4隅の柱穴が比較的しっかりしており、桁行中間の柱穴は小さく補助的な様相である。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、主軸や建物の形態及び立地から98号掘立と同時期が推察される。

#### 101号掘立

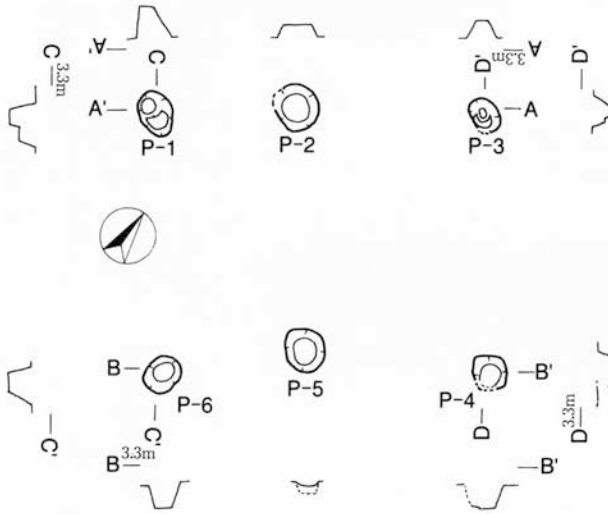
真北からほんの少しだけ東へ主軸を向けた1×3間の側柱建物である。柱穴の大きさが比較的均質で、略方形であることが特徴である。柱穴は当遺跡の中では大き目の部類に入る。南西隅部の柱穴は、



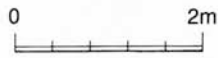
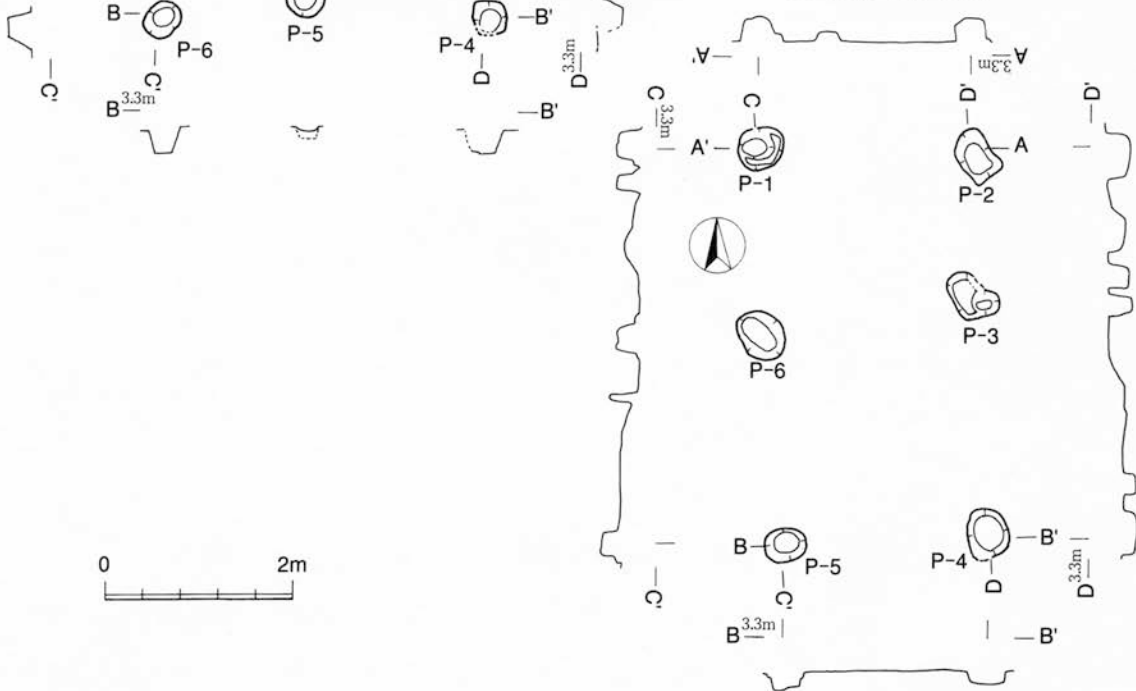
93号掘立柱建物跡



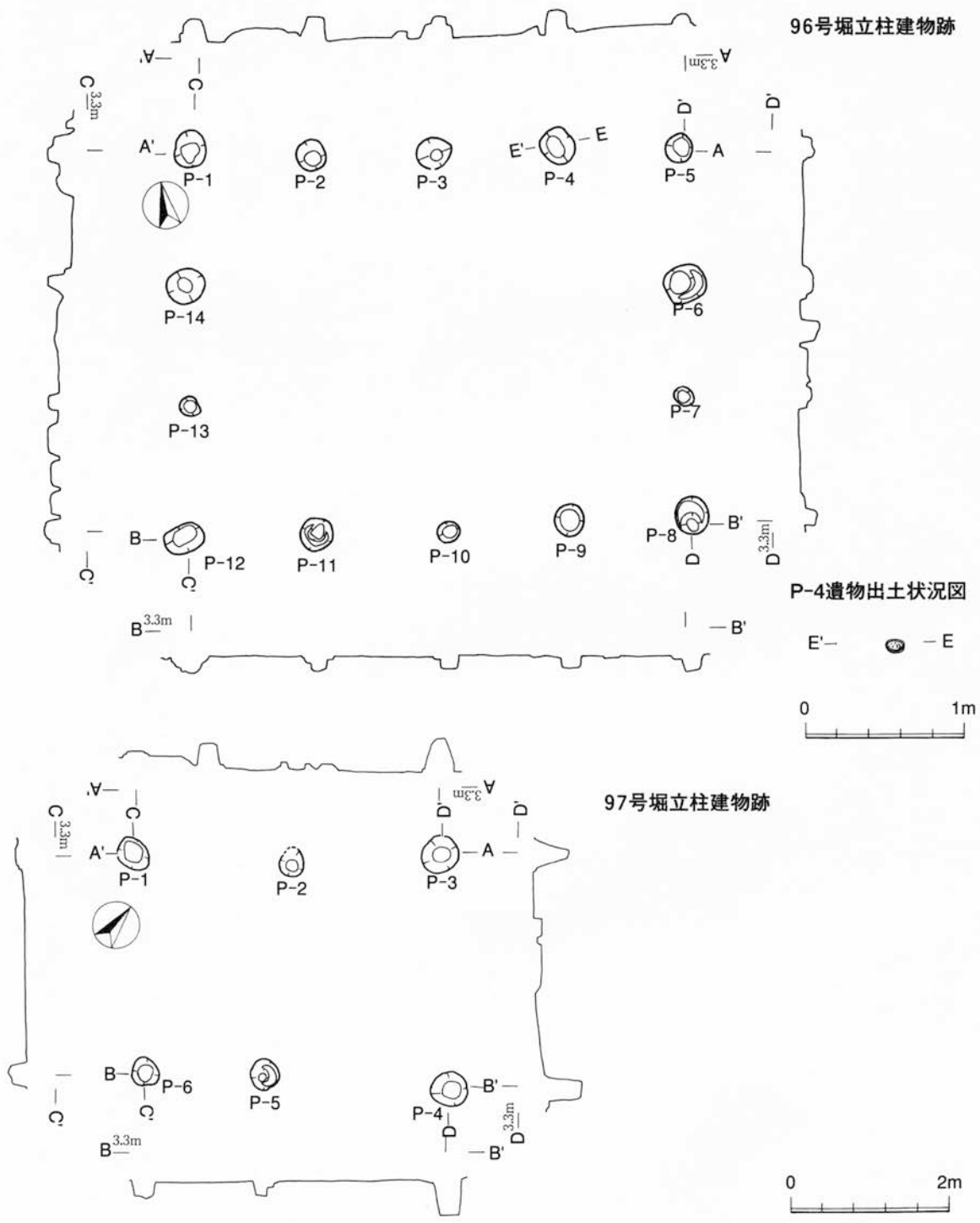
94号掘立柱建物跡



95号掘立柱建物跡

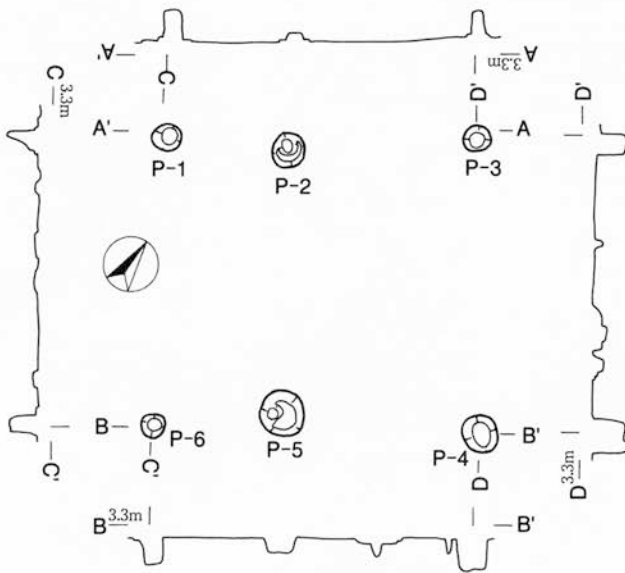


第56图 93号·94号·95号掘立柱建物跡平面图·断面图 (S=1/80)



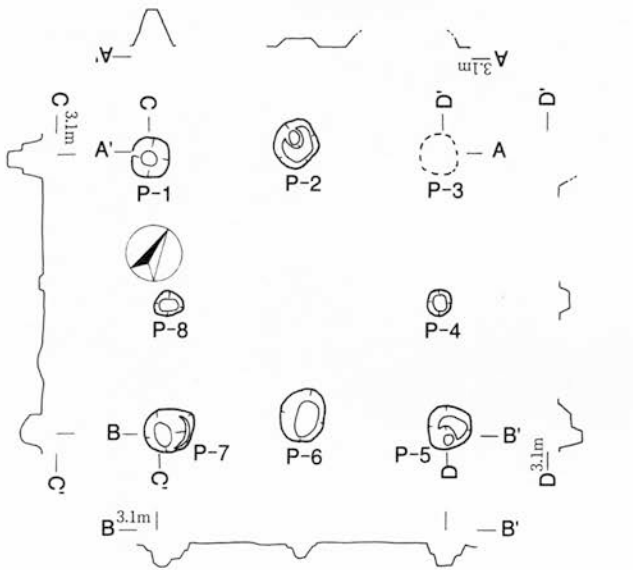
第57図 96号・97号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

土坑が重複しており失われている。西側桁行が広く、北側梁行が狭いため、平面形は歪んだ形となっている。出土遺物は、須恵器盤Bが出土している。田嶋編年におけるV期に比定可能である。また、唯一の同一主軸である95号掘立との類似性は高い。

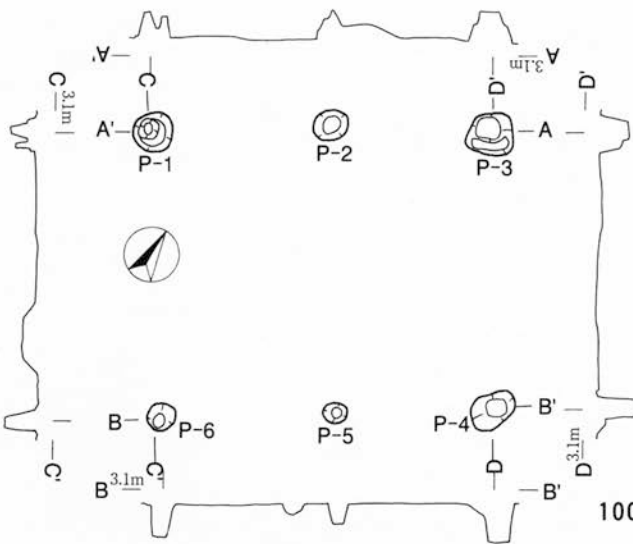
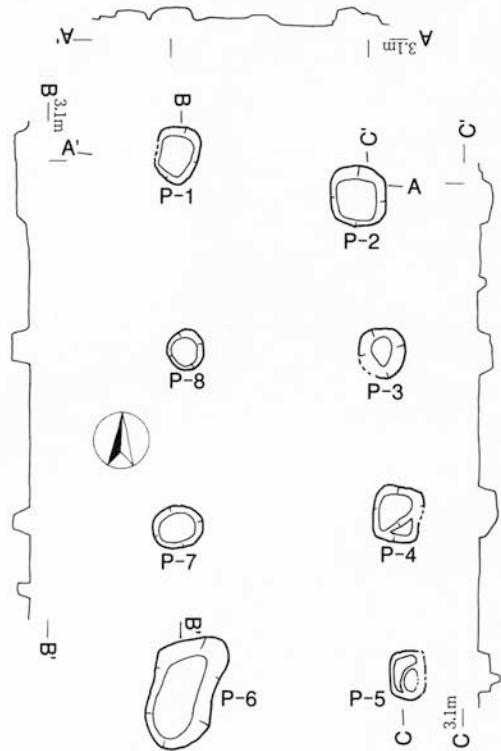


98号掘立柱建物跡

99号掘立柱建物跡



101号掘立柱建物跡



100号掘立柱建物跡



第58图 98号·99号·100号·101号掘立柱建物跡平面図·断面図 (S=1/80)

第2表 古代掘立柱建物跡寸法表

番号	主 軸	形態	間数	梁長	桁長	面積	掘り方寸法・形態・深さ	柱 間 寸 法	備 考
37	N-37-W	総柱	3×4	5.40	5.90	31.86	26～50・略円・12～24	梁160・175・205桁120・120・190・130	
38	N-52-E	総柱	2×3	3.20	4.50	14.40	30～44・略円・10～25	梁160・160桁190・260	横向き？
39	N-27-W	側柱	2×?	2.80			32～50・略円・10～15	梁140・140桁140・140	
40	N-32-W	側柱	1×2	2.40	2.70	6.48	34～54・略円・10～15	梁240桁120・150	
41	N-11-W	側柱	?×3		5.30		34～50・略円・10前後	梁190・190桁180・170・180	
42	N-14-W	側柱	3×3	4.10	4.10	16.81	39～50・略円・10～18	梁125・150・135桁150・130・130	北側廂あり。 (総面積23.37)
43	N-25-W	側柱	2×2	3.40	3.70	12.58	34～44・略円・10前後	梁200・140桁160・210	
44	N-12-W	総柱	?×3		5.60		37～50・略円・10前後	梁170・170桁200・200・160	
45	N-47-W	総柱	?				40～44・略円・10前後	梁180桁150・110・110	
46	N-40-W	側柱	2×2	3.20	4.40	14.08	25～35・略円・10～15	梁150・170桁215・225	
47	N-24-W	側柱	2×3	3.70	3.60	13.32	22～36・略円・10～17	梁170・200桁140・120・100	
48	N-73-W	側柱	1×3	2.50	4.10	10.25	24～34・略円・10～16	梁250桁135・135・140	横向き？
49	N-40-W	総柱	3×4	4.90	6.75	33.08	30～47・略円・10～15	梁200・140・150桁170・170・160・175	
50	N-41-W	総柱	2×5	3.80	6.50	24.70	37～48・略円・10前後	梁190・190桁120・160・130・110・130	西側に堀?あり。
51	N-17-W	側柱	3×3	4.90	5.30	25.97	38～45・略円・10～25	梁200・120・170桁180・165・185	
52	N-15-W	側柱	2×4	4.30	6.30	27.09	38～48・略円・10前後	梁180・250桁155・150・155・170	
53	N-50-E	側柱	2×3	3.80	6.30	23.94	34～40・略円・10～16	梁185・195桁255・205・170	
54	N-7-W	側柱	2×?	4.50			24～40・略円・10～20	梁240・210桁170	西側廂あり。
55	N-21-W	側柱	2×?	4.50			37～43・略円・10前後	梁250・200桁180	
56	N-40-W	側柱	3×?	5.00			46～93・略円・10～32	梁175・150・175桁180・195	
57	N-13-W	側柱	2×4	2.80	6.20	17.36	32～80・略円・10～20	梁140・140桁120・145・155・200	
58	N-80-E	側柱	3×5	3.20	5.10	16.32	28～54・略円・10前後	梁80・140・100桁105・100・100・105・100	
59	N-49-E	側柱	4×?	3.50			34～60・略円・30～68	梁90・90・80・90桁100・110・110・110	横向き？
60	N-12-E	側柱	3×4	3.30	4.00	13.20	26～37・略円・12～26	梁110・120・100桁100・110・105・95	
61	N-0	側柱	2×3	2.80	4.80	13.44	68～102・略円・10～24	梁140・140桁150・170・160	
62	N-11-W	側柱	3×?	4.00			36～50・略円・16～32	梁140・140・120桁150・105・130・120	
63	N-12-W	側柱	3×3	3.10	4.10	12.71	24～40・略円・10～36	梁120・105・85桁135・140・135	
64	N-50-E	側柱	3×3	4.20	4.60	19.32	38～54・略円・14～32	梁145・135・140桁155・145・160	横向き？
65	N-22-W	側柱	4×4	5.30	5.40	28.62	30～37・略円・20～40	梁120・130・140・140桁130・115・130・155	変則柱間、西側5間。
66	N-42-W	総柱	2×2?	3.60	4.20	15.12	34～60・略円・12～32	梁180・180桁210・210	西側廂あり。 (総面積12.60)
67	N-50-E	側柱	3×3	3.00	3.40	10.20	28～48・略円・17～30	梁100・90・110桁100・120・120	
68	N-23-W	側柱	2×2	4.20	4.30	18.06	44～64・略円・22～40	梁200・220桁180・250	南東隅柱穴位置歪む。
69	N-18-W	側柱	3×4	4.50	6.80	30.60	30～40・略円・18～44	梁160・130・160桁200・180・155・145	

番号	主 軸	形態	間数	梁長	桁長	面積	掘り方寸法・形態・深さ	柱 間 寸 法	備 考
70	N-18-W	側柱	1×1	2.60	2.20	5.72	44～54・略円・42～56	梁260桁220	
71	N-10-E	側柱	3?×3	4.70	6.80	31.96	46～70・略方・12～44	梁150・150・170桁230・230・220	
72	N-73-E	側柱	4?×?	3.90			38～64・略円・10～18	梁80・100桁90・90・90	
73	N-50-E	側柱	2?×?	3.60			28～40・略円・10前後	梁?桁120・120	横向き?
74	N-55-W	側柱	2×?	2.60			26～36・略円・10～30	梁110・150桁100・110・110・120	横向き?
75	N-54-W	側柱	?				24～32・略円・18～30	梁140・160桁160・150・130	横向き?
76	N-41-W	側柱	?				36～50・略円・16～36	梁?桁130	
77	N-66-E	側柱	3×?	4.30			34～60・略円・10～24	梁150・140・140桁140・130	
78	N-48-W	側柱	2×?	2.70			24～32・略円・30～33	梁130・140桁140・130・170	横向き?
79	N-19-W	側柱	?				24～32・略円・28～32	梁150・150桁150・130	
80	N-88-E	側柱	2×3	3.00	5.40	16.20	36～44・略円・12～18	梁150・150桁180・210・150	
81	N-1-W	総柱	2×3	3.60	5.10	18.36	38～66・略円・14～46	梁170・190桁160・170・180	横向き?
82	N-0	側柱	3×3	4.70	6.10	28.67	54～84・略円・20～37	梁160・140・170桁205・205・200	
83	N-57-E	側柱	2×3	2.70	4.40	11.88	24～43・略円・10～20	梁140・130桁150・160・130	
84	N-60-E	側柱	1×3	2.10	7.80	16.38	26～56・略円・14～30	梁210桁235・310・235	横向き?
85	N-1-E	側柱	3×?	3.80			30～38・略円・10～28	梁120・130・130桁110・140・110・130	横向き?
86	N-2-E	側柱	2×?	2.60			23～30・略円・14～17	梁140・120桁150・140	
87	N-54-W	総柱	2×2	3.60	3.60	12.96	34～58・略円・10～50	梁180・180桁180・180	
88	N-8-E	側柱	1×2	2.70	4.20	11.34	25～47・略円・10～18	梁270桁210・210	
89	N-63-E	側柱	1×2	2.40	5.40	12.96	34～54・略円・12～33	梁240桁290・250	
90	N-58-E	側柱	1×2	2.00	3.20	6.40	30～48・略円・10～24	梁200桁160・160	横向き?
91	N-54-E	側柱	2×3	3.60	6.20	22.32	26～50・略円・10～26	梁180・180桁180・180・260	横向き?
92	N-11-W	側柱	1?×4	5.30	8.40	44.52	50～60・略方・18～30	梁530桁200・210・210・220	間仕切りか廂あり。 横向き?
93	N-52-E	側柱	2×3	2.90	5.10	14.79	24～32・略円・18～30	梁150・140桁190・165・155	
94	N-55-E	側柱	1×2	2.70	3.40	9.18	38～48・略円・14～34	梁270桁155・185	横向き?
95	N-3-W	側柱	1×2	2.20	4.20	9.24	43～55・略方・14～30	梁220桁185・235	横向き?
96	N-80-W	側柱	3×4	4.80	6.20	29.76	26～54・略円・14～32	梁170・145・165桁155・155・155・155	
97	N-50-E	側柱	1×2	2.90	3.90	11.31	36～48・略円・10～48	梁290桁175・215	横向き?
98	N-56-E	側柱	1×2	3.00	3.30	9.90	26～48・略円・12～34	梁300桁130・200	横向き?
99	N-60-E	側柱	2×2	3.00	3.00	9.00	26～56・略方・10～39	梁160・140桁150・150	横向き?
100	N-53-E	側柱	1×2	3.00	3.60	10.80	23～52・略円・22～42	梁300桁190・170	横向き?
101	N-4-E	側柱	1×3	2.15	5.30	11.40	42～64・略方・14～24	梁215桁190・185・165	横向き?

(単位は、梁長・桁長・面積はmで、他はcmで表示。柱間寸法は、梁間は西から東、桁間は北から南の平均値)

## 第2項 井戸跡

千代オオキダ遺跡では、古代に属する井戸側を持つ井戸跡は1基しか検出されていない。横板を仕口に組むものが検出されている。古代前半期において格式が高いとされる遺跡で発見される井戸である。中世期に比べ井戸数は格段に少なく、深さも中世の井戸のように深く掘り下げるものではなく、比較的浅いのが特徴である。

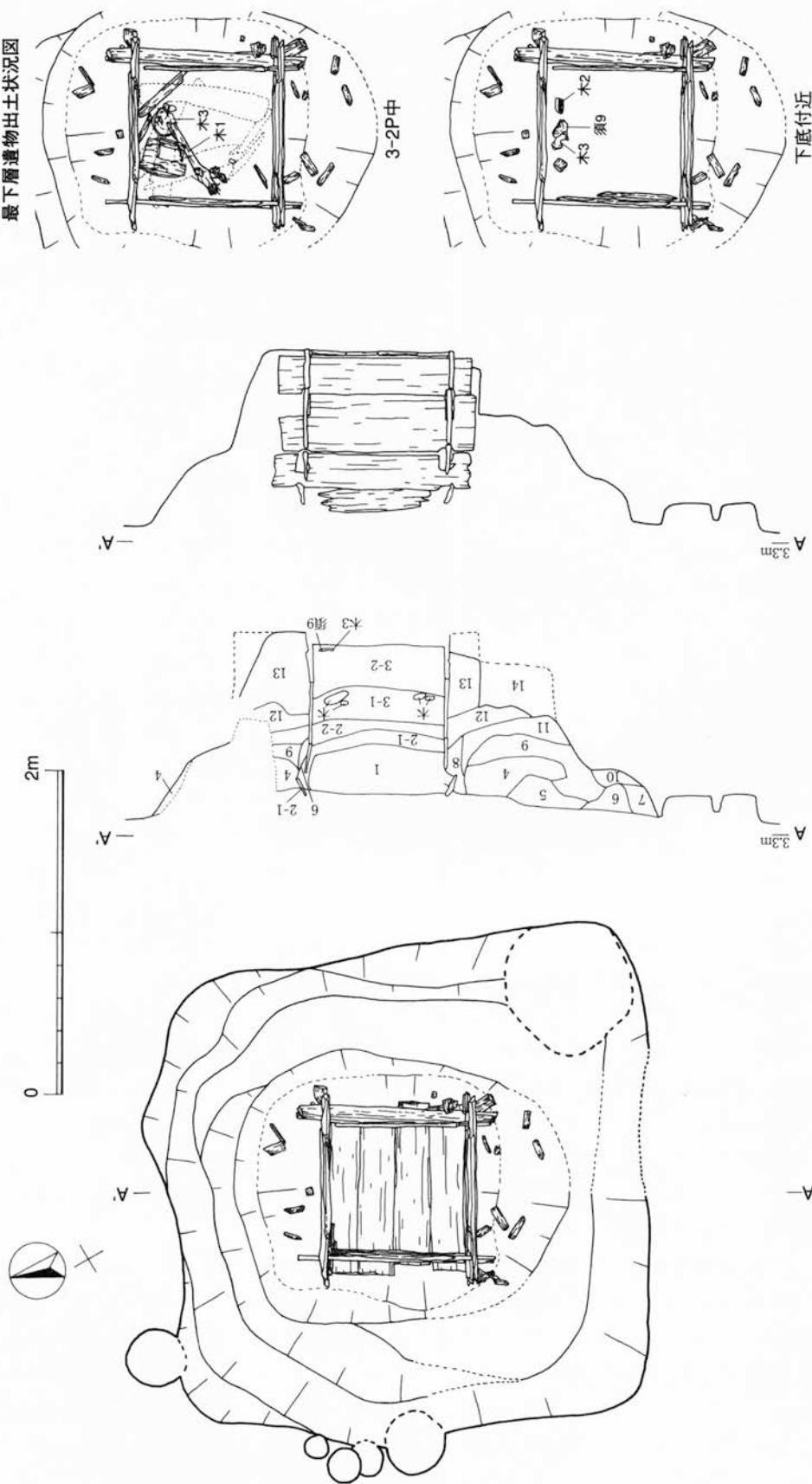
### 1号井戸（78号土坑）

H・I-28グリッドで検出された井戸であり、18号溝を切っている。井戸側の主軸は、磁北より18度東に振る。東西3m、南北2.9mのほぼ正方形の大きな掘り方があり、その内部でさらに東西1.7m、南北2.05mの長方形掘り方が穿たれている。内部掘り方の下底部分では、ほぼ正方形を呈し、その部分に井戸枠が据えられている。井戸側は、下から4段目までが残存していた。内法は、上端で東西0.78m、南北0.85mで、深さは、検出面より1mを測り、標高2.10mの地点である。下端では、東西0.83m、南北0.85mで、ほぼ正方形となる。井戸側は、ほぼ水平を保って設置されており、底板は、長軸を東西方向に合わせて、4枚敷かれた状態で検出されているが、北端部は細い棒状部材が足されている。底板は、基本的に長さ1m、幅0.21mを基準として造られており、北端のみが幅0.18mで小さいことから、当初は単に割れたものとも考えられた。しかし、両者は接合せず、また、底板が南側と北側の枠の内側に隙間なく収まるように設置されていたことから、北端部分で隙間調整が行われた結果とみることができる。東西方向は、底板の上に側材が乗る状態となるのだが、底板との間に幅15cm程度の隙間調整部材が両側に設置されていた。調整部材は、側材と接する部分が斜めに削られ断面台形状を呈し、細かな調整が施されている。水平に隙間なく設置することが意識されている。側材は、上段に行くほど残存状況が悪く、東側4段目の材は、失われていた。部材の長さは、1.2m前後を測り共通しているが、幅が下から1段目と3段目が20cm前後、2段目が35cm前後と異なり、幅の狭い部材と、広い部材を交互に積み上げていく手法をとっている。井戸側の仕口は、端部上下に方形の切り込みを入れて組み合わせている。各部材には、統一感があり、井戸構築基準の存在が想定される。掘り方埋土は、井戸側周辺が、褐灰色の粘性の強い埴土で埋められており、周辺は、灰白色の粘土ブロックを含む褐灰色埴土で埋められている。井戸側内部は、最下層が黄灰色の埴土が堆積し、ピート層を挟み、灰黄褐色の埴土が堆積している。

遺物は、掘り方からは出土しておらず、すべて井戸側内部からの出土である。ほぼ全てが最下層内から出土しており、上層内のものは、破損した井戸側部材片のみである。最下層上半部から、井戸側部材片に混じって、曲物、瓢箪製の容器、須恵器盤Aが出土している。さらに、最下層下半部の底板に近い部分から、墨書された須恵器坏Bと漆塗木製櫛が出土している。曲げ物は、「まなこ」の可能性もある。但し須恵器は完形ではない。墨書土器は、1/2個体なので文字は判別できないが、「十」か「千」が考えられる。時期は、須恵器から、8世紀中頃と考えられ、櫛の形態からも矛盾はない。

千代オオキダ遺跡周辺で横板組の井戸は、対岸の佐々木遺跡と漆町遺跡フルミヤ地区で検出されている。漆町遺跡のものは、最下部1段のみの残存で、10世紀中頃と時期も下がる。佐々木遺跡のものは、8世紀前半頃のもので、千代オオキダ遺跡のものよりやや先行する。規模も、内法で125cm四方を測る、当該時期で最大級のものであり、内部に細砂、粗砂、礫を順に敷き詰めるという水を浄化する施設をもつ。また掘り方が小さく、千代オオキダ遺跡の2段目程度大きさである。この形態の導入された遺跡は、律令的な色彩が強く、井戸の設置も飲料水を確保するためのものではなく、祭祀等に利用されたという指摘がある。事実、佐々木遺跡では、堀と溝に囲まれた有力者の居館ないし公的施設に付随したものであり、その区画の外に井戸のみが所在するという特異な立地をとる。千代オオキダ遺跡の場合も、そのような性格が考えられるのなら、この時期何らかの律令的祭祀を行う、施設の存在が想定される。時代は上がるが、付近の大溝からまとまった量の土馬が出土していることや、それ自体が信仰の対象となることも指摘されている瓦片が出土していることから可能性は高いとい

最下層遺物出土状況図



- 古代  
1号井土層注
- 1層 10YR6/2 灰黄褐色 地壌土 (炭化物プロロック少量含む。10YR7/2鈍い黄橙色軽地壌土プロロック少量含む。マンガン斑多い。)
  - 2-1層 10YR5/2 灰黄褐色 軽地土 (炭化物プロロック極少量含む。10YR7/1灰白色軽地土プロロック少量含む。)
  - 2-2層 10YR4/2 灰黄褐色 軽地土 (10YR7/1灰白色軽地土プロロック極少量含む。)
  - 3層 10YR3/2 黒褐色 泥炭 (炭化物プロロック極少量含む。10YR7/1灰白色軽地土プロロック多く含む。)
  - 3-2層 2.5YR4/1 黄灰色 重地土 (炭化物プロロック極少量含む。)
  - 4層 10YR4/3 鈍い黄褐色 地壌土 (10YR7/1灰白色軽地土プロロック多く含む。灰黄褐色～黄褐色土がプロロック状で混在している。)
  - 5層 10YR4/1 褐灰色 地壌土 (4層とはほぼ同質。)
  - 6層 10YR4/2 灰黄褐色 地壌土 (10YR7/3鈍い黄橙色軽地土プロロック多く含む。炭化物プロロック多く含む。)
  - 7層 10YR5/2 灰黄褐色 地壌土 (炭化物プロロック多く含む。)
  - 8層 10YR4/1 褐灰色 軽地土 (10YR7/1灰白色軽地土プロロック少量含む。)
  - 9層 10YR5/2 灰黄褐色 地壌土 (10YR4/2灰黄褐色軽地土プロロック多く含む。)
  - 10層 10YR6/2 灰黄褐色 壤土 (マンガン斑多い。)
  - 11層 7.5Y4/1 灰色 重地土 (7.5Y2/1黒色軽地土炭プロロック多く含む。10YR7/1灰白色軽地土プロロック多く含む。)
  - 12層 5Y4/1 灰色 軽地土 (7.5Y2/1黒色軽地土炭プロロック多く含む。)
  - 13層 10Y5/1 灰色 軽地土 (2.5Y4/1灰黄色軽地土帯状に混在する。)
  - 14層 10YR4/1 褐灰色 重地土 (地山か。)

第59図 1号 (横板組) 井戸平面図・断面図 (S=1/40)

えよう。

### 第3項 土坑

#### 19号土坑

H-45グリッドから検出された方形の土坑である。長径1.8m×短径1.44mを測る。上面はほとんど攪乱を受けており、深さ約0.06m程度しか残っていない。覆土は、灰黄褐色の壤土で埋る。遺物は少ないが、須恵器食器類や土師器食器類が出土している。時期は田嶋編年V-1期頃と考えられる。

#### 38号土坑

D-33グリッドに位置し、中世の59号の下位に残存していた部分である。凶化はしていない。遺物は少なく、須恵器瓶類や土師器食器類が出土している。時期は田嶋編年VI期以降と考えられる。

#### 56号土坑

F-45グリッドから検出された長方形の土坑である。長径1.7m×短径1.18m、深さ約0.5mを測る。覆土は、上層が灰黄褐色の埴壤土、下層が鈍い黄橙色と褐灰の埴土の混層で埋る。遺物は少なく、須恵器貯蔵具の底部が出土している。時期は田嶋編年IV-2期頃か。

#### 91号土坑

K-31グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径2.15m×短径0.9m、深さ約0.45mを測る。下層(3・4層)の褐灰色壤土が埋ったあとに、一度掘り込まれ、上層(1・2層)の褐灰色壤土が埋っている。遺物は少なく、須恵器食器類が出土している。時期は田嶋編年IV-2古期頃と考えられる。

#### 92号土坑

J・K-31・32グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径1.8m×短径1.2m、深さ約0.82mを測る。比較的深手の円筒形を呈する土坑である。水溜的な要素も考えられる。覆土は、上2層が灰黄褐色の壤土及び埴壤土、下層が黄灰色の埴壤土で埋る。遺物は少なく、須恵器食器類・貯蔵具類が出土している。時期は田嶋編年V-2期頃と考えられる。

#### 137号土坑

I・J-41グリッドから検出された楕円形の土坑で、2基の土器廃棄土坑が掘られた地区の北側に位置する。長径2.3m×短径2.2m、深さ約0.32mを測る。底部は、東側がテラス状に1段高くなっている。覆土は、上層が褐灰色の埴土、下層が黄灰色の埴壤土で埋る。部分的炭片と土器片伴う部分が見られる。遺物は、須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類が出土している。

#### 158・159号土坑

I・J-41グリッドから検出された楕円形の土坑で、2基の土器廃棄土坑が掘られた地区の北側に位置する。長径5.5m×短径2.1m、深さ約0.3mを測る長大な土坑である。当初2基の土坑と捉えていたが、調査が進むにつれ連結した1基の土坑であることが判明した。覆土は、灰黄褐色の埴土で埋る。遺物は、須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類・煮炊具が広範囲に分散して出土している。その中でも、坏A・坏Bの数が多い傾向にある。中世遺物も散見されるが、破片数全536点中7点と圧倒的に少ないため、何らかの要因で入り込んだものとする。

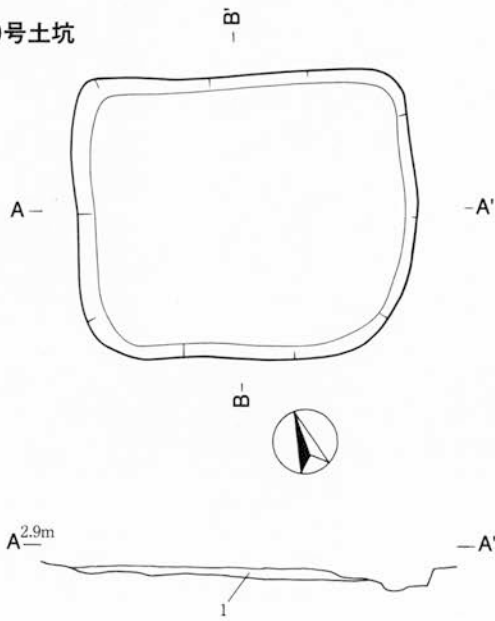
137号土坑と158・159号土坑は遺物において接合関係が認められることから、合わせて時期を検討する。遺物は、古墳時代末期の田嶋編年4様式Ⅲ期からⅥ期まで見られる。その中でもピークは、Ⅱ期後半～Ⅲ期とⅣ-2期といえ、廃棄行為が行われた時期と考える。それ以前の遺物は中世期と同様に、散発的な出方を示す。但し、Ⅳ-2期以降の遺物は、混入する可能性も十分考えられる。

#### 171号土坑

I-38グリッドから検出された土坑である。南半分は攪乱溝により、切り取られている。残存部分で長径0.8m×短径0.8m、深さ約0.3mを測る。下底面はピット状に窪む部分がある。覆土は、上層が褐灰色の埴壤土、下層が褐灰色の軽埴土で埋る。遺物は少なく、土師器煮炊具が出土している。時期は



19号土坑



19号土坑土層注

1層 10YR4/2 灰黄褐色 壤土(炭化物ブロック極少量含む。10YR5/1褐灰色軽埴土ブロック混在。)

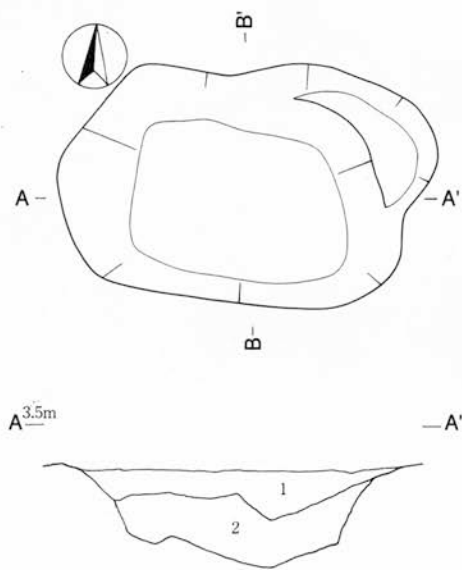
56号土坑土層注

1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土(軟質。)  
2層 10YR6/3 鈍い黄橙色 軽埴土と10YR5/1褐灰色 軽埴土の混在層(軟質。)

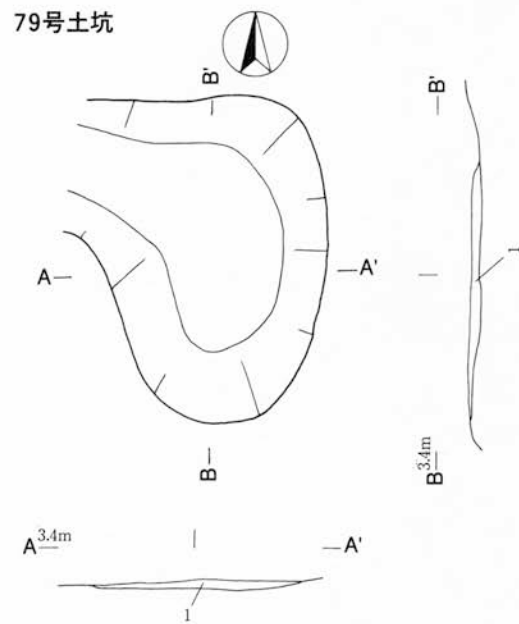
79号土坑土層注

1層 10YR6/2 灰黄褐色 壤土(白色粒極少量含む。)

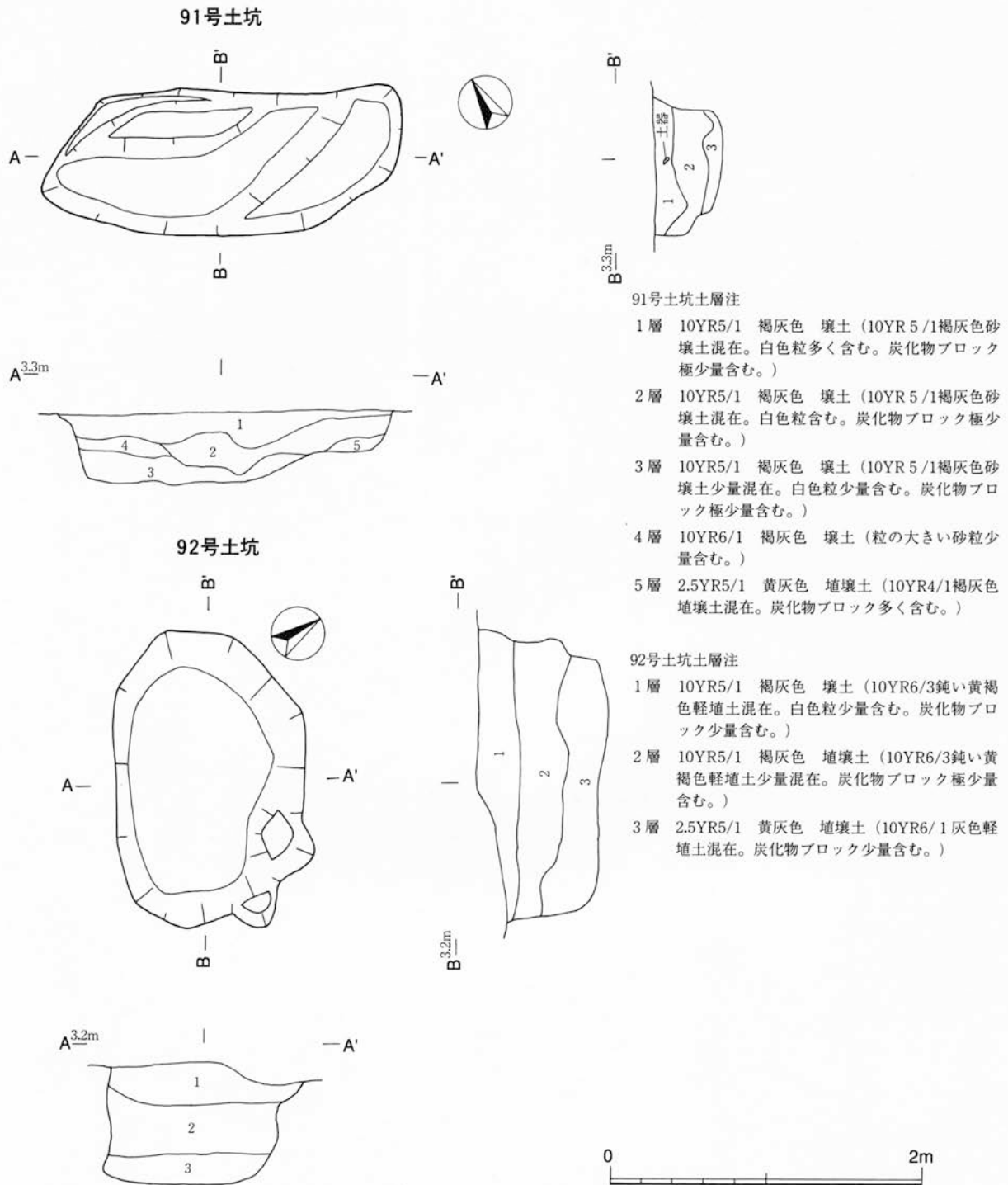
56号土坑



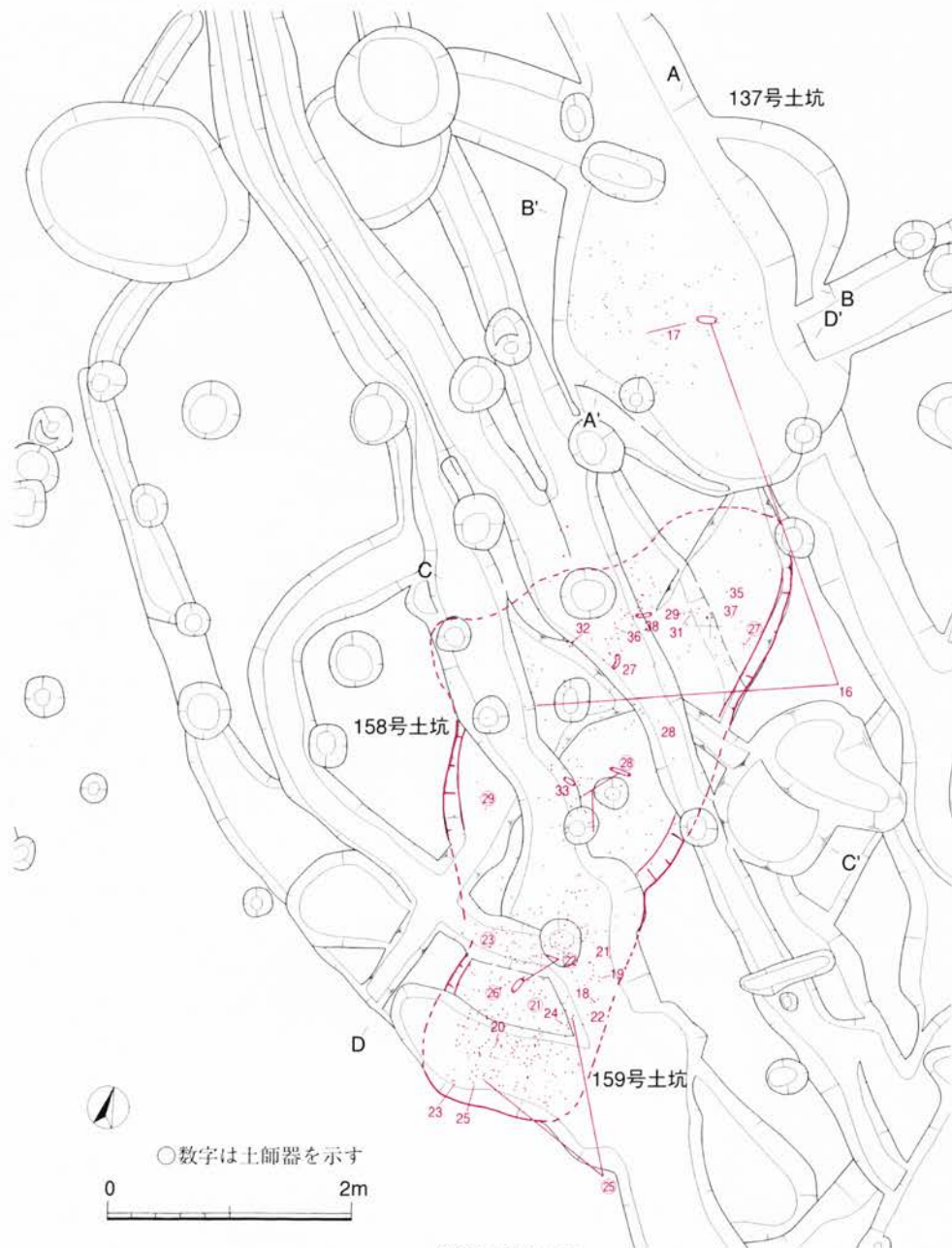
79号土坑



第60図 19号・56号・79号土坑平面図・断面図 (S=1/40)



第61図 91号・92号土坑平面図・断面図 (S=1/40)



○数字は土師器を示す

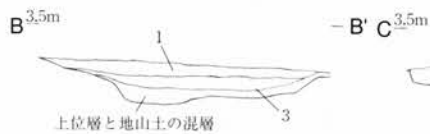
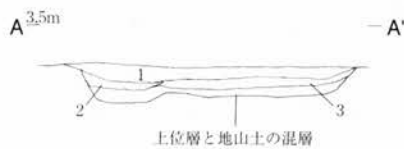


137号土坑土層注

- 1層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(遺物包含、軟質。)
- 2層 10YR3/2 黒褐色 埴壤土(炭化物ブロック含む。遺物包含。)
- 3層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(遺物包含。)

159号土坑土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 埴土(遺物包含。)



第62図 137号・158号・159号土坑平面図・断面図 (S=1/60)

田嶋編年Ⅳ－２期頃が考えられる。

#### 176号土坑

J・K-44グリッドから検出された長方形の土坑である。長径1.8m×短径1.2m、深さ約0.82mを測る。比較的壁面が直に立ち上がる土坑である。南側は攪乱により削られている。覆土は、褐灰色の埴土で埋る。遺物は比較的多く出土しており、須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類が出土している。時期は、須恵器と土師器で異なっており、須恵器は田嶋編年Ⅳ－２古期、土師器は出越編年Ⅲ－２・３期を示す。近接する130号溝は該当期の廃棄行為が行われており、両者の遺物が入りこむ可能性は十分にある。また、44グリッド以南は広範囲に攪乱を受けていることもあり、その影響を受けていることも考えられ、時期判定を困難にしている。しかし、単一層で埋まっていることを考慮すれば、土師器の年代観が示す古代末期の遺構であると判断する。

#### 193号土坑

G・H-41・42グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径3.55m×短径1.5m、深さ約0.16mを測る。底部は、比較的平坦に掘られているが、西側の立ち上がり部分のみが、緩やかな坂状を呈している。覆土は、褐灰色の軽埴土単層で埋る。遺物は少ないが、須恵器食器・貯蔵具片、土師器食器類が出土しているが、須恵器は少量の細片のみであり、混入と判断される。土師器食器の時期から、出越編年Ⅲ期頃と判断される。

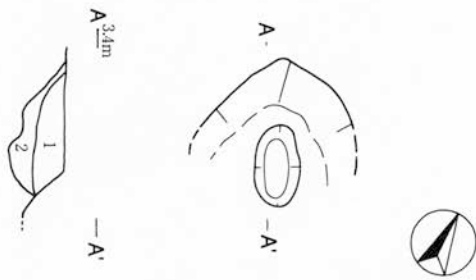
#### 196号土坑

G・H-40グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径3.2m×短径1.8m、深さ約0.3mを測る。この土坑は、全土坑で唯一床面を丁寧に整地していることが特徴である。最下層に粘性の強い埴土を敷いた後、灰黄色のきめの細かい土を敷く。続けて灰黄褐色のきめの細かい土を敷いて、さらにもう一度灰黄色のきめの細かい土を敷く丁寧な版築を行っている。但し、東側部分は、比較的仕上げが雑になっている。その上に炭が敷かれた上に、土器が２回に分けて廃棄されている。版築した床面は焼けておらず、土中にも焼土が混入しないことから、炭は敷かれたものと判断される。土器は、土師器の食器類が約90%を占め、他に、土師器鍋片、須恵器大甕胴部破片が出土している。土師器食器の内訳は、黒色土師器椀B、土師器椀B、土師器椀A、土師器小皿Ⅱなどである。特に、黒色椀B、椀B、小皿Ⅱの数が多く、その中でも小皿Ⅱの数が突出して多い。土師器は、割れた状態で出土しているが、完形ないし略完形に復元できる個体が多い。また、大きく散乱して出土している破片は少なく、個体はある程度まとまりをもった位置で出土している。廃棄回数は２回だが、土器の型式及び、両者間で接合する個体も存在することから、２回の廃棄に時期差なく、同機会に行われたと判断し、一括性の高い資料といえる。以上のことから廃棄行為を復元すると、土坑を掘り床の造成を行った後、炭を敷き、２回に分けて土器を捨てたようである。一回目は、土坑の東側に廃棄されているが、土器はさほど多くはない。２回目は、西側に廃棄されており、土器を非常に多く捨てている。また、全体としては土坑の南側に集中する傾向がある。その土器は、同じ場所で使用された可能性が高く、全ての破片が、完形に復元される訳ではなく、底部のみの個体も存在することから、使用を経ていることは確実といえる。どのような使用だったのか、祭祀性を帯びているのかどうかまでは判断できない。しかし、捨てる場所をこのようにしっかり作り上げるといことは、捨てる行為に関しては、祭祀性を認めることができると考えられる。遺物の時期は、出越編年Ⅲ－１期頃と判断され、土師器の鍋もほぼ同時期の製品と考えられる。

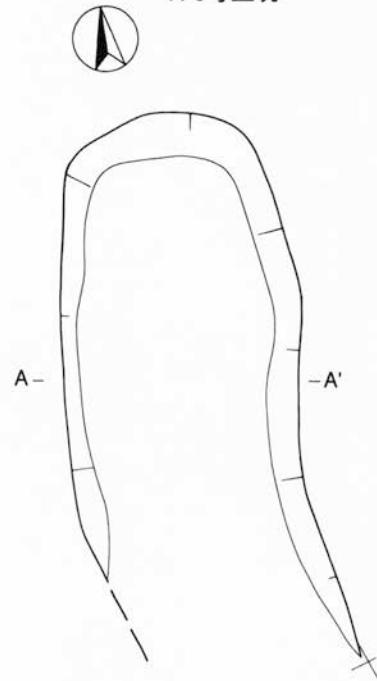
#### 214号土坑

F-44グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径1.1m×短径0.92m、深さ約0.38mを測る。底部は平坦で、壁面の立ち上がりがかたい形態である。覆土は、上層が黒褐色の埴土～埴土、中層が褐灰色の軽埴土、下層が黒褐色の重埴土で埋る。黒味が強く、粘性が強い土で埋まっていることから、水溜井戸のような用途が考えられる。また、前述のとおり千代オオキダ遺跡では、43グリッド以降は、全体的に削平を受けている。よって、この土坑も、地山面が、約20cm以上上位にあったものと考えられ、水溜としての機能を果たしたと考えられる。遺物は、須恵器壺B類が出土しており、田嶋編年

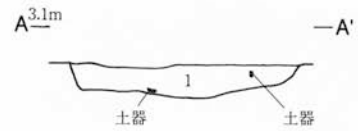
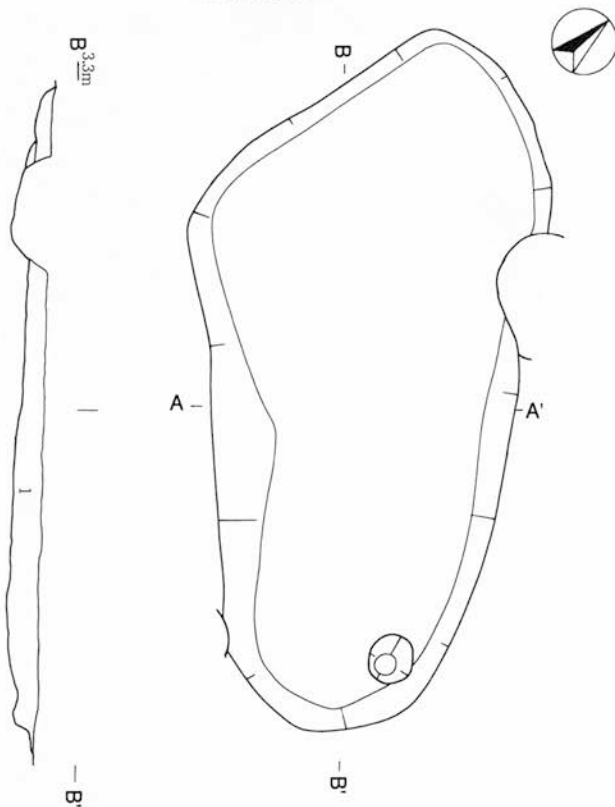
171号土坑



176号土坑



193号土坑



171号土坑土層注

- 1層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土 (10YR7/1灰白色 軽埴土少量混在。白色粒多く含む。炭化物粒少量含む。)
- 2層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土 (10YR7/1灰白色 軽埴土少量混在。)

176号土坑土層注

- 1層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土 (軟質)

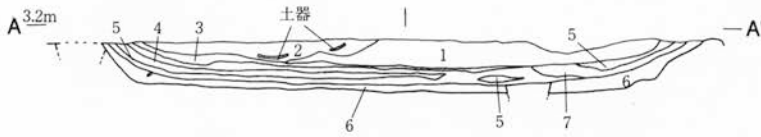
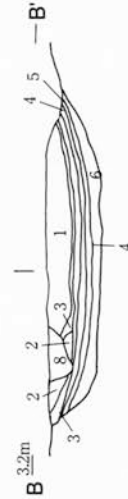
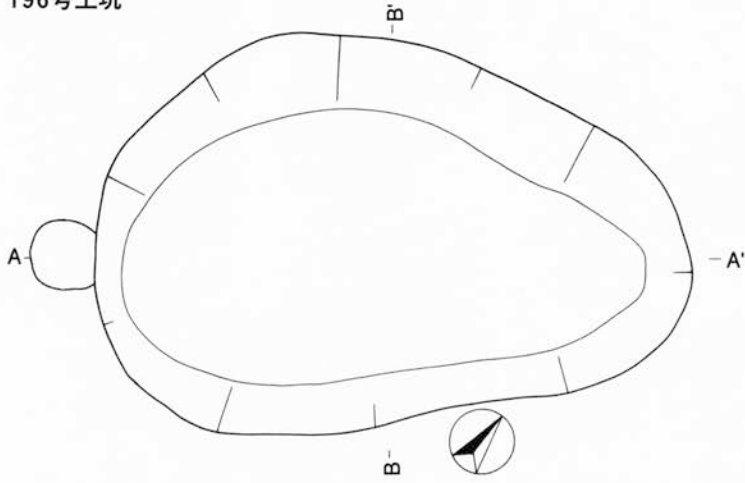
193号土坑土層注

- 2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (10YR7/3鈍い黄 褐色軽埴土ブロック少量混在。)



第63図 171号・176号・193号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

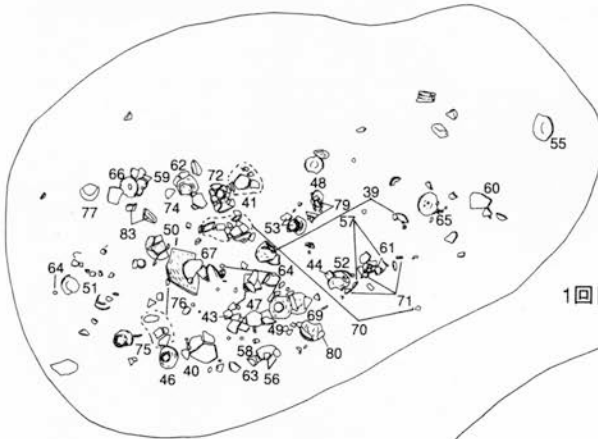
196号土坑



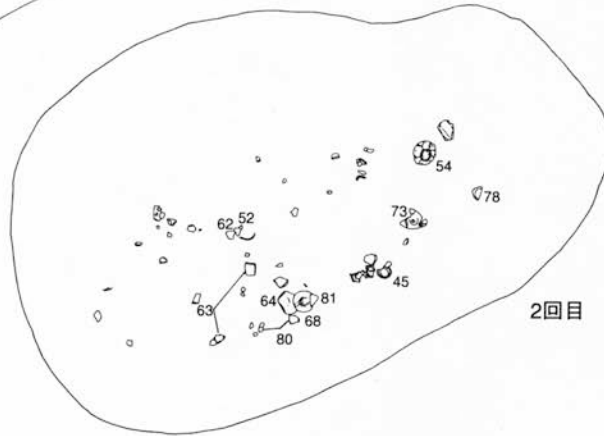
196号土坑土層注

- 1層 10YR7/8 黄橙色 埴壤土 (10YR 6/2 灰黄褐色砂壤土ブロック多量混在。非常に脆い。)
- 2層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土 (炭化物ブロック多く含む。10YR7/8黄橙色軽埴土ブロック少量含む。白色軽埴土ブロック少量含む。)
- 3層 10YR3/2 黒褐色 埴壤土 (炭化物ブロック大量に含む。白色軽埴土ブロック少量含む。炭層)
- 4層 2.5YR6/2 灰黄色 埴壤土 (10YR7/8黄橙色軽埴土ブロック少量含む。キメの細かい土。)
- 5層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土 (キメの細かい土。)
- 6層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土 (白色軽埴土ブロック少量含む。)
- 7層 10YR7/1 灰白色 埴壤土 (白色粘土ブロック多く含む。10YR5/2灰黄褐色軽埴土ブロック少量含む。)
- 8層 10YR2/2 黒褐色 軽埴土 (炭化物ブロック多く含む。白色粘土ブロック少量含む。)

遺物出土状況図



1回目



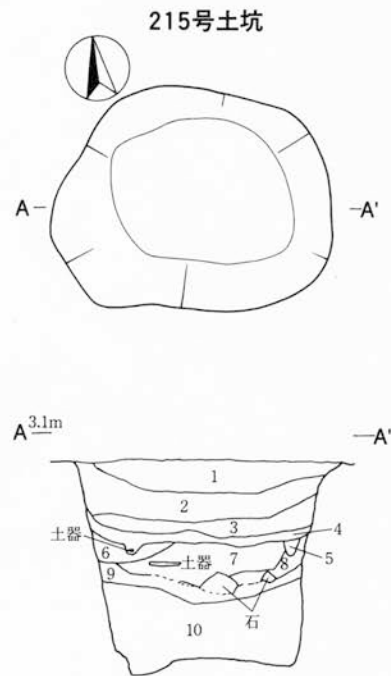
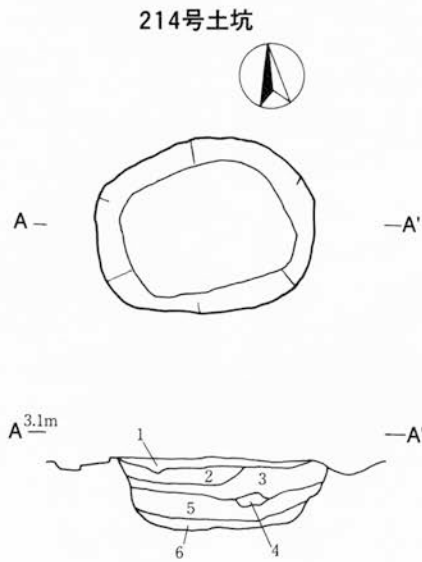
2回目

+ G-41Gr

+ G-41Gr



第64図 196号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

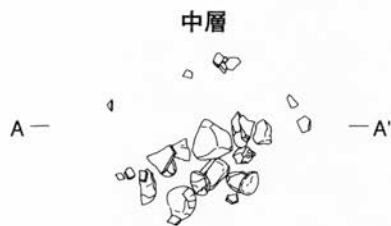
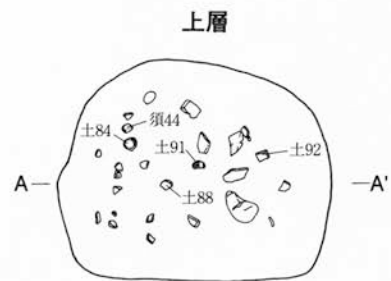


214号土坑土層注

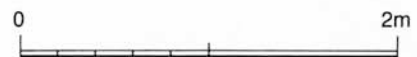
- 1層 10YR3/1 黒褐色 壤土 (10YR7/1灰白色埴土ブロック極少量含む。炭化物ブロック極少量含む。)
- 2層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土 (10YR7/1灰白色埴土ブロック大、10YR5/6黄褐色埴土ブロック含む。)
- 3層 10YR3/1 黒褐色 埴壤土 (炭化物ブロック極少量含む。10YR7/1灰白色埴土ブロック極少量含む。)
- 4層 10YR7/1 灰白色 埴土ブロック
- 5層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (炭化物ブロック大少量含む。10YR7/1灰白色埴土ブロック極少量含む。)
- 6層 10YR3/1 黒褐色 重埴土 (キメの細かい土。10YR7/1灰白色埴土ブロック極少量含む。)

215号土坑土層注

- 上層
  - 1層 10YR3/1 黒褐色 埴壤土 (炭化物粒少量含む。堅く締まる。)
  - 2層 10YR2/1 黒褐色 壤土 (遺物多い。)
- 中層
  - 3層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土
  - 4層 10YR2/1 黒色 軽埴土
  - 5層 10YR3/1 黒褐色 軽埴土 (炭化物ブロック少量含む。)
  - 6層 10YR3/2 黒褐色 埴壤土 (10YR 8 /1灰白色軽埴土ブロック含む。10YR4/3灰黄褐色埴壤土ブロック含む。炭化物ブロック少量含む。)
- 下層
  - 7層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土 (10YR4/6褐色埴壤土ブロック少量含む。10YR 8 /1灰白色軽埴土ブロック含む。)
  - 8層 10YR2/1 黒褐色 埴壤土 (10YR4/2褐色埴壤土ブロック少量含む。)
  - 9層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (キメの細かい土。炭化物ブロック少量含む)
  - 10層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (炭化物ブロック少量含む。10YR 8 /1灰白色軽埴土ブロック少量含む。)



215号土坑遺物出土状況図



第65図 214号・215号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

IV-2期頃と考えられる。

#### 215号土坑

D-45グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径1.45m×短径1.15m、深さ約1.05mで標高1.8mを測る。底部は、南端が約10cm程度下がった状態である。壁面は、急角度で立ち上がり、円筒形の形態をとる。214号土坑と同様に、上部は削平を受けており、地山面は上位にあったと考えられる。覆土は、上層が黒褐色の壤土～埴壤土、中層が褐灰～灰黄褐色の埴壤土、下層が褐灰色の軽埴土で埋る。土坑の形状や、土層の堆積状況から、井戸と考えられる。井戸使用時に下層の堆積があり、中・上層は廃棄土坑としての再利用が考えられる。特に、中層段階は、拳大の礫廃棄が行われている。上層遺物は、ほとんどが第2層部分に包含されていた。遺物は、須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類・煮炊具類が出土している。また、最下層から、曲物容器が出土しており、まなこの可能性がある。時期は、古代前半期のものは、混入と判断するが、それを除くと出越編年Ⅱ-1期（田嶋編年Ⅵ3頃）と出越編年Ⅲ2～3期頃の二時期にまとまる。特に、最下層の10層からは、前者の遺物のみが出土しており、井戸として使用された時期を示していると考えられる。中・上層は、両者の時期が混在するが、後者の時期の廃棄行為によるものと判断される。また、上層遺物は食器の底部片が比較的多いのが特徴である。

### 第4項 溝

#### 30号溝

A A-21グリッドからE-22グリッドにかけて検出された蛇行した溝である。東西方向の溝であり、東側は調査区外に伸びている。既に、上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であったため、Eグリッド以東は検出できなかった。上端幅1.23m、下端幅1.05m、深さ0.06mを測る。覆土は、灰黄褐色の埴土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。遺物は、少量だが、須恵器食器類・貯蔵具類が、出土している。時期は、田嶋編年Ⅴ期頃と考えられる。

#### 10号溝

C-20グリッドからF-23グリッドにかけて検出された並列した溝である。便宜上、西側の溝を10a、東側の溝を10bとした。両者は時期差があり、切り合いから10aの方が新しい。方角は、北北東-南南西に向かって緩やかにカーブしている。北端は、15号溝に切られており、南端は他の溝と複雑に切り合うため、後述する。10aは、幅0.7m、深さ0.12m、10bは、上端幅0.68m、深さ0.1mを測る。覆土は、10aが灰黄褐色のシルト質壤土、10bが褐灰色壤土で埋る。底面の高低差からは、北北東-南南西方向への流れであると考えられる。

10bは、F-23グリッドで東西軸へ向きを変え、L-24グリッドまで検出されており、調査区外へ伸びている。その部分では、幅1.1m、深さ0.14mを測る。但し、途中F-23グリッドからI-23グリッドまで、B-24グリッドから伸びている12号溝によって切られている。10a号溝は、その12号溝とF-23グリッドで合流して一本の溝となっている。

遺物は、少量だが、土師器の椀と小皿が出土している。時期は、出越編年Ⅲ期頃に比定される。

#### 12号溝

B-24グリッドからI-23グリッドにかけて検出された溝である。東西方向の溝であり、東側は二又に分かれ、調査区外に伸びている。F-24グリッドで、北側に緩やかに曲がって、10a号溝と合流する。既に上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。そのためか、77・78号溝に切られた部分より先は検出できなかった。幅0.9m、深さ0.1mを測る。覆土は、褐灰色の埴壤土で埋る。底面の高低差から、途中澱む部分もあるが、基本的には東から西への流れであると判断される。

遺物は、12号溝からはほとんど出土しておらず、須恵器甕片1点と土師器食器片1点のみである。



その遺物からは時期を判断することはできないが、10号溝との関係から、同時期であることが言える。

### 11号溝

A-23グリッドからL-23グリッドにかけて検出された直線的な溝である。東西方向の溝であり、東端及び西端の両側が、調査区外に伸びている。既に、上面が削られているが、比較的しっかりとした深さが残っている点が特徴である。調査区内で全長54mを検出している。断面台形状を呈し、上端幅0.5~1.0m、下端幅0.3~0.5m、深さ0.2~0.35mを測る。溝は3層堆積後に掘り直されており、K-23グリッド以西は、新しい溝が外側に掘削されている。覆土は、上層が褐灰色の埴土、下層は黒褐色の埴土で埋っており、下層段階ではある程度水が溜まっていた様である。古い段階の溝は、上下層とも灰黄褐色の埴土で埋っており、掘り直しもあったようである。このように、11号溝はその機能を維持するために、努力が払われていることが分かる。底面の明確な高低差は検出できず、ほぼ底面はフラットな状態であるため、流れの方向は明確ではない。但し、西端部分が若干東端部分に比べ下がることから、東から西への流れが意識されていたのかもしれない。また、遺物の出土が非常に少ない点も特徴といえる。須恵器食器片と貯蔵具片4点が出土しており、そのうち坏B1/2個体分のまとまった出土がある。中世期の遺物が出土しているが、破片2点のみであり、他の溝との切り合い関係を考慮すれば、人為的な混入と判断される。よって、時期は、田嶋編年Ⅳ-2~Ⅴ-1期頃と考えられる。65号溝に切られていることから、田嶋編年Ⅵ-1頃までには埋っていたことは確実である。

### 13号溝

B-25グリッドからL-25グリッドにかけて検出された直線的な溝である。既に、上面が削られているが、比較的しっかりとした深さが残っている点が特徴である。東西方向の溝であり、東端では、大落ち込み状に広がる部分を持つことが特徴である。大落ち込み部分は、17号溝と連結しており、99号溝を通して大溝である38号溝と接続している。これは、溝に溜まった水を大落ち込みに一旦溜めて大溝へ流すという、排水施設と考えられよう。西端部分も溝幅が広がる傾向を見せており、同様の施設が付随する可能性がある。その部分の溝幅は、最大幅で2.8mを測る。大落ち込みから溝が広がる箇所までの間隔は、約50mあり、半町区画程度の基準があった可能性もあろう。断面台形状を呈し、上端幅0.7~1.25m、下端幅0.3~0.45m、深さ0.25~0.35mを測る。溝は2層堆積後に掘り直されている。覆土は、上層が灰黄褐~褐灰色の埴土、下層は褐灰色の埴土で埋っている。13号溝も掘り直しの後があり、その機能を維持が図られていたようである。13号溝においても、底面の明確な高低差は検出できず、ほぼ底面はフラットな状態であるため、流れの方向は明確ではない。但し、西端部分が若干東端部分に比べ下がる傾向は観察できる。遺物は非常に多く、破片数で113点出土している。そのほとんどが、L-25グリッドの、溝幅が広がった部分から集中して出土している。内訳は、須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類が出土している。須恵器が約61%を占める。時期は、須恵器は、田嶋編年Ⅰ期~Ⅵ期まで見られる。土師器は、Ⅶ期頃（出越編年Ⅱ期後半）まで下がるものもあるが、出土量は極少ない。主体は田嶋編年Ⅲ~Ⅳ-2期頃の時期にあり、Ⅴ期以降の遺物は散発的である。

### 11号溝と13号溝の機能について

この2本の溝は、同じ方向を向いて併走していることから、第一に道路遺構の側溝であることが想定されるが、検証してみたい。両溝の共通点を挙げると、溝の形が断面台形状である点、幅や深さがほぼ同じ点、埋り方もほぼ同じで、掘り直しが見られる点、主体となる時期が重なる点が挙げられる。一方で相違点を挙げると、11号溝は、西端部分で新しい溝への掘り替えが見られる点、13号溝は、溝幅が拡大し、大落ち込み部分などが連結している点、遺物の出土量の差（11号溝が少なく、13号溝が多い）や、13号溝は古代初頭や末期の遺物も見られるなど若干の時期差がある点があげられる。ただし、形態や法量及び、埋り方に共通点があることは評価できる。さらに、掘り直しなどの、溝の維持管理行為が見出せる点も根拠と言え、11号溝の掘り替えもこの範疇で説明できる。また、13号溝に大落ち込みが設置され、さらに溝が連結して排水を行う形態は、津幡町加茂遺跡で検出された古代北陸道跡に類例がある。加茂遺跡のものも、片側側溝のみの付設であり、連結する大溝による河北潟方向

への排水となっており、13号溝と近似した形態である。加えて、両溝の内部には、当該期の遺構が見出せないことも根拠となろう。しかし、疑問点がないわけではない。第一に両者の遺物の時期差である。遺物の様相からは13号溝の方が1段階早く掘削されていた可能性が高い。ただし、廃絶時期に関しては11号溝の遺物が少な過ぎるため、判断できない。第2に、加茂遺跡で検出されたような路盤改良の痕跡はなく、道路遺構であることを積極的に示す根拠が少ない。第3に、側溝心芯からの幅で約12mを測り、過去に各地で検出された古代北陸道の例の最大幅約8mを大きく超える規模である点である。古代の主要幹線道路である古代北陸より広いという事実は、道路跡と認定することを大いに躊躇させるものである。しかし、道路遺構と認定されるのならば、古代官道の基準とされる4丈幅である点は注目に値する。

加えて、何のために付設された道路であるかという問題がある。立地から考えると、安宅駅家から、国府台地方方向へ向かう直線的な道路であることがまず想定される。遺物の時期から判断すると、主体は8世紀後半であり、加賀立国以前のものといえる。加賀立国後も維持された可能性もあるが、国衙が整備されたとされる9世紀後半～10世紀初頭以前に既に存在しているため、国衙と北陸道を連結させる道という解釈は成り立たない。8世紀後半頃の段階で、台地上に陸上交通路を付設することが必要なほどの、国家の重要施設が存在したことを想定するしかない。それが立国の際、国府設置の立地選定に影響を与えたとも言える。さらに、「千代」の地名が、「チヨ」→「チョウ」→「序」の転化であるという説についても、現実味を帯びてくるものとなろう。このように、両溝に挟まれた部分を道路遺構と判断することは、加賀国の古代史を大きく塗り替える結果を招くため、現時点の材料だけでの評価は留保せざるを得ない。今後、近隣の調査事例及び、国府台地地区の調査事例の増加を待つ判断する必要がある。それまでの課題とし、多くの方のご意見等を拝聴したいと思う。

両溝が道路側溝跡でなかった場合でも、計画的に配置されていることは間違いなく、何らかの区画を表すものであると判断できる。

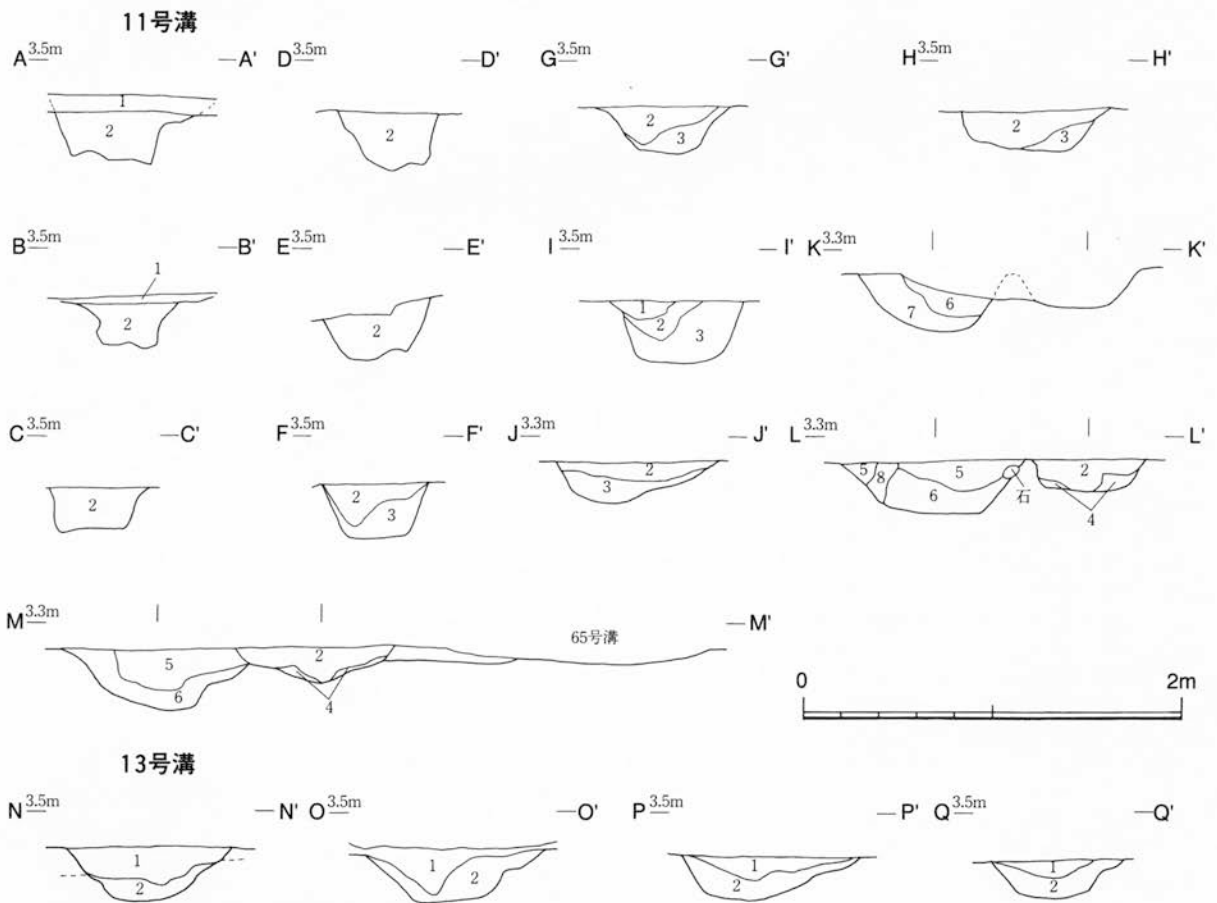
#### 1号大落ち込み・17号・99号溝

B-25グリッドからD・E-35グリッドにかけて検出された落ち込みと溝である。前述のとおり13号溝から連結した遺構である。17号溝はC-26グリッドから始まり、途中多くの中世遺構に切られている。C-31・32グリッドでは、平成11年度調査区と平成12年度調査区の繋ぎの部分に位置するため、プランを検出することが出来なかったが、99溝とは一本の溝として繋がっているものと判断される。南北方向の溝であり、南に向かって流れ、最終的には38号溝に連結している。1号大落ち込みは、確認長で南北約7m、東西約4m、深さ0.3mを測る。13号溝との取り付け部分では、一度溝幅を約3mに広げてから、落ち込み部に付くようになっている。17号溝は、幅2.9m、深さ0.3mを測り、中央部分が1段低く細い溝状となっており、幅0.4～0.5mを測る。28グリッド以南はその細い部分のみが検出されている。覆土は、1号大落ち込み部分と17号溝は共通しており、上層が灰黄褐色の軽埴土、下層が褐灰色軽埴土で埋っている。17号溝はさらに最下層に、前述の1段低い部分を中心に、褐灰色軽埴土で埋っており、断面観察から掘り直しがあったようである。

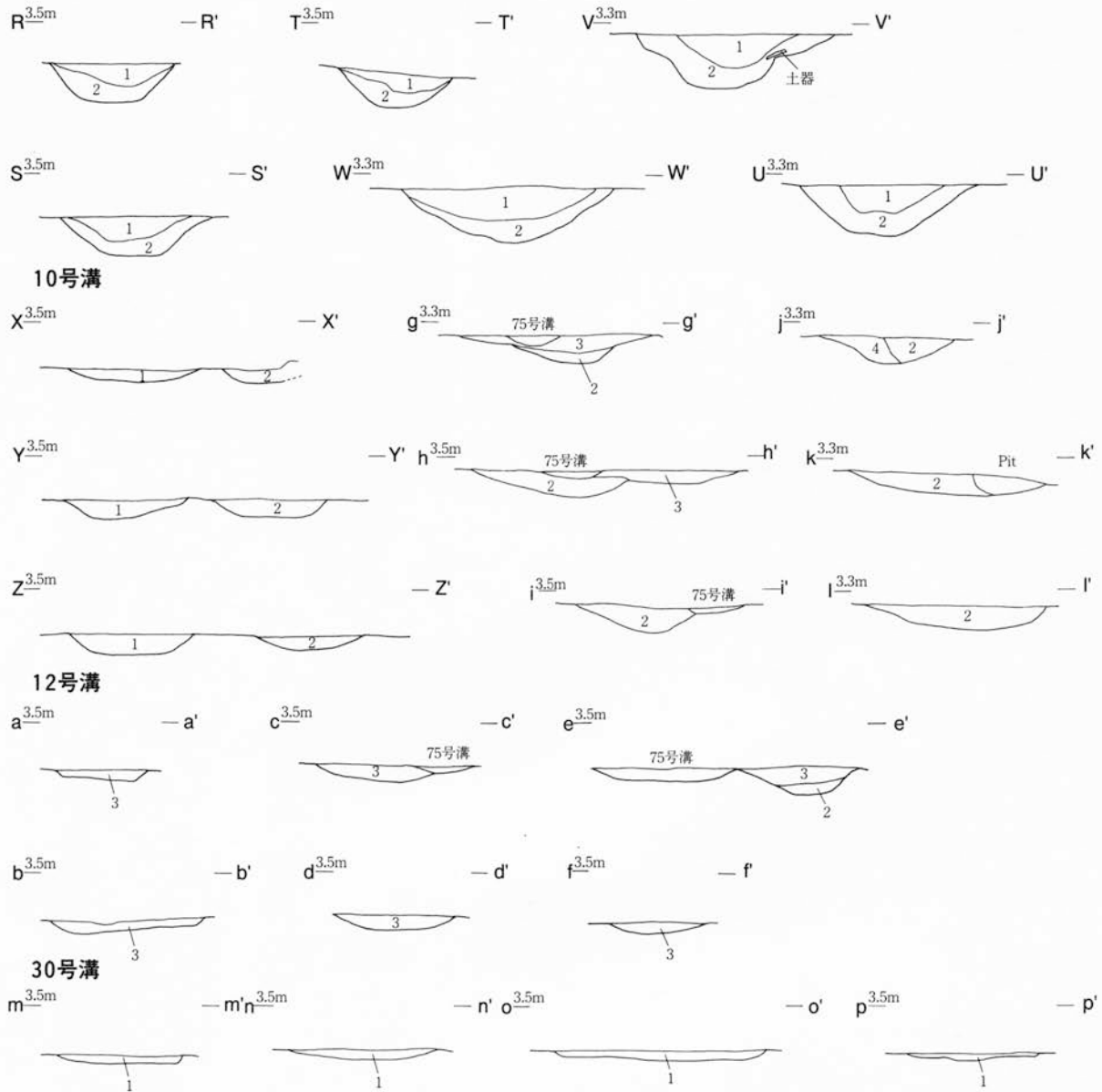
99号溝は、E-33グリッドから同方向の溝として検出されており、38号溝取り付け部分で、東に折れ、幅を広げている。幅0.8m、深さ0.3mを測り、広がった部分では、幅3.65mを測る。覆土は基本的に大落ち込み・17号溝と同じで、上下2層である。但し、38号溝取り付け部分では砂気が増しており、褐灰色の砂壤土で埋っている。

遺物は、須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類・煮炊具類が出土している。須恵器の時期は、13号溝と同時期の田嶋編年Ⅲ～Ⅵ期までであり、Ⅲ～Ⅴ期の遺物が多い。

土師器は定量出土しており、出越編年Ⅱ期～Ⅳ期まで出土している。このことから、13号溝の機能が失われても、南北に流れる溝部分は排水路として機能していたことが考えられる。但し、99号溝部分からは当該期の土師器は検出されていないため、多くの溝が混在する状況下であり、既に東側へシフトしていた可能性がある。中世以降もこの地点に集中して溝が同方向に掘られていることは、例えば地境など、この地点に重要な意味があったと考えられる。



第66图 11号·13号沟断面图 (S=1/40)



11号溝土層注

- 1層 10YR3/1 黒褐色 軽埴土 (斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。)
- 2層 10YR4/1 褐色 埴壤土 (斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。)
- 3層 10YR3/2 黒褐色 軽埴土 (10YR7/1灰白色埴土ブロック含む。有機物含む。)
- 4層 10YR7/2 鈍い黄橙色 軽埴土 (炭化物ブロック極少量含む。)
- 5層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土 (炭化物ブロック極少量含む。堅く締まる。)
- 6層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土 (10YR 7 /1灰白色軽埴土ブロック多量に含む。炭化物ブロック少量含む。)
- 7層 10YR6/2 灰黄褐色 軽埴土 (10YR 7 /1灰白色軽埴土ブロック多量に含む。)
- 8層 10YR7/1 灰白色 重埴土 (炭化物ブロック極少量含む。)

13号溝土層注

- 1層 10YR6/2~5/1 灰黄褐~褐灰色 軽埴土 (斑鉄、マンガン斑含む。軟質。)

- 2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。軟質)

10・12号溝土層注

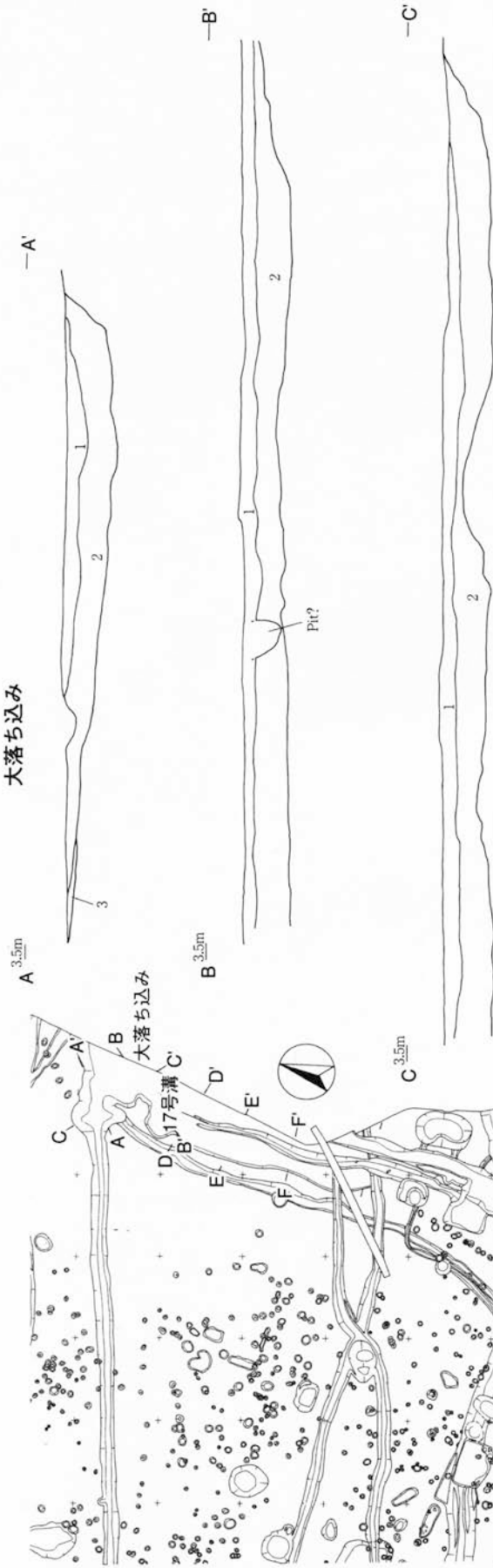
- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 シルト質埴土 (斑鉄、マンガン斑点状に含む。)
- 2層 10YR4/1 褐灰色 埴土 (斑鉄、マンガン斑含む。軟質。)
- 3層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土 (斑鉄、マンガン斑含む。)
- 4層 10YR5/3 鈍い黄橙色 埴土 (10YR 7 /3鈍い黄橙色軽埴土ブロック少量含む。)

30号溝土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土 (斑鉄、マンガン斑点状に含む。有機物含む。軟質。)

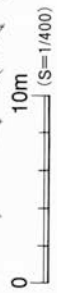
第67図 13号・10号・12号・30号溝断面図 (S=1/40)

大落ち込み

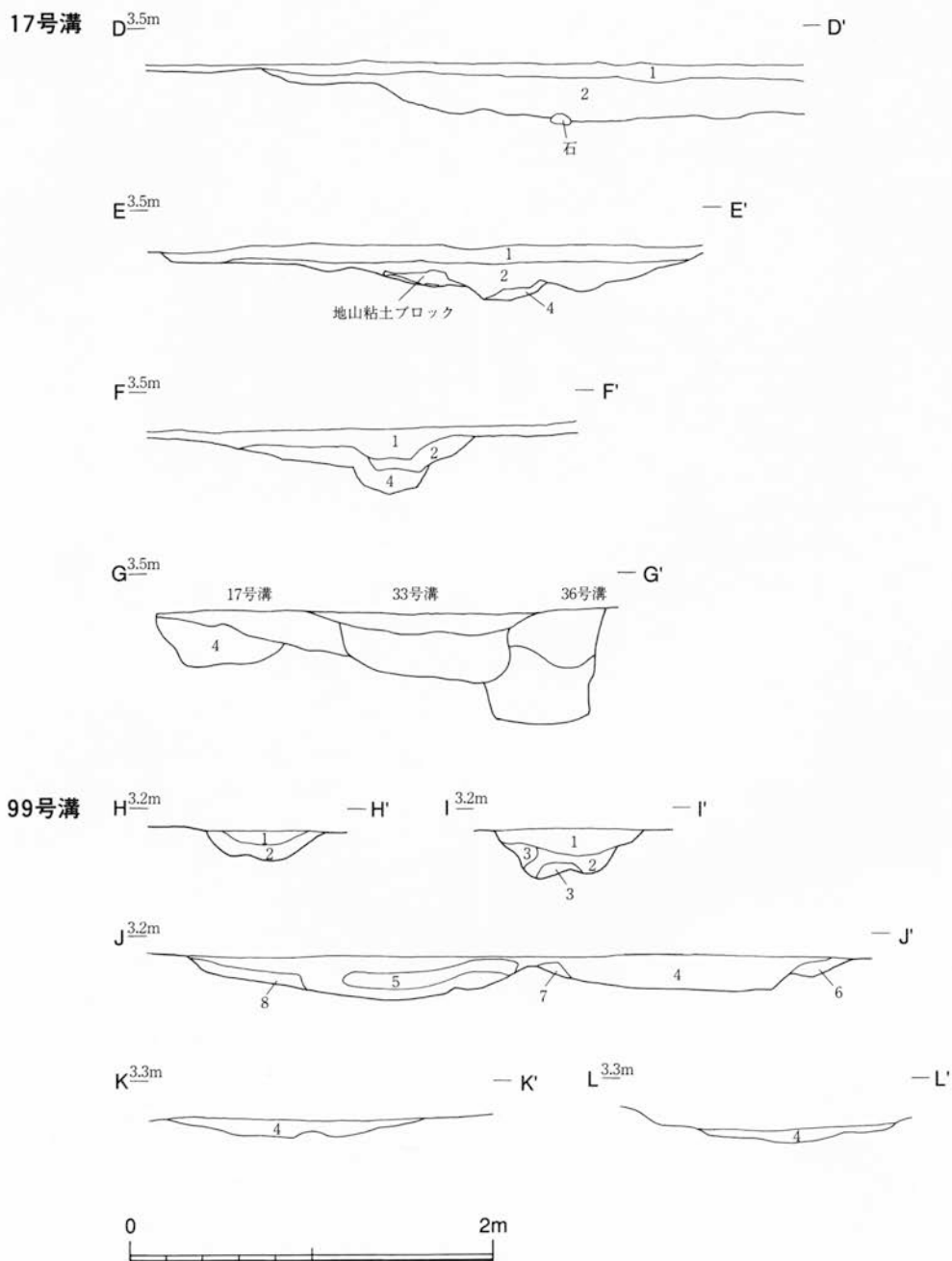


1号大落ち込み・17号溝土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土 (斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。軟質。)
- 2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。軟質。)
- 3層 10YR5/3 鈍い黄褐色 軽埴土 (斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。軟質。)
- 4層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。軟質。)



第68図 大落ち込み断面図 (S=1/40)



99号溝土層注

- 1層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土 (炭化物ブロック極少量含む。)
- 2層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土 (炭化物ブロック極少量含む。)
- 3層 10YR6/2 灰黄褐色 軽埴土 (肩部崩落土。)
- 4層 10YR5/1 褐灰色 砂壤土 (小礫含む。炭化物ブロック極少量含む。)
- 5層 10YR5/1 褐灰色 砂土 (白色粒と小礫からなる層。炭化物ブロック極少量含む。)
- 6層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土
- 7層 4層の土壤に影響され変質した地山土。
- 8層 10YR6/2 灰黄褐色 砂壤土に4層土混入。

第69図 17号・99号溝断面図 (S=1/40)

## 27・65号溝

27号溝はC-09グリッドからL-17グリッドにかけて検出された溝である。東西方向の溝であり、軸は前述の11・13号溝に比べてやや北側に振っている。底面の高低差からは、東-西方向への流れであると考えられる。65号溝は、E-10グリッドからL-23グリッドにかけて検出された南北方向の溝である。E-10グリッド部分で、27号溝から分岐した溝で、F-15グリッドでやや西側に折れ、進路を変えている。両者とも、やや角のとれた断面台形状を呈しており、調査区外へ伸びる。基本的に同じ上下2層で埋っている。27号溝は、幅0.5~0.7m、深さ0.2m、65号溝は、幅0.5~0.7m、深さ0.2mを測る。但し、県道南側調査区では、上面が削平されており、深さ10cm程度の極浅い部分しか残っていない。覆土は、上層が褐灰色の軽埴土、下層が褐灰色のさらに粘性の強い軽埴土で埋る。

遺物は、非常に少なく、須恵器食器片1点・鉢B1点と土師器食器片5点が出土している。65号溝からは、27号溝出土分と接合する鉢B片が出土したのみである。時期は、須恵器鉢Bが田嶋編年VI-1期頃、土師器食器類は小片であり時期比定は困難である。当該期の居住を示す遺構が区画内には1棟のみであり、遺物も非常に少ないことから、耕作地であった可能性が考えられる。また、護岸設備と考えられる小杭列も検出されている。この溝は何らかの区画を示しており、用水路であった可能性が高い。

## 31号溝

C-28グリッドからL-26グリッドにかけて検出された溝である。東西方向の溝であり、両端とも調査区外に伸びている。軸は、11号溝・13号溝に比べると南に振っている。断面台形状を呈し、上端幅0.9m、下端幅0.3m、深さ0.28mを測るが、K-26グリッド付近など残存状況の悪い箇所では、上端幅0.3m、下端幅0.2m、深さ0.12m程度となる。覆土は、灰黄褐色の軽埴土で埋る。断面図から、一度掘り直しがあつたようである。底面に明確な高低差は確認できない。但し、若干西側の方が高い傾向にあり、この事実のみから判断すれば、西から東への流れとなる。旧河川等の流れとは逆方向となり、疑問が残る。

遺物は非常に少なく、須恵器瓶D片1点、土師器食器片4点、中世越前焼甕片1点が出土している。須恵器と土師器は、同じ田嶋編年VI期以降を示す可能性がある。しかし、遺構の切り合い関係を検討すると、18号溝に切られており、また、18号溝は、1号井戸（78号土坑）に切られている。このことから、31号溝は、1号井戸より古いこととなる。1号井戸は、8世紀中頃と考えられるため、少なくともそれ以前ということになる。当該期遺物の出土はなく、出土した遺物は混入と判断される。特にこの区域は、中世期の土坑・井戸が密集する地域であり、人為的な営力が加わって遺物が混入する可能性は十分あると考える。

## 32号溝

C-29・30グリッドからL-28グリッドにかけて検出された溝である。東西方向の溝であり、両端とも調査区外に伸びている。断面台形状を呈し、上端幅1.85m、下端幅0.65m、深さ0.5mを測り、他の東西溝より幅が広くて深い溝である。軸は31号溝と同軸である。覆土は、他の東西溝に比べ、複雑な堆積状況を呈しており、上層は灰黄褐色~鈍い黄褐色の軽埴土で埋り、下層は褐灰色の軽埴土で埋っている。但し、Hセクション以西は、上面が削られているためか、下層部分の堆積のみの検出となる。断面図から、2回以上の掘り直しがあつたことが分かる。底面に明確な高低差は確認できない。但し、若干東側の方が高い傾向にあり、このことから判断すれば、東から西へという、他の多くの東西溝と同じ流れとなる。

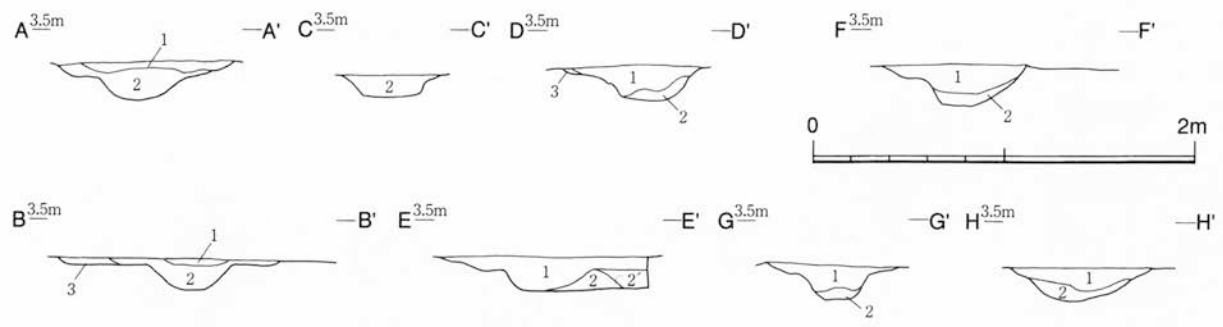
遺物は、若干の法仏~月影期の土器片、須恵器食器類・貯蔵具類片が合計9点、中世の古瀬戸・加賀鉢、珠洲壺片各1点が出土している。弥生時代後期の土器は、ある程度個体が復元される破片もないため、埋土混入と判断する。また、中世段階の遺物は、多くの中世土坑、溝が重複しており、また、その部分で攪乱も受けていることから、混入した可能性が高い。さらに、17号溝の方が上位であることから、古代期の溝という結論となる。以上を踏まえて須恵器の時期をみると、田嶋編年II-2期~IV期頃の遺物が出土している。前述の17号溝の時期を考慮すれば、II-2期頃以前の時期が妥当な時



65号沟



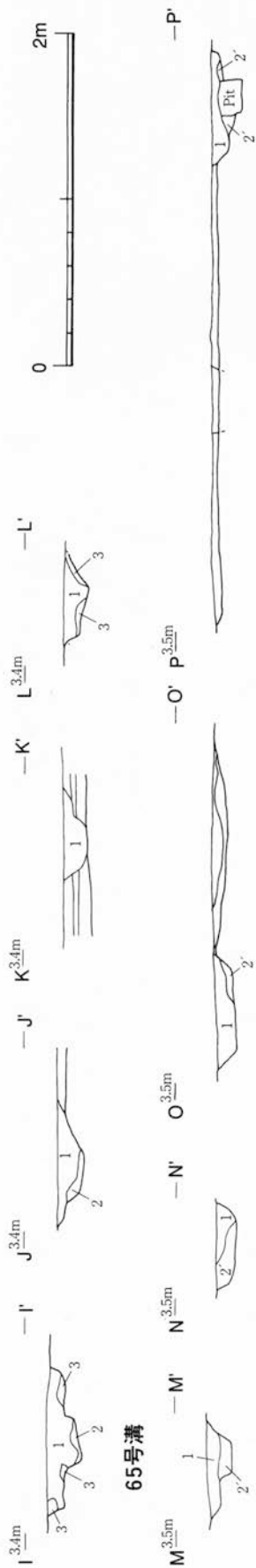
27号沟



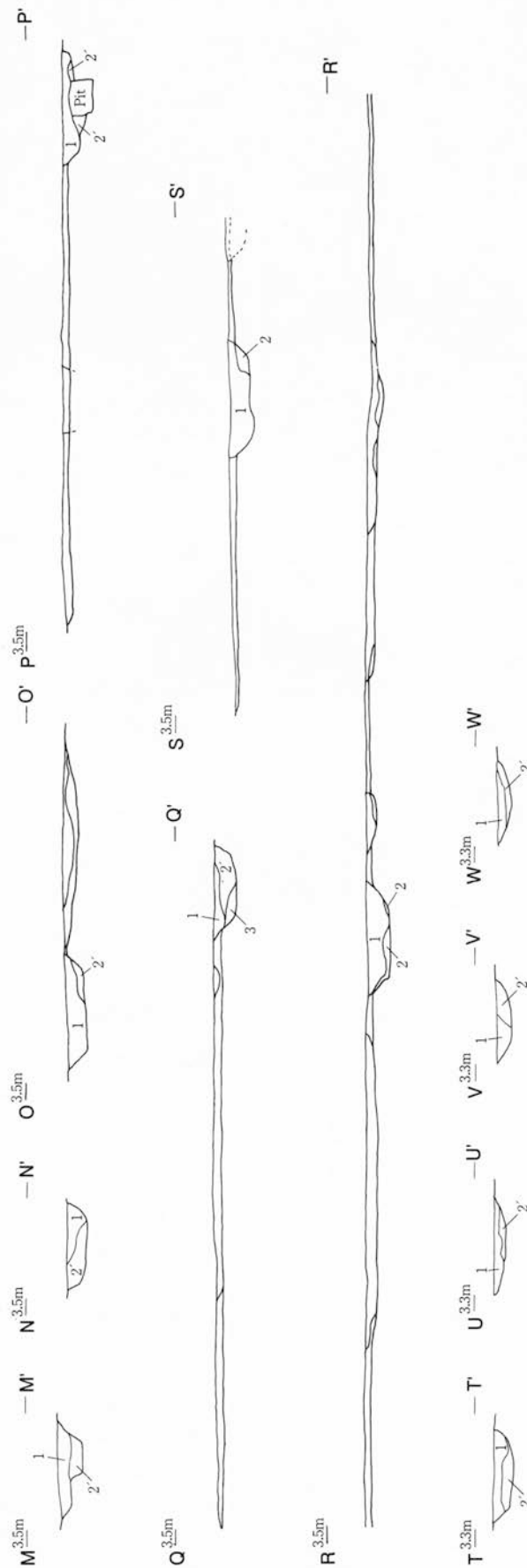
第70图 27号沟断面图 (S=1/40)



27号溝



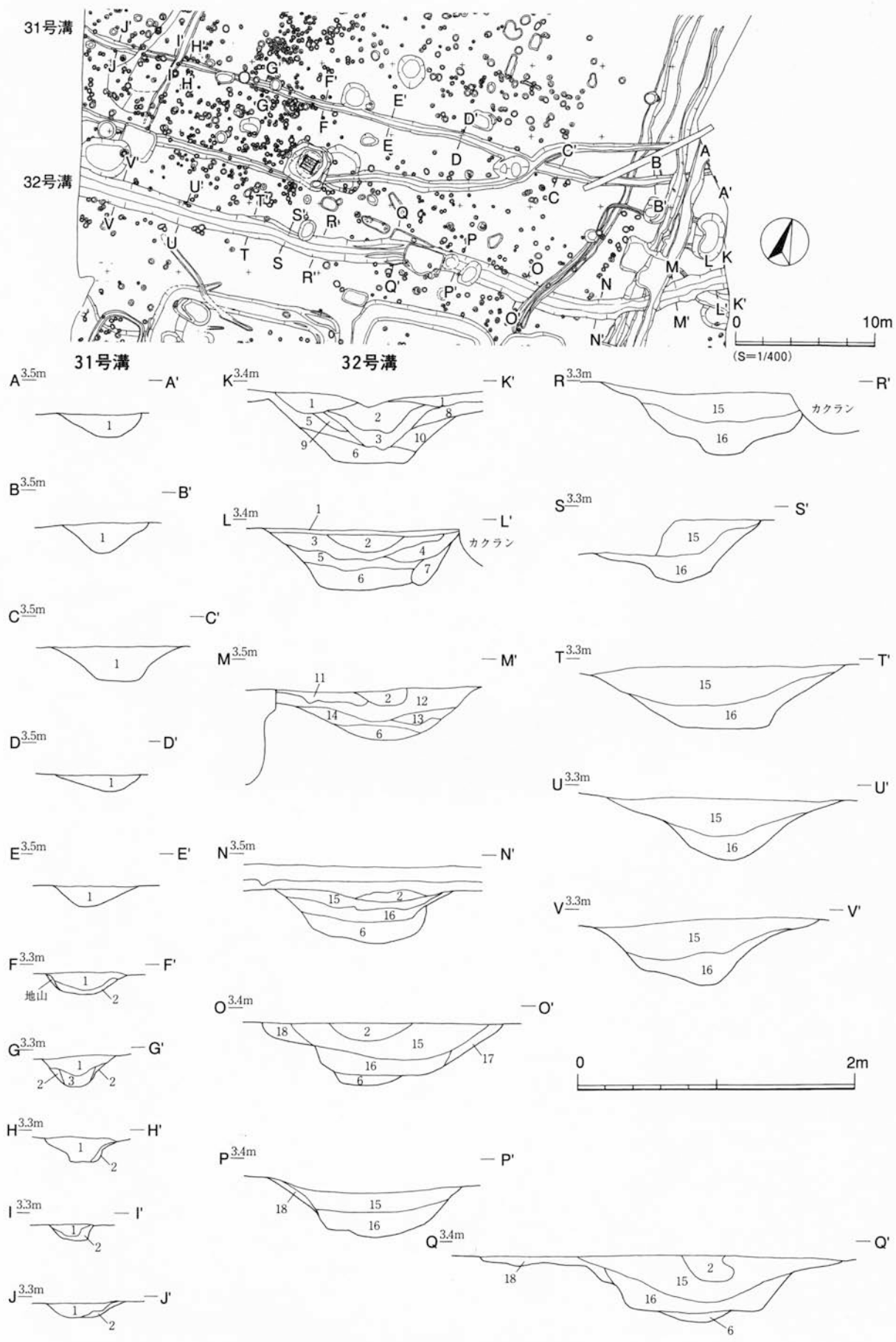
65号溝



27・65号溝土層注

- 1層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土 (炭化物粒少量含む。)
- 2層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土 (1層より粘性強く、きめ細かい。炭化物粒少量含む。10YR 6/3 鈍い黄褐色軽埴土ブロック少量含む。)
- 2'層 65号溝部分では、10YR 7/1~7/2 灰白~鈍い黄褐色軽埴土ブロックを多く含む、斑状に混在している。
- 3層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土 (10YR 7/3 鈍い黄褐色軽埴土混在する。)

第71図 27号・65号溝断面図 (S=1/40)



第72図 31号・32号溝断面図 (S=1/40)

#### 31号溝土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土（マンガン斑含む。軟質。）
- 2層 10YR5/4 鈍い黄褐色 軽埴土（10YR4/2灰黄褐色軽埴土ブロック混在。10YR7/1灰白軽埴土ブロック少量含む。）
- 3層 10YR6/2 灰黄褐色 埴壤土（10YR4/2灰黄褐色軽埴土ブロック混在し、斑状を呈す。軟質。）

#### 32号溝土層注

- 1層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土（有機物含む。堅く締まる。）
- 2層 10YR4/2 鈍い黄褐色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。堅く締まる。）
- 3層 10YR5/3 鈍い黄褐色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。堅く締まる。）
- 4層 10YR6/2 灰黄褐色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。堅く締まる。）
- 5層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。堅く締まる。）
- 6層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土（有機物含む。斑鉄、マンガン斑含む。堅く締まる。）
- 7層 10YR6/2 灰黄褐色 軽埴土（肩部崩落土。斑鉄、マンガン斑含む。堅く締まる。）
- 8層 10YR5/3 鈍い黄褐色 軽埴土（有機物含む。軟質。）
- 9層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土（有機物含む。軟質。）
- 10層 10YR5/1 灰黄褐色 軽埴土（有機物含む。軟質。）
- 11層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。軟質。）
- 12層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。軟質。）
- 13層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。軟質。）
- 14層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。軟質。）
- 15層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。堅く締まる。）
- 16層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土（斑鉄、マンガン斑含む。堅く締まる。）
- 17層 土壤に影響を受けて変質した地山土と考えられる。
- 18層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土と地山軽埴土の混在層

期と考えられる。

#### 31号溝と32号溝の機能について

この2本の溝も、前述の11・13号溝と同様に同じ方向を向いて併走している。また、同じ部分で、北方向へ緩やかにカーブしており、両者は連動した状況を見せる。時期も、両者とも遺構の切りあい関係からⅢ期以前とみるのが妥当と判断され、同時期の溝の可能性が高い。よって、これらの溝も、道路の側溝という可能性もでてくる。その仮定の上に立てば、側溝心芯からの幅で約9m（約3丈）を測り、より幅の広い11・13号溝を側溝とする道路にシフトしたという図式も成り立つ。しかし、この道路遺構も、古代北陸道の幅8mを上回っており、道路遺構と判断することが躊躇されるものである。さらに、溝の規模が大きく異なること、埋り方が異なることなど、11・13号溝に比べ否定材料の方が多。よって、道路遺構ではないと判断されるが、両溝は同じ規制の下で掘削されており、連動したものであった点は言えよう。特に、32号溝は、2m弱の幅を有し、数回の掘り直しが認められ、維持管理が図られたことから、主要な水路として機能したと考えられる。

#### 38号溝（旧河道Ⅲ-3）

ここでは当該時期の遺物を含む旧河道Ⅲ-3の報告を行う。位置及び溝の法量等は、前章を参照して頂きたい。覆土は、下層（5層）が褐灰色の埴壤土で、中層（4層）がやや暗めの褐灰色の埴壤土、上層（2層）が中層よりやや明めの褐灰色の埴壤土で埋っている。古代段階の旧河道の深さは、確認面から0.5m程度となる。

遺物は調査範囲の全体から、上層～下層まで出土する。ただし、古代段階の流れが、弥生時代後期～古墳時代初頭段階の堆積を削っているため、古代段階の溝においても、多量にその時期の土器が混入した状態となっている。多種多様な器種が、長期間に渡って廃棄されている。廃棄行為に関しては、1個体に復元された中甕の破片が、まとまった位置（離れた位置にある破片もあり）から出土してい

る以外は、溝の中に分散して破片が出土しており、流れた状況が確認できる。一般的な廃棄行為と考えられ、須恵器、土師器とも食器の数が非常に多く突出しており、その中でも坏Aが一番多い（遺物出土状況図参照）。

時期は、6世紀前半から中世Ⅰ－Ⅱ期頃（出越編年Ⅳ－Ⅰ期頃）までが認められる。時期別による廃棄傾向は、田嶋編年Ⅰ期以前は単独出土で、Ⅰ期～Ⅱ期10%と少なく、Ⅲ期～Ⅳ－Ⅰ期20%と増加傾向になる。Ⅳ－Ⅱ期が43%でピークとなり、Ⅴ期には14%と減少傾向を見せ、Ⅵ期以降は13%とⅠ期と同様に少なくなり、土器廃棄の主体は130号溝に移る。古代を通して、破損などにより不要になったものが捨てられた行為が確認でき、河道がそのような機能をもっていたことがいえる。特殊遺物としては、律令的祭祀遺物である土馬が出土している。例外的に、土馬に関してはE-37グリッド内に集中して出土する状況にある。土馬自体の形態や胎土の共通性に加え、接合関係も認められることから、同時期での祭祀行為において溝へ投棄されたものと考えられる。また、祭祀行為も、E-37グリッドに近い左岸側で行われたと推察される。時期は、土馬の形態から7世紀末頃と考えられる。土馬は、祈雨・祈止雨ないし疫病神祭祀において使用されたと考えられており、破壊して投棄していることから、当遺跡の事例もその使用法によるものであろう。

#### 52～54号溝

C-45グリッドで検出された溝である。南北方向の溝であり、ほとんどが攪乱で失われている。上端幅0.25m、深さ0.06mを測る。覆土は、灰黄褐色の砂壤土で埋る。遺物は、須恵器坏Aが1点出土しており、時期は田嶋編年Ⅳ－Ⅰ期頃と考えられる。

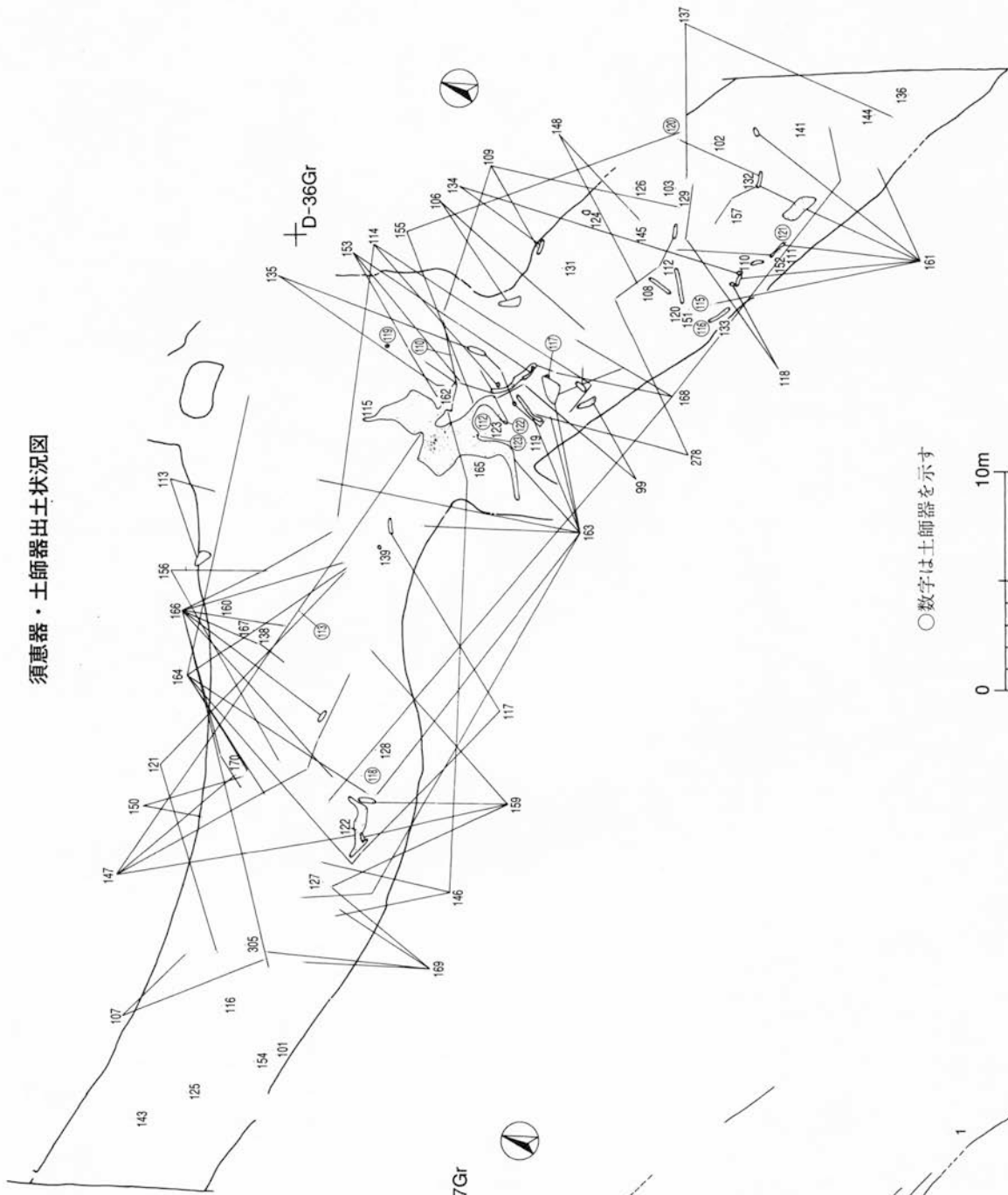
#### 85号溝

I-03グリッドからE-20グリッドにかけて検出された溝である。南北方向の溝であり、H-04グリッドでクランク状に折れている。27号溝に切られており、それ以南は検出できなかった。既に、表面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。上端幅0.9m、深さ0.04mを測る。覆土は、褐灰～灰黄褐色の埴壤土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。85号溝からは遺物の出土はなく、それ以前ということしか分からない。

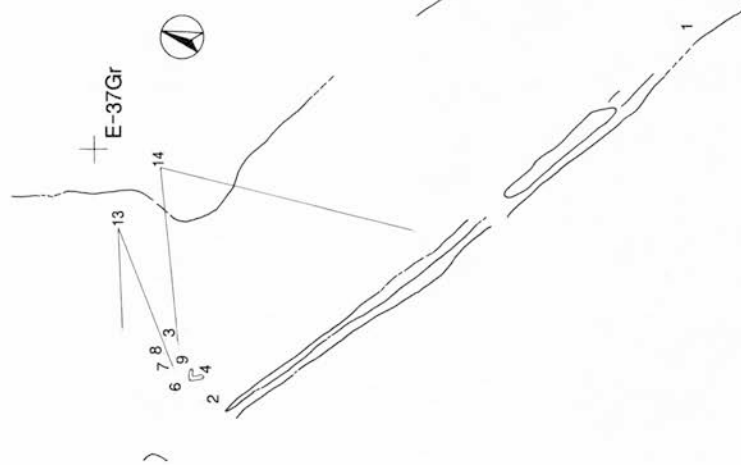
#### 130号溝

F-37グリッドの38号溝が西へ曲がるコーナー部左岸から始まる溝である。K-47グリッドへ流れる南北方向の溝で、直線的な溝ではなく、やや東西に蛇行しながら調査区外伸びている。38号溝から梯川本流へ向かって水を流していたと考えられる。I-43グリッド以南は、全体に攪乱を受けており、遺構プランに不確定さを残す。幅約1.3～3m、深さ0.2m～0.5mを測る。覆土は、上層が灰黄褐色の埴壤土、中層が灰黄褐色の埴壤土、下層が灰黄褐色の軽埴土で埋っている。特に、中・下層段階で多くの遺物が廃棄されており、総破片数で3,000点を数える。遺物の出土傾向にはまとまりがなく、祭祀的な要素は感じられず、溝が単に廃棄場であったと解釈している。但し、一部に石製紡錘車、石製榘状錘、墨書土器等の特殊遺物は出土している。長距離間接合土器もあり、溝に流れはあったようである。特に、17号溝－99号溝－38号溝－130号溝間で接合する須恵器大甕胴部破片が存在しており。これらの溝が、一連のものであることを傍証している。遺物には、弥生時代後期～古墳時代初頭の遺物が少量出土しているが、38号溝からの流れ込みと判断される。そのことは、遺物の破片の小ささ、磨耗度の高さ、接合率の悪さに加え、約20m以上離れるような長距離間で接合することからも判断される。古代遺物の出土量は、38号溝に比べ多く、130号溝の方が廃棄場として主体をなしていたと考えられる。多種多様な機種が、長期間に渡って廃棄されている。須恵器・土師器とも食器の数が、非常に多く、その中でも古代前半期には坏A、古代後半～末期には土師器椀A・Bの数が突出して多い。最古の遺物は、TK47～MT15型式（6世紀初頭頃）の須恵器坏H蓋片である。田嶋編年Ⅰ期以前の遺物は、単独出土の様相が強い。最新の時期は田嶋編年中世Ⅰ－Ⅱ期頃（出越編年Ⅳ－Ⅲ期頃）までが認められる。時期別による廃棄傾向は、古代前半までは38号溝とほぼ同様の傾向を示し、Ⅰ期～Ⅱ期は2%と少なく、Ⅲ期～Ⅳ－Ⅰ期に11%と増加傾向に転じ、Ⅳ－Ⅱ期に25%とピークとなる。Ⅴ期には14%減少傾向に転ずるものの、38号溝に比較して、多くの廃棄量が維持される。この時期より、土器廃棄場

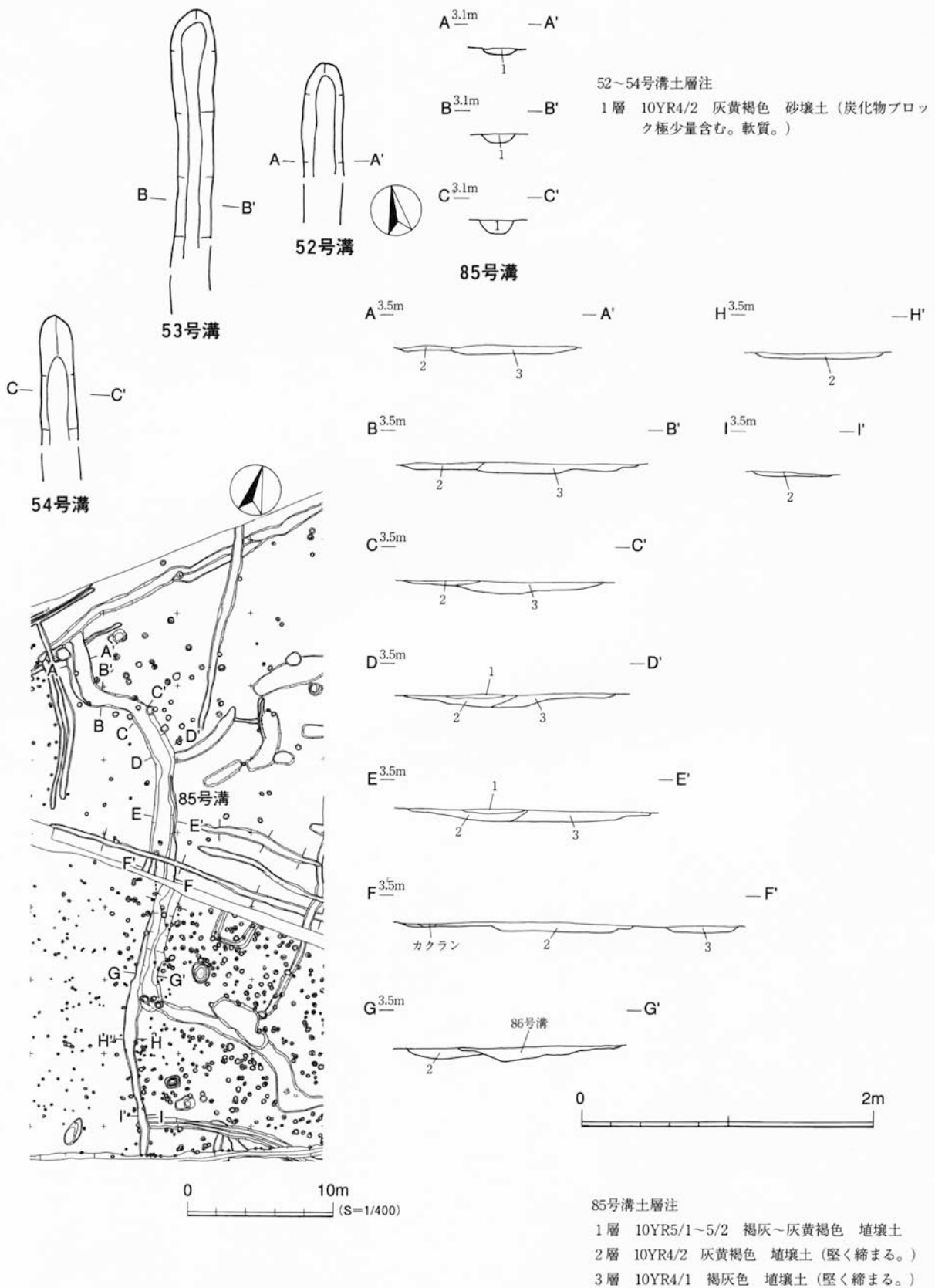
須恵器・土師器出土状況図



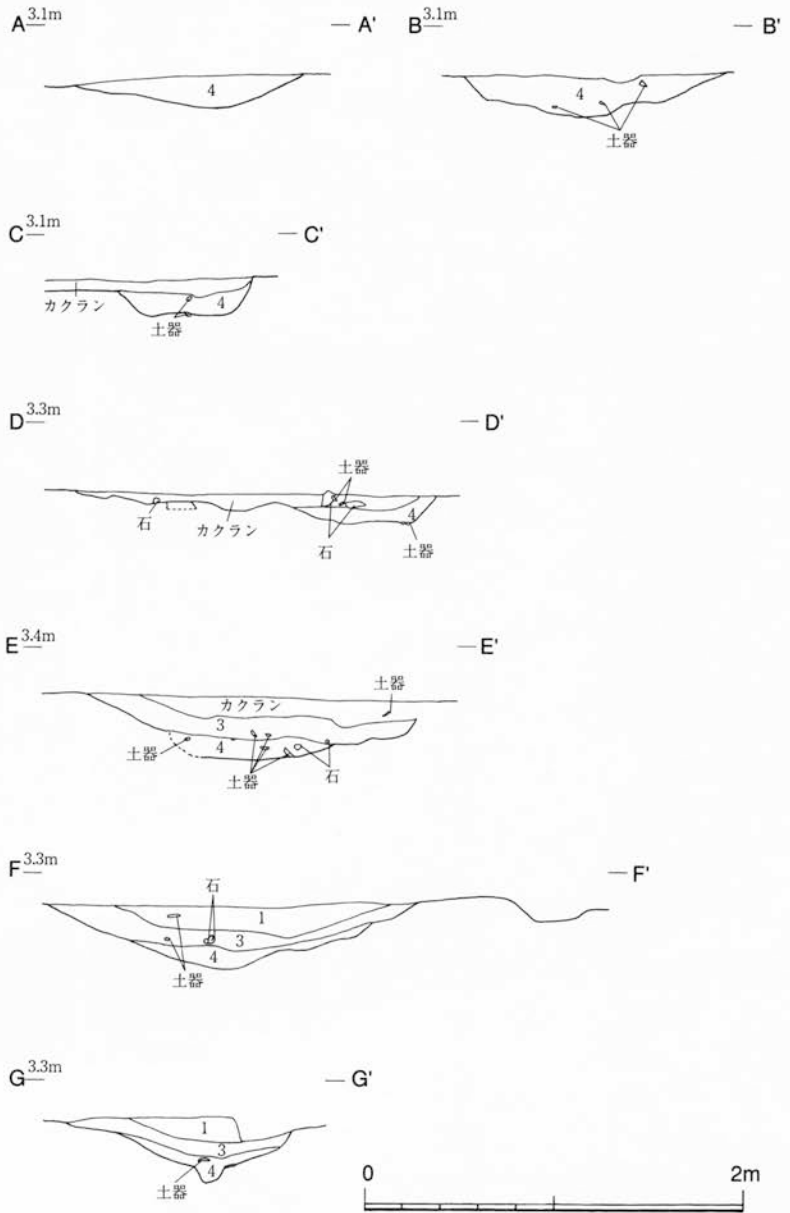
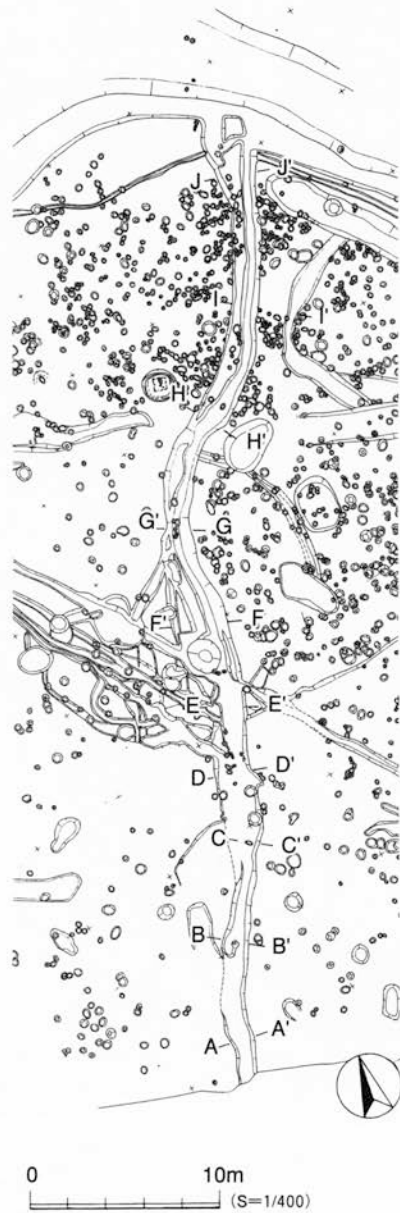
土師質土馬出土状況図



第73図 38号溝遺物出土状況図 (S=1/300)

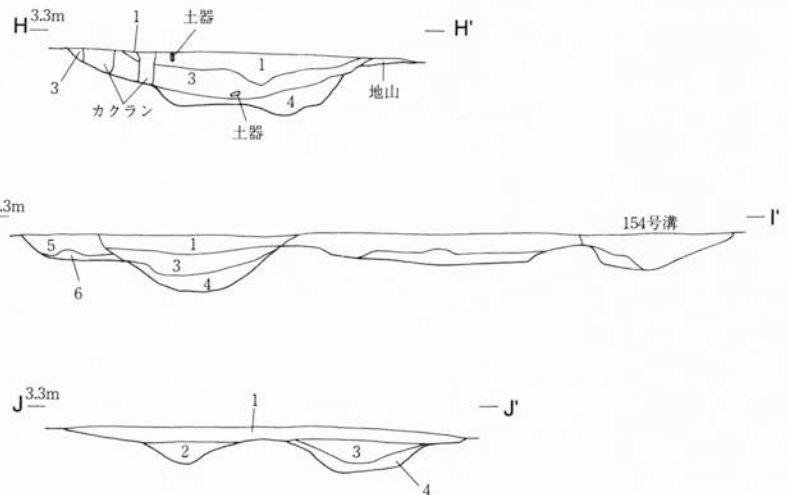


第74図 52号・53号・54号溝平面図・断面図、85号溝断面図 (S=1/40)



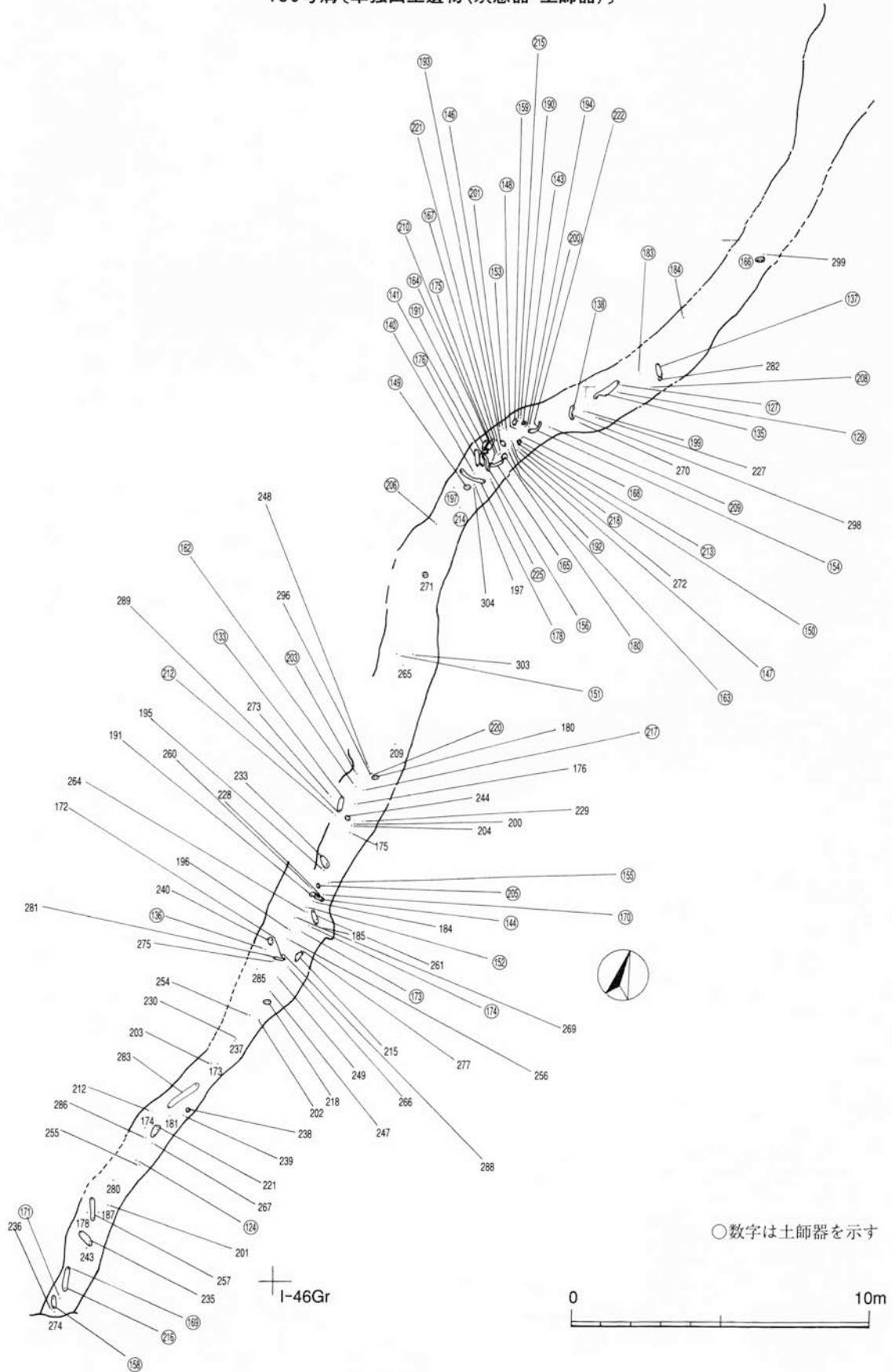
130号溝土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土 (炭化物ブロック少量含む。白色粒少量含む。軟弱。マンガン斑多い。)
- 2層 10YR6/2 灰黄褐色 砂壤土 (炭化物ブロック多く含む。白色粒少量含む。軟弱。マンガン斑多い。)
- 3層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土 (炭化物ブロック少量含む。白色粒やや多く含む。)
- 4層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土 (炭化物ブロック極少量含む。白色粒少量含む。)
- 5層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土 (炭化物ブロック極少量含む。白色粒極少量含む。マンガン斑少量含む。)
- 6層 10YR7/2 鈍い黄橙色 軽埴土 (マンガン斑少量含む。)



第75図 130号溝断面図 (S=1/40)

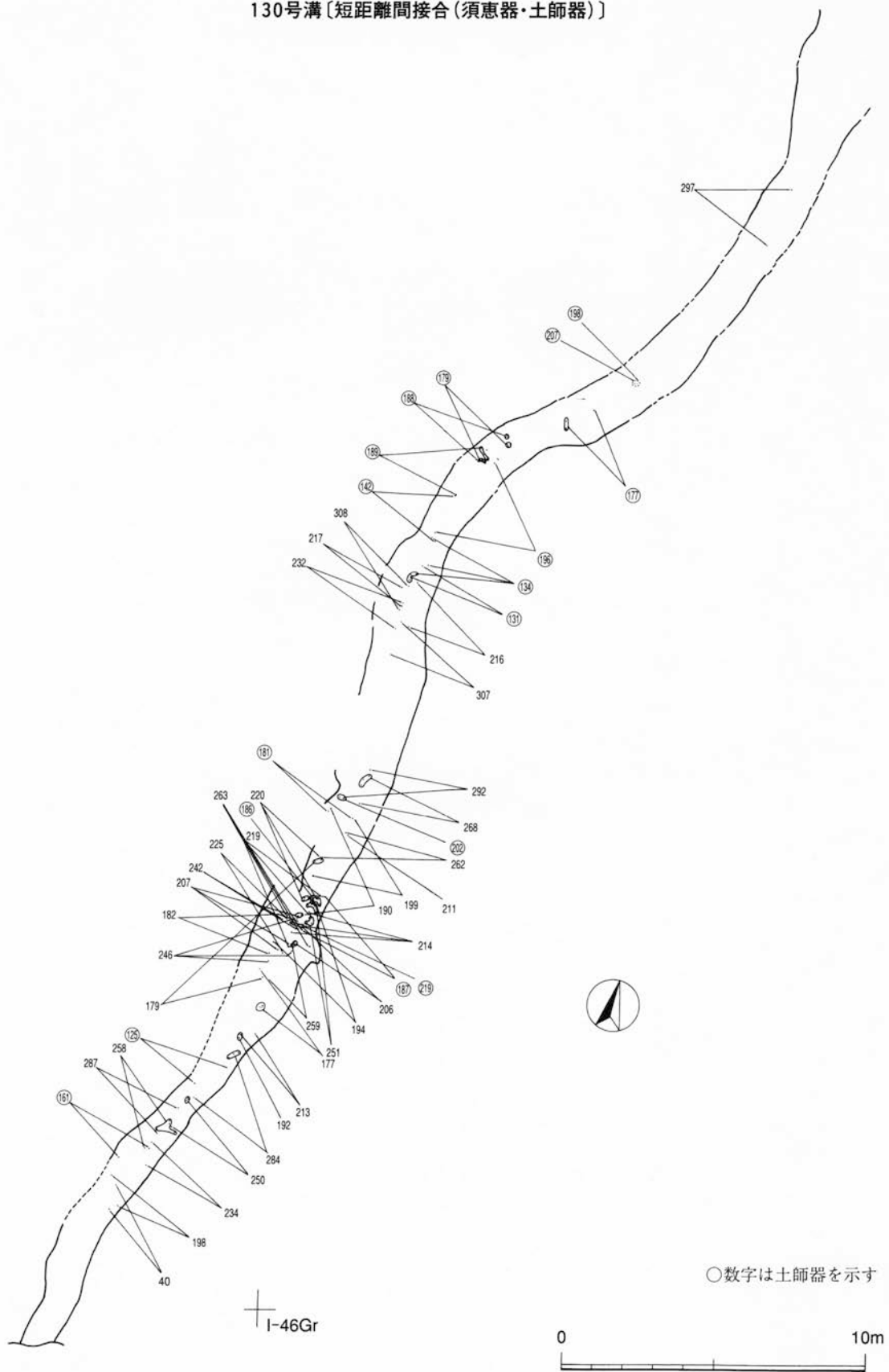
130号溝〔単独出土遺物(須恵器・土師器)〕



第76図 130号溝遺物出土状況図 (S=1/200)

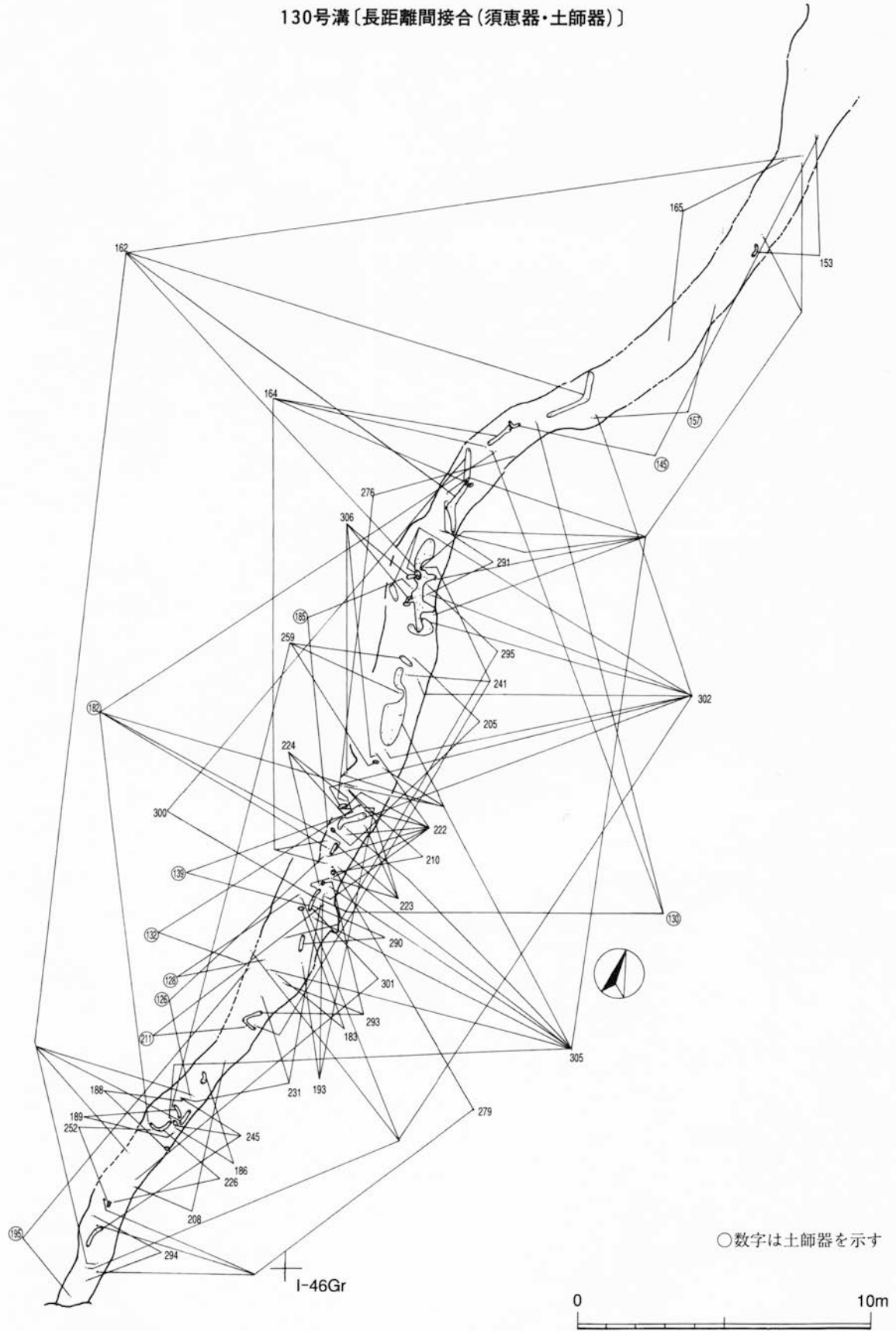


130号溝〔短距離間接合(須恵器・土師器)〕



第77図 130号溝遺物出土状況図 (S=1/200)

130号溝〔長距離間接合(須恵器・土師器)〕



第78図 130号溝遺物出土状況図 (S=1/200)

としての比重が、38号溝より高くなっていく。Ⅵ期は9%で、同様の傾向が維持されており、Ⅶ期(19%)～中世Ⅰ-Ⅰ期(16%)(出越編年Ⅱ2期～Ⅳ-1期)に増加して古代後半期期のピークを迎えている。中世Ⅰ-Ⅱ期(出越編年Ⅳ2・3期)に入ると、4%と減少するものの、廃棄が維持されている状況にある。

#### 131号溝

Ⅰ-41グリッドからⅡ-42グリッドにかけて検出された溝である。130号溝から分岐した溝であり、Ⅱ-42グリッドで弧状に曲がり、130号溝に再び接続していたと考えられる。幅0.5m、深さ0.16mを測る。覆土は、灰黄褐色の軽埴土で埋る。遺物は、少量だが、須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類が出土している。須恵器の時期は、田嶋編年Ⅴ期頃と考えられる。土師器食器類は、実測可能な破片がなかったが、出越編年Ⅲ期頃のものがある。しかし、切り合いから、158号・159号土坑より下位であることがいえ、田嶋編年Ⅱ期より前であると判断されるが詳細は不明である。

#### 139号溝

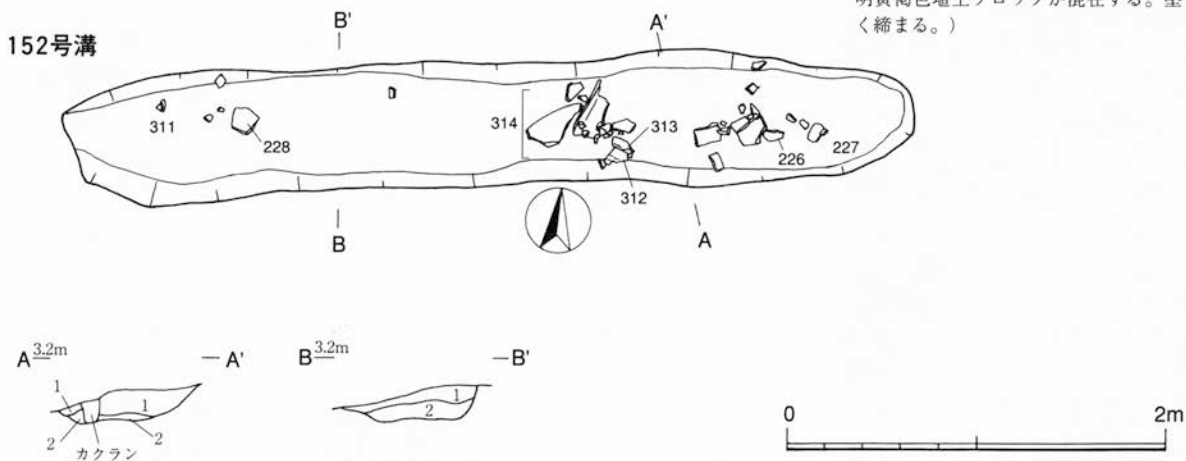
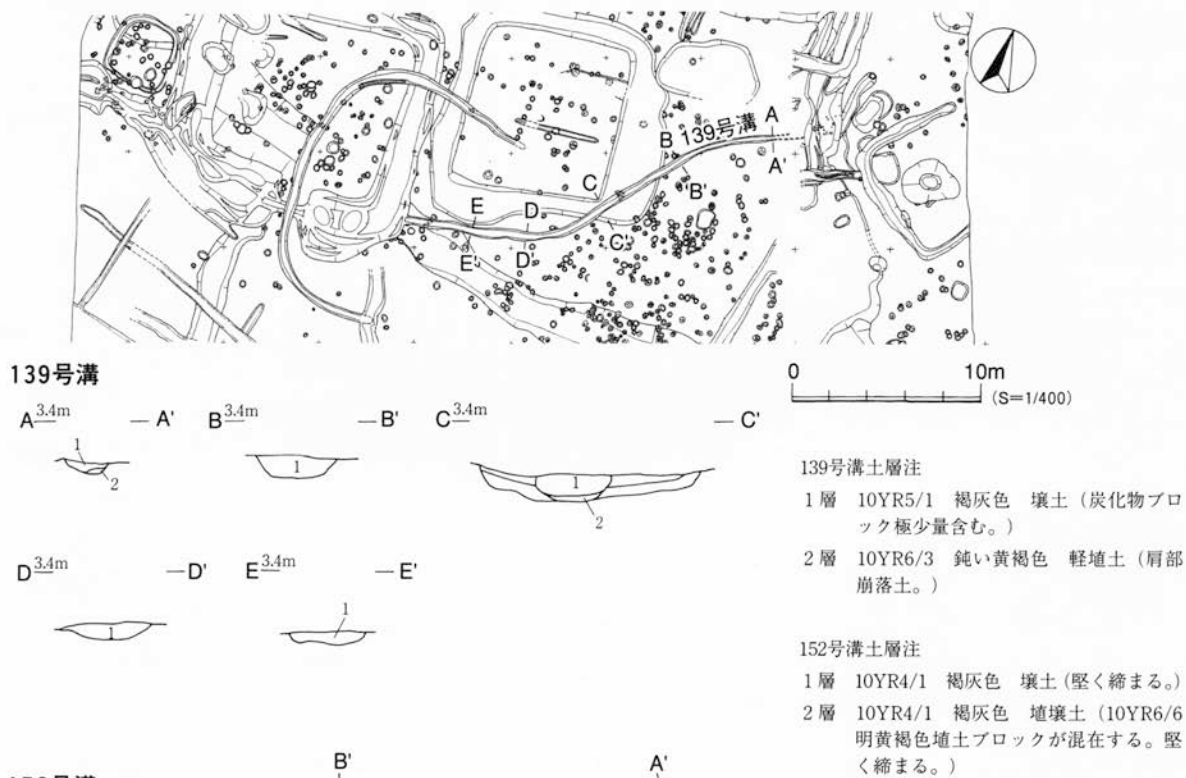
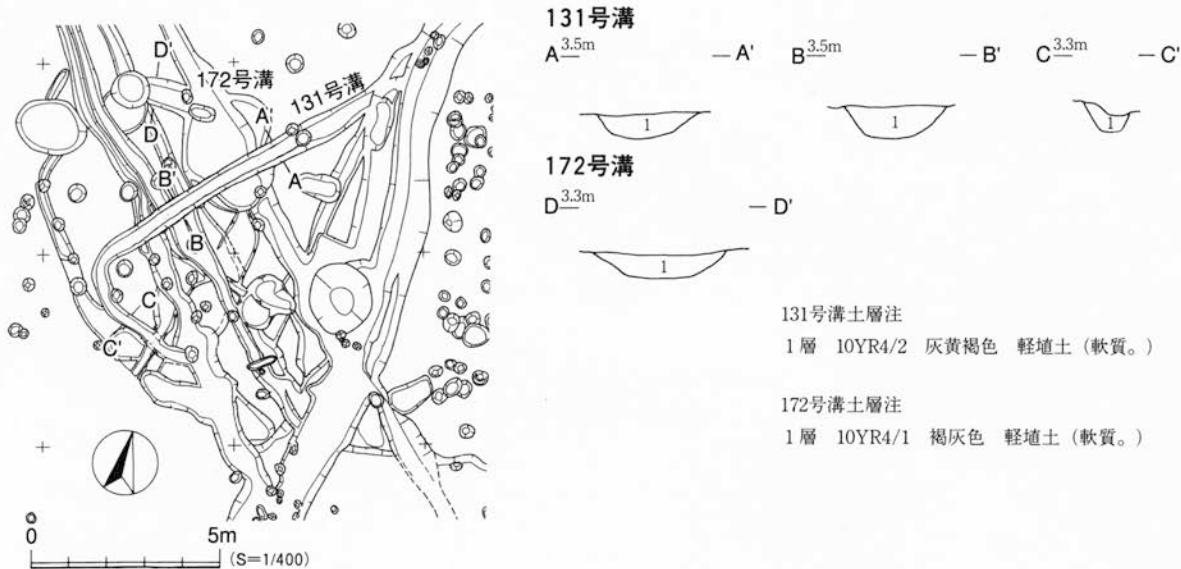
Ⅴ-31グリッドからⅡ-32グリッドにかけて検出された溝である。東西方向の溝であるが、Ⅴ-32グリッドで曲がって、南へ5mほどシフトしている。溝の両端のプランは不明瞭で、検出できなかった。上端幅0.45m、深さ0.12mを測る。覆土は、褐灰色の壤土で埋る。遺物は、須恵器瓶Dが1点出土しており、時期は田嶋編年Ⅵ-2期頃と考えられる。

#### 152号溝

Ⅴ-43グリッドからⅥ-43グリッドにかけて検出された溝である。東西方向の溝であるが、調査区全体が1段削られたグリッドへと移る境目に位置しているため、その影響をうけている。よって、溝の両端はさらに延びるものと考えられる。幅0.7m、深さ0.18mを測る。覆土は、上層が褐灰色の壤土、下層が褐灰色の埴土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。遺物は、須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類・煮炊具類が出土している。時期も6世紀中頃の土師器の椀から、古代末期の土師器食器片(実測可能遺物なし)まで多岐に渡る。雑多な印象を受け、前述の攪乱の影響を受けているものと考えられる。しかし、田嶋編年Ⅱ期頃と考えられる須恵器大甕の破片は、比較的まとまって出土しており、38号溝-130号溝-137号土坑と接合関係にあることから、この時期を一つの定点としておきたい。但し、遺構の年代としては、大甕の破片であるため長期の使用期間を考慮する必要もあり、再考の必要もあるが、ここでは接合関係にある137号土坑と同時期と考える。

#### 172号溝

Ⅱ-41グリッドからⅡ-42グリッドにかけて検出された溝である。131号の外側に位置する半弧状の溝である。上端幅0.7m、深さ0.14mを測る。覆土は、褐灰色の軽埴土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。遺物は、少量だが、須恵器貯蔵具類、土師器食器類が出土している。時期は、土師器の年代から出越編年Ⅲ-2期頃と考えられる。



第79図 131号・172号・139号溝断面図、152号溝平面図・断面図 (S=1/40)

## 第 6 節 中 世

中世の遺構は、土師器の年代を基準として藤田編年Ⅲ期（14世紀中頃）までを中世前期とし、Ⅳ期以降を中世後期として分けて報告したい。このため、掘立柱建物の図版がやや見づらくなってしまった点は、お詫び申し上げます。古代末期の遺物を含むが中世まで存続し、時期をまたぐような遺構はこちらに含めた。

### 第 1 項 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は36棟検出している。掘立柱建物跡は側柱建物と総柱建物がある。そのなかで、総柱建物は中世前半期建物で主体的であり、側柱建物は中世後半期建物で主体となるようである。柱穴掘り方は小型の物が主体で、柱列が歪んだものもある。調査区の攪乱を受けた状況は、古代掘立柱建物の記載に準ずる。特に、県道北側調査区の建物認定にも、同様に疑問点が残る。ただし、中世期の包含層遺物が北側調査区で多く出土する状況にはある。主軸は様々な方向が見られる。ある程度は時期別でまとまっていると考えられるが、古代建物ほどの規格性は観察されない。また、検出されたピット数を考えると、全てを抽出出来ていないと考えられるが、これ以上現状では認識することができなかった。以下、個別の掘立柱建物跡の解説を行うが、詳細は掘立柱建物跡寸法表を参照して頂きたい。

#### 1. 中世前期

##### 1号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×2間の側柱建物である。梁行の南側1間が狭い間隔となっている。東側梁行が西側より長くなっているため、平面プランは台形状に歪む。柱穴の大きさは、比較的均質である。出土遺物として中世土師器片のみが出土しているため、中世建物と位置付けたが、小片であり詳細は不明である。その位置付けにも疑問は残る。

##### 7号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×3間の総柱建物である。南東隅部の柱穴が調査区外に位置する。桁行において、東側1間分が狭い配置となっている。その間隔のままに延長するように、北側に1間分の張り出しが付随している。その張り出しは、建物端までは延びず、2間目までである。2×2間の身舎に対し、北東側隅部に「L」字状に廂ないし縁がつくような建物の可能性もある。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、近接する12・13号掘立と主軸方位が類似していることから、同時期と推察される。総柱建物という建物形式から中世前半期建物と位置付けられようか。

##### 9号掘立

北より西方向に主軸を向けた側柱建物である。建物の大部分が調査区外にあり、西側桁行きの柱列と南側梁行2間分を確認したのみであるが、大型の建物と予想される。桁行は4間が予想され、南側1間分の柱間が広い配置をとる。出土遺物は中世土師器皿片と加賀焼小片があり、時期は藤田編年Ⅲ-Ⅱ1～Ⅱ2期頃に位置付けられる。

##### 10号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた側柱建物である。建物南西隅部のみであり詳細は不明である。比較的柱間寸法の狭い、均等な柱配置をとる。柱筋の通りも良い。出土遺物は無く、時期不祥である。重複する建物の前後関係から中世前期に位置付けた。

##### 11号掘立

北より西方向に主軸を向けた3×?間の総柱建物である。建物南側が調査区外へ延びるため、桁行方向は確認できていない。確認範囲における桁行方向では、均等な柱配置をとる。ただし、東側桁行の柱列がやや外側に広がる傾向にあり、平面プランがやや台形状になると予想される。遺物は中世土

師器皿片と、加賀焼の破片が出土している。加賀焼破片は押印からユノカミダニ窯の製品と判断される。時期は藤田編年のⅢ-I～Ⅱ1期頃に位置付けられる。

#### 12号掘立

北より西方向に主軸を向けた建物である。建物の北東端部のみを確認したもので、大部分は調査区外にあり、建物の形態を含めて詳細は不明である。梁行東側1間の柱間が広いことが特徴である。遺物は中世土師器片が出土しているが、小片であるため時期不祥である。前述の通り7号掘立と同時期が想定される。

#### 13号掘立

北より西方向に主軸を向けた建物である。12号掘立と同様に、建物の北東端部のみを確認したもので、大部分は調査区外にあり、建物の形態を含めて詳細は不明である。梁行東側1間の柱間が広いことが特徴である。遺物は中世土師器片が出土しているが、小片であるため時期不祥である。12号掘立との立替関係が想定される。

#### 14号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、5×?間の側柱建物である。建物東部は調査区外へ延びるため、桁行方向は確定されていない。柱間寸法が短く、柱数が多くなるタイプの建物であり、均等間隔で柱が配置されている。柱筋は北側桁行柱列に若干の歪みがある。遺物は中世土師器皿片が出土しており、中世前期には位置付け可能だが、詳細な時期は比定できない。

#### 15号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた側柱建物である。建物東南部は調査区外へ延びるため、桁行・梁行方向は確認されていない。桁行は確認範囲だけでも6間分が確認されており、大型の建物が予想される。柱間寸法が短く、柱数が多くなるタイプの建物であり、ほぼ均等間隔で柱が配置されている。遺物は越前焼の甕か壺の胴部破片が出土しているが、胴部の小片では詳細な時期は比定できない。14号～15号の重複関係を建て替えとみれば、中世前期に位置付け可能である。

#### 16号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた側柱建物である。建物東南部は調査区外へ延びるため、桁行・梁行方向は確認されていないが、桁行は4間程度が推察される。桁行柱列は、北側1間が若干狭い以外は、比較的均等に配置されている。遺物は白磁碗Ⅳ類が出土しており、12世紀後半～13世紀前半頃が考えられる。ただし、白磁は伝世することも充分考えられるため、時期が下がる可能性はある。

#### 18号掘立

北より西方向に主軸を向けた3×3間の総柱建物である。柱穴径は小さめだが、比較的深い掘削が行われている。柱間寸法も、ほぼ均等な間隔で設置されている。出土遺物は無く、時期不祥である。建物形態から中世前期に位置付けられると考える。

#### 19号掘立

ほぼ真北に主軸をもつ3×3間の総柱建物である。建物南西隅部の柱穴は、調査区外に位置するため、確認されていない。正方形に近い平面プランを持ち、柱間寸法もほぼ均等な値を持つ。しかし、南側梁行がやや広いことが予想され、歪みが生じている。出土遺物は無く、時期不祥である。建物の形態的には18号掘立に類似するが、主軸では25号掘立に近い。

#### 21号掘立

北より東方向に主軸を向けた2×3間の総柱建物である。北東隅側1間分が張り出している。東側桁行の南から1間目の柱は、溝調査時に掘ってしまったらしく検出されていない。柱筋は通っており、梁行の柱間寸法は均等値である。ただし、桁行はやや柱間寸法に差がある。出土遺物は無く、時期不祥である。建物形式的には、小型総柱建物である19号掘立等と類似する。

#### 22号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、3×3間の総柱建物である。柱筋は、南側桁行で東より1間目がやや内側に入っている以外は、概ね通っており、柱間寸法も比較的均質である。出土

遺物は無く、時期不祥である。建物形式的には、小型総柱建物である19号掘立等と類似する。

#### 25号掘立

東西軸に主軸を向けた横向き配置をとる、2×4間の総柱建物である。当遺跡のなかでは大型の建物であり、柱間寸法も広くとられている。南側桁行の東から1間目の柱穴は検出できなかった。東側1間分の桁行が狭く間隔が異なるため、廂の可能性も考えられる。建物と同一主軸である竪穴状遺構(77号土坑)が近接して対角線上に位置していることから、建物に付随する遺構と考えられる。柱穴からの出土遺物は無く、時期不祥であるが、77号土坑の時期より、13世紀末以降が考えられる。また、隣接した井戸との関係も指摘でき、その年代からは14世紀前半～中頃が導かれる。

#### 26号掘立

北より東方向に主軸を向けた2×2間の総柱建物である。北西側1間分が北方向に張り出している。柱間寸法には偏りがあり、梁行では西側が広く、桁行では南側が広い。梁行中央柱の配置は北側ほど広く歪んだものとなっている。出土遺物は無く、時期不祥である。建物形式から中世前期と考えられ、主軸から31号掘立と同時期と推察される。

#### 31号掘立

北より西方向に主軸を向けた総柱建物である。建物東南部は調査区外へ延びるため、桁行・梁行方向は確認されていない。比較的大き目の柱穴を持つ。中間寸法は、桁行の北から2間目が広がっている以外は、梁行共180cmで共通した値である。出土遺物は無く、時期不祥である。建物形式から中世前期と考えられ、26号掘立とはほぼ同一主軸であることから、同時期が推察される。

#### 32号掘立

北より西方向に主軸を向けた3?×4間の総柱建物である。建物南半分の柱穴が攪乱により失われており、梁行は確定できず、調査区外へと延びる可能性もある。比較的大き目の柱穴を持ち、柱間寸法も桁行の北から2間目が狭い以外は均等値である。出土遺物は無く、時期不祥である。建物形式から中世前期と考えられ、主軸が11号掘立とはほぼ一致していることから、同時期と推察される。重複している33号・34号掘立とは立替関係にあり、34号掘立から33号掘立を経て、32号掘立へと立替られたと判断される。

#### 33号掘立

北より西方向に主軸を向けた3?×3間の総柱建物である。建物南半分の柱穴が攪乱により失われており、梁行は確定できず、調査区外へと延びる可能性もある。比較的大き目の柱穴を持ち、柱間寸法も均等値をしめす。出土遺物は無く、時期不祥であるが、前述のとおり、32号掘立と34号掘立との中間の時期に位置する。

#### 34号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×?間の側柱建物である。建物南半分の柱穴が攪乱により失われており、桁行は確定できず、調査区外へと延びる可能性もある。比較的大き目の柱穴を持つ。柱間寸法は、梁行は均等値だが、桁行は西から2間目が狭くなっている。出土遺物は無く、時期不祥であるが、前述のとおり、32号掘立と33号掘立より先行する時期に位置する。

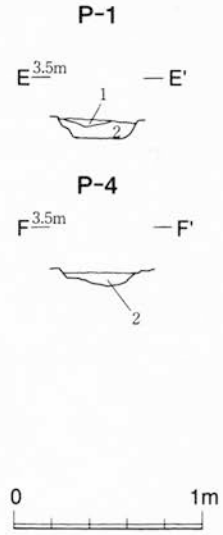
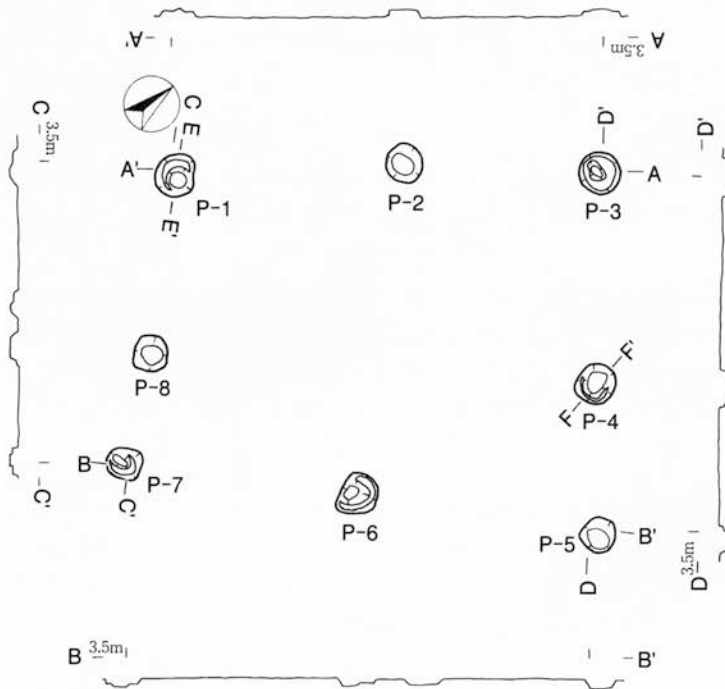
#### 35号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×3間の側柱建物である。北側桁行の東から1間目の柱が内側へ入るなど、柱筋の通りはあまり良くはない。桁行中央の柱2本が中央よりの配置をとっている。出土遺物は無く、時期不祥である。建物形式から中世前期と考えられる。

#### 36号掘立

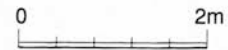
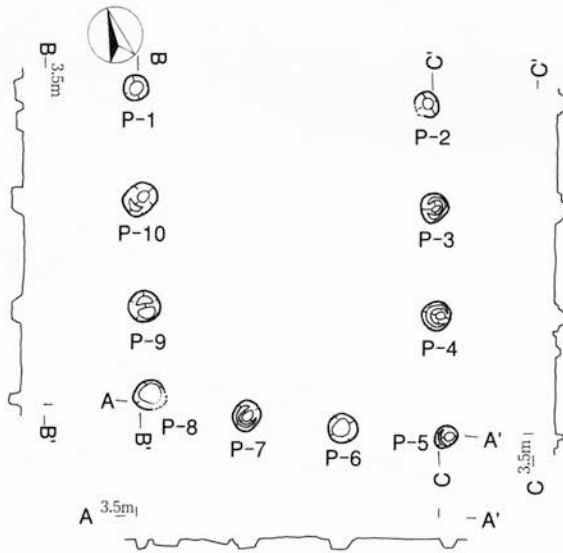
北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×3間の側柱建物である。攪乱により、北列と中央列の桁行西から1間目の柱が失われている。また、その1間目の間隔は、他の桁行の柱間に比して狭いものとなっている。出土遺物は無く、時期不祥であるが、建物形式から中世前期と考えられ、主軸が9号掘立や11号掘立とはほぼ一致していることから、同時期と推察される。

1号掘立柱建物跡



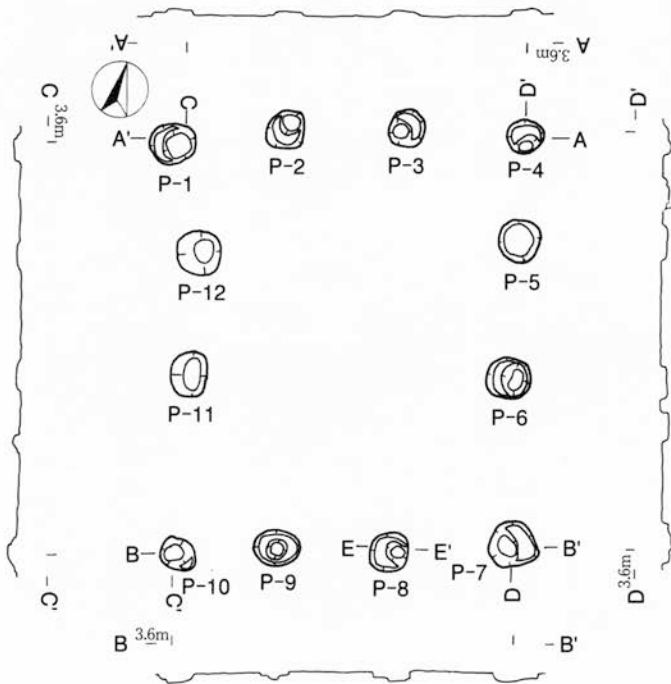
1号掘立P-1・4土層注  
 1層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土  
 2層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土

2号掘立柱建物跡

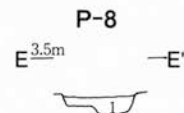


第80图 1号・2号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)



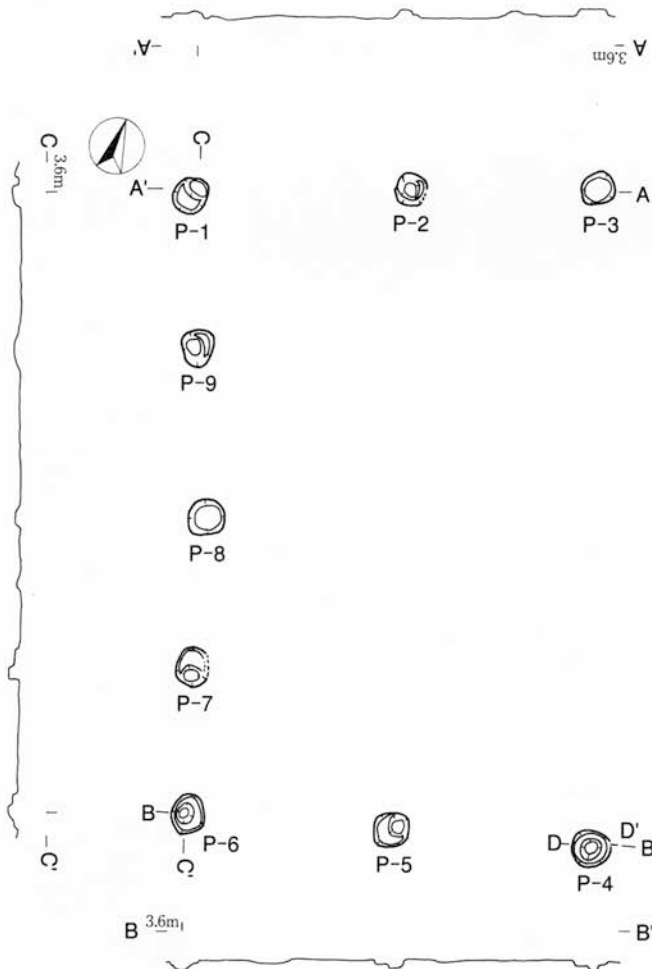


3号掘立柱建物跡

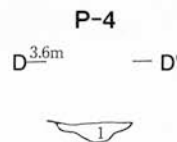


3号掘立P-8土層注

1層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土（黄褐色粘土ブロック含む。）



4号掘立柱建物跡

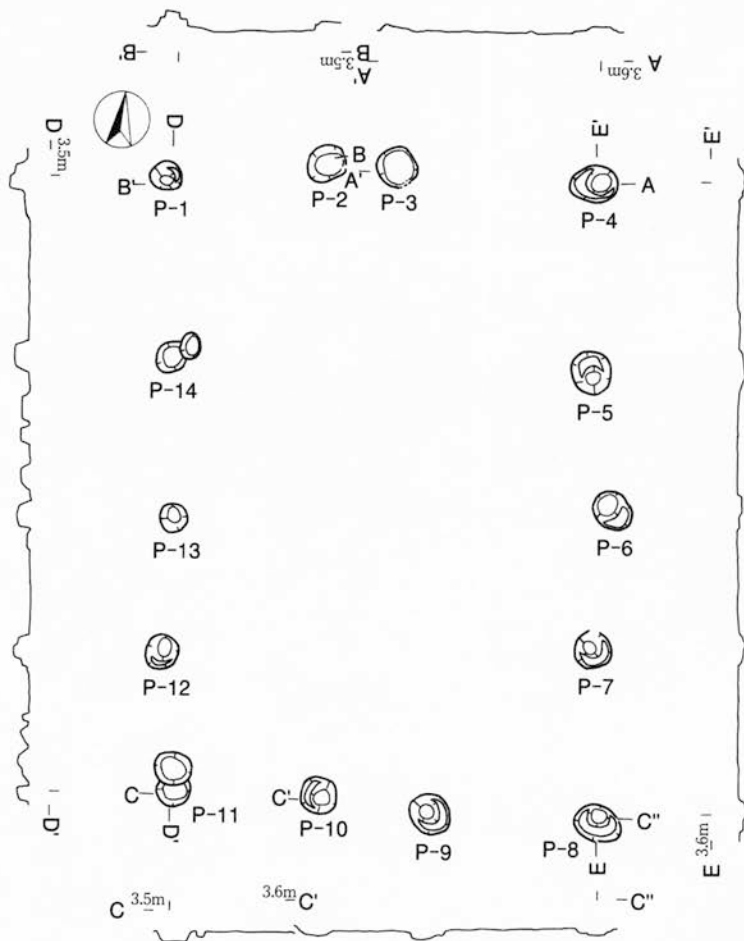


4号掘立P-4土層注

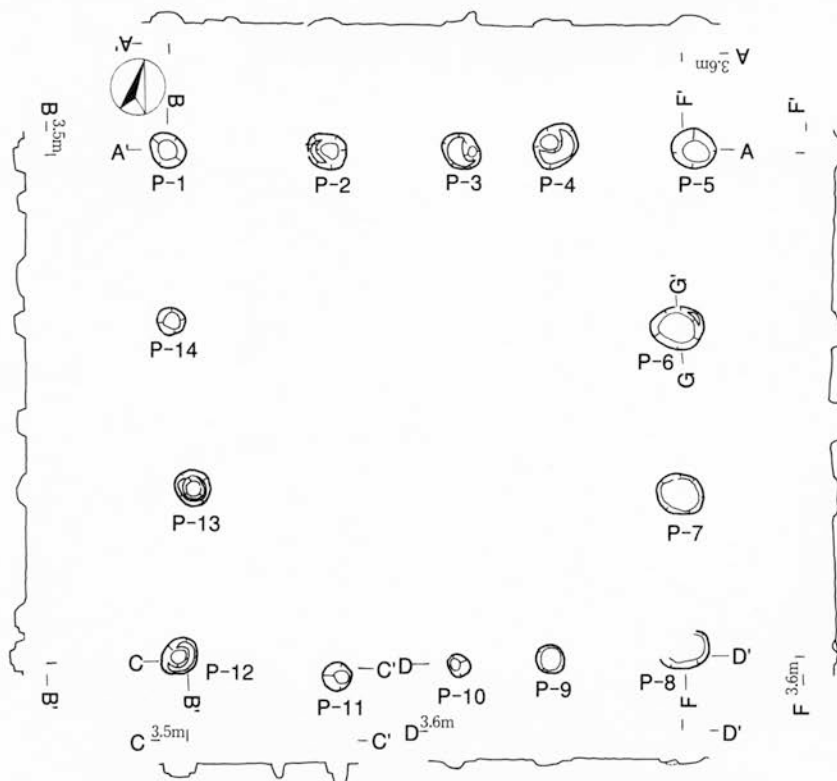
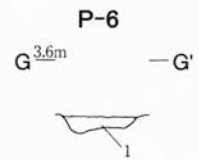
1層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土（黄褐色粘土ブロック含む。）



第81図 3号・4号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)



5号掘立柱建物跡



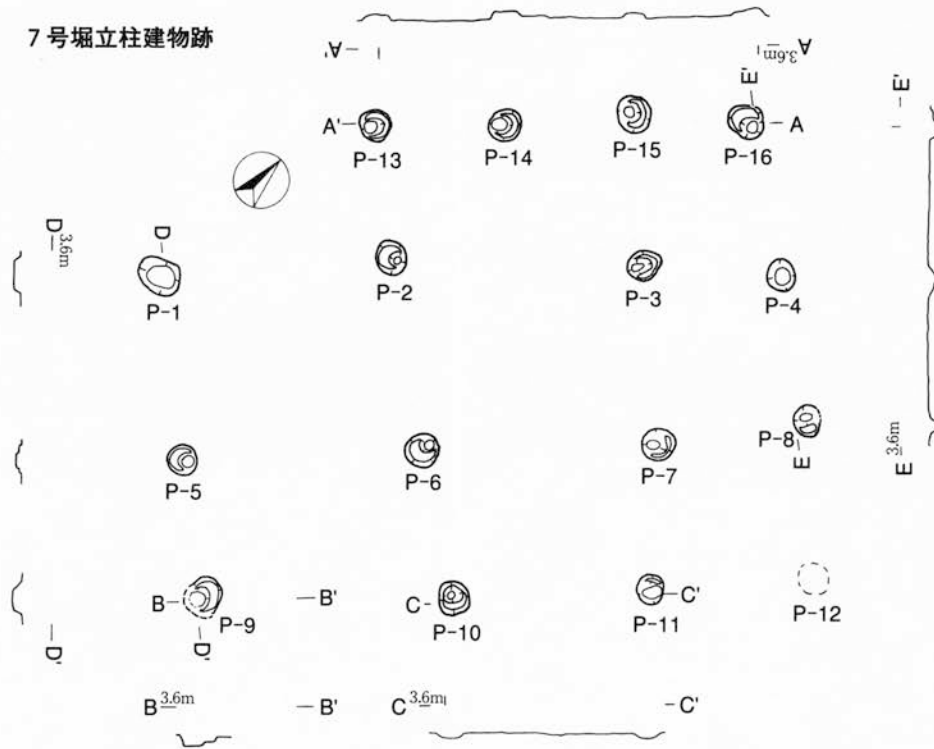
6号掘立柱建物跡

6号掘立P-6土層注  
 1層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土 (黄褐色粘土ブロック含む。)

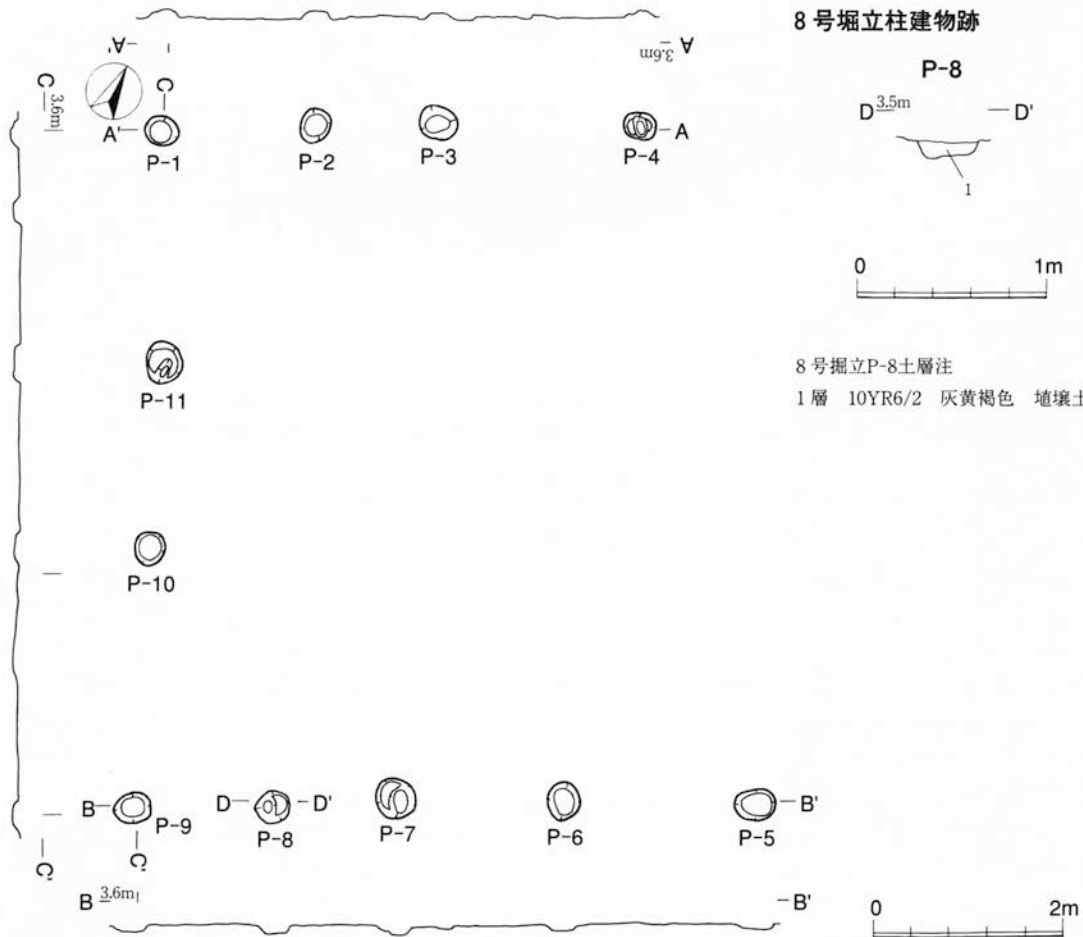


第82図 5号・6号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

7号掘立柱建物跡



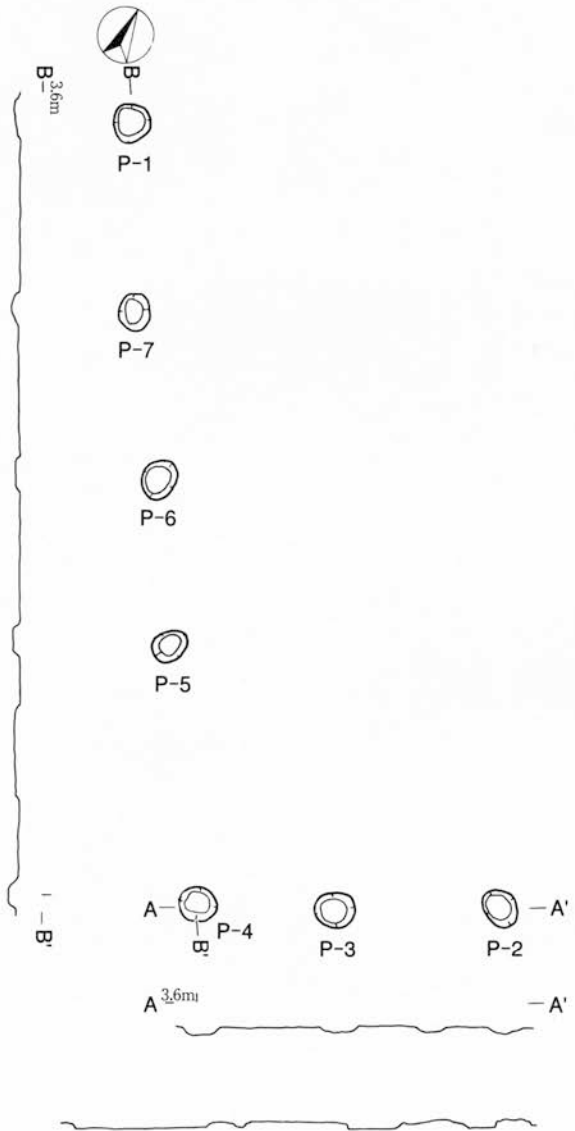
8号掘立柱建物跡



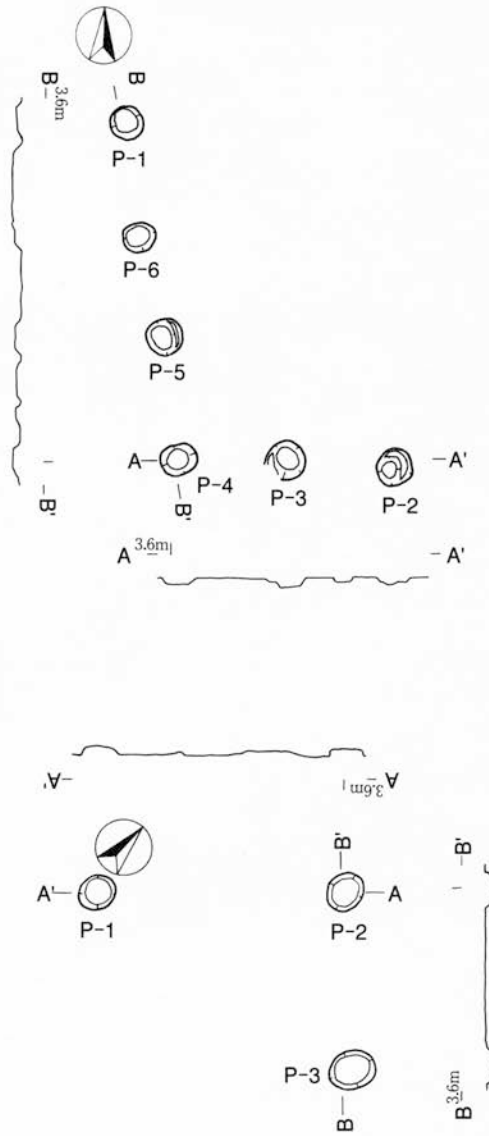
8号掘立P-8土層注  
1層 10YR6/2 灰黄褐色 埴壤土

第83图 7号・8号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80・1/40)

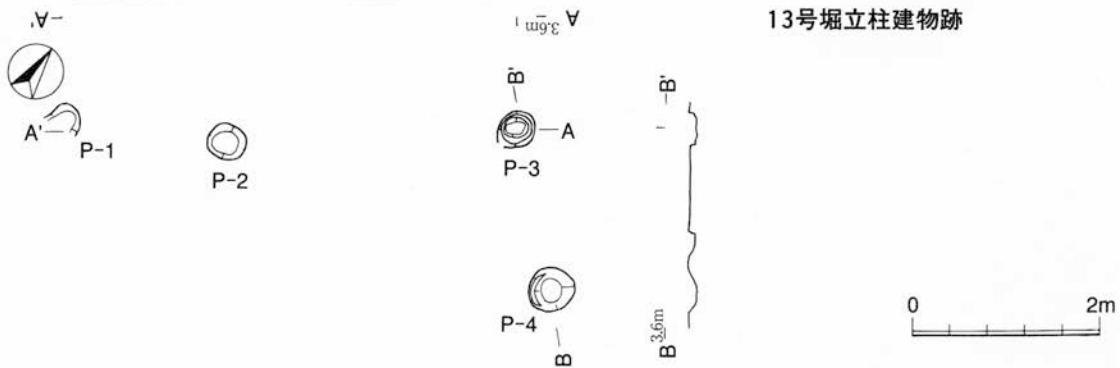
9号堀立柱建物跡



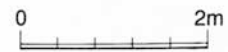
10号堀立柱建物跡



13号堀立柱建物跡

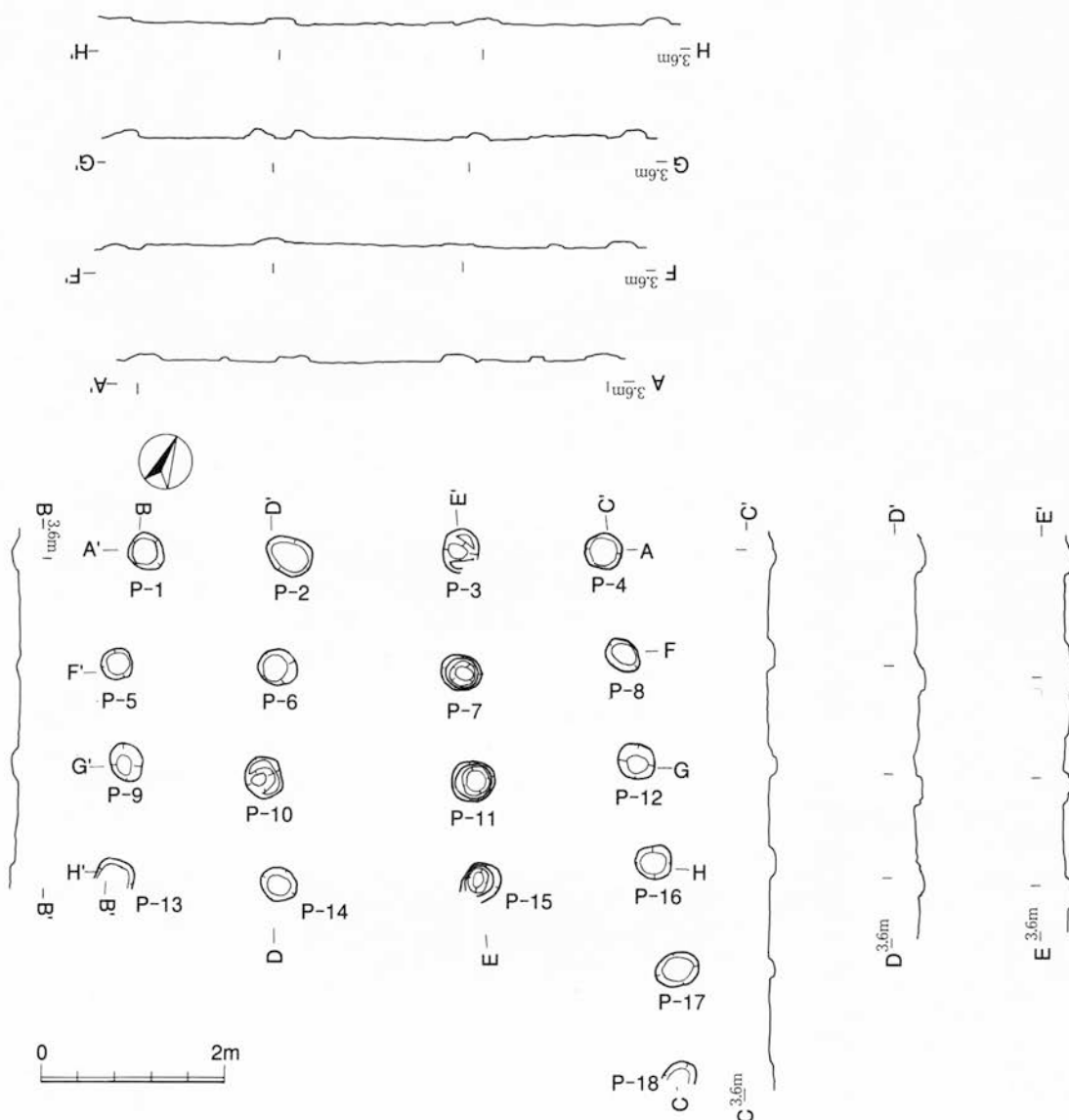


12号堀立柱建物跡



第84図 9号・10号・12号・13号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

## 11号堀立柱建物跡



第85図 11号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

## 2. 中世後期

### 2号掘立

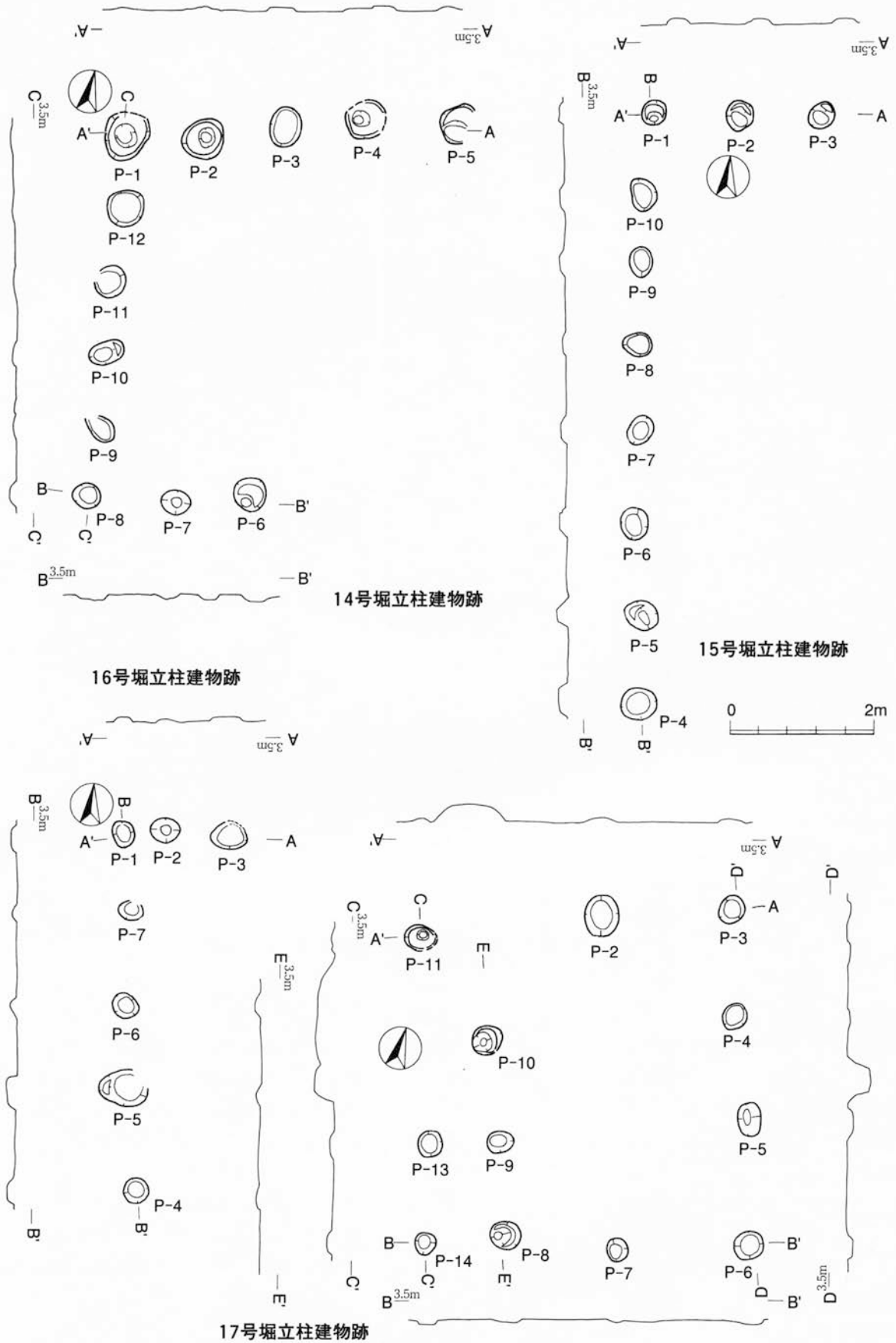
北より東方向に主軸を向けた3×?間の側柱建物である。調査区間の繋ぎの部分に位置するため、建物北側は検出できなかった。その北側調査区では柱穴が確認できていないことから、繋ぎの空白部分に収まる大きさ(4間)が想定される。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、中世前半代に位置付けた83号溝を切っていることを重視すれば、中世後期建物に位置付け可能であろうか。

### 3号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた3×3間の側柱建物である。柱穴は比較的大きめのものである。柱間寸法は梁行がほぼ均等に揃っているのに対し、桁行は等間隔にはなっておらず、南側へ行くほど広い間隔となっている。中世後期の土坑である60号土坑との切り合いから、15世紀後半以降の年代が考えられる。

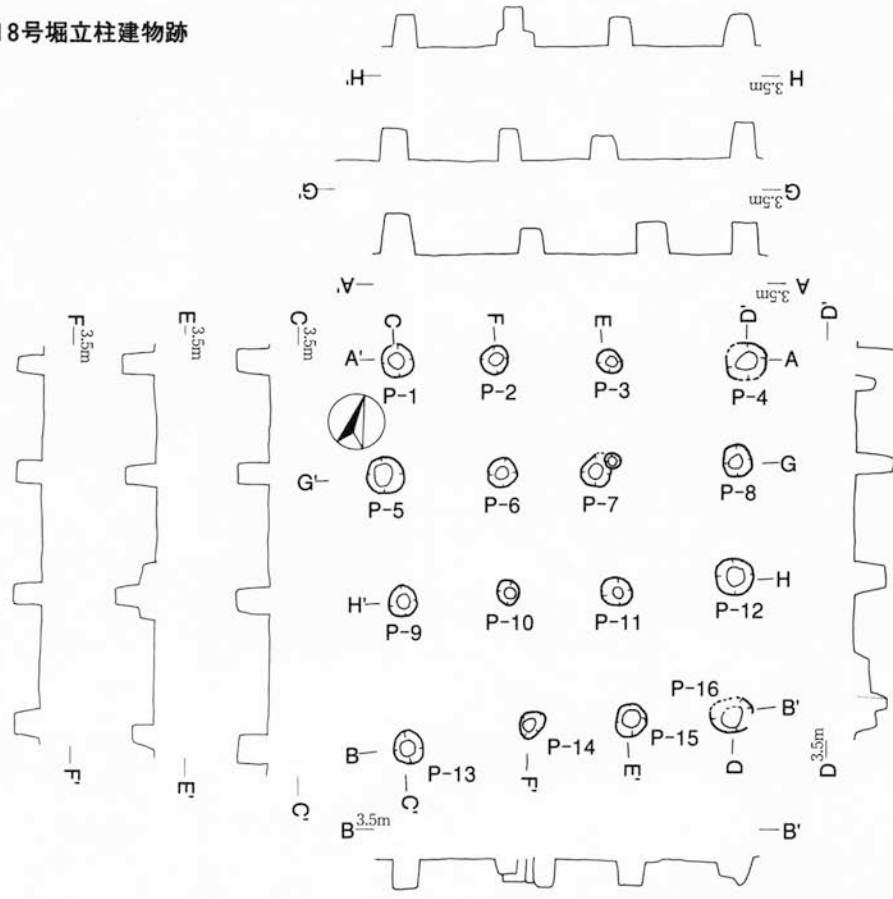
### 4号掘立

北より東方向に主軸を向けた?×4間の側柱建物であり、3号掘立の東隣に位置する。建物東端部分が調査区外へ延びるため、梁行方向は確認できていないが、当遺跡では大型建物の部類に入ること

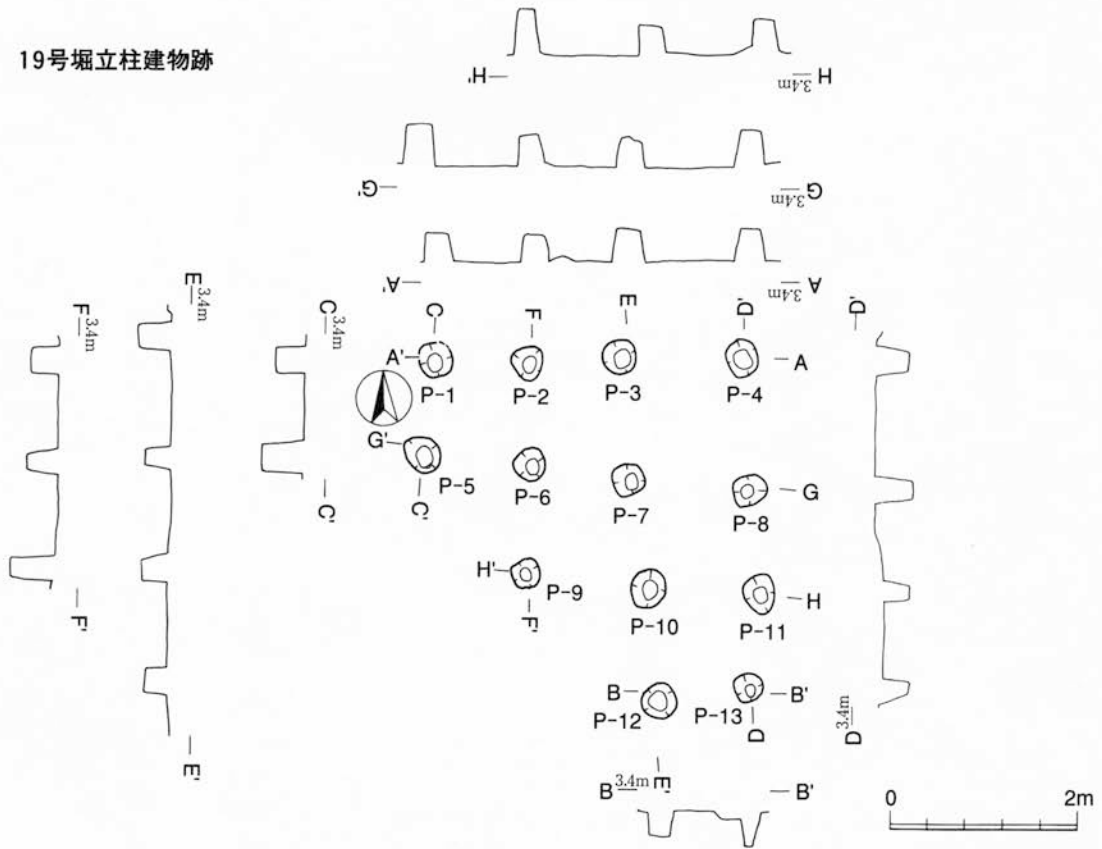


第86图 14号·15号·16号·17号掘立柱建物跡平面图·断面图 (S=1/80)

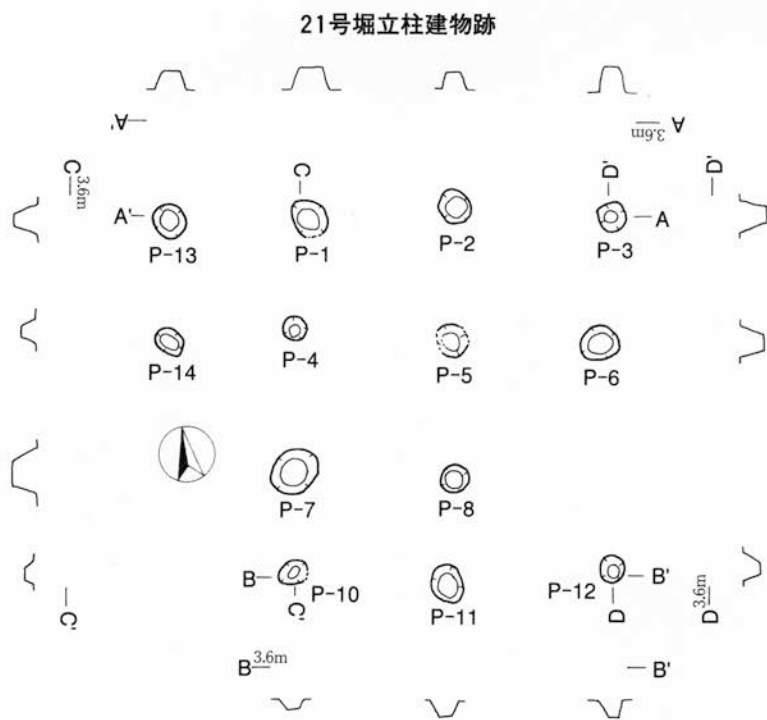
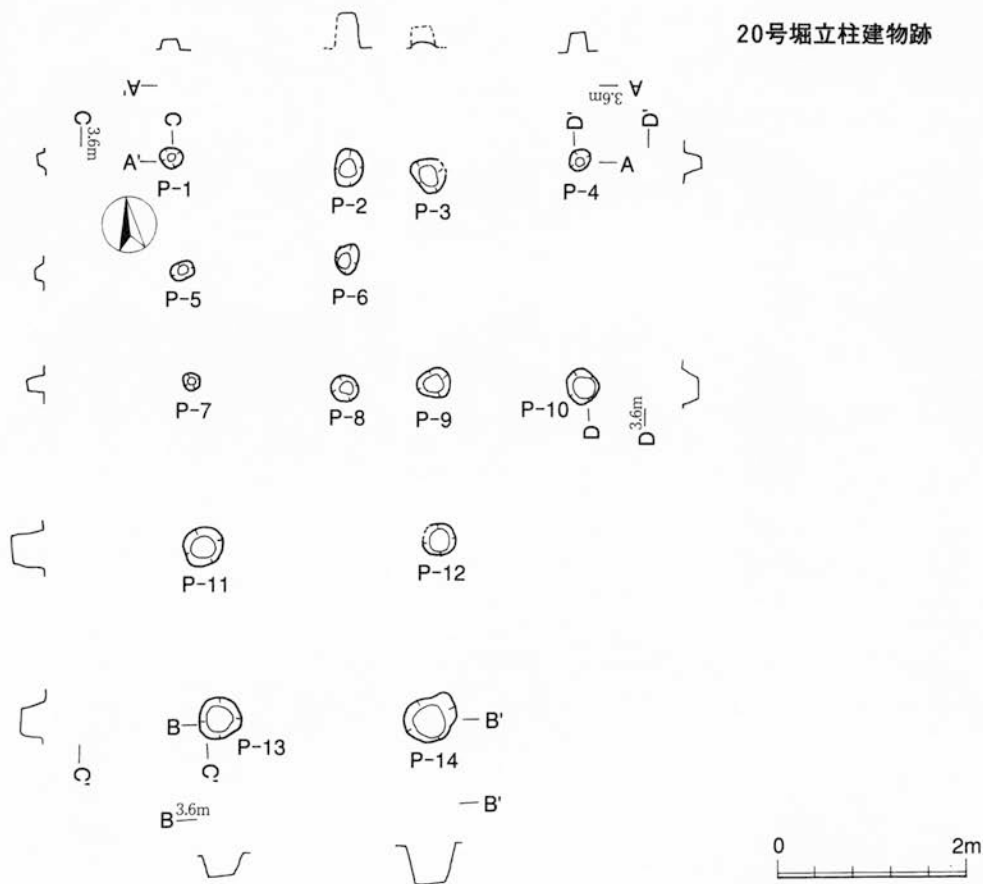
18号掘立柱建物跡



19号掘立柱建物跡

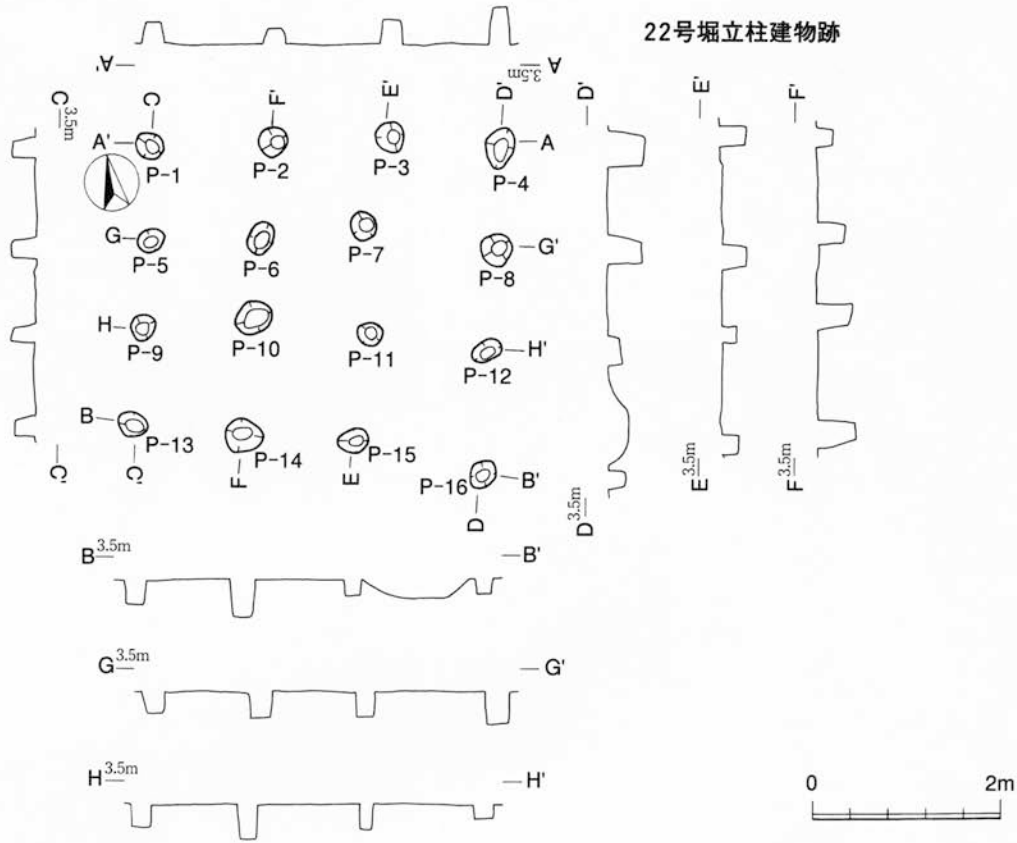


第87图 18号・19号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

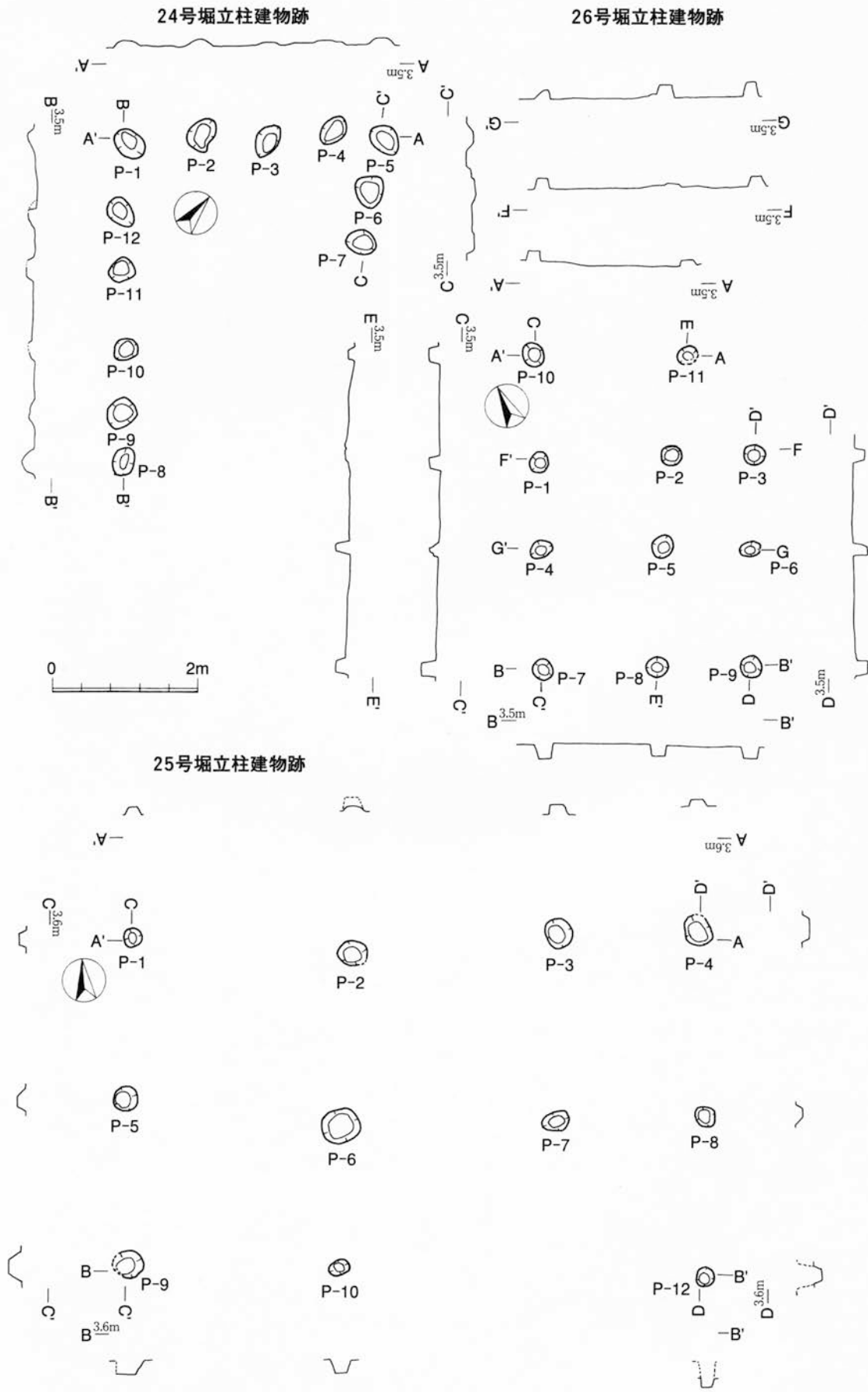


第88图 20号・21号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)





第89图 22号・23号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)



第90图 24号·25号·26号掘立柱建物跡平面图·断面图 (S=1/80)

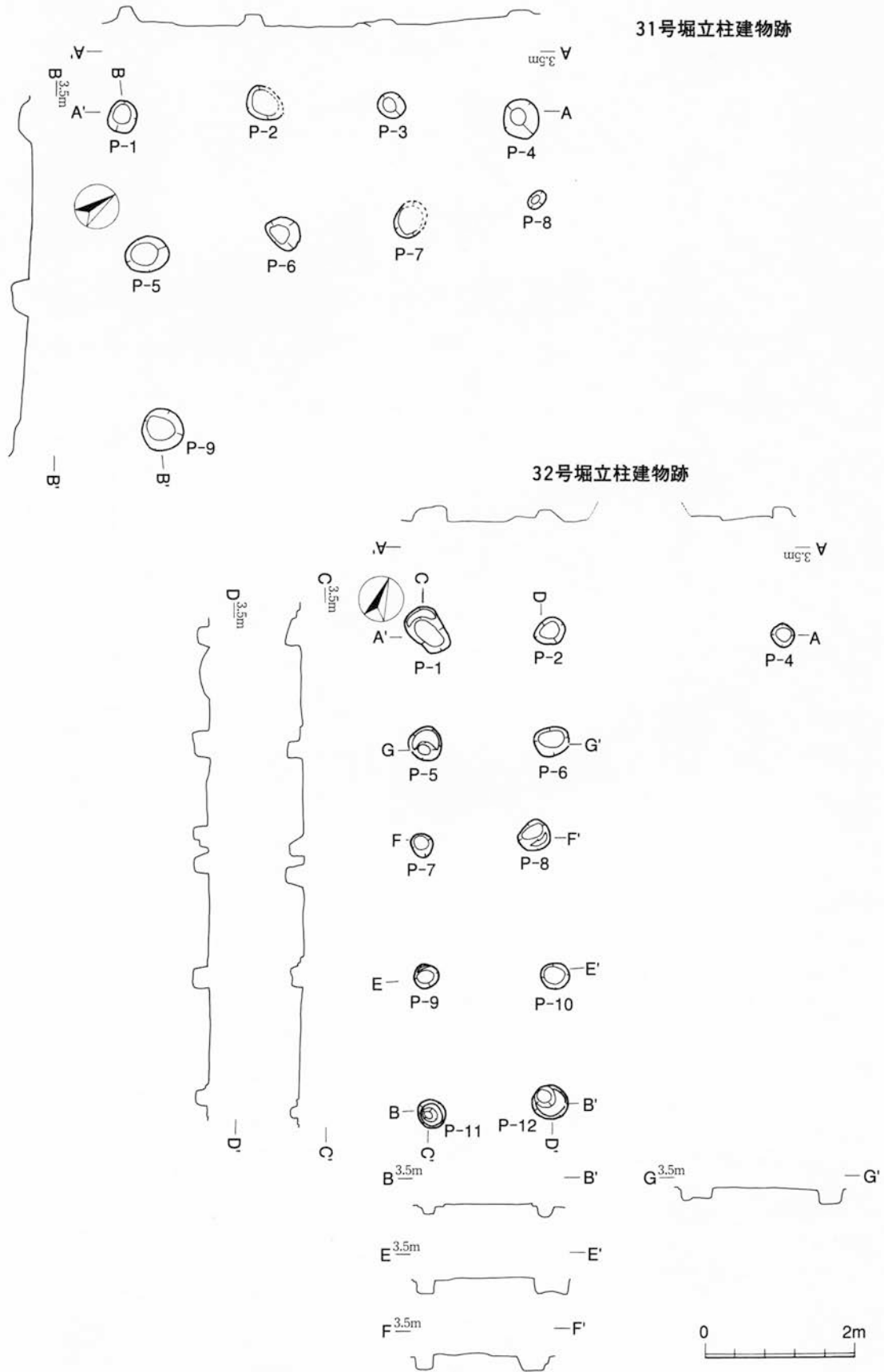


第91図 27号・28号・29号・30号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

が予想される。柱間を比較的広くとる建物で、桁行南側1間がやや狭い点を除けば、均質な柱配置をとり、柱筋も通っている。出土遺物は無く、時期不詳である。ただし、3号掘立と主軸方位がほぼ同じであり、南側軒先を揃えている点から、同時期の建物であると推察する。

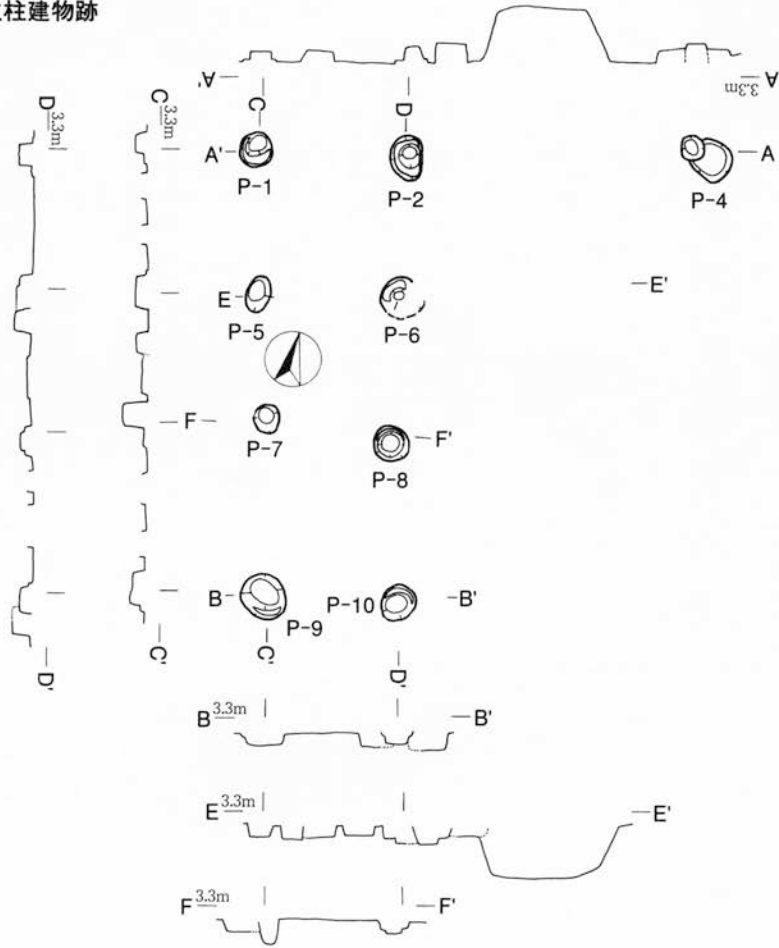
### 5号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた3×4間の側柱建物であり、当遺跡では大型建物の部類に入る。柱穴は比較的大きめのものである。柱間寸法は、梁行の中央2本間が狭く、中央に寄った配置となる。桁行でも中央3本が寄った配置となっており、南北両端の間隔が広がっている。中世後期の土坑である60号土坑との切り合いから、15世紀後半以降の年代が考えられる。

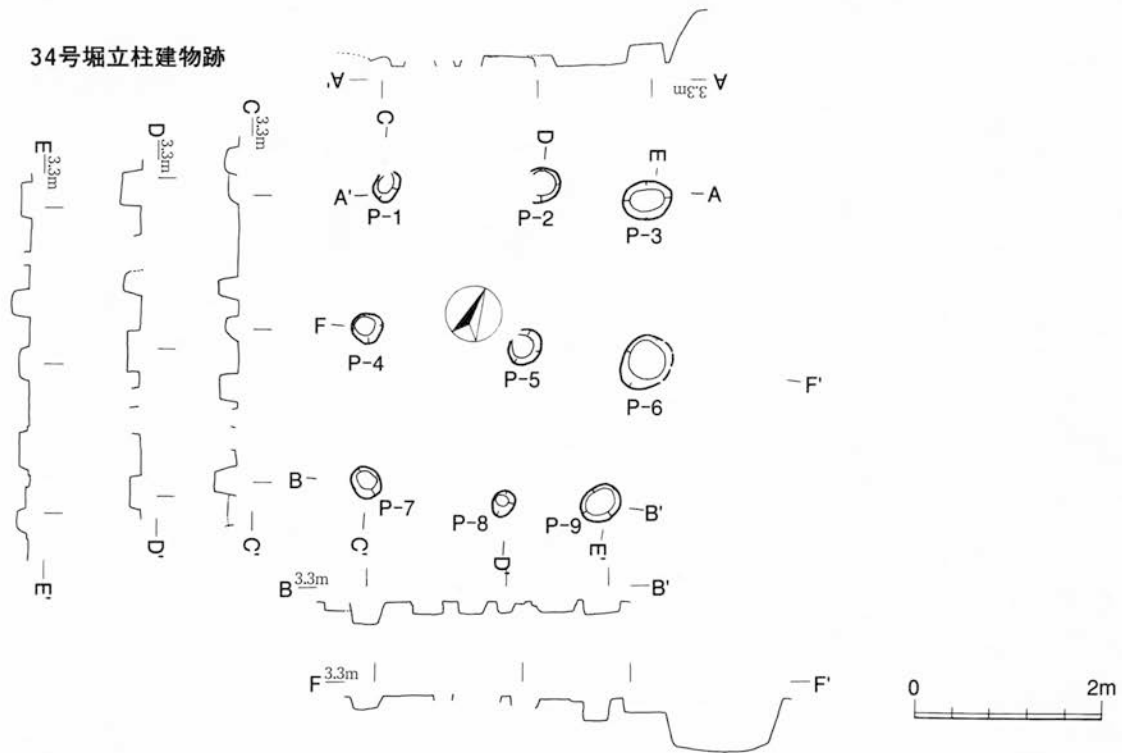


第92図 31号・32号堀立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

33号掘立柱建物跡

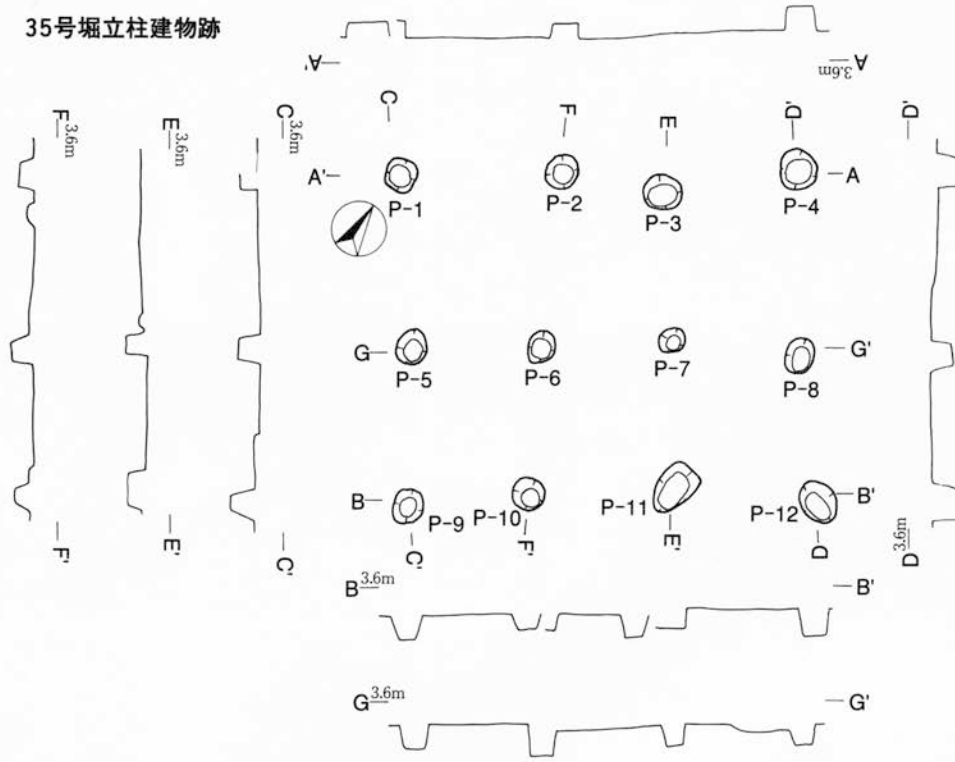


34号掘立柱建物跡

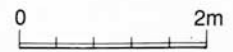
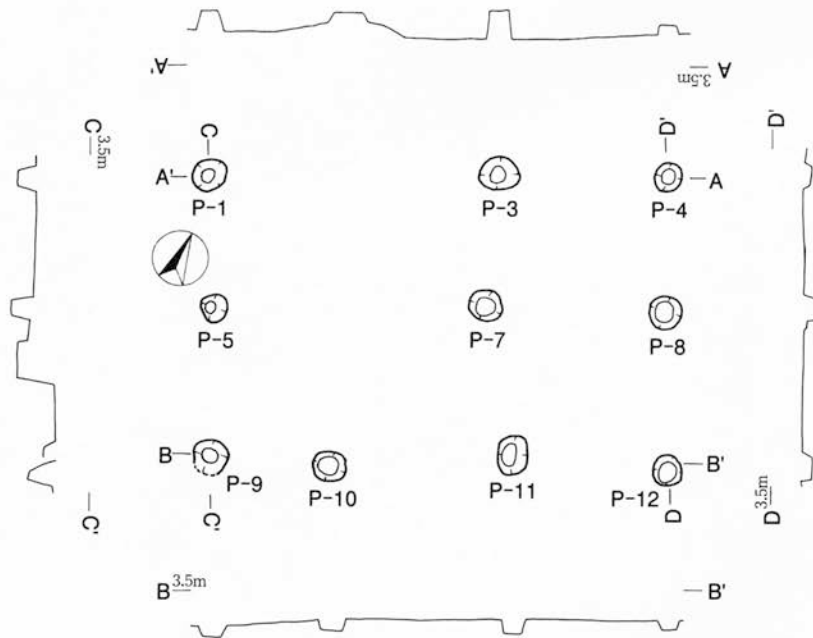


第93図 33号・34号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

35号掘立柱建物跡



36号掘立柱建物跡



第94图 35号・36号掘立柱建物跡平面図・断面図 (S=1/80)

## 6号掘立

北より西方向に主軸を向けた横向き配置をとる、3×4間の側柱建物であり、当遺跡では大型建物の部類に入る。ほぼ正方形に近い平面プランとなっている。梁行の柱間は均等配置であるが、梁行の柱間は変則的な配置で、東から2間目の間隔が狭い配置となっている。南側桁行は柱筋の通りが良くない。出土遺物は無く、時期不祥である。ただし、5号掘立と主軸方位がほぼ同じであり、西側軒先を揃えている点から、同時期の建物であると推察する。

## 8号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、3×2?間の側柱建物である。建物東側が調査区外へ延びるため、桁行方向は確認できない。柱間寸法は広めであり、大型の建物と予想される。ただし、桁行西側から1・2本目の間隔が狭く配置されている。遺物は中世後に位置付けられる土師器皿片が出土している。細片であり、時期比定は不可能だが、他の遺構との切り合い関係を考えると、中世後期でも当遺跡最終段階の時期（16世紀後半）と考えざるを得ない。

## 17号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×3間の側柱建物である。攪乱により北西隅部付近の2カ所の柱穴が失われている。全体的には正方形プランの建物であるが、柱筋の通りは悪く、梁行の柱間寸法は不揃いである。西側に1間分柱列が存在し、廂や縁などが考えられる。桁行き方向は比較的均等な柱配置となっている。出土遺物は無く、時期不祥である。主軸方位の類似から、3号～6号掘立の一群と同時期であろうか。

## 20号掘立

北より東方向に若干主軸を向けた側柱建物であるが、北東側1間分が張り出しており、内部には間仕切りも存在している。柱穴の大きさに不揃いの感はあるが、柱筋は通っており、建物跡として提示した。出土遺物は無く、時期不祥であるが、建物形式から中世後期と位置付けられよう。

## 23号掘立

北より東方向に主軸を向けた横向き配置をとる、2×4間の総柱建物である。桁行の柱配置が概ね均等であるのに対し、梁行の中央柱の位置及び内部の間仕切りを示す柱の位置は不揃いである。ただし、桁行方向では柱筋は通っている。出土遺物は無く、時期不祥である。建物形式から中世後期と考えられ、主軸が3号～6号掘立の一群と一致していることから、同時期と推察される。

## 24号掘立

北より西方向に主軸を向けた4×?間の側柱建物である。建物東南部は調査区外へ延びるため、梁行方向は確定されていないが、検出範囲で5間分が確認されている。柱間寸法が短く、柱数が多くなるタイプの建物であり、概ね80cm～110cm間隔で柱が配置されている。遺物は土師器皿片が出土しており、中世後期に位置付けられる。

## 27号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた側柱建物である。建物東南部は調査区外へ延びるため、桁行・梁行方向は確認されていない。柱間寸法は確認部分においては均等値である。出土遺物は無く、時期不祥である。やや主軸は異なるが、24号掘立と同時期が考えられる。

## 28号掘立

北より西方向に若干主軸を向けた側柱建物である。建物東南部は調査区外へ延びるため、桁行・梁行方向は確認されていない。柱間寸法は確認部分においては均等値である。出土遺物は無く、時期不祥である。27号掘立とは、順序は判断できないが、立替の関係にあると考えられる。

## 29号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×?間の側柱建物である。建物東南部は調査区外へ延びるため、桁行方向は確認されていない。西側桁行の南側2間の柱間寸法が広がっている。出土遺物は無く、時期不祥である。柱穴の配置形式は異なるが、24号掘立と同様の南北に細長い建物であり、主軸も一致することから、同時期が推察される。切りあいから30号掘立からの立替と判断できる。

### 30号掘立

北より西方向に主軸を向けた2×?間の側柱建物である。建物東南部は調査区外へ延びるため、桁行方向は確認されていない。出土遺物は無く、時期不祥である。前述の通り、29号掘立へ立替られており、それ以前であることがいえる。

第3表 中世掘立柱建物跡寸法表

番号	主 軸	形態	間数	梁長	桁長	面積	掘り方寸法・形態・深さ	柱 間 寸 法	備 考
1	N-40-E	側柱	2×2	3.50	4.80	16.80	35～45・略円・10前後	梁210・140桁240・240	
2	N-13-E	側柱	3×?	3.30			25～40・略円・10～15	梁110・110・110桁120・120・115	
3	N-14-W	側柱	3×3	3.60	4.40	15.84	38～50・略円・10前後	梁110・125・125桁110・150・180	
4	N-17-W	側柱	?×4		6.70		35～40・略円・10前後	梁220・210桁170・180・170・150	
5	N-13-W	側柱	3×4	4.50	6.70	30.15	30～50・略円・10～25	梁160・100・180桁200・155・140・175	
6	N-78-E	側柱	3×4	5.90	5.40	31.86	30～55・略円・10～25	梁180・180・180桁170・180・170・150	横向き?
7	N-48-E	総柱	2×3	3.60	6.35	22.86	32～50・略円・10前後	梁200・160桁245・250・140	北側1間張り出し (総面積28.785)
8	N-60-E	側柱	3×?	7.20			35～45・略円・10前後	梁255・210・255桁150・125・190・200	横向き?
9	N-26-W	側柱	?				40　　・略円・10前後	梁150・170桁210・180・180・270	
10	N-8-W	側柱	?				30～45・略円・10前後	梁120・120桁120・110・130	
11	N-28-W	総柱	3×?	5.60			36～48・略円・10前後	梁180・200・180桁120・120・120・120	
12	N-47-W	?					40～50・略円・10前後	梁180・300桁180	
13	N-52-W	?					38～50・略円・10前後	梁270桁180	
14	N-80-E	側柱	5×?	5.00			35～45・略円・10前後	梁100・100・100・100・100桁115・110・110・120	横向き?
15	N-9-W	側柱	?				35～50・略円・10～20	梁120・110桁100・100・120・120・130・120・120	
16	N-10-W	側柱	?				35～68・略円・10～20	梁150桁100・130・120・130	
17	N-19-W	側柱	3×3	4.50	4.50	20.25	32～56・略円・10前後	梁110・150・190桁150・150・150	西側1間廂?縁?
18	N-14-W	総柱	3×3	3.60	4.00	14.40	30～44・略円・30～40	梁120・120・120桁120・130・150	
19	N-3-E	総柱	3×3?	3.40	3.60	12.24	32～44・略円・30～50	梁110・110・120桁130・115・115	
20	N-85-W	側柱	1×3	2.50	6.00	15.00	20～56・略円・10～40	梁240(120・120)・150・240桁250(170・80)・170	間仕切りあり。
21	N-10-E	総柱	2×3	3.30	3.90	12.87	26～50・略円・10～26	梁165・165桁130・150・110	西側1間張り出し (総面積18.135)
22	N-76-W	総柱	3×3	3.30	3.70	12.21	30～40・略円・18～40	梁105・105・120桁115・120・135	横向き?
23	N-77-E	総柱	2×4	4.60	6.40	29.44	24～40・略円・15～34	梁230・230桁155・150・160・175	横向き? 変則的柱配置
24	N-40-W	側柱	4×?	3.60			32～47・略円・10前後	梁100・90・90・80桁100・80・110・90・80	
25	N-90-E	総柱	2×3	4.60	7.70	35.42	26～52・略円・10前後	梁235・225桁290・280・200	横向き?



番号	主 軸	形態	間数	梁長	桁長	面積	掘り方寸法・形態・深さ	柱 間 寸 法	備 考
26	N-23-E	総柱	2×2	2.90	2.90	8.41	28～34・略円・10～20	梁170・120桁125・165	北側1間張り出し (総面積11.21)
27	N-33-W	側柱	?				24～38・略円・10～15	梁80桁150・150	
28	N-34-W	側柱	?				28～37・略円・10～15	梁120桁150・150・160	
29	N-44-W	側柱	2×?	2.45			20～32・略円・10～34	梁115・130桁130・130・165・165	
30	N-40-W	側柱	2×?	2.60			24～34・略円・10～28	梁130・130桁120・160・140・170	
31	N-64-W	総柱	?				32～58・略円・10～25	梁180・180・180桁180・240	
32	N-20-W	総柱	3?×4	4.80	6.40	30.72	33～66・略円・12～20	梁160×3?桁160・120・180・180	
33	N-16-W	総柱	3?×3	4.80	4.80	23.04	30～50・略円・12～26	梁160×3?桁160・150・170	
34	N-70-E	総柱	2×?	3.20			34～60・略円・10～30	梁160・160桁155・115	横向き建物?
35	N-58-E	総柱	2×3	3.50	4.30	15.05	24～48・略円・16～34	梁190・160桁160・125・145	横向き建物?
36	N-65-E	総柱	2×3	3.00	4.90	14.70	30～40・略円・10～32	梁145・155桁125・190・175	横向き建物?

(単位は、梁長・桁長・面積はmで、他はcmで表示。柱間寸法は、梁間は西から東、桁間は北から南の平均値)

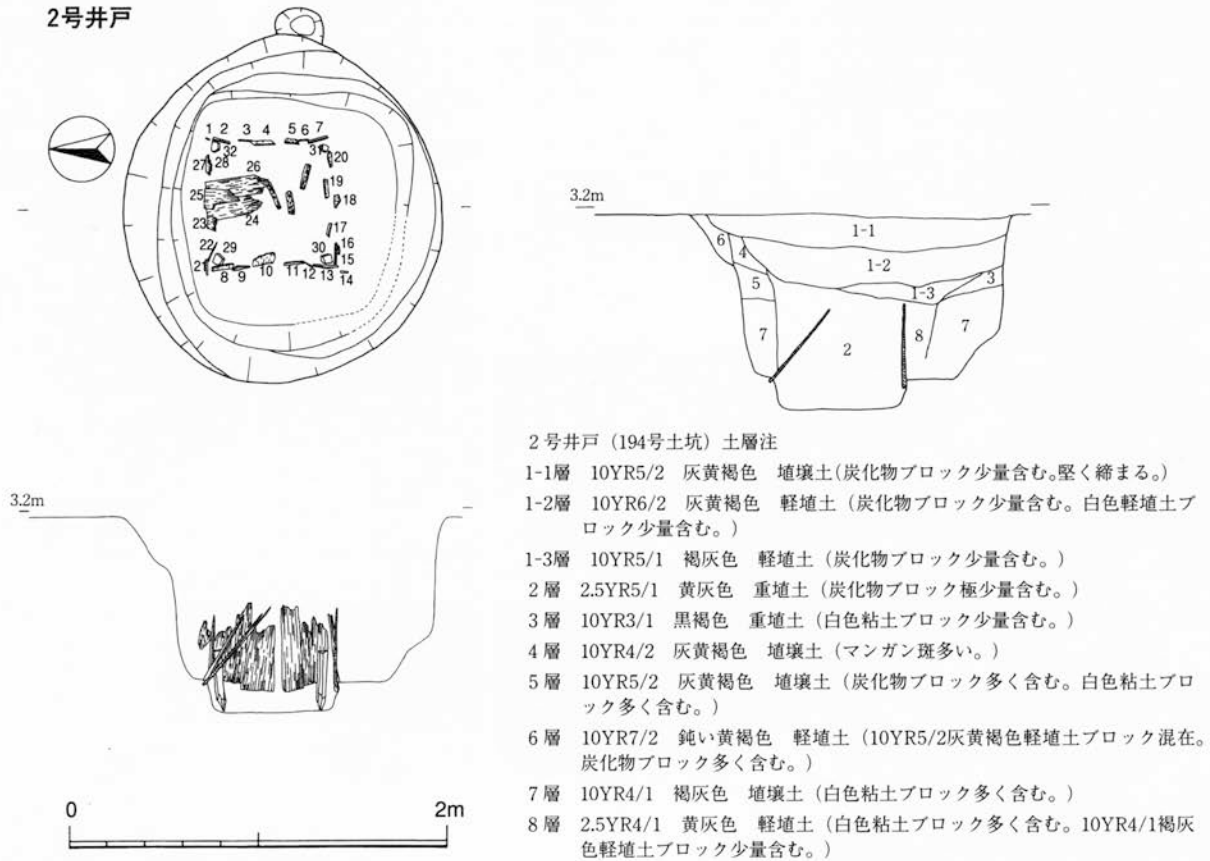
## 第2項 井戸跡

### 1. 中世前期

#### 2号井戸 (194号土坑)

H-39グリッドで検出された井戸である。井戸側の主軸は、磁北より13度東に振る。東西1.85m、南北1.7mの楕円形の掘り方があり、井戸側よりかなり大きく穿たれている。井戸側は、掘り方内部の中心ではなく、北寄りに据えられている。掘り方上部は、井戸側撤去の際に、掘り込まれているが、断面で観察される限り、元々の掘り方の範囲は超えていない。掘り方内部の井戸側が設置された部分は、さらに1段掘り込まれており、底部は水平である。井戸側は、下端部のみが残存しており、隅柱は存在せず、板材を組んだタイプのものである。横棧は存在したかどうかは、板を横断する圧痕の存在からあったものと推察したい。板材の四隅部の内側に長さ30cmの杭が打たれており、補強用ないし板を設置していく際の基準と考えられる。内法は、上端で東西0.66m、南北0.67mで、ほぼ正方形となる。深さは、検出面より1mを測り、標高2.10mの地点である。この井戸は、井戸側の板材の設置レベルが不ぞろいであり、下底面まで達していない。これは、井戸側撤去の際に、抜き取ることを断念して、折り取っていることもあり、その影響で浮き上がったものと推察される。部材は、一辺に6枚の板材の使用が基本と考えられる。しかし、板を重ねて使用した箇所もあることから、それ以上の板材が使用されていたと考えられる。板材の幅は一定せず、10cm～20cm前後を測る。掘り方埋土は、井戸側周辺が、褐灰～黄灰色の粘性の強い埴土で埋められている。井戸側内部は、最下層に黄灰色の埴土が堆積した部分のみが残存している。上位に掘り込まれた土坑部分は、灰黄褐色の埴土や埴土で埋められている。

遺物は、須恵器の食器類・貯蔵具類、土師器食器類、中世土師器皿、白磁、青磁、加賀焼が出土している。須恵器は混入と判断できる。土師器食器類は出越編年Ⅲ-2・3期(11世紀前半～中頃)、中世土師器は、藤田編年Ⅱ-Ⅱ期(13世紀前半～中頃)と両者には約2世紀の隔りがある。井戸側内下層から出土した遺物を検討すると、前者が井戸側設置部分際から出土しているのに対し、後者は白磁片と共に、井戸中央部付近の完全に井戸側内部から出土している。つまり、前者は、掘り方埋土に混入した可能性も生ずるのに対し、後者は、井戸使用時堆積土中以外の選択支はない。よって、掘削時を前者、埋没期を後者と位置付けることもできる。しかし、これまでの井戸の研究成果から、「井戸の存続期間は、長くても土器1型式(約30年程)程度」という指摘を考慮すると、この井戸については、



第95図 2号井戸 (縦板組) 平面図・断面図 (S=1/40)

中世前半段階の井戸と判断する方が妥当といえる。

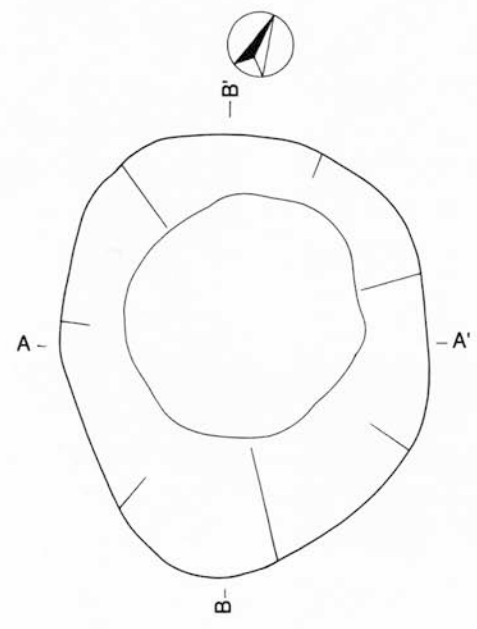
### 井戸 (井戸側なし)

#### 54号土坑

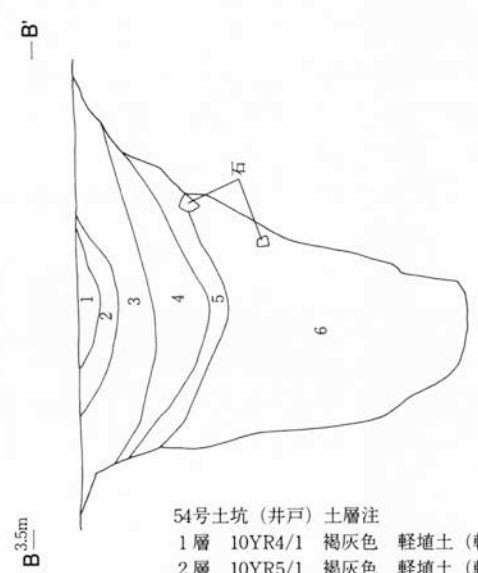
G-26・27グリッドから検出された井戸である。形態は、南側がやや長いので、楕円形状を呈する。法量は、確認面で東西1.9m、南北2.3m、円筒部分で東西1.1m、南北1.35mを測る。確認面から約1.8mより下は、徐々にすぼまる形態となり、下底面は東西0.4m、南北0.5m程度である。深さは、確認面から、2.3mを測る。確認面より約1m下まで、黄灰色のピート層が使用時堆積として見られ、廃棄時に若干水が溜まっており、有機物が存在したようで、黒褐色のピート層が薄く堆積している。その後、褐灰色の軽埴土が順に堆積している。遺物は少ないが、越前焼鉢、加賀焼鉢、土師器皿が出土している。時期は、藤田編年Ⅲ-Ⅱ 1期 (14世紀前半頃) と考えられる。

#### 75号土坑

K・L-27・28グリッドから検出された井戸である。形態は93号土坑に切られているが、円形状を呈する。法量は、確認面で直径1.3m、円筒部分で直径1mを測る。湧水が激しく、壁面崩壊の危険があったため、確認面から1.3m下げたところで調査を断念した。確認面より約0.7m下まで、黒褐色の埴土層が使用時堆積として見られ、廃棄後に有機物を多く含む埴土が堆積しており、中段階時に礫が多く捨てられている。上層は、灰黄褐色～鈍い黄褐色の軽埴土、埴壤土が順に堆積している。前述のとおり、下底まで検出していないが、3層が下まで堆積していたものと考えられる。遺物出土状況図は、①は2層段階の礫の検出状況で、②・③は3層内における木製遺物の出土状況を示す。3層からは、箸が出土している。遺物は少ないが、越前焼鉢、加賀焼甕、土師器皿が出土している。時期は、藤田

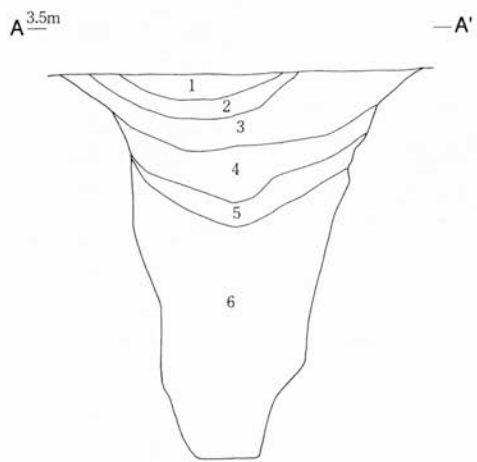


54号土坑



54号土坑（井戸）土層注

- 1層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土（軟質。）
- 2層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土（軟質。）
- 3層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土（軟質。）
- 4層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土（軟質。やや鬆質）
- 5層 10YR3/1 黒褐色 軽埴土（ビート層。鬆質）
- 6層 2.5YR4/1 黄灰色 軽埴土（ビート層。鬆質）

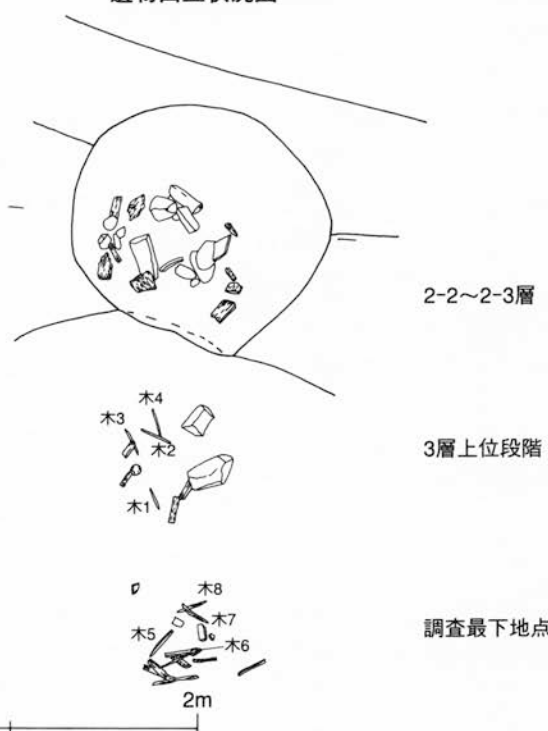
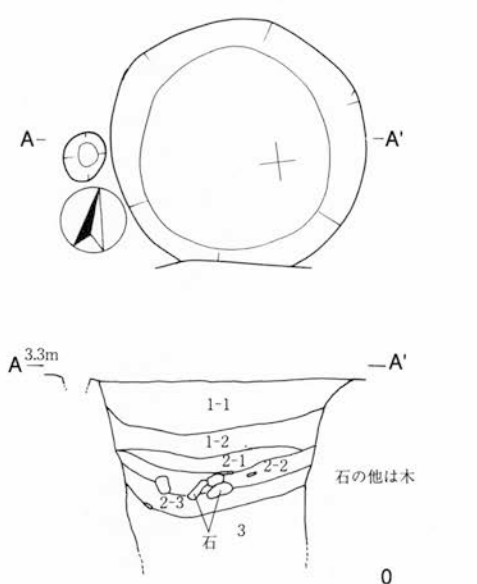


75号土坑（井戸）土層注

- 1-1層 10YR5/3 鈍い黄褐色 埴壤土（マンガン斑多く含む。）
- 1-2層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土（1層土が、带状に噛む。）
- 2-1層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土（有機物多く含む。）
- 2-2層 2.5Y4/1 黄灰色 軽埴土（有機物多く含む。）
- 2-3層 2.5Y4/1 黄灰色 重埴土（有機物多く含む。）
- 3層 2.5Y3/1 黒褐色 軽埴土

75号土坑

遺物出土状況図



第96図 54号・75号土坑（井戸）平面図・断面図（S=1/40）

編年Ⅲ－Ⅰ～Ⅱ 1期（14世紀前半～中頃）と考えられる。

#### 95号土坑

J-27グリッドから検出された井戸である。形態は、円形状を呈し、31号溝を切っている。法量は、直径0.8mを測り、54号・75号土坑に比べ一回り小さいタイプのものである。深さは、確認面から1.5mを測る。確認面より約0.5m下まで、黄灰～暗灰黄色の軽埴土が使用時堆積として見られ、廃棄後、灰黄褐色の軽埴土・埴壤土が順に堆積している。遺物は少なく3層中から土師器大皿が1点のみ出土している。時期を判定する根拠はこれのみとなるが、藤田編年Ⅲ－Ⅱ 1期（14世紀前半頃）と考えられる。

#### 96号土坑

I-27グリッドから検出された井戸である。形態は円形状を呈し、31号溝を切っている。法量は、直径0.7mを測り、95号土坑と同タイプのものである。深さは、確認面から1.1mを測る。確認面より約0.5m下まで、黒褐色の軽埴土が使用時堆積として見られ、廃棄後、灰黄褐色の埴壤土で埋められている。2層には大量に粘土ブロックが混在した土が使用されている。遺物は出土しておらず、時期は特定できないが、95号土坑と同タイプの形態をとり、近接した地区に位置することから、同じ用途のために使用されと考えられる。時期も、相前後する時期と推察される。

#### 134号土坑

L-41グリッドから検出された井戸である。形態は、円形状を呈する。法量は、確認面で直径1.65m、円筒部分で直径1.1mを測る。深さは、確認面から2.85mを測り、非常に深い。底部に向かって若干すぼまる形態であり、底面では直径0.7mを測る。確認面より約1m下まで、灰色の軽埴土が使用時堆積として見られ、廃棄後、褐灰色の軽埴土・埴壤土が順に堆積している。最後に、黒褐色の埴壤土で埋められている。遺物は比較的多く出土しており、加賀焼鉢2点、土師器皿42点が出土している。加賀の鉢は、4層内から出土しており、Ⅰ～Ⅱ期（12世紀末～13世紀前半頃）のものである。土師器皿は小片が多いが、藤田編年Ⅱ－Ⅱ～Ⅲ－Ⅰ期（13世紀前半～14世紀前半頃）までのものが出土しており、最終埋没年代は14世紀前半といえる。

## 2. 中世後期

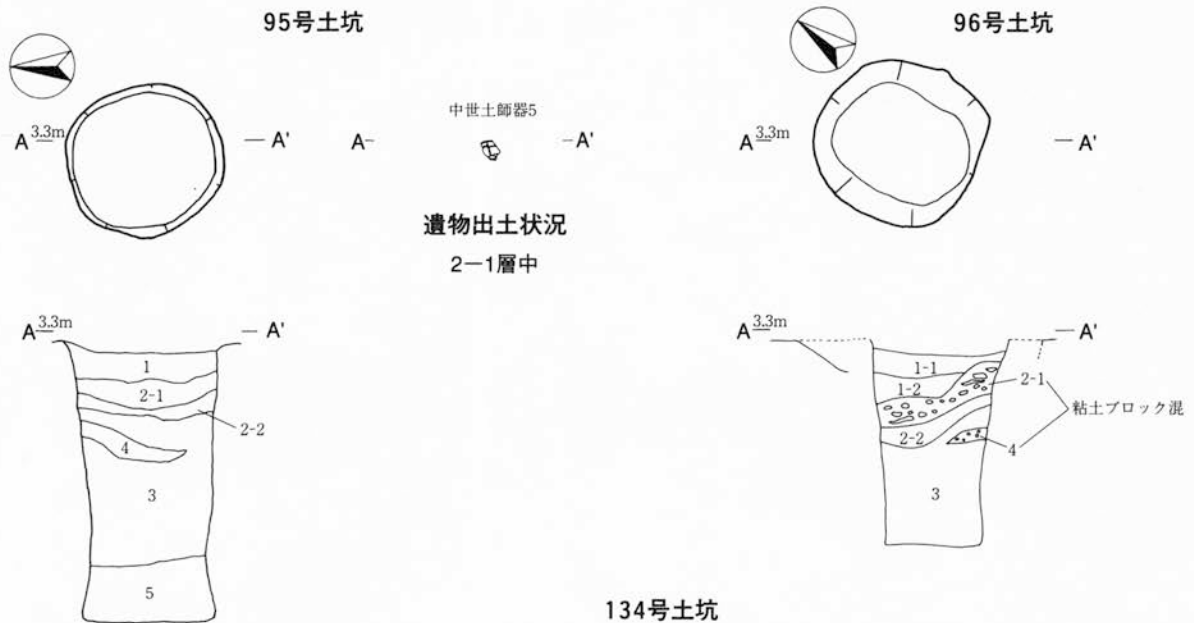
### 井戸（井戸側なし）

#### 11号土坑

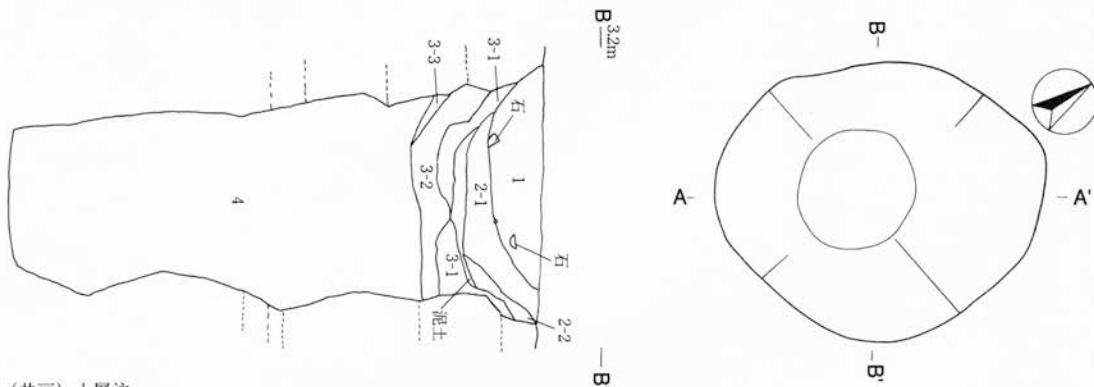
C-32グリッドから検出された井戸である。形態は、不整形な楕円形状を呈する。法量は、確認面で東西3.0m、南北2.8mを測る。確認面から約1.4mより下は、円筒形となり、東西0.85m、南北0.7m程度である。深さは、確認面から2.4mを測る。確認面より約1.1m下までが、大きく口が開いた土坑状を呈しており、井戸側を引き抜いた際の土坑と考えられる。最下層は、褐灰色のピート層が約1.3m堆積しており、使用時堆積と考えられる。その直上に、骨片を含む黒褐色軽埴土が分厚く堆積している。これより上位は、褐灰～鈍い黄褐色の軽埴土で埋まっている。遺物は、青磁碗、古瀬戸水注・卸皿、珠洲焼甕、越前焼甕、加賀焼甕、土師器皿が出土している。特に、土師器皿は19点出土しており、まとまった量が出土している。時期は、加賀焼や古瀬戸（14世紀後半頃）等古い時期を示すものもあるが、土師器皿の年代から藤田編年Ⅴ－Ⅰ 1～Ⅰ 2期（15世紀後半～16世紀前半頃）と考えられる。青磁碗は線描き蓮弁文のB類が出土しており、最終埋没年代は後者となる。

#### 55号土坑

H-27グリッドから検出された井戸である。形態は、略方形を呈する。法量は、確認面で東西1.55m、南北1.65mを測る。確認面から約1.2mより下の部分で、北側壁に段が付き、径1mとなる。深さは、確認面から2.56mを測る。最下層は、黄灰色のピート層が約1.5m堆積しており、使用時堆積と考えられる。その直上に、骨片は含まないが、黒褐色軽埴土が厚めに堆積している点は、11号土坑と類似している。これより上位は、褐灰～鈍い黄褐色の軽埴土で埋まっている。遺物は、青磁碗、古瀬戸平碗・小壺、瀬戸・美濃丸皿・端反皿、珠洲焼甕・鉢、土師器皿が出土している。時期は、珠洲焼が14世紀



134号土坑



95号土坑（井戸）土層注

- 1層 10YR6/2 灰黄褐色 埴壤土（マンガン斑多く含む。炭化物ブロック多く含む。強く締まる。）
- 2-1層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土（炭化物ブロック少量含む。マンガン斑少量含む。10YR7/1灰白色軽埴土ブロック少量含む。）
- 2-2層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土（炭化物ブロック極少量含む。）
- 3層 2.5Y4/1 黄灰色 重埴土（10YR7/1灰白色軽埴土ブロック極少量含む。）
- 4層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土（10YR7/1灰白色軽埴土ブロック多量に含む。）
- 5層 2.5Y4/2 暗灰黄色 軽埴土

96号土坑（井戸）土層注

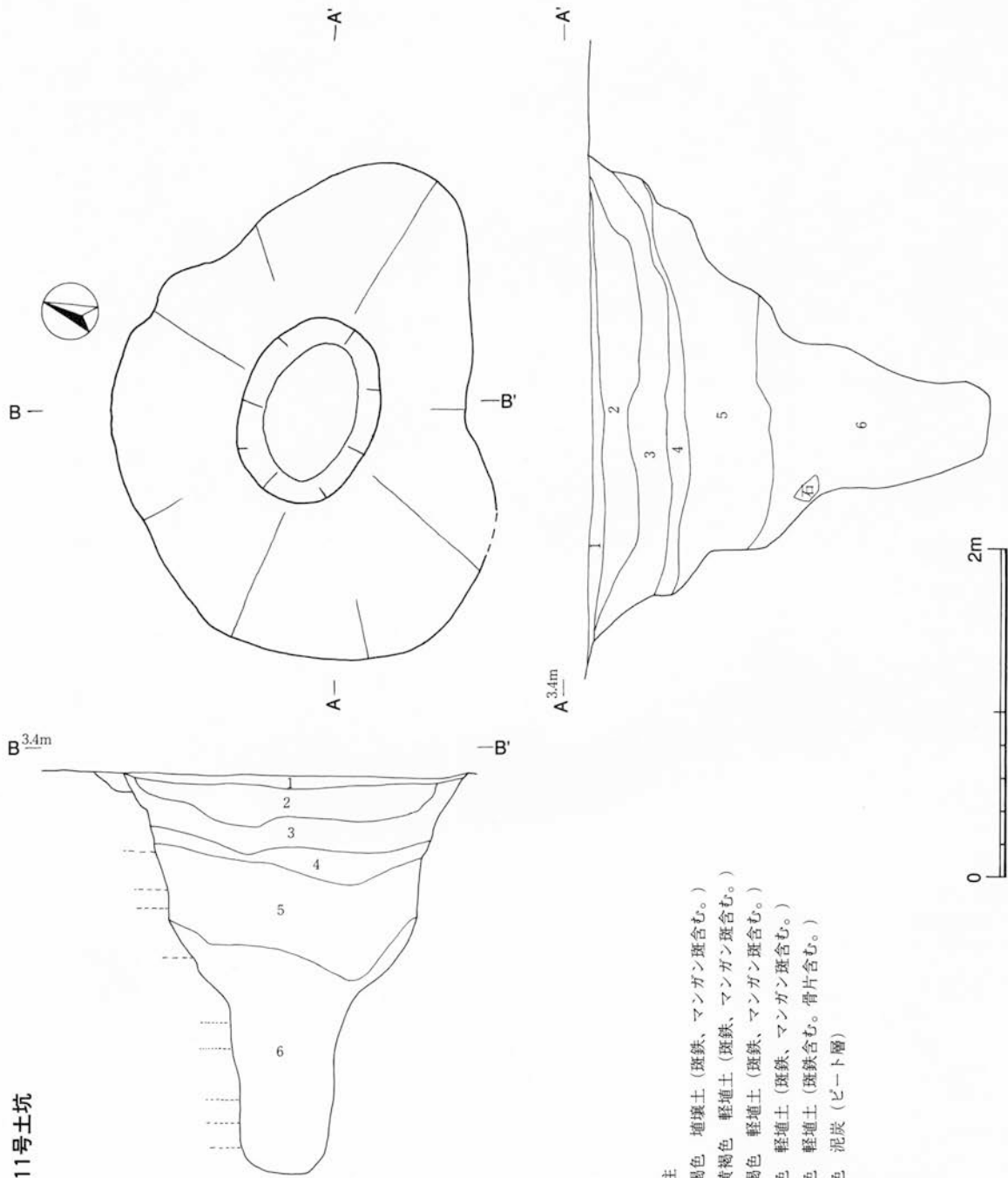
- 1-1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土（マンガン斑多く含む。炭化物ブロック少量含む。10YR7/2鈍い黄橙色軽埴土ブロック少量含む。）
- 1-2層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土（マンガン斑少量含む。炭化物ブロック少量含む。）
- 2-1層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土（炭化物ブロック少量含む。10YR7/2鈍い黄橙色軽埴土ブロック多量に含む。軟質。）
- 2-2層 10YR4/1~4/2 褐灰~灰黄褐色 軽埴土（炭化物ブロック少量含む。10YR7/2鈍い黄橙色軽埴土ブロック少量含む。）
- 3層 10YR3/1~3/2 黒褐色 軽埴土（10YR7/2鈍い黄橙色軽埴土ブロック極少量含む。）
- 4層 10YR5/3 鈍い黄褐色 軽埴土（10YR7/2鈍い黄橙色軽埴土ブロック多く含む。）

134号土坑（井戸）土層注

- 1層 10YR3/2 黒褐色 埴壤土（マンガン斑含む。炭化物ブロック含む。）
- 2-1層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土
- 2-2層 崩土
- 3-1層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土
- 3-2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土
- 3-3層 崩土
- 4層 5Y5/1 灰色 軽埴土

第97図 95号・96号・134号土坑（井戸）平面図・断面図（S=1/40）

11号土坑

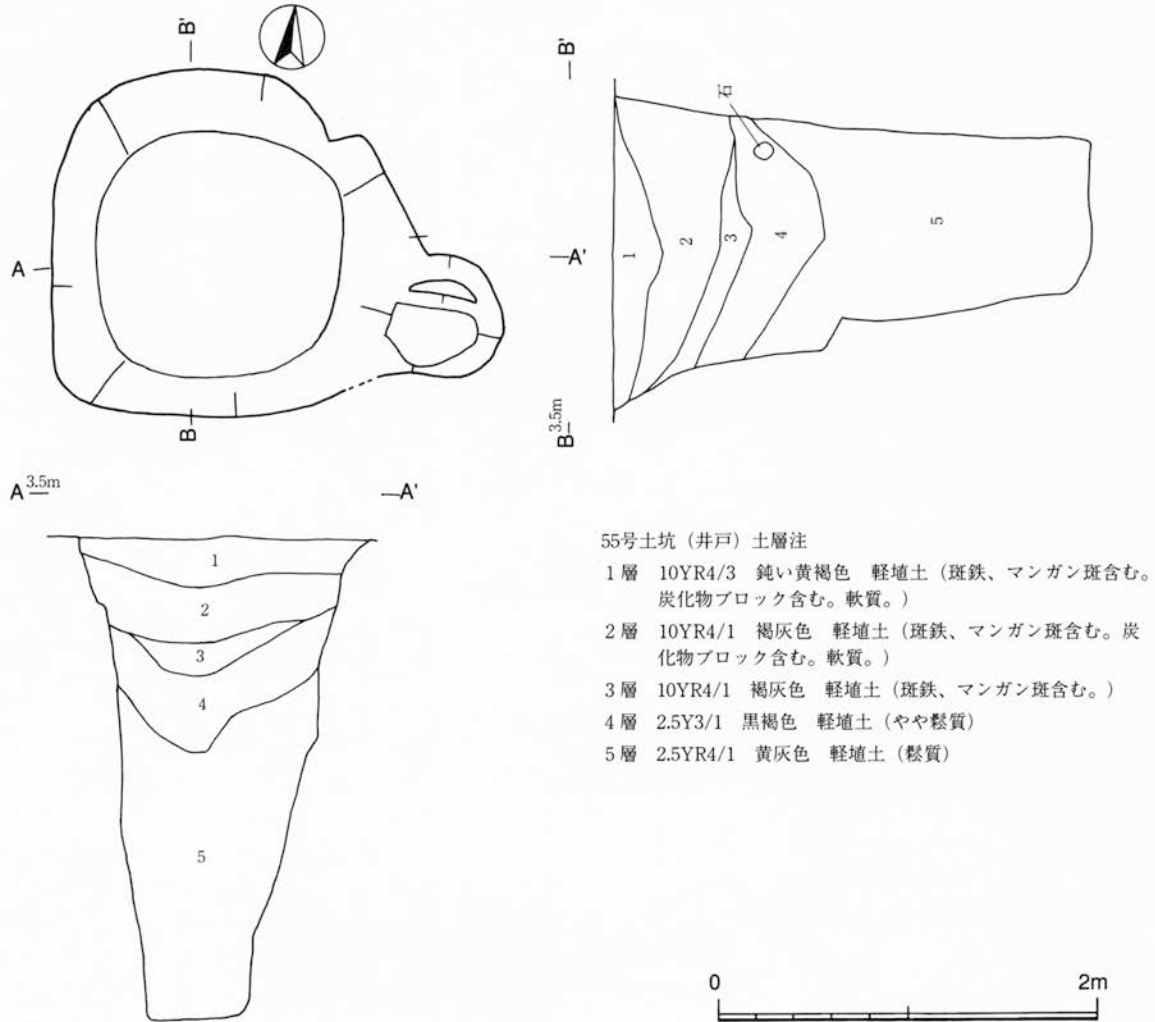


11号土坑(井戸)土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土(斑鉄、マンガン斑含む。)
- 2層 10YR4/3 鈍い黄褐色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。)
- 3層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。)
- 4層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。)
- 5層 10YR3/1 黒褐色 軽埴土(斑鉄含む。骨片含む。)
- 6層 10YR5/1 褐灰色 泥炭(ピート層)

第98図 11号土坑(井戸)平面図・断面図(S=1/40)

55号土坑



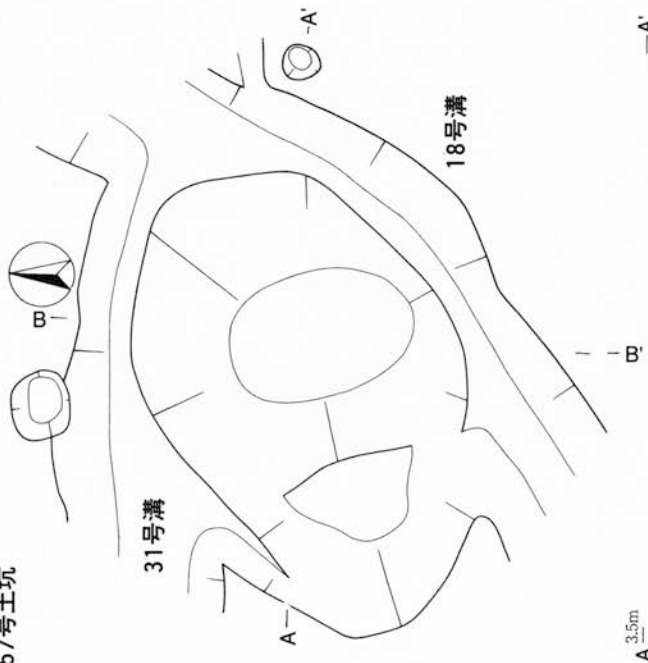
第99図 55号土坑 (井戸) 平面図・断面図 (S=1/40)

前半代と古い年代を示すものもあるが、土師器皿の年代から藤田編年V-I 1~I 2期 (15世紀後半~16世紀前半頃) と考えられる。また、青磁碗の線描き蓮弁文のB類や、瀬戸・美濃の年代が同時期と考えられ、最終埋没年代は後者となる。

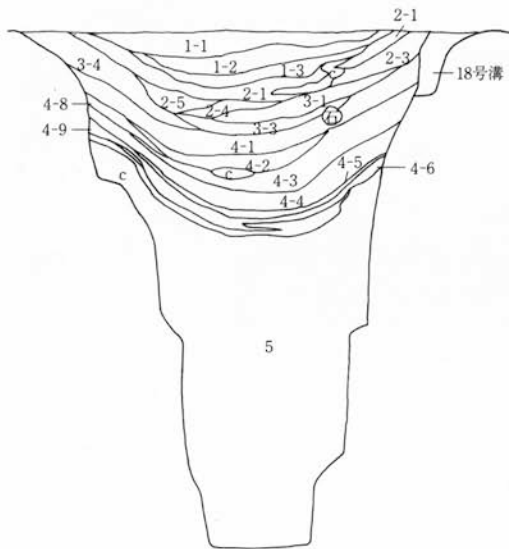
57号土坑

F-28グリッドから検出された井戸である。形態は、楕円形状を呈する。法量は、確認面で東西2.65m、南北2.45mを測る。底面より、4段階に径が大きくなる形態をとるため、井戸側が抜き取られた可能性がある。底面から高さ約0.3m (一段目) までの部分は径0.58m、高さ1.15mまでの部分 (二段目) は東西0.8m、南北0.9m、高さ1.7mまでの部分 (三段目) は、東西1.02m、南北1.12mを測る。深さは、確認面から2.75mを測る。確認面より約1.1m下までが、大きく口が開いた土坑状を呈しており、井戸側を引き抜いた際の土坑と考えられ、廃棄土坑として再利用されている。埋没の仕方は、前二者の井戸とは異なる様相をみせる。最下層は、骨片を含む黒褐色のピート層が約1.7m堆積しており、使用時堆積と考えられる。その直上に、骨片を含む、黒褐色~褐灰~灰黄褐色の軽埴土が堆積している。所々に人為的埋土を伴っており、藁屑のような炭がまとめて捨てられている。この炭層部分に伴って、遺物が出土する傾向にあり、両者の関連が想定される。これより上位は、褐灰~廃黄褐色

57号土坑



3.5m



57号土坑(井戸)土層注

- 1-1層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(軟質。)
- 1-2層 10YR3/2 黒褐色 軽埴土(軟質。)
- 1-3層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土(軟質。)
- 2-1層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。)
- 2-2層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。)
- 2-3層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土(炭化物ブロック含む。軟質。)
- 2-4層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。)
- 2-5層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。)
- 3-1層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。灰白色重埴土ブロック含む。砂礫含む。)
- 3-2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。灰白色重埴土ブロック含む。砂礫含む。)
- 3-3層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。灰白色重埴土ブロック含む。砂礫含む。)
- 3-4層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。灰白色重埴土ブロック含む。砂礫含む。)
- 4-1層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。やや鬆質)
- 4-2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。やや鬆質)
- 4-3層 2.5Y3/2 黒褐色 軽埴土(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。鬆質)
- 4-4層 2.5Y4/1 黄灰色 軽埴土(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。鬆質)

- 4-5層 2.5Y3/1 黒褐色 軽埴土(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。鬆質)
- 4-6層 2.5Y4/1 黄灰色 泥炭(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。鬆質)
- 4-7層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。鬆質)
- 4-8層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。鬆質)
- 4-9層 2.5Y3/1 黒褐色 軽埴土(ピート層。炭層が挟まる。骨片含む。鬆質)
- 5層 2.5Y3/2 黒褐色 軽埴土(ピート層。骨片含む。鬆質)



第100図 57号土坑(井戸)平面図・断面図(S=1/40)



の軽埴土で埋っている。遺物は、青磁碗、古瀬戸平椀・卸皿・天目茶碗等、珠洲焼甕・壺・鉢、越前焼鉢、加賀焼甕・壺、土師器皿が出土している。時期は、土師器皿の年代から藤田編年Ⅳ－Ⅱ期（15世紀前半～中頃）と考えられる。青磁碗はD類、古瀬戸は後Ⅲ～Ⅳ古期、珠洲もⅣ～Ⅴであり、使用年代を加味すれば土師器の年代と矛盾しないものであり、前二者の井戸より、古い段階に位置付けられる。

### 第3項 土坑

#### 1. 中世前期

##### 13号土坑

D-27グリッドから検出された、ほぼ円形を呈する土坑である。長径0.9m×短径0.88m、深さ0.5mを測る。壁面の立ち上がりが急であり、底面は比較的フラットな土坑である。16号溝を切っている。覆土は、上層が褐灰色、中層が灰黄褐色の有機物を含む軽埴土で埋り、下層には、やや軟質の褐灰色軽埴土が堆積している。形状及び土層の堆積状況から、溜め井戸等の使用方が考えられる。その為か、比較的清浄に保たれたのか、遺物は非常に少なく、数点の土師器皿及びロクロ土師器が出土している。時期は、土師器皿片は小片で判定できず、ロクロ土師器椀の年代観は、藤田編年Ⅱ－Ⅰ1期（12世紀後半頃）のものだと判断される。但し、16号溝との切り合い関係からみれば、14世紀前半以降と判断され、ロクロ土師器椀の年代観とは整合しない。土師器皿小片は後者の時期と整合する可能性がある。千代オオキダ遺跡では各時代の遺物が埋土中に含まれることが十分想定されるため、切り合い関係を重視して、後者の年代観を採用しておきたい。

##### 14号土坑

C-29グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径3.4m×短径2.2m、深さ0.6mを測る。壁面の立ち上がりが緩やかな、大型の土坑である。覆土は、上層が褐灰色の軽埴土、下層が褐灰色の炭化物を含む軽埴土で埋る。遺物は、青磁片、古瀬戸椀、珠洲焼鉢・甕、加賀焼甕、土師器皿が出土している。時期は、土師器皿片は中世前半期としか判断できないため、他の時期判定可能遺物で判断したい。珠洲焼は、Ⅳ期でも特にⅣ2期頃（14世紀前半）であり、加賀焼は甕の口縁部を欠くため、詳細な時期まで判定出来ないが、形態からⅢ期以降のものだと判断される。中世陶器は使用年代を考慮しなければならないが、前項の井戸跡の年代である14世紀前半代と同時期と見ておきたい。

##### 15号土坑

D-29・30グリッドから検出された隅丸方形の土坑である。長径2.7m×短径2m、深さ0.7mを測る。壁面の立ち上がりが急であり、底面がフラットな形態をとる土坑である。上面を33号溝に切られている。覆土は、上層が褐灰色の軽埴土、中層は褐灰色の炭化物を含む軽埴土で埋り、下層に薄く褐灰色のピート層が堆積している。遺物は少なく、越前焼鉢、土師器皿が出土している。時期は、土師器皿片は中世前半期としか判断できないため、他の時期判定可能遺物で判断したい。越前焼の年代から、14世紀前半頃と考えられる。中世陶器は使用年代を考慮しなければならないが、14号土坑と同様に、14世紀前半前半代と判断する。越前焼の鉢は、16号溝出土破片と接合関係にある。

##### 74号土坑

I・J-27・28グリッドから検出された不整形な楕円形の土坑である。径1.4m、深さ約0.2mを測る。非常に浅く、壁面は南側のみ立ち上がり、他は緩やかな坂状を呈する。覆土は、灰黄褐色の埴土で埋る。遺物は、土師器皿が出土している。時期は、中世前半期としか判断できない。

##### 76号土坑

G-23グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径は両端をピットに切られているため推定地で1.7mを測る。短径0.7mと長径に比べ短く、扁平な形態となっている。深さは、0.4mを測る。壁面の立ち上がりが比較的急であり、底面がフラットな形態をとる土坑である。覆土は、上層が厚く、灰黄褐色の軽埴土で埋り、下層は、やや暗めの灰黄褐色の軽埴土が堆積している。遺物は、白磁椀、古

瀬戸瓶子・壺、珠洲焼甕、土師器皿が出土している。土師器皿の年代は、藤田編年Ⅱ－Ⅰ3期（13世紀初頭頃）と考えられる。一方で、古瀬戸の破片は、胴部破片であり、詳細な時期まで判定できないが、鉄釉製品が見られることから、Ⅲ期（13世紀末頃）以降であることはいえる。二時期の遺物がみられ、最終埋没年代は後者ということになる。

#### 77号土坑

K・L-27・28グリッドから検出された長方形の土坑である。93号土坑に切られているが、長径2.5m、短径2.15m、深さ0.48mを測る。壁面の立ち上がりが急であり、底面がフラットな形態をとる、いわゆる竪穴状遺構と呼称されるものである。覆土は、上層が厚く、灰黄褐色の埴壤土で埋り、中層は褐灰～灰黄褐色の埴壤土、下層はやや明るめの褐灰～灰黄褐色の軽埴土が堆積している。遺物は少なく、古瀬戸器種不明破片、加賀焼鉢片、土師器皿片が出土している。土師器皿は時期の判定が不可能な小片であり、加賀焼も壺の底部のため、時期は特定できない。但し、古瀬戸の破片が鉄釉製品であることから、中期（13世紀末頃）以降であることはいえる。

#### 90号土坑

I-29グリッドから検出された楕円形の土坑である。長径1.55m×短径1.07m、深さ0.55mを測る。壁面の立ち上がりが比較的急であり、底面がフラットな形態をとる土坑である。覆土は、上層は灰黄褐色の埴壤土で埋り、中層はやや暗めの灰黄褐色の埴壤土、下層は褐灰色の軽埴土で埋っている。遺物は少なく、珠洲焼鉢片1点、土師器皿片1点が出土している。時期は小片であるため、中世前半期としか判断できない。

#### 94号土坑

H-28グリッドから検出された不整形な方形の土坑である。長径3.14m×短径2.4m、深さ0.14mを測る。非常に浅く、壁面の立ち上がりは見られず、緩やかな坂状を呈する。覆土は、灰黄褐色の埴壤土で埋る。遺物は、土師器皿が出土している。時期は、中世前半期としか判断できない。

#### 153号土坑

F-29・30グリッドから検出された楕円形の土坑である。土坑の西辺部分に攪乱を受けている。確認長で、長径1.92m×短径1.25m、深さ0.14mを測る。非常に浅く、壁面の立ち上がりは見られず、緩やかな坂状を呈する。覆土は、褐灰色の埴壤土で埋る。遺物は、古瀬戸瓶子片と、珠洲焼壺片が出土している。時期は、珠洲焼壺がⅡ期（13世紀前半）で、古瀬戸瓶子は後Ⅰ期頃（13世紀後半）と判断される。よって最終埋没年代は、13世紀後半以降になろう。珠洲焼壺の出土は、長期使用などの要因が想定される。

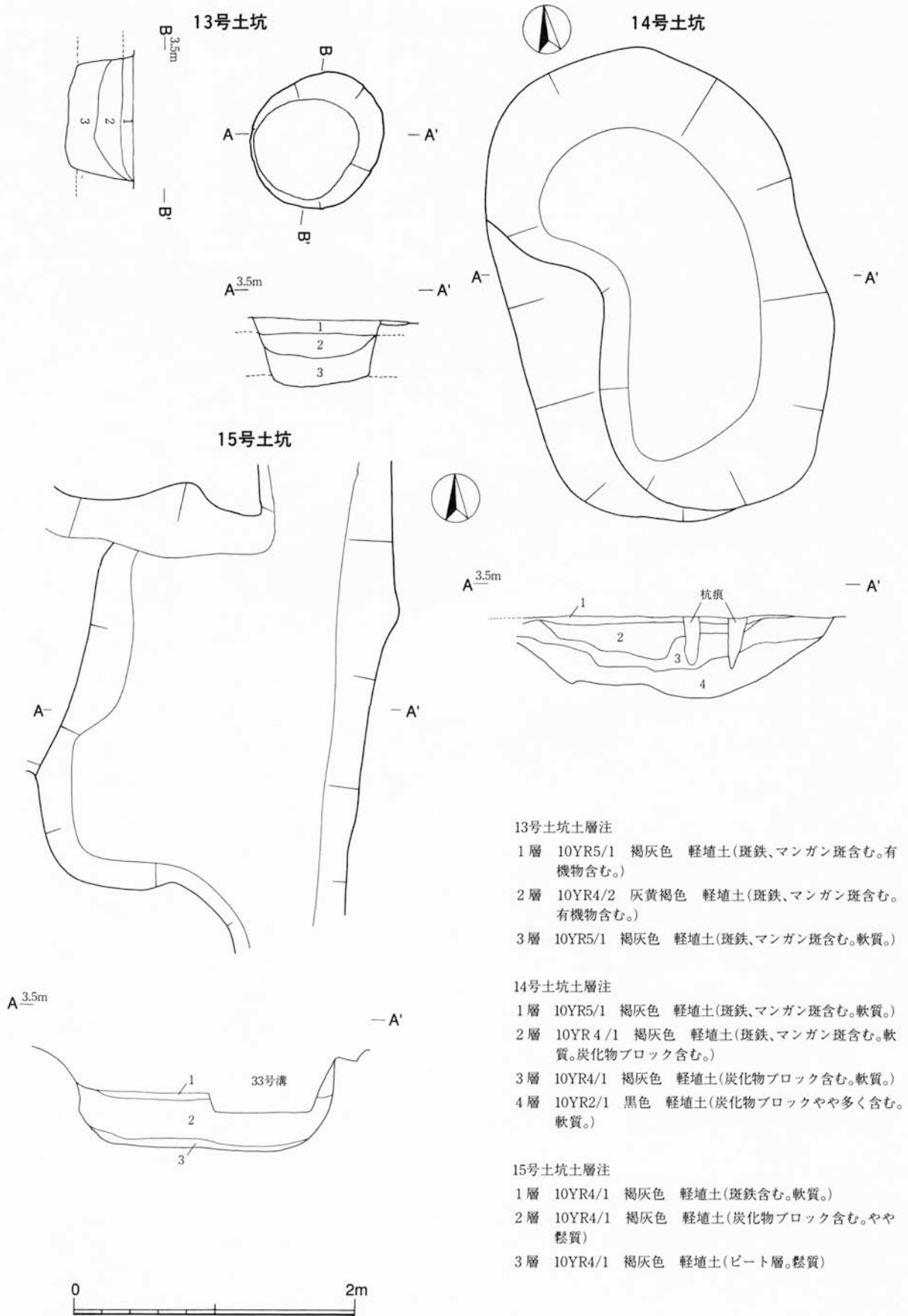
#### 155号土坑

F-29・30グリッドから検出された楕円形の土坑である。土坑の東辺部分に攪乱を受けている。確認長で、長径1.3m×短径1.1m、深さ0.03mを測る。ごく一部しか残っていない状態であり、壁面の立ち上がりは見られず、緩やかな坂状を呈する。覆土は、灰黄褐色のシルト質埴壤土で埋る。遺物は、珠洲焼壺片と加賀焼壺片が出土している。時期は、加賀焼壺は、胴部小片で時期判定不能であり、珠洲焼壺がⅣ期（13世紀末～14世紀前半）と判断される。よって最終埋没年代は、14世紀前半と判断される。

## 2. 中世後期

#### 16号土坑

D-28・29グリッドから検出された隅丸方形の土坑であり、17号溝を切っている。長径1.84m×短径1.75m、深さ0.92mを測る。比較的深手で、全体に約30cm下げた状態から、南西隅部を円筒形に掘り下げていることから、浅い井戸や、水溜等が考えられる。覆土は、上層テラス部分が褐灰色の軽埴土で埋り、下層円筒部分は、黒褐色のピート層が堆積している。遺物は少なく、加賀焼鉢1点と、古瀬戸と平椀が出土している。この平椀は、34号溝と36号溝と接合関係にある。時期は、平椀の年代から後Ⅱ期頃（14世紀末～15世紀初頭）と判断される。加賀焼は混入か、長期使用を経たものと判断する。



13号土坑土層注

- 1層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。)
- 2層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。有機物含む。)
- 3層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。軟質。)

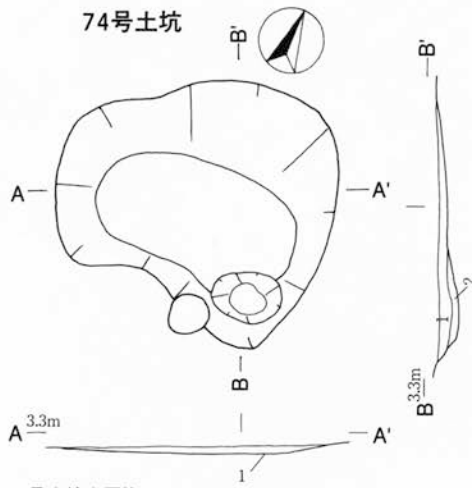
14号土坑土層注

- 1層 10YR5/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。軟質。)
- 2層 10YR 4 / 1 褐灰色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。軟質。炭化物ブロック含む。)
- 3層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック含む。軟質。)
- 4層 10YR2/1 黒色 軽埴土(炭化物ブロックやや多く含む。軟質。)

15号土坑土層注

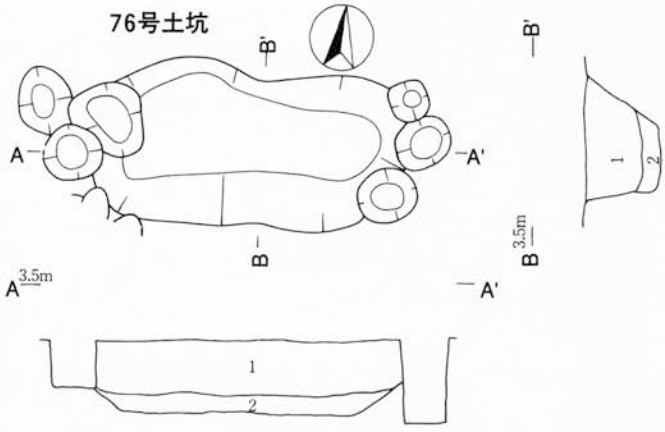
- 1層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(斑鉄含む。軟質。)
- 2層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック含む。やや鬆質)
- 3層 10YR4/1 褐灰色 軽埴土(ビート層。鬆質)

第101図 13号・14号・15号土坑平面図・断面図 (S=1/40)



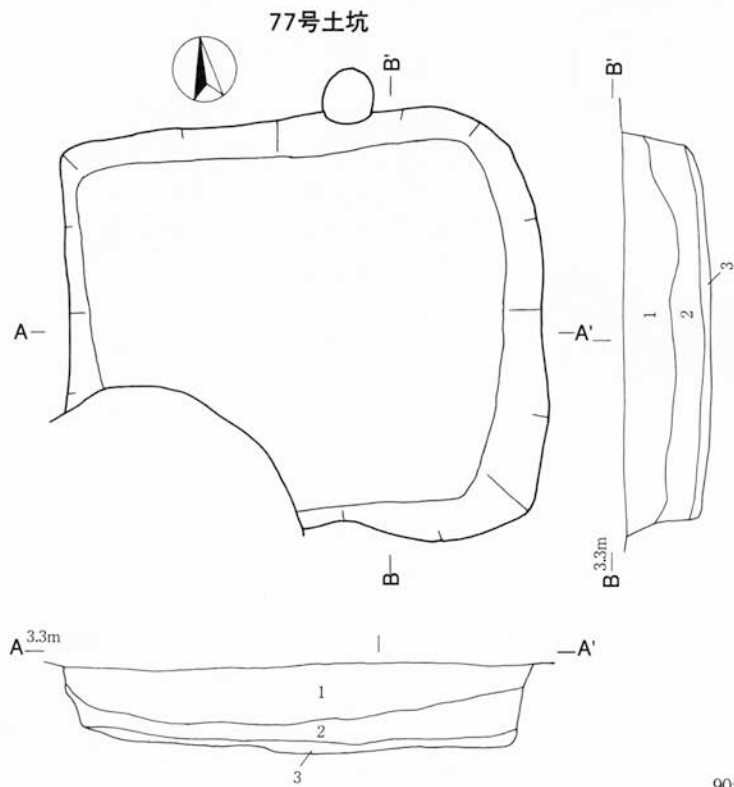
74号土坑土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土(白色砂粒少量含む。炭化物ブロック少量含む。)
- 2層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土(10YR7/1灰白色軽埴土ブロック少量含む。)



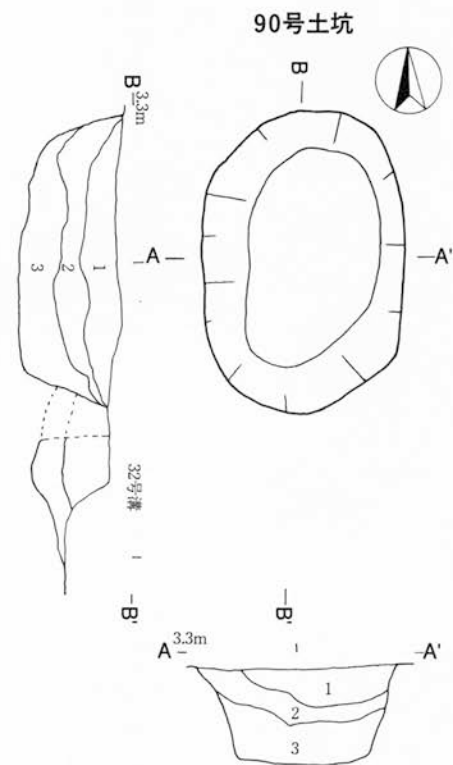
76号土坑土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土(軟質。)
- 2層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(軟質。)



77号土坑土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土(マンガン斑多く含む。炭化物ブロック少量含む。堅く締まる。)
- 2層 10YR4/1~4/2 褐灰~灰黄褐色 埴壤土(マンガン斑少量含む。やや軟質。炭化物ブロック極少量含む。)
- 3層 10YR5/1~5/2 褐灰~灰黄褐色 軽埴土



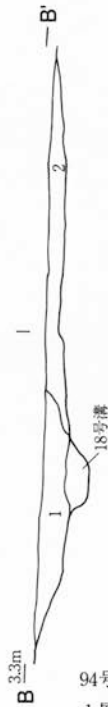
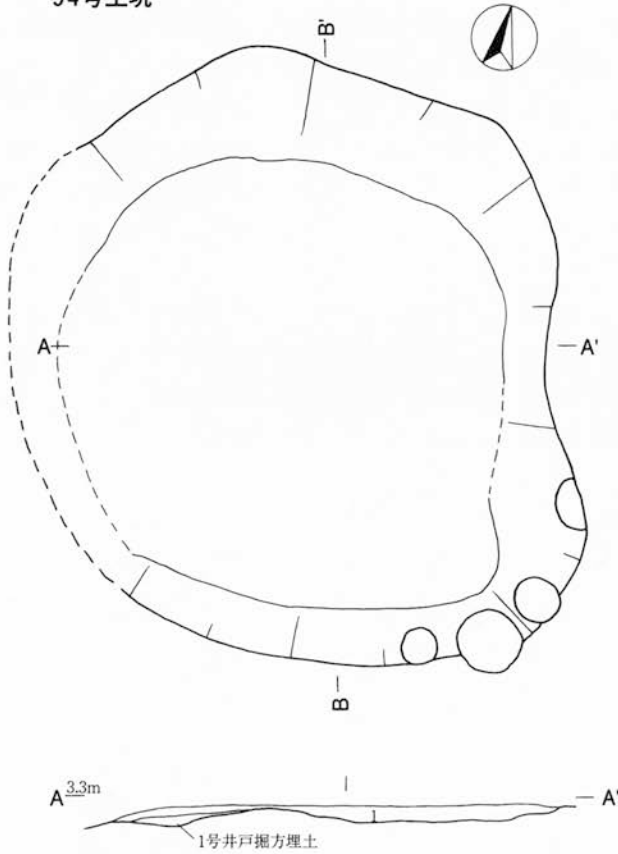
90号土坑土層注

- 1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土(マンガン斑多く含む。炭化物ブロック少量含む。)
- 2層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土(マンガン斑多く含む。10YR7/2鈍い黄橙色軽埴土ブロック多く含む。)
- 3層 10YR6/1~5/1 褐灰色 軽埴土(軟質。炭化物ブロック多く含む。マンガン斑少量含む。10YR7/1灰白色軽埴土帯状に含む。)



第102図 74号・76号・77号・90号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

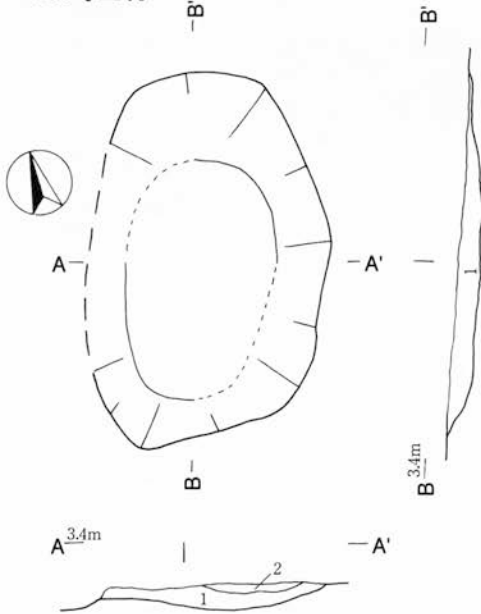
94号土坑



94号土坑土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 埴壤土(マンガ斑多く含む。炭化物ブロック少量含む。堅く締まる。)
- 2層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土(マンガ斑多量に含む。やや軟質。炭化物ブロック多量に含む。10YR7/1 灰白色軽埴土ブロック多量に含む。)

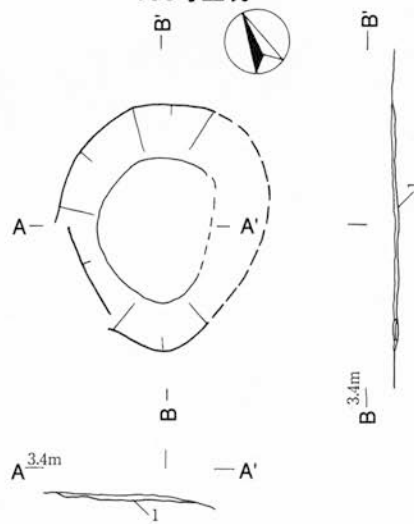
153号土坑



153号土坑土層注

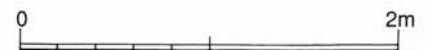
- 1層 10YR5/1 褐灰色 壤土(炭化物ブロック多く含む。)
- 2層 10YR6/3 鈍い黄橙色 壤土(10YR5/1褐灰色壤土混在。)

155号土坑



155号土坑土層注

- 1層 10YR5/1 灰黄褐色 シルト質壤土(炭化物ブロック多量に含む。)



第103図 94号・153号・155号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

#### 45号土坑

C-17グリッドから検出された楕円形の土坑である。二段掘りの土坑であり、南側を除く部分がテラス状となる。長径3.7m×短径1.7m、深さ0.12mを測る。覆土は、上層が灰黄褐色の壤土、下層が灰黄褐色軽埴土で埋る。遺物は、古瀬戸袴腰形香炉、越前焼甕、加賀焼甕・鉢、中世土師器皿が出土している。時期は、土師器皿は小片で時期判定不能であり、古瀬戸では後I期（14世紀後半頃）と判断される。加賀も、V期頃が想定できるものである。ただし、遺構の切り合い関係を考慮すれば、16世紀前半より後の年代が与えられる。

#### 58号土坑

F-28グリッドから検出された不整形な楕円形の土坑である。長径1.3m×短径0.9m、深さ0.52mを測る。壁面の立ち上がりも、1層と2層の層離面で屈曲を持ち、不整形な形態である。覆土は、上層が褐灰色の軽埴土、下層は鈍い黄橙色軽埴土と褐灰色軽埴土の混層で埋る。遺物は、青磁輪花皿が出土している。時期は、紀淡海峽出土遺物に類例があり、15世紀前後～中葉と判断される。

#### 60・61号土坑

D-11グリッドから検出された楕円形の土坑である。60号土坑が61号土坑を切っている。確認長で、60号土坑が長径1.3m×短径1.1m、深さ0.1m、61号土坑が長径1.7m×短径1.3m、深さ0.12mを測る。ごく一部しか残っていない状態であり、壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は、60号土坑は灰黄褐色の軽埴土、61号土坑は、褐灰色の埴土で埋る。遺物は、61号土坑から越前焼鉢が出土している。時期は、IV期後半（15世紀後半頃）と判断される。

#### 72号土坑

J・K-30グリッドから検出された楕円形の土坑である。北側から南側にかけて攪乱を受けて削られている。二段掘りの土坑であり、西側がテラス状に段となる。長径2.77m×短径1.55m、深さ0.55mを測る。覆土は、上層が褐灰色の壤土、下層が鈍い黄褐色埴土で埋る。遺物は、青磁碗、越前焼甕、珠洲焼甕が出土している。時期は、青磁碗がD類であり、14世紀末～15世紀初頭のものである。また、その青磁碗は57号土坑のものと接合関係にあるため、57号土坑と同じ15世紀前半代を想定しておきたい。

#### 93号土坑

K・L-28グリッドから検出された楕円形の土坑である。西端は調査区外に伸び、北端で75号土坑を、東端で77号土坑を切る。確認長で、長径3.4m×短径2.6m、深さ0.37mを測る。壁面の立ち上がりがなく、緩やかな坂上を呈する土坑である。覆土は、上層は、灰黄褐色の埴土で埋り、下層は、褐灰色の軽埴土で埋っている。遺物の出土はないが、切りあいから中世後期土坑と判断される。

#### 154号土坑

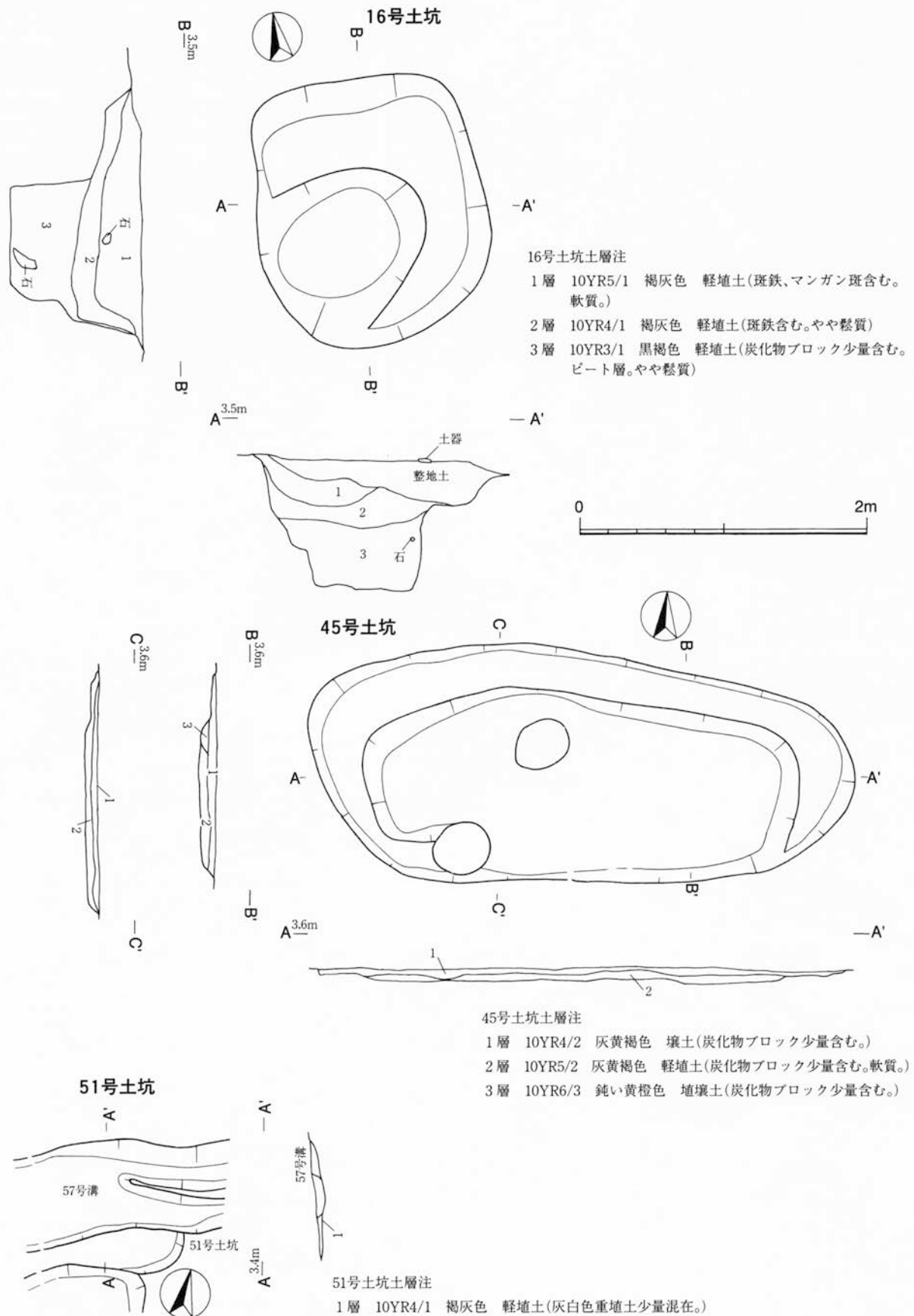
G-29・30グリッドから検出された長方形の土坑である。極浅い部分しか残存しておらず、壁面の立ち上がりが明確ではないが、いわゆる竪穴状遺構の形態をとる。長辺2.8m×短辺2.05m、深さ0.14mを測る。覆土は、上層が褐灰色の砂壤土、下層が褐灰色の壤土で埋る。遺物は、中世土師器皿が出土している。土師器皿の年代から藤田編年V-I 2期（16世紀前半頃）と考えられる。

#### 157号土坑

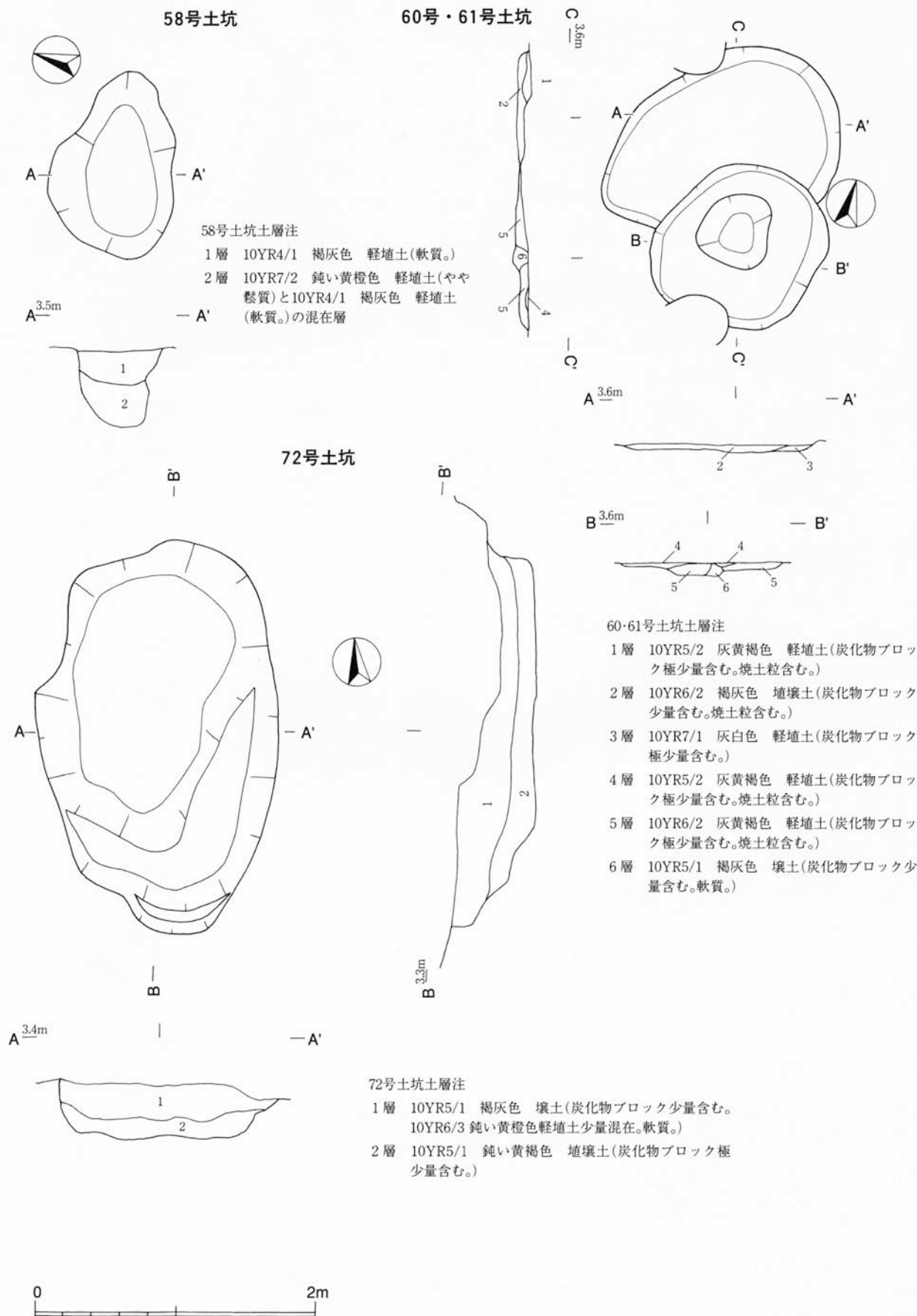
G-29・30グリッドから検出された略長方形の土坑である。東南部分を攪乱によって削られている。極浅い部分しか残存しておらず、壁面の立ち上がりが明確ではない。やや不整形な形だが、床面がフラットに保たれていることから、竪穴状遺構ではないかと考えられる。長辺2.8m×短辺2.05m、深さ0.14mを測る。覆土は、褐灰色の埴土で埋る。遺物は、古瀬戸平椀・天目茶碗、越前焼甕、加賀焼甕・壺、中世土師器皿が出土している。時期は、土師器皿の年代から藤田編年IV-I 期（14世紀後半）と考えられる。加賀は、IV～V期頃が想定できるものであり、使用年代を加味すれば土師器皿の年代と矛盾しないものである。

#### 84・85号土坑

G-29・30グリッドから検出された連結した土坑である。84号土坑が長方形、85号土坑が楕円形の

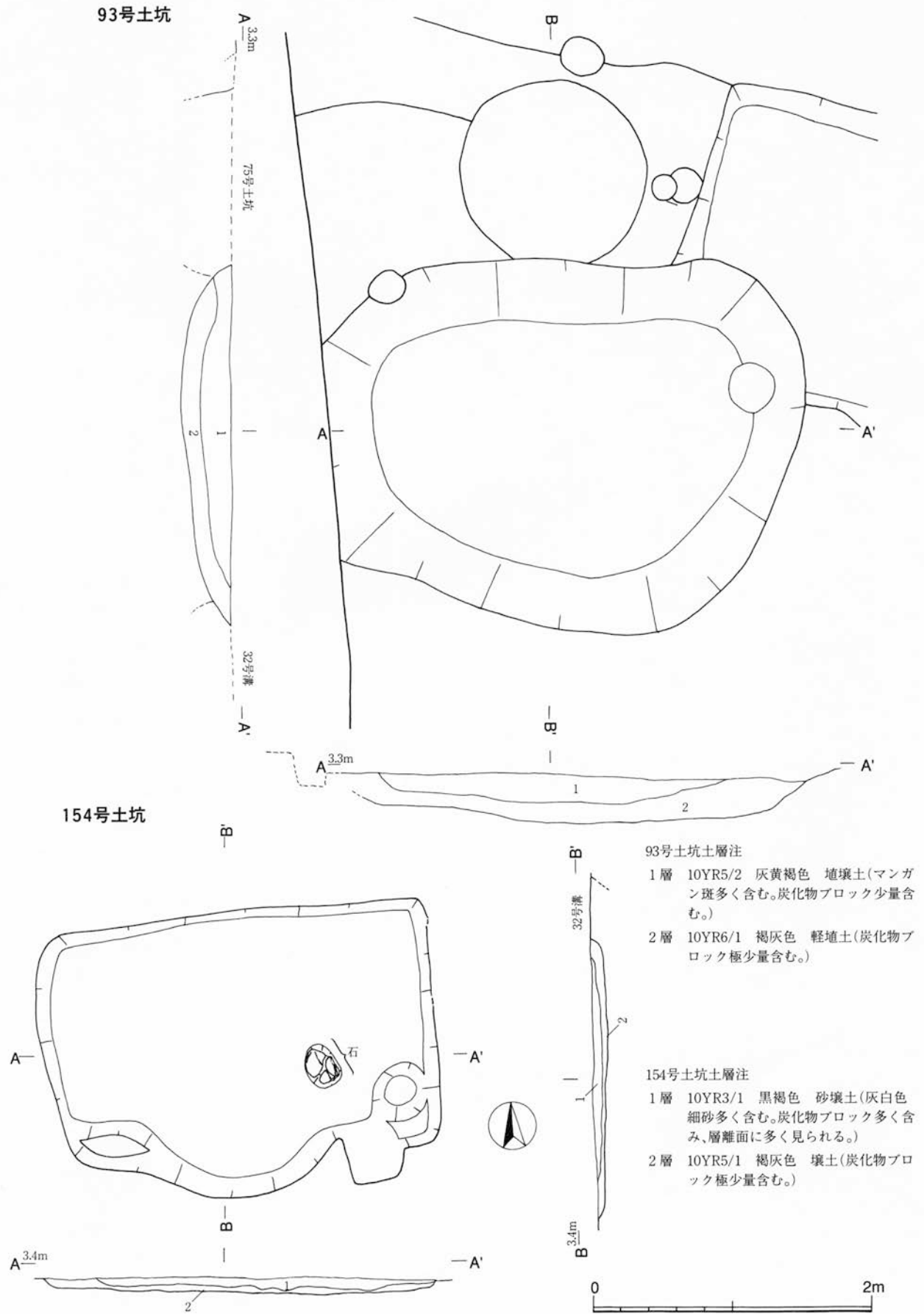


第104図 16号・45号・51号土坑平面図・断面図 (S=1/40)



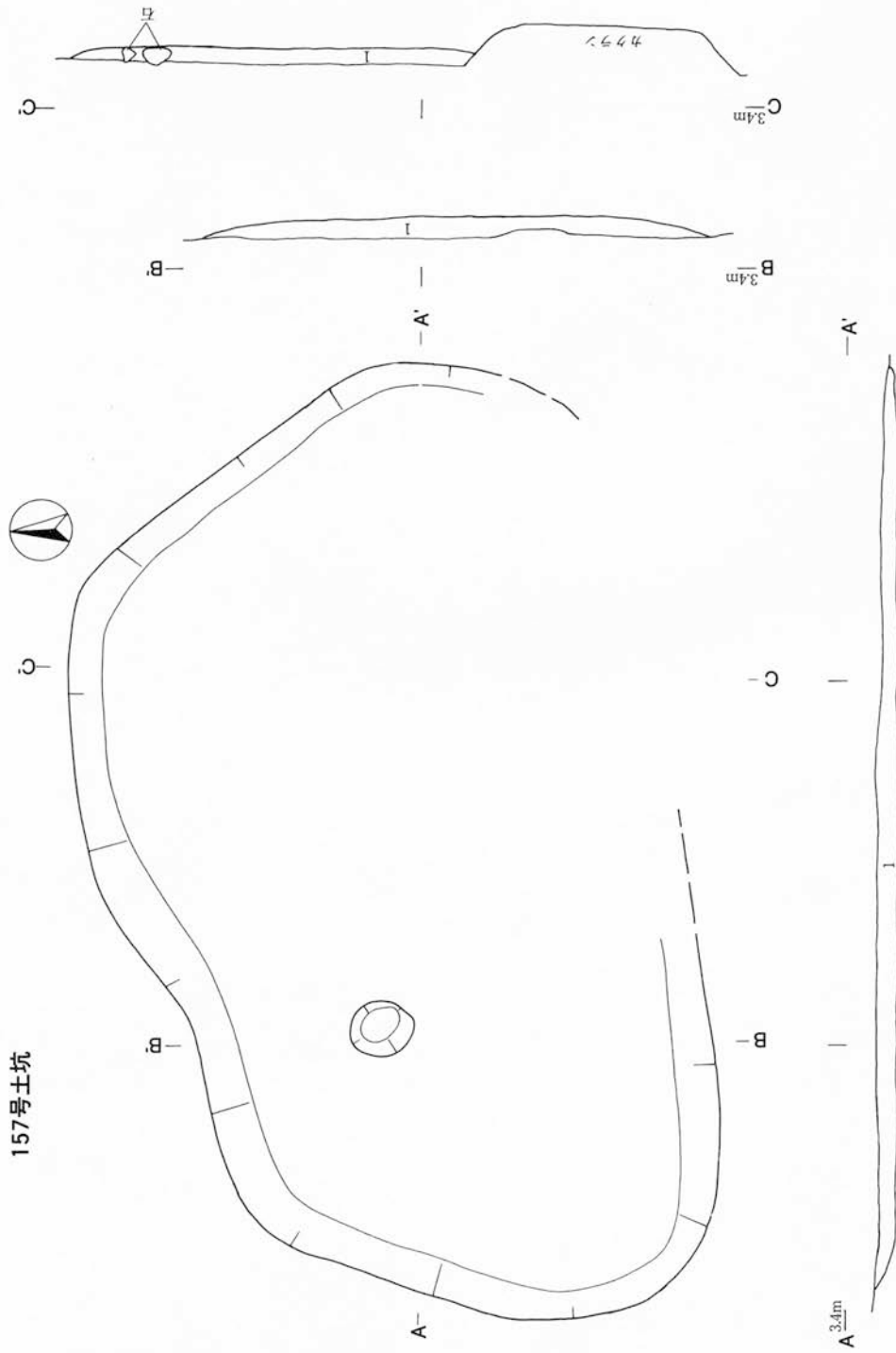
第105図 58号・60号・61号・72号土坑平面図・断面図 (S=1/40)





第106図 93号・154号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

157号土坑

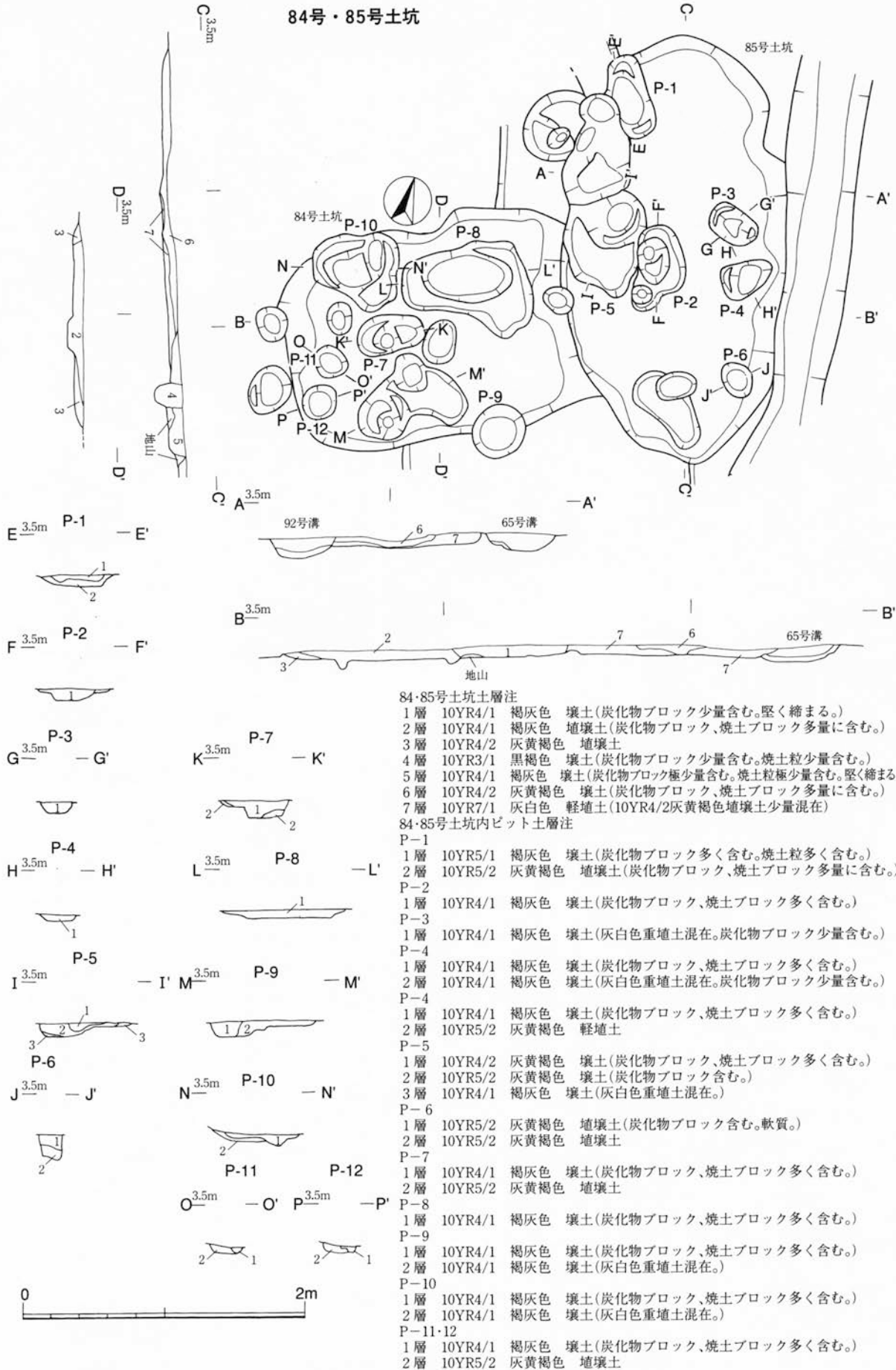


157号土坑土層注  
 1層 10YR5/1 褐灰色 壤壤土(炭化物ブロック少量含む。)

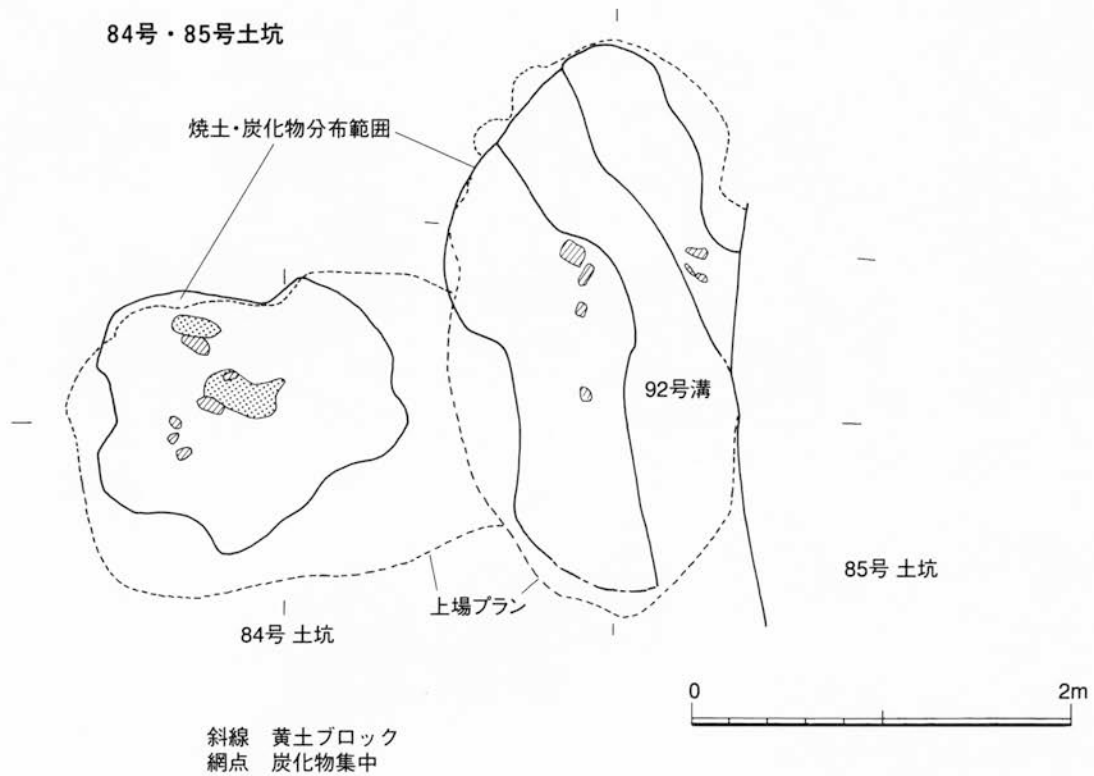


第107図 157号土坑平面図・断面図 (S=1/40)

84号・85号土坑



第108図 84・85号土坑平面図・断面図 (S=1/40)



第109図 84・85号土坑平面図 (S=1/40)

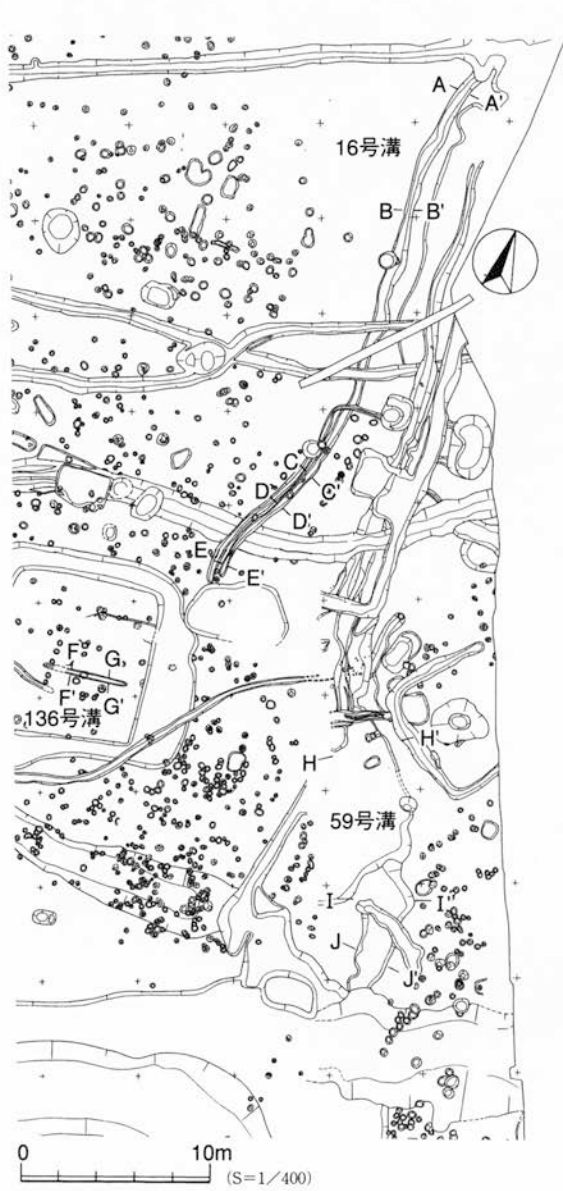
形態をとる。極浅い部分しか残存しておらず、壁面の立ち上がりが明確ではない。この土坑は、埋土に大量の焼土を含んでいる点が、他の土坑には見られない特徴である。特に、84号土坑には、炭化物の集中範囲も2カ所見られた。これらの埋土を除去すると、床面には多くの不整形なピットが掘られていた。ピットの埋土も、土坑埋土と同じような焼土や炭化物を含む土で埋っていた。これらのピットは、竪穴住居跡の掘り方土坑のように、防湿効果をねらったものであろうか。但し、土坑自体の床面は焼けてはいない。遺物も、土師器皿小片1点が埋土中に含まれていたのみである。土坑の使用法など、その性格は特定することができない。84号土坑が長辺2.0m×短辺1.5m、深さ0.08mを測る。85号土坑が長径3.0m×短径1.5m、深さ0.08mを測る。覆土は、84号土坑が褐灰色の壤土～埴壤土、85号土坑が黒褐色の壤土で埋る。遺物は、前述のとおり中世土師器皿小片1点が出土している。時期の比定は不可能であるが、遺構の切り合い等から判断して、中世後期に位置付け可能と判断される。

#### 第4項 溝跡

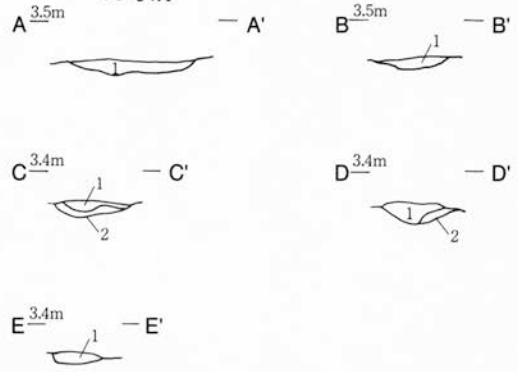
##### 1. 中世前期

##### 16号溝

C-25グリッドからE-30グリッドにかけて検出された溝である。南北軸の溝で、上端幅0.7m、深さ0.1mを測る。覆土は、灰黄褐色の軽埴土で埋る。高低差から、北から南への流れが判断できる。遺



16号溝



16号溝土層注

- 1層 10YR4/2 灰黄褐色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。軟質。有機物含む。)
- 2層 2.5Y6/2 灰黄褐色 壤土

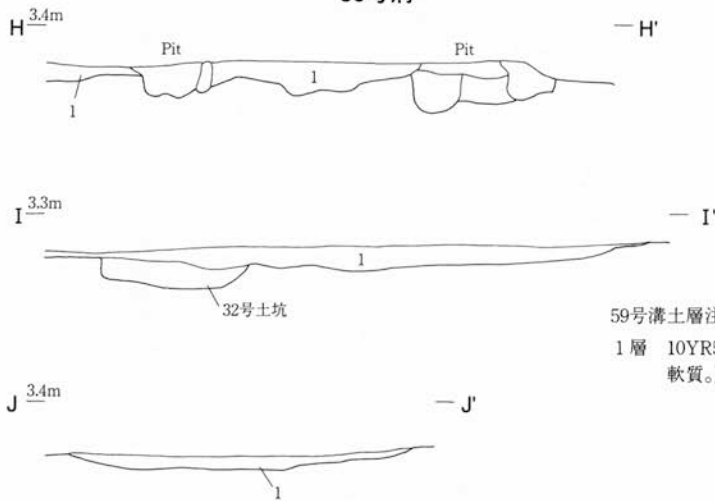
136号溝



136号溝土層注

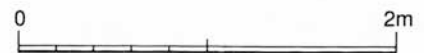
- 1層 10YR5/1 褐灰色 壤土(炭化物ブロック極少量含む。)

59号溝

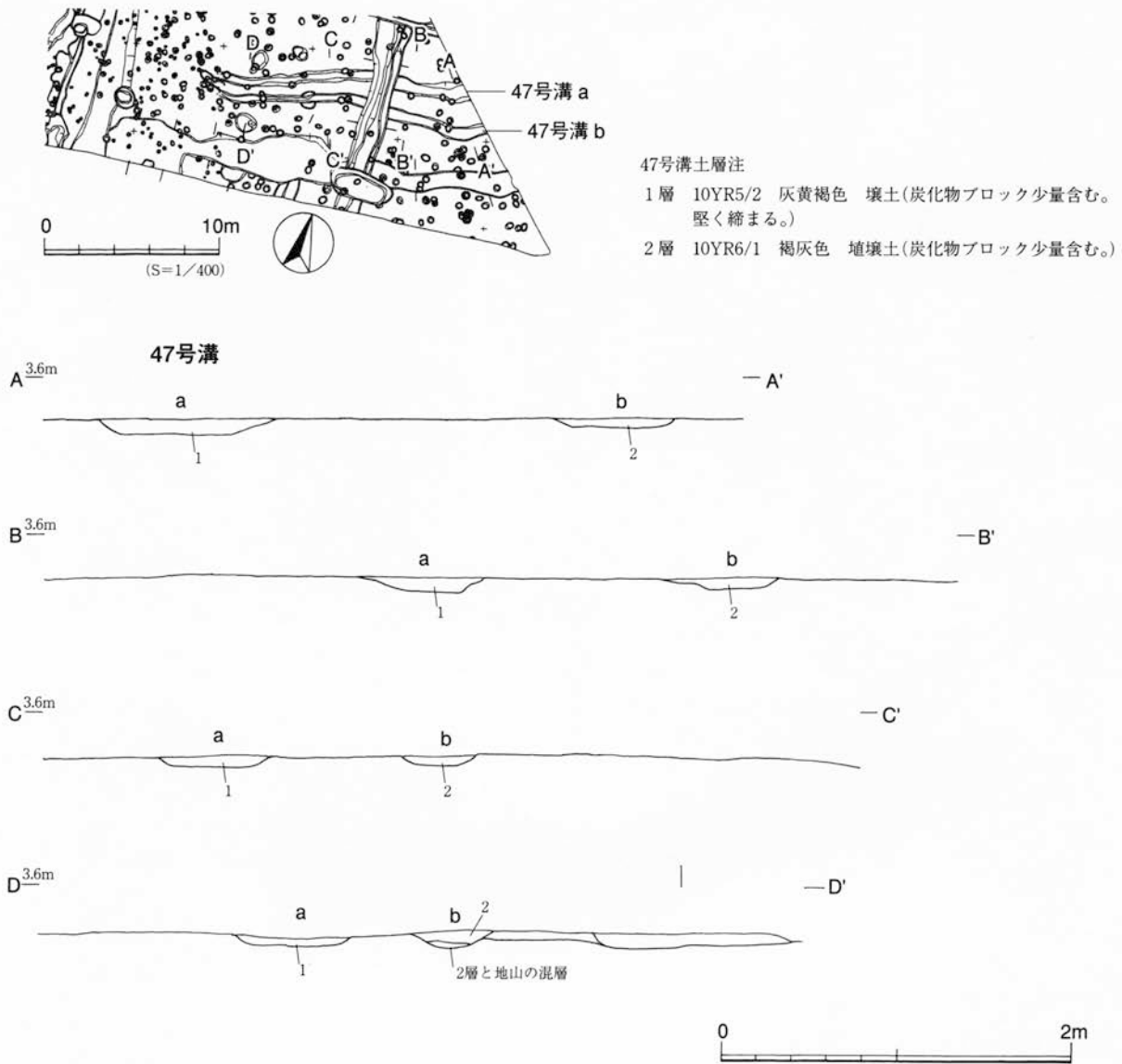


59号溝土層注

- 1層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土(砂粒混在。炭化物ブロック含む。軟質。)



第110図 16号・136号・59号溝断面図 (S=1/40)

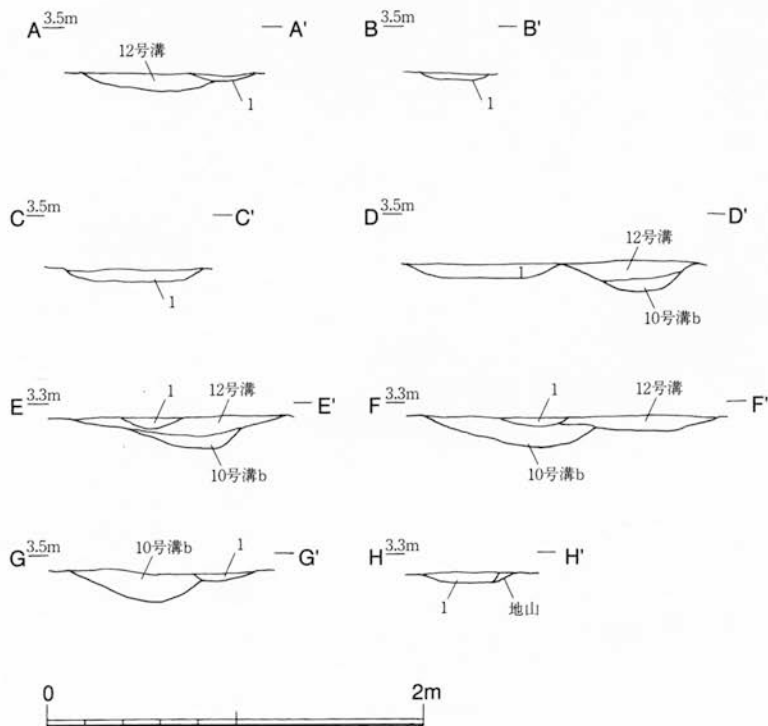
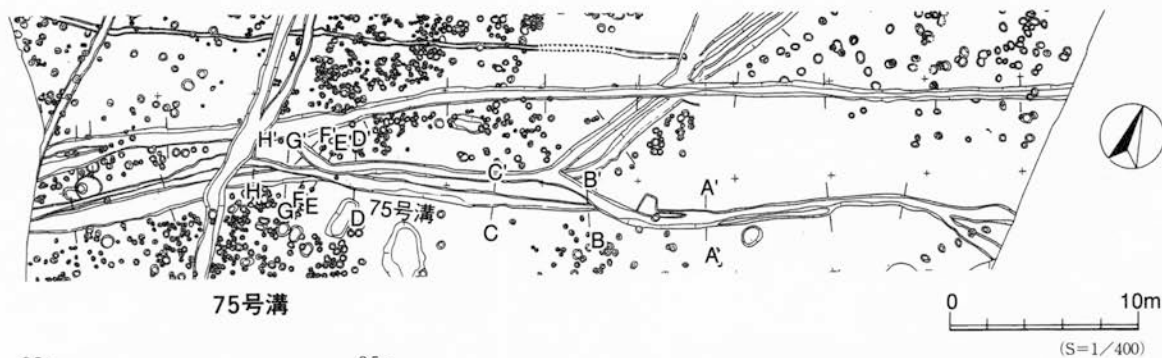


第111図 47号溝断面図 (S=1/40)

物は、少量だが、越前焼鉢、土師器皿が出土している。土師器皿の時期は、中世前半としか判断できない。越前焼鉢は、前述の15号土坑と接合関係を持つ個体であり、14世紀前半頃と考えられる。中世陶器は使用年代を考慮しなければならないが、15号土坑と同時期にあたる、最終埋没年代を14世紀前半代と判断する。

#### 47号溝

B-16グリッドからE-16グリッドにかけて検出された2本の並走した溝である。2本が切り合う部分がなかったため、遺構番号を別とせず、北側を47-a号溝、南側を47-b号溝とした。E-16グリッド以西は、既に削平されており検出できなかった。東西軸の溝であり、47-a号溝は、上端幅1.0m、深さ0.1mを測る。覆土は、灰黄褐色の壤土で埋る。47-b号溝は、上端幅0.7m、深さ0.08mを測る。覆土は、褐灰色の埴壤土で埋る。残存部分において、床面の高低差は、低い部分と高い部分が混在するため、流れる方向は判断できない。遺物は、古瀬戸椀、珠洲焼壺・鉢、加賀焼甕、中世土師器皿が出土している。時期は、珠洲焼鉢の卸目が密に施されていることから判断して、IV期以降（14世紀代



75号溝土層注

1層 10YR4/2 灰黄褐色 シルト質壤土(斑鉄、マンガン斑含む。炭化物ブロック含む。)

第112図 75号溝断面図 (S=1/40)

以降)と考えられる。ただし、土師器の破片が、中世前期と判断されるものが多いため、中世後期には下らないと判断される。

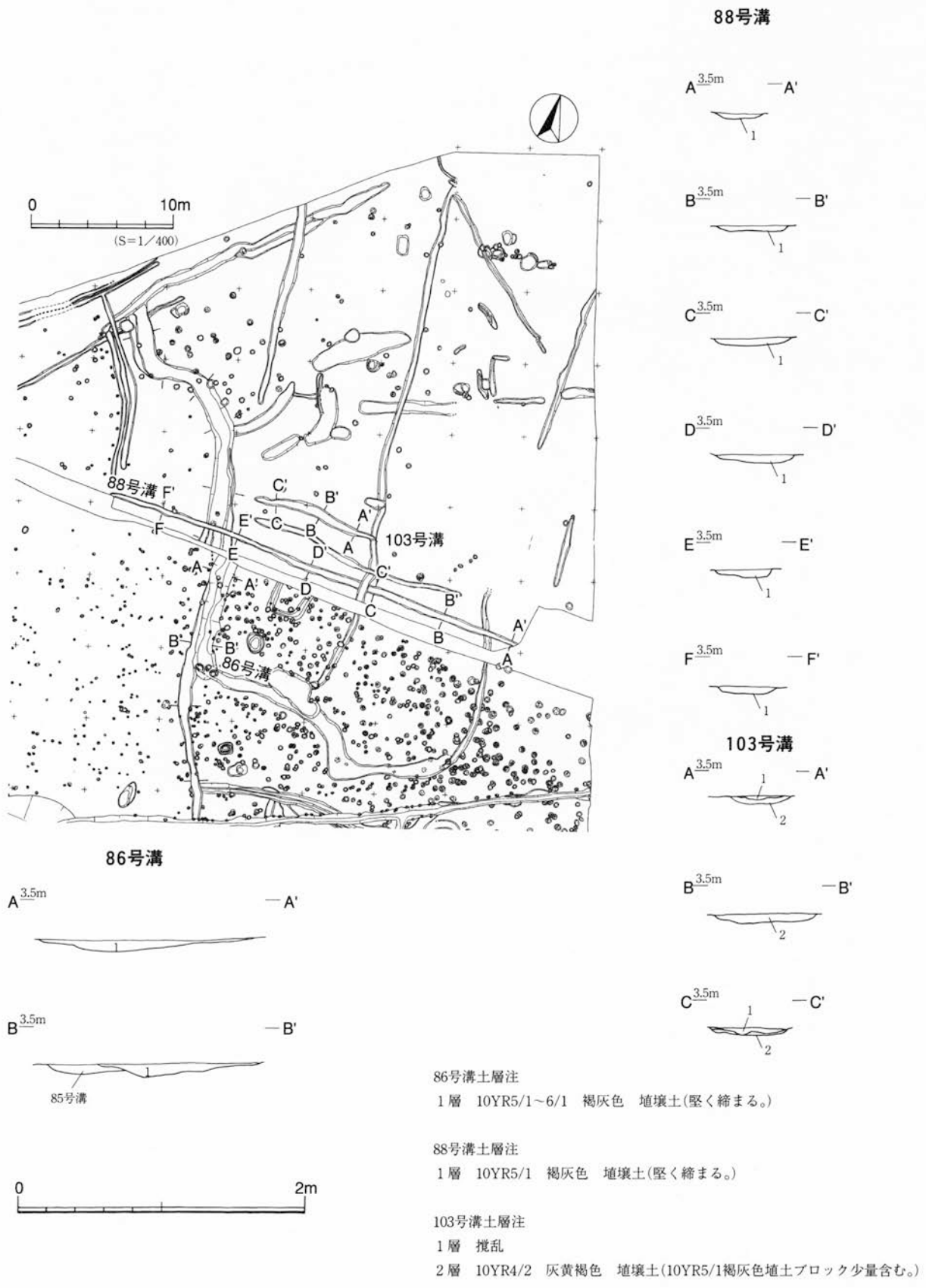
59号溝

D-31グリッドからD-34グリッドにかけて検出された南北方向の溝である。南端部分は、攪乱を受けているため、詳細は不明である。最大上端幅で3.2m、深さ0.2mを測る。覆土は、褐灰色の埴土で埋る。床面は所々に段差があるなど、不整形な形態をなす。調査区つなぎ目で、西側部分は検出できなかったが、楕円形状に広がっていることから、池状を呈していた可能性も考えられる。

遺物は、古瀬戸水注、中世土師器が出土している。時期は、土師器は小片で中世前半としか時期判定できないため、古瀬戸水注の年代から、前Ⅲ期頃(13世紀後半頃)と考えられる。中世陶器は使用年代を考慮しなければならず、時期が下がる可能性はある。

75号溝

F-24グリッドからL-24グリッドで検出された東西方向の溝である。断面図から12号溝が埋った後に、掘り込まれていることが判断できる。F-24グリッド以東は確認できなかったが、12号溝のプランがやや乱れていることもあり、ほぼ同じルート上を通っていたことも考えられる。最大幅で0.8m、深さ0.06mを測り、西端付近では、残存部分が少なく、幅0.3~0.5m程度となる。底面の高低差から、途中澱む部分もあるが、基本的には東から西への流れであると判断される。覆土は、灰黄褐色のシル



第113図 86号・88号・103号溝平面図・断面図 (S=1/40)



ト質壤土で埋っている。

遺物は、須恵器食器類と、加賀焼甕片・鉢片、青磁碗片が出土している。切り合いから、須恵器は混入と判断される。時期は、加賀焼鉢片がⅣ～Ⅴ期と判断され、14世紀後半頃が考えられる。

#### 86号溝

86号溝は、H・G-06グリッドからH-08グリッドにかけて検出された溝である。南北方向の溝であり、85号溝に重複して検出されている。既に、上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。上端幅1.5m、深さ0.1mを測る。覆土は、褐灰色の埴壤土で埋る。高低差は、北から南へ下がっている。

遺物は、土師器食器類が出土しており、古代末期の出越編年Ⅳ1～2期頃（11世紀末頃～12世紀前半）である。ただし、一番新しい遺物が、中世前半代の非ロクロ土師器片（中世前半としか分からない）であることから中世前半代の遺構と判断した。

#### 88・103号溝

88号溝は、D-07グリッドからI-05グリッドにかけて検出された溝である。東西方向の溝であり、85号溝を切っている。既に、上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。上端幅0.7m、深さ0.06mを測る。覆土は、褐灰色の埴壤土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。103号溝は、F-06グリッドからG-05グリッドにかけて検出された東西方向の溝である。既に、上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。上端幅1.5m、深さ0.1mを測る。覆土は、灰黄褐色の埴壤土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。

遺物は、88号溝から須恵器食器類・貯蔵具類、土師器食器類が出土しているが、一番新しい遺物は、非ロクロ中世土師器片である。103号溝からは須恵器食器貯蔵具片が出土しているが、この溝も一番新しい遺物は加賀焼の甕片である。これらの溝に軸が直交する、同規模の南北溝が存在する。60・61・83・104号溝であり、古代の遺物も混在するが、一番新しい遺物は中世の遺物である。60・83・104号溝間は、約10m前後の間隔である。この東西軸南北軸の溝は、中世前半段階において耕作地の敷地区画を表す溝と考えられる。しかし、前述のとおり千代オオキダ遺跡では、新しい段階の遺物も耕耘等で入りこむ可能性が十分ありうる。

#### 136号溝

G-31グリッドで検出された溝である。西端付近を攪乱によって切られている。東西軸の溝で、上端幅0.3m、深さ0.06mを測る。覆土は、褐灰色の埴壤土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。遺物は少量だが、土師器皿が出土している。時期は、土師器皿の年代から、Ⅲ-Ⅱ1期頃（14世紀前半）と判断できる。

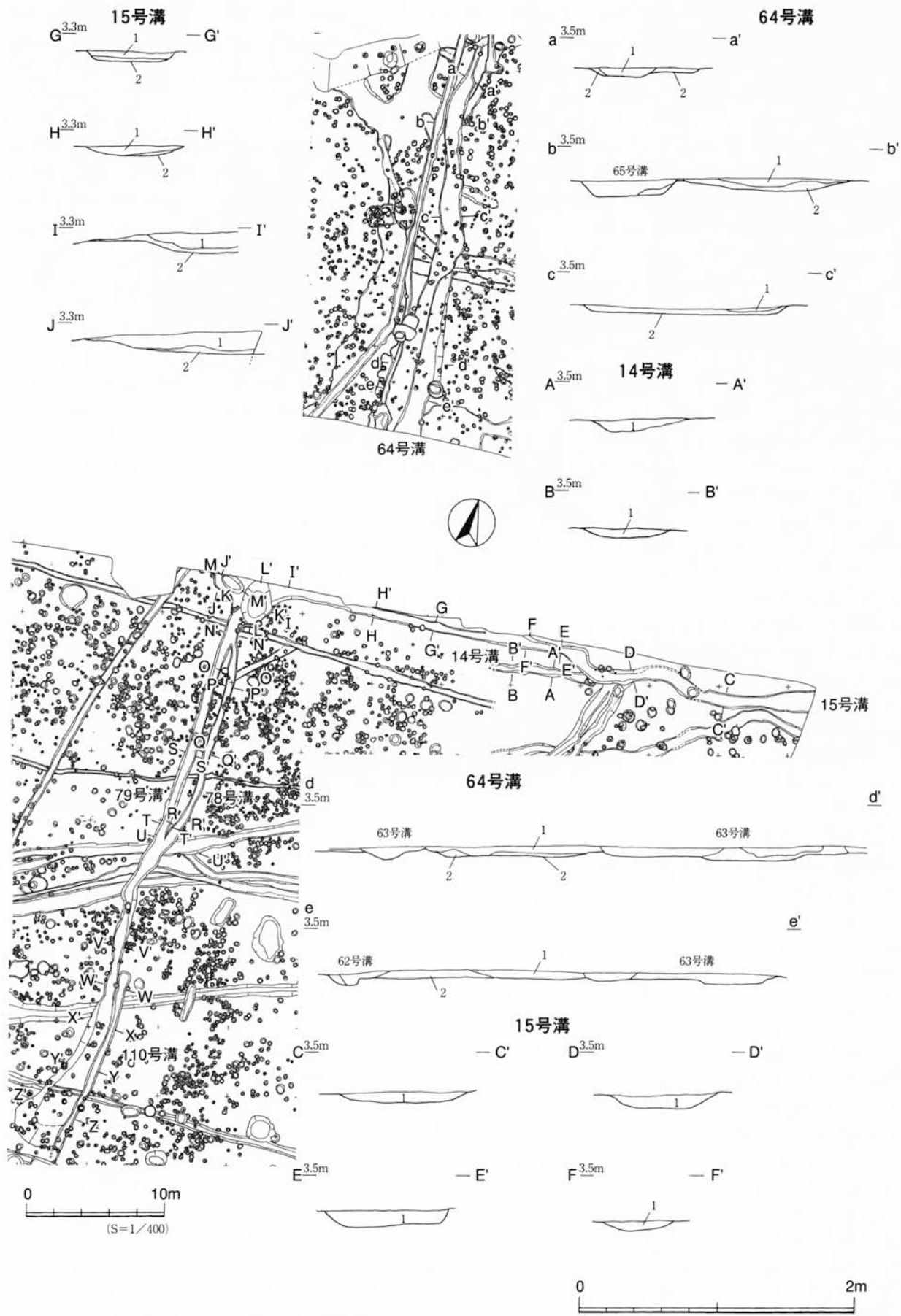
## 2. 中世後期

#### 14号溝

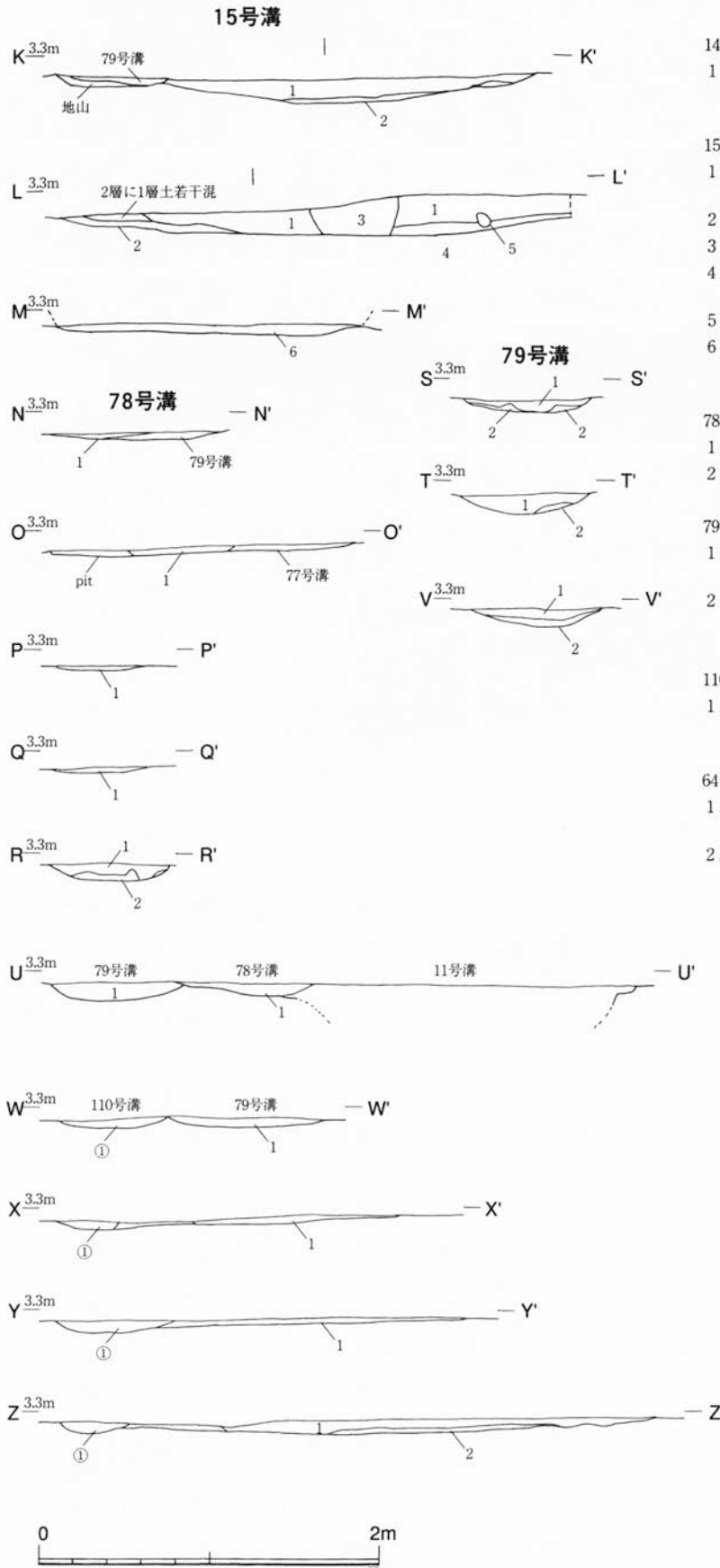
C-20グリッドからE-20グリッドにかけて検出された溝である。E-20グリッド以西は、既に削平されており検出できなかったが、痕跡からさらに西へ延びていたと考えられる。東西軸の溝で、上端幅0.75m、深さ0.08mを測る。覆土は、灰黄褐色の埴壤土で埋る。残存部分では、流れる方向は判断できない。遺物は少量だが、越前焼鉢、加賀焼甕が出土している。時期は、越前焼鉢の年代から、14世紀後半頃と考えられる。中世陶器は使用年代を考慮しなければならず、時期が下る可能性はある。

#### 15・78・79号溝

15号溝は、AA-21グリッドからI-30グリッドにかけて検出された東西方向の溝で、その地点から南にL字に折れ曲がってK-27グリッドまで延びている溝が79号溝である。78号溝は、切り合いから、79号溝の掘り直しと判断されるが、I-23グリッドまでしか延びていない。15号溝は、上端幅0.9m、深さ0.1mを測る。I-20グリッドのコーナー部では幅が広がり、楕円形状の落ち込み部分が2ヵ所検出された。落ち込み部は、Aが残存長で、長径2.5m×短径2.15m、深さ0.24m、Bが長径1.82m×



第114图 14号·15号·64号沟断面图 (S=1/40)



14号溝土層注

1層 10YR5/2 灰黄褐色 埴壤土(マンガン斑多く含む。斑鉄は底に溜まる。)

15号溝土層注

1層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土(斑鉄、マンガン斑含む。)  
 2層 10YR7/2 鈍い黄橙色 軽埴土  
 3層 10YR6/3 鈍い黄橙色 埴壤土  
 4層 10YR5/2 灰黄褐色 軽埴土(10YR7/2鈍い黄橙色軽埴土ブロック少量含む。)  
 5層 10YR7/3 鈍い黄橙色 重埴土  
 6層 10YR6/1 褐灰色 軽埴土(炭化物ブロック極少量含む。)

78号溝土層注

1層 10YR6/1 褐灰色 軽埴土  
 2層 10YR6/6 明黄褐色 軽埴土(1層土少量混在)

79号溝土層注

1層 10YR7/1 灰白色 軽埴土(炭化物ブロック極少量含む。)  
 2層 10YR7/2 明褐灰色 軽埴土(1層土少量混在)

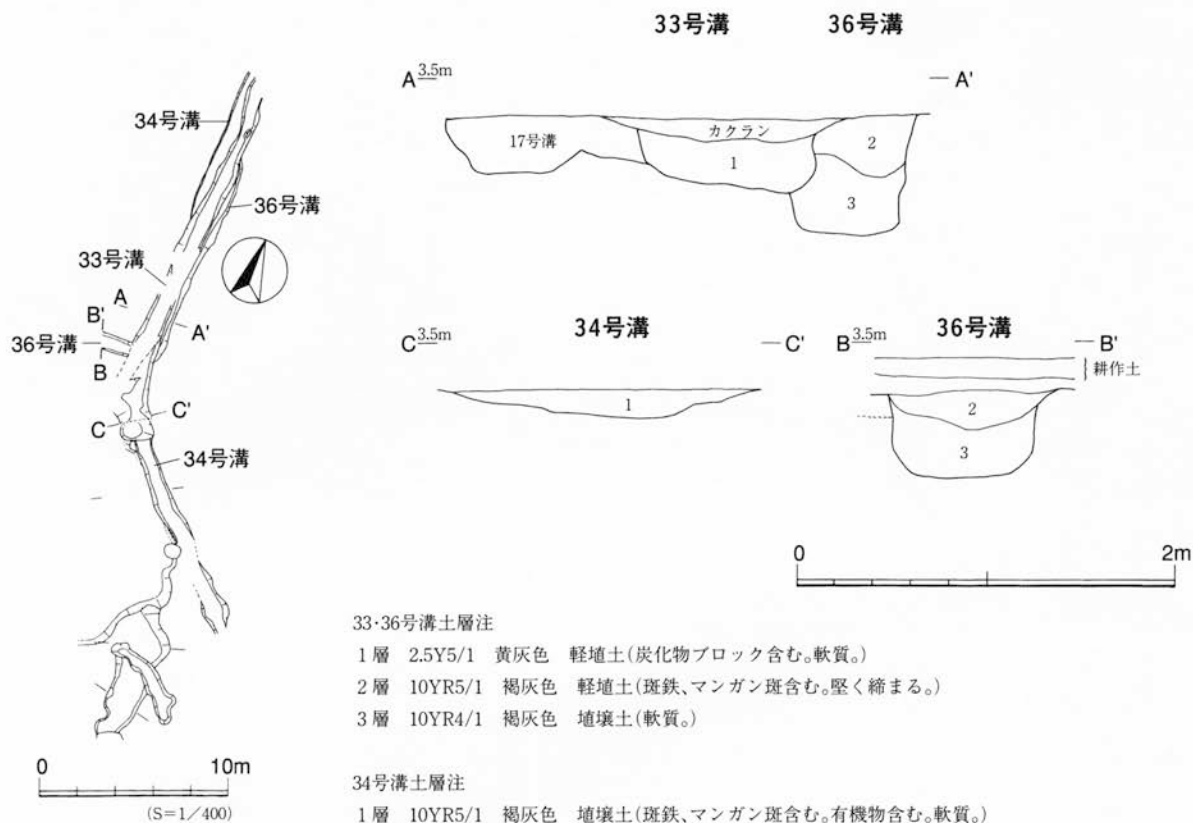
110号溝土層注

1層 10YR5/3 鈍い黄褐色 埴壤土(マンガン斑多く含む。10YR7/1灰白色軽埴土ブロック少量含む。)

64号溝土層注

1層 10YR4/1 褐灰色 埴壤土(10YR7/1灰白色軽埴土ブロック極少量含む。)  
 2層 10YR5/1 褐灰色 埴壤土

第115図 15号・78号・79号・110号溝断面図 (S=1/40)

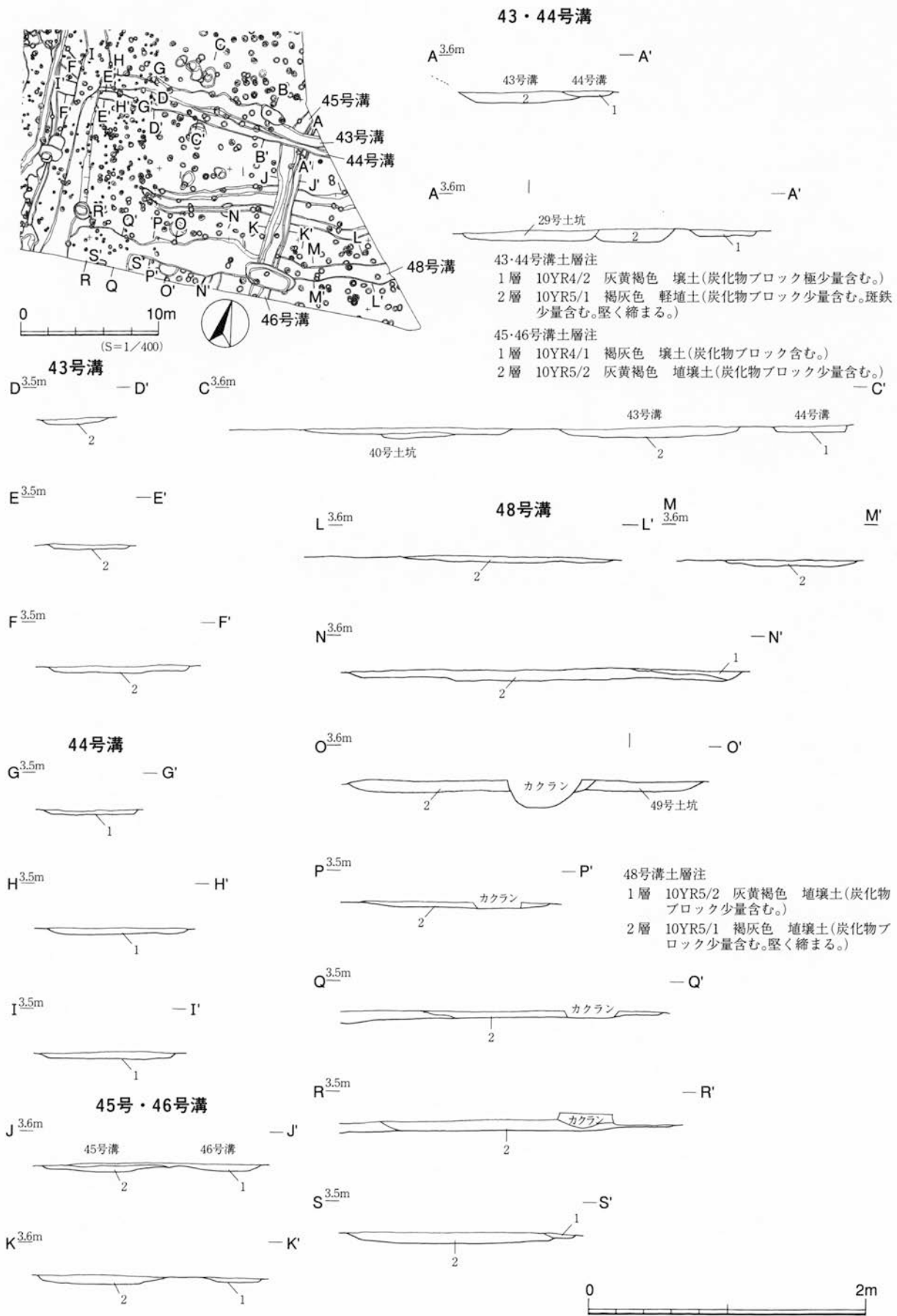


第116図 33号・34号・36号溝断面図 (S=1/40)

短径1.0m、深さ0.06mを測る。覆土は、灰黄褐色の軽埴土で埋る。高低差は5cm程度のものであり、F-20グリッドを頂点として両側の下っている状態であり、明確な流れの方向は見出せない。78号溝は、上端幅0.8m、深さ0.1mを測る。覆土は、褐灰色の軽埴土で埋る。79号溝は、上端幅0.85m、深さ0.1mを測る。K-27グリッドに近づくとつれ、次第に幅が広がり、上端幅3.1m、深さ0.08mを測る。覆土は、灰白色の軽埴土で埋る。床面の高低差は、大局的に見れば、南が高く北が低いといえるが、途中に低い部分も存在することから、明確な流れを見出すものではない。これらの溝は、明確な流れを見出すことができないこと、約90度L字状に折れていることから、何らかの区画を表す溝であると考えられる。ただし、J-25グリッドから79号溝に切り合っており並走している110号溝が存在しており、78号溝と連動して、79号溝と同様の機能を果たしたとも考えられる。遺物は少量だが、78号溝から越前焼鉢、79号溝から古瀬戸卸皿が出土している。15号溝からは遺物は出土していない。出土遺物は小片であり時期を判断することができないが、14号溝との切り合いから14世紀後半以降である点はいえる。

### 33・34・36号溝

33・34・36号溝は、C-28グリッドからD-32グリッドにかけて重複して検出された溝である。基本的に南北方向の溝であるが、36号溝は、D-31グリッドで直角に西方向へ折れ曲がり、34号溝は、D-31グリッドでくの字に折れてC-33グリッドまで延びている。切り合いから、古い順に36号・33号・34号であることが判断される。36号溝は、確認幅0.6m、深さ0.52mを測る。覆土は、上層が褐灰色の軽埴土で、下層がやや暗めの褐灰色の軽埴土で埋る。床面の高低差は、確認部分では明確には検出できない。33号溝は、確認幅0.95m、深さ0.38mを測る。覆土は、黄灰色の軽埴土で埋る。床面の高低差は見出しがたいが、大局的にみれば、南が高く北が低い傾向にある。古代溝とは逆方向の流れであるが、堆積状況からは、流れというよりは澱みに近いと判断され、また、確認部分の床面傾向だけの判断であるから確定はできない。これら両者の溝は、壁面の立ち上がりが急であり、断面が箱



第117図 43号・44号・45号・46号・48号溝断面図 (S=1/40)

型ないし逆台形であることから、人為的に掘られた溝と判断できる。区画溝や用水路などの機能が想定できる。34号溝は、上端幅1.7m、深さ0.15mを測る部分もあるが、総じて浅く、大部分が削平されたものと考えられる。覆土は、褐灰色の埴壤土で埋る。床面の高低差は、低い部分と高い部分が混在するため、流れる方向は判断できない。34号溝は、他の溝と異なり、壁面の立ち上がり角度が緩やかなものとなっている。

遺物は多く、36号溝からは古瀬戸小鉢・平椀、珠洲焼甕・壺・鉢、越前焼甕、加賀焼甕・壺、中世土師器皿、33号溝からは青磁碗、白磁碗、古瀬戸茶入、珠洲焼甕・壺・鉢、越前焼甕、加賀焼甕・壺・鉢、中世土師器皿、34号溝からは青磁小碗、白磁碗・皿、古瀬戸天目茶碗、瀬戸・美濃端反り皿、珠洲焼鉢、越前焼甕、加賀焼甕、中世土師器皿などが出土している。時期は、36号溝出土土師器皿の年代示す藤田編年Ⅳ－Ⅰ期（14世紀後半）が上限であり、古瀬戸平椀から、15世紀前半の年代が与えられる。33号溝は、古手の時期を示す遺物が多いが、36号溝を切っているため、15世紀前半以降が考えられ、34号溝は、越前Ⅴ期後半（16世紀後半）の甕が認められるため、下限をその時期に設定する。

#### 43・44号溝

43・44号溝は、B-15グリッドからF-14グリッドにかけて検出された溝である。東西方向の溝であり、44号溝が43号溝を切っている。既に、上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。43号溝が上端幅1.05m、深さ0.1mを測る。覆土は、灰黄褐色の壤土で埋る。44号溝は、上端幅0.9m、深さ0.1mを測る。覆土は、褐灰色の軽埴土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。

遺物は、43号溝から中世土師器皿が出土している。44号溝からは、古瀬戸平椀が出土している。他の遺構との切り合いから、中世後期遺構と判断する。

#### 45・46号溝

45・46号溝は、B-15グリッドからC-17グリッドにかけて検出された溝である。南北方向の溝であり、46号溝が45号溝を切っている。既に、上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。45号溝が上端幅0.92m、深さ0.07mを測る。覆土は、灰黄褐色の埴壤土で埋る。44号溝は、上端幅1.4m、深さ0.05mを測る。覆土は、褐灰色の壤土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。

遺物は、45号溝から白磁碗、中世土師器皿が出土している。46号溝からは、中世土師器皿が出土している。時期は、土師器皿の年代から藤田編年Ⅴ－Ⅰ 2期（16世紀前半）と考えられる。

#### 48号溝

A-17グリッドからF-17グリッドにかけて検出された東西軸の溝である。既に、上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。F-17グリッド部分は、溝が南方向へ直角に折れ曲がるコーナー部であり、さらに南側へ延びることが想定される。上端最大幅2.8m、深さ0.1mを測る。覆土は、殆どが褐灰色の埴壤土で埋る。床面の高低差から、東から西への流れが観察される。遺物は、青磁碗、白磁碗、古瀬戸卸皿、越前焼甕、土師器皿が出土している。時期は、土師器皿の年代から藤田編年Ⅴ－Ⅰ 2期（16世紀前半）と考えられる。

#### 64号溝

E-11グリッドからF-17グリッドにかけて検出された溝である。既に、上面が削られており、底部付近の極浅い部分のみの検出であった。F-17グリッド以南は、調査区外に延びる。北端部は、28号溝に切られているのではなく、検出できなかったものである。南北軸の溝で、上端最大幅1.4m、深さ0.1mを測る。覆土は、褐灰色の埴壤土で埋る。底面の高低差は検出できず、底面はフラットな状態である。この地点は、南北溝が重複して検出されていることから、区画ないし境界を示す溝とも考えられる。遺物は、少量だが、加賀焼鉢、中世土師器皿が出土している。時期は、中世前半代のものが多いが、43・44号溝を切っていることから、中世後期遺構と判断した。

## 第 4 章 遺物

### 第 1 節 はじめに

今回の発掘調査では、およそ300箱の遺物が出土している。特に調査区南側を流れる大溝（38号溝）と、その大溝につらなる溝（130号溝）から出土した遺物が圧倒的に多い状況にある。報告では残存率の良好な土器を中心とし、遺構の年代及び性格を示す遺物は残存率が悪くても図化を行った。遺物は時代別に分類して、「縄文時代後期中葉から弥生時代前期」、「弥生時代後期から古墳時代前期」、「古墳時代後期後半から古代」、「中世」に分けて報告している。また、土器・陶磁器以外の遺物や、時期区分に含めることが適当でない遺物は、章を改めて述べることにした。本来は遺構ごとに一括して掲載すべきだが、遺物の内容は多種多様を極めており、縮尺等を合わせることも困難であるため、器種別に掲載する方法を採用している。なお遺物の詳細については、観察表を参照して頂きたい。

### 第 2 節 縄文時代後期中葉から弥生時代前期

当該時期の遺物は単独出土が主であり、包含層に定量含まれるわけではなく、実測点数4点が全てである。その内3点が、遺構に伴って出土している点は特筆される。

#### 250号土坑出土土器（第118図1）

縄文時代後期後半に比定される深鉢である。外面に縄文が施されるが、板状のものでナデた痕跡も観察される。

#### 156号溝出土土器（第118図2）

いわゆる「柴山出村式」に比定される深鉢である。底部は円盤据置技法である。調整は、器表面の剥離が激しく不明である。八日市地方遺跡ではⅡ期頃に相当すると考えられる。

#### ピット出土土器（第119図3）

縄文時代後期中葉に比定される深鉢である。外面に縄文が施され、内面はヨコナデが施される。胎土には海面骨針が含まれている。

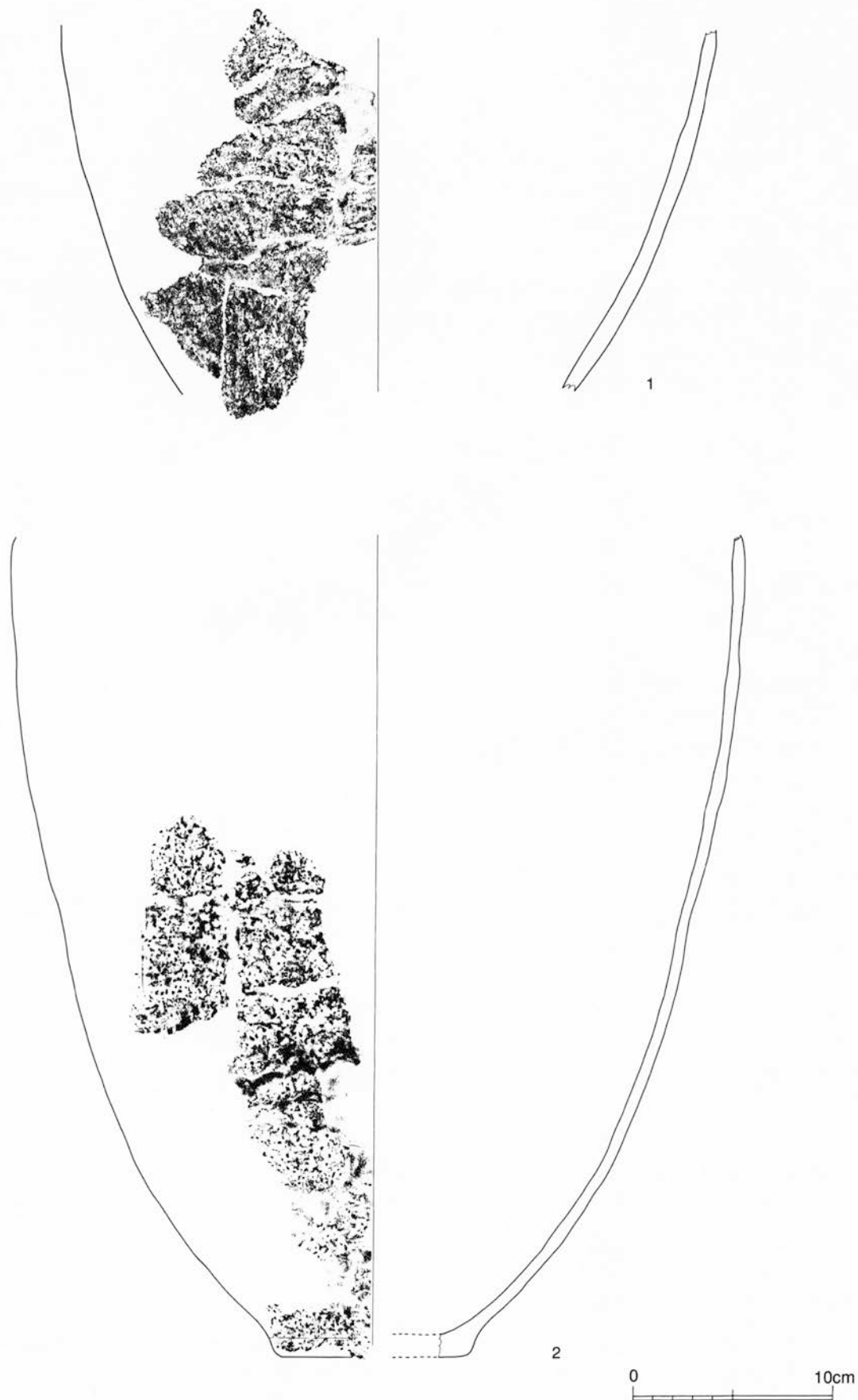
#### 遺構外出土土器（第119図4）

縄文時代後期後半の井ノ口式に比定される深鉢である。口縁端部外面に横方向の凹線が施される。内面は横ミガキ調整が施されている。

### 第 3 節 弥生時代中期から古墳時代前期

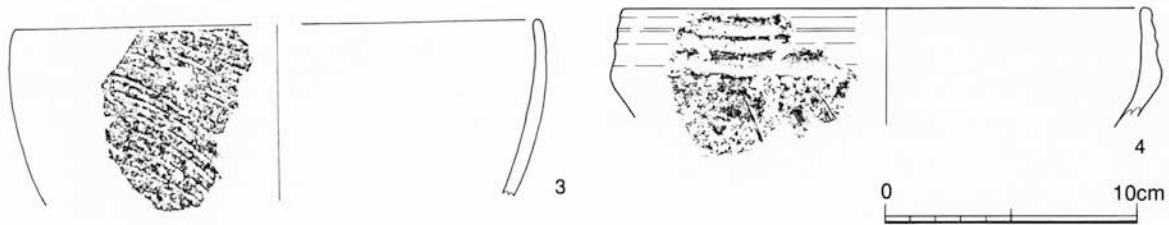
#### 第1項 概要

当該時期の遺物は、総量にして78箱出土している。そのうち、約70%が大溝（38号溝）に集中廃棄された遺物である。残り約30%が墳墓・土坑・溝からの出土である。器種は壺形土器・甕形土器・高坏形土器・器台形土器・鉢形土器が主体であり、一部に特殊品が認められる。その中でも甕形土器の出土量が多い。土器の年代観については、田嶋明人氏の漆町編年に基づいているが、呼称については型式名で標記することとした。並行関係には定説が定まらない状況にあるが、今回の報告では猫橋期を漆町編年1群前、法仏期は漆町編年1・2群、月影期は3・4群、白江期は5・6群、古府期は7・8群、高島期は9・10という理解に従っている。土器の時期は、猫橋期まで下るものが定量認められるが、圧倒的に法仏～月影期の土器が多く、その中でも法仏期の土器が主体をしめている。白江～古府期の古墳時代前期の土器は、前代に比べ激減している。この地が墓域と化したことが影響しているものと考えられる。白江期以降の遺物は、主として墳墓の副葬品として出土している。また、石



第118图 250号土坑·156号沟出土土器 (S=1/3)





第119図 Pit・遺構外出土土器 (S=1/3)

器については、管玉製作資料の出土が特筆される。主として、大溝（38号溝）からの出土であり、土器と同様に廃棄されたものと考えられる。今回報告した中で、弥生中期と考えられる遺物は、北側にある大溝（28号溝）から出土した石鏃2点のみである。

## 第2項 土器

### 1. 墳墓出土土器

#### 2号墳出土土器（第120図1～6）

1・2は壺形土器である。1は、口縁部外面はミガキ調整、体部外面はハケ調整の後、ミガキ調整が施される。内面には、体部上半にヨコナデ調整、体部下半にはハケ調整及びケズリ調整が施されたようだが、器表面剥離のため詳細は不明である。底部にはケズリ調整が施されている。1・2とも白江期～古府期に比定される。

3は小型の甕形土器で、体部外面にハケ調整、体部内面にケズリ調整が施される。白江期～古府期に比定されると考えられる。

4は器台形土器であるが、器表面剥離のため調整は不明である。白江期～古府期に比定される。

5は小型壺であるが、器表面剥離のため調整は不明である。白江期～古府期に比定される。

6は甕形土器の口縁部である。口縁部外面に擬凹線が施されており、形態から法仏末～月影I期と考えられるため、混入遺物と判断される。

#### 3号墳出土土器（第120図7・8、第121図9～14）

7は壺形土器で、体部外面に斜め方向のミガキ調整が施されている。内面は、口縁部がミガキ調整、体部はケズリ調整が施されている。内外面に煤の付着が認められる。8は甕形土器で、形態から山陰系と考えられる。外面は、器表面剥離のため調整は不明である。内面は、体部にヨコケズリ調整が施されている。7・8の時期は、白江期に比定され、墳墓の時期を示すものと考えられる。

9～11は壺形土器、13・14は甕形土器である。時期が法仏期～月影期と考えられるため、混入と判断した。13には、擬凹線が施されている。

#### 4号墳出土土器（第121図15・16）

15は壺形土器で、体部外面上半部にはヨコハケ調整の痕跡が認められるが、下半部は磨耗が激しく調整は不明である。体部内面には、上半部はナナメ・ヨコケズリ調整、下半部にはタテケズリ調整が施されている。口縁部が欠損しているため正確な時期は判定できないが、古府～高島期並行と考えられる。16は擬凹線が施されているが、形態から法仏末期と考えられるため、混入と判断した。

#### 5号墳出土土器（第121図17）

高坏形土器であるが、脚部は欠損している。器表面剥離のため調整は不明である。時期は白江期が比定される。

#### 6号墳出土土器（第121図18～21）

18は甕形土器であるが、底部は欠損している。体部外面にハケ調整が認められる以外は、器表面剥離のため調整は不明である。口縁部外面から体部外面下半にかけて広範囲に煤が付着している。19～

20は法仏～月影期、21は法仏期の甕形土器と考えられるため、混入と判断した。

## 2. 土坑出土土器

### 235号出土土器 (第122図22)

甕形土器の口縁部である。外面に2条の擬凹線が施されている。体部内面にはヨコケズリ調整が施されている。時期は法仏期に比定される。

### 170号土坑出土土器 (第122図23)

甕形土器の口縁部である。外面に擬凹線が施されている。体部内面にはヨコケズリ調整が施されている。時期は法仏末～月影期に比定される。

### 133号土坑出土土器 (第122図24)

甕形土器の底部である。器表面剥離のため調整は不明である。時期は法仏～月影期に比定される。

### 198号土坑出土土器 (第122図25)

壺形土器の底部である。器表面剥離のため調整は不明である。時期は法仏～月影期に比定される。

### 174号土坑出土土器 (第122図26)

高坏形土器の脚部である。器表面剥離のため調整は不明である。時期は法仏期に比定される。

### 197号土坑出土土器 (第122図27)

壺形土器であるが、体部下半以下を欠く。口縁部は内外面ともヨコナデ調整が施され、体部外面にはタテハケ調整、内面には強い横方向のナデ調整が施されている。時期は白江期以降と考えられる。

### 3号土坑出土土器 (第122図28)

壺形土器の口縁部である。内外面にヨコナデ調整が観察される。時期は古墳時代前期と考えられるが、詳細は不明である。

### 5号土坑出土土器 (第122図29)

高坏形土器の脚部である。やや「ハの字」に開くタイプである。器表面剥離のため調整は不明である。時期は古墳時代前期と考えられるが、詳細は不明である。

### 1号落ち込み出土土器 (第122図30)

高坏形土器の脚部である。器表面剥離のため調整は不明である。時期は古墳時代前期と考えられるが、詳細は不明である。

## 3. 溝出土土器

### 94号溝出土土器 (第122図31)

壺形土器である。体部外面上半部は、磨耗のため調整不明であるが、下半部にはタテハケ調整の痕跡が残っている。体部内面にはナナメ・ヨコケズリ調整が施されている。時期は法仏～月影Ⅰ期に比定される。

### 38号溝出土土器 (第122図32～第138図212)

32～57は壺形土器である。32～34は長頸広口壺である。32は体部上半を欠くため、高さは復元値である。口縁端部はヨコナデ調整、体部外面下底付近ではタテハケ調整が確認できる。内面は、頸部にヨコハケ調整、体部はケズリ調整が施されている。底部にもハケ調整が加えられている。33・34は口頸部のみで、34には頸部外面にタテハケ調整が施されている。時期は32・33が法仏期、34が法仏～月影Ⅰ期に比定される。35は長頸直口壺で、外面は頸部下半と体部下半にハケ調整が認められる以外は磨耗のため調整不明である。体部内面は、ヨコ方向から上方へのハケ調整が施されている。時期は法仏期に比定される。36～40は短頸直口壺である。36は、体部下半を欠くため、高さは復元値である。底部付近の外面に残るタテハケ調整以外は、磨耗により調整不明である。37・38・40は口頸部のみである。39は口頸部内外面ともヨコナデ調整が施されている。体部外面は、磨耗により調整不明であるが、煤か焦げの付着が認められる。体部内面は全体にケズリ調整が施されている。時期は、36が猫橋～法仏前半期、37・38が法仏期、39・40が法仏～月影Ⅰ期に比定される。41は上記壺形土器の型式に付く体部である。外面タテハケ調整、内面ケズリ調整が施されている。時期は法仏～月影Ⅰ期に比定される。42～47は広口壺である。42・47は口頸部のみである。43は、口頸部内外面はヨコナデ調整が

施され、口縁端部外面には擬凹線が施されている。体部外面はタテハケ調整が施され、上位部には部分的に貝殻による刻みが施されている。また、刻みを施す部分のみハケをナデ消している。体部内面はナナメからヨコ方向へのケズリ調整が施されている。さらに、外面には煤の付着が認められ、甕として使用されている。44は、体部下半以下を欠き、器表面剥離のため調整は不明である。45は、口頸部と体部下半以外を欠くが、同一個体と判断される。46は、口縁部外面に擬凹線が施されている。時期は42～47とも法仏期に比定される。48～54は有段口縁壺である。48は、頸部を欠損しているが復元して図化している。体部下半は完全に欠損しており、磨耗が激しく調整は不明である。口縁部に管状工具による刺突が認められる。49は体部の大部分を欠くが、同一個体と判断される。口縁部外面には擬凹線が施されている。体部は、外面がタテハケ調整、内面がケズリ調整と思われるが、詳細は不明である。50は頸部付近のみであるが、大型の個体である。51は口縁部～体部上半のみである。52は口縁部と体部中位を欠くが、同型式の壺と考えられる。小型で、体部外面に赤彩とミガキ調整が認められるが、磨耗により単位幅は不明である。53は当遺跡では大型の個体で、体部中位を欠くため、高さは復元値である。体部外面はタテハケ調整の後、板ナデ調整が施されている。体部内面は、ヨコケズリ調整の後、ナデ調整が施されている。54は小型の個体で、底部を欠く。鉢型にも近いが、ここでは壺形の分類に含めた。時期は、48～50が法仏期、51・52が法仏末期、53・54が法仏～月影期に比定される。55・56は無頸壺である。55は台なしタイプで、最大径地点を境に、上位はヨコナデ調整、下位はナナメハケ調整を外部に施している。56は台付タイプで、一部部位を欠くが、復元図化を行っている。外面は全体的に赤彩が認められ、ミガキ調整が施されていると思われるが、磨耗により不明である。時期は、両者とも法仏期に比定される。57は上記分類に当てはまらない壺である。時期は、法仏～月影期と考えられる。

58～122は甕形土器である。58～87は（擬）凹線系甕である。58～60は口縁帯の短いもので、体部下半以下を欠く。58・60には2条の擬凹線が施されている。59は、体部外面にナデ調整が施されている。時期は猫橋～法仏期に比定される。61は体部外面にハケ調整が観察されるが、部分的である。体部内面は、上半に逆時計回りのヨコケズリ調整、下半にタテケズリ調整が施されている。62は体部の大部分を欠くが、同一個体と判断される。口縁部には4条の擬凹線が施されている。63は口縁部に板状工具による擬凹線が施されている。体部外面はタテハケ調整が施されている。内面は上半にヨコケズリ調整、下半にタテケズリ調整が施されている。64は体部下半以下を欠く。65は体部中位を欠くが同一個体と判断される。66は口頸部のみだが、口縁端部がやや内傾するものである。67は体部中位以下を欠く。体部外面はヨコハケ調整、内面にはヨコケズリ調整が施されている。68は口頸部付近のみだが、口縁端部が外傾するものである。口縁部外面には棒状工具によって擬凹線が施されており、内面はミガキ調整と思われるが磨耗により詳細は不明である。69は口頸部のみで、擬凹線は4条施されている。70は口頸部と体部中位を欠く。肩部に貝殻による文様が施されている。体部外面は、ヨコハケ調整の後、タテハケ調整が施されている。内面は、上位がヨコケズリ調整、下位がナナメ上方へのケズリ調整が施されている。71は体部外面にタテハケ調整、内面上位にナナメケズリ調整、下位にタテケズリ調整を施している。72・73は体部中位以下を欠く。73は口縁部が外傾する大型の器形と考えられ、頸部にヘラ状工具による刺突が施されている。74～78は体部中位以下を欠く。77は口頸部のみだが、貝殻により擬凹線が施されている。79は体部中位以下を欠くが、同一個体と判断される。口縁部外面に貝殻による擬凹線が施されており、同じ工具で肩部に刻みが施されている。体部外面にはタテ方向の板ナデ痕が観察される。内面は、上位にヨコケズリ調整、下半にタテケズリ調整を施している。80・81・83・85・86は口頸部のみの個体である。81は、口縁部外面に2枚貝による擬凹線が施されている。86は、口縁部が外傾するものである。82・84・87は体部中位以下を欠く。87は口縁部内面に指頭圧痕が残る。時期は、61～86は法仏期に比定される。その中でも、70は法仏後半期、71～86は法仏末期に比定される。87は法仏末～月影Ⅰ期に比定される。88は、口縁部が「くの字」の甕であり、体部中位以下を欠く。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面は上方へのハケ調整が施されている。内面は上方へのタテケズリ調整の後、ヨコケズリ調整が施されている。時期は法仏期に比定される。89～90は、

近江系受け口口縁の甕である。89・91は体部中位以下を欠く。89は口縁部・体部外面ともヨコナデ調整が施されている。体部内面はヨコケズリ調整が施されている。90は口頸部のみの個体であり、端部も欠く。時期は、89・90が法仏期、91が法仏～月影Ⅰ期に比定される。92は前述の近江系か有段無文系か判断がつかないものである。体部上位部分を欠いているが、体部外面にタテハケ調整、内面にケズリ調整が施される。時期は、法仏～月影Ⅰ期に比定される。93～114は、有段口縁で口縁部無文系の甕である。93は、体部中位以下を欠く。体部外面に上方へのタテハケ調整、内面も上方へのケズリ調整が施される。94～96は、口頸部のみの個体である。97は、体部中位以下を欠く。体部上位外面に板状工具による刺突痕が観察される。98～104は口頸部付近のみの個体であるが、大型のものである。99は口縁部外面にヨコナデ調整、内面にヨコミガキ調整が施されている。体部外面はナナメハケ調整、内面はヨコケズリ調整及びヨコミガキ調整が部分的に施されている。105・106・108・109は口頸部付近のみの個体である。107は体部中位以下を欠く。110は体部中位以下を欠くため、高さは復元値である。口縁部内外はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、内面はケズリ調整が施されている。また、口縁部外面には赤彩が施されている。111も体部中位以下を欠くため、高さは復元値である。口縁部内外はヨコナデ調整、体部外面はタテハケ調整、内面はヨコケズリ調整が施されているが、磨耗により調整が不明瞭な部分が多い。112は口縁端部と体部下位以下を欠く。113は口頸部のみの個体である。114は、大型の個体で、体部中位以下を欠く。口縁部内外はヨコナデ調整、体部外面はナナメハケ調整、内面はヨコケズリ調整が施されている。時期は、93～103が法仏期に比定される。その中でも、96が法仏後半期、97～103が法仏末期に比定される。他は、104が法仏～月影期、105～113が法仏末～月影Ⅰ期、114が月影～白江期（おそらく月影期の範疇で収まる）に比定される。

115～122は、上記までの分類に当てはめることが出来ない甕である。115・118・119は有段だが、文様の有無が不明である。116は口縁部を欠く。117は口縁部が内湾する形態の甕である。口頸部付近のみの個体であり、口縁部内外にはナデ調整が施されている。120～122は体部中位以下のみの個体である。120は体部外面にタテハケ調整、内面に上方へのケズリ調整が施されている。時期は、115・117・121が法仏期、118・119が法仏末期、116・120・122が法仏～月影期に比定される。

123～154は高坏形土器であるが、他の器形に比べ、磨耗により調整不明の個体が多い。123～135は口縁部が外反ないし直立し、端部が丸縁でかつ体部が浅めのものである。123は、口縁部が直立している器形であるが、脚部を欠いている。124～128は体部下位以下を欠くが、体部中位に稜を持つものである。127は、体部内外面にヨコミガキ調整の痕跡が残っている。128は脚部を欠く。底部は円盤充填法で成形されているが、調整は磨耗により不明である。129～132は体部下位以下を欠くが、体部中位に段を持つものである。129は体部外面にヨコミガキ調整の痕跡が残るが、磨耗のため単位は不明である。130は脚部を欠くが、底部は円盤充填法で成形されている。131は略完形に復元できる個体で、体部の段は突帯風である。底部は円盤充填法で成形されているが、調整は磨耗により不明である。脚部には円形のスカシ孔が施されている。132は脚部を欠いている。段の屈曲はやや弱い。133は、体部下位以下を欠く。体部中位に稜を持ち、口縁端部がやや尖る。134・135は脚部及び口縁端部を欠く。時期は、123・125・127が猫橋～法仏前半期、124・126が猫橋～法仏期、128が法仏期、129・130が法仏末期に比定される。131～135は法仏～月影Ⅰ期に比定される。136～138は上記と同じ形態だが、体部部分が深手のものである。136は口縁部直立器形であるが、脚部を欠いている。137・138は口縁端部内側が肥厚し、段ができるものである。時期は、136が猫橋～法仏期、137・138が法仏期に比定される。139・140は上記と同じ形態だが、口縁端部が面取りされるものである。139は、口縁端部内側が肥厚し、段ができるものである。外面にヨコミガキ調整の痕跡が残るが、磨耗により単位は不明である。140は略完形に復元できる個体で、口縁端部が尖り、底部はフラットである。脚部は棒状で、裾部が開脚する。時期は139・140とも、法仏期に比定される。141～144は分類不明の坏部である。143は底部円盤充填法である。142・143は猫橋～法仏期、143・144は法仏期に比定される。145～154は脚部である。145・146は脚柱棒状・裾部開脚のものである。146は、粘土板巻

上げ整形である。147は、脚柱棒状・裾部有段のものである。4方向にスカシ孔が入る。148～154は、脚部外展形態のものであり、全てに3～4方向にスカシ孔が入る。150は脚部に棒状圧痕が残る。153には内部にシボリ痕が残る。154は、蓋に転用されたとみられ、端部に焦げが付着している。時期は、145が猫橋後半～法仏前半期、146が猫橋～法仏前半期、147～151が法仏期、152～154が法仏～月影I期に比定される。

155～160は器台形土器であり、受部と脚柱部との境が不明瞭なものである。157は有段の脚柱を持つものである。159は裾部の屈曲部分が上方へ突出する。調整は、160の内側にヨコケズリ調整が観察される以外は、磨耗が激しく不明である。時期は、155～157は法仏末期、158・159は猫橋～法仏期、160は法仏期に比定される。

161～169は鉢形土器である。161～166は有段口縁鉢で、161・162は脚付と考えられる。161は体部が直立し、口縁部との境に屈曲の強い段が形成される。163は全体にミガキ調整が施されていると考えられるが、磨耗のため詳細は不明である。166は体部上面を欠くため、高さは復元値である。体部外面にナナメハケ調整が施された後、貝殻による刺突文が施されている。よって、口縁部外面にも同工具による擬凹線が施されていたと想定される。体部内面はナナメケズリ調整が施される。167・168は椀形鉢で、167には脚が付く。169は、ベタ台が付く鉢形土器と考えられる。167は猫橋～法仏期、161・163～166・168・169は法仏期、162は法仏末期に比定される。

170～173は蓋形土器である。170は有孔蓋で、内面に下方向に削り調整が施される。171は内面にヨコケズリ調整が施される。172は外面に棒状工具による指圧痕が観察される。173は体部に孔が開く蓋である。170は法仏後半～末期、171・172は法仏期に比定される。173は弥生後期と考えられる。174は小型壺で、口縁部を欠き、器形の歪みが激しい。時期は法仏～月影期が考えられる。175はミニチュア壺で、口縁部と体部下部を欠く。時期は猫橋～法仏期が考えられる。176は山陰系甌の把手である。時期は月影I期が考えられる。

177～185は壺形土器の底部である。時期は、177～183が法仏期、184・185が法仏～月影I期に比定される。186～194は甕形土器の底部である。時期は、186・187が法仏期、188～194が法仏～月影期に比定される。195・196は台付甕か壺と考えられる底部である。時期は法仏末期と考えられる。197・198は高坏形土器の脚部と考えられる。時期は猫橋～法仏期と考えられる。199～201は高坏か器台形土器と考えられる脚部である。201は有段であり、スカシ孔が4箇所に入る。時期は199が法仏期、200・201が法仏～月影I期に比定される。

202は壺形土器の口頸部で、有段口縁を持つものであり、体部内面にはヨコナデ調整が施される。時期は白江期に比定される。203は小型壺であり、口縁端部と底部を欠く。時期は古墳前期と考えられる。204は甕か鉢の体部下半であるが、時期は判定できない。205～210は甕形土器である。205は磨耗が激しく明確には分らないが、口縁部外面に擬凹線が施されている可能性が高い。206は無文有段口縁の甕である。207は「くの字」甕で、口縁部内外面ともヨコナデ調整、体部外面にナナメハケ調整が施されている。208は口縁部のみである。209はいわゆる「布留甕」である。210は「くの字」甕で、体部上位と底部を欠き、図上で復元している。口縁部内外面はヨコナデ調整、体部外面はハケ調整、内面にはケズリ調整が施されている。時期は、205については法仏末～白江期としかいえない。206～208は白江期と考えられる。209は古墳前期と考えている。210は白江～古府期（漆町編年6～7群並行）が考えられる。211は壺の底部と考えられるが詳細は不明である。212は高坏形土器の脚部付近である。外面はミガキ調整と考えられるが、単位幅は不明である。内部はシボリ痕が観察される。底部は円盤充填法により成形される。時期は古府期以降が考えられる。

#### 115・170号溝出土土器（第138図213～第139図218）

213は壺形土器の底部である。外面は板ナデ調整、内面は上方向へのケズリ調整が施されている。時期は、法仏～月影期と考えられる。214は壺か甕形土器の底部である。外面はハケ調整、内面は上方向へのケズリ調整が施されている。時期は、法仏期と考えられる。215はベタ高台状の台が付く鉢形土器である。時期は法仏期に比定される。216は口縁部を欠くが、有段口縁を持つ壺形土器と考え

られる。外面は単位不明ではあるが、ミガキ調整が施され、赤彩されている。内面はヨコナデ調整が主であり、底部付近にのみタテハケ調整が観察される。時期は白江期に比定される。217は東海系の壺形土器の口縁部である。口縁部外面に三本単位の棒状浮文による装飾が施される。時期は白江期に比定される。218は小型壺形土器の口縁部である。時期は白江～古府期に比定される。

#### 157・158号溝出土土器（第139図219～224）

219は壺形土器であるが、口頸部を欠く。体部内面にヨコハケ調整が観察される以外は、調整不明である。時期は法仏期と考えられる。220は甕形土器で、有段口縁を持つ。口縁部外面にヨコナデ調整、体部外面にタテハケ調整が施される。体部内面は上位にヨコケズリ調整、中位にタテケズリ調整が施される。時期は法仏期に比定される。221は高坏形土器であるが、脚部を欠く。外面はヨコミガキ調整とみられるが、単位幅は不明である。底部は円盤充填法で成形される。時期は法仏～月影Ⅰ期に比定される。222・223は壺形土器の底部である。223は外面に縦方向のミガキ調整、内面にケズリ調整・ナデ統制が施されている。時期は、222が法仏期、223が法仏～月影期と考えられる。224は甕形土器の底部である。外面はタテハケ調整、内面は上方向へのケズリ調整が施される。220と同一個体の可能性がある。時期は法仏期と考えられる。

#### 113号溝出土土器（第139図225）

小型鉢形土器である。椀形を呈しているが、調整は磨耗により不明である。時期は古府～高島期が考えられる。

#### 151号溝出土土器（第139図226）

甕形土器の底部である。調整は磨耗により不明である。時期は法仏～月影期が考えられる。

#### 174号溝出土土器（第139図227）

壺形土器の底部である。体部内面に上方向へのケズリ調整が施される。時期は法仏期が考えられる。

#### 95号溝出土土器（第139図228）

甕形土器の口縁部で、有段口縁を持つものである。調整は磨耗により不明である。時期は月影～白江期に比定される。

#### Pit出土土器（第139図229～237）

229・230は壺形土器の底部である。時期は法仏～月影期が考えられる。231・232は甕形土器である。231は有段口縁をもつものである。232は底部破片である。時期は、231が法仏～白江期、232が法仏期と考えられる。233～236・237は高坏形土器の脚部である。233・234は棒状脚の付くものであり、234には4方向にスカシ孔が入る。235・236は脚部が外典するものである。時期は、233が猫橋～法仏期、234が法仏期、235が月影期以降、237が古墳時代前期と考えられる。236は器台形土器と考えられるが、詳細は不明である。時期は古府期が考えられる。

#### 遺構外出土土器（第140図）

238～244は壺形土器である。238・239は広口壺の口頸部である。238は外面にタテハケ調整、内面にヨコハケ調整が施される。240は体部上位と底部以外を欠くため、復元図化してある。把手付の壺と考えられ、外面にタテミガキ調整及び赤彩が観察される。内面はヨコナデ調整である。241～243は底部破片である。244は小型壺であり、二重口縁を持つものである。口縁部内側と体部下位にヨコミガキ調整が観察される以外は、磨耗により調整不明である。時期は、238～240が法仏期に比定され、241～243が法仏～月影期と考えられる。244は白江～古府期に比定される。245～247は甕形土器である。245・246は有段口縁を持つもので、247は「くの字」甕である。時期は、245は法仏～白江期が考えられる。246は白江期、247は古墳前期に比定される。248～256は高坏形土器である。248・249は棒状脚のものである。250は脚部との接合部において、粘土紐巻きつけ成形を行っている。251は円盤充填法による成形である。252・255・256は外典する脚部のものである。253はミニチュア高坏である。254は小型高坏であり、内外面に赤彩が施されている。時期は、248が猫橋～法仏期、249～251が法仏期、252・256が古墳時代前期、253が法仏～古府期、254が白江～古府期、255が古府～

高島期と考えられる。257は鉢形土器であり、有段口縁を持つ。時期は法仏期が考えられる。

### 第3項 石器

#### 1. 礫石器（第141図～第142図6）

原礫を成形加工せずにそのまま使用する石器の総称として、「礫石器」を使用している。全部で6点を図化した。1～4は38号溝出土、5は170号溝、6は116号溝出土である。基本的には当該期の遺構以外では出土しない。石材に大きな偏りは見られない。重量は1kg前後のものが多い。1・2は、主に側面に研磨痕がある。1には、礫表面に敲打痕も認められる。3・4は先端部に敲打痕が認められる。3は割加工が認められる。5は礫表面に淡い摩滅痕が観察される。6は礫表面に明瞭な摩滅痕が観察される。1・2・5・6は磨石、3・4はハンマー等の用途が考えられる。

#### 2. 砥石（第142図1～3）

原石を加工した、研磨用途の石器である。すべて38号溝出土である。石材は、3点のなかではハリ質岩が目立っている。加工した石器であるためか、法量は比較的均質である。表面と側面を砥面として使用しており、裏面は使用していないことが特徴である。3はやや目が粗く、中砥用と考えられる。

#### 3. 大型蛤刃石斧（第142図1）

磨製石斧である。130号溝からの出土だが、当該期の遺物であることは間違いなく、混入と判断される。石材は安山岩が使用されている。刃部に破損が認められる。特に、裏面の礫表面が広範囲に剥離しており、断面でみると、やや凹んだ状態となっている。

#### 4. 石鍬（第143図1・2）

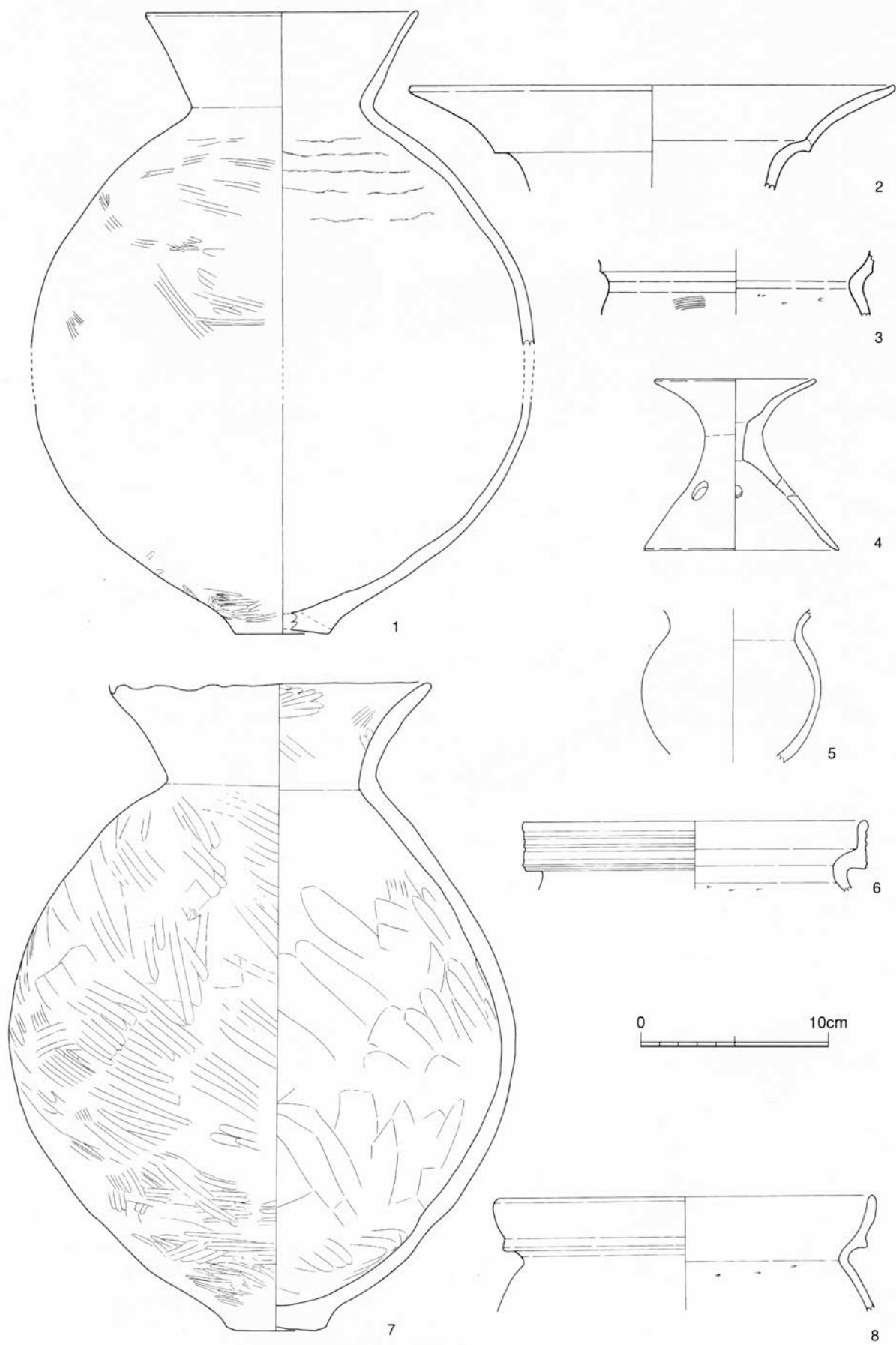
打製石斧ともいわれる石器である。2点が遺構外より出土している。石材は2点とも、火山礫凝灰岩である。素材の側面及び裏面を非常に細かく加工しているのが特徴である。2は、刃部の使用による破損が認められる。

#### 5. 打製石鍬（第143図1～4）

全部で4点出土しているが、その内2点は28号溝からの出土である。石材に大きな偏りは見られない。形態分類は八日市地方遺跡の分類に準じており、長身鍬3点（1～3）、柳葉鍬1点（4）であり、すべて無頸である。長身鍬のうち、1・2が平基で、3が凹基である。法量は2タイプが認められ、1・4が長さ4cm、重さ3gを超えるのに対し、2・3は長さ2cm代、重さ1g前後と小型である。4は、礫表面の風化が著しい。

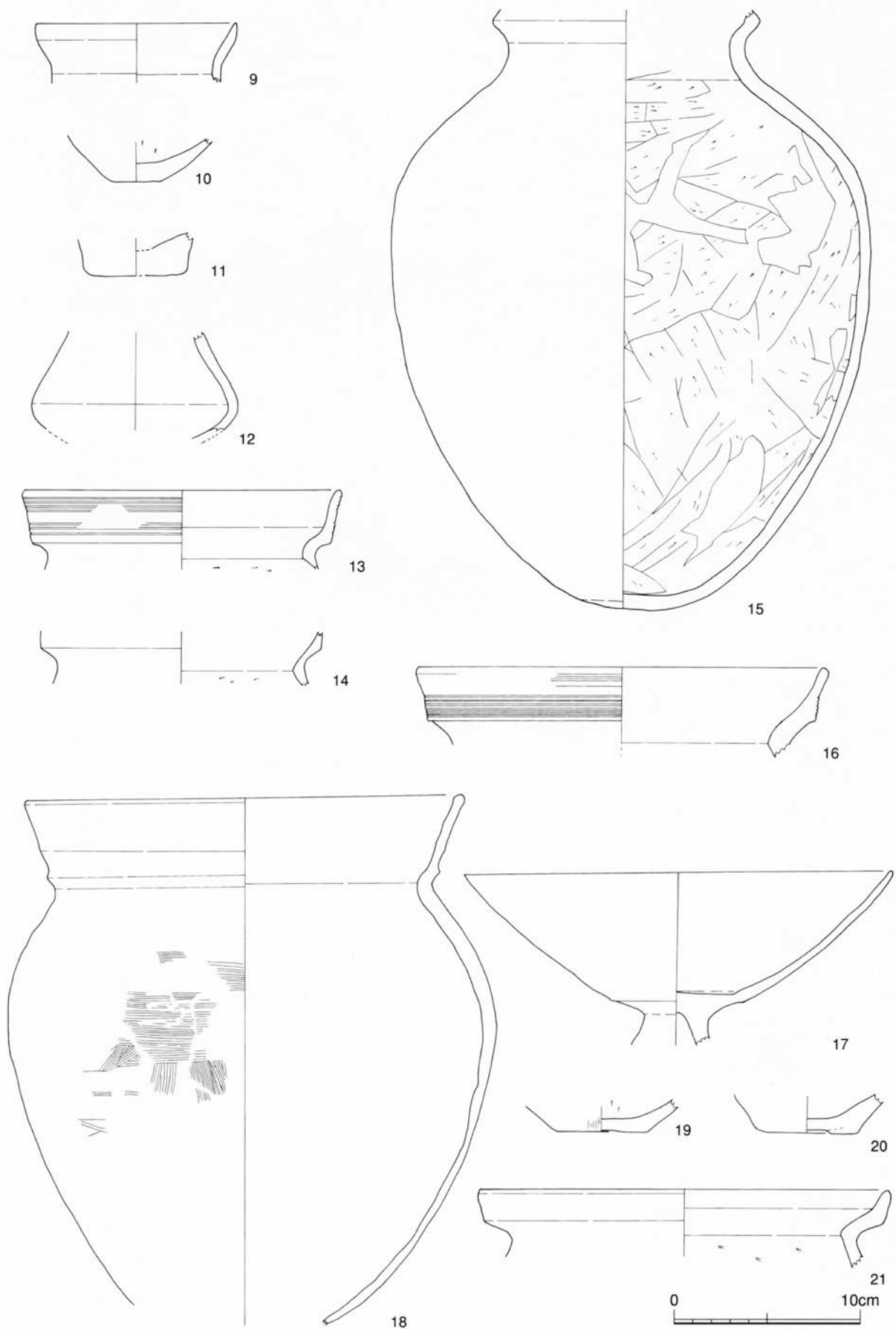
#### 6. 管玉製作資料（第144図1～8）

図示したのは、形割未製品（1～4・7・8）、素材石核として加工が施されたもの（5・6）であり、管玉未製品及び製品は出土していない。8点のうち6点までが38号溝からの出土である。石材は、形割未製品が全て碧玉質岩であるのに対し、素材石核は5が鉄石英、6がメノウであり、碧玉質岩製の素材石核は出土していない。メノウは被熱が認められる。1～4は、ほぼ方形にまで成形したものであるが、4はまだ厚みが約2倍の段階である。1・4には施溝が認められる。7・8は、ほぼ柱状まで成形した段階のものであり、7に施溝が見られる。石の割り方から月影期頃のものではないかとの指摘がある。他に、図示はしていないが、製作段階で生じた剥片が11点出土している。石材の内訳は、碧玉質岩が10点、メノウ（被熱あり）が1点である。

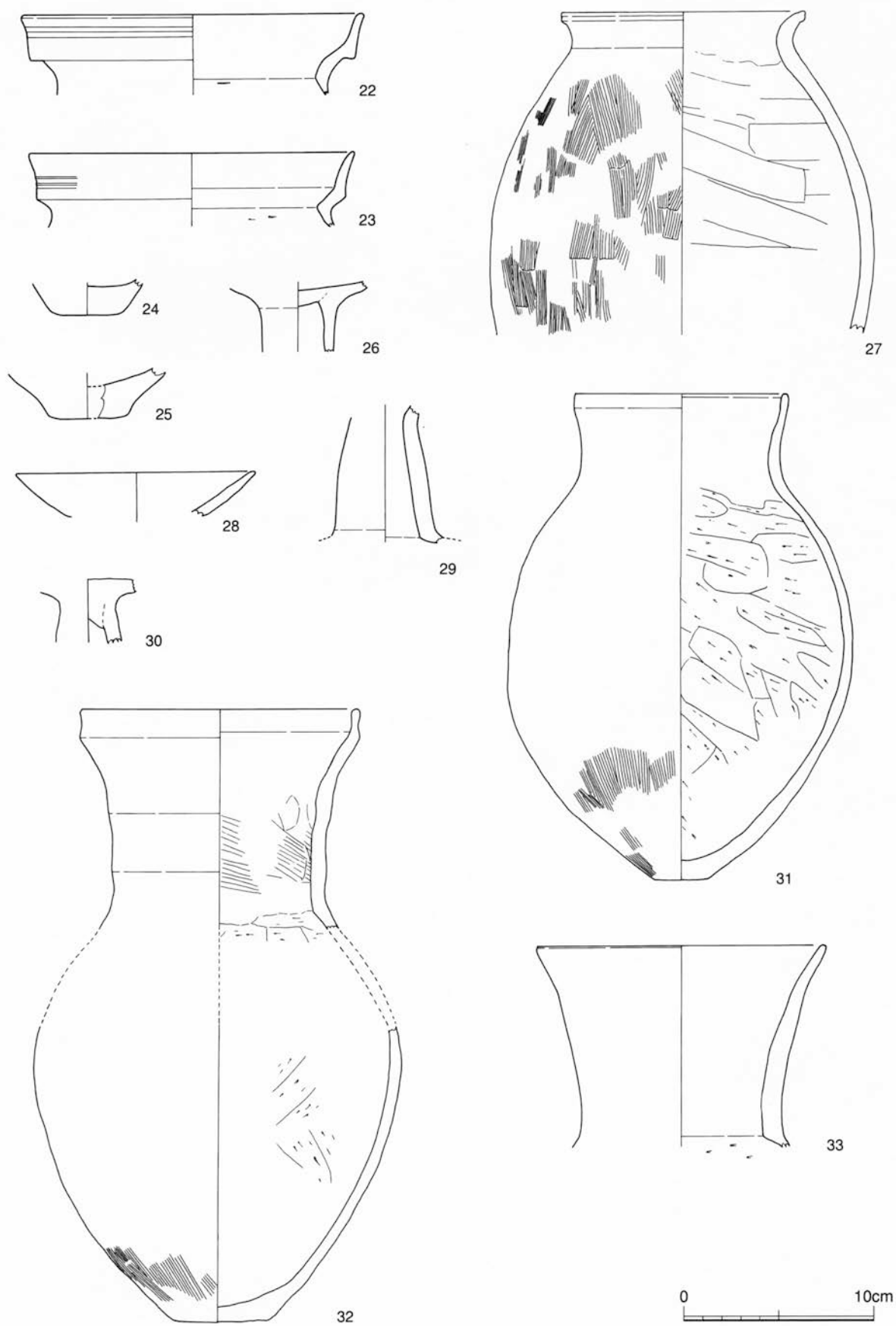


第120图 2号墳 (1~6) · 3号墳 (7·8) 出土土器 (S=1/3)

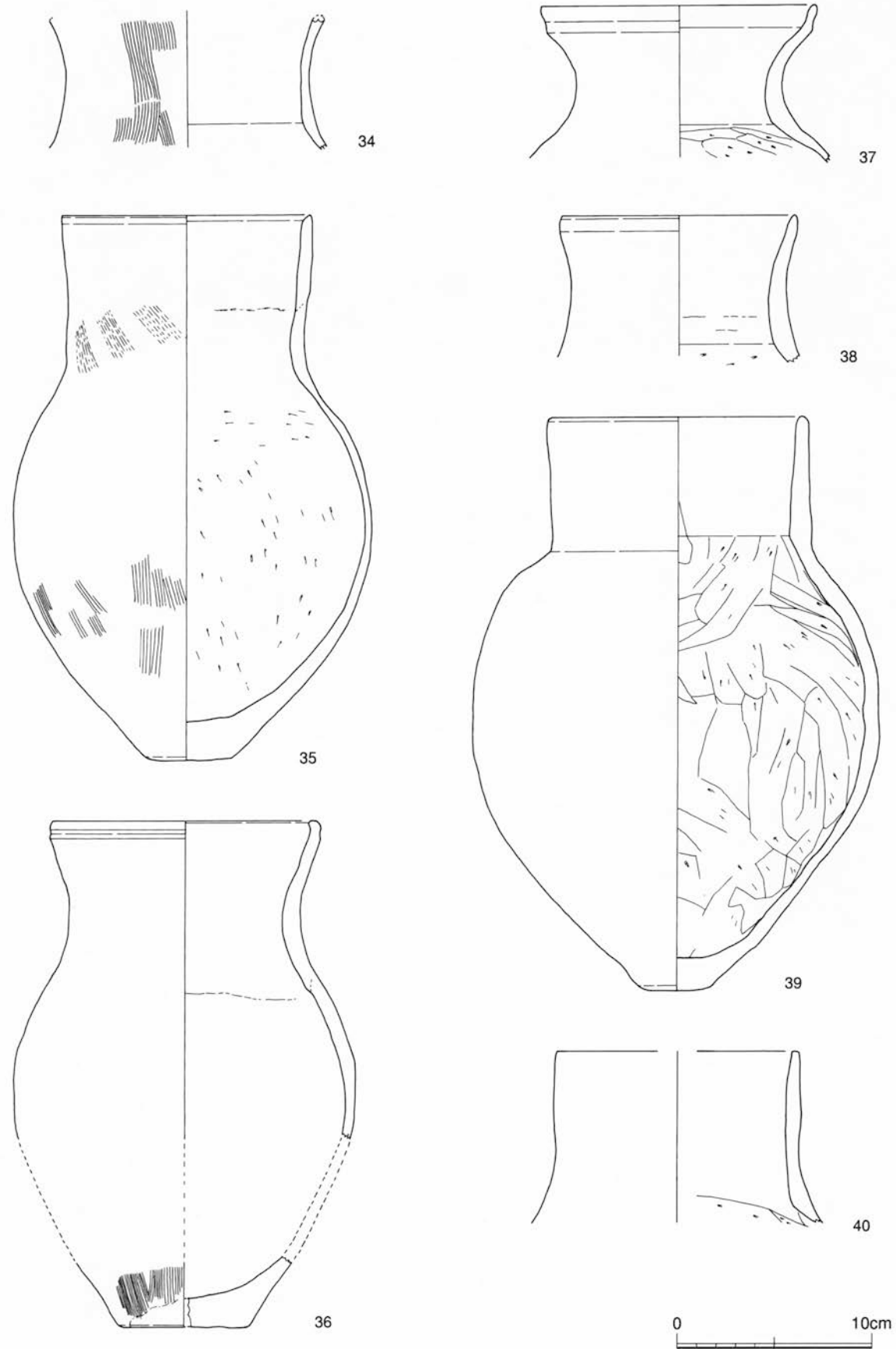




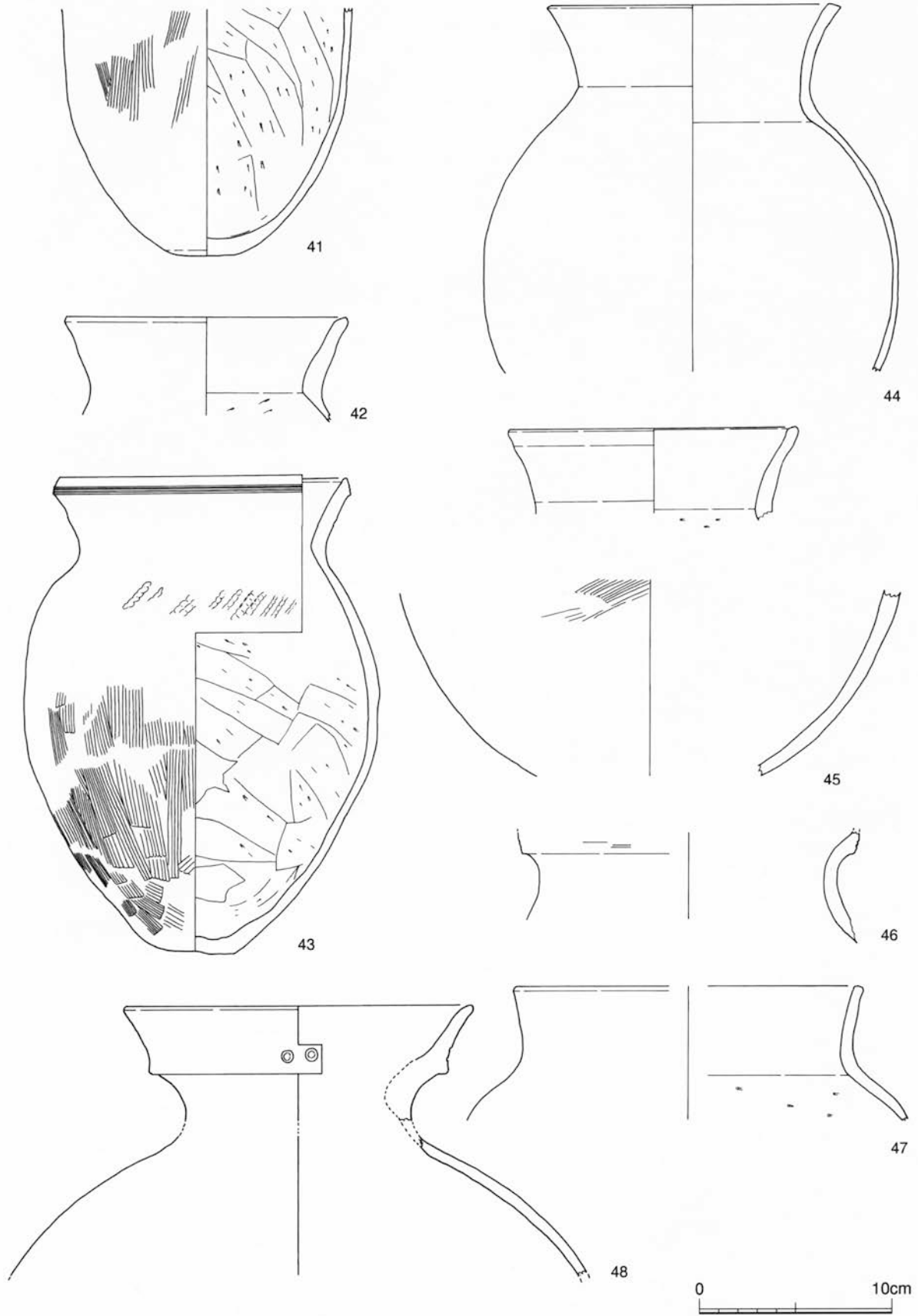
第121图 3号墳 (9~14) ・4号墳 (15・16) ・5号墳 (17) ・6号墳 (18~21) 出土土器 (S=1/3)



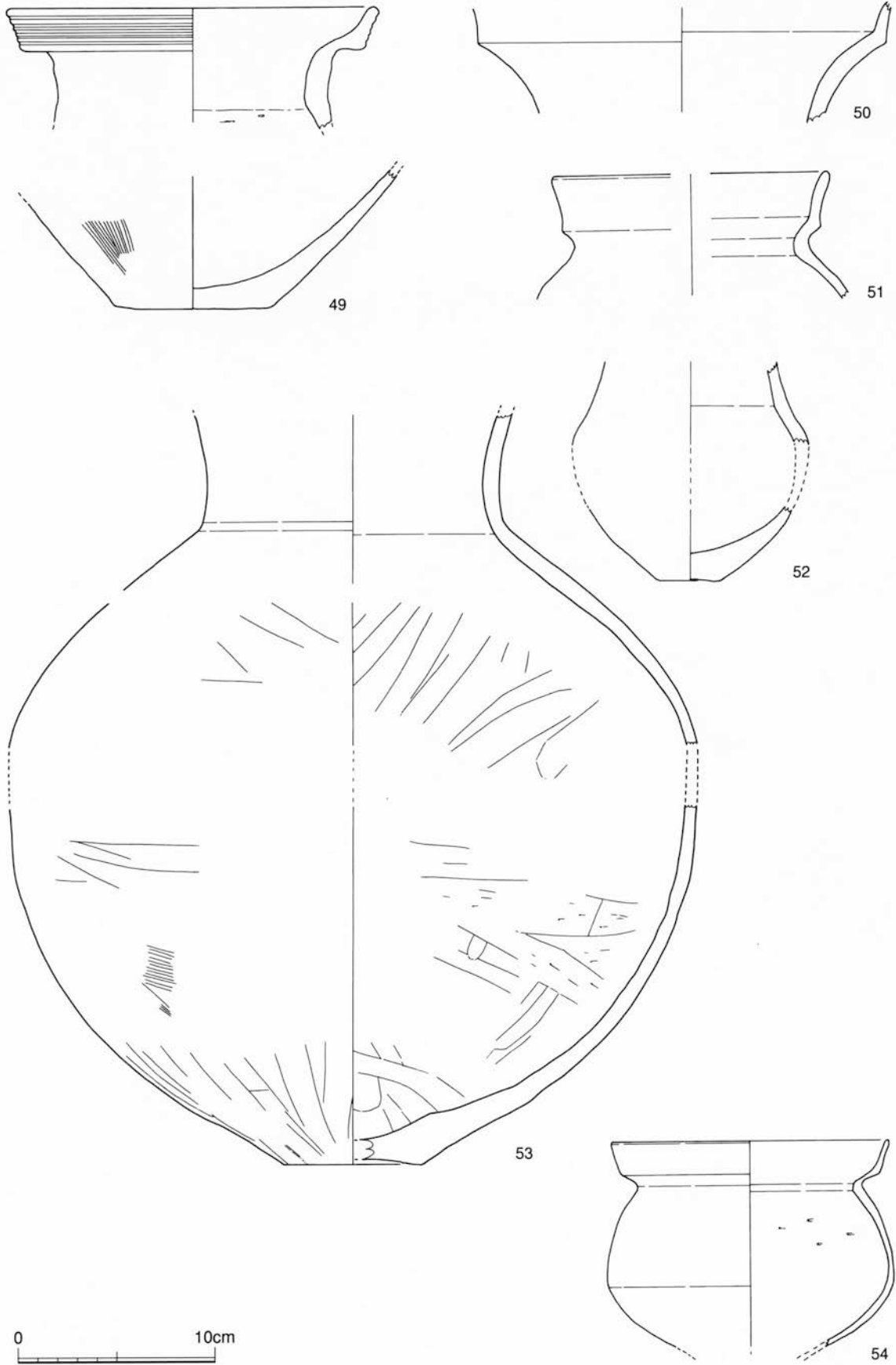
第122図 土坑・落ち込み (22~30)・溝 (31~33) 出土土器 (S=1/3)



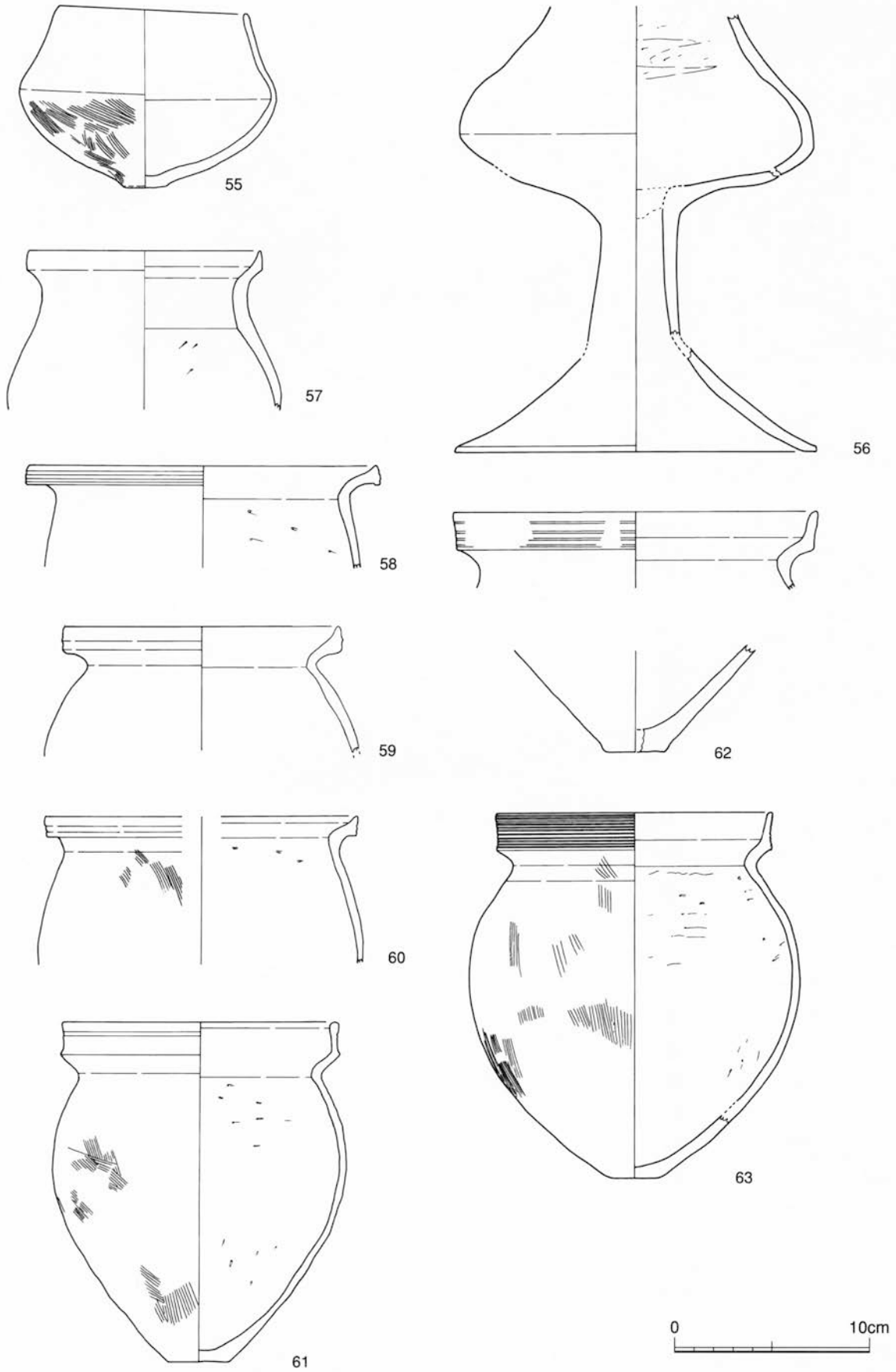
第123图 38号沟出土土器 (S=1/3)



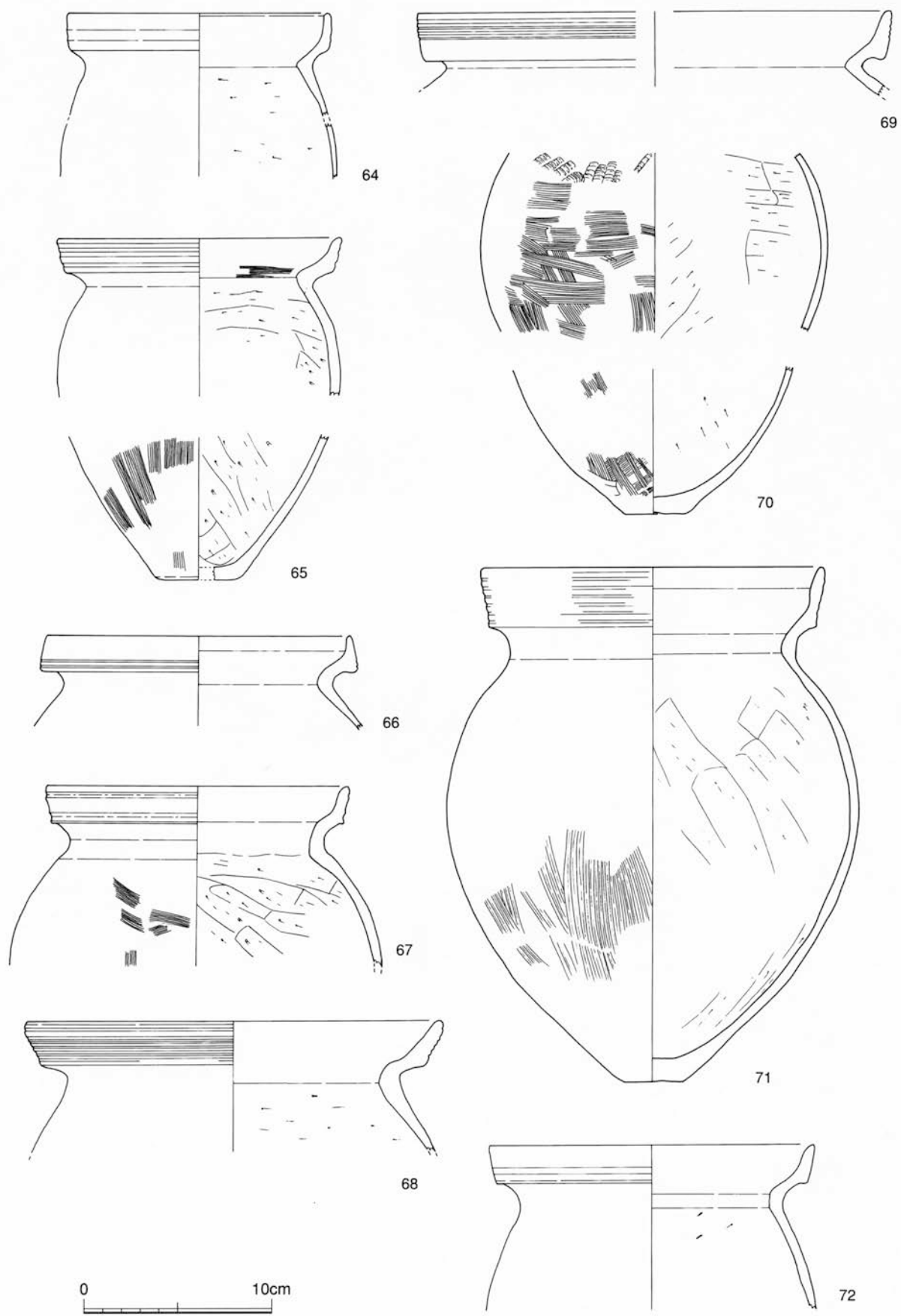
第124图 38号沟出土土器 (S=1/3)



第125图 38号沟出土土器 (S=1/3)



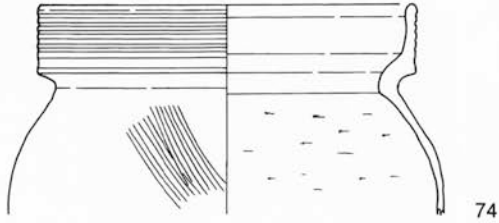
第126图 38号沟出土土器 (S=1/3)



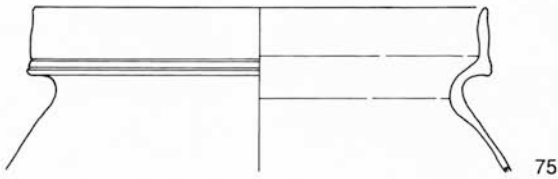
第127图 38号沟出土土器 (S=1/3)



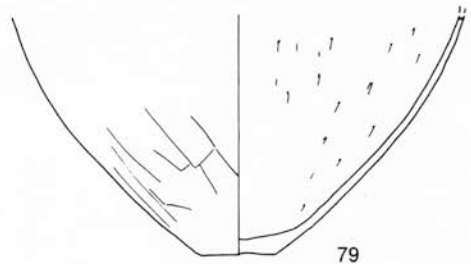
73



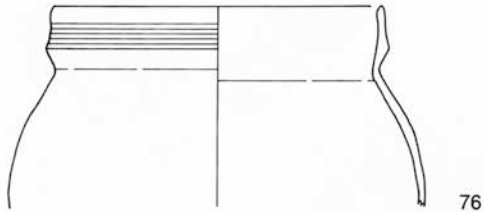
74



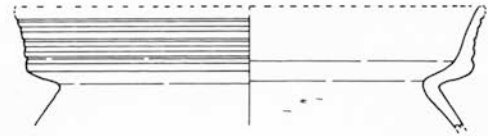
75



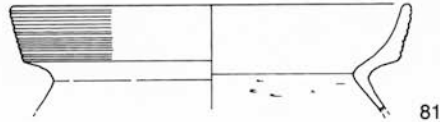
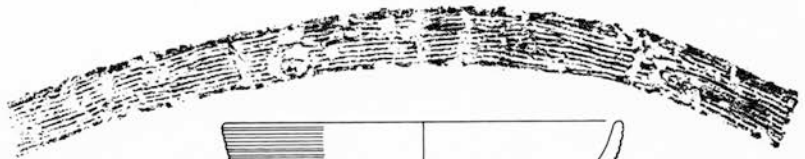
79



76



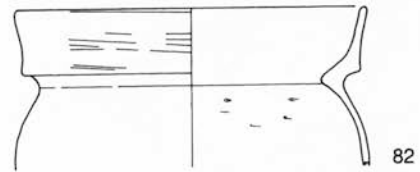
80



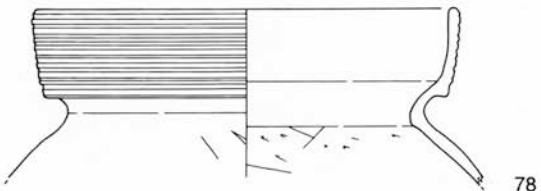
81



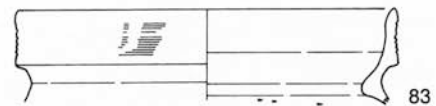
77



82



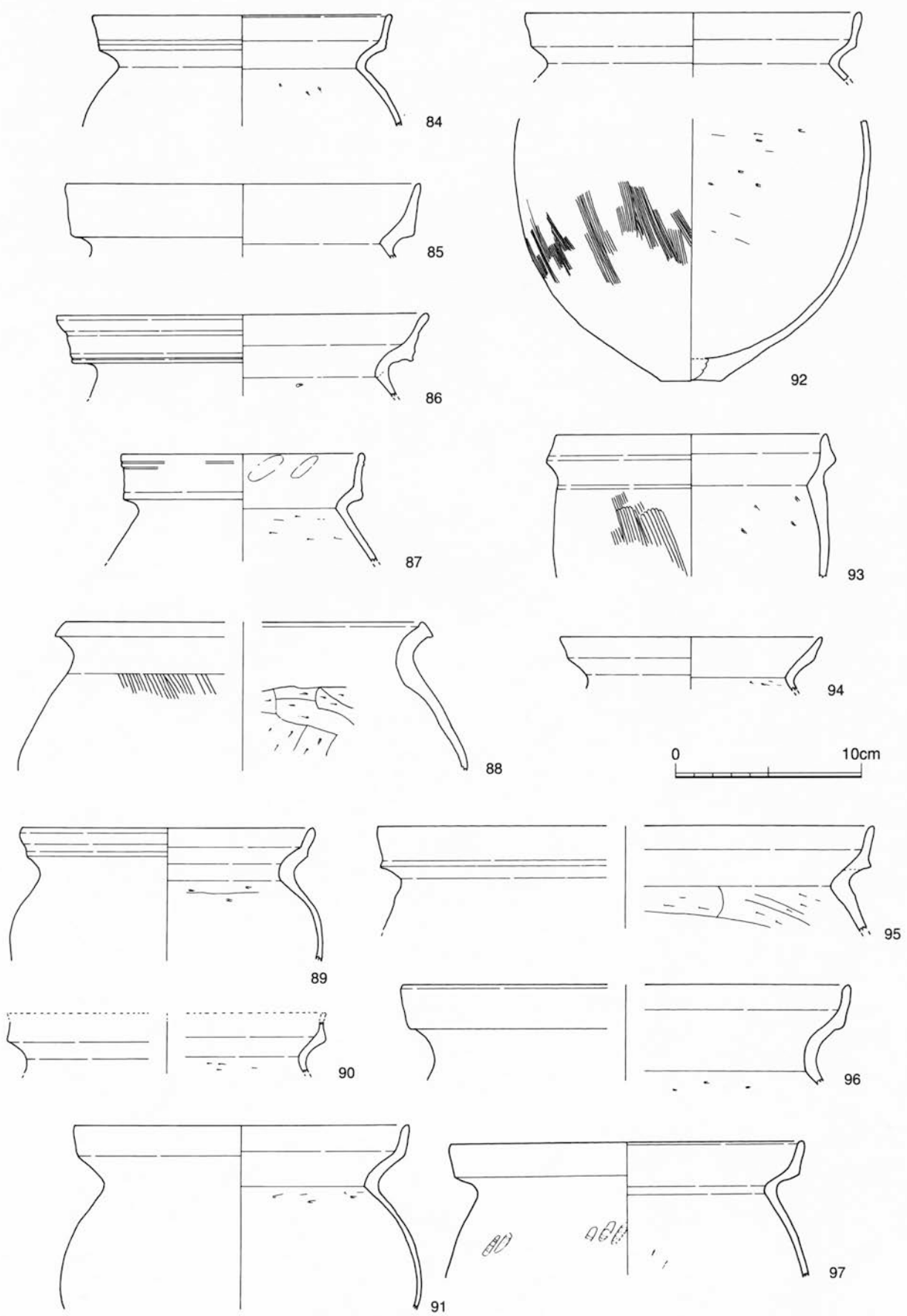
78



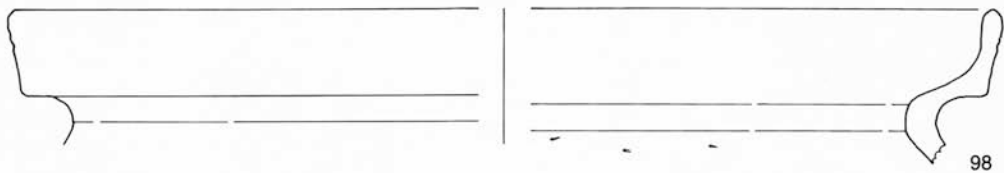
83

第128图 38号溝出土土器 (S=1/3)

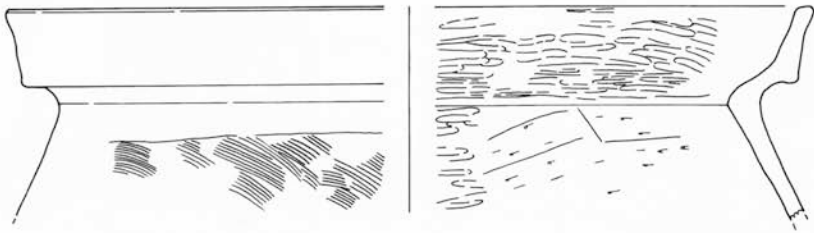




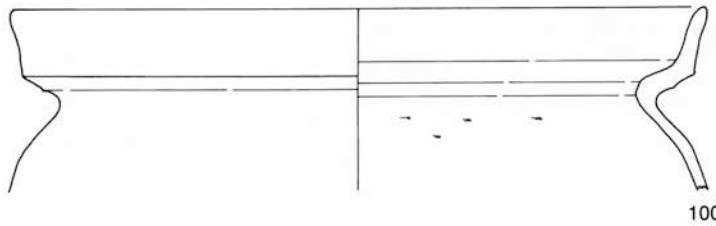
第129图 38号沟出土土器 (S=1/3)



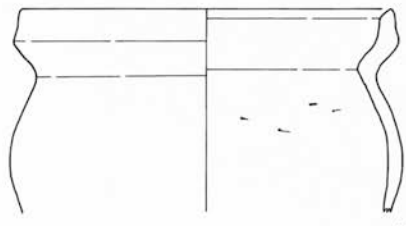
98



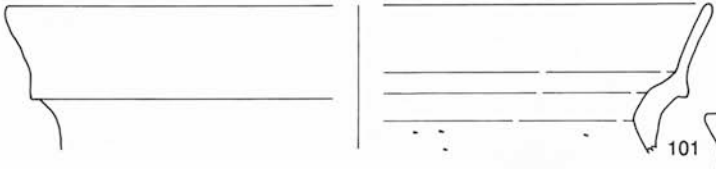
99



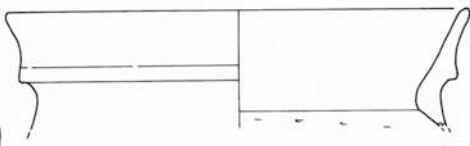
100



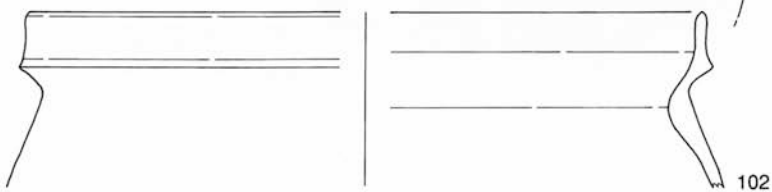
107



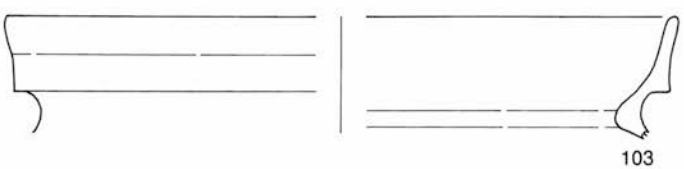
101



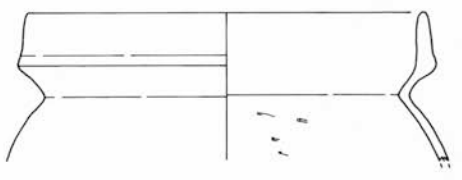
108



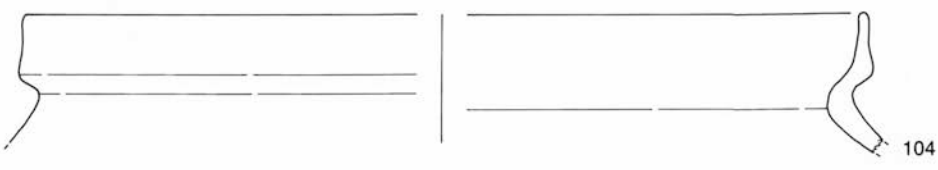
102



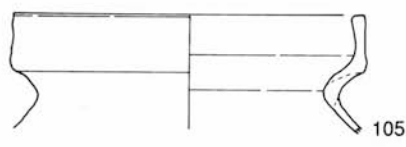
103



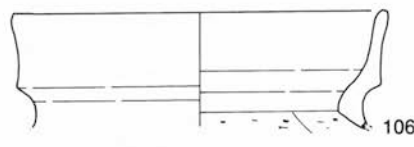
109



104



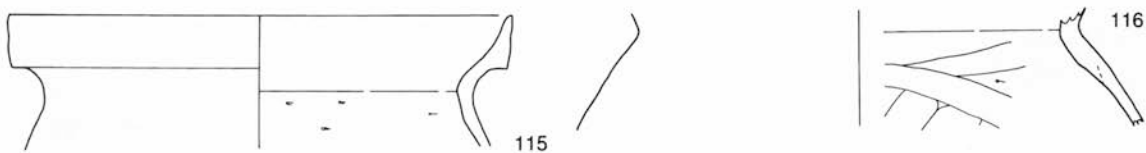
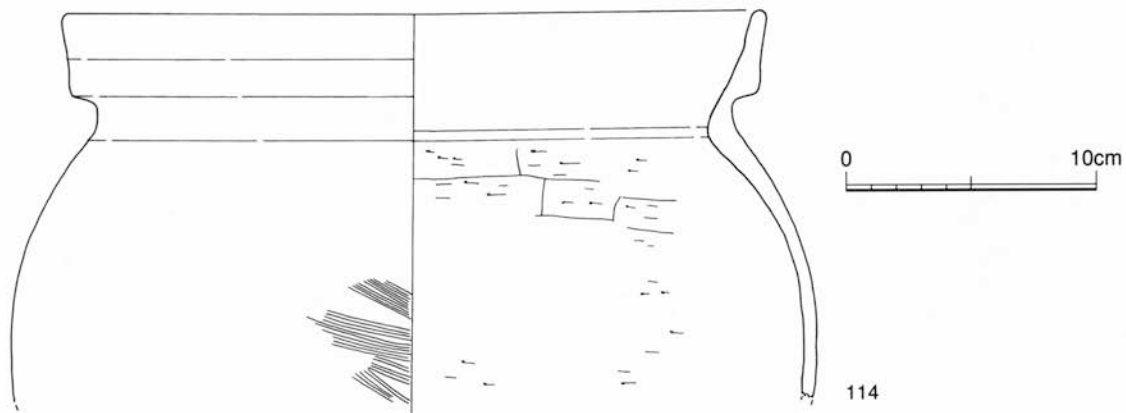
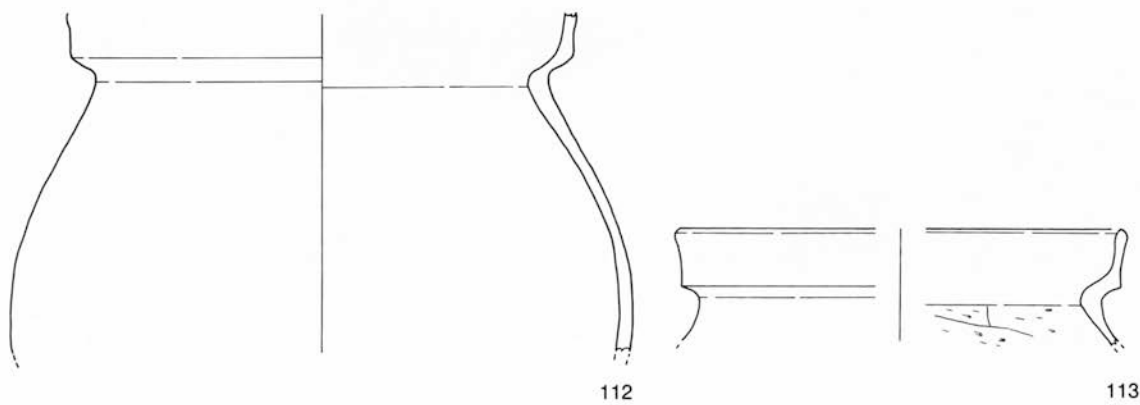
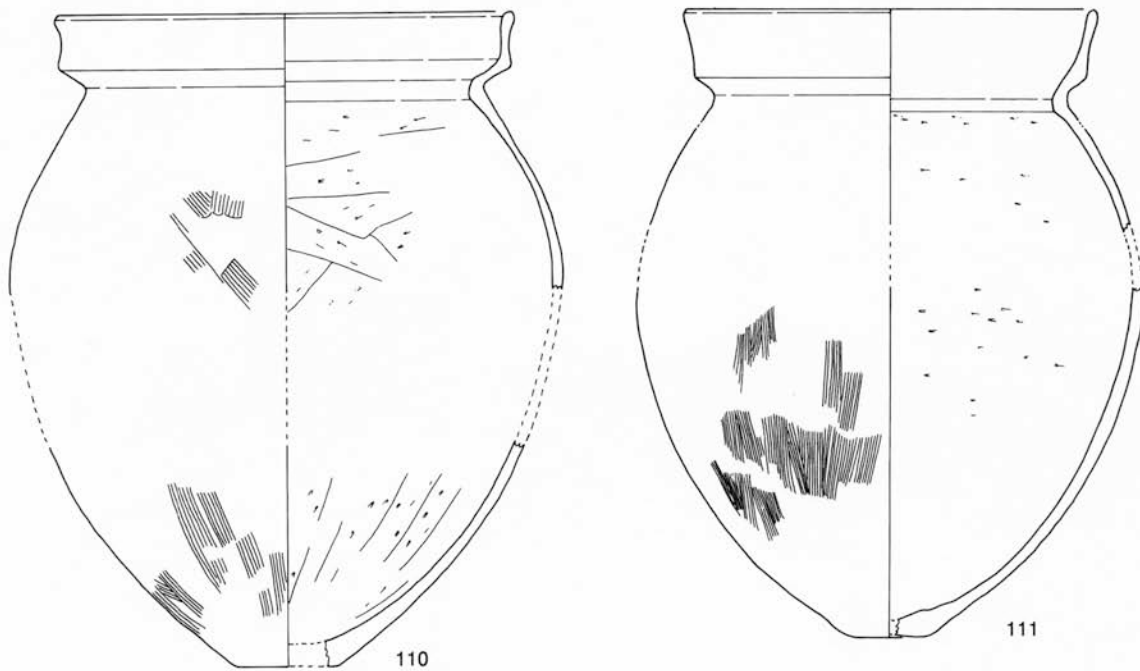
105



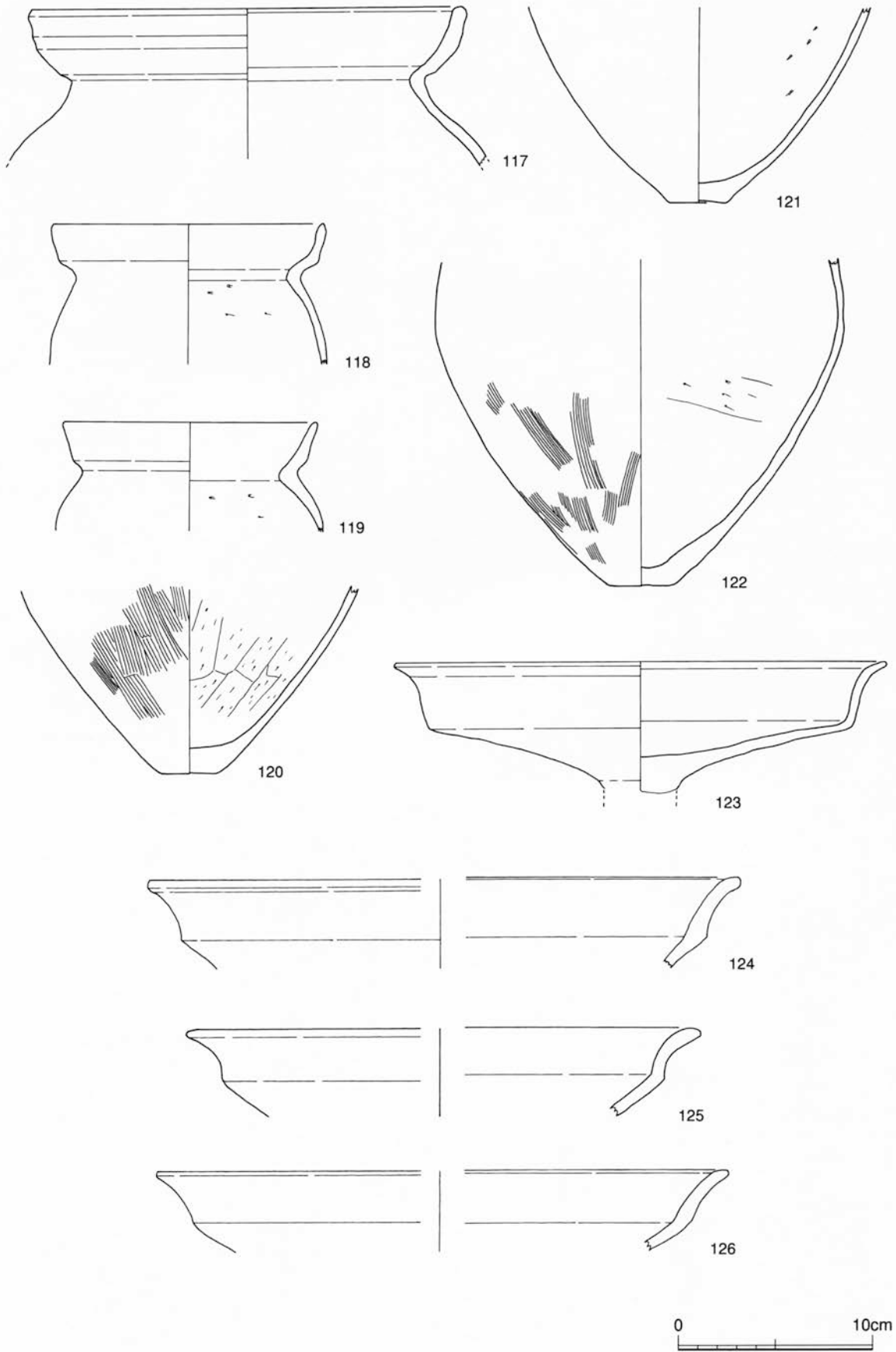
106



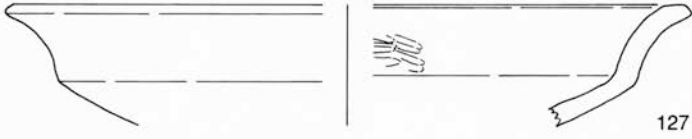
第130图 38号沟出土土器 (S=1/3)



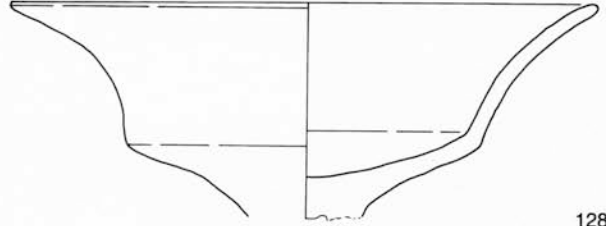
第131图 38号沟出土土器 (S=1/3)



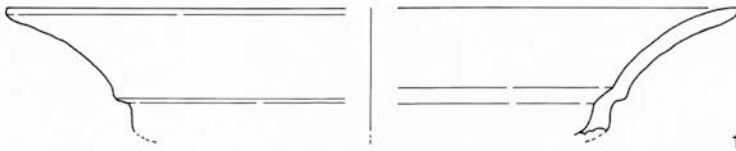
第132图 38号沟出土土器 (S=1/3)



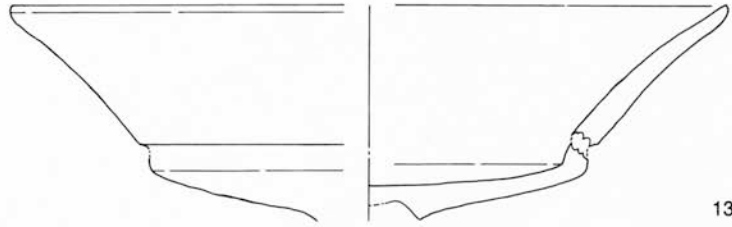
127



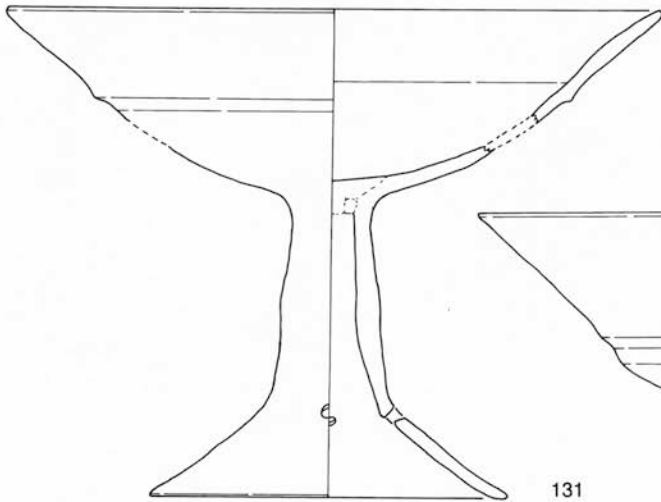
128



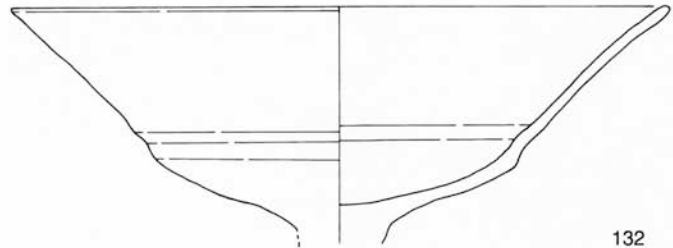
129



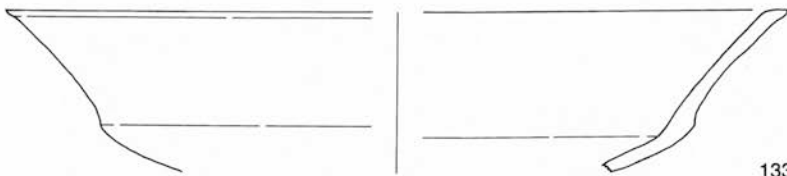
130



131



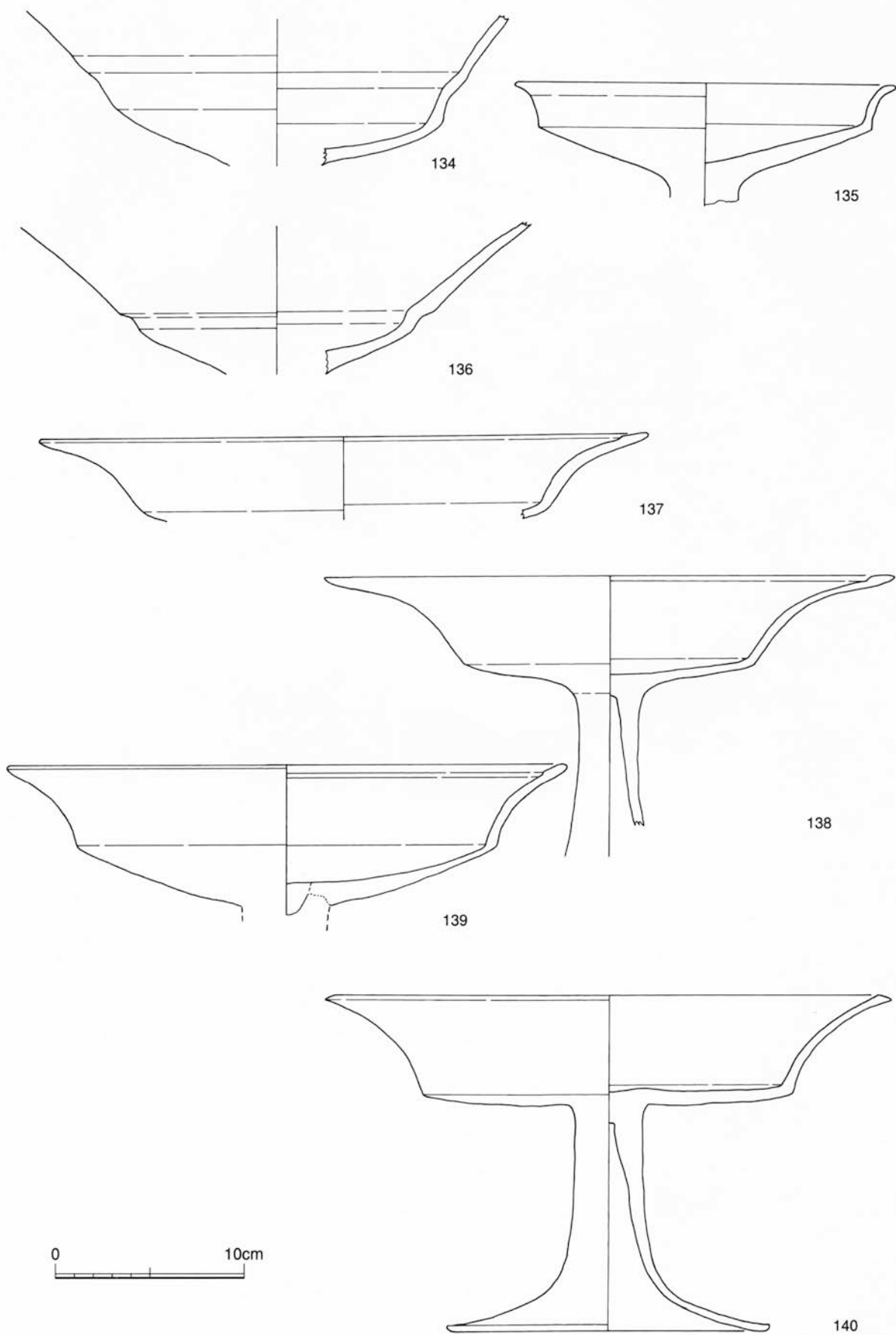
132



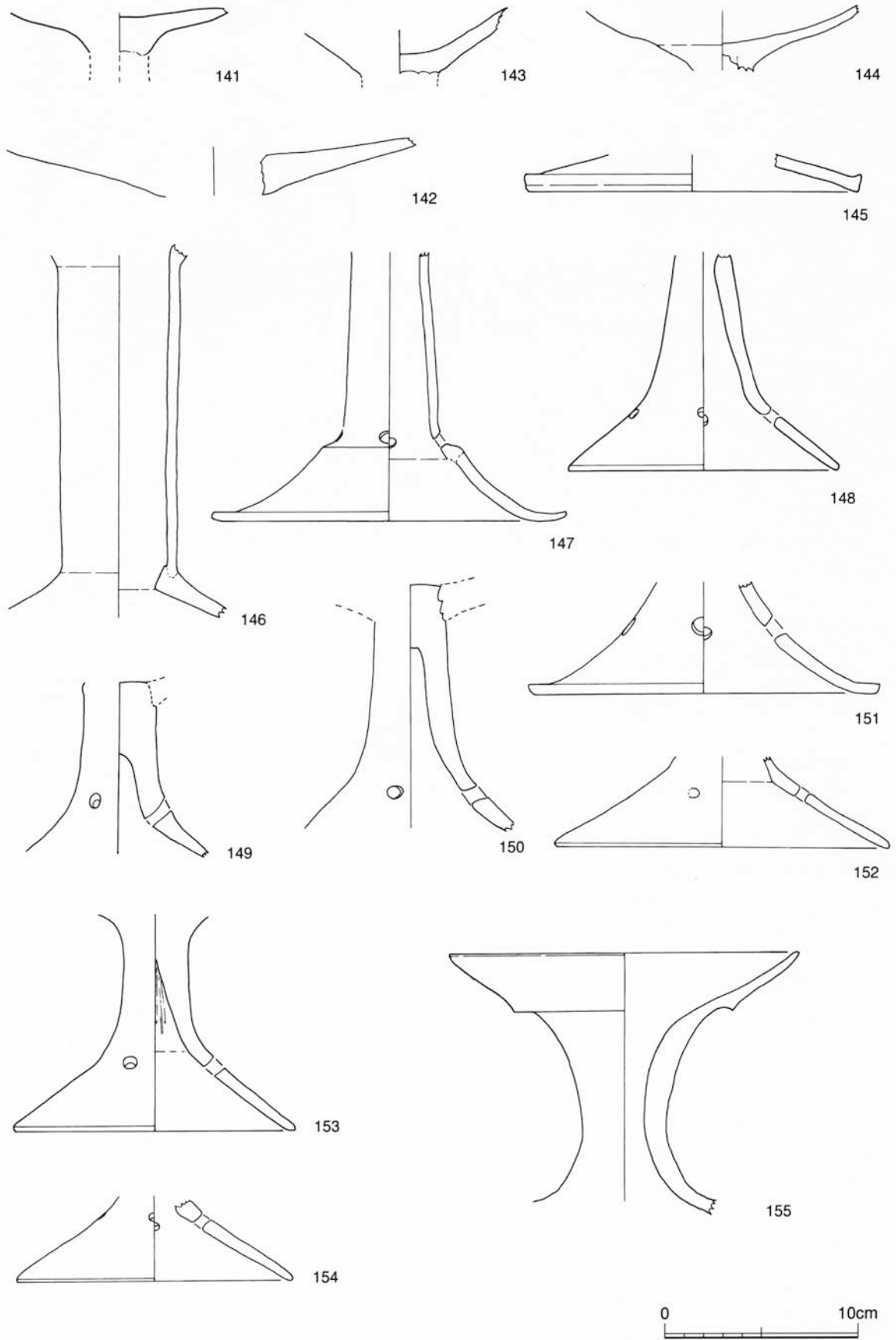
133



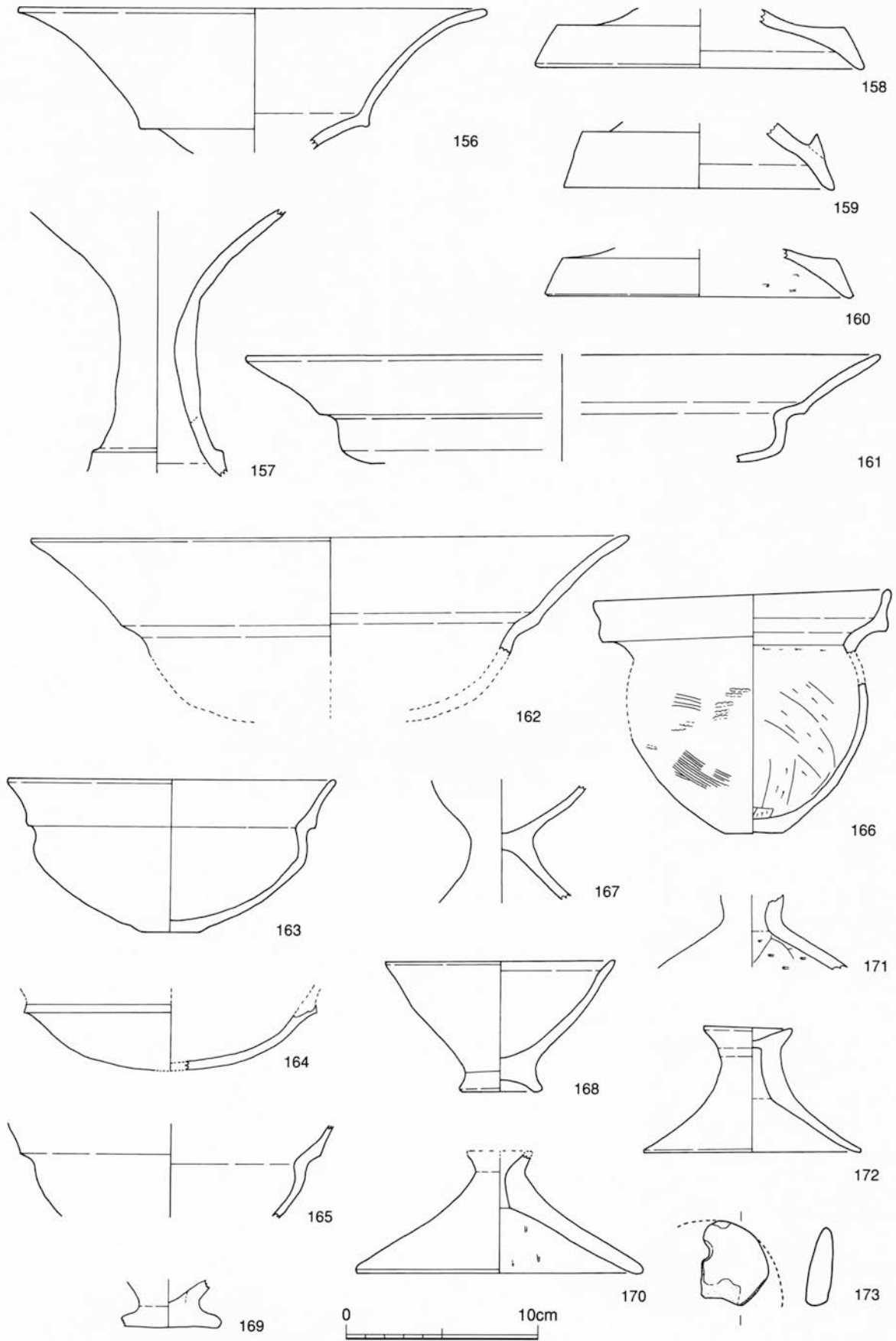
第133图 38号溝出土土器 (S=1/3)



第134图 38号沟出土土器 (S=1/3)

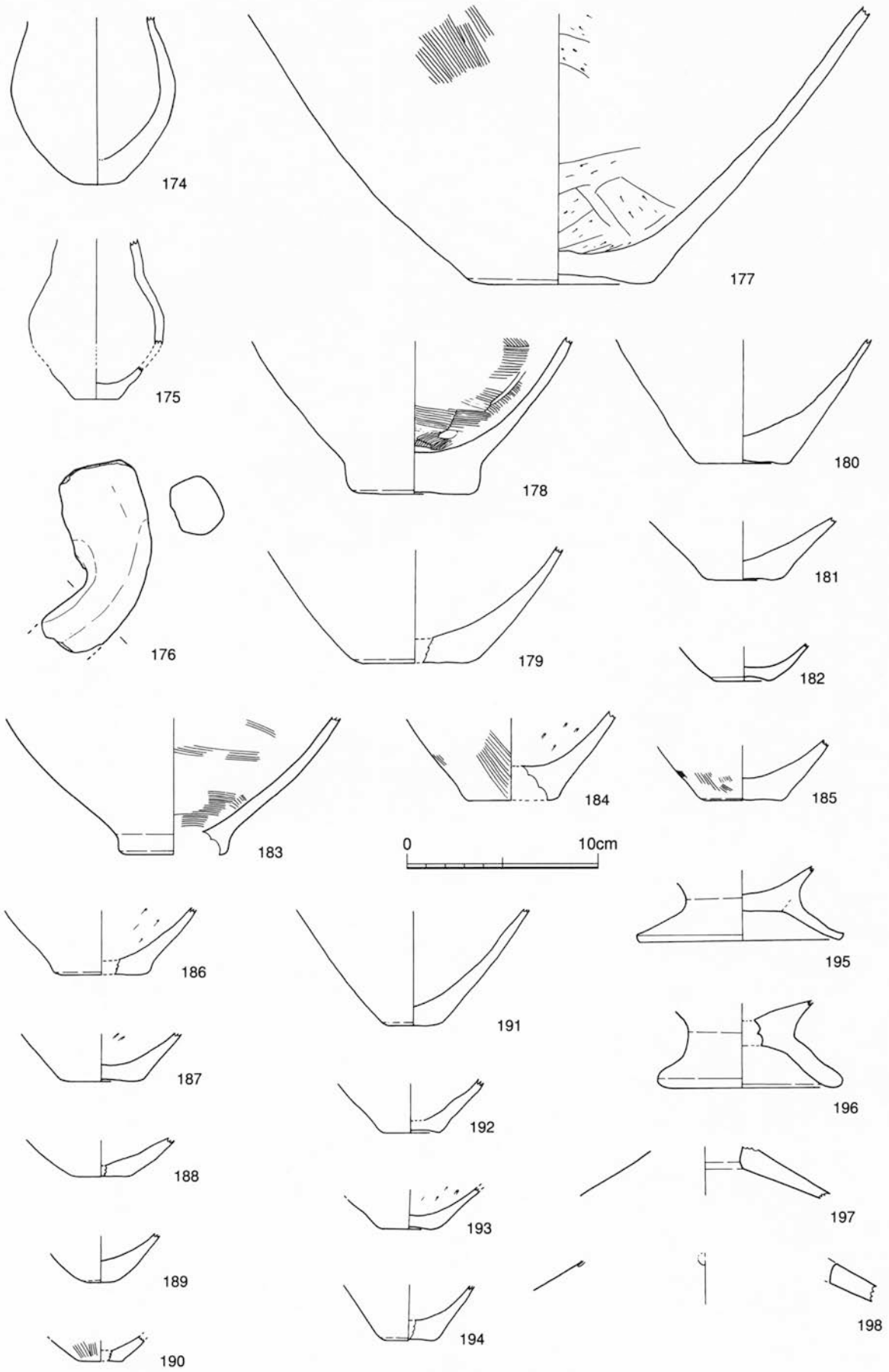


第135图 38号沟出土土器 (S=1/3)

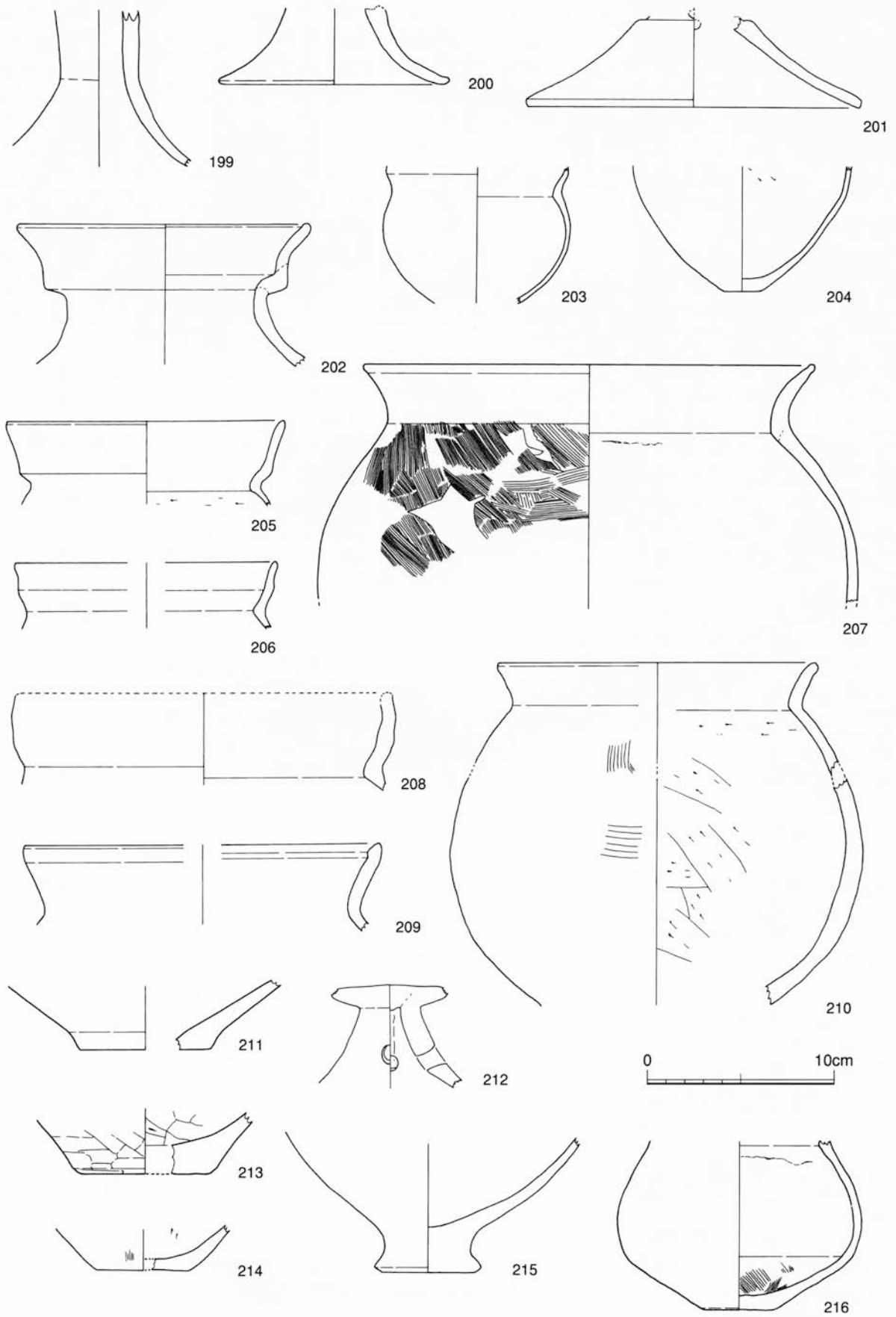


第136图 38号沟出土土器 (S=1/3)

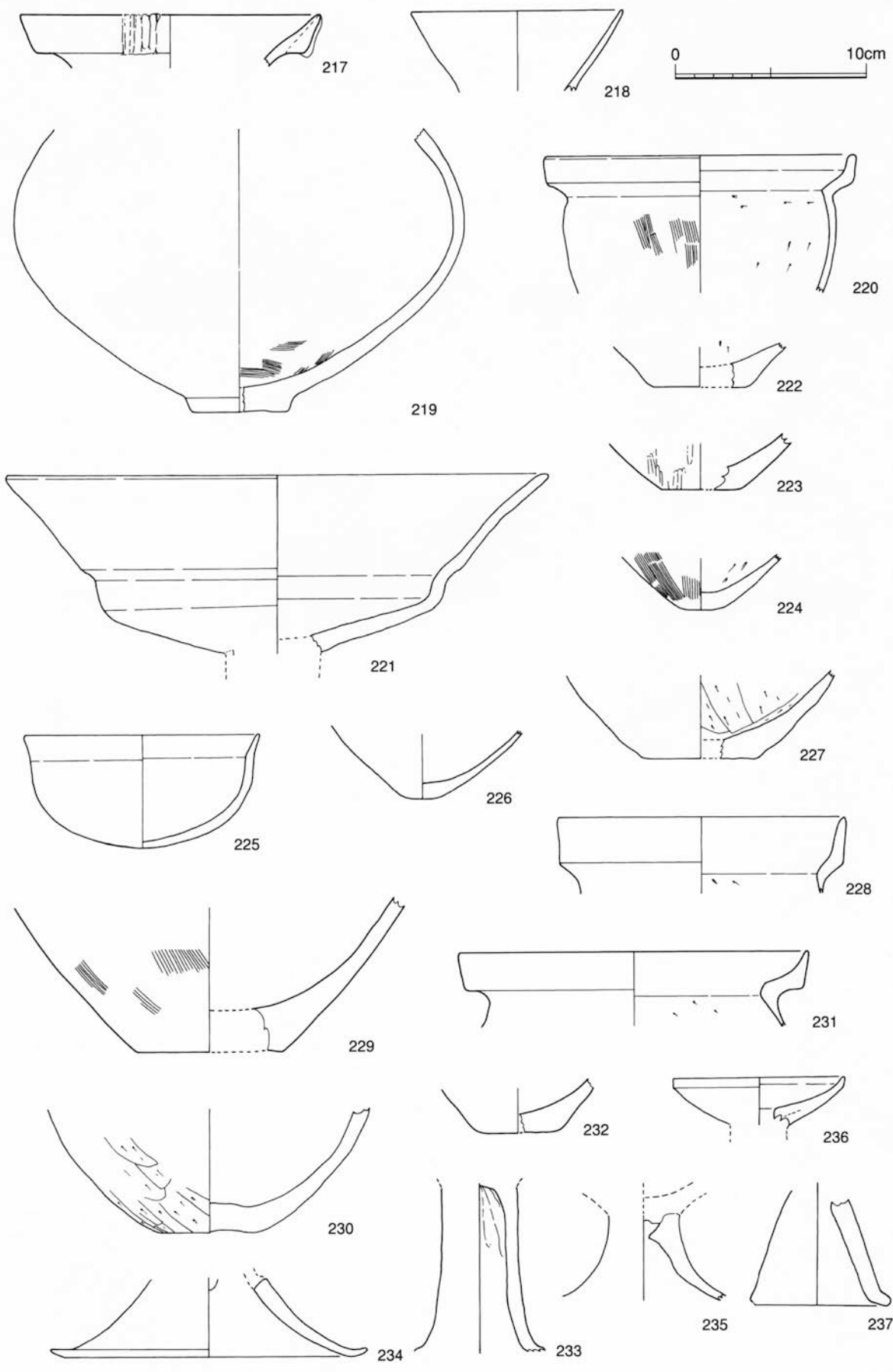




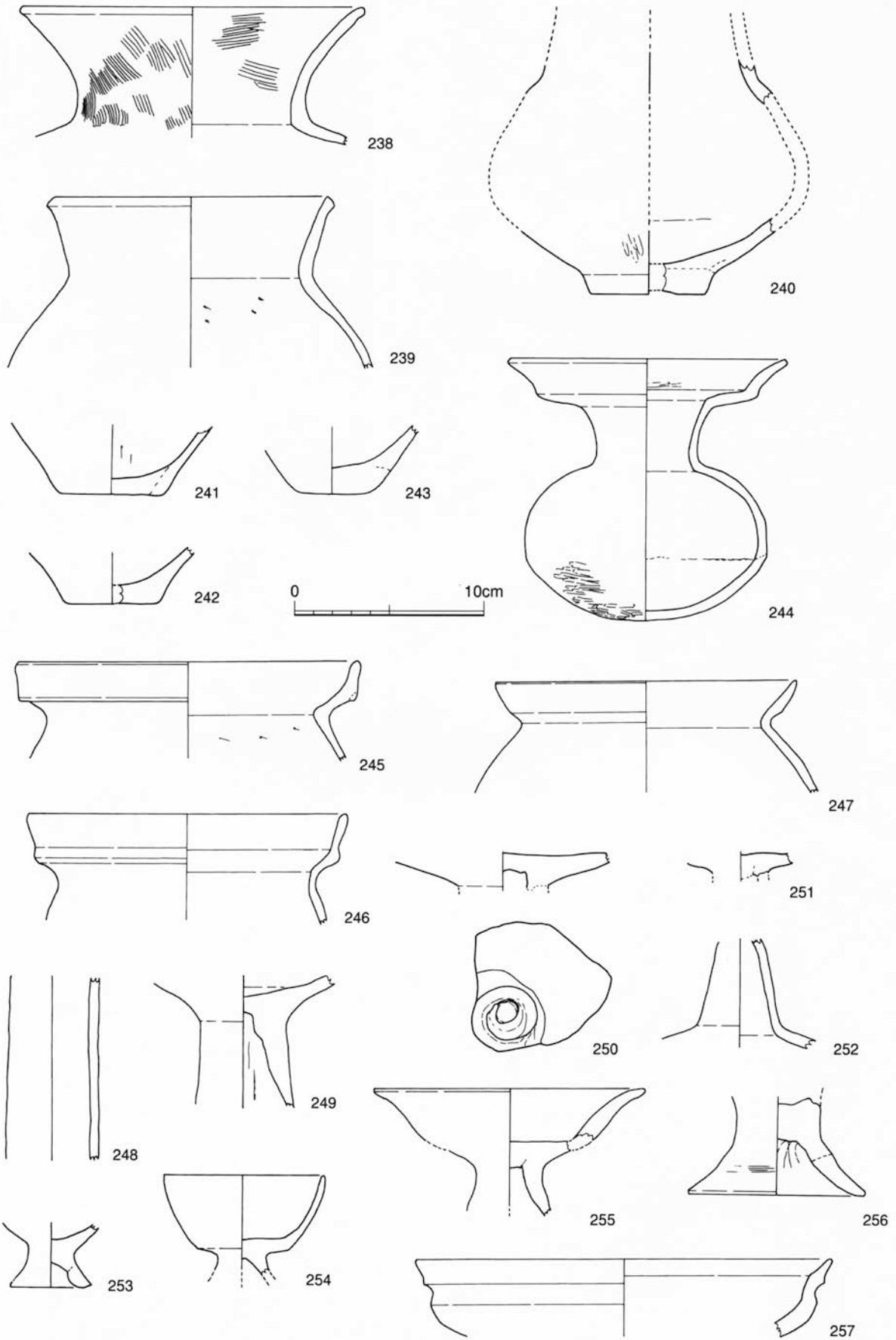
第137图 38号沟出土土器 (S=1/3)



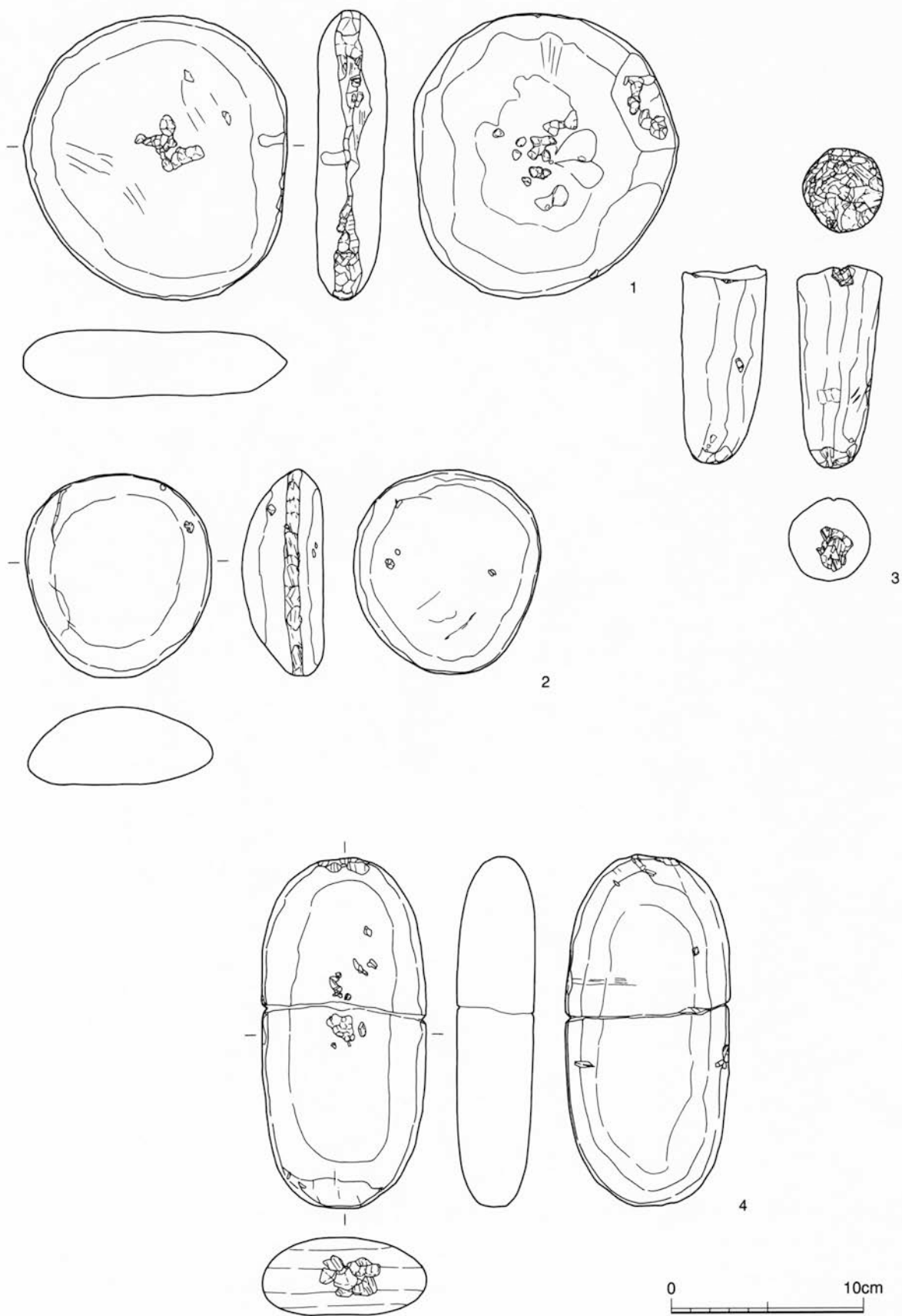
第138图 38号溝 (199~212)・115〔170〕号溝 (213~216) 出土土器 (S=1/3)



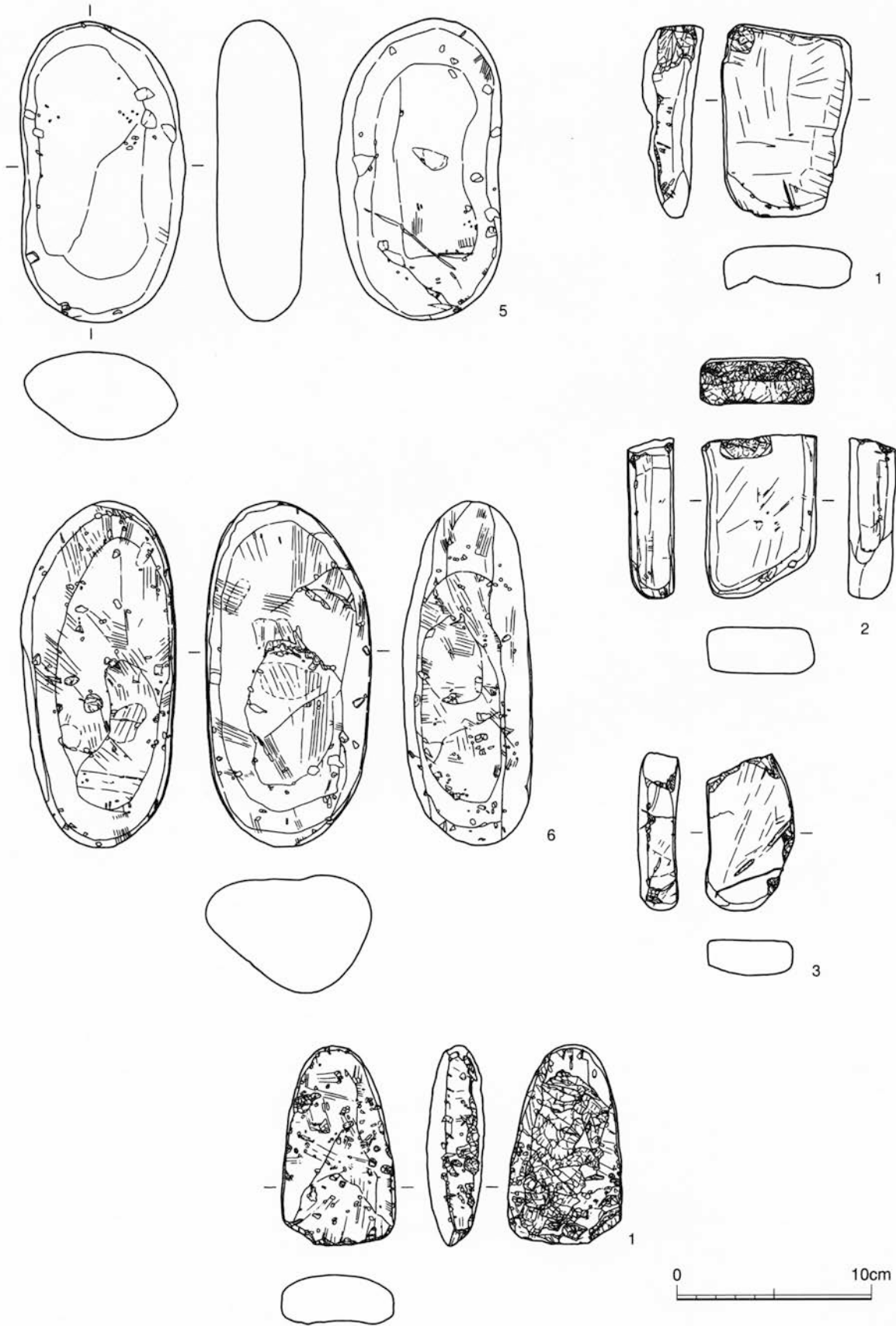
第139図 溝 (217~228)・Pit (229~237) 出土土器 (S=1/3)



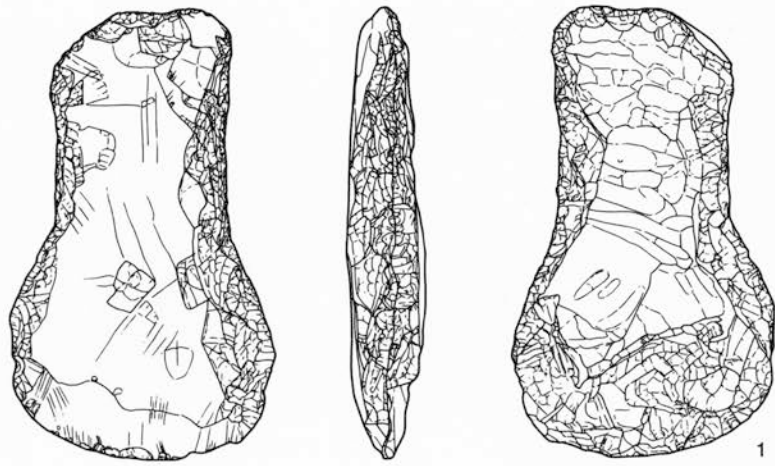
第140図 遺構外出土土器 (S=1/3)



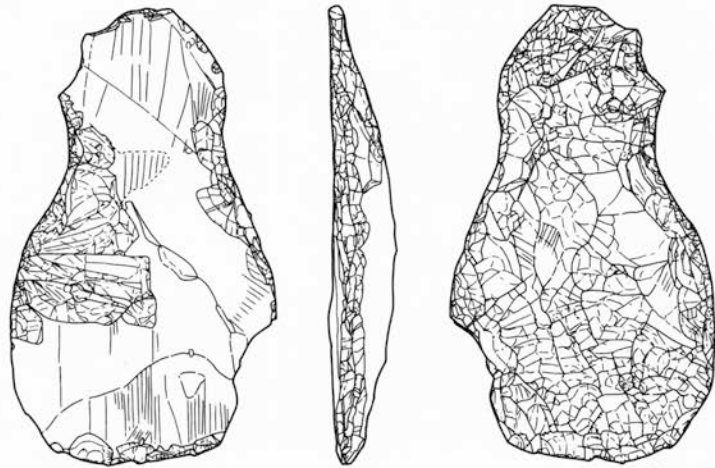
第141図 礫石器 (S=1/3)



第142図 礫石器・砥石・磨製石斧 (S=1/3)



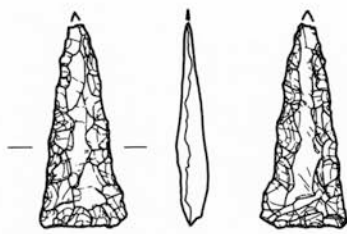
1



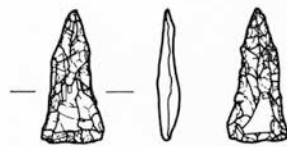
2



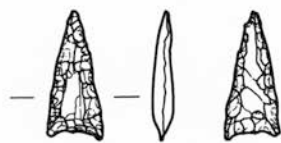
( )は石鏃1~4に適用



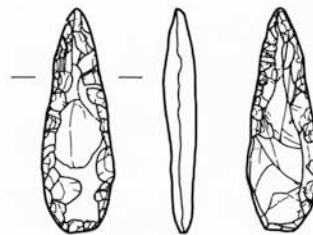
1



2



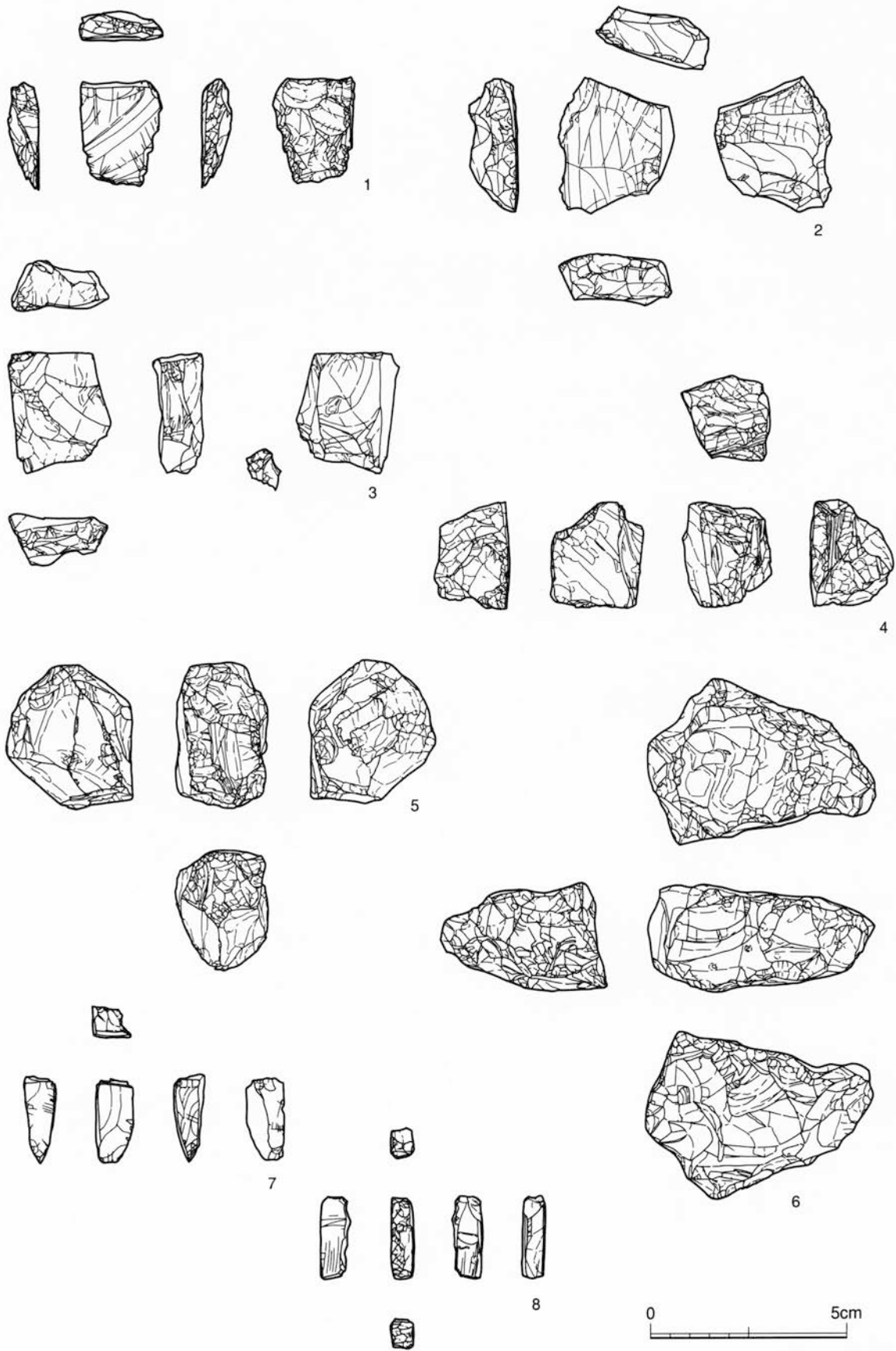
3



4



第143図 石鏃・石鏃 (S=1/3・2/3)



第144図 管玉製作資料 (S=2/3)







番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大腹径	底径	頸部径	器高	底厚	脚柱径	脚径	備考
146	38号溝	1点、o区下	高坏	10YR8/3浅黄橙	密	良					(18.3)		6.0		
147	38号溝	1点	高坏	10YR8/1灰白	やや粗	不良					(13.9)		4.0	18.2	
148	38号溝	1点	高坏	10YR8/1灰白	密	良					(11.1)		3.0	13.8	
149	38号溝	1点	高坏	2.5YR8/3淡黄	粗	やや不良					(8.8)		3.7		挿入法
150	38号溝	1点	高坏	2.5YR8/2灰白	粗	やや不良					(12.55)		3.6		
151	38号溝	1点、d区	高坏	2.5YR8/3淡黄	やや粗	良					(5.75)			17.6	
152	38号溝	2点接合	高坏	10YR8/3浅黄橙	密	良					(4.7)			17.0	
153	38号溝	2点接合	高坏	10YR8/1灰白	密	良					11.25		3.4	14.45	
154	38号溝	2点接合	高坏	10YR8/2灰白	やや粗	やや不良					(4.4)		3.6	14.1	焦げあり
155	38号溝	3点接合	器台	10YR8/3浅黄橙	やや粗	不良					(12.85)		4.4		
156	38号溝	7点接合	器台	2.5YR8/1灰白	やや粗	不良	17.9				(7.55)				
157	38号溝	4点接合、j区	器台	10YR8/3浅黄橙	やや粗	不良	24.15				(13.55)		4.4		
158	38号溝	2点接合	器台	10YR8/1灰白	やや粗	良					(3.1)			16.6	
159	38号溝	1点	器台	2.5YR8/1灰白	やや粗	良					(3.4)			14.0	
160	38号溝	1点	器台	10YR8/1灰白	粗	やや不良					(2.5)			15.6	
161	38号溝	2点接合	鉢	10YR6/1褐灰	密	やや不良					(5.6)				
162	38号溝	3点接合	鉢	10YR8/3浅黄橙	密	良	(32.9)				(6.2)				台付
163	38号溝	7点接合	鉢	10YR8/2灰白	粗	良	31.0	14.2	3.6		8.0	0.65			
164	38号溝	1点	鉢	10YR8/3浅黄橙	やや粗	やや不良	16.9				(3.35)				
165	38号溝	1点	鉢	10YR8/1灰白	密	やや不良		13.8			(4.85)				把手付?
166	38号溝	2点接合、p区	鉢	10YR7/3にぶい黄橙	粗	やや不良		12.5	3.1	11.5	(12.7)	0.7			
167	38号溝	2点接合	鉢	10YR8/2灰白	粗	良	15.2				(6.4)		3.2		碗形
168	38号溝	3点接合	鉢	5YR8/3淡橙	やや粗	良			4.3		6.8	1.2			
169	38号溝	1点	鉢	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良	11.8		5.2		(2.35)	1.3			台付
170	38号溝	1点	有孔蓋	10YR8/3浅黄橙	やや粗	やや不良				2.5	(6.0)				
171	38号溝	1点	蓋	10YR7/3にぶい黄橙	やや粗	不良	14.6			3.0	(3.8)				
172	38号溝	2点接合	蓋	10YR8/3浅黄橙	粗	良			4.6	3.2	6.6				
173	38号溝	1点	蓋	7.5YR8/1灰白	密	良	11.2				(1.25)				
174	38号溝	2点接合	小壺	10YR8/2灰白	粗	不良	(4.15)	8.5	2.4	6.5	(8.7)	1.3			
175	38号溝	1点	壺	10YR8/3浅黄橙	密	やや不良		7.0	2.3		[(8.4)]	0.85			ミニチュア
176	38号溝	1点	瓶	10YR8/3浅黄橙	密	良									山陰型。把手。
177	38号溝	4点接合、j区	壺	10YR8/3浅黄橙	粗	やや不良			9.7		(14.1)	1.2			
178	38号溝	3点接合	壺	10YR8/3浅黄橙	やや粗	不良			6.5		(8.0)	2.2			
179	38号溝	3点接合	壺	10YR4/1黄灰	密	不良			6.4		(5.9)	[1.2]			
180	38号溝	3点接合	壺	7.5YR8/1灰白	密	不良			4.8		(6.5)	1.2			
181	38号溝	1点	壺	5YR6/8橙	やや粗	良			4.2		(3.1)	0.9			
182	38号溝	1点	壺	2.5YR8/2灰白	密	良			3.6		(1.8)	0.5			
183	38号溝	1点	壺	10YR8/2灰白	密	良			5.7		(7.1)				
184	38号溝	2点接合	壺	10YR8/2灰白	密	やや不良			5.0		(4.3)	[1.8]			
185	38号溝	1点	壺	10YR8/2灰白	密	良			4.4		(2.9)	1.2			
186	38号溝	1点	壺	10YR8/2灰白	やや粗	やや不良			5.0		(3.4)	[0.75]			
187	38号溝	B区下	壺	10YR8/3浅黄橙	やや粗	やや不良			4.4		(2.5)	0.8			内焦げあり
188	38号溝	1点	壺	10YR8/2灰白	密	良			3.0		(1.9)	0.6			
189	38号溝	1点	壺	10YR6/1褐灰	やや粗	やや不良			2.0		(2.45)	1.2			
190	38号溝	1点	壺	10YR7/3にぶい黄橙	粗	やや不良			2.4		(1.1)	[0.6]			
191	38号溝	2点接合	壺	10YR7/2にぶい黄橙	密	良			3.1		(6.0)	1.0			内煤付着
192	38号溝	2点接合、k区	壺	10YR7/3にぶい黄橙	粗	やや不良			3.0		(2.6)	0.6			
193	38号溝	3点接合	壺	10YR8/2灰白	粗	良			3.0		(2.1)	0.6			
194	38号溝	p区	壺	10YR5/1褐灰	やや粗	不良			3.0		(2.9)	[1.0]			
195	38号溝	1点	壺か壺	10YR8/2灰白	やや粗	不良			台径 10.4		(3.7)	0.9			台付
196	38号溝	1点	壺か壺	10YR8/3浅黄橙	密	やや不良			台径 9.3		(4.45)	[1.3]	5.0		台付
197	38号溝	1点	高坏	10YR8/3浅黄橙	密	やや不良					(2.3)				
198	38号溝	1点	高坏	2.5YR8/2灰白	やや粗	やや不良					(1.55)		4.2		
199	38号溝	3点接合	高坏 か器台	7.5YR8/3浅黄橙	密	やや不良					(8.1)				
200	38号溝	1点	高坏 か器台	5YR8/3淡橙	粗	良					(4.05)				焦げあり
201	38号溝	1点	高坏 か器台	10YR8/3浅黄橙	密	良					(4.8)				
202	38号溝	3点接合	壺	10YR8/3浅黄橙	密	やや不良	15.45			10.6	(7.5)				
203	38号溝	1点	小型 壺	10YR8/2灰白	密	良		9.9		9.0	(7.3)				
204	38号溝	1点	壺か 鉢	10YR7/2にぶい黄橙	粗	良					(6.7)	0.65			
205	38号溝	4点接合	壺	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良	14.7			12.2	(4.45)				
206	38号溝	1点	壺	10YR8/2灰白	やや粗	良	[13.8]			[12.7]	(3.5)		3.2		
207	38号溝 P11938	11点接合	壺	10YR7/3浅黄橙	密	良	23.8	28.7		21.3	(12.55)				
208	38号溝	1点、b区下	壺	10YR8/3浅黄橙	やや粗	やや不良	[19.6]			19.0	(4.8)				煤付着
209	38号溝	4点接合	壺	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良	[18.9]	[21.9]			(4.25)				布留壺
210	38号溝	5点接合	壺	10YR8/3浅黄橙	密	やや不良	[16.8]			[16.8]	[(18.3)]				
211	38号溝	1点	壺	10YR8/4浅黄橙	密	やや不良			6.9	[15.4]	(3.4)	[0.5]			
212	38号溝	1点	高坏	7.5YR8/2灰白	粗	良					(5.15)				円盤充填法
213	170号溝	B区	壺	10YR4/1褐灰	密	不良			6.6		(2.85)	[1.5]			
214	115号溝	B区下、D区下	壺か壺	10YR5/2灰黄褐	粗	不良			5.0		(2.2)	(0.6)			
215	170号溝	1点、C区	鉢	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良			台径 5.6		(7.5)	2.4			台付

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	最大腹径	底径	頸部径	器高	底厚	脚柱径	脚径	備考
216	115号溝	下	壺	5YR6/8橙	粗	良		13.0	4.1	9.6	(9.0)	0.8			
217	115号溝		壺	5YR7/6橙	粗	良	15.6				(2.8)				東海系在地化
218	170号溝	1点、C区	小型壺	7.5YR8/6浅黄橙	密	良	10.9			(6.0)	(4.2)				
219	157号溝 158号溝	5点接合 B区最下層、J-41Gr	壺	10YR8/1灰白	密	やや不良		23.4	4.9		(14.75)	1.25			
220	157号溝	2点接合	壺	7.5YR8/3浅黄橙	粗	良	16.0	14.2		13.8	(7.2)				225と同一か。
221	157号溝	2点接合	高坏	10YR8/3浅黄橙	密	良	28.0				(9.3)		4.5		円盤充填法
222	157号溝	1点	壺	2.5Y2/1黒	粗	やや不良			5.0		(2.1)	[1.1]			
223	158号溝	2点接合	壺	10YR8/4浅黄橙	密	良			4.0		(2.45)	[1.1]			
224	158号溝	2点接合	壺	10YR8/3浅黄橙	粗	良			2.5		(2.7)	0.9			
225	113号溝		小型鉢	10YR8/2灰白	やや粗	やや不良	12.1				5.95	0.4			
226	151号溝	A区上面	壺	7.5YR8/2灰白	粗	良			1.9		(3.4)	0.9			
227	174号溝		壺	2.5Y8/3淡黄	やや粗	やや不良			6.0		(4.35)	[1.0]			
228	95号溝	C区	壺	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良	14.8			12.6	(4.0)				
229	P10310		壺	7.5YR6/1褐灰	やや粗	不良			7.6		(7.6)	[2.2]			
230	P4440		壺	5YR7/2明褐灰	粗	不良			5.2		(6.5)	1.5			
231	P12707		壺	10YR8/3浅黄橙	密	良	18.0			15.0	(3.9)				
232	P12681		壺	10YR8/3浅黄橙	密	良			4.4		(2.35)	1.0			
233	P250		高坏	10YR8/2灰白	粗	良					(8.5)		3.9		
234	P12701		高坏	7.5YR8/2灰白	密	良					(4.05)			16.4	
235	P4425		高坏	2.5Y8/2灰白	粗	やや不良					(4.2)		3.7		
236	P12533		蓋台?	5YR7/6橙	密	良	8.85				(2.5)		(3.1)		
237	P6098、包含層	J-27Gr	高坏	2.5Y8/2灰白	粗	やや不良					(5.85)		3.0	7.4	
238	包含層	I-42Gr	壺	5YR7/6橙	やや粗	良	17.7			12.0	(6.9)				
239	包含層	J-36Gr	壺	10YR8/2灰白	やや粗	良	14.3			12.8	(9.0)				
240	179号土坑(攪乱)		壺	10YR6/1褐灰	やや粗	やや不良			6.0		(12.4)	[1.4]			
241	135号土坑(攪乱)		壺	10YR8/3浅黄橙	粗	やや不良			5.5		(3.7)	0.85			
242	190号土坑(攪乱)		壺	10YR8/3浅黄橙	やや粗	良			5.2		(2.7)	[1.0]			
243	包含層	J-36Gr	壺	10YR8/2灰白	やや粗	やや不良			4.15		(3.3)	1.6			
244	175号土坑(攪乱)		小型壺	7.5YR8/2灰白	密	良	14.4	12.75		5.3	13.8	0.6			
245	包含層	H-36Gr	壺	7.5YR8/3浅黄橙	密	良	17.9			14.8	(5.1)				
246	包含層	J-39Gr	壺	5YR7/4にぶい橙	密	良	16.6			13.5	(5.6)				外煤付着
247	33号溝(混入)		壺	2.5YR7/4淡赤橙	密	良	15.8			13.0	(6.0)				
248	179号土坑(攪乱)		高坏	10YR8/3浅黄橙	粗	良					(9.7)		4.6		
249	179号土坑(攪乱)		高坏	10YR6/1褐灰	粗	不良					(6.55)		4.6		円盤充填法
250	190号土坑(攪乱)		高坏	10YR8/1灰白	密	良					(1.25)		4.8		
251	179号土坑(攪乱)		高坏	2.5YR6/8橙	粗	良					(1.2)		3.0		円盤充填法
252	包含層	E-23Gr	高坏	5YR7/4にぶい橙	密	やや不良					(5.75)		2.2	(3.3)	
253	包含層	I-42Gr	高坏	10YR8/2灰白	密	良					(3.3)		2.4		ミニチュア
254	130号溝(混入)		高坏	2.5YR6/6橙	粗	良	8.35				(5.05)		2.6		小型
255	130号溝(混入)		高坏	2.5YR7/4淡赤橙	粗	良	14.0				(6.8)		3.5	9.2	
256	130号溝(混入)		高坏	10YR8/2灰白	密	やや不良					(5.15)		4.4		挿入法
257	32号溝(混入)		鉢	10YR7/1灰白	やや粗	良	21.6	20.2			(4.1)				

## 観察表凡例

1. 番号は掲載順であり、実測図と対応している。
2. 器種は大別にて標記している。
3. 色調は、均質的な部分で判断している。内面と異なる場合は、備考に記した。
4. 胎土は、緻密・密・やや粗・粗の4段階に分類した。
5. 焼成は、良・やや良・やや不良・不良の4段階に分類した。
6. 計測値において、( )は残存値、[ ]は復元値を表している。
7. 出土地点に関しては、出土地点の記録のあるものは接合点数で標記してある。出土状況図を参照して頂きたい。なお、区分けについては、2分法で調査した土坑は北ないし東からA区となる。4分法以上では、北西端がA区となり反時計回りに進む。溝に関しては、セクションベルトを境として、北ないし東からA区となる。

第6表 礫石器観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	38号溝	k区	礫石器	変質砂岩	1040	14.75	13.65	3.5	
2	38号溝	1点	礫石器	珪岩	600	10.55	9.6	4.0	
3	38号溝	1点	礫石器	変朽安山岩	270	(10.5)	4.5	4.3	
4	38号溝	2点接合	礫石器	変質砂岩	1050	18.15	8.5	4.0	
5	170号溝	1点	礫石器	火山礫凝灰岩	950	15.4	8.3	4.5	
6	116号溝	B区	礫石器	デイサイト	1340	17.6	8.45	5.8	

第7表 砥石観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	38号溝		砥石	ハリ質岩	210	9.85	6.55	2.0	仕上砥石
2	38号溝	1点	砥石	珪化凝灰岩	210	(8.15)	5.55	2.35	仕上砥石
3	38号溝	1点	砥石	ハリ質岩	110	(7.85)	4.4	1.8	中砥石

第8表 磨製石斧観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	130号溝	1点	磨製石斧	安山岩	250	10.2	5.75	2.35	大型蛤刃

第9表 石鋏観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	包含層	C-09Gr	石鋏	火山礫凝灰岩	600	17.9	10.4	3.15	
2	包含層	K-35Gr	石鋏	火山礫凝灰岩	440	18	10.5	2.6	

第10表 石鏃観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	28号溝		石鏃	珪質頁岩	3.43	(4.02)	1.72	0.64	
2	28号溝		石鏃	輝石安山岩	1.09	2.66	1.2	0.41	
3	包含層	K-09Gr	石鏃	流文岩	0.86	2.39	1.08	0.39	
4	表土除去		石鏃	安山岩	3.12	4.46	1.37	0.61	風化大

第11表 管玉製作資料観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	38号溝		形割未製品	碧玉質岩	4.59	2.64	2.01	0.7	
2	38号溝	1点	形割未製品	碧玉質岩	13.68	3.31	2.89	1.19	
3	38号溝	1点	形割未製品	碧玉質岩	10.65	3.08	2.22	1.35	
4	38号溝		形割未製品	碧玉質岩	14.63	2.73	2.26	2.38	
5	38号溝	1点	素材石核	鉄石英	34.96	3.6	3.15	2.27	
6	76号土坑		素材石核	メノウ	66.86	5.34	4.34	2.55	被熱あり
7	38号溝		形割未製品	碧玉質岩	1.65	2.16	0.87	0.7	
8	包含層	E-36Gr	形割未製品	碧玉質岩	1.46	2.06	0.72	0.54	

## 第4節 古墳時代後期後半から古代の遺物

### 第1項 概要

古墳時代後期後半期の遺物は、基本的には単独出土であり、まとまりをもっていない。大溝である38号溝や130号溝といった長期に渡って存在する溝から出土している。古代でも、田嶋編年Ⅰ期に該当する遺物にも同様のことが言える。出土量は定量出土しているが、建物跡に伴うものではなく、前述の溝や、廃棄土坑内からの出土である。当遺跡で明確に建物跡に伴うのは、田嶋編年Ⅱ期以降である。

古代遺物の報告においては、須恵器及び土師器煮炊具は田嶋明人氏の古代土器編年に基づくが、土師器碗・皿類に関しては、10世紀以降出土遺物が大部分を占めるため、出越茂和氏の古代後半土師器食器編年を援用している。両者の対応関係については、観察表凡例を参照して頂きたい。遺物の出土量をみると、総破片数（接合遺物及び同一個体と判断したものは1でカウント、以下同様）で約18,000点を数える。須恵器と土師器の量比では、土師器の方が多い。これは、破片数では土師器がより細かい破片になりやすい傾向であることが想定されるが、一方で、建物跡の密集度でいえば、須恵器生産停止後の古代後半～末期に遺跡の主体があることを反映しているとも考えられる。遺構で見れば、掘立柱建物跡の柱穴出土遺物は非常に少なく、1%に満たない。出土量が多い遺構は前述の両溝であり、総量の約30%が当該遺構より出土している。

次に、器種別に見ると、須恵器・土師器とも食膳具が主体を占める。須恵器では約60%を占め、食膳具内では坏Aが32%、坏B身が15%となり主体を占める（器種不明食器数を除外した数値で計算、土師器も同様）。土師器では約60%を占め、食膳具内では碗Aが16%、碗Bが14%となり主体を占める。黒色土器（内面黒色処理のみ）は、碗Bが主体を占め、食膳具のなかで6%を占める。時期別に見ると、須恵器・土師器全体では、古墳時代第4様式0.3%、古代Ⅰ期4%、古代Ⅱ期6%、古代Ⅲ期7%、古代Ⅳ期（内約8割がⅣ-2期以降）30%、古代Ⅴ期12%、古代Ⅵ期11%、古代Ⅶ期20%、中世Ⅰ-1期（出越編年古代Ⅲ-3～Ⅳ-1期）6.7%、中世Ⅱ-1・2期（出越編年古代Ⅳ-1・2期）3%となる。遺跡の主体の時期が、古代Ⅳ期・Ⅶ期にあることが分かる。中世Ⅱ-1・2期には土器の割合が落ち込むが、遺跡自体が衰退した訳ではなく、当該期以降も遺跡は存続している。このことは、中世土器様式への転換がこの時期にあったことを示唆しているようである。次に、須恵器・土師器個別の割合をみると、須恵器では古代Ⅰ期5%、古代Ⅱ期7%、古代Ⅲ期11%、古代Ⅳ期44%、古代Ⅴ期19%、古代Ⅵ期14%となる。土師器では古墳時代第4様式1%、古代Ⅰ期2%、古代Ⅱ期1%、古代Ⅲ期1%、古代Ⅳ期7%、古代Ⅴ期2%、古代Ⅵ期6%、古代Ⅶ期52%、中世Ⅰ-1期（出越編年古代Ⅲ-3～Ⅳ-1期）18%、中世Ⅱ-1・2期（出越編年古代Ⅳ-1・2期）10%となる。これを見ると、南加賀で須恵器が生産されている時代は、須恵器の使用頻度が卓越しており、生産停止した古代Ⅶ期以降に土師器が急激に卓越することがいえ、土師器の80%が当該期以降の出土である。遺跡主体時期の量比をみると、古代Ⅳ期は須恵器91%、土師器9%で、古代Ⅶ期は土師器ほぼ100%であり（須恵器貯蔵具が残存している可能性はある）、はっきりした差がでている。この量比は、一般的な集落遺跡の様相と考えている。

土器以外の特殊遺物では、瓦・施釉陶器・土製品・木製品・石製品がある。瓦は、7世紀末～8世紀前半のものが出土しており、北陸地方に類例のない文様を持つ軒丸瓦の出土が特筆される。施釉陶器は、近江系の緑釉陶器と東濃系の灰釉陶器が出土している。土製品では、土馬の出土が特筆され、他に土鈴など祭祀遺物が出土している。木製品では、井戸内から出土した8世紀中頃の曲物や櫛が特筆される。石製品では、権状錘の出土が特筆される。土器においても、仏器的土器や転用硯、若干の墨書土器などの特殊遺物が出土している。ただし、上記の特殊遺物は、その時点における集落内での有力者の存在ないし特殊性を示しているに過ぎず、遺跡自体を格上にランク付ける評価はできないと考える。調査面積11,000㎡における施釉陶器の出土量が、格上にランクされる遺跡に比べ、非常に少な

いとこの指摘（出越氏教示）もある。

なお、基本的な器種の分類は、使用した編年における分類を準用している（第3章参照）。ただし、須恵器貯蔵具に関しては、望月氏の表記（望月精司1999年「越前・南加賀地域の古代貯蔵具」『北陸古代土器研究第8号』）を主として使用しており、該当器種が存在しない場合に北野氏の分類（北野博司1999年「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究第8号』）を援用している。土師器については、口径10cm・器高2.5cmを境として、それより小さい法量のものを小皿Ⅰ、それより大きい法量であるが椀Aより小さく、小型化したものを小皿Ⅱと呼称し分類した。黒色及び赤彩処理されたものは、器種名の前に付記し、柱状高台が付くものは、器種名の後に（柱高）と付記することで示し、これらの組み合わせで器種名全体を構成している。

## 第2項 須恵器

### 1. 掘立柱建物跡柱穴出土須恵器

#### 69号掘立（第145図1・2）

坏B2点を図化した。大（2）・中（1）がある。2は完存率が1/2以上ある。時期は、Ⅳ-2新～Ⅴ-1期頃と考えられる。

#### 82号掘立（第145図3）

坏B蓋であり、外面のケズリ調整幅が広範囲で、見込みの深い形態が想定される。Ⅱ期頃と考える。

#### 87号掘立（第145図4）

坏Aであり、Ⅳ-2古期頃と考えられる。

#### 96号掘立（第145図5）

坏Aではあるが、類例のない形態のものである。作りは雑で、底部はヘラ切り離しのままである。完形品が出土しており、柱穴抜き取り穴への埋納と考えられる。時期は、Ⅳ-2期～Ⅴ-1期頃と予想される。

#### 101号掘立（第145図6～8）

坏A（6）・盤A（7）・高坏（8）がある。時期は、Ⅴ期頃と考えられる。

### 2. 井戸出土須恵器

#### 1号井戸（第145図9・10）

坏A（9）と盤B（10）がある。9は1/2個体であり、底面に墨書されている。「千」か「十」の文字が考えられる。時期は、Ⅳ-1～Ⅳ-2古期頃と考えられる。

### 3. 土坑出土須恵器

#### 19号土坑（第145図11）

坏Aと考えられ、Ⅴ-1期頃と考えられる。

#### 38号土坑（第145図12）

瓶Dの底部と考えられ、Ⅵ-2期頃以降と考えられる。

#### 56号土坑（第145図13）

高台付の瓶類の底部と考えられる。時期不祥。

#### 91号土坑（第145図14）

坏Bであり、Ⅳ-2古期頃と考えられる。

#### 92号土坑（第145図15）

坏Aの底部である。時期不祥。

#### 137号・158号・159号土坑（第145図16～第146図38）

出土須恵器の内訳は、食膳具80%、貯蔵具20%である。食膳具内では坏A（17%）と坏B（19%）で全体の36%を占めている。16・27・28は坏B蓋であり、16がⅡ-2期頃、27がⅡ-3期頃、28が

Ⅱ-3～Ⅲ期頃と考えられる。17は、椀Bの底部と考えられ、Ⅵ期頃が想定される。18は坏H蓋、19・26は坏G蓋であり、時期は18がⅠ-1期頃、19・26がⅡ-1期頃と考えられる。20～22・29は、坏B身であり、20・29がⅡ-3期頃、21～24がⅢ期頃と考えられる。24は高坏の身部で、Ⅱ期頃が考えられる。25は、体部中位に稜が入るため、稜椀と考えられるが、時期不祥。30～34は坏Aである。30・31はⅣ-2古期頃、他もⅣ-2期頃の範疇に収まると考えられる。35は椀であり、Ⅵ期以降が想定される。36・37は瓶類の底部と考えられるが、時期不祥。38は瓶Aで、頸部と体部上位に2条の凹線が巡る比較的丁寧な作りのものである。Ⅲ期頃と考えられる。

#### 176号土坑（第146図39～41）

39は坏B蓋で、Ⅳ-2古期頃が考えられる。40は坏Aで、130号溝と接合関係にある。41は壺・瓶類の底部破片である。40・41は時期不祥。

#### 214号土坑（第146図42）

壺B類の肩部と考えられ、8189号ピットと接合関係にある。Ⅳ-2期頃に収まると考えられるが、詳細不明。

#### 215号土坑（第146図43～45）

43は坏Aの底部、Ⅵ期頃が考えられる。44は盤Aで、Ⅵ-3期頃が考えられる。45は椀Aの底部で、糸切り底であり、酸化焼成となってしまうている。時期は、Ⅵ-3期以降と想定される。46は中甕の体部破片であるが、時期不祥。

### 4. 溝出土須恵器

#### 10号溝（第146図47）

坏B蓋の鈕である。Ⅳ-2期頃が想定される。

#### 13号溝（第146図48～第147図69）

出土須恵器の内訳は、食膳具72%、貯蔵具28%である。食膳具内では坏A（23%）と坏B（34%）で全体の57%を占めている。

48は坏H蓋と考えられ、Ⅰ-1期頃であろうか。49～51は坏B蓋であり、49・50がⅢ期頃、51がⅣ期頃と考えられる。52～55は坏Bであり、52がⅢ期頃、53がⅣ-1期頃、54がⅣ-2古期頃、55がⅣ-2期頃と考えられる。56～61は坏Aであり、57は墨書土器である。墨書は「十」字状であるが、底面周縁部まで線を引いていることから、底面を4等分する界線の意味が考えられる。また、底面には「×」印のヘラ記号も刻まれている。時期は57がⅣ-2期頃、58がⅤ-1期頃、59がⅥ-2・3期頃と考えられる。62・63は盤Bであり、Ⅳ-2期頃と考えられる。64・65は盤Aで、64がⅣ-2古期頃、65がⅣ-2新时期以降と考えられる。66は体部中位に稜が入るため、稜椀と考えられ、Ⅲ期頃が想定される。67は壺AかBの底部で、68は横瓶の口縁部、69は中甕の頸部である。時期は、68がⅣ-2期頃と判断される。

#### 1号大落ち込み（第147図70～72）

70は坏B蓋であり、Ⅳ-1期頃が考えられる。71・72は坏B身であり、71は13号溝出土破片と接合関係にある。時期は、71がⅤ-1期頃、72がⅣ-2～Ⅴ-1期頃と考えられる。

#### 17号溝（第146図73～第148図87）

73・78～80は坏Aである。時期は、73がⅢ期頃、78がⅤ-1期頃と考えられる。79・80に関しては、体部の立ち上がりの角度から、79がⅣ-1～2古期、80がⅤ期頃と想定される。74は大型の坏B蓋であり、Ⅲ期頃と考えられる。75～77は坏B身であり、75は厚くしっかりした高台を持つことと法量から、Ⅳ-1期頃が想定される。76・77は、Ⅳ-2新时期～Ⅴ-1期頃が考えられる。81・82は盤Aであり、81はⅣ-2新时期と考えられ、82は体部が開く器形が想定できることから、Ⅴ期以降と推察される。83は皿Bであり、見込み部が墨溜めに転用されている。時期は、Ⅵ期以降と判断される。84は瓶Aの底部と考えられる。85は取っ手の痕跡が確認できるため、注口瓶と考えられる。体部中位を欠くが、底部破片とは同一個体と判断される。体部上半には、沈線が5条施されている。底部と体部との境に段があり、体部下位外面にヨコケズリ調整が施されている。86は壺Fであり、体部外面と体部内面下



位にカキメ調整が施されている。1号大落ち込み及び38号溝と接合関係にある。87は狭口化した壺Fの頸部と考えられる。時期は、84がⅣ期頃、85がⅥ-2期頃、86は寸胴な器形からⅤ期頃、87が狭口化以降なのでⅥ-3期頃と考えられる。

#### 99号溝 (第148図88~93)

88は坏B蓋である。端部折り曲げの形態から、Ⅴ-2期以降が考えられる。89・90は坏Aであり、89はⅣ-2古期頃、90はⅥ-2・3期頃と考えられる。91は盤Bであり、Ⅳ-2新期~Ⅴ-1期頃と考えられる。92は瓶B口頸部、93は壺A底部と考えられる。92はⅥ-2期頃、93はⅢ~Ⅴ-1期頃が想定される。

#### 30号溝 (第148図94)

坏A底部で、体部が開いて立ち上がる器形と考えられるが、時期不詳である。

#### 27号・65号溝 (第148図95)

鉢Bであり、体部外面にカキメ調整が施される。時期は、Ⅴ-2期~Ⅵ-1頃と考えられる。

#### 31号溝 (第148図96)

瓶A体部下位~底部と考えられる。13号溝と接合関係にある。時期は、Ⅲ~Ⅳ期頃が想定される。

#### 32号溝 (第149図97・98)

97は坏B蓋であり、Ⅱ-2期頃と考えられる。98は盤Aであり、体部が開いて立ち上がる器形が想定される。

#### 38号溝 (第149図99~154図170)

出土須恵器の内訳は、食膳具64%、貯蔵具36%で、他の遺構より貯蔵具の割合がやや多い。食膳具内では坏A(40%)と坏B蓋(17%、坏B身は10%のため、多い方を採用)で全体の57%(坏A・B判別不能破片を加えると64%)を占めている。坏Aの比率が高い点は異なるが、坏A・B類で5割以上を占め、主体的である点は13号溝と共通している。時期別出土傾向については、第3章を参照して頂きたいが、須恵器のみの比率を見てもⅣ-2期の出土量が多く、約47%を占める。

99は、仏器と考えられている特殊器形の蓋である。天井部を広範囲にケズリ調整した後、突帯を貼り付けている。時期は、Ⅳ-2期頃が想定されるが、詳細は不明である。100~111は坏B蓋である。時期は、100がⅡ-3~Ⅲ期頃、101~103がⅢ期頃、104・105がⅣ-1期~Ⅳ-2古期頃、106~109がⅣ-2古期頃、110がⅣ-2期頃、111がⅤ-1期頃と考えられる。112~116は坏Bである。114は底部にヘラ記号「×」が記されている。115・116は大型器形のものである。時期は、112がⅡ-3頃、114がⅢ期?頃、113がⅣ-2期頃、115がⅣ-2新期~Ⅴ-1期頃、116はⅤ期頃と考えられる。117~129は坏Aであり、130は坏AかB不明のものである。124は墨書土器である。文字は底部中央に小さく書かれているが、「可」や「部」のくずし字形態や、記号文などが想定されるが、判読はできなかった。時期は、117がⅣ-1期頃、118がⅣ-1期~2古期頃、119~121がⅣ-2古期頃、122がⅣ-2期頃、123~127がⅣ-2新期頃、128がⅣ-2新期~Ⅴ-1期頃、129がⅤ-1期頃と考えられる。131・132は盤Bである。両者とも口径20cm代のものであり、時期はⅣ-2新期~Ⅴ-1期頃と考えられる。133~139は盤Aであり、140は盤AかBか判断できないものである。139は内面に墨痕及び墨磨り痕が認められ、転用硯として使用されたものである。時期は、133がⅣ-2古期頃、134がⅣ-2期、135~137がⅣ-2新期~Ⅴ-1期頃、138がⅤ-1期頃、139がⅤ-1~2期頃と考えられる。141~143は碗Bである。底部付近の破片のみであるが、Ⅵ-2~3期頃のものとして推察される。144は高坏の脚で、145・146は高盤である。144はⅡ期頃に収まるものであろう。146は口縁端部が蓋のように屈曲する形態であり、脚部内側には絞り痕が観察される。時期はⅢ期頃と考えられる。147~170は貯蔵具類である。147は壺Dであるが、肩部より下の体部中位を欠く。体部外面にはカキメ調整が施されており、焼台片が融着している。底部中央が突出しているため、安定感のない器形となっている。148は壺Eで、149・150は壺Fの口縁部である。151・152は底部破片で、151は壺Aか瓶A、152は壺Aと考えられる。時期は、147がⅢ~Ⅳ期頃、149・150がⅣ-2期頃、148がⅤ期頃、151がⅢ~Ⅴ期頃、152がⅥ-1期頃と考えられる。153・154は長頸瓶である。153の

体部は球形状を呈し、体部中位に2条単位の沈線が上下二段に渡って施されており、体部下位にはヘラケズリ調整が行われている。また、130号溝と接合関係にある。154はスカシの入った台を持つものであるが、口頸部は発見できなかった。体部屈曲部の上位側に、板状工具による刻文が帯状に施されている。台は、焼台転用された「かえり」のある坏蓋が融着した状態であった。155・156は瓶A、158は小型瓶、159は水瓶？口頸部と考えられるものである。時期は、153は古手の瓶類形態でありⅠ-1期頃、154は焼台転用された蓋の年代からⅡ-1期頃、155・156はⅣ-1期頃、157はⅢ-Ⅳ-1期頃、158がⅣ-2期頃と考えられる。159は横瓶であり、円盤閉塞技法により成形されている。時期はⅣ期頃と考えられる。160~162は大甕である。160は、2条単位の沈線の上位位置に、板状工具による刻文が帯状に施されている。161は、2条単位の沈線間に、櫛状工具により波状文を施している。162は体部破片であるが、99号溝及び130号溝と接合関係にある。163~167は中甕である。163は、237点の破片からほぼ一個体に復元されたものである。167は小甕であるが、口縁端部及び体部中位破片を欠く。非常に焼締まりが悪く、灰白色を呈する。時期は、160がⅠ期頃、161がⅡ期頃、163がⅠ-2期頃、164がⅢ~Ⅳ期頃、166がⅣ-2期頃、168がⅣ期頃と考えられる。167は須恵質の甌である。内外面にカキメ調整が密に施される。170は鉢Aの把手と考えられる。

### 53号溝 (第154図171)

坏類の破片であるが、時期不祥である。

### 130号溝 (第155図~第161図)

出土須恵器の内訳は、食膳具75%、貯蔵具25%である。食膳具内では坏A (33%)と坏B蓋 (14%、坏B身は13%のため、多い方を採用)で全体の47% (坏A・B判別不能破片を加えると59%)を占めている。坏B類より坏Aの比率が高い点は、38号溝の様相と共通する。盤Aの比率は他の遺構に比べ高く食膳具内で11% (13号溝6%、38号溝8%)を占める。貯蔵具内では、壺・瓶類37%、甕類59%の割合である。時期別出土傾向については、第3章を参照して頂きたいが、須恵器のみの比率を見てもⅣ-2期の出土量が多く、約43%を占める。

172は坏H蓋であり、TK47~MT15型式 (6世紀初頭頃)と考えられる資料である。胎土から陶邑産と判断でき、搬入品である。173~186は坏B蓋である。175は内面にヘラ記号「×」が記されている。時期は、173・174がⅡ-3期頃、175・176がⅢ期頃、177がⅣ-1期頃、178~180がⅣ-1~2古期頃、181・182がⅣ-2古期頃、183・185がⅣ-2期頃、184がⅣ-2新时期頃、186がⅣ-2新时期~Ⅴ-1期頃と考えられる。187~200は坏Bである。192は底面にヘラ記号「|」が記されている。195は墨書土器である。文字は底部中央より高台寄りに書かれている。文字は「浄」ないし「□浄」等が想定されるが、墨の残りが悪く非常に薄いため、文字の過不足が生じている可能性がある。時期は、187がⅢ期頃、188がⅣ-1期頃、189がⅣ-1~2古期頃、190~194がⅣ-2古期頃、195がⅣ-2期頃、196~198がⅣ-2新时期頃、199がⅤ-1期頃と考えられる。200については、時期判定は困難だが、Ⅳ期~Ⅴ-1期に収まると推察される。201~235は坏Aである。220・230・233は墨書土器である。220は、文字は底部中央に書かれており、「襠」と判読できる。県内に出土例はない文字であり、「トウ・うちかけ」と読める。この文字からは、「襠襠」の省略形と解釈することもできる。襠襠とは古代の武官が朝廷の儀式のときに着用した衣服であり、令の「衣服令」に規定があり、豪華な織物や、刺繍を施したものが作られたと考えられている。出土遺構や遺物の内容からは、そのような武官が存在したとは考えにくい。当地域が生糸や絹織物の産地としての伝統を持つことを考慮すれば、襠襠製作及びその素材を収めたといったレベルでの関係性を考えるべきであろう。その一方で、舞楽装束としての襠襠の意味も存在する。この意味では、舞楽人の存在や、同様に装束製作との関係が想定できる。ただし、「襠」が「襠襠」だと決まった訳ではなく、墨書土器1点で言い切れることではない。一つの可能性を提示したものであり、他の解釈があれば御教示願いたい。230は、文字は底部中央に書かれているが、半分が欠けている。よって、文字は判読できないが、部首として「羊」が上位に位置する文字ではないかと考えられる。233は、文字は底部中央よりやや端に寄った位置及び体部外面に書かれている。文字は記号文と思われ、「C」字状を呈しているが、意

味は不明である。229は内面に墨痕及び墨磨り痕が認められ、転用硯として使用されたものである。221は底部にヘラ記号「|」が記されている。時期は、201がⅢ期頃、202がⅣ-1～2古期頃、203～211がⅣ-2古期頃、212・215がⅣ-2期頃、213・214・216がⅣ-2新时期頃、217・218がⅣ-2新时期～Ⅴ-1期頃、219～222・224～228がⅤ-1期頃、231～235がⅤ-2期頃、223・229がⅤ期頃と考えられる。坏Aに関しては、Ⅴ-1期頃の資料が多い。236～239は盤Bである。236は底部にヘラ記号「|」が記されている。時期は、236がⅣ-1～2古期頃、237がⅣ-2期頃、238がⅣ-2新时期～Ⅴ-1期頃、239がⅤ-1期頃と考えられる。240～268は盤Aであり、269は盤AかBか判断できないものである。244・259は墨書土器である。244は、文字は底部中央よりやや端に寄った位置及び端部付近に書かれている。文字は、前者が「十」、後者が「|」か「一」と判読できる。259は、墨書が体部外面に記されているが、底面については1/3が欠けているため、文字の存在は不明である。文字は「S」字状を呈するが、詳細は不明である。時期は、240～249がⅣ-2古期頃、250～258がⅣ-2新时期頃、259がⅣ-2新时期～Ⅴ-1期頃、260～266がⅤ-1期頃、267がⅤ-2期頃、268がⅤ期頃と考えられる。270は椀A、271～273は椀B、274・275は皿Bである。274は見込み面に墨痕及び墨磨り痕が認められ、転用硯として使用されたものである。時期は、274がⅥ-1～2期頃、270がⅥ-2期頃、271・275がⅥ-3期頃、272・273がⅥ-3期頃以降と考えられる。276は高坏の脚部と考えられ、接点が存在しないため上位と下位の2点をそのまま図化した。形態からⅠ期頃のものと推察されるが、詳細は不明である。277～308は貯蔵具類である。227は短頸壺の蓋である。278・279・283は壺B、280は壺AかB、281・282・286は壺F、284・285は壺Eと考えられる。287・288は小型壺である。288は体部下位のみケズリ調整が施される。時期は、277・283がⅢ期頃、278がⅣ期頃、284がⅣ～Ⅴ期頃、285がⅤ期頃と考えられる。底部破片については、279・280がⅢ～Ⅳ期頃までの製品と推察される以外は不明である。小型壺は、288がⅡ期頃、287はⅢ～Ⅳ期ころが考えられる。289・290は瓶A、291は瓶Bの底部と考えられる。292は小瓶E（徳利型）、293は瓶C、294～299は瓶Dと考えられる。293は胎土から末窯産と判断される。294は体部下位のみヘラケズリ調整が施される。時期は、289・290がⅢ期頃、293がⅣ期頃、292がⅥ-1～2期頃、291がⅥ期頃と考えられる。瓶Dは底部破片のみであり詳細は不明だが、294がⅤ期の可能性がある以外は、Ⅵ期の製品と推察される。300・301は大甕で、302～305は中甕である。302は体部上位に接点を欠くが、同一個体と判断される。口縁部中位に沈線が1条回る。時期は、302がⅡ期頃、303～305がⅢ～Ⅳ-1期頃、300・301がⅥ期頃と考えられる。306～308は鉢BⅡ類である。306は、体部下位を欠くが、復元図化を行った。体部外面中位以下にヘラケズリ調整が施されている。307・308は底部破片であるが、307は底部に近い部分のみであるのに対し、308は体部外面下半～底部中央付近の広い範囲においてヘラケズリ調整が施されている。時期は、306がⅥ-2・3期頃、307・308は底部破片であるが、Ⅵ期頃の資料と考えられる。

#### 131号溝（第161図309）

坏Aであり、Ⅴ期頃と考えられる。

#### 139号溝（第161図310）

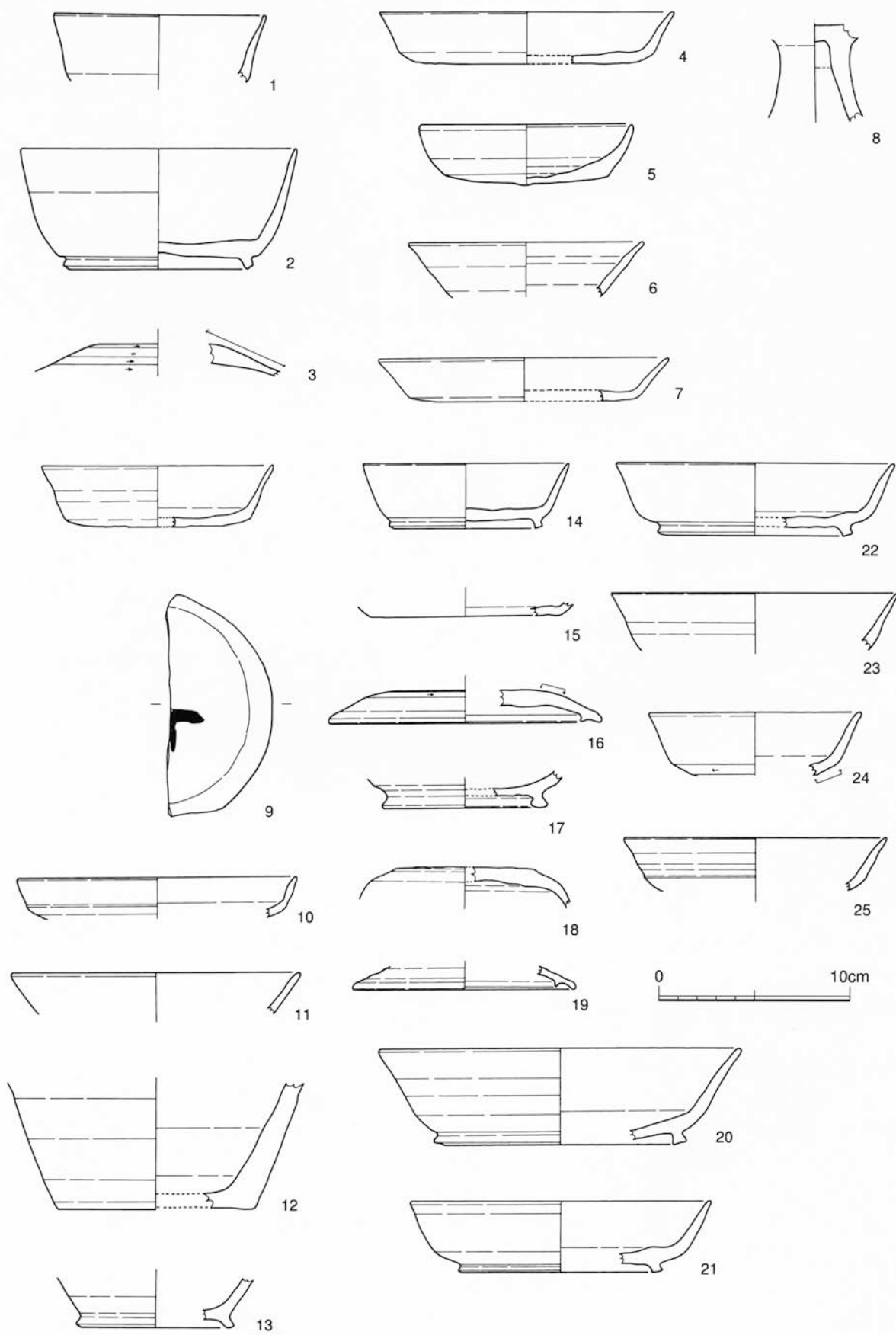
瓶Dと考えられ、沈線が体部上位に1条、肩部に2条回る。時期はⅥ期頃と想定される。

#### 152号溝（第161図311～314）

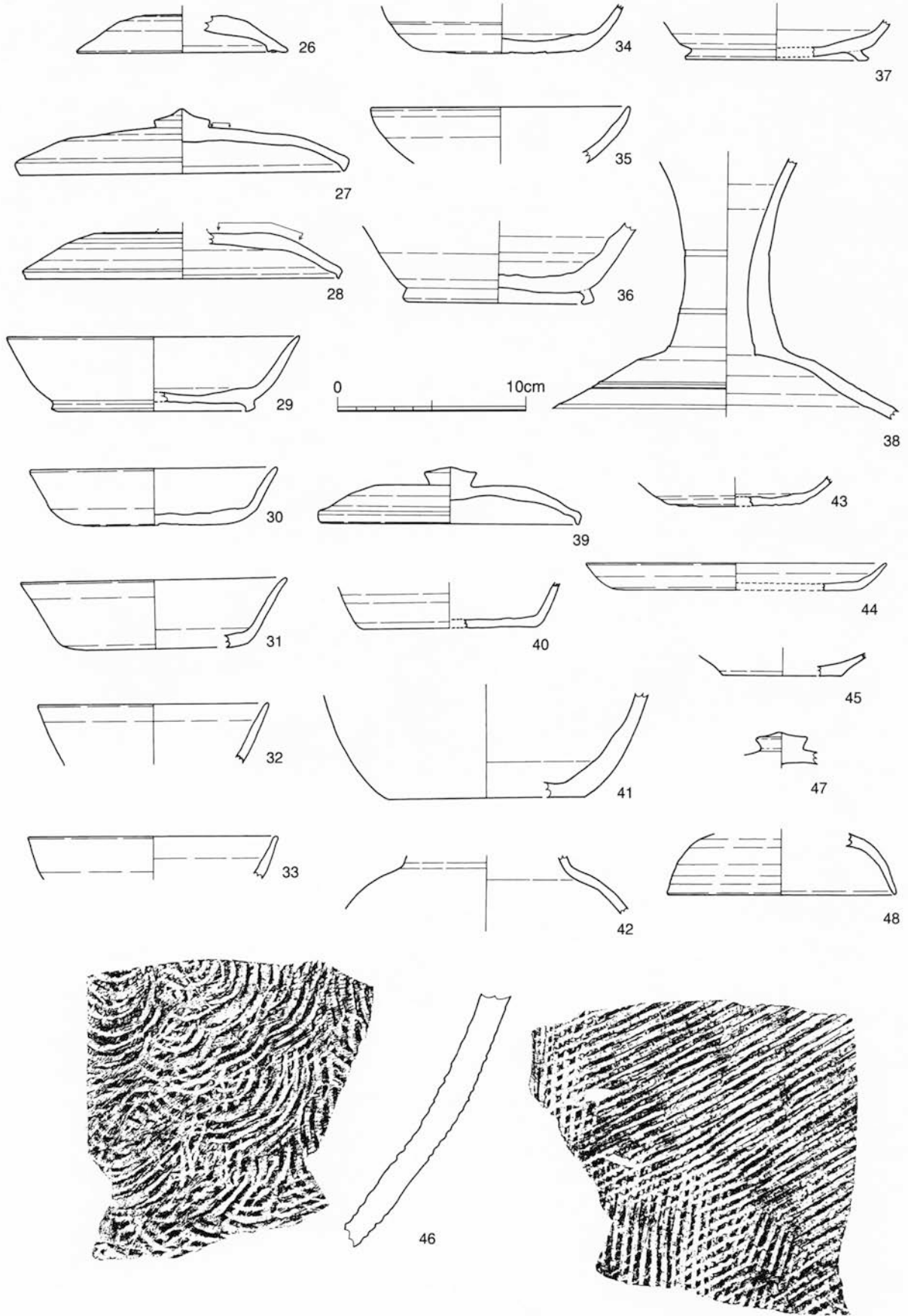
311は坏B蓋である。端部にかえりがあり、Ⅱ-1期頃と考えられる。312は坏Aである。313は、坏Dとされる無台で深い器形のものである。時期はⅥ-2期頃と考えられる。314は大甕である。2条単位の沈線間に、櫛状工具により波状文を施している。時期はⅡ期頃と考えられる。

### 5. Pit出土須恵器（第162図）

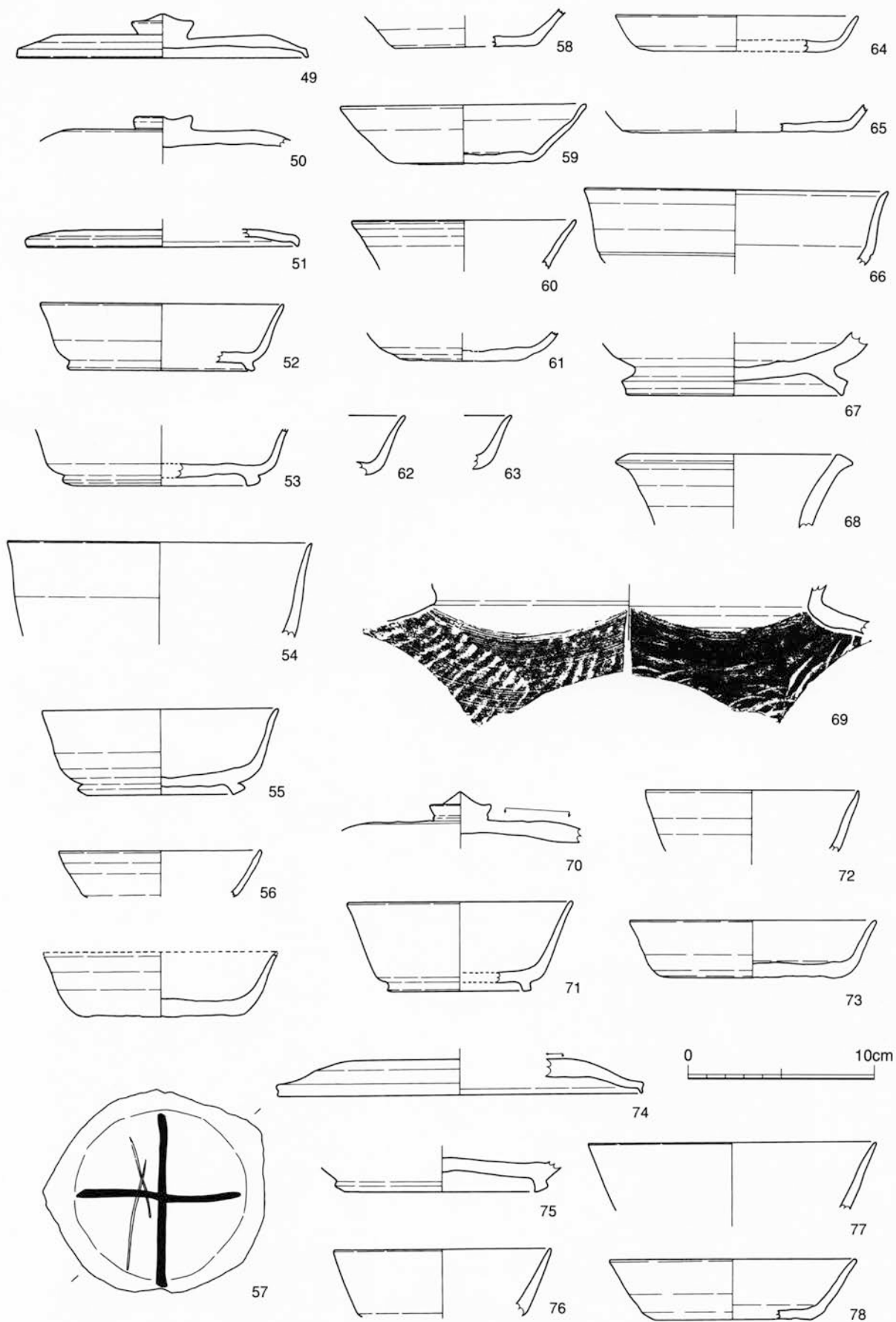
Pit出土須恵器には、坏B蓋（315）、坏B（316・317）、坏A（318～322）、盤A（323～326）、椀B（327）、高坏？（378）、壺AかB（329）がある。時期は、316がⅢ期頃、317・318がⅣ-2古期頃、315・319・320・323・324がⅣ-2期頃、321・325・326がⅤ期頃、327がⅥ-2・3期頃と考えられる。



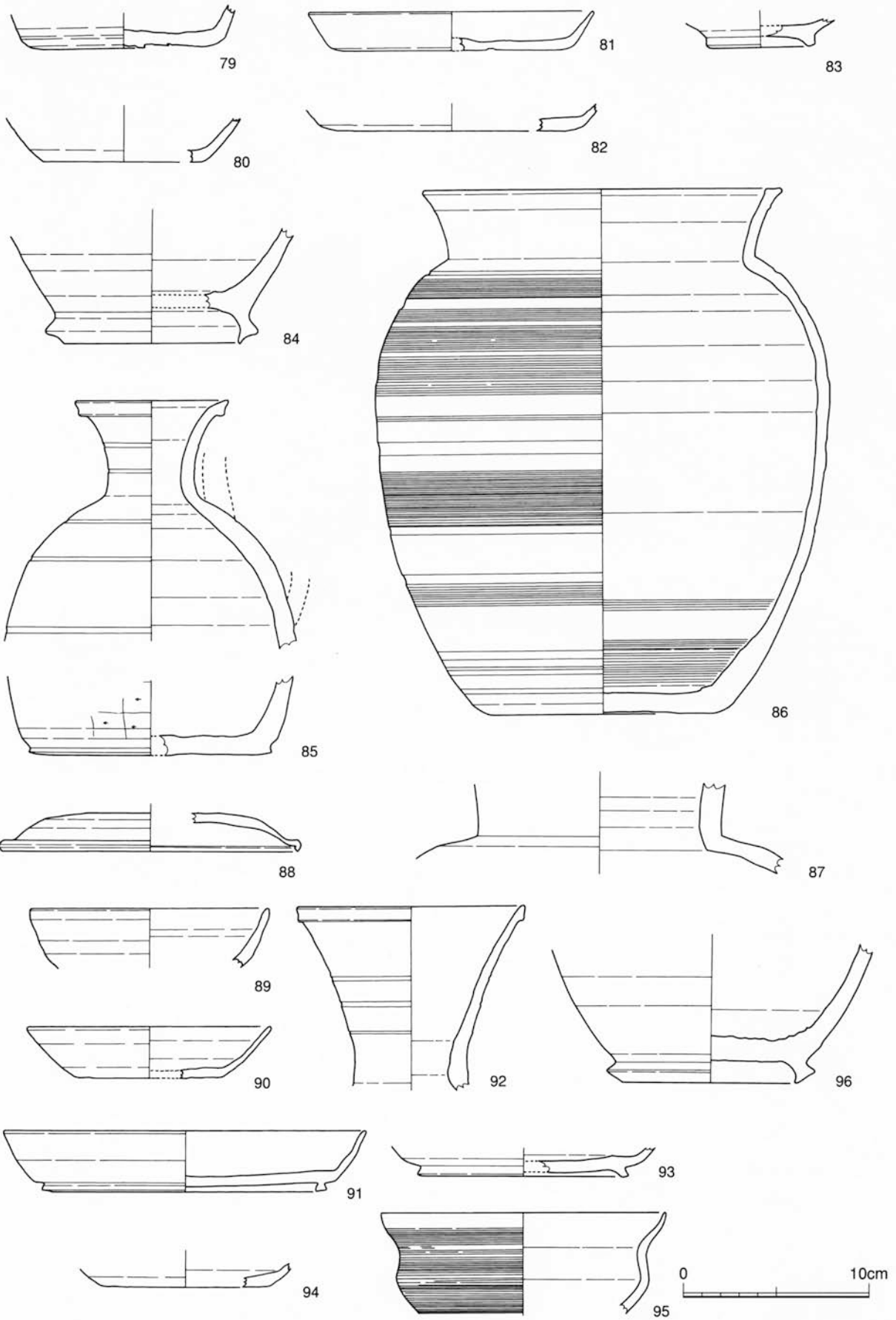
第145図 建物跡 (1~8) ・井戸 (9・10) ・土坑 (11~21) 出土須恵器 (S=1/3)



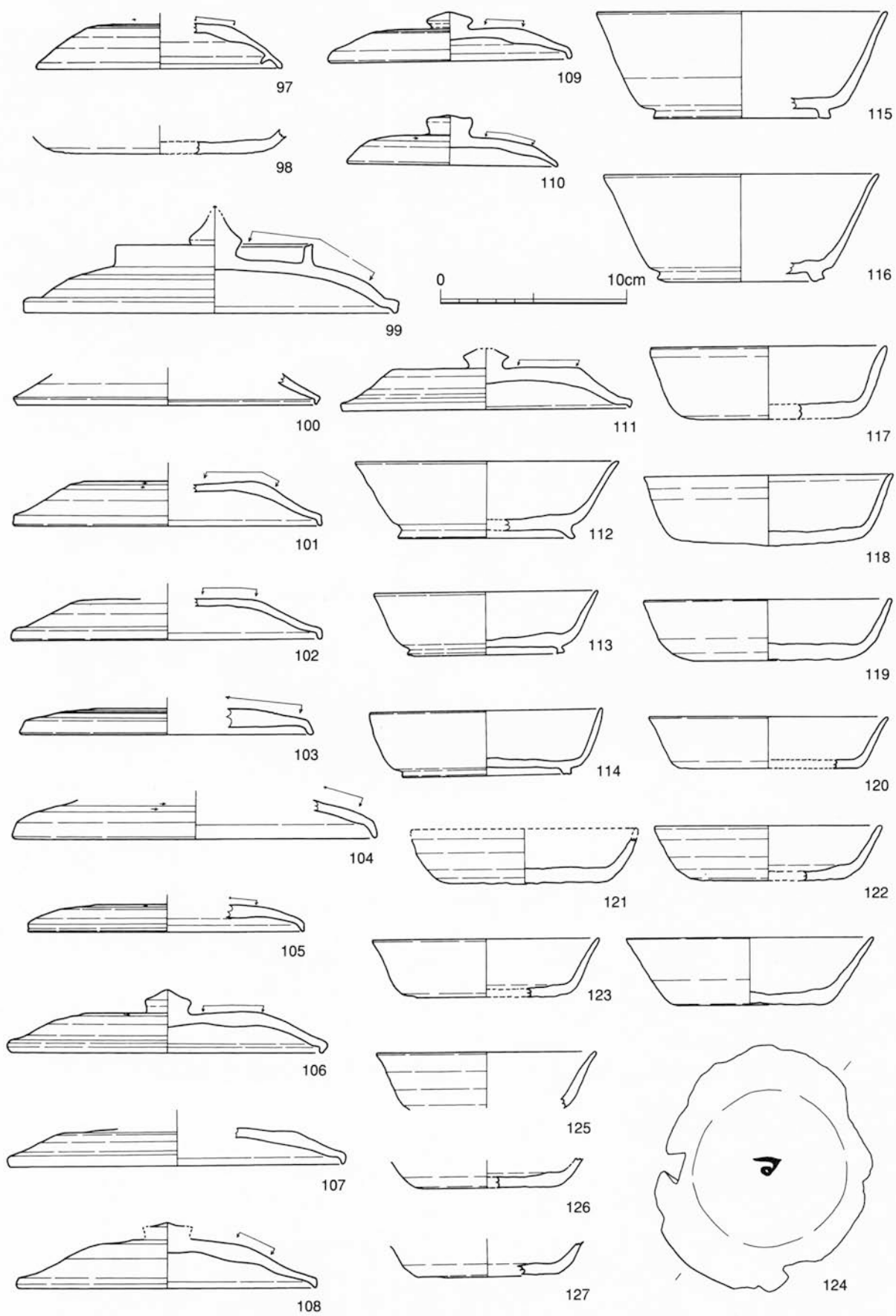
第146图 土坑出土须惠器 (S=1/3)



第147図 13号溝 (48~69)・大落ち込み (70~72)・17号溝 (73~78) 出土須恵器 (S=1/3)

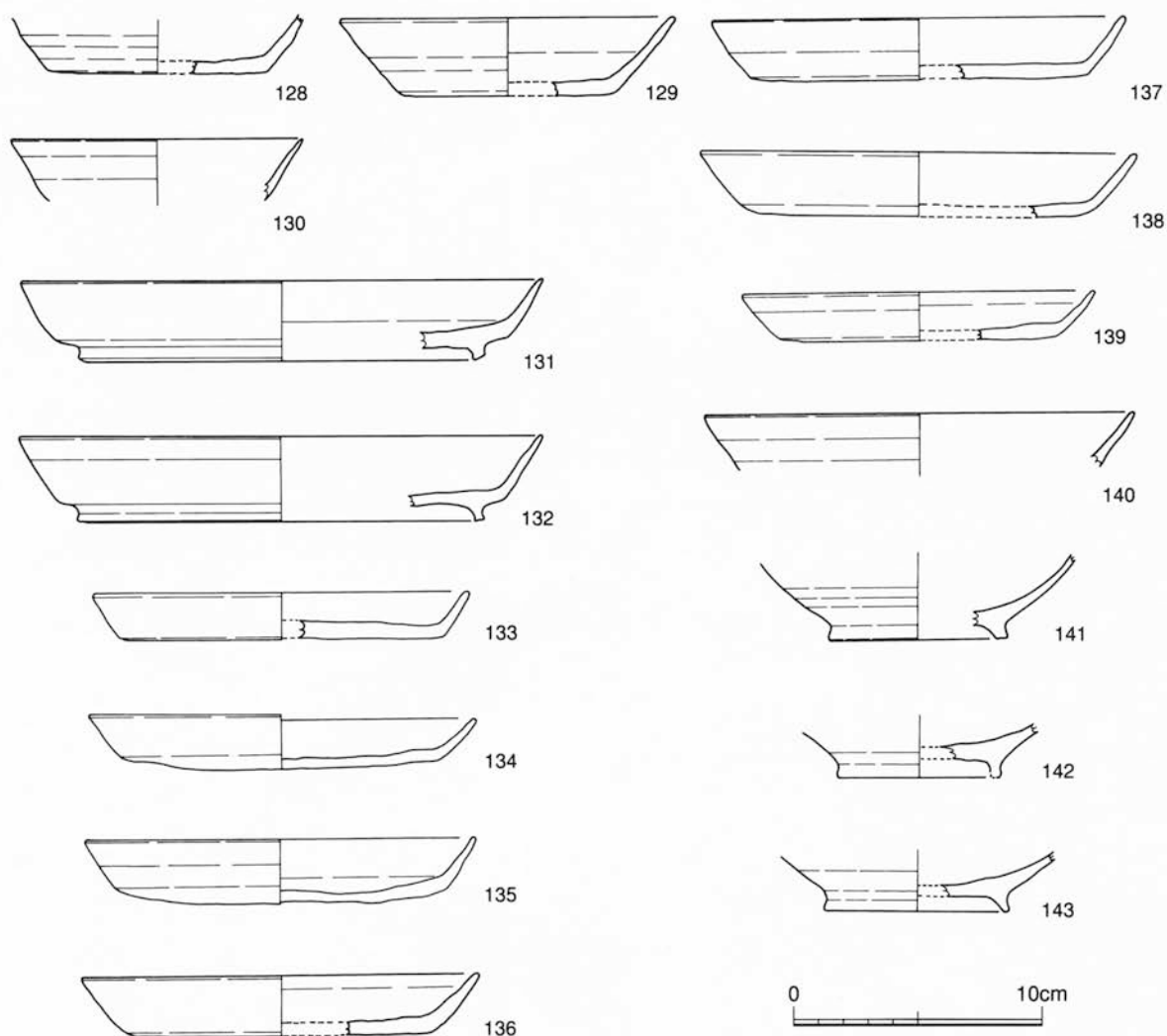


第148図 17号溝(79~87)・99号溝(88~93)・30号溝(94)・27〔65〕号溝(95)・31号溝(96) 出土須恵器(S=1/3)



第149图 32号溝 (97・98)・38号溝 (99~124) 出土須恵器 (S=1/3)

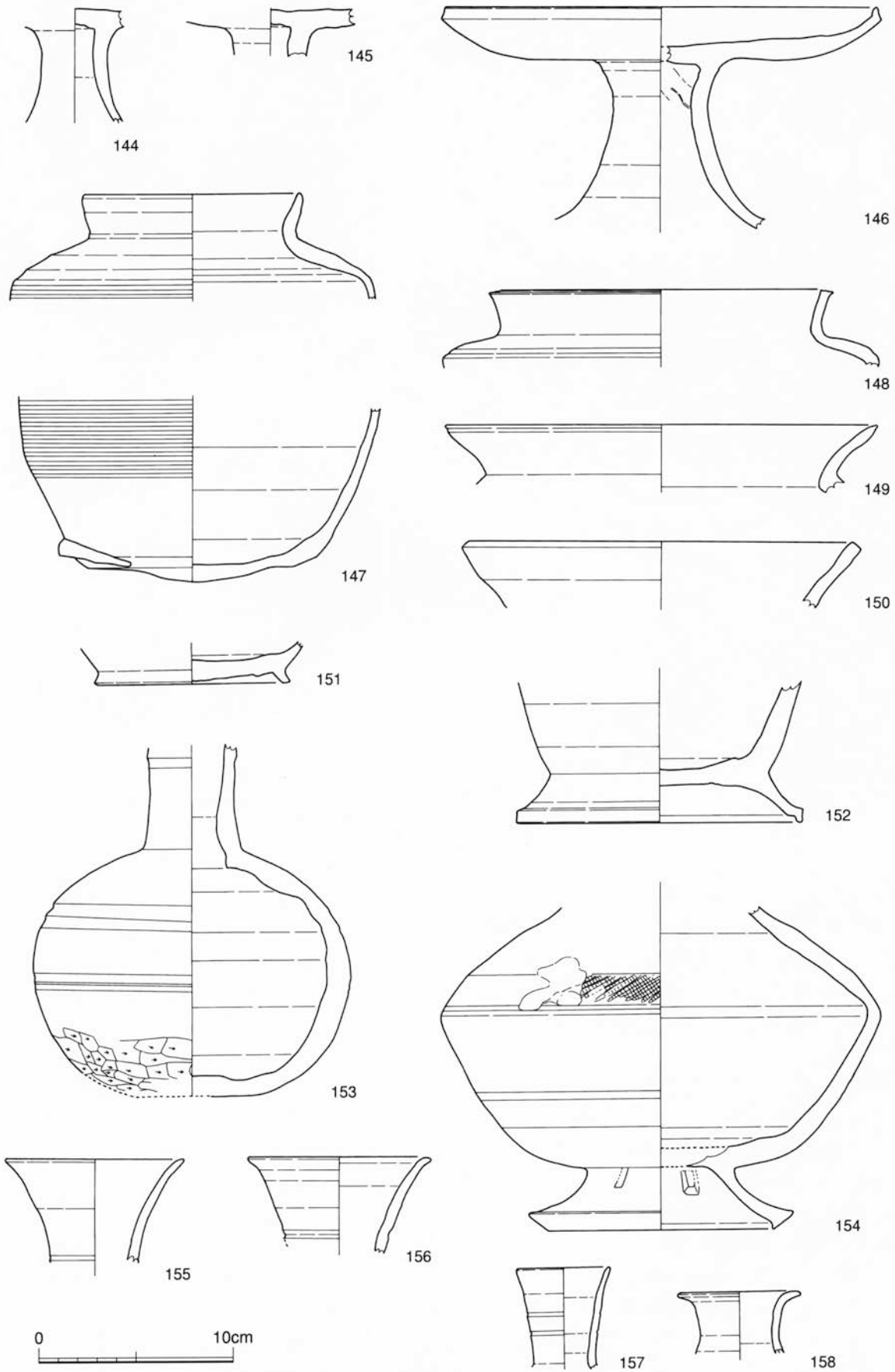




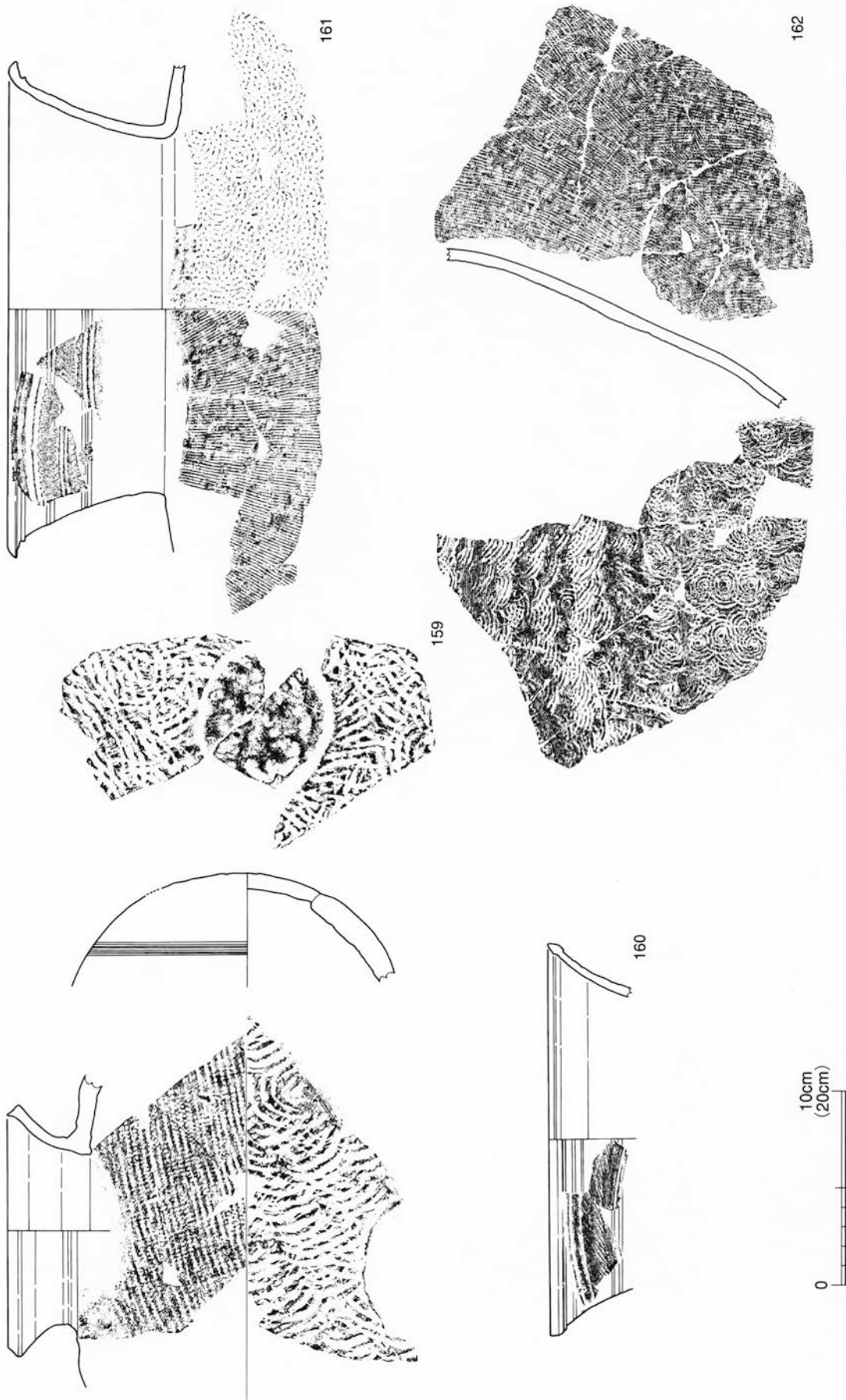
第150図 38号溝出土須恵器 (S=1/3)

## 6. 遺構外出土須恵器 (第163図～第167図463)

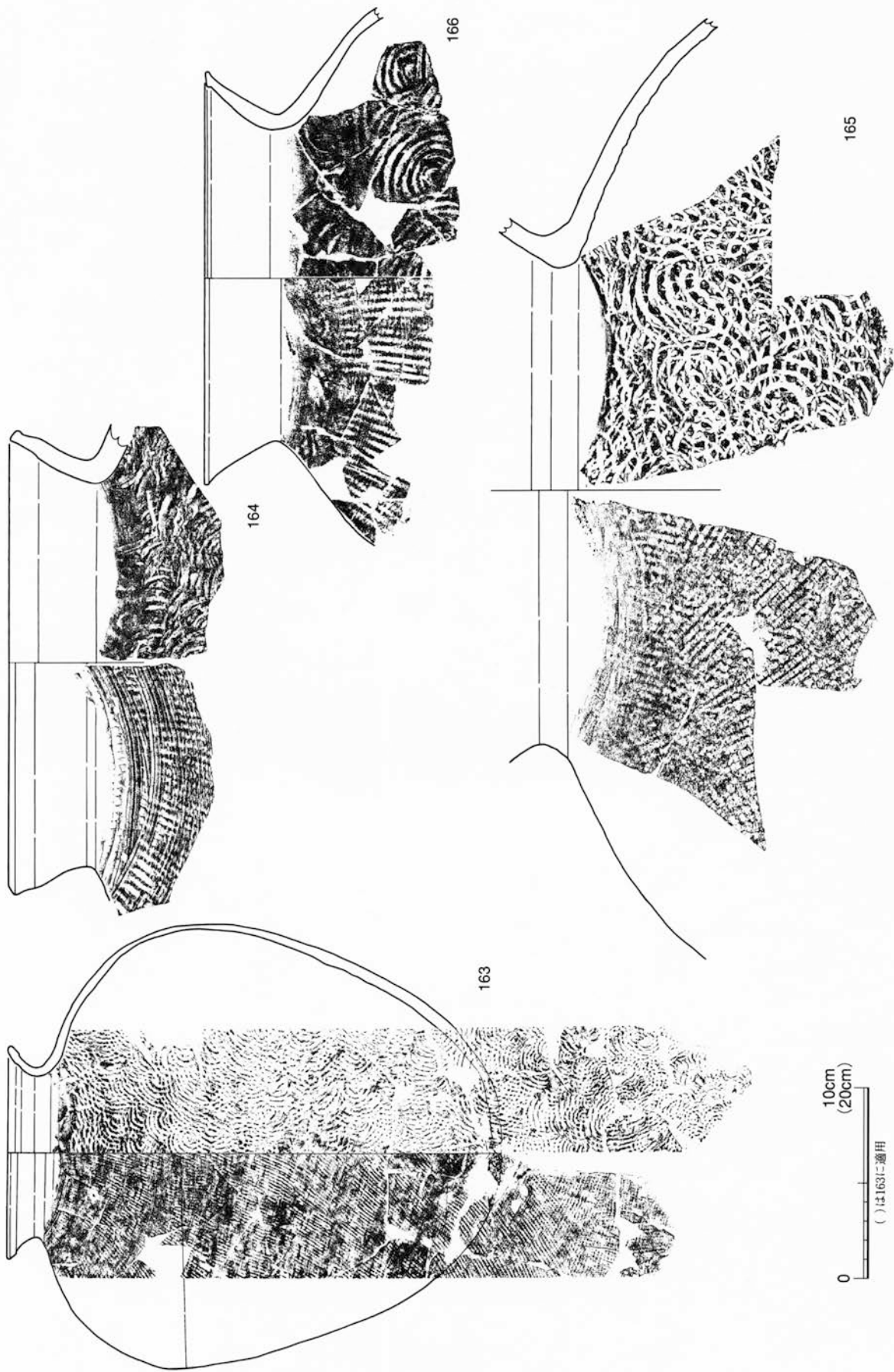
遺構外出土須恵器には、坏H蓋 (330)、坏H身 (331～335)、坏G蓋 (336・337)、坏B蓋 (338～357)、坏G (338)、坏B (359～372)、坏A (373～392)、盤A (393～406)、仏器椀? (407)、椀A (408～414)、椀B (415～420) 皿B (422～424)、ハソウ (426)、短頸壺蓋 (427・428)、壺類 (429～435)、瓶類 (436～448)、横瓶 (449～452)、甕類 (452～462)、甌 (463) がある。坏G蓋 (336) は、胎土が130号溝で出土した坏H蓋と共通しており、陶邑産と判断される。坏B (361) は、底部にヘラ記号「|」が記されている。坏Aのうち385・391・392は、墨書土器である。385・391は体部外面に、392は底部中央に墨書されている。いずれも文字全形を欠くため、判読不可能である。ただし、385・391は文字ではなく、記号文の可能性が高い。盤Aのうち394・395・406は、見込み面に墨痕及び墨磨り痕が認められ、転用硯として使用されたものである。椀B (419) は墨書土器であり、高台内側の底部に墨書されている。文字の約1/2が欠けているため断定はできないが、「和」の可能性が高い。「和」は、県内では浄水寺のみに類例がある。土器自体の時期もほぼ同時期と考えられるが、浄水寺のものとは書体が異なっている。403については、破片による復元図化を行ったものであり、評価は保留したい。ハソウ (426) は頸部下位を欠くが、同一個体と判断されるものである。口縁部外面に櫛状工具による波状文が施されており、体部外面の沈線間に板状工具による刻み文が施されている。体部下位～底部付近の外面はケズリ調整が施されているが、内面にはスジ状の調整痕



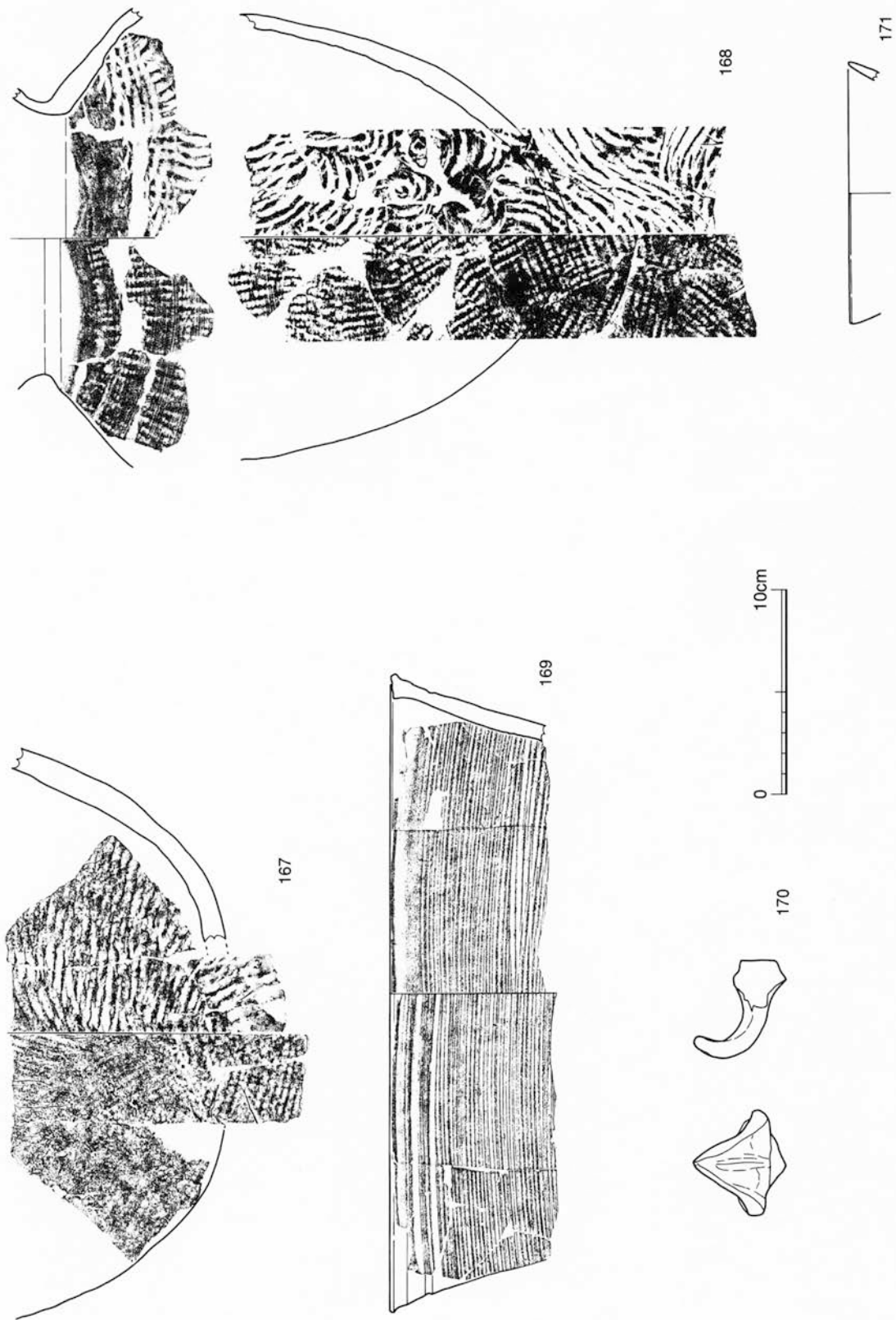
第151图 38号溝出土須恵器 (S=1/3)



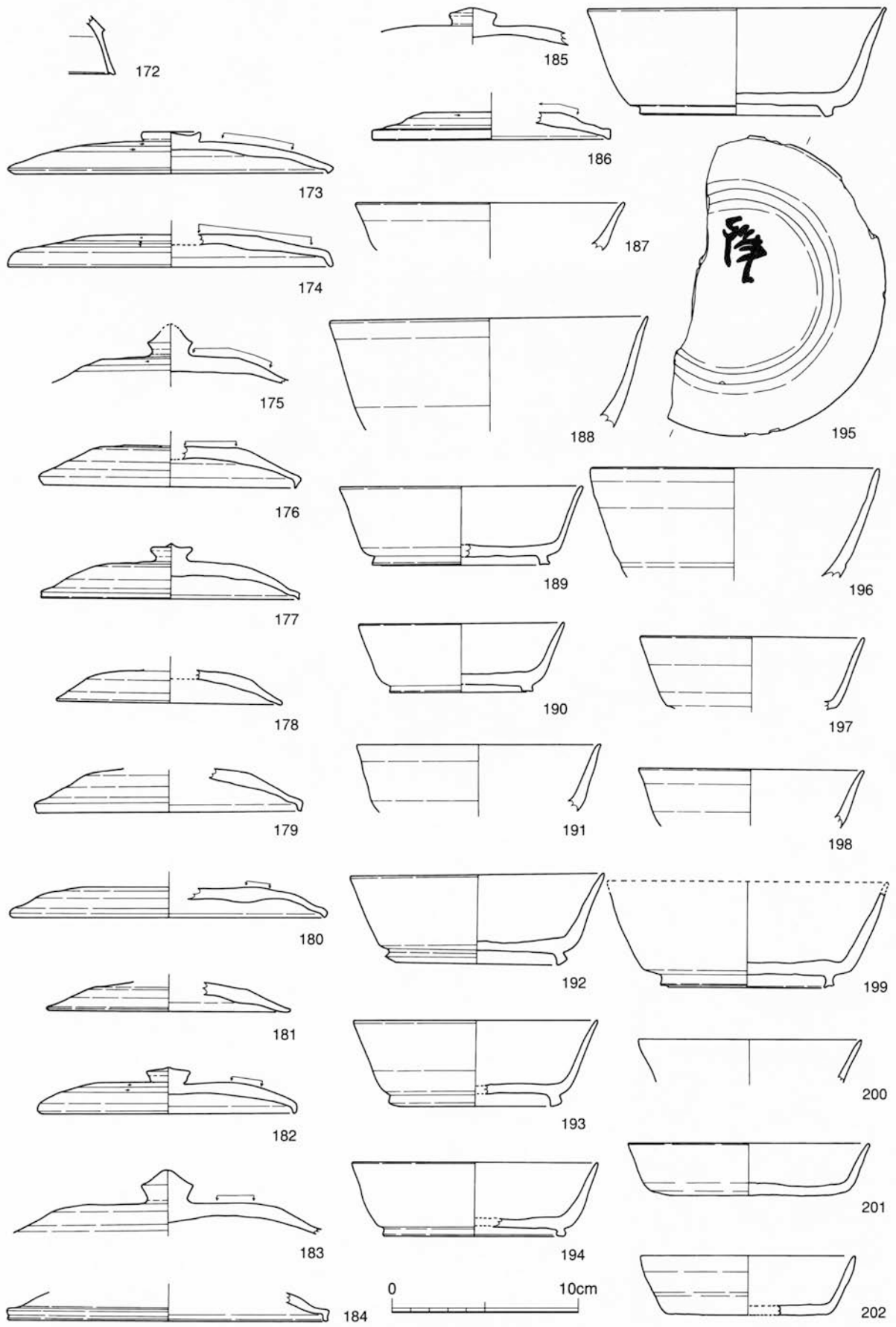
第152図 38号溝出土須恵器 (S=1/6・1/3)



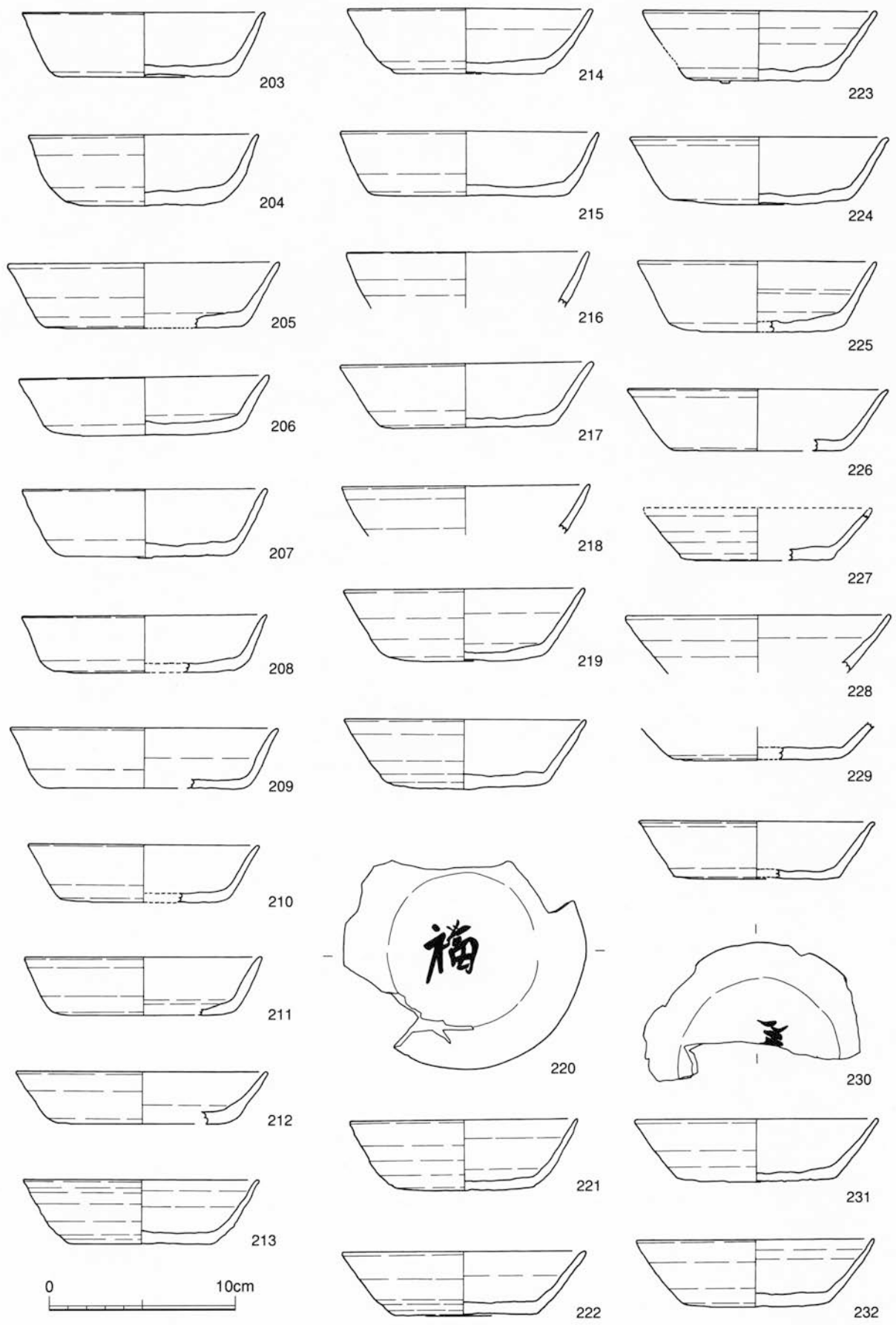
第153図 38号溝出土須恵器 (S=1/6・1/3)



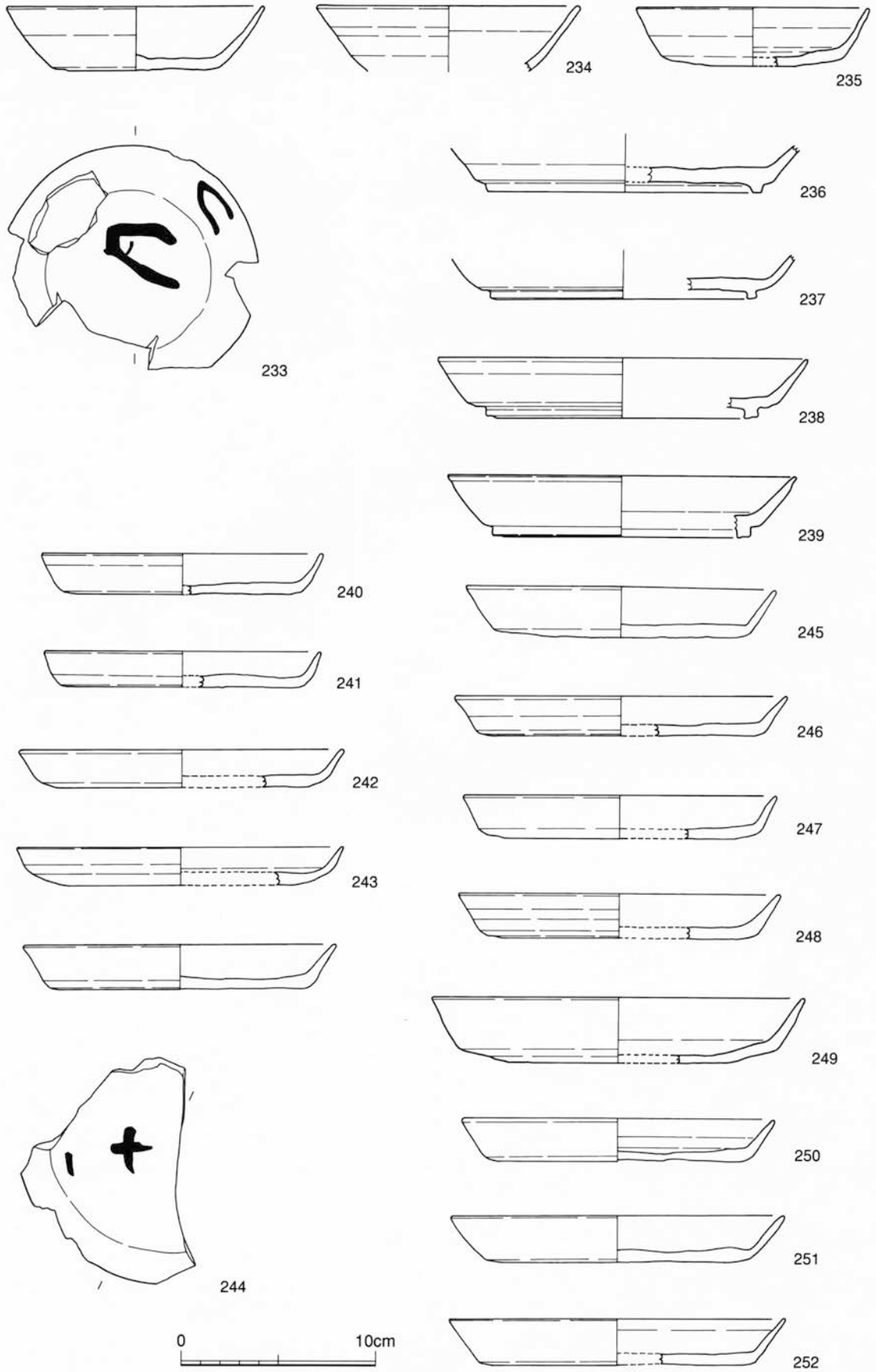
第154图 38号溝 (167~170)・53号溝 (171) 出土須惠器 (S=1/3)



第155图 130号溝出土須恵器 (S=1/3)

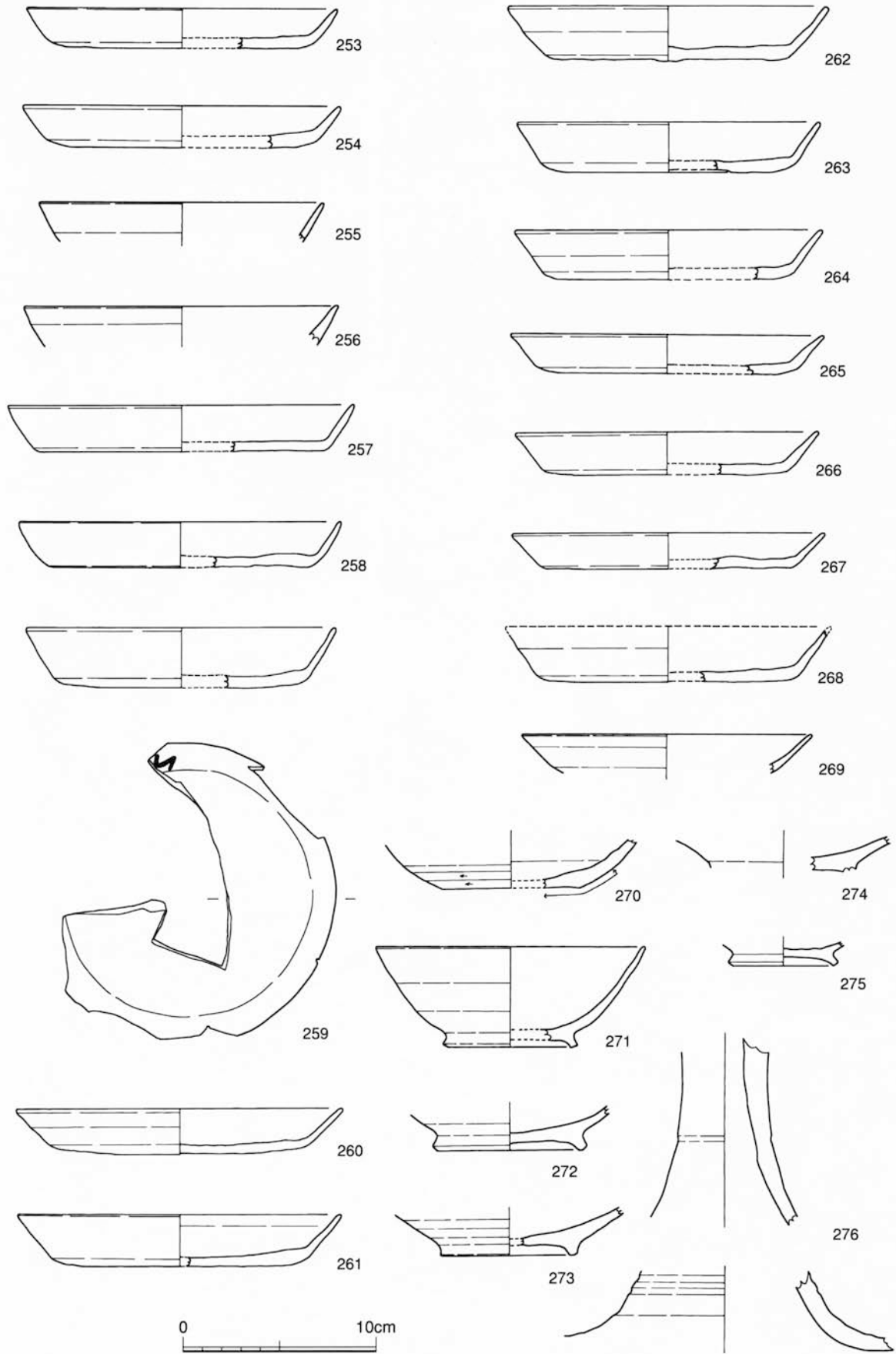


第156図 130号溝出土須恵器 (S=1/3)

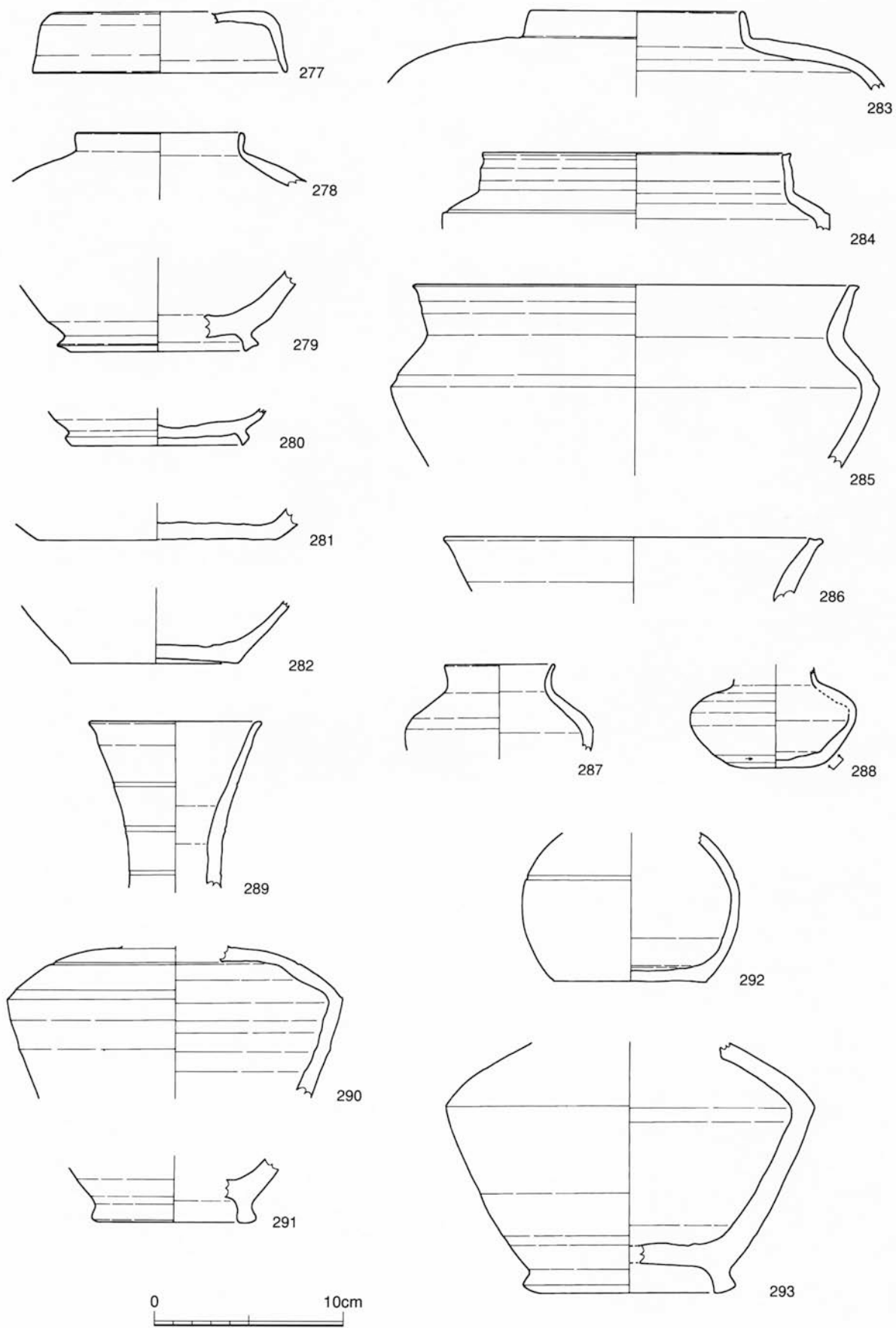


第157図 130号溝出土須恵器 (S=1/3)

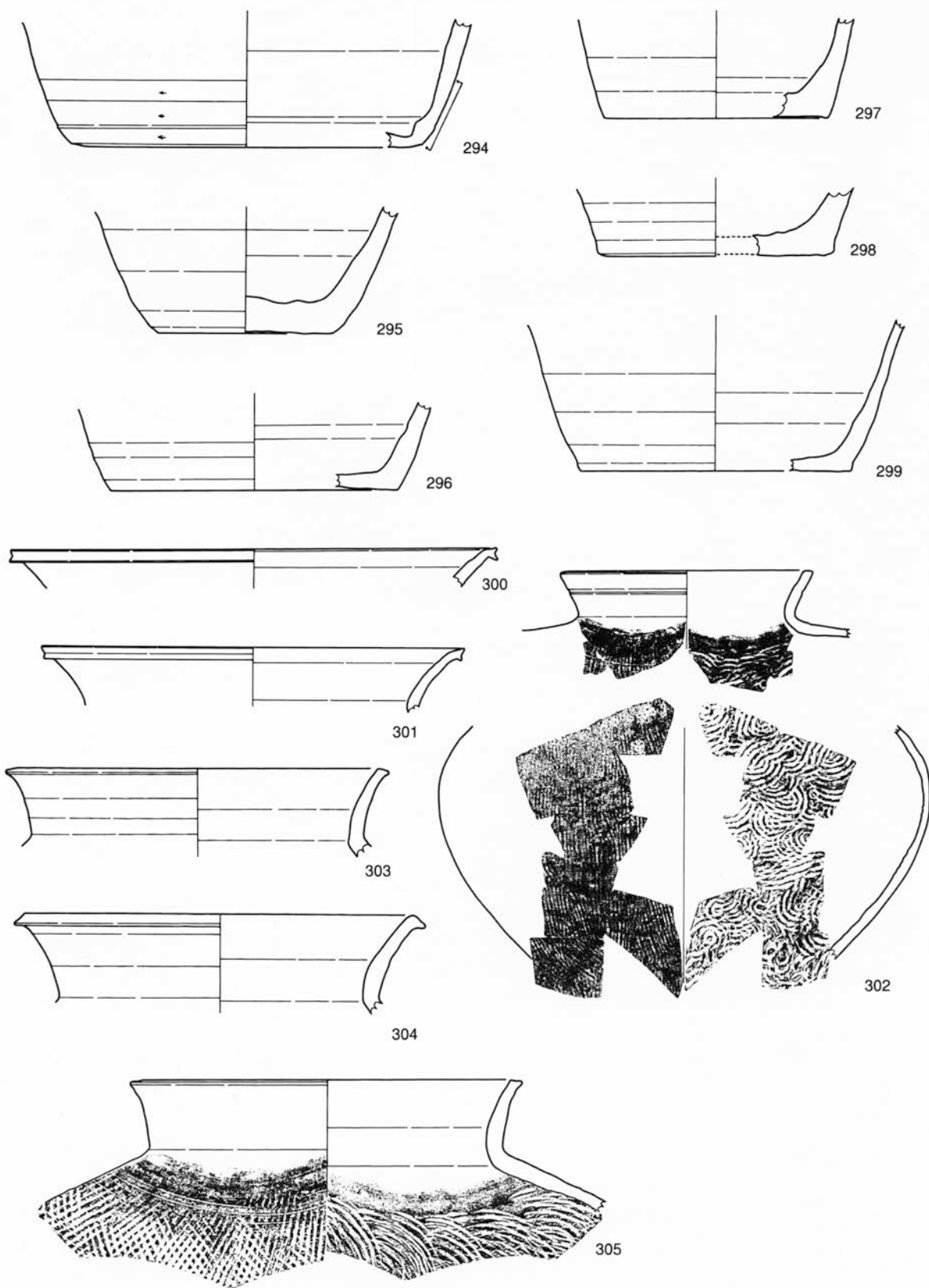




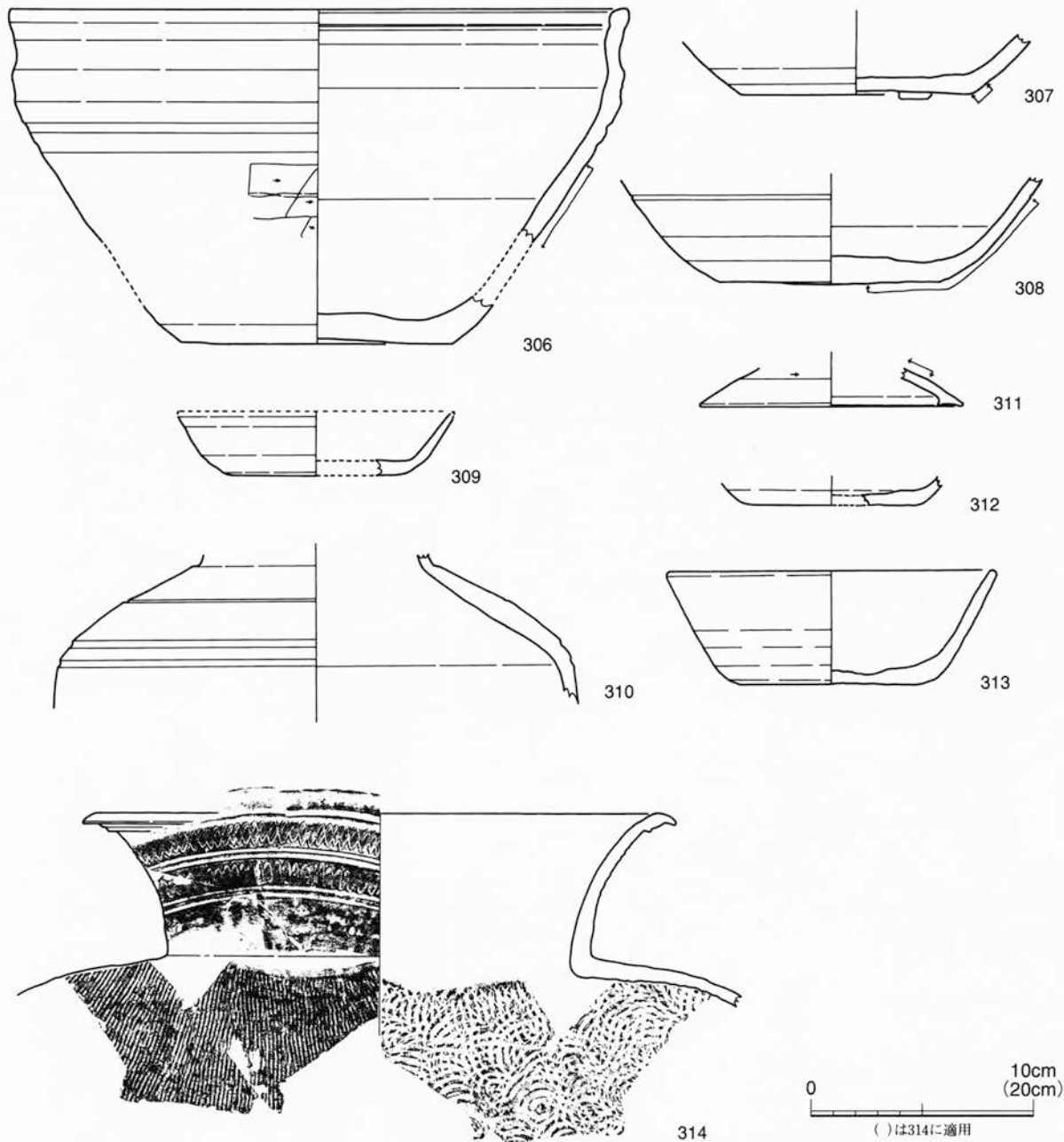
第158图 130号溝出土須恵器 (S=1/3)



第159图 130号溝出土須惠器 (S=1/3)

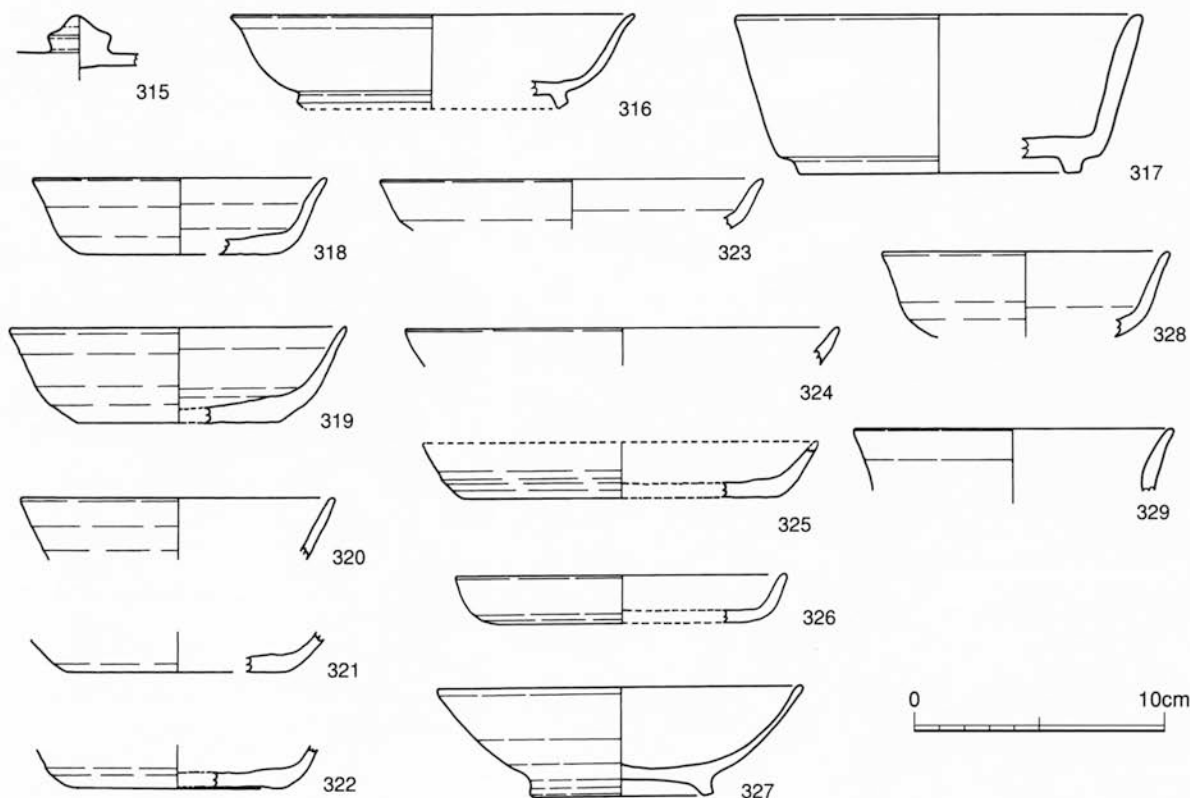


第160図 130号溝出土須恵器 (S=1/6・1/3)



第161図 130号溝(306~308)・131号溝(309)・139号溝(310)・152号溝(311~314)出土須恵器(S=1/6・1/3)

が残っている。瓶類のうち439は、長頸瓶と考えられるが、肩部に沈線を回らせ、その下に櫛状工具により波状文を施すという装飾が行われている。大甕(452~458)のうち、452・456・458・459は無文である。454は、2条単位の沈線の上位置に、板状工具による刻文が帯状に施されている。457は、1条単位の沈線間に、櫛状工具により粗い波状文を施している。時期は、坏H・坏G類では、330~335がI-1・2期頃、336・358がI-2期頃、337がI-2期~II-1期頃と考えられる。ハソウ(426)もI-1期頃が推察される。坏B類・坏A・盤Aでは、338~340がII-2期頃、341がII-2・3期頃、342・359がII-3期頃、360~363・373がIII期頃、343がIII~IV-1期頃、364がIV-1期頃、344・365~367がIV-1~2古期頃、345・346・351・368・369・374~376・393・394がIV-2古期頃、352・353・380・395~399がIV-2新时期頃、370・377~379がIV-2期頃、371・401がIV-2新时期~V-1期頃、355・372・381・402・403がV-1期頃、383~386がV-2期頃、356・382・388~391・403がV期頃、357・392・404・405がVI-1・2期頃と考えられる。椀A・椀B・皿Bでは、422・423がVI-1・2期頃、408・412・413・416がVI-2期頃、415・417がVI-



第162図 Pit出土須恵器 (S=1/3)

2・3期頃、414・418～420がVI-3期頃と推察されるが、底部破片であるため前後の時期との幅を持たせておく必要もあろう。短頸壺蓋では、427がIII～IV期頃、428がV～VI期頃と推察される。壺・瓶類では、429がII期頃、433・447・448がIII～IV期頃、430・431・436がIV期頃、440がIV～V-1期頃、438がV期頃、437がV-2期～VI-1期頃、435・441・442がV期以降、443・445・446がVI期頃と考えられる。横瓶は、449がIII期、450・451がIV-2期と考えられる。甕類は、460がI期頃、452～454・456がII期頃、458・461がIII～IV期頃、455・462がIV期頃、459がVI期以降と考えられる。

### 7. 特殊須恵器 (第167図464～467)

特殊須恵器として、鉄鉢型土器 (鉢D・464)、特殊脚 (465)、甕胴部破片転用硯 (466・467) を取り上げた。465は、従来のものより小さいが、残存破片より径を復元した結果、この大きさとなったものである。466は、多角形と楕円形を組合せた特異なスカシを持つもので、円面硯の脚部や特殊容器等の脚部と考えられるが、詳細は不明である。466・467は、甕の体部破片を打ち欠いて硯として再利用したものである。特に、467は側面を打ち欠くだけでなく、ケズリ調整も施して隅丸方形に仕上げている。464・465は遺構外出土、466・467は130号溝出土である。

## 第3項 土師器

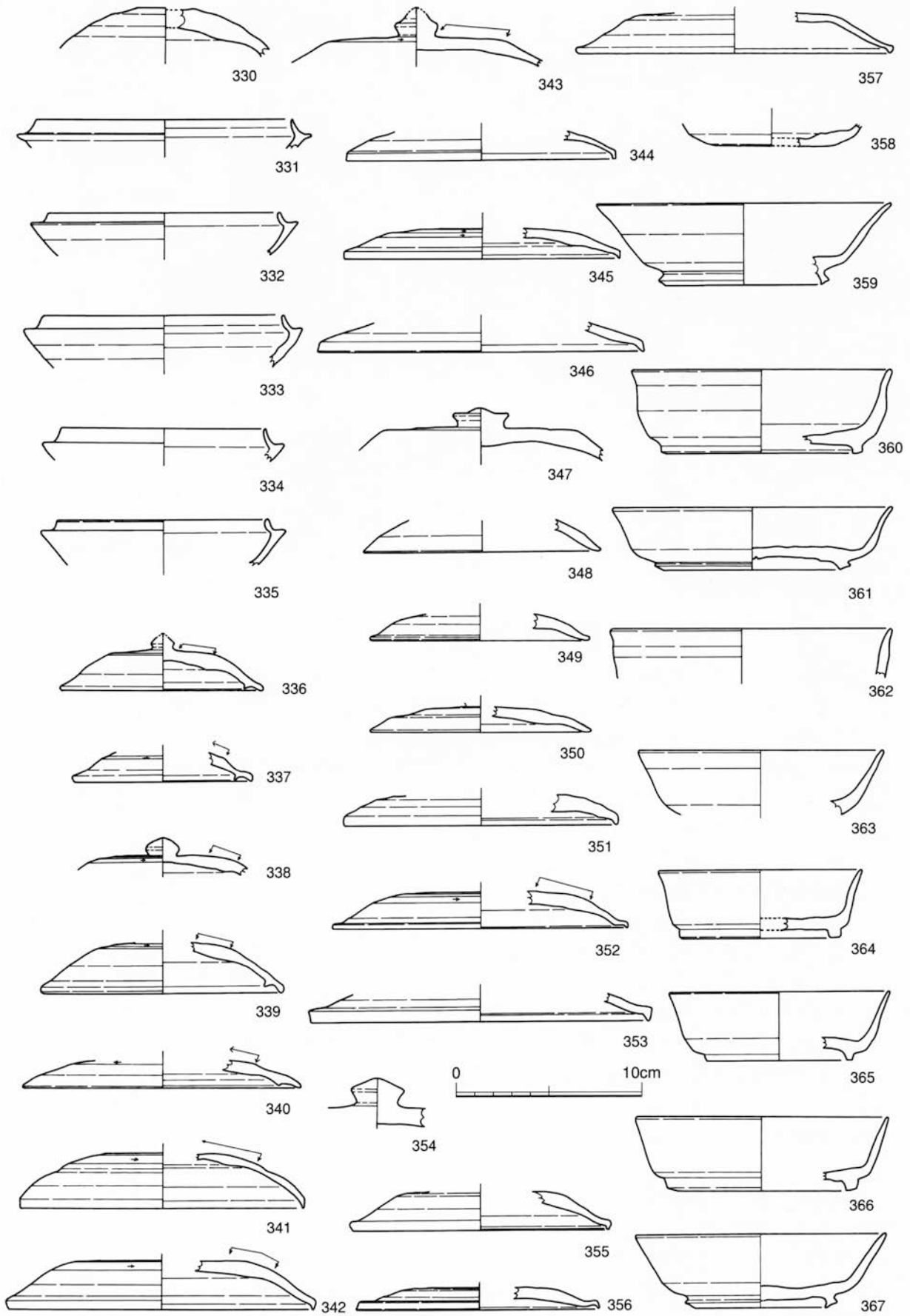
### 1. 掘立柱建物跡柱穴出土土師器

#### 50号掘立 (第168図1・2)

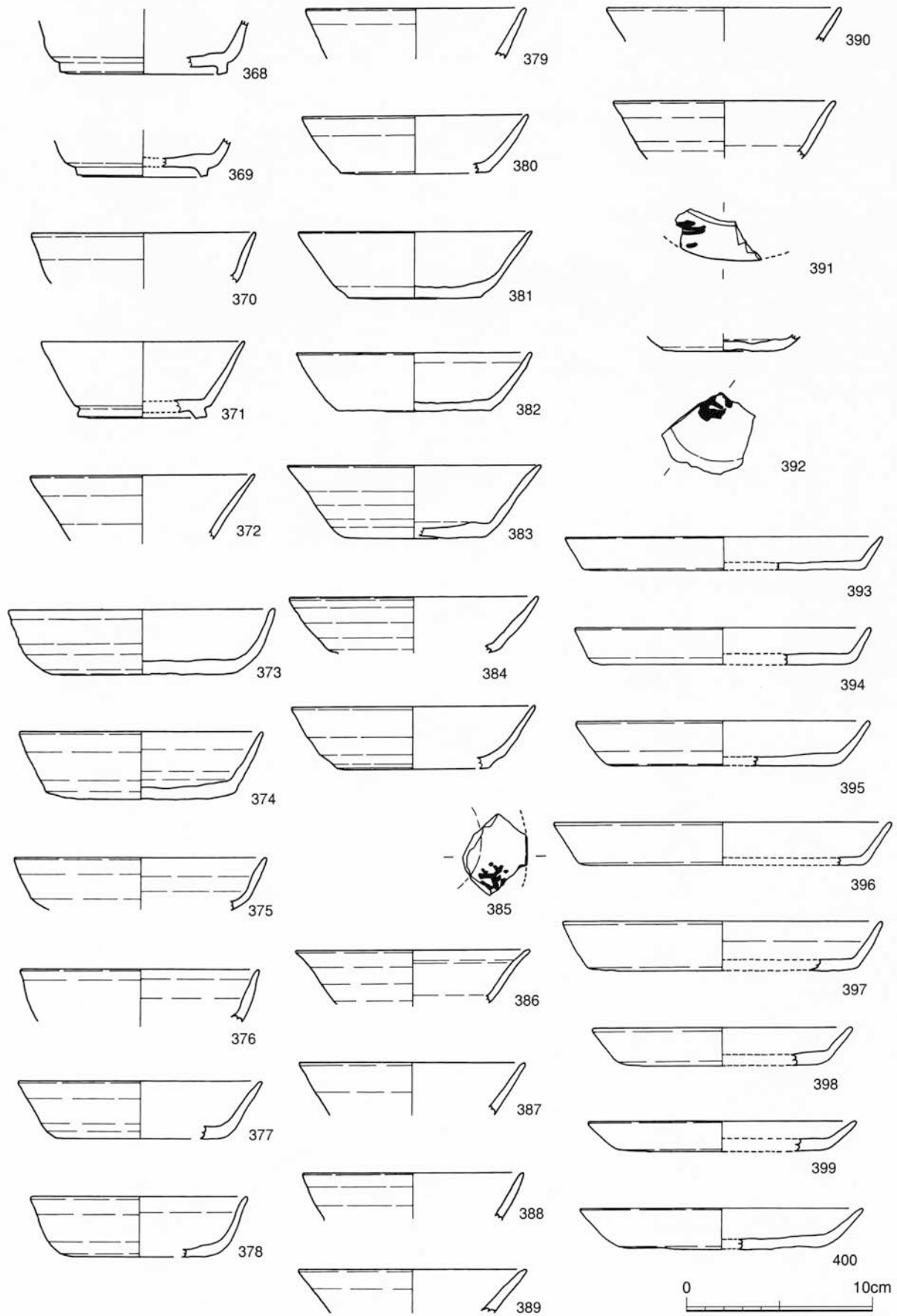
黒色小皿Ⅱ (1) と小皿 (柱高) (2) を図化した。2は、見込み中央から直ぐに立ち上がる器形である。時期は、1が出越編年IV-1期頃、2が出越編年IV-2期頃と考えられる。

#### 54号掘立 (第168図3)

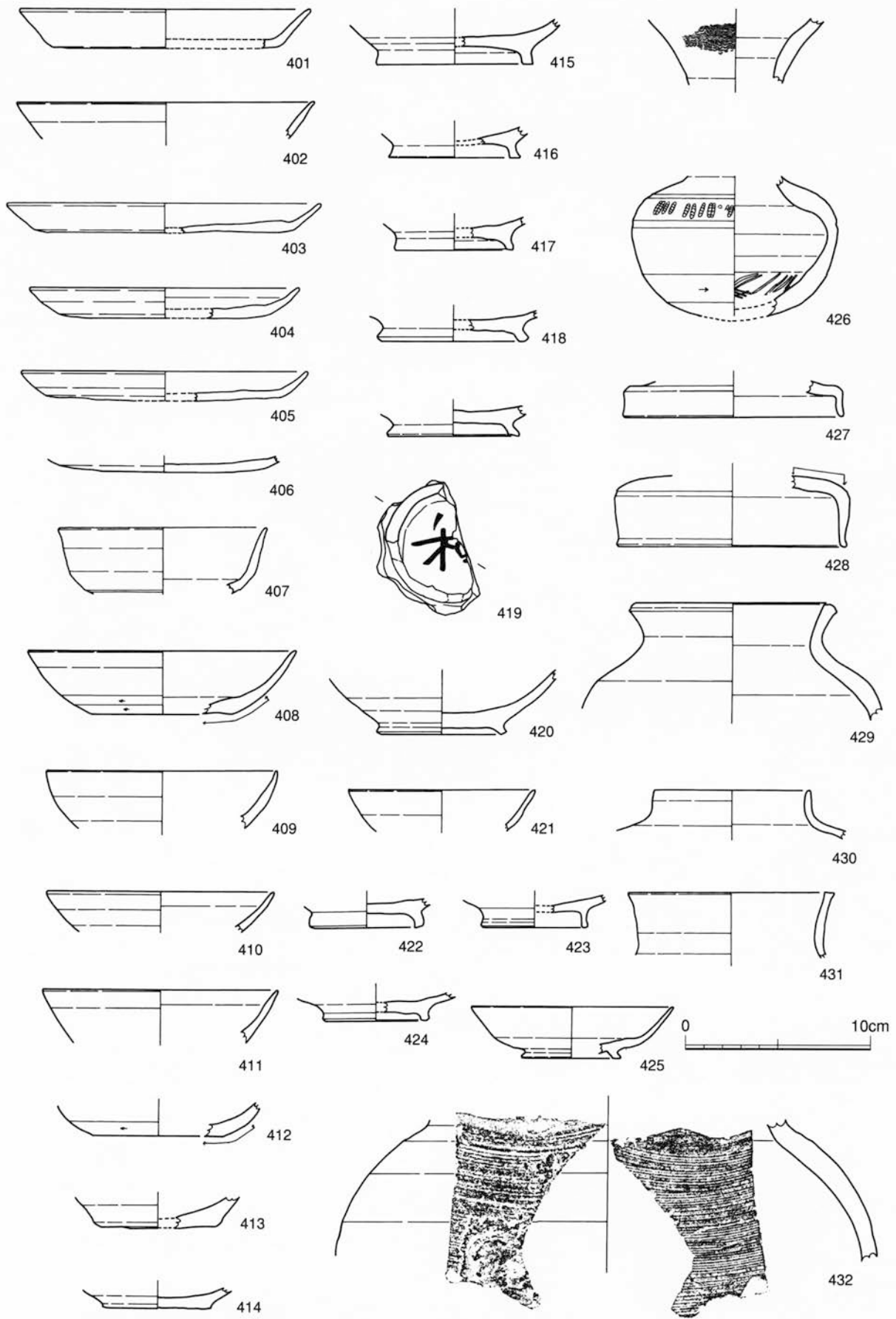
黒色椀Bであり、断面三角形の低い高台が貼り付けられている。時期は、出越編年III-3期～IV-



第163図 遺構外出土須恵器 (S=1/3)

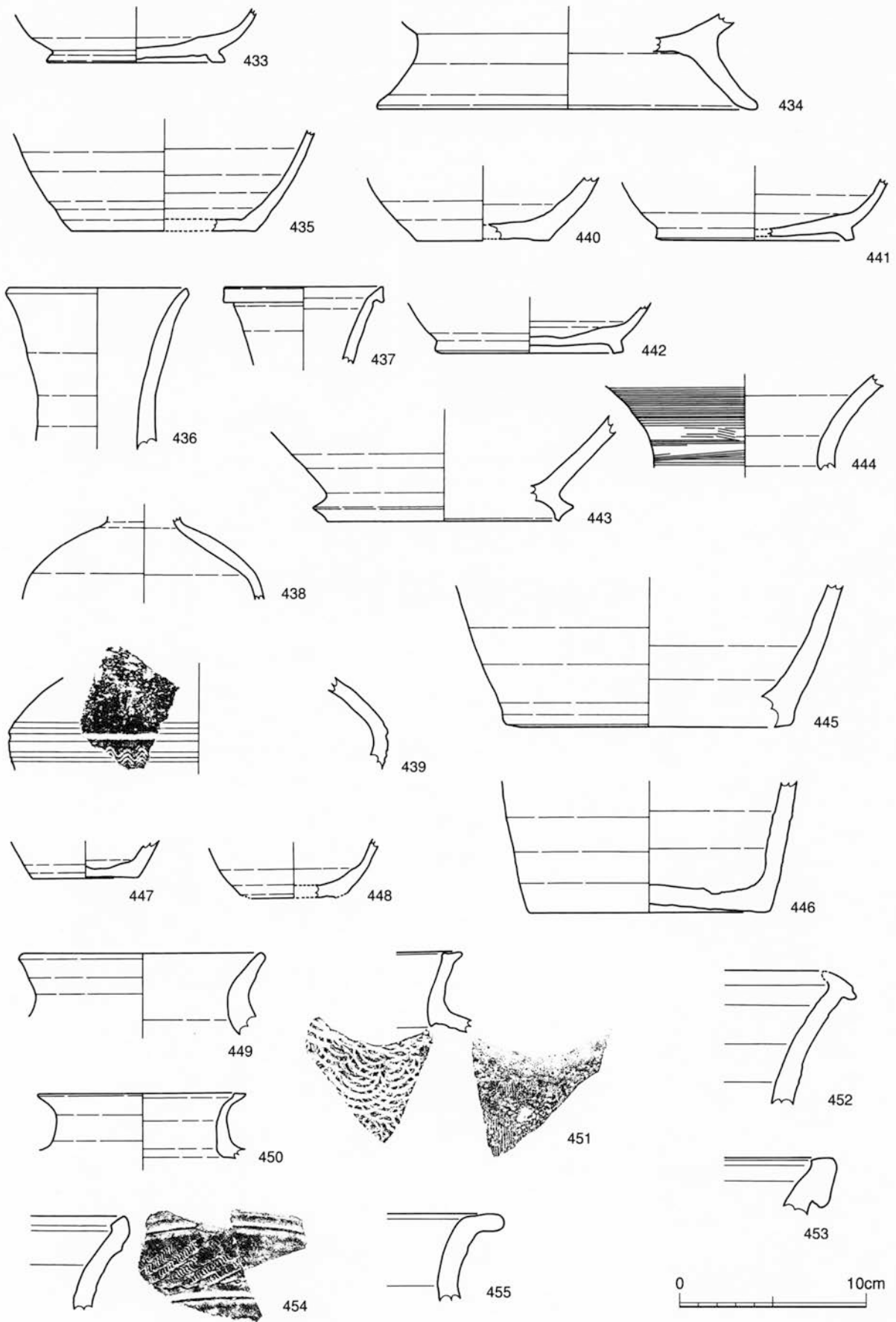


第164図 遺構外出土須恵器 (S=1/3)

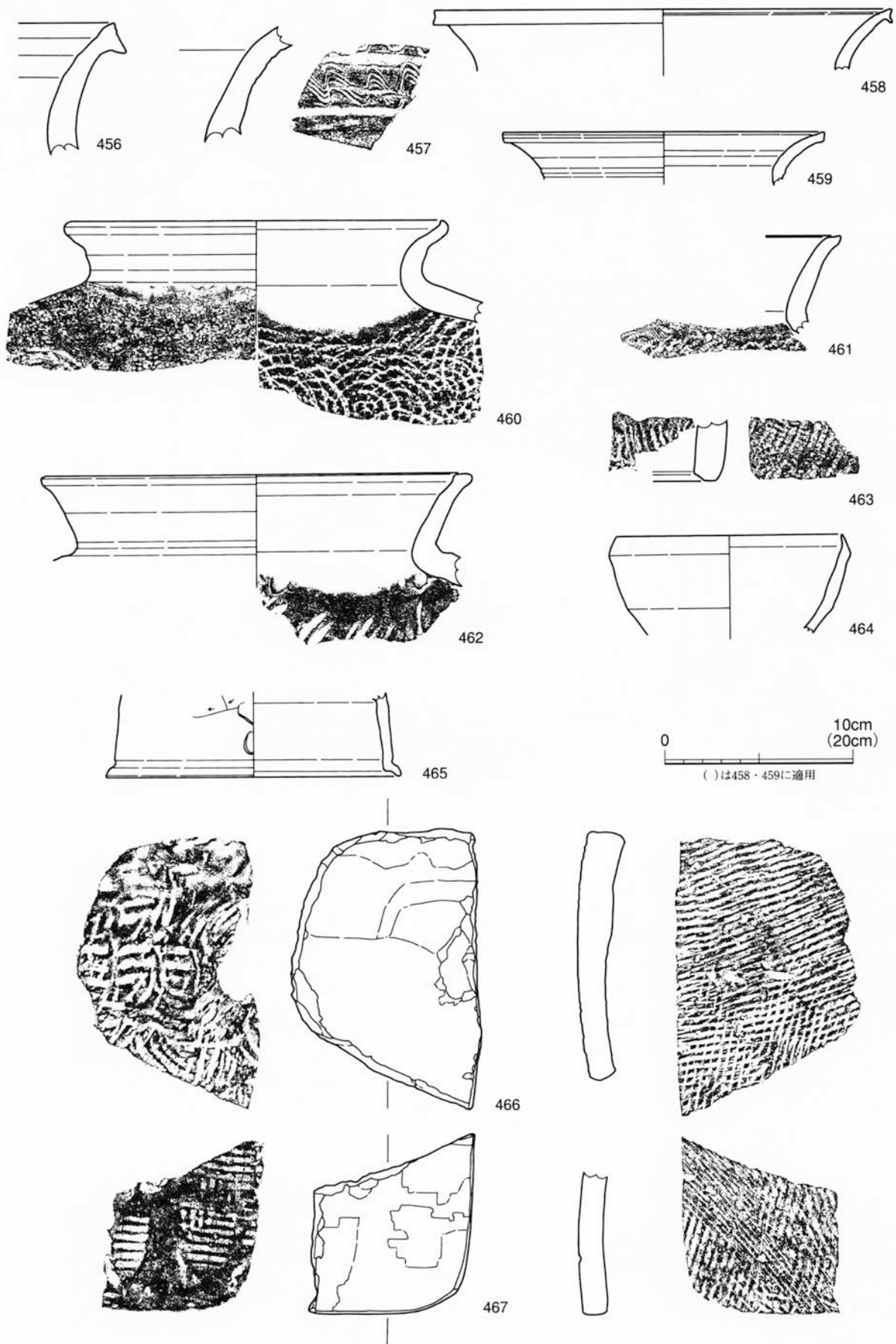


第165図 遺構外出土須恵器 (S=1/3)





第166図 遺構外出土須恵器 (S=1/3)



第167図 遺構外（456～463）出土及び特殊用途（464～467）須恵器（ $S=1/6 \cdot 1/3$ ）

1期頃と考えられる。

#### 57号掘立 (第168図4)

小皿Ⅰの底部と考えられ、出越編年Ⅳ-2・3期頃と考えられる。

#### 92号掘立 (第168図5~13)

椀B (5・8・9)・椀A (9)・小皿Ⅱ (6・10~13)がある。椀Bには、小浅椀タイプ (5)と、幾分高台高を減じているが、脚高風高台を持つ (8)がある。小皿Ⅱには、直線的に体部が立ち上がる (10)と、内湾気味に体部が立ち上がる (11・13)がある。さらに、11と13は、見込み部が体部まで直線的に繋がり傾斜するものと、平坦部分を成形するものに細分される。10と11の胎土は異なるが、11と13は共通胎土である。時期は、出越編年Ⅲ-1・2期頃と考えられる。

#### 91号掘立 (第168図14~17)

椀型鉢? (14)、椀A (15)、不明品 (16)、黒色椀B (17)がある。14は口径24.8cmを測る大型品であるが、柱穴内からは口縁部と高台破片の出土のみである。16は口縁部外面に3条の沈線が回っているが、詳細は不明である。17は小法量の黒色椀B底部である。時期は、椀Aの口径等から、出越編年Ⅱ-3期~Ⅲ-1期頃と考えられるが、17は、若干時期が下る可能性がある。

#### 98号掘立 (第168図18)

椀Bであるが、高台の形態から出越編年Ⅲ-3期以降の時期が推察される。

#### 91号掘立 (第168図19)

ロクロ成形小甕と考えられるが、磨耗が激しく詳細は不明である。田嶋編年Ⅳ-2期以降のものと考えられる。

## 2. 土坑出土土師器

#### 91号土坑 (第168図22)

黒色椀Bであり、分厚い三角形高台の付くものである。時期不詳。

#### 158号・159号土坑 (第168図23~第169図29)

出土土師器の内訳は、食膳具16%、煮炊具84%である。この食膳具割合の低さは、遺構の時期が古代前半であることに起因している。また、古代台後半期の食膳具については、近接して130号溝が存在していることの影響し混入したものとする。よって、純粹には少量の赤彩椀や盤のみであると考えられ、さらに割合は減る。煮炊具内ではロクロ成形製品35%とハケ調整製品65%となる。

23は赤彩盤Aであり、内外面に赤彩が施されている。時期は、田嶋編年Ⅳ期頃と考えられる。22・23・27はハケ調整甕である。22・23は内面にハケ調整が施されている以外は、磨耗が激しく調整不明である。時期は、田嶋編年Ⅰ期頃が推察される。27は、体部外面にハケ調整、内面にケズリ調整が施されており、古墳時代第4様式期頃が推察される。24~26はロクロ成形甕である。体部外面はカキメ調整が施されるが、24は体部内面にハケ調整、25はカキメ調整及びハケ調整が施されている。時期は、24が田嶋編年Ⅲ期頃、25・26が田嶋編年Ⅳ-2新期~Ⅴ-1期頃と考えられる。28はロクロ成形鍋であり、体部内外面にカキメ調整が施される。時期は、田嶋編年Ⅳ期頃と考えられる。29はカマドであり、外面はハケ調整が施されていたようである。

#### 171号土坑 (第169図30)

ロクロ成形甕であり、田嶋編年Ⅳ-2期頃と考えられる。

#### 176号土坑 (第169図31~36)

31~33は椀Bである。底部破片であるため、時期は特定しづらいが、31・32は出越編年Ⅱ-3期~Ⅲ-2期頃、33は出越編年Ⅲ-1・2期頃と推察される。34・35は椀Aで、34が出越編年Ⅱ-3期頃、35が出越編年Ⅱ-2期頃と考えられる。36は小皿Ⅰであり、出越編年Ⅲ-3期頃と考えられる。37は、ロクロ成形鍋の口縁部で、田嶋編年Ⅶ期以降の製品と考えられる。

#### 193号土坑 (第169図38)

小皿Ⅱの底部と考えられる。時期は、出越編年Ⅲ期頃と推察される。

#### 196号土坑 (第169図39~第171図83)

出土土師器の総量は183点である。破片の接合率が非常に高く、一括性の高さを示している。ただし、その接合率の高さは、食膳具類に限ってであり、煮炊具には該当しない。その内訳は、食膳具89%、煮炊具11%と、食膳具が非常に高い割合となる。食膳具内では黒色椀B（18%）、椀B（21%）、椀A（4%）、小皿Ⅱ（56%）で全体の99%以上を占めており、1点のみ赤彩椀Bが出土している。小皿Ⅱが5割以上を占めており、遺構の構築状況からも一般的な廃棄土坑の様相とは言い難い。内面黒色処理した食器は、有台器種の椀Bのみに認められており、2割弱程度の割合である。

出土状況から一括性が高い資料と判断されるため、器種ごとに細述を行う。39～45は黒色椀Bである。深椀大（39・40）、深椀小（42）、浅椀大（43・44）、脚高高台大（41）、脚高高台小（45）がある。46～60は椀Bである。大きく深椀大（56・61）、浅椀大（55・57～59）、深椀小（52）、浅椀小（46～51・53・54）に分類され、大小浅椀が主体を占めている。60に関しては、口縁部破片を欠くため判断できないが、大に分類されたものよりさらに大きい法量と考えられる。また、外面に赤彩された痕跡があり、この一群のなかでは特異なものである。さらに細分すると、浅椀大は体部内湾型（57・59）、体部屈曲型（58）、体部外反型（55）に分かれる。浅椀小は体部内湾深手型（46・48・50・52）、体部内湾浅手型（49・51・53）、体部直線深手型（47）、体部直線浅手型（54）に分かれる。深椀は、大小とも数が少なく、体部屈曲型の1系統である。62～66は椀Aである。体部内湾型（64～66）、体部直線型（62）、体部屈曲型（63）に分かれる。67～81は小皿Ⅱである。大きく深手（71～75）、浅手（78～80）、中間型（67～70・76～77・81?）に分けられる。中間型には、口径11cm台の大と10cm台の小がある。さらに細分すると、深手は体部内湾型（71・72・74・75）、体部屈曲型（73）に分かれる。浅手は体部内湾型（80）、体部直線型（79）、体部屈曲型（78）に分かれる。中間型は体部内湾型大（70）、体部直線型大（68・69）、体部屈曲型大（67）、体部内湾型小（77・81?）、体部直線型小（76）に分かれる。どの器種においても、体部内湾型が主体的である。また、胎土分類では①系が主体をなす。さて、この土器群の編年的位置付けだが、まず小皿Ⅱが既に器種として確立していることが挙げられる。ただし、12cm台を測る椀Aが存在していることから、全器種において大小2法量が確立しているとはいえない。よって、出越編年におけるⅢ-1期の様相と合致するのではないかと考える。

82・83はロクロ成形鍋である。田嶋編年Ⅶ-2期と考えられ、前述の土師器食器の年代とも矛盾しない。

### 215号土坑（第171図84～93）

出土土師器の内訳は、食膳具32%、煮炊具68%である。接合関係及び同一個体の検討を経た上での破片数提示であるが、器種の特定出来ない小破片を除外して提示すると、食膳具45%、煮炊具55%となる。食膳具の内訳は、一括性が低いため厳密な分類で提示できないが、赤彩椀A等赤彩品9%、外赤内黒椀A4.5%、外赤内黒椀B4.5%、内黒椀A・B20%、椀A・B39%、小皿Ⅰ・Ⅱ23%となっており、無垢製品が62%を占める割合となっている。

84～88は椀Bである。84以外は底部破片であるため、時期は特定しづらいが、84・85は出越編年Ⅲ-2期頃、86～88は出越編年Ⅲ-2・3期頃と推察される。89は椀Aで、出越編年Ⅱ-2期頃が推察される。90は黒色椀A（内側のみ）、91は赤彩椀A（外側のみ）の底部である。時期は、出越編年Ⅱ-1期頃が推察される。

92はロクロ成形小甕、93はロクロ成形鍋である。田嶋編年Ⅵ-3期頃の製品と考えられる。

## 3. 溝出土須恵器

### 13号溝（第171図94～96）

出土土師器の内訳は、食膳具13%、貯蔵具87%であり、古代前半遺構の割合となっている。食膳具は出土点数自体が少なく、15点である。その内訳は、赤彩椀A13.5%、黒色椀A6.5%、無垢椀A80%（有台製品若干混入している可能性あり）である。煮炊具では93%がロクロ成形製品であるが、小破片が多く、実測図は提示できなかった。

94は椀Fと考えられ、非ロクロ製品である。田嶋編年Ⅲ期頃であろうか。95は黒色椀Aであり、内

面が黒色処理されている。時期は、田嶋編年Ⅴ－1期頃と考えられる。96は椀Aであり、田嶋編年Ⅳ期頃と考えられる。

#### 1号大落ち込み(第171図97・98)

97は黒色椀Bであり、内面が黒色処理されている。98は小皿Ⅰである。時期は、97が出越編年Ⅲ－3～Ⅳ－1期頃、98が出越編年Ⅳ－2期頃と考えられる。

#### 17号溝(第171図99～109)

99・100は黒色椀Bであり、内面が黒色処理されている。時期は、99が出越編年Ⅰ－3～Ⅱ－1期頃、100が出越編年Ⅲ－1・2期頃と考えられる。101～103は椀Bである。101・102が出越編年Ⅱ－2期頃、103が出越編年Ⅲ－2・3期頃と考えられる。104～106は椀Aである。時期は、104が出越編年Ⅱ－2古期頃と考えられる。105・106は底部破片であるが、分厚く径が大きい特徴を持つことから、105が出越編年Ⅳ－1期頃、106が出越編年Ⅳ－2期頃と推察される。107はその形態から、皿Bの底部と考えられる。時期は、出越編年Ⅱ－1期頃と推察される。108は柱状高台を持つ小皿であり、出越編年Ⅳ－3期頃と考えられる。109はロクロ成形甕の底部と考えられるが、時期は特定できない。

#### 38号溝(第171図110～第172図123)

出土土師器の総数は1,139点を数え、130号溝について多い出土量である。その内訳は、食膳具42%、煮炊具58%である。接合関係及び同一個体の検討を経た上での破片数提示であるが、器種の特定出来ない小破片を除外して提示すると、食膳具36%、煮炊具63%となる。食膳具の内訳は、一括性が低いため厳密な分類で提示できないが、赤彩椀A等赤彩品2%、黒色椀(内黒)A・B29%、椀A・B53%、小皿Ⅰ・Ⅱ5%、無垢無台食器11%となっており、無垢製品が69%を占める割合となっている。また、椀A・B類が過半数を占め、高い割合となっている。黒色食器は全体では3割弱程度であるが、器種特定可能点数のみでの割合をみると、椀A36%、椀B64%となり、椀B形態が多い。次に椀A・Bにおいて、器種特定可能点数のみでの割合をみると、椀A58%、椀B42%となるが、無垢無台食器の割合を考慮すれば、椀Aが6割程度占めることが予想される。小皿については出土点数自体が少ない状況にあり、既に土器廃棄場としての主体が130号溝へ移っていたことの影響と考える。煮炊具内ではロクロ成形製品42%とハケ調整製品58%となる。

110は黒色椀Aであり、内面が黒色処理されている。時期は、田嶋編年Ⅴ－2期頃が推察される。111・112は黒色椀であり、内面が黒色処理されている。器種は椀Bと想定される。111は小型品であるが、時期は特定し難い。112は浅椀大と考えられ、出越編年Ⅲ－2期と推察される。113～115は椀Bであるが、底部破片であるため、時期は特定しづらい。概ね出越編年Ⅱ－2新期～Ⅲ－2期に収まる資料と推察される。116は柱状高台をもつ小皿であり、出越編年Ⅳ－1期が考えられる。

117・118はロクロ成形甕である。時期は、117が田嶋編年Ⅳ－2期頃、118が田嶋編年Ⅶ期以降とと考えられる。119はロクロ甕であり、内外面にタタキ調整が施される。時期は特定できない。120・121はロクロ成形鍋である。口縁部形態から、120は田嶋編年Ⅵ－1・2期頃、121は田嶋編年Ⅶ－1期以降と考えられる。122・123は把手である。両者ともハケ調整甕に付くものと推測され、古代前半期のものであろう。

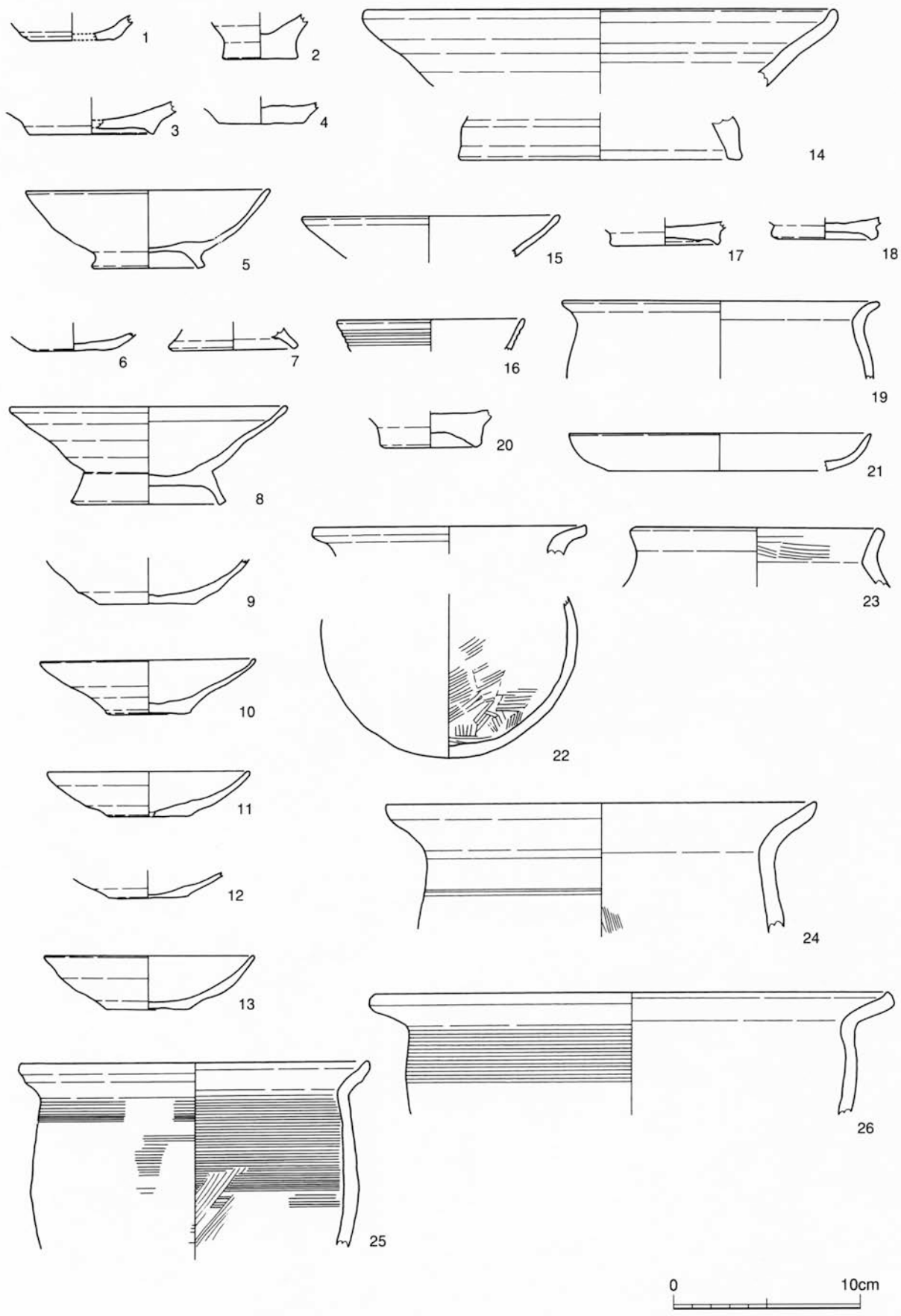
#### 130号溝(第172図124～第175図225)

出土土師器の総数は3,256点を数え、当遺跡のなかで突出して多い出土量である。その内訳は、食膳具78%、煮炊具22%である。接合関係及び同一個体の検討を経た上での破片数提示であるが、器種の特定出来ない小破片を除外して提示すると、食膳具71%、煮炊具29%となる。両者とも土師器食膳具が卓越する結果となっており、古代後半期(特にⅦ期以降)に廃棄行為の主体があることの影響であろう。食膳具の内訳は、一括性が低いため厳密な分類で提示できないが、赤彩椀A等赤彩食器1.6%、黒色椀(内黒)A・B17.7%、椀A・B55%、小皿Ⅰ・Ⅱ・柱状高台9%、皿A0.3%、坏B蓋1.4%、無垢無台食器15%となっており、無垢製品が80.7%を占め、高い割合となっている。上記割合及び椀A・B類が過半数を占める状況は、38号溝とほぼ同様の傾向にあり、器種別におい

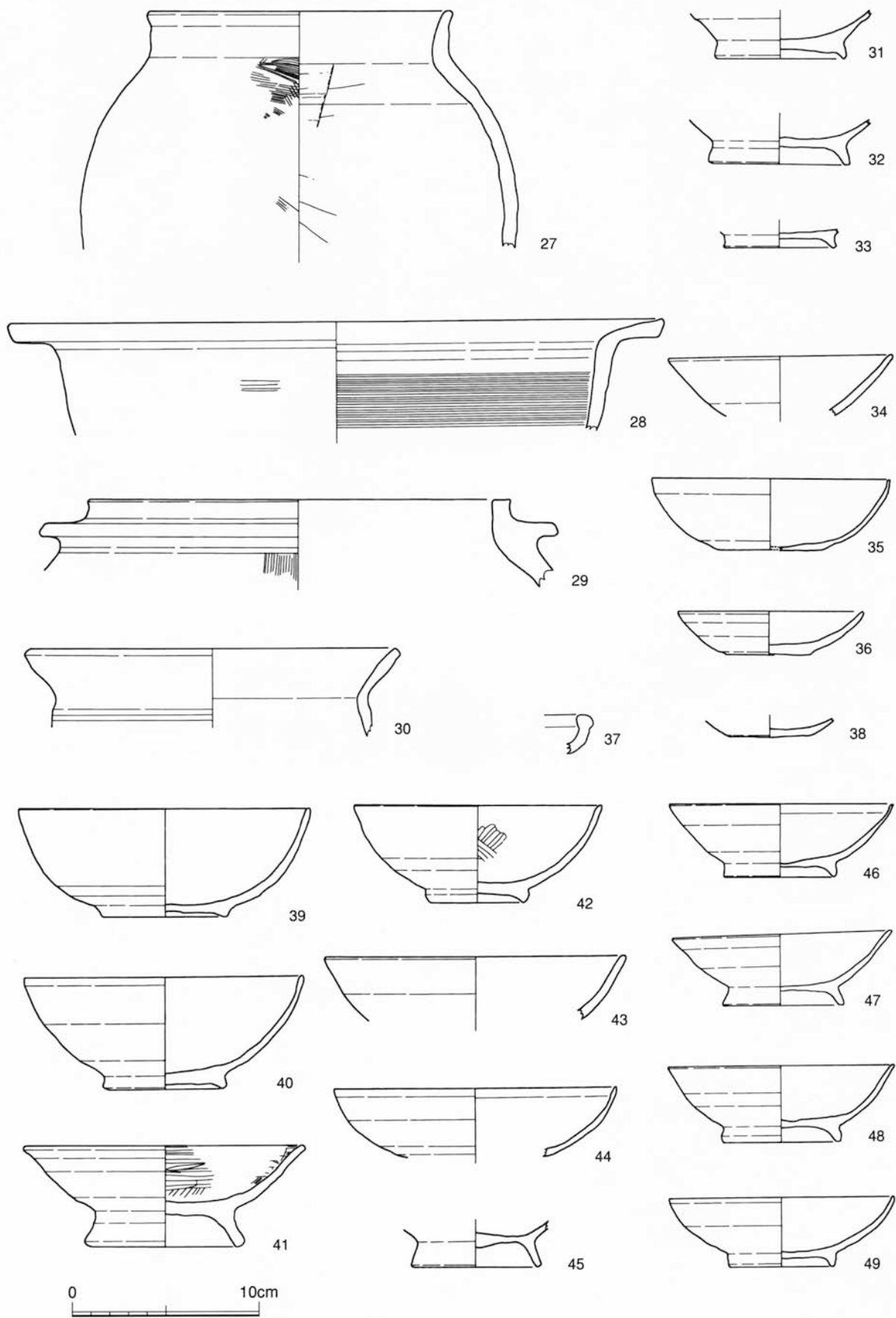
て大きな差異はないと考えられる。個別にみると、赤彩食器では、椀Aが主体であり、椀Bや小皿Ⅱは1点のみである。黒色食器は全体では2割程度であるが、器種特定可能点数のみでの割合をみると、椀A14%、椀B83%、小皿（柱高）3%となり、椀B形態が圧倒的に多い。なお、小皿（柱高）形態は出越編年Ⅳ期以降に出現するものであり、近隣では松梨遺跡4号溝資料にみられる。次に椀A・Bにおいて、器種特定可能点数のみでの割合をみると、椀A44%、椀B56%となるが、無垢無台食器の割合を考慮すれば、椀Aが6割程度占めることが予想される。小皿についても器種特定可能点数のみでの割合をみると、小皿Ⅰ43%、小皿Ⅱ37%、小皿（柱高）20%となる。基本的に小皿Ⅱが出越編年Ⅲ期、小皿Ⅰ・小皿（柱高）が出越編年Ⅳ期の資料となり、出越編年Ⅳ期資料が63%を占め多い。小皿において、このような傾向を見せるのは130号溝だけである。煮炊具内ではロクロ成形製品87%とハケ調整製品13%となり、ロクロ製品が圧倒的に多い。これも廃棄の主体が古代後半期にあることによるものである。ロクロ製品の中では、ロクロ成形甕が80%と主体を占め、ついでロクロ成形鍋が16%を占めている。

124は坏B蓋であるが、端部を欠いているため時期は特定し難い。田嶋編年Ⅳ期頃であろうか。125・126は赤彩椀Aである。時期は、田嶋編年Ⅳ-1期頃と考えられる。127・128は黒色椀Aであり、底部破片であり、時期は特定できないが、田嶋編年Ⅵ期頃が推察される。129~140は黒色椀Bである。内面が黒色処理されている。器表面の残りの良い129~131・133・134・137・139は内面のミガキ調整が確認できる。時期は、130が出越編年Ⅱ期頃、129・136が出越編年Ⅲ期頃、131が出越編年Ⅲ-1・2期頃、133・138が出越編年Ⅲ-2期頃、132が出越編年Ⅲ-2・3期頃、134・135が出越編年Ⅲ-3期頃、137・139・140が出越編年Ⅲ-3期~Ⅳ-1期頃と考えられる。141~160は椀Bである。143と150は脚高高台のつくものである。146は深椀形態と推定される。底部破片の時期については、あくまでも推定であり目安として提示するものである。142・149が出越編年Ⅱ-2古期頃、141が出越編年Ⅱ-2新时期頃、150が出越編年Ⅱ-2期以降、151・152が出越編年Ⅱ-3期頃、144・154が出越編年Ⅲ-1期頃、146・155が出越編年Ⅲ-1・2期頃、143・147・148・153・160が出越編年Ⅲ-2期頃、145・156・157が出越編年Ⅲ-3期頃、159がⅢ期頃、158がⅢ-3期~Ⅳ-1期頃と考えられる。161は古代前半期の椀Aであり、田嶋編年Ⅳ-2期頃が推察される。162~183は椀Aである。椀Aについても同様に、底部破片の時期はあくまでも推定である。時期は、162が出越編年Ⅱ-1期頃、163・164が出越編年Ⅱ-2新时期頃、165・172・173が出越編年Ⅱ-2期頃、166・170・174が出越編年Ⅱ-2・3期頃、167・176~178が出越編年Ⅱ-3期頃、171が出越編年Ⅱ期頃、168が出越編年Ⅱ-3期~Ⅲ-1頃、179が出越編年Ⅲ-3期~Ⅳ-1期頃、180が出越編年Ⅳ-2期~Ⅲ期頃、169が出越編年Ⅳ-3期頃と考えられる。181・182は、直線的な深い体部をもつもので、出越氏の分類でいえば椀j類にあたる。時期は、181が出越編年Ⅳ-1期頃、182が出越編年Ⅳ-2・3期頃と考えられる。186~195小皿Ⅱである。時期は、186~189が出越編年Ⅲ-1・2期頃、190~195が出越編年Ⅲ-3期頃と考えられる。196~200は小皿Ⅰである。時期は、196・197・200が出越編年Ⅳ-1期頃、198が出越編年Ⅳ-1・2期頃、199が出越編年Ⅳ-2期頃と考えられる。201~204は柱状高台の付いた小皿である。204は見込み中央部が窪ませた形態である。時期は、201が出越編年Ⅳ-1期頃、204が出越編年Ⅳ-1・2期頃、202が出越編年Ⅳ-2期頃、203が出越編年Ⅳ-2・3期頃と考えられる。205は赤彩小皿Ⅱである。赤彩は内外面に施されていると考えられるが、殆どが剥離しているため詳細は不明である。時期は、出越編年Ⅲ-1・2期頃が推察される。206・207は、柱状高台を持つ黒色小皿である。時期は出越編年Ⅳ-2期頃と考えられる。

208はハケ調整小甕である。時期は、田嶋編年Ⅱ-3期~Ⅲ期頃と考えられる。209・210・213はロクロ甕で、211・212はロクロ成形小甕である。時期は、209が田嶋編年Ⅳ-2期頃、213が田嶋編年Ⅶ期頃と考えられる。底部破片については、時期を特定出来ない。214~224はロクロ成形鍋である。時期は、田嶋編年214が田嶋編年Ⅲ~Ⅳ-1期頃、216が田嶋編年Ⅴ-1期頃、215・217が田嶋編年Ⅵ-3期頃、218・219が田嶋編年Ⅶ-2期頃、221が田嶋編年Ⅶ-3期頃、220・222~224が田嶋編年Ⅶ期頃と考えられる。225はロクロ成形甗である。内面にタタキ調整が施される。時期は特定

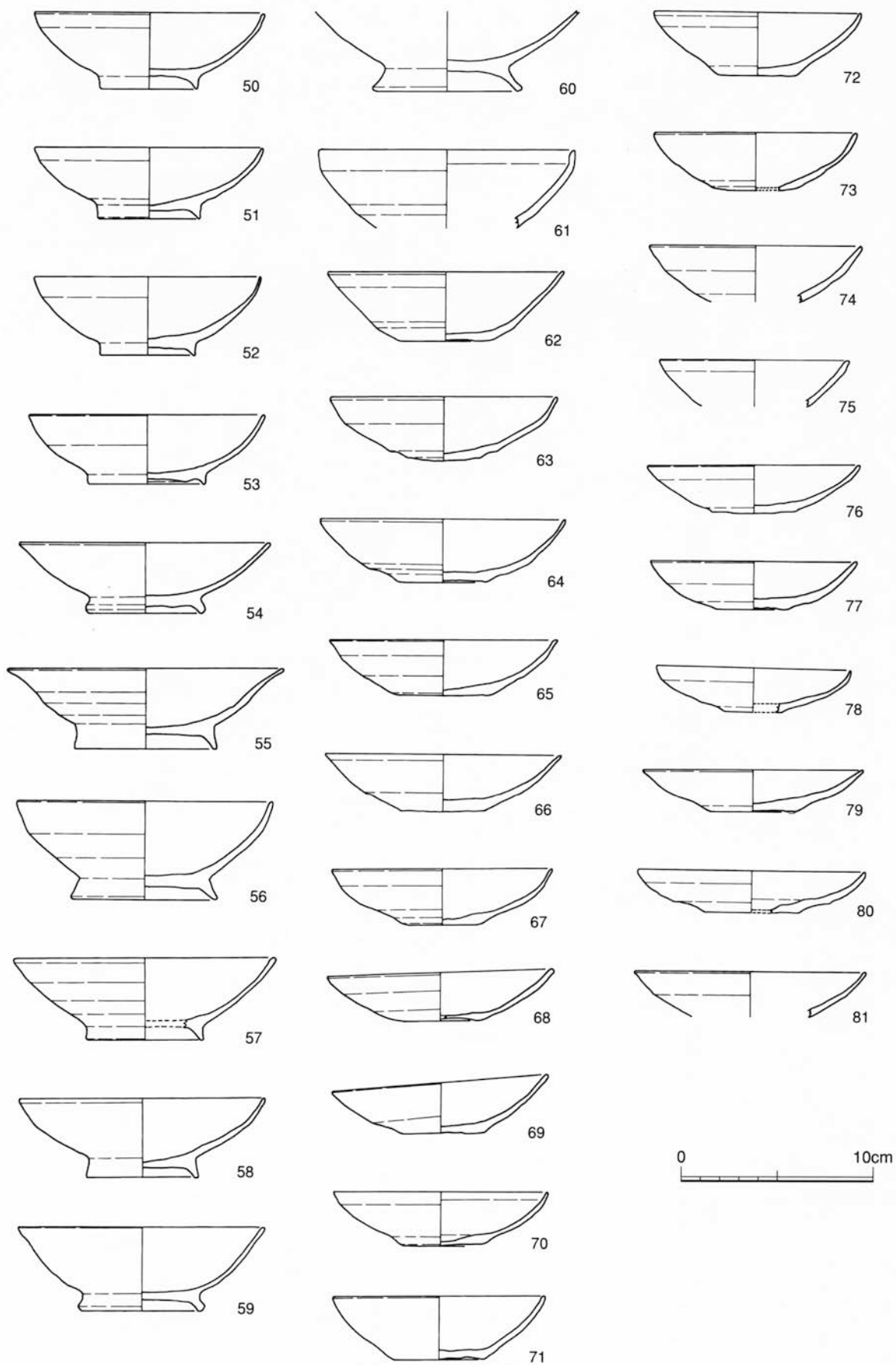


第168図 建物跡 (1~19) ・土坑 (20~26) 出土土師器 (S=1/3)

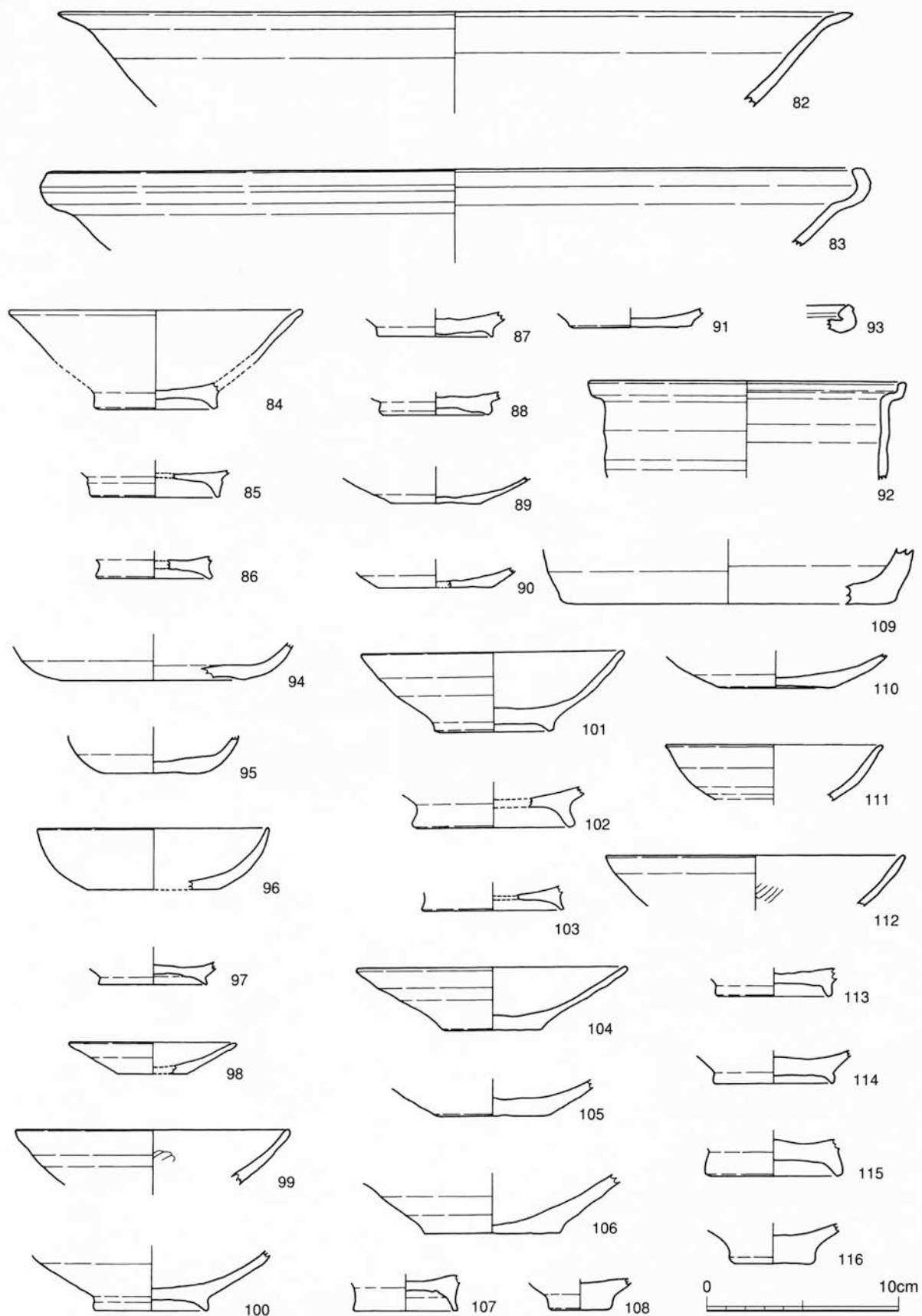


第169図 土坑出土土師器 (S=1/3) [39~49は196号土坑出土]

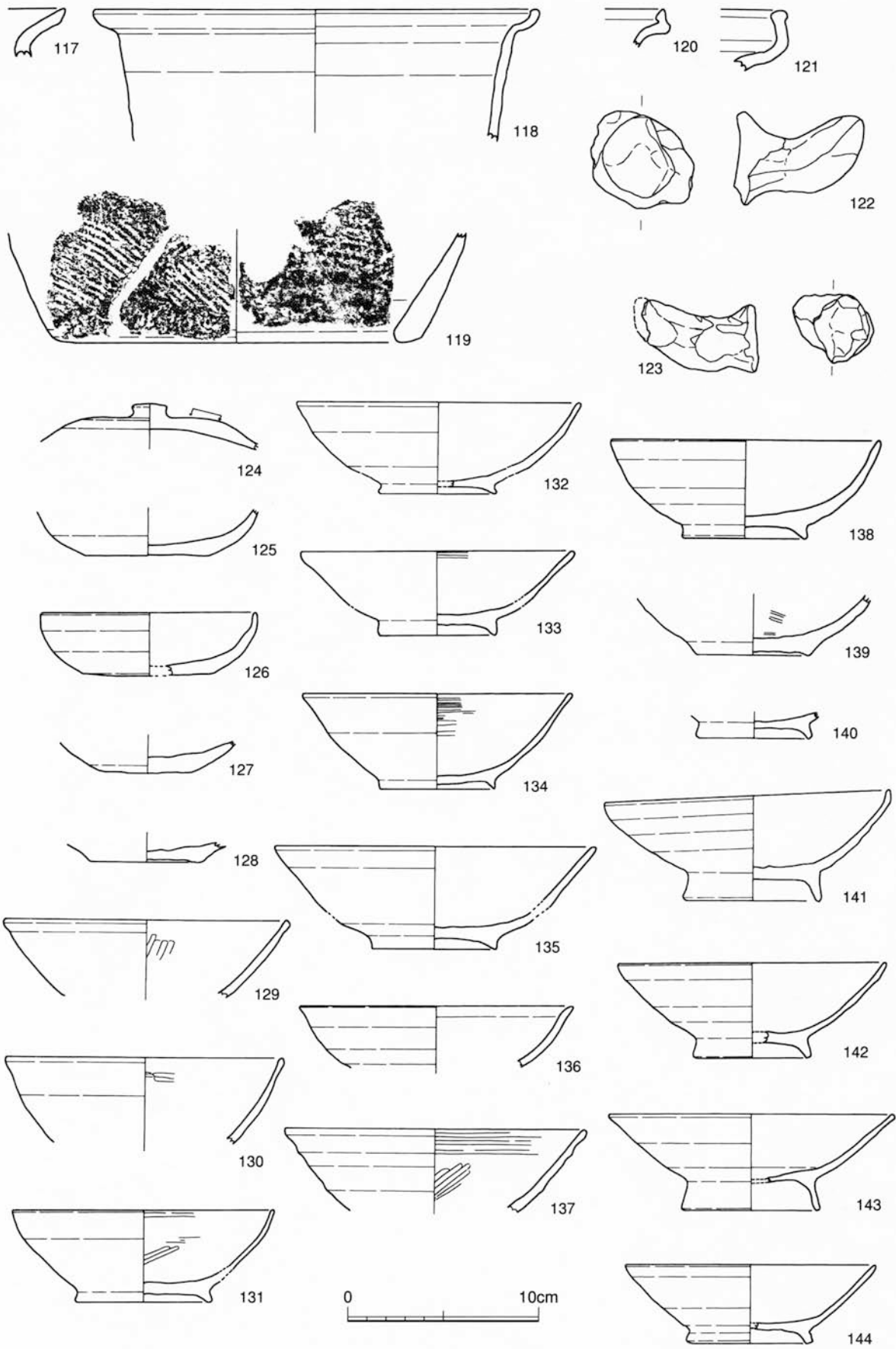




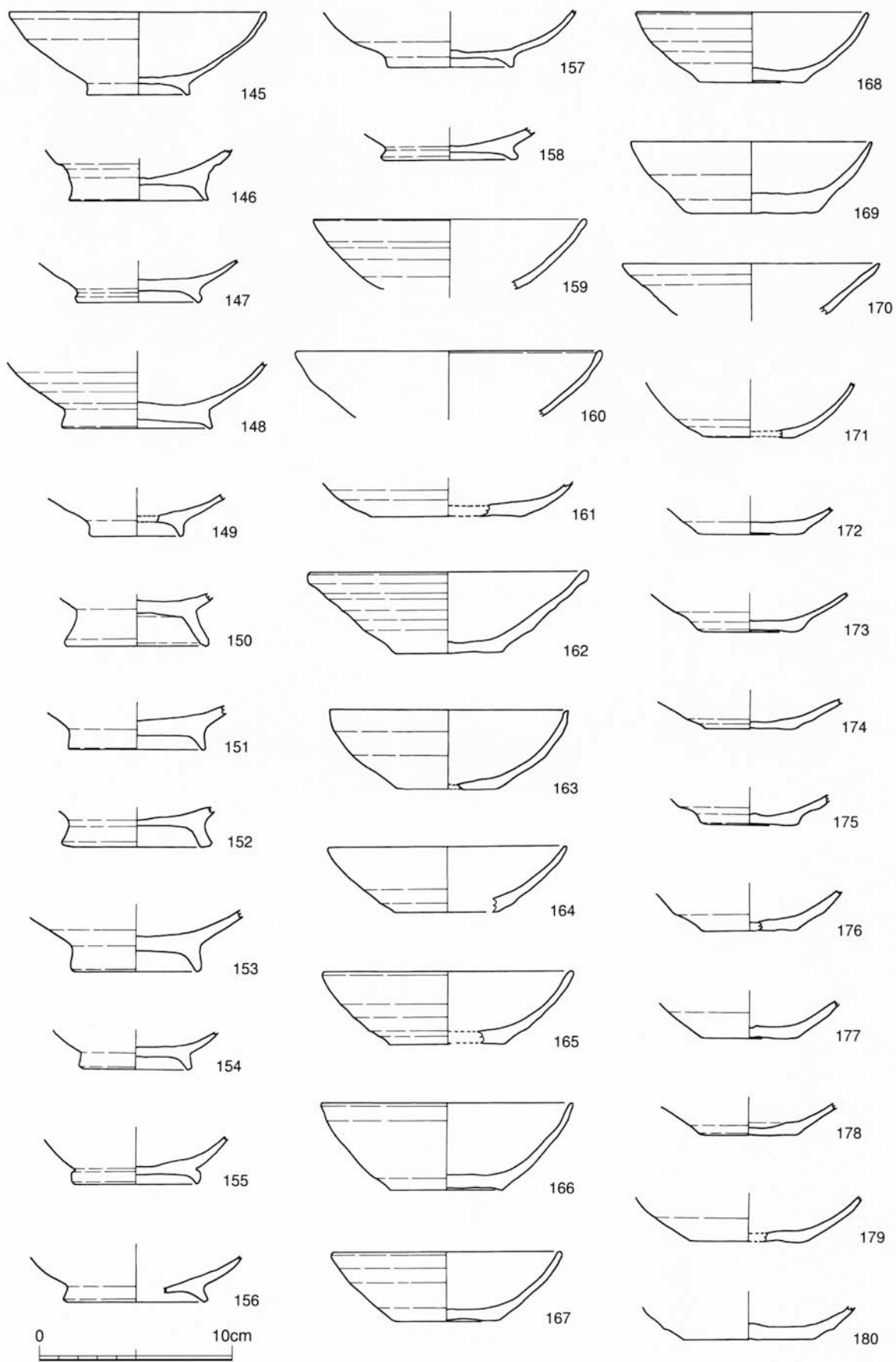
第170图 196号土坑出土土師器 (S=1/3)



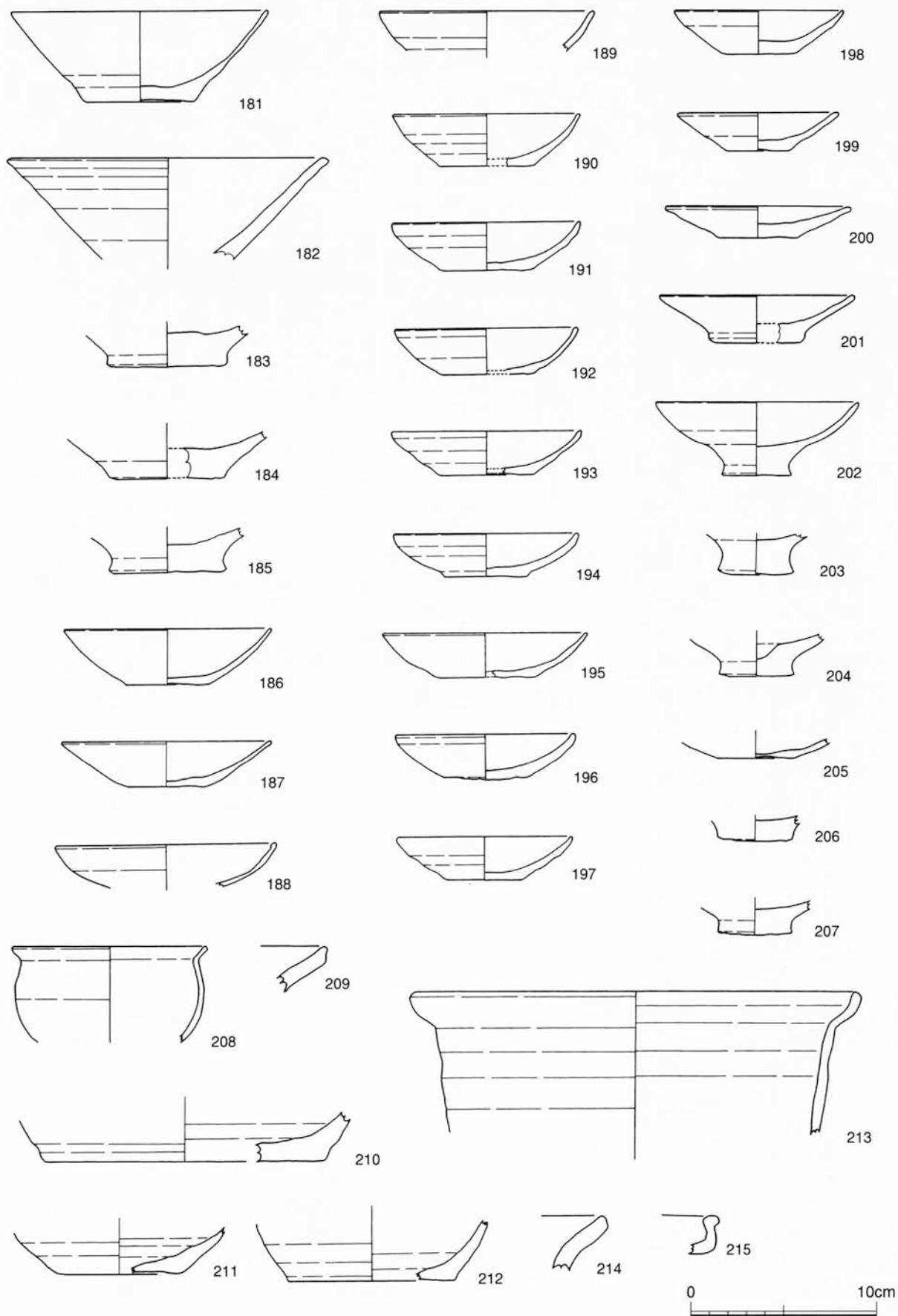
第171図 196号土坑 (82・83) ・215号土坑 (84~93) ・13号溝 (94~96) ・大落ち込み (97・98)  
 17号溝 (99~109) ・38号溝 (110~116) 出土土師器 (S=1/3)



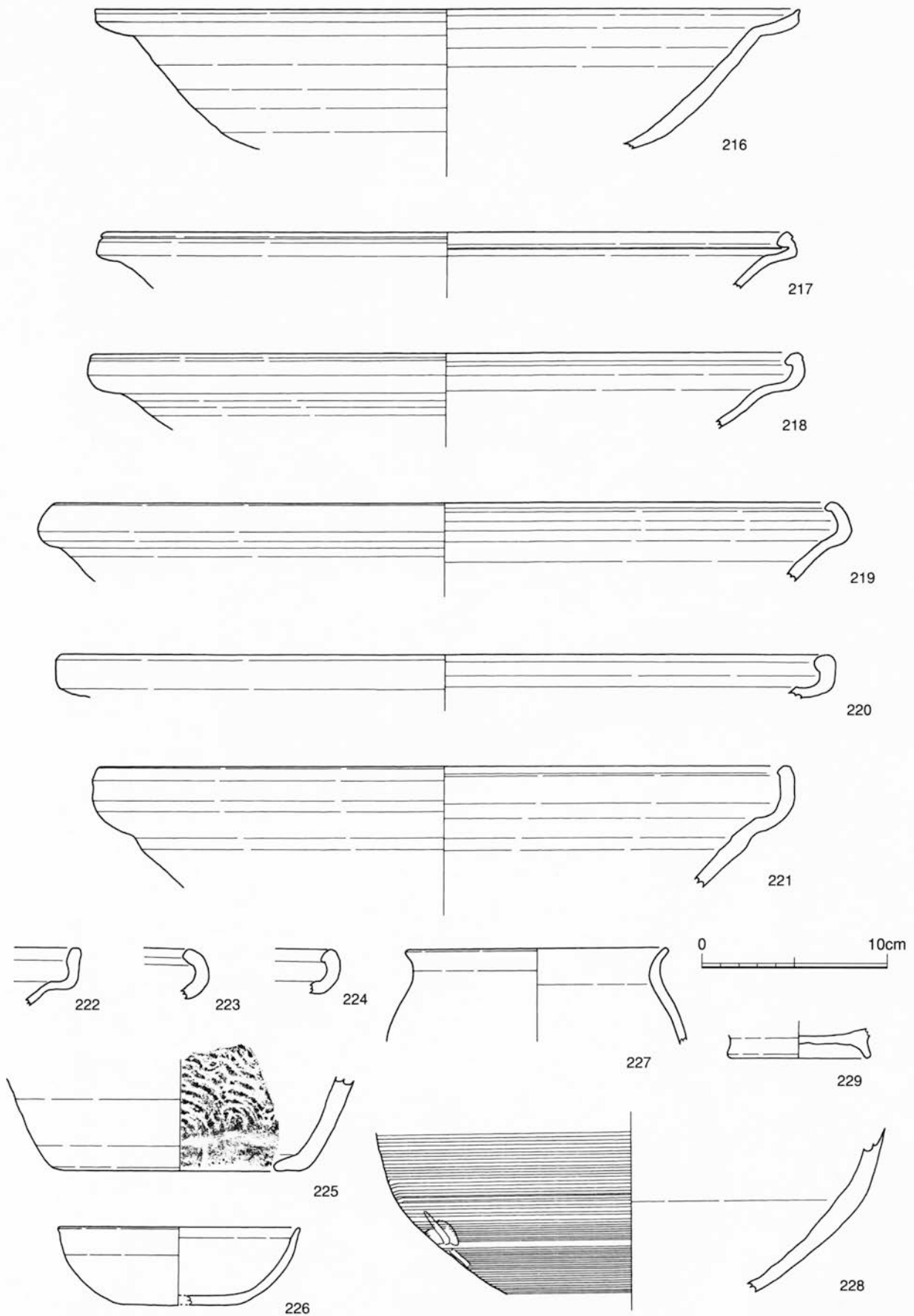
第172図 38号溝 (117~123)・130号溝 (124~144) 出土土師器 (S=1/3)



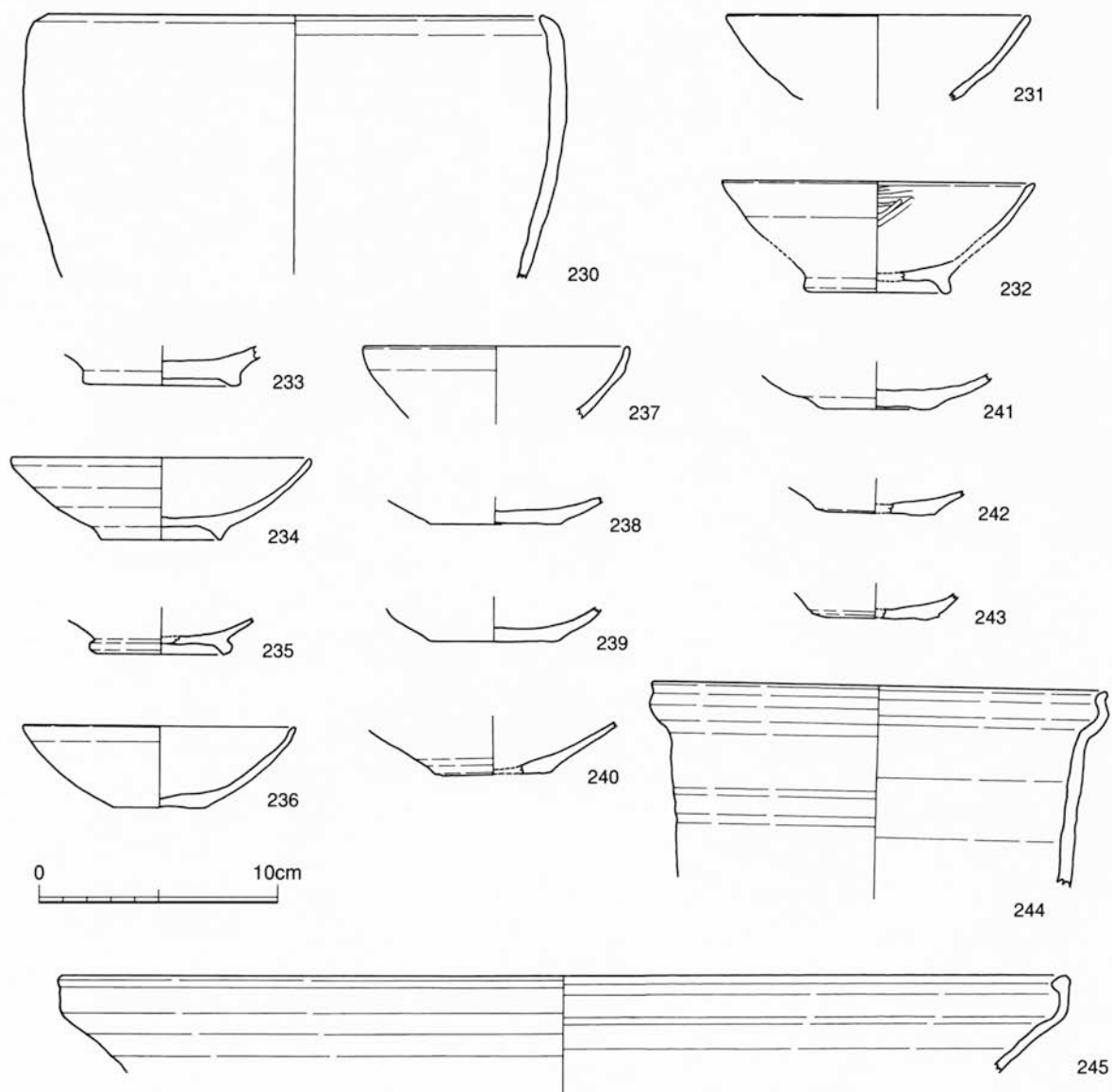
第173图 130号溝出土土師器 (S=1/3)



第174図 130号溝出土土師器 (S=1/3)



第175図 130号溝 (216~225) ・152号溝 (226~228) ・172号溝 (229) 出土土師器 (S=1/3)



第176図 Pit出土土師器 (S=1/3)

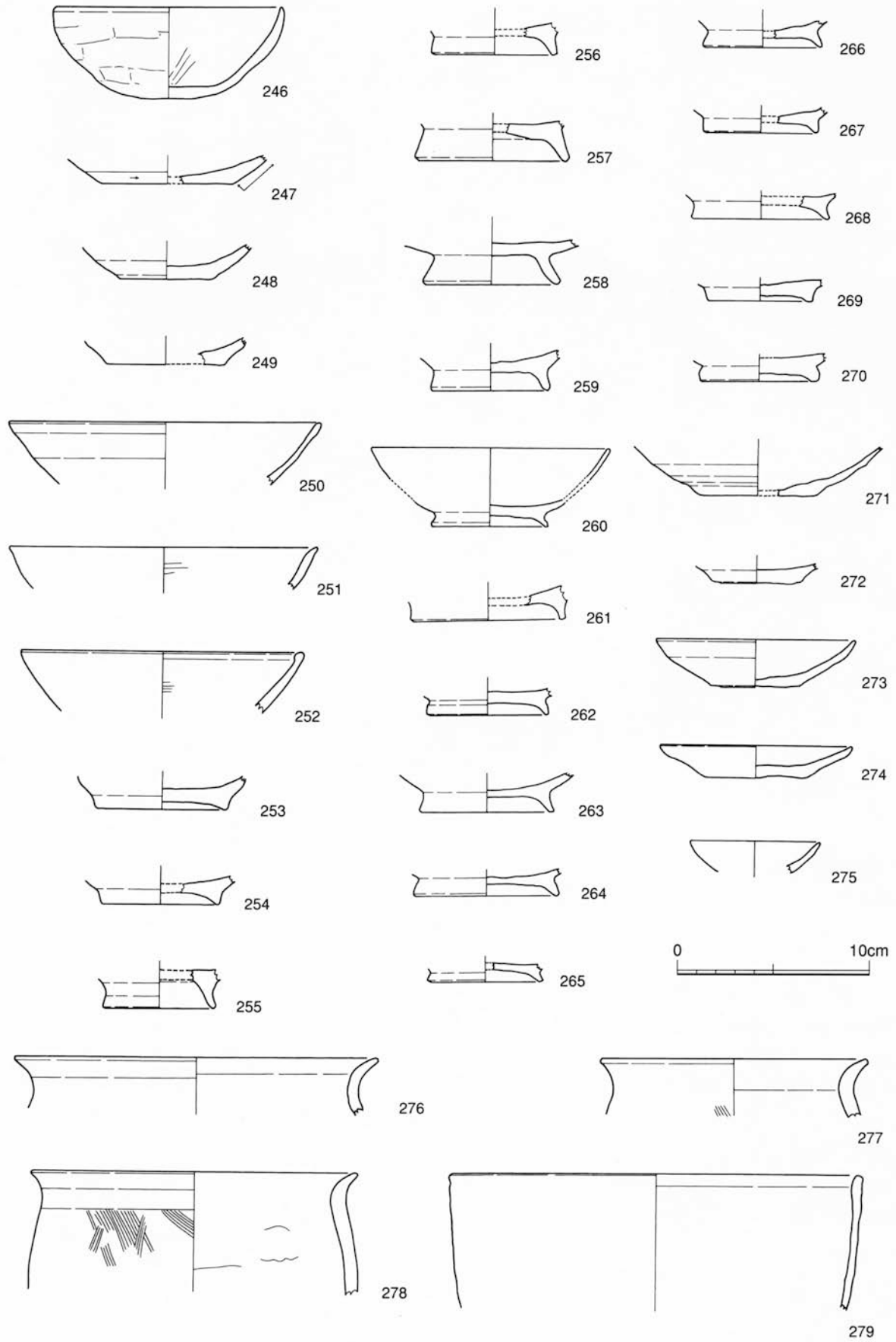
できない。

**152号溝 (第175図226~228)**

226は非ロクロ成形による椀である。時期は、古墳時代第4様式期と考えられる。227はハケ調整小甕である。時期は、田嶋編年I-1期頃と考えられる。228はロクロ成形鍋である。体部外面にカキメ調整が密に施される。時期は特定出来ないが、古代前半期の資料と推察される。

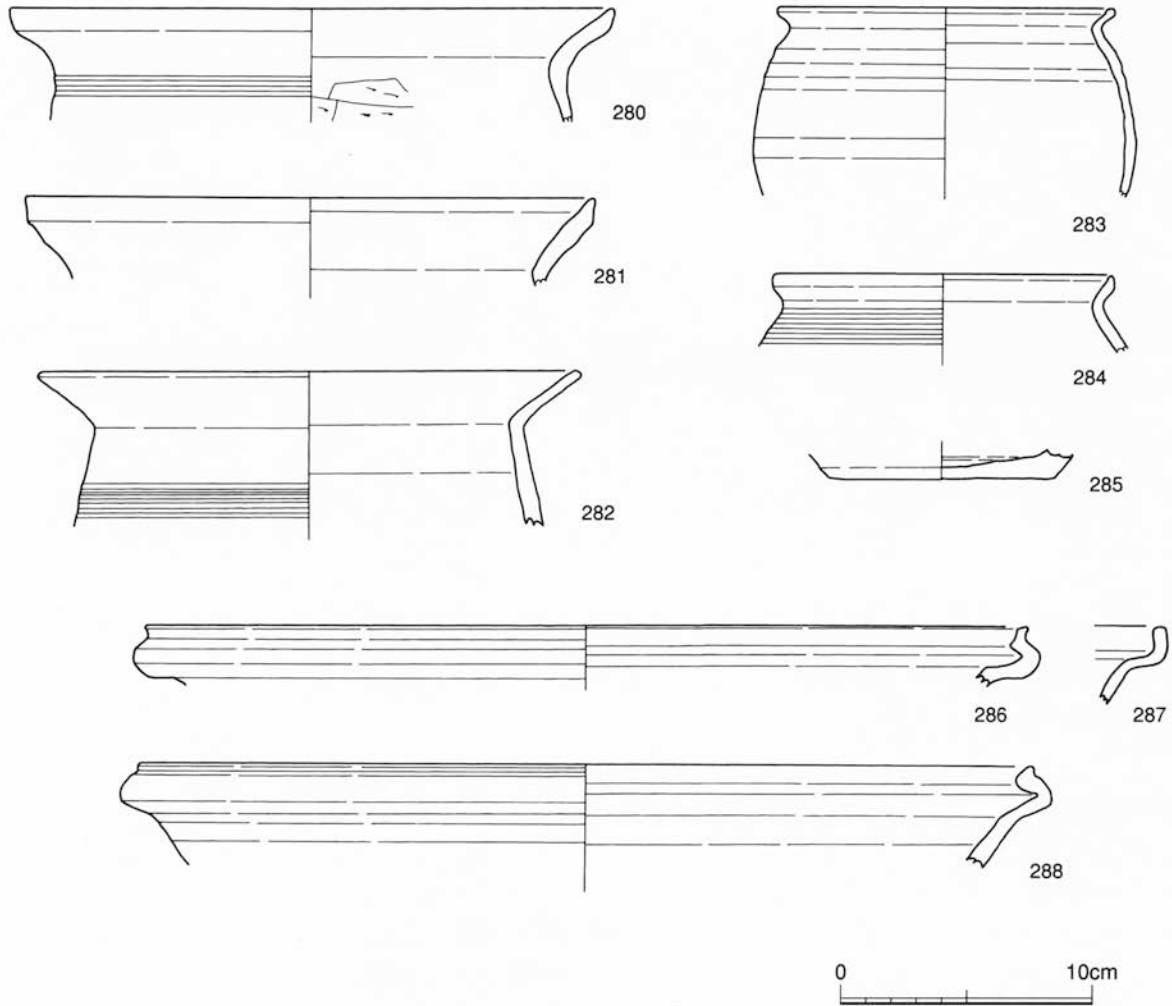
**172号溝 (第175図229)**

229は椀Bである。時期は、底部破片であり特定は困難だが、出越編年III-2期頃のものではないかと推察される。



第177図 遺構外出土土師器 (S=1/3)





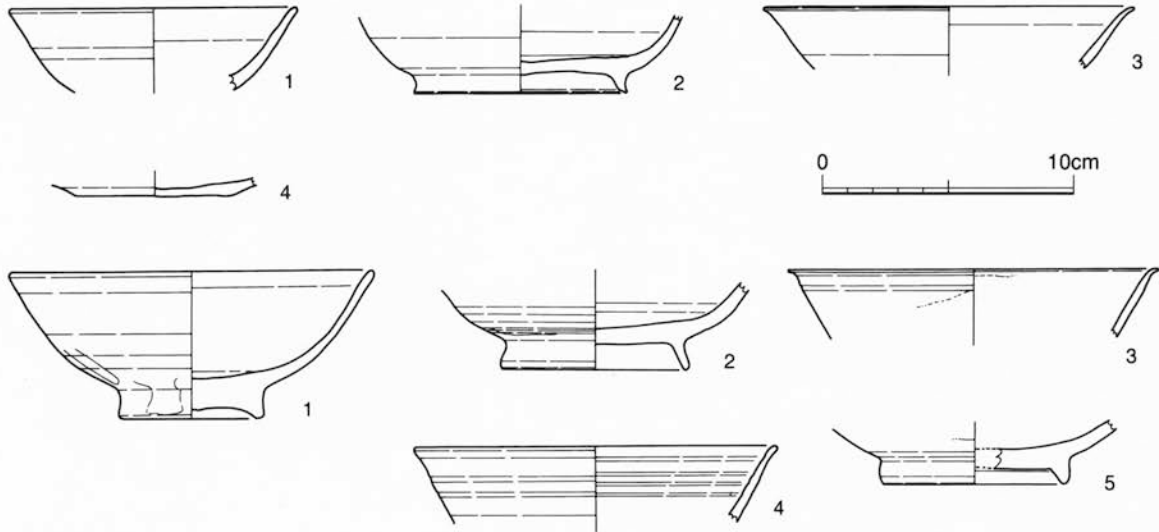
第178図 遺構外出土土師器 (S=1/3)

#### 4. Pit出土土師器 (第176図)

Pit出土土師器には、鉢 (230)、黒色椀A (231)、黒色椀B (232)、椀B (233~235)、椀A (236~240)、小皿Ⅱ (241~243)、ロクロ成形甕 (244)、ロクロ成形鍋 (245) がある。底部破片の時期については、あくまでも推定であり目安として提示するものである。時期は、230が古墳時代第4様式Ⅲ期頃、231・238が出越編年Ⅱ-1・2古期頃、239~241が出越編年Ⅱ-2・3期頃、232が出越編年Ⅱ-3期~Ⅲ-1期頃、236が出越編年Ⅲ-1期頃、233・237が出越編年Ⅲ-1・2期頃、234が出越編年Ⅲ-2・3期頃、235が出越編年Ⅲ-3期~Ⅳ-1期頃、242・243が出越編年Ⅲ期頃、244・245が田嶋編年Ⅶ-1・2期頃と考えられる。

#### 5. 遺構外出土土師器 (第177図~第178図)

遺構外出土土師器には、赤彩椀 (246)、黒色椀A (248・249)、黒色椀B? (250~252)、黒色椀B (253~255)、椀B (256~270)、椀A (271・272)、小皿Ⅱ (273)、小皿Ⅰ (274・275)、ハケ調整甕 (276)、ハケ調整小甕 (277・278)、甌 (279)、ロクロ成形甕 (280~282)、ロクロ成形小甕 (283~285)、ロクロ成形鍋 (286~288) がある。赤彩椀 (246) は、非ロクロ成形であり、古墳時代第4様式Ⅲ期頃と考えられる。椀B (258) は、内外面に赤彩が施されている。262・273についても、外面に赤彩が施されている可能性がある。ロクロ成形甕 (280) は、内面にケズリ調整が施されている。底部破片の時期については、あくまでも推定であり目安として提示するものである。食膳具類の時期は、247が田嶋編年Ⅳ-2期頃、248・249が田嶋編年Ⅵ期頃、250・251が出越編年Ⅱ-1期頃、252・261が出越編年Ⅱ-2期頃、255・271が出越編年Ⅱ-1期頃、257が出越編年Ⅱ-2期頃、258・267が出越編年Ⅱ-



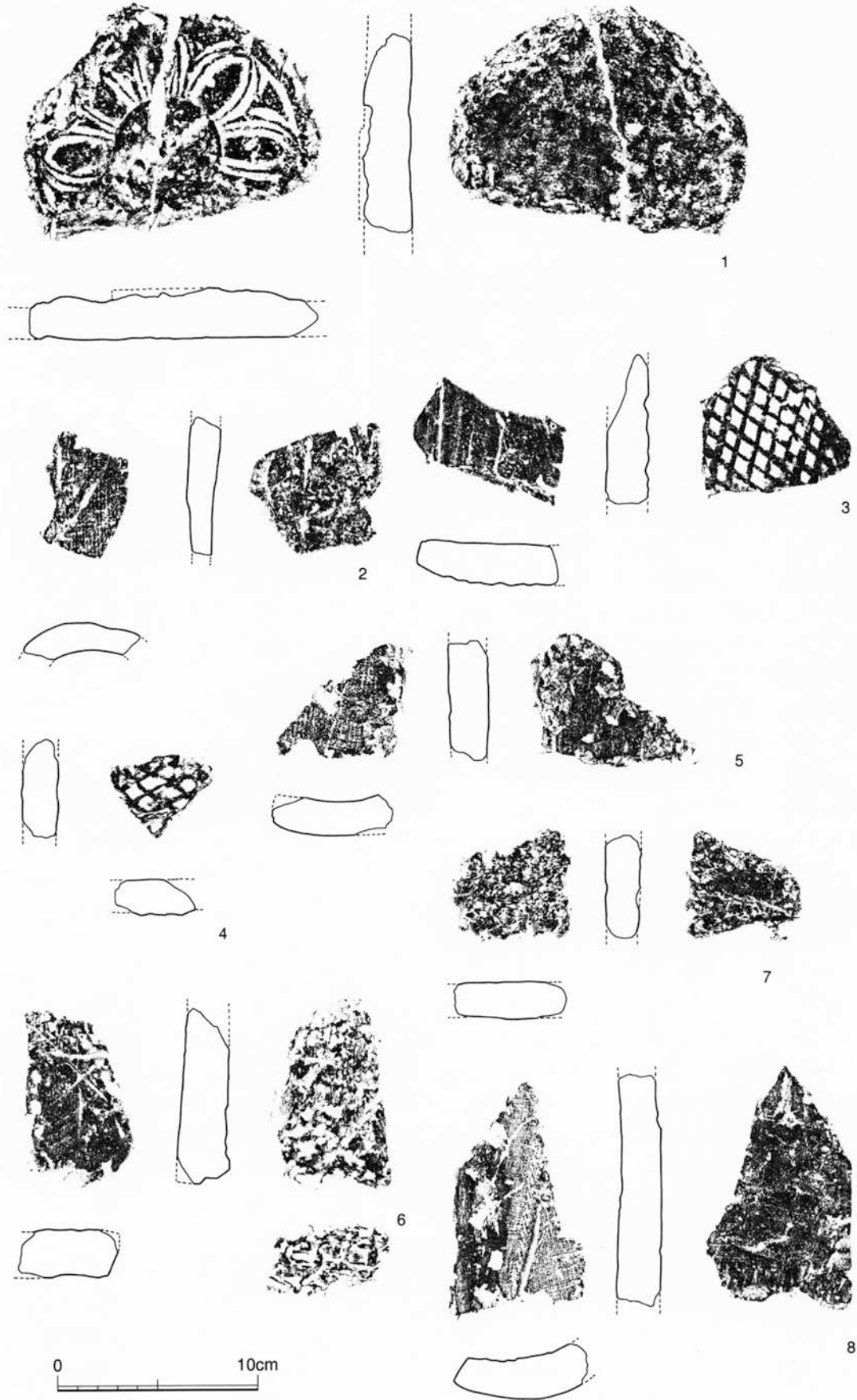
第179図 緑釉・灰釉陶器 (S=1/3)  
(上段緑釉・下段灰釉)

2・3期頃、272が出越編年Ⅱ-3期頃、256が出越編年Ⅱ-3期～Ⅲ-1期頃、259が出越編年Ⅲ-1期頃、262が出越編年Ⅲ-1・2期頃、254・260・263・264・273が出越編年Ⅲ-2期頃、265・266・268が出越編年Ⅲ-2・3期頃、253・269が出越編年Ⅲ-3期～Ⅳ-1期頃、274が出越編年Ⅳ-1期頃、270が出越編年Ⅳ-1・2期頃、275が出越編年Ⅳ-3期頃と考えられる。

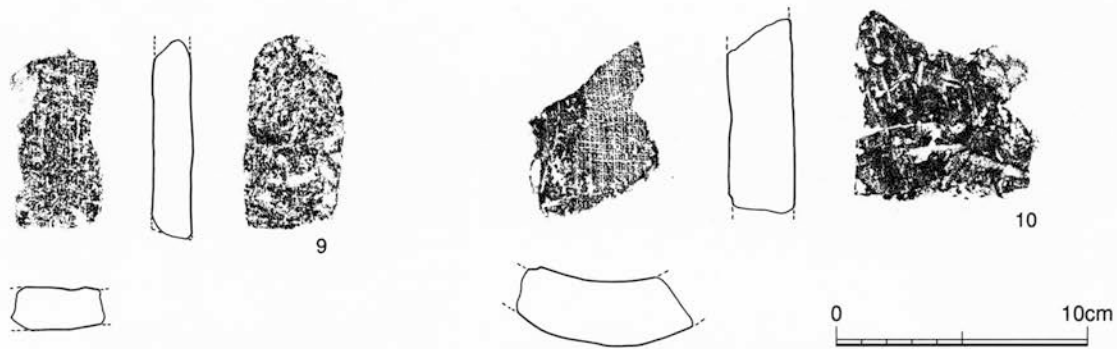
煮炊具の時期は、278・279が田嶋編年Ⅰ-1期頃、276が田嶋編年Ⅰ期頃、277が田嶋編年Ⅱ期頃、280・281が田嶋編年Ⅳ-1期頃、282・283・284が田嶋編年Ⅳ-2期頃(284が古期、283が新期か?)、286・288が田嶋編年Ⅵ-3期頃、287が田嶋編年Ⅵ-3期～Ⅶ-1期頃と考えられる。285は底部破片であるため、時期不祥である。

#### 第4項 施釉陶器 (第179図)

施釉陶器は、緑釉陶器(上段1～4)及び灰釉陶器(下段1～5)が出土している。緑釉陶器は全部で6点出土しており、その内訳は碗1点(2)・小碗1点(1)・端反碗1点(3)・無台皿1点(4)・不明2点である。無台皿が軟陶である以外は、全て硬陶である。1はやや荒い胎土で、焼き締まりもやや甘い。しかし、釉が厚くかかっており、光沢があり深い緑色を呈する。2は、釉層が1に比べやや薄手であり、素地の調整痕跡が露見している。体部内外面にヘラナデ調整が施されており、見込みには円圈状に調整時のスジが残る。また、三叉トチンの使用痕跡も見え、底部には回転糸切り痕が明瞭に残っている。貼り付け高台であり、高橋照彦氏の分類でb類とされる内側に段を持つ形態のものである。3も釉層は1に比べやや薄手である。ただし、素地の焼き締まりは良い。4は釉の剥落が激しく詳細は不明であるが、痕跡から全面施釉と考えられる。全て近江産の製品と考えられ、時期はⅡ期(10世紀後半頃、畿内Ⅴ期並行)に比定される。1が130号から出土している以外は、遺構外からの出土である。灰釉陶器は全部で15点出土しており、全て碗形態と考えられる。その内訳は、碗B1点(1)、碗底部2点(2・5)、小型碗底部1点、碗体部7点、端反系碗口縁部4点(3・4)である。全て施釉方法は漬け掛けで、見込み無釉の製品である。1は、高台が低く、断面三角形のものである。底部には、回転糸切り痕が残っている。この個体は、口縁部破片が38号溝、底部破片が遺構外と別々の所から出土している。また、底部破片の見込み部が硯に転用されている。よって、口縁部破損後に割り欠きを行い、38号溝にその部分を廃棄して、底部破片を硯として使用したという流れ



第180图 瓦 (1) (S=1/3)



第181図 瓦 (2) (S=1/3)

が推察される。2は細長い高台が付くもので、底部はヘラケズリ調整が施されている。形態から深椀ではないかと考えられる。3は端反椀である。釉が剥がれたためか、内外面とも口縁端部のみが露胎となっている。4は端反が殆ど見られず若干その傾向が残る程度である。内面に沈線状の線があり、残存部位だけでも4条確認される。5は断面三角形の高台が付くもので、底部は回転糸切り痕が残っている。形態から椀Bではないかと考えられる。出土した灰釉陶器は、全て美濃（東濃）産と考えられる。時期は、2～5が虎溪山1号窯式頃（10世紀後半代、猿投H-72号窯式並行）に比定され、1が明和27号窯式頃（11世紀2/4、猿投百代寺窯式並行）と考えられる。

緑釉陶器と灰釉陶器の比率をみても、緑釉陶器28%：灰釉陶器71%となる。数値だけみると、灰釉陶器が圧倒する東国型となるが、個体数が少ないため明言はできない。出土量は非常に少なく、一般集落の域をでるものではない。

#### 第5項 瓦 (第180図～第181図)

今回の調査において、13点の瓦片が出土している。内訳は、軒丸瓦1点（1）、丸瓦1点（2）、平瓦（鬘斗瓦の可能性もある）11点（3～10）である。今回の出土品は、全体法量が判明する資料が存在しないため、観察表は割愛したことをお断りしておく。1は瓦当の部分のみであり、筒部は外れてしまっている。焼き締まりが弱く、灰白色の色調である。最大厚で2.5cm、残存径で約16cmを測る。外区部分を欠くが、裏面の接着痕跡から判断すれば、さほど広いものではなかったようである。瓦当文様は、単弁八葉蓮華文が施されている。弁本体と二重の凸線で弁全体が表現されており、4mm程度の厚みを持った文様となっている。中房は推定径で5.2cmを測るが、蓮子の様子は破損のため不明である。裏面には目立った調整痕は確認できない。2は最大厚で、1.5cmを測る。酸化焼成となってしまったため、凸面浅黄橙色（凹面橙色）を呈する。凸面の調整は不明であるが、凹面には荒い布目痕が観察される。3は左側端面が残存している破片である。最大厚で2.1cmを測る。凹面には細かい布目痕が観察される。凸面には斜格子叩きが施され、端部から約1.5cm幅の部分が面取りされる。瓦質土器様に焼成されており、黒灰色を呈する。4は、3と同形態の平瓦の破片である。5は最大厚で2.0cmを測る破片である。凹面にはやや荒い布目痕が観察され、凸面にはタテケズリ調整が施される。焼き締まりはやや弱いが、還元焼成されており灰色を呈する。6は最大厚で2.6cmを測る破片で、端面が1箇所残存している。凹面には細かい布目痕が観察され、凸面には3・4より粗く形が崩れた斜格子叩きが施される。還元焼成されており灰色を呈する。7は最大厚で1.9cmを測る破片である。凹面には布目痕が若干観察されるのみで、他は不明瞭である。還元焼成されており灰色を呈する。8は最大厚で2.25cmを測る破片であり、左側端面が残存している。凹面にはやや荒い布目痕が観察され、布の継ぎ目痕も存在する。端面から約1.5cm幅の箇所に、タテケズリ調整が施されている。凸面にはタテケズリ調整が施される。焼き締まりは良く、還元焼成されており青灰色を呈する。9は最大厚で1.75cmを測る破片

で、端面が1箇所残存している。凹面には布目痕が若干観察されるのみで、他は不明瞭である。やや酸化気味の焼成であり、灰白色を呈する。10は最大厚で2.65cmを測る破片である。凹面にはやや荒い布目痕が観察され、8と同様の箇所にタテケズリ調整が施されている。凸面にはタテケズリ調整が施される。8・10は同一技法による製品と考えられる。焼き締まりは良く、還元焼成されており青灰色を呈する。1が11号溝から出土している以外は、遺構外からの出土である。ただし、1についても、11号溝の遺構確認段階で覆土上面から検出されたものであり、遺構外とみるべきである。

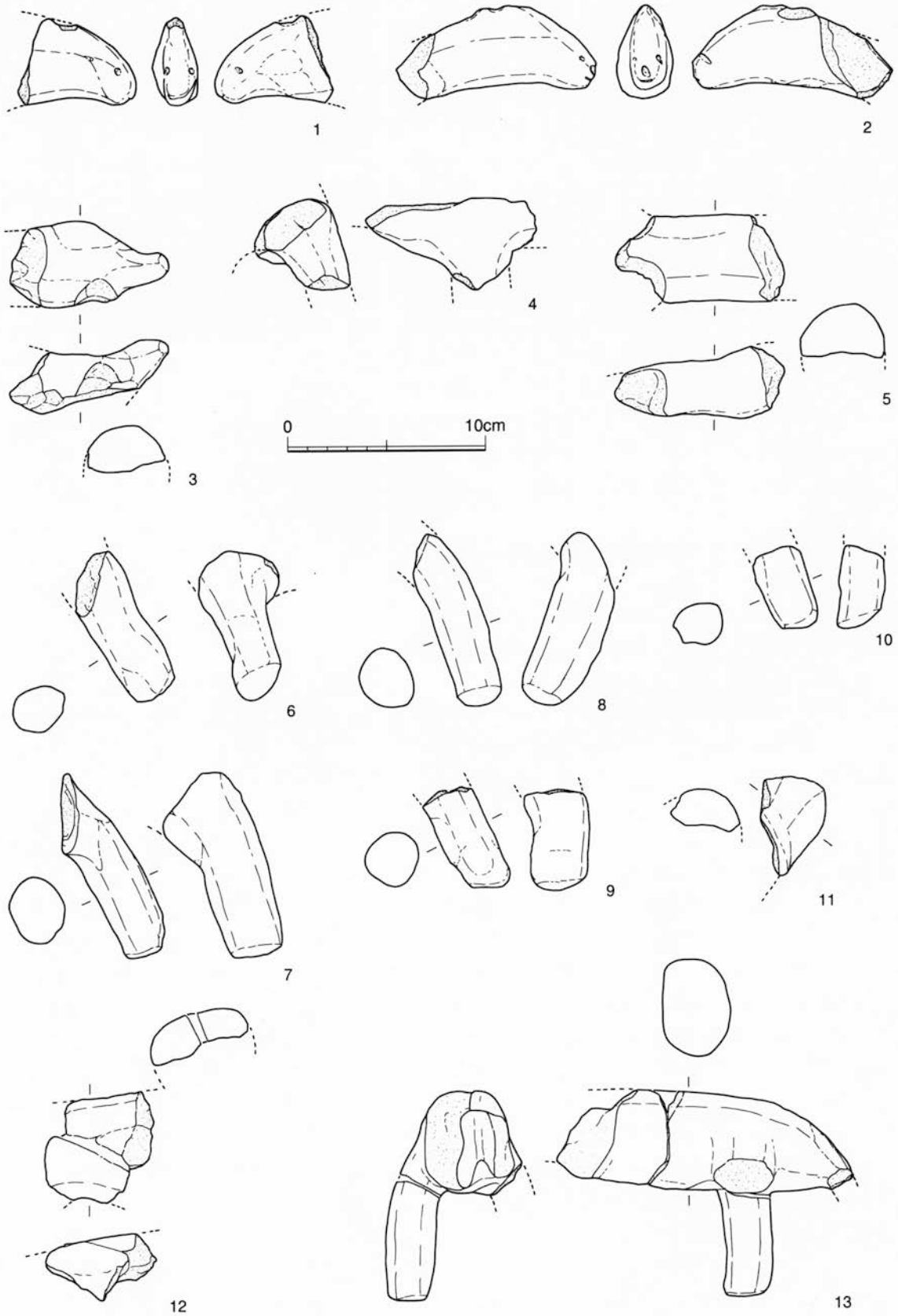
瓦は、白色粒が目立つという胎土の特徴から、能美窯産と考えられる。時期は7世紀後半～8世紀前半頃と考えられる。1の瓦当文様は、東海地方及び武蔵国国分寺創建期瓦に類例があり、北陸では確認されていない文様である。武蔵国国分寺創建期瓦については、南比企・勝呂系と分類される一群に見られる。武蔵国国分寺の創建期は8世紀後半代とされており、当遺跡出土品より後出となる。文様の面では、蓮弁を表現する凸線が一条少ないという違いはある。武蔵国国分寺と同範瓦が存在する、7世紀後半に創建された勝呂廃寺との関係が注目される。これらの瓦が葺かれた建物は、その出土量及び遺構の面からみても当遺跡内には存在しない。当遺跡付近では、国分寺及びその前身勝興寺推定地（確証なし）とされる十九堂山遺跡から、格子叩きを持つ平瓦が出土している。また、当遺跡対岸の佐々木遺跡から8世紀末頃の「財部寺」と書かれた墨書土器が出土しており、在地有力氏族の財部氏の氏寺が近郊に存在することが想定されている。現時点では勝興寺と財部寺が一致するかどうかは不明ではあるが、当遺跡出土瓦の出所として、有力候補であることはいえる。

## 第6項 土師質特殊遺物（第182図～第183図）

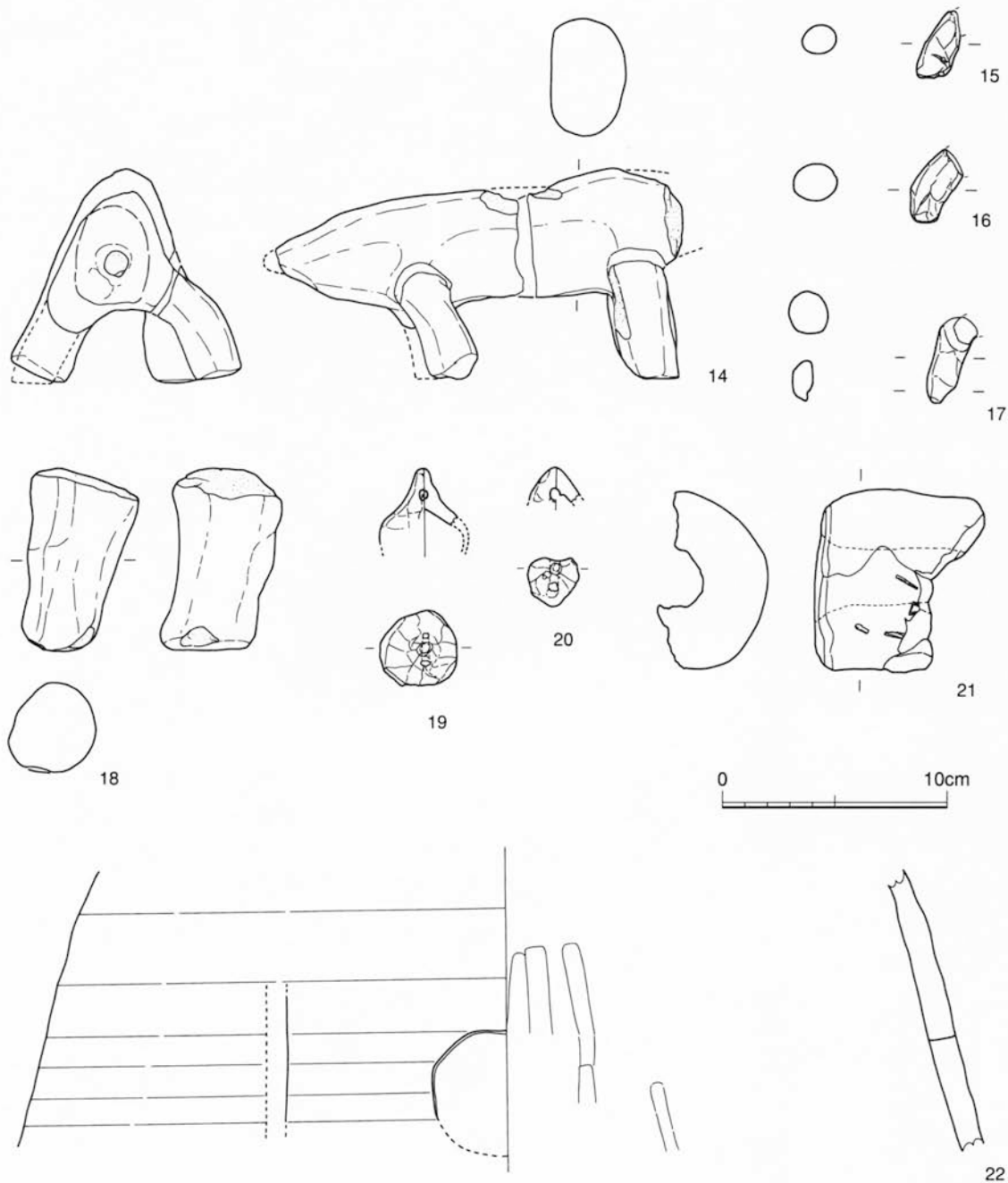
土師質特殊遺物は、土馬・獣脚・土鈴・羽口が出土している。土馬は、全部で18点出土しており、17点を図化した。1～14は、38号溝出土で、ほぼまとまった位置から出土した一群である（出土状況については第3章参照）。全て裸馬であり、胎土及び色調も共通している。破碎されて廃棄されていたものであり、正確な個体数は不明であるが、接合しない体部破片で数えると、5個体分は存在するようである。1・2は頭部破片である。1は、目が棒状工具で表現されており、口はスジで、鬣は粘土つまみ上げで表現されている。2は、目・口・鬣は1と同様に表現されているが、長い頸部が残存しており、鼻も棒状工具で表現されている。3は背部破片であり、尾の表現がある。4は左後背部、5は背部である。6～10は脚で、前後左右は焼成時の黒斑の位置から判断している。6・7は左後脚、8・9は左前脚である。10は左脚であるが、前後は不明である。11は左足付根部で、12は背部である。13・14はある程度復元できた個体である。13は3片が接合しているが、頭部・前脚・左後脚・尾部を欠く。14は5片が接合しており、頭部・左後脚・尾部を欠く。14から使用過程を復元すると、尾部は破損しやすい箇所であるため除外すれば、頭部・胴部中央・左右前後脚付根部の6箇所を折って廃棄していることが分かる。基本的にはこの6箇所を折ることが目的であり、他の破損部位は、破碎行為の際の衝撃で割れたものと考えられる。ただし、県内の出土例では胴部を折らない例も多く、一般化できるものではない。時期は、その重厚な作りから、7世紀末頃と考えられる。15～17も土馬の脚部である。15・16は右前脚、17は右後足と考えられる。脚部が細く短くなった形態のものであり、律令祭祀具として定型化した段階のものと考えられる。よって、長岡京期以降（784年～）のものと同推察される。15は、38号溝出土、16・17は170号溝出土であるが、当該遺構は弥生時代後期～古墳時代初頭期の遺構であるため、混入と判断される。

18は上部に貼り付け痕跡が認められるため、獣脚と判断される。重厚な作りであるが、どのような器種に付随したかは、不明である。市内では鳥遺跡に須恵質ではあるが類例があることから、古代遺物と判断している。

19・20は土鈴の紐部分と考えられる。県内出土例である西念・南新保遺跡出土品は、金属器模倣の祭祀具とされているが、当遺跡のものは体部部分が存在せず判断できない。また、径が7～9cm程度あり、4cm程度と想定される当遺跡のものより大きい。ただし、当遺跡対岸の佐々木遺跡より、銅製



第182図 土師質特殊遺物 (1) (S=1/3)



第183図 土師質特殊遺物 (2) (S=1/3)

の鈴が出土している。径は3cm程度であり、当遺跡のものより一回り小さいため、数タイプの法量が存在することが予想される。遺構外出土だが、胎土から古代遺物と判断した。

21はフイゴの羽口と考えられる土製品である。孔内の比熱状況から、使用を経ていると判断される。当遺跡からは鉾滓も出土しているが、その殆どが遺構外からの出土である。また、鍛冶関連遺構も存在しないため、実測図は掲載しなかった。

22は大型の土師器製品であるが、台付鉢の脚部破片と考えられる。円形と長方形のスカシが施されている。長方形のスカシに関しては、スカシの存在を示すことを優先するために点線を入れたものであり、図示した大きさは想定である。内面には、縦方向に指ナデ調整が施されている。時期は不明である。

## 第7項 木製遺物

### 1. 井戸部材 (第184図～第186図)

横板組井戸である1号井戸の部材である。全て板材であり、底板の18-1～21は北から南の順番に掲載してある。1・2は隙間調整部材で、底板の東西隅に斜めに切った方を外側の向けて設置されていた。板材は、地上に近い1段目が非常に残りが悪い状態で、下段へ行くほど残りが良い。よって、3段目以下の部材(10～21)には、成形痕が明瞭に残っている。底板は、100cm×87.5cmに設定されている。井戸側部材の全長は、120cmに設定されており、底板に合う位置に溝が切られる。井戸側材は4・5以外に板目材が使用されている以外は、全て柁目材である。底板は全て板目材が使用されている。出土地点については、遺構平面図を参照して頂きたい。

### 2. 木製品 (第187図～第188図)

木製品は、曲物容器(1・4)・横櫛(2)・容器(3)が出土している。曲物容器(1)・横櫛(2)・容器(3)は、1号井戸からの一括出土である。1は大型のもので、4枚重ねで成形される。内面にはケビキ線が入る。底板は板目材である。2は、片側が折れてしまっているが、折れた部分は井戸内から出土していない。折れた状態で廃棄されたと考えられる。全面黒漆塗りであり、櫛歯は非常に薄く精巧に作られたものである。形態から、共伴須恵器の年代である8世紀中頃に矛盾しない時期のものであることがいえる。3は、瓢箪の底を利用して作った容器である。出土した時点で、中央の節が脱落して穴の開いた状態であった。4は、215号土坑(素掘り井戸か?)から出土している。既に、側板は土圧により潰れた状態であった。側板外面にもケビキ線が入っていた。底板は柁目材である。

## 第5項 石製遺物 (第189図)

石製遺物は権状錘(1)・紡錘車(2)・用途不明品(3)・砥石(4・5)が出土している。権状錘(1)は、凝灰質砂岩製で、上端部が折れた状態である。孔は側面だけでなく、上面中心部に縦にも開けられていて、側面の穴を貫通している。紐を通す際に、中心部からぶら下がるようにするための穴と考えられる。また、下底面中央部にも孔が穿たれている。重量は残存重で22.33gを計る。紡錘車(2)は、珪化凝灰岩製であり、31.18gを計る。破損品ではあるが、上面に木の葉文、下底面に記号文が刻まれていることから、実用品かどうかは疑問が残る。用途不明品(3)は、角礫凝灰岩製であり、断面蒲鉾型を呈する。裏面は破損しており、全形は窺い知れないが、石塔類の一部の可能性が考えられる。1～3は、130号溝からの出土である。

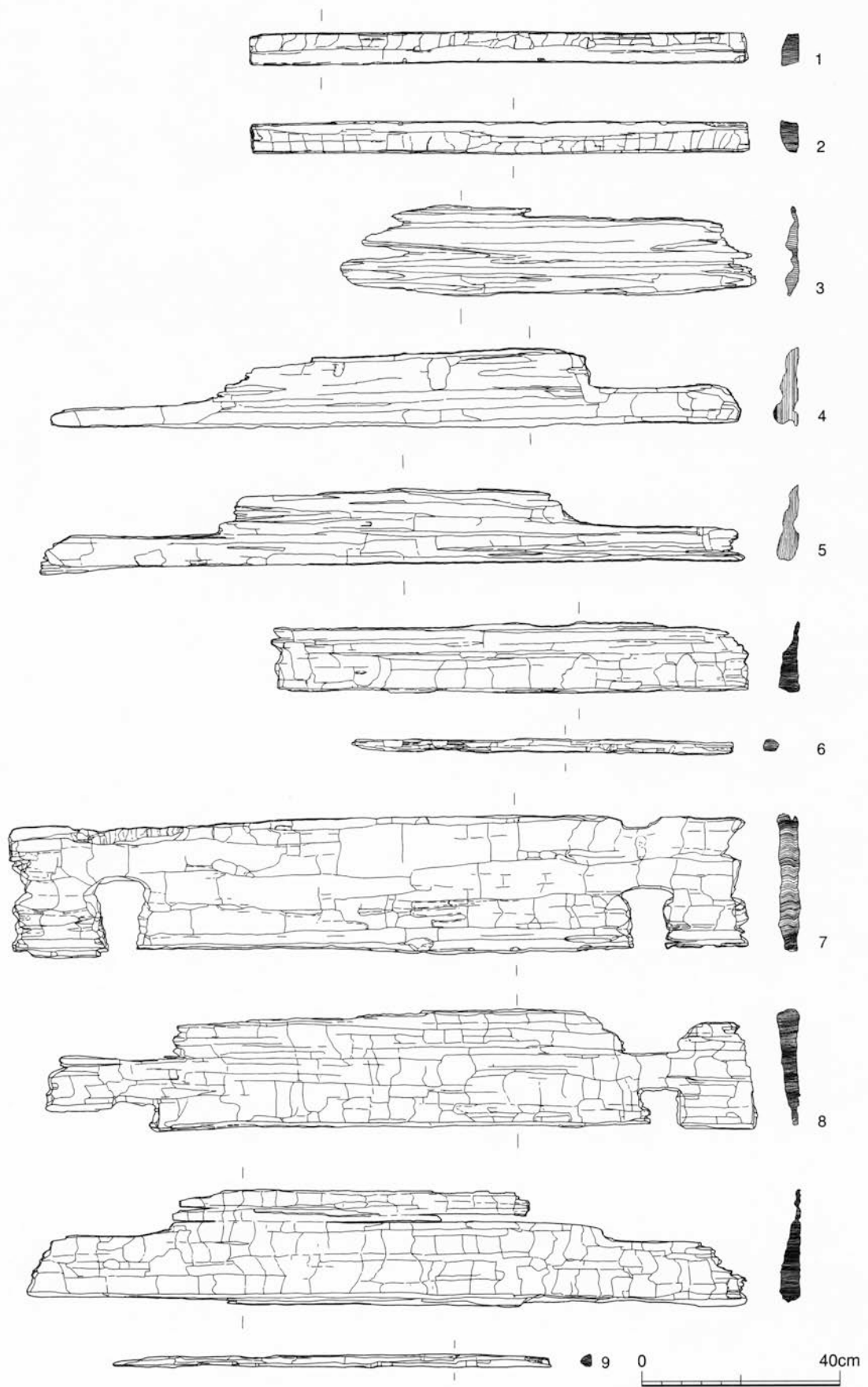
4・5は砥石である。石材は、4が砂岩で5が珪化凝灰岩である。4は、表・裏面と片方の側面が砥面として利用されており、目が粗く荒砥石と考えられる。215号土坑出土である。5は、表面と片方の側面が砥面として利用されており、目が細かく仕上げ砥石と考えられる。上端部は打撃により割られている。179号土坑出土である。

第12表 石製遺物観察表

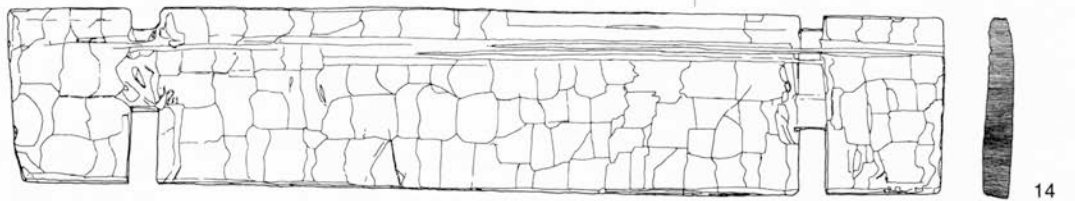
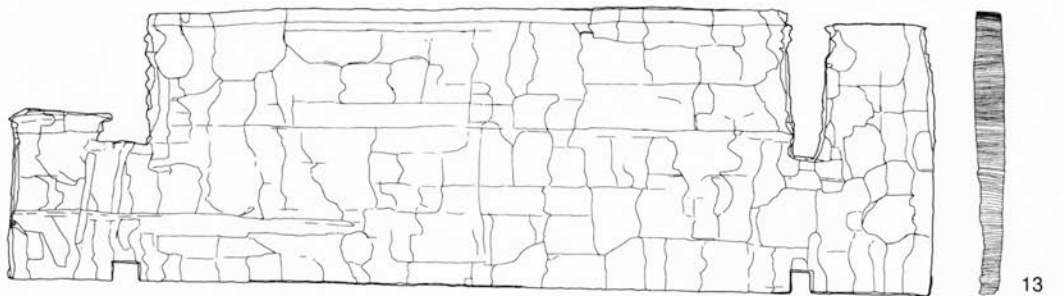
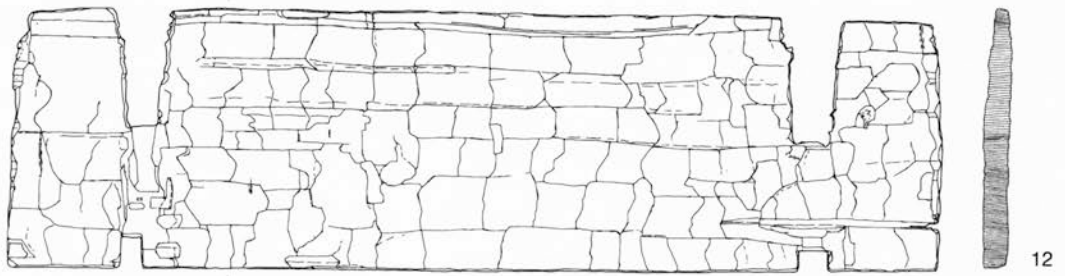
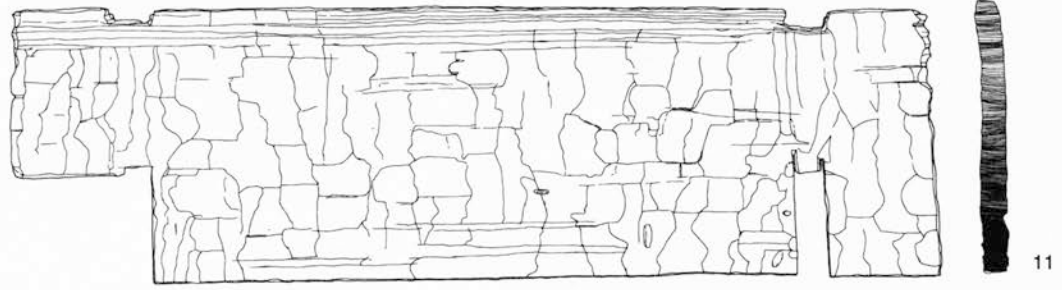
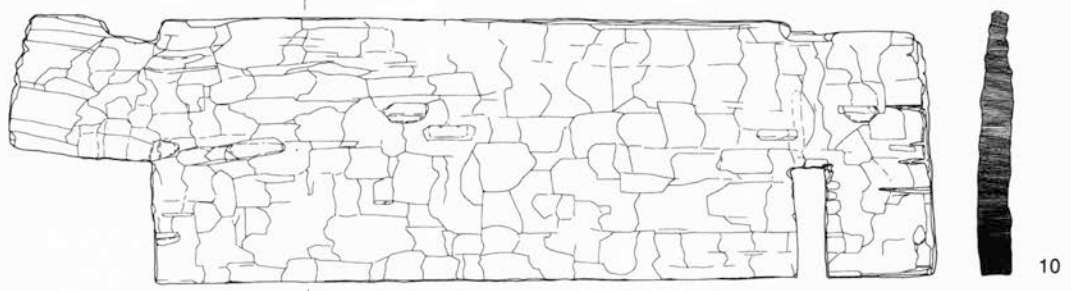
(単位:cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	130号溝	1点	権状錘	凝灰質砂岩	22.33	(2.8)	2.8	2.6	
2	130号溝	1点	紡錘車	珪化凝灰岩	31.18	1.95	4.2	1.9	穴直径1.1
3	130号溝	1点	石製品	角礫凝灰岩	2230	(20.7)	17.85	(6.1)	
4	215号土坑	1点	砥石	砂岩	60	(4.2)	(3.45)	2.4	荒砥石
5	179号土坑	1点	砥石	珪化凝灰岩	150	(9.0)	5.8	2.65	仕上げ砥石



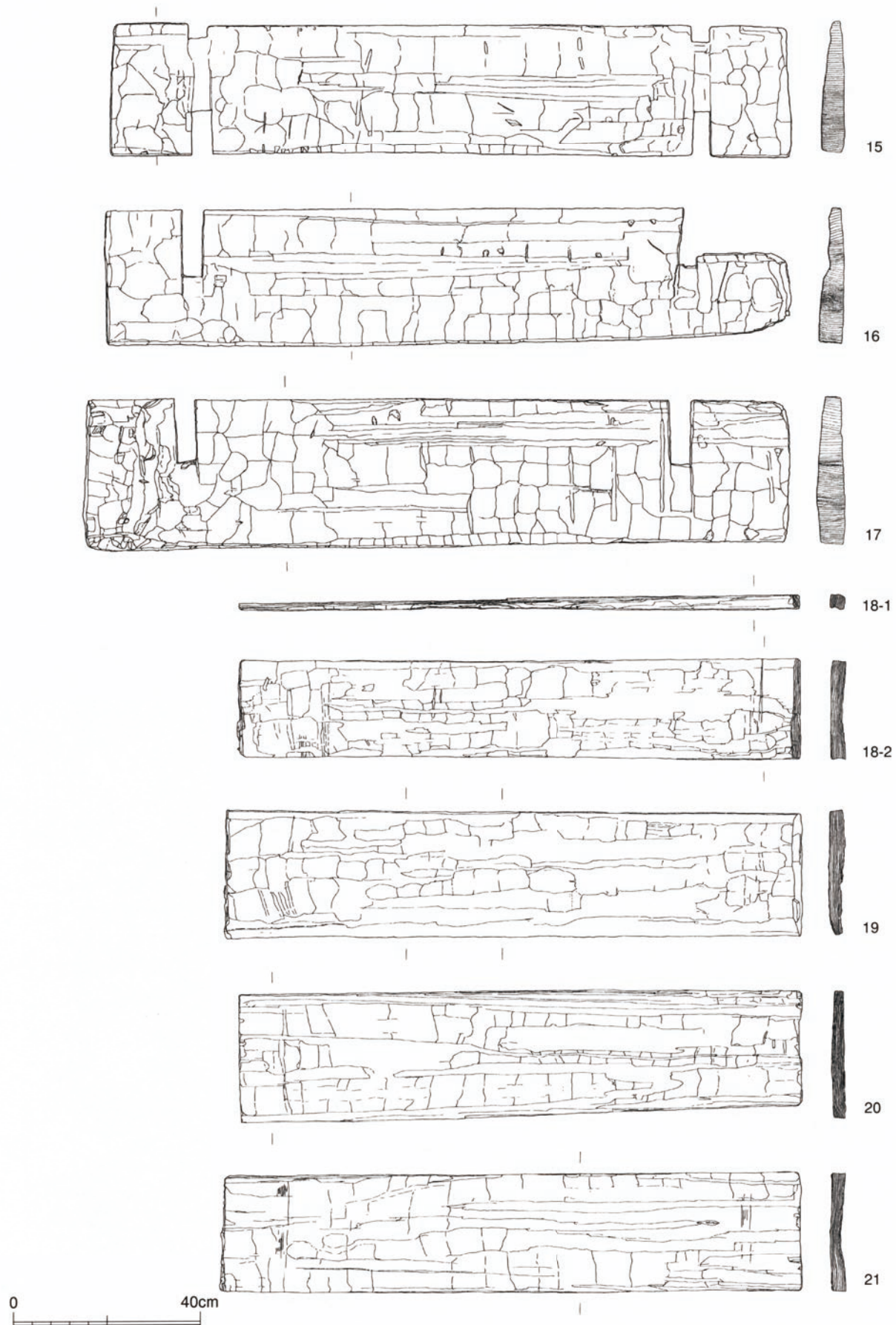


第184図 1号井戸・井戸側材 (S=1/12)

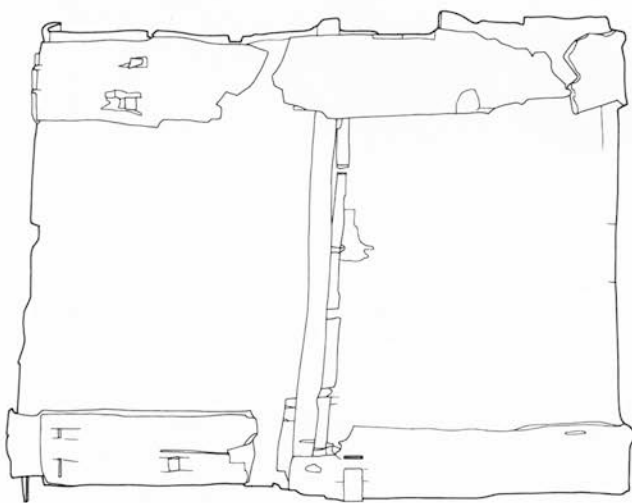


0 40cm

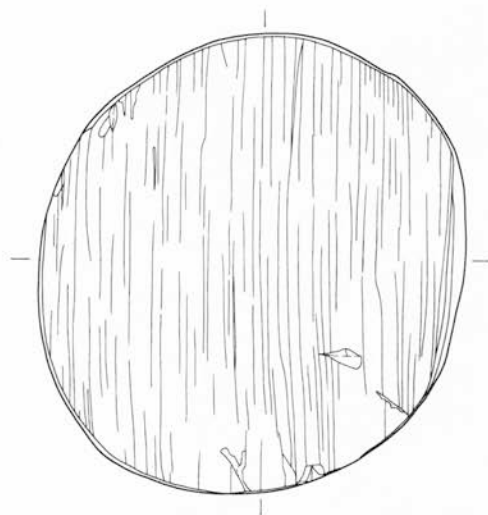
第185図 1号井戸・井戸側材 (S=1/12)



第186図 1号井戸・井戸側材 (S=1/12)



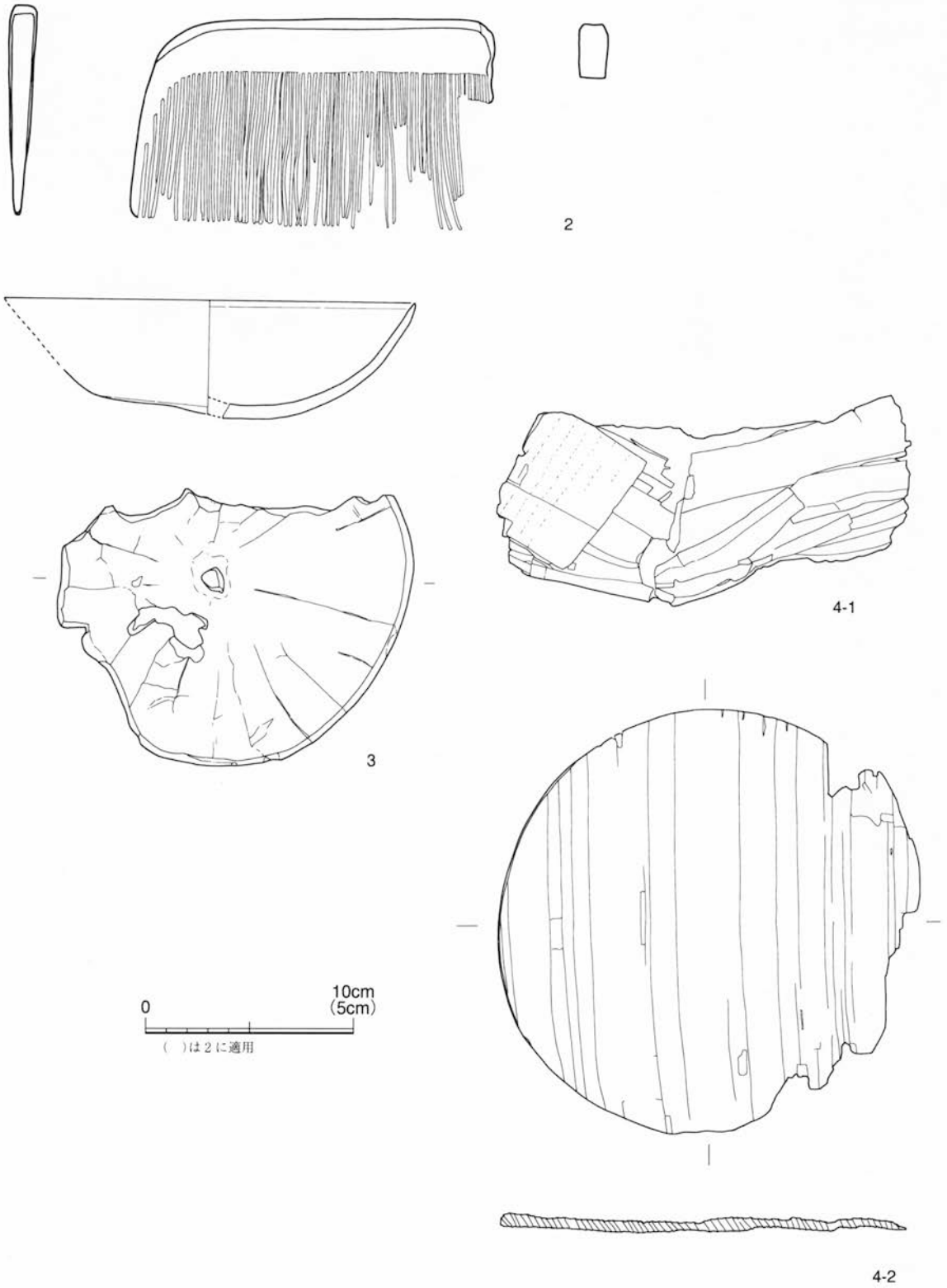
1-1



1-2



第187図 1号井戸出土木製品 (S=1/3)



第188図 1号井戸 (2・3) ・215号土坑 (4-1・4-2) 出土木製品 (S=1/3・2/3)



第189図 130号溝出土石製品 (1~3) ・砥石 (1・2) (S=1/3)

## 古代観察表凡例

1. 番号は掲載順であり、実測図と対応している。

2. 器種と時期は、基本的には、田嶋明人1988年「古代編年軸の設定」『シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題（報告編）』北陸古代土器研究会に基づいている。ただし、器種名については、望月精司1999年「越前・南加賀地域の古代須恵器貯蔵具」、北野博司1999年「須恵器貯蔵具の器種分類案」『北陸古代土器研究』第8号北陸古代土器研究会を参考にした。時期については、当遺跡では古代後半～末期の土師器食器が主体的遺物であったため、当該期に限り時期判定には出越茂和1997年「古代後半期における椀皿食器（後）」『北陸古代土器研究』第7号北陸古代土器研究会を主として使用した。なお、年代観は出越氏の年代観に拠った。なるべく併記するよう務めたが、統一基準として提示できなかったことは、お詫び申し上げる。右表に対応関係を記しておくので、参照して頂きたい。なお、施釉陶器については、出越茂和氏に御教授を賜った。

編年対照表

		出越	田嶋	田嶋
I	1	-820		V-1
	2		-850	V-2
	3	-850		V-2 ~ VI-1
	4		-900	VI-1
II	1	-900		VI-2
			-950	VI-3
	2古			VII-1
	2新	-950	-1000	VII-2古
	3			VII-2古
III	1	-1000	-1050	VII-2新
	2			VII-2新
	3	-1050		中世I-1
IV	1			中世I-1
	2	-1100	-1100	中世I-II1
	3			中世I-II2

3. 色調は、均質的な部分で判断している。内面と異なる場合は、備考に記した。

4. 胎土は、須恵器は産地別、土師器は胎土特徴で以下に分類している。施釉陶器については、緻密か粗かについてのみ記した。

須恵器胎土

- A 類 能美窯産の胎土。
- B 類 末窯産の胎土。
- C 類 南加賀窯産の胎土。
- C良類 南加賀窯産だが、砂粒の混入が比較的少ない胎土
- D 類 陶邑産と考えられる加賀国以外の産地の胎土。

土師器胎土（食膳具）

- ① 類 微砂粒を多量に含む。石英（微細粒）、白色粒（微細粒）を含む。赤色粒を少量含む。特大黒灰色粒（3mm大程度）は稀に含む。
- ①B類 ①類に比べ微砂粒の粒径が大きく、1mm大粒を定量含む。ただし、特大粒は含まない。
- ② 類 微砂粒を少量含む。石英（微細粒）は極少量で目立たない。白色粒（微細粒）は少量含む。赤色粒は極僅かで、特大黒灰色粒（3mm大程度）は稀に含む。
- ②B類 ②類の特徴だが、特大白色粒（3～5mm大）を含む。
- ③ 類 微砂粒を少量含む。石英（微細粒）を含む。白色粒（微細粒）を多量に含む。赤色粒はやや多く含み、黒灰色粒は1mm大以下で含む。ただし、特大粒は含まない。
- ④ 類 水肥した砂粒を含まない精良胎土
- ④B類 微砂粒を極少量含む。
- ④C類 やや粒の大きい砂粒を少量含む。
- ⑤ 類 やや粒の大きい白色粒を大量に含む。石英（微細粒）は少量含む。

⑥ 類 微砂粒を凝縮した感じで、器表面がサラサラする胎土。石英（微細粒）多く含む。白色粒（微細粒）は極少量含む。

⑥B類 基本系統は同様だが微砂粒の量が多く、粗目の胎土。

⑥C類 基本系統は同様だが粒の大きい砂粒が目立ち、特大5mm大粒も含む。白色粒多く含む。

土師器胎土〈煮炊具〉

1 類 微砂粒を多量に含む。特大粒5mm大程度を含む。食膳具①類に対応か？

1 B類 1類に比べ微砂粒の量が少ない精良タイプ。

2 類 微砂粒を少量含み、2mm大粒（赤色粒目立つ）を含む。食膳具③類に対応か？

3 類 微砂粒及び白色粒（1～2mm大）を多量に含む。黒灰色粒（1mm大）で極少量含む。

4 類 微砂粒を多量に含み、雲母粒が目立つ胎土。赤色粒極少量含む。

5 類 微砂粒を殆ど含まない胎土。灰色粒（2～3mm大）のみやや多く含む。食膳具②類に対応か？

5 B類 白色粒（2～3mm大）のみやや多く含む。食膳具②B類に対応か？

6 類 微砂粒を大量に含み、器表面が膜状に剥離する。特大粒は含まない。

7 類 粒径がやや大きい砂粒（1～2mm大）を主体として多量に含む。赤色粒を含む。

7 B類 基本系統は同様だが粒径1mm大が主体であり、2mm大を超えるものを含まない。

8 類 微砂粒を凝縮した感じで、器表面がサラサラする胎土。含む砂粒も基本的には1mm大以下の微細なもので、特大粒は稀に含む程度である。食膳具⑥類に対応か？

9 類 水肥した砂粒を殆ど含まない精良胎土であるが、白色粒（微細粒）のみは少量含む。食膳具④類に対応か？

5. 焼成は、須恵器については、焼締まりの段階に応じて上・中上・中・中下・下の5段階に分類した。他の種類の土器・陶磁器についても同様である。ただし、土師器については、上・中・下の3段階に分類した。

6. 計測値において、( ) は残存値、[ ] は復元値を表している。

7. 出土地点に関しては、出土地点の記録のあるものは接合点数で標記してある。出土状況図を参照して頂きたい。なお、区分けについては、2分法で調査した土坑は北ないし東からA区となる。4分法以上では、北西端がA区となり反時計回りに進む。溝に関しては、セクションベルトを境として、北ないし東からA区となる。該当しないものに限り、図示してある。

8. 備考については、口縁残存破片については、口縁部残存率を記してある。須恵器については、墨書及び転用硯等について付記した。また、坏B類における重焼分類（北野博司1988年「重ね焼きの観察」『辰口西部遺跡群Ⅰ』石川県立埋蔵文化財センター）及び、甕類胴部における叩き具・当て具文様分類（花塚信雄1985「叩き目文の原体同定—生産組織の解明に向けて—」『辰口町湯屋古窯跡』辰口町教育委員会）についても記してある（下記参照）。土師器については煤の付着状況について付記した。施釉陶器については、施釉範囲を提示してある。

坏B類重焼分類

I 類 蓋身正位で重ねたものを1単位として2段程度で重ね焼きするもの。

II a類 蓋を逆位で身に重ねたものを1単位として身・蓋・身・蓋の順で高く重ね焼きするもの。

II b類 蓋を逆位で身に重ねたものを1単位として身・蓋・蓋・身の順で高く重ね焼きするもの。

III 類 蓋と身を分けて、そのみで重ね焼きをするもの。

叩き具・当て具文様分類

Ha類 木目直交の平行線文、Hb類 木目左下がり斜行線文、Hc類 木目右下がり斜行線文、



H d 類 木目平行の平行線文、He類 木目確認できない平行線文、D a 類 木目確認できない同心円文、D b 類 木目が年輪状に平行して入る同心円文、D c 類 木目が柁目状に入る同心円文。

第13表 器種別破片数集計表

製品	点数	割合	製品	点数	割合		
須恵器 (食膳具)	坏H蓋	15	3.07%	土師器 (食膳具)	黒色椀A	52	0.45%
	坏H	16	0.25%		黒色椀B	205	1.76%
	坏B蓋	500	7.97%		黒食小皿 (柱高)	2	0.02%
	坏B	489	7.79%		黒色椀A・B	96	0.82%
	坏G蓋	2	0.03%		黒色食器	251	2.15%
	坏G	2	0.03%		赤彩椀 (古代前半期)	16	0.14%
	坏A	1046	16.67%		赤彩椀A	11	0.09%
	坏D	1	0.02%		赤彩椀B	6	0.05%
	坏類	304	4.84%		赤彩蓋	1	0.01%
	盤A	200	1.11%		赤彩小皿 I	1	0.01%
	盤B	98	1.56%		赤彩小皿 II	1	0.01%
	盤類	139	2.22%		赤彩盤A	1	0.01%
	皿A	5	0.08%		赤彩椀A・B	2	0.02%
	皿B	23	0.37%		赤彩食器	36	0.31%
	皿類	19	0.30%		外赤内黒椀B	2	0.02%
	椀A	24	0.38%		外赤内黒椀A・B	3	0.03%
	椀B	51	0.81%		椀A (古代前期)	18	0.15%
	椀類	57	0.91%		椀A	560	4.79%
	無台椀・皿	2	0.03%		椀B	489	4.19%
	有台・椀・皿	6	0.10%		椀A・B	407	3.48%
	特殊品	2	0.03%		小皿 I	84	0.72%
	坏・盤類	147	2.34%		小皿 II	179	1.53%
	椀・皿類	7	0.11%		小皿 I・II	264	2.26%
	高坏・高盤	41	0.65%		小皿 (柱高)	35	0.30%
	食器類	540	8.61%		皿A	3	0.03%
	計	3736	59.54%		皿A (柱高)	18	0.15%
	須恵器 (小型貯蔵具)	小型壺	6		0.10%	皿A・B	1
小型瓶		10	0.16%	蓋	28	0.24%	
小型平瓶		1	0.02%	無台無垢食器	430	3.68%	
小型壺・瓶類		3	0.05%	無垢食器	4040	34.59%	
計		20	0.32%	計	7242	62.00%	
須恵器 (貯蔵具)	鉢A	5	0.08%	土師器 (煮炊具)	ロクロ甕	881	7.54%
	鉢B	13	0.21%		ロクロ小甕	18	0.15%
	鉢C	2	0.03%		ロクロ鍋	106	0.91%
	鉢D	1	0.02%		ロクロ飯	4	0.03%
	鉢E	3	0.05%		鉢	10	0.09%
	鉢F	7	0.11%		ロクロ飯・カマド	4	0.03%
	鉢類	15	0.24%		ロクロ煮炊具	189	1.62%
	壺A	8	0.13%		ハケ甕	447	3.83%
	壺B	6	0.10%		ハケ小甕	10	0.09%
	壺C	1	0.02%		ハケ鍋	1	0.01%
	壺D	1	0.02%		ハケ飯	9	0.08%
	壺E	6	0.10%		鉢 (古墳時代)	2	0.02%
	壺H	19	0.30%		ハケ煮炊具	78	0.67%
	丸底壺	1	0.02%		カマド	3	0.03%
	無頭壺	2	0.03%		把手	29	0.25%
	壺類	52	0.83%		煮炊具	2647	22.66%
	壺蓋	4	0.06%		計	4438	38.00%
	瓶A	50	0.80%		土師器総計	11680	65.05%
	瓶B	20	0.32%				
	瓶C	6	0.10%				
	瓶D	89	1.42%				
	提瓶	18	0.29%				
	注口瓶	7	0.11%				
	水瓶	2	0.03%				
	長頸瓶	2	0.03%				
	德利型瓶	2	0.03%				
	瓶類	71	1.13%				
壺・瓶類	538	8.57%					
横瓶	25	0.40%					
横瓶・小甕	1	0.02%					
大甕	112	1.78%					
中甕	102	1.63%					
小甕	16	0.25%					
甕類	1211	19.30%					
ハソウ	1	0.02%					
貯蔵具類	94	1.50%					
計	2513	40.05%					
須恵器煮炊具	瓶	1	0.02%				
	計	1	0.02%				
須恵器特殊品	甕転用硯	4	0.06%				
	円面硯?	1	0.02%				
	計	5	0.08%				
須恵器総計	6275	34.95%	総計	17955	100.00%		

第14表 古墳時代後期後半～古代須恵器観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	底径 (高台径)	胴部径 (最大幅)	頸部径	見込み高	鈕径/鈕高	備考(口縁部残存率)
1	69号建物	P-9	坏B	暗灰	C	上	11.0							内面灰色。4.5/36
2	69号建物	P-12	坏B	灰	C	中上	14.2	6.3	9.9			4.85		内面灰白色。19/36
3	82号建物	P-6	坏B蓋	淡青灰	C	中上								
4	87号建物	P-7	坏A	青灰	C良	上	15.2	2.7	11.8			[2.2]		1/36
5	96号建物	P-4	坏	灰	C	中	11.0	3.2	8.5			2.8		31.5/36
6	101号建物	P-7	坏A	灰	A	上	12.2							3.5/36
7	101号建物	P-7	盤A	灰	C良	中上	15.1	2.3	11.9			[1.7]		3/36
8	101号建物	P-8	高坏	青灰	C	中上					3.9			
9	1号井戸	1点	坏A	暗灰	C	上	12.0	3.2	9.6		9.0	[2.7]		墨書。14/36
10	1号井戸	3点接合	盤A	青灰	C	中上	14.4							内面灰色。10/36
11	19号土坑		坏A?	灰白	A	下	14.95							2/36
12	38号土坑	1点	瓶D	青灰	C	上			10.1	(15.4)				内面灰色。自然軸。
13	56号土坑		?	黒灰	C	上			7.4					小型貯蔵具?
14	91号土坑		坏B	暗灰	C	上	10.7	3.4	7.2			2.4		内面灰色。4/36
15	92号土坑	A区	坏A	灰	C	中			10.0					
16	137号土坑/159号土坑	2点接合/1点	坏B蓋	灰	C	上	14.0					0.5		重Ⅱb。17.7/36
17	137号土坑	1点	碗B	灰	A	中上		8.6				(9.55)	3.6	
18	158号土坑	1点	坏H蓋	灰	A	中上		7.2						
19	158号土坑	1点	坏G蓋	灰白	A	上	11.3							3/36
20	158号土坑	1点	坏B	青灰	C良	中上	18.6	5.05	13.3					内面灰色。12/36
21	158号土坑	1点	坏B	暗灰	C	上	15.6	3.7	10.6					内面灰色。1.5/36
22	158号土坑	1点	坏B	青灰	C良	中	14.4	3.8	10.2			[2.8]		13/36
23	158号土坑	1点	坏B	暗灰	C良	上	14.8							内面灰色。4/36
24	158号土坑	1点	高坏	灰	C良	中	10.8							4.5/36
25	158号土坑	1点	棧碗	灰	A	中上	13.6							3/36
26	159号土坑		坏G蓋	灰	C	上	10.9					[1.2]		外面降灰。4/36
27	159号土坑	3点接合	坏B蓋	黒灰	C	中	17.0	3.4			1.7	2.95/1.0		内面青灰色。10/36
28	159号土坑	1点	坏B蓋	灰	A	中上	16.4					[1.8]		重Ⅰ。外面降灰。6.5/36
29	159号土坑	1点	坏B	灰	C	上	15.4	3.95	10.8			2.95		6/36
30	159号土坑	1点	坏A	灰	C	上	13.9	3.6	7.4					7/36
31	159号土坑		坏A	青灰	A	上	12.8	3.0	7.2			2.45		10.5/36
32	159号土坑	1点	坏A	灰	C	中下	12.1							5/36
33	159号土坑	3点接合	坏A	青灰	C良	中	13.0							8.5/36
34	159号土坑		坏A	暗灰	C	上		9.0						
35	159号土坑	1点	碗	灰	A	中	13.6							4.5/36
36	159号土坑	1点	瓶	青灰	C	中上		9.0	(14.4)					内面暗灰色。
37	159号土坑	1点	瓶	黒灰	A	中上		9.4						内面灰色。自然軸。
38	159号土坑	3点接合	瓶A?	淡青灰	C	上				6.0				内面灰色。外面降灰。
39	176号土坑		坏B蓋	灰	C	中	13.4	3.0			1.25	2.75/1.0		重Ⅱb。4.5/36
40	176号土坑/130号溝	2点接合	坏A	灰白	C	中		9.0						
41	176号土坑		壺・瓶	暗灰	C	上		10.35	(17.2)					
42	214号土坑/P8199		壺B	青灰	A	中上				8.4				
43	215号土坑	最下層	坏A	暗灰	C	上		7.0						
44	215号土坑	1点	盤A	暗灰	C	中	15.8	1.5	13.4			[1.0]		2.5/36
45	215号土坑	中層	碗A	にふい黄橙	C	中下		6.3						酸化焼成
46	215号土坑	6点接合、下層	中甕	青灰	C良	中上								He-Dc
47	10号溝	4区	坏B蓋	灰	C	中							2.7/0.8	
48	13号溝		坏H蓋	灰	C	中	11.9							5/36
49	13号溝	1点	坏B蓋	灰	C良	中上	15.5	2.35			0.6	3.3/1.4		内面青灰色。外面降灰。11.5/36
50	13号溝	2点接合	坏B蓋	暗灰	C	中						3.2/0.6		重Ⅰ。内面灰色。
51	13号溝		坏B蓋	暗灰	C	上	14.4				11.8	(6.2)		内面灰色。外面降灰。3/36
52	13号溝	2点接合	坏B	黒灰	C	中上	12.9	3.6	10.0					内面灰色。7/36
53	13号溝		坏B	灰	C	中下		10.6						
54	13号溝		坏B	青灰	C良	中	16.2							1/36
55	13号溝	1点	坏B	青灰	C良	中	12.5	4.6	9.0			3.6		1/36
56	13号溝	B区	坏A	灰	A	上	10.8							3/36
57	13号溝	1点	坏A	灰	C	中	[12.4]	[3.5]	9.0			[2.5]		墨書。
58	13号溝		坏A	灰	C良	中下		7.4						
59	13号溝	3点接合	坏A	灰白	C	下	13.0	3.3	7.8			2.7		18.5/38
60	13号溝		坏A	淡青灰	C良	中	11.8							
61	13号溝	H区	坏A	浅黄橙	C	中下		6.6						酸化焼成
62	13号溝		盤B	暗灰	A	上								内面灰色。
63	13号溝		盤B	灰	C良	中上								
64	13号溝	G区	盤A	灰白	C	下	12.9	1.95	10.9			[1.3]		1.5/36
65	13号溝		盤A	灰	C	中上		12.2						
66	13号溝		棧碗	灰	C	中上	16.15							
67	13号溝	1点	壺AかB	灰	B	上		11.4						
68	13号溝		樽瓶	黒灰	C	上	11.0				8.4			11/36
69	13号溝		中甕	灰	C	上				20.6				内面暗灰色。?-Da
70	1号大落ち込み	A区、B区	坏B蓋	青灰	C	中						3.3/1.55		内面灰色。
71	1号大落ち込み /13号溝/30号溝	/B区/C区	坏B	灰白	A	上	11.9	4.8	7.7			[3.8]		内面灰色。0.5/36
72	1号大落ち込み		坏B	灰	A	中下	11.4							4.5/36
73	17号溝	A区、B区	坏A	黄灰	A	上	13.0	3.1	9.7			2.7		5/36
74	17号溝	I区	坏B蓋	オリーブ灰	C良	中上	19.4							内面灰色。外面降灰。7.5/36
75	17号溝		坏B	灰	C	上		11.4						
76	17号溝	1点(C区)	坏B	暗灰	C	中	11.6							3/36
77	17号溝		坏B	灰	A	上	15.3							2.5/36
78	17号溝	E区	坏A	灰白	C良	中	13.1	3.25	8.4					2/36
79	17号溝	A区	坏A	灰	A	上		10.2						
80	17号溝	C区	坏A	灰	C	中下		8.8						









番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	底径 (高台径)	胴部径 (最大幅)	頸部径	見込み高	鈕径/鈕高	備考(口縁部残存率)
400	包含層	K-36Gr	盤A	灰白	A	上	15.0	2.2	10.8			[1.6]		15.5/36
401	包含層	E-47Gr	盤A	灰	C良	上	15.6	2.1	10.4			[1.6]		4/36
402	包含層	H-46Gr	盤A	灰	C	上	15.95							3/36
403	包含層	G-21Gr	盤A	灰	C良	上	16.8	1.7	13.8			[1.3]		2.5/36
404	包含層	表土除去	盤A	暗灰	C	上	14.45	1.65	11.3			[1.15]		2.5/36
405	包含層	G-04Gr	盤A	黄灰	C	上	15.3	1.6	4.4			[1.1]		7.5/36
406	包含層	E-32・33Gr	盤A	灰	C	上			11.2					転用規
407	33号溝(混入)		仏器碗?	淡青灰	A	上	11.0							2.5/36
408	包含層	K-46Gr	碗A	灰	A	上	14.4	3.4	7.3					9/36
409	包含層	K-42Gr	碗	オリーブ灰	A	中下	12.4							4.5/36
410	15号土坑(混入)		碗	青灰	C	上	12.1							7.5/36
411	包含層	F-32Gr	碗	青灰	A	上	12.6							内面灰色。3/36
412	包含層	F-16Gr	碗A	暗灰	C良	中			7.0					
413	包含層	C-12Gr	碗A?	青灰	C良	中上			6.1					
414	134号土坑(混入)		碗A	青灰	C良	中			5.8					
415	153号溝(攪乱)		碗B	青灰	C	上			8.3					
416	包含層	F-33Gr	碗B	青灰	C	中上			7.0					
417	包含層	F-30Gr	碗B	青灰	C	中上			6.3					
418	包含層	E・F-10Gr	碗B	青灰	A	中上			8.1					内面淡青灰色。
419	包含層	H-31Gr	碗B	オリーブ灰	C	下			7.0					墨書。
420	包含層	I-41Gr	碗B	青灰	C	中上			7.0					
421	包含層	F-32Gr	碗	灰	C	上	10.0							5.5/36
422	包含層	B-46Gr, C-45Gr	皿B	青灰	C良	中上			6.0					
423	包含層	D-36Gr	皿B	青灰	C	中上			5.7					
424	包含層	I-42Gr	皿B	青灰	A	上			5.7					
425	59号溝(混入)		小碗?	灰	A	中上	10.8	2.8	5.4					1/36
426	表土除去		はそう	黒灰	C	上				11.0	5.2			
427	包含層	D-22Gr	蓋	灰	A	上	11.6							自然軸。2.5/36
428	包含層	I-36Gr	蓋	灰	C良	中	12.2							内面降灰。7/36
429	包含層	H-27・28Gr	蓋H?	暗灰	C良	上	10.4			(16.1)	9.6			5/36
430	57号土坑(混入)		蓋A	灰	C	中	8.4				9.0			3/36
431	包含層	I・J-35Gr	蓋B?	灰	C	上	11.0				10.0			内面青灰色。自然軸。17/36
432	103号溝(混入)		蓋	灰	C良	上					19.3			自然軸。把手付。
433	134号土坑(混入)		蓋A・B	暗灰	C	上			9.6					
434	包含層	I-12Gr	蓋A	暗灰	C	中上			20.0					内面灰色。
435	包含層	E-15Gr	蓋F	黒灰	C良	中上			9.8	(16.0)				外面底部付近灰色。
436	表土除去		瓶A	灰	C	上	9.5				(6.3)			降灰。内面灰白色。1.5/36
437	包含層	J-33Gr	瓶B	灰	C	上	8.4							自然軸。9/36
438	包含層	J・K-27Gr	瓶B	灰	C	中				(12.8)	4.0			
439	包含層	F-38Gr	特殊瓶	淡青灰	C良	上				20.2				内面灰色。自然軸。
440	包含層	J-16Gr	瓶A	灰	C	中			7.0	(12.4)				内面暗灰色。
441	包含層	L-35Gr	蓋B	灰	A	上			10.6					
442	包含層	C-48Gr	瓶A・B	暗灰	A	上			10.0					内面灰色。
443	包含層	C-21Gr	瓶か鉢C	青灰	C良	上			12.4					
444	34号溝(混入)		瓶?	青灰	C良	中				(4.7)				外面カキメ調整。
445	包含層	D-33Gr, H-32Gr	瓶D	淡青灰	C	中			13.4	(20.6)				
446	33号溝(混入)		瓶D	黒灰	C	上			12.6	(15.6)				内面灰色。
447	包含層	D-28Gr	小型瓶	黒灰	C	中上			5.6					内面暗灰色。
448	包含層	F-16Gr	小型瓶C	灰	C良	上			(5.8)	(9.0)				内面灰白色。胴部ヘラキズ有。自然軸。
449	包含層	H-15Gr	横瓶	灰	C	上	12.7				11.4			2/36
450	包含層	K-25Gr	横瓶	灰	C良	上	9.8				9.1			3/36
451	包含層	E-25Gr	横瓶	暗灰	C	中上								内面灰色。?-Dc
452	包含層	G-27Gr, I-26Gr	大甕	灰	C	中上								
453	包含層	D-39Gr	大甕	灰	C	上								
454	11号土坑(混入)		大甕	暗灰	C良	中上								内面灰色。
455	表土除去		大甕	灰	C	上								内面青灰色。
456	表土除去		大甕	黒灰	C良	上								内面灰色。
457	46号溝(混入)		大甕	灰	C	中								
458	包含層	D-38・39Gr	大甕	灰	C	中上	48.0				(39.0)			3.5/36
459	包含層	L-29Gr	中甕	灰	C	上	33.8				25.2			5/36
460	包含層	J-27Gr	中甕	暗灰	C良	中上	19.6				17.5			自然軸。4/36 ?-Da
461	包含層	L-35Gr	中甕	暗灰	C	上								自然軸。内面灰色。
462	包含層	D・F-39Gr	中甕	灰	C	中	22.3				19.0			自然軸。5.5/36 ?-Dc
463	包含層	L-31Gr	瓶	灰	A	中下								内面暗灰色。
464	包含層	I-42Gr	鉢D	暗灰	A	上	11.9							内面灰色。8/36
465	包含層	J-12Gr	円面硯	青灰	C	中			15.5					スカシあり。
466	130号溝	1点	転用硯	灰	C	中下	縦14.9	横9.9	厚さ1.9					甕胴部片転用。磨耗小。Ha-Dc
467	130号溝	1点	転用硯	暗灰	C	上	縦(9.5)	横(8.5)	厚さ1.3					内面灰色。甕胴部片転用。磨耗大。Ha-Dc







番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	底径 (高台径)	胴部径	頸部径	見込み高	備考 (口縁部残存率)
163	130号溝	1点	腕A	浅黄橙	①	上	12.2	4.15	5.1				3/36
164	130号溝	2点接合	腕A	にぶい黄橙	①B	中	12.0	3.4	5.2				2.5/36
165	130号溝	2点接合	腕A	黄灰	①B	中	12.8	3.75	6.0				2/36
166	130号溝	8点接合	腕A	浅黄橙	⑥B	中	12.8	4.5	5.7			3.7	11.5/36
167	130号溝	1点	腕A	橙	⑥C	中	11.6	3.6	5.1			3.0	3.5/36
168	130号溝	3点接合、J区	腕A	赤橙	①B	中	11.8	3.6	5.3			2.8	6/36
169	130号溝/131号溝	1点	腕A	浅黄橙	⑥B	上	12.4	3.7	6.8			2.7	3/36
170	130号溝	3点接合	腕A	橙	①	上	13.1						7.5/36
171	130号溝	1点	腕A	灰白	②	上			4.8				
172	130号溝	1点	腕A	淡橙	①	上			5.3				
173	130号溝	1点	腕A	浅黄橙	②B	上			5.4				
174	130号溝	1点	腕A	灰白	②	中			5.2				内側浅黄橙色。
175	130号溝	1点	腕A	浅黄橙	②B	上			5.0				
176	130号溝	2点接合	腕A	灰白	②B	上			5.0				
177	130号溝	3点接合	腕A	灰白～浅黄橙	③	上			4.8				
178	130号溝	3点接合	腕A	橙	①B	上			5.0				
179	130号溝	4点接合	腕A	浅黄橙	①B	中			6.0				
180	130号溝	3点接合	腕A	にぶい橙	①B	中			6.9				
181	130号溝	2点接合	腕A (j)	橙	④	上	13.6	4.9	5.7		4.1	1/36	
182	130号溝	4点接合	腕A (j)	にぶい橙	②	上	16.6						外側一部褐灰。5/36
183	130号溝	1点	皿A (柱高)	浅黄橙	⑥B	上			6.3				
184	130号溝	1点	皿A (柱高)	浅黄橙	④B	上			6.1				
185	130号溝	2点接合	皿A (柱高)	橙	①B	上			6.2				
186	130号溝	3点接合	小皿Ⅱ	浅黄橙	①B	上	11.0	3.0	4.4		2.6	3/36	
187	130号溝	4点接合	小皿Ⅱ	にぶい黄橙	①B	中	11.1	2.45	4.2		2.15	2/36	
188	130号溝	4点接合、I区	小皿Ⅱ	浅黄橙	①	上	11.6						19.5/36
189	130号溝	5点接合	小皿Ⅱ	にぶい黄橙	①B	上	11.4						13/36
190	130号溝	1点	小皿Ⅱ	浅黄橙	②	中	9.8	2.8	5.1				16/36
191	130号溝	2点接合	小皿Ⅱ	浅黄橙	②	上	9.9	2.6	5.0		2.2	9/36	
192	130号溝	1点、I区	小皿Ⅱ	浅黄橙	②	上	9.6	2.5	4.8				9/36
193	130号溝	2点接合	小皿Ⅱ	にぶい黄橙	①B	上	9.9	2.35	5.0				2.5/36
194	130号溝	2点接合	小皿Ⅱ	浅黄橙	②	上	9.7	2.3	4.3		1.9	11/36	
195	130号溝	3点接合	小皿Ⅱ	橙	⑥	上	10.7	2.4	5.2		(2.1)		内側赤橙色。10/36
196	130号溝	2点接合	小皿Ⅰ	浅黄橙	②B	上	9.3	2.45	4.4		1.9		内側橙色。9/36
197	130号溝	1点	小皿Ⅰ	浅黄橙	②	中	9.1	2.3	4.0		1.9		16/36
198	130号溝	2点接合	小皿Ⅰ	橙	⑥	上	8.9	2.35	4.0		1.65		12/36
199	130号溝	1点	小皿Ⅰ	浅黄橙	①	上	8.6	2.05	3.3		1.45		内側灰白色。3/36
200	130号溝	1点	小皿Ⅰ	にぶい黄橙	①B	上	9.6	1.7	4.4		0.95		15/36
201	130号溝	1点	小皿 (柱高)	浅黄橙	⑥B	上	10.2	2.6	4.6				12.5/36
202	130号溝	2点接合	小皿 (柱高)	淡赤橙	⑥B	上	10.7	3.95	3.7		2.5		13/36
203	130号溝	1点	小皿 (柱高)	浅黄橙	②	上			4.0				
204	130号溝	K区	小皿 (柱高)	浅黄橙	⑥	上			4.4				
205	130号溝	2点接合	赤彩小皿Ⅱ	灰白	②	上			4.1				
206	130号溝	1点	黑色小皿 (柱高)	浅黄橙	①B	上			4.0				
207	130号溝	1点	黑色小皿 (柱高)	浅黄橙	②	上			4.0				
208	130号溝	1点	ハケ小甕	赤橙	8	上	10.2			10.0	9.6		内外面焦げ付着。6/36
209	130号溝	1点	ロクロ甕	橙	5	上							内側淡橙色。
210	130号溝	1点	ロクロ甕	浅黄橙～橙	1	上			15.0				内側にぶい橙色。内側焦げあり。
211	130号溝	2点接合	ロクロ小甕	灰白	2	中			6.8				外側煤付着。
212	130号溝	1点	ロクロ小甕	浅黄橙	2	中			9.0				外側煤付着。
213	130号溝	1点	ロクロ甕	赤橙	6	上	23.2			21.3			内側焦げあり。1.5/36
214	130号溝	1点	ロクロ鍋	浅黄橙	5	上							
215	130号溝	1点	ロクロ鍋	浅黄橙	1	上							内側焦げあり。
216	130号溝	2点接合	ロクロ鍋	浅黄橙	2	上	37.8						内側焦げあり。3/36
217	130号溝	1点	ロクロ鍋	浅黄橙	1	上	36.8						外側煤付着。1.5/36
218	130号溝	1点	ロクロ鍋	浅黄橙	1	中	37.0						外側煤付着。3.5/36
219	130号溝	1点	ロクロ鍋	浅黄橙	1	上	41.4						外側煤付着。内側焦げあり。2.5/36
220	130号溝	1点	ロクロ鍋	にぶい橙	4	上	40.6						内外面焦げ付着。2.5/36
221	130号溝	1点	ロクロ鍋	浅黄橙	1B	上	36.5						外側煤付着。2.5/36
222	130号溝	1点	ロクロ鍋	橙	3	上							
223	130号溝		ロクロ鍋	浅黄橙	1	上							内側煤付着。
224	130号溝	J区	ロクロ鍋	にぶい黄橙	3	中							外側焦げあり。
225	130号溝	1点	ロクロ瓶	浅黄橙	7	上			13.6				内側焦げあり。
226	152号溝	1点	腕	浅黄橙	①承	中	12.8	4.0	6.2				7/36
227	152号溝	1点	ハケ小甕	淡橙	1	中	13.6			13.2			内側橙色。2.5/36
228	152号溝	1点	ロクロ鍋	橙	1	中							外側煤付着。
229	172号溝		腕B	淡橙	①	上			7.6				内側浅黄橙色。
230	P6652		鉢	浅黄橙	7	中	20.8						8/36
231	P12592		腕A	浅黄橙	①	上	12.6						外側煤付着。4/36
232	P12514		黒色腕B	浅黄橙	①B	上	13.2	4.7	6.2		3.9		3/36
233	P12662		腕B	淡橙	①B	中			6.6				
234	P12595		腕B	にぶい黄橙	①	中	12.3	3.45	5.1		2.5		8.5/36
235	P12662		腕B	灰白	①B	上			6.0				
236	P9273		腕A	浅黄橙	②	上	11.3	3.4	3.8		3.0		5/36
237	P7454		腕A	浅黄橙	①B	上	11.1						11/36
238	P1071		腕A	灰白	③	中			5.6				内側淡黄色。
239	P12362		腕A	にぶい黄橙	⑥B	上			5.5				
240	P8216		腕A	浅黄橙	②	上			5.0				
241	P14		小皿Ⅱ	淡橙	①B	上			4.6				
242	P12668		小皿Ⅱ	浅黄橙	②	上			5.1				
243	P1071		小皿Ⅱ	淡黄	③	中			5.3				

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	底径 (高台径)	胴部径	頸部径	見込み高	備考(口縁部残存率)
244	P12592		ロクロ甕	浅黄橙	1B	上	19.0						4.5/36
245	F8692		ロクロ鍋	にぶい黄橙	4	中	42.2						外側煤付着。1.5/36
246	135号土坑(混入)		赤彩椀	赤橙	①B	上	11.8	4.8			4.2		20/36
247	91号溝(混入)		赤彩椀A	灰白	①	中			6.8				外側赤彩。
248	59号溝(混入)	1点	黒色椀A	赤橙	⑥B	上			4.9				
249	91号溝(混入)	J区	黒色椀A	にぶい黄橙	①B	中			6.2				
250	91号溝(混入)	J区	黒色椀	浅黄橙	②	上	16.2						4.5/36
251	78号土坑(混入)		黒色椀	浅黄橙	⑥	上	16.0						3/36
252	33号溝(混入)		黒色椀	にぶい黄橙	②	上	14.6						2.5/36
253	59号溝(混入)	3点接合	黒色椀B	浅黄橙	②	上			6.7				
254	14号土坑(混入)		黒色椀B	浅黄橙	①	上			6.0				
255	79号溝(混入)		黒色皿B	樹灰	①B	中			5.8				
256	11号土坑		椀B	浅黄橙	②	中			6.5				
257	114号溝(混入)		椀B	浅黄橙	①B	上			8.0				
258	包含層	E-41Gr	赤彩椀B	橙	②	上			6.0				
259	57号土坑(混入)	上層	椀B	浅黄橙	①B	上			6.0				
260	59号溝(混入)	2点接合	椀B	淡橙	①	上	12.4		6.0		4.1		3.5/36
261	15号土坑(混入)		椀B	淡橙	⑥	上			8.0				
262	33号溝(混入)		椀B	にぶい黄橙	①B	中			6.1				外側赤彩？。
263	194号土坑(混入)	1点	椀B	淡橙	②	上			7.0				内側浅黄橙色。裏煤。
264	59号溝(混入)		椀B	赤橙	①B	上			7.6				
265	194号土坑(混入)		椀B	にぶい黄橙	①B	中			6.0				
266	55号溝(混入)		椀B	浅黄橙	①	中			6.2				
267	91号溝(混入)	J区	椀B	灰白	①	上			6.0				
268	153号溝(攪乱)	A区	椀B	浅黄橙	②	上			7.2				
269	72号土坑(混入)	A区	椀B	浅黄橙	④	上			5.5				
270	86号溝(混入)	E区	椀B	淡黄	②	中			6.2				
271	包含層	G-40Gr	椀A	橙	②	上			6.0				
272	134号土坑(混入)		椀A	灰白	①	上			4.8				
273	157号土坑(混入)	A区	小皿Ⅱ	灰白	②	中	10.3	2.5	4.6		2.1		外側赤彩？。内側浅黄橙色。4.5/36
274	包含層	I-42Gr	小皿Ⅰ	橙	③	上	9.8	1.7	5.4		1.0		3/36
275	135号土坑(攪乱)		小皿(柱高)	浅黄橙	④B	上	6.7						8/36
276	197号土坑(攪乱)	1点	ハケ甕	灰白	7B	中	18.8			17.0			内側煤付着。内側浅黄橙色。
277	包含層	F-43Gr	ハケ小甕	淡赤橙	7B	中	12.5			15.9			6/36
278	190号土坑(攪乱)		ハケ小甕	にぶい黄橙	3	中	13.8			12.6			5/36
279	包含層	L-40Gr	瓶	浅黄橙	1B	上	21.0						4.5/36
280	包含層	J-38Gr	ロクロ甕	橙	2	中	24.0			20.3			外側煤付着。5.5/36
281	包含層	J-42Gr	ロクロ甕	橙	1	中	22.5						外側煤付着。4/36
282	114号溝(混入)		ロクロ甕	浅黄橙	5B	上	11.0			17.0			外側煤付着。5.5/36
283	196号土坑		ロクロ小甕	赤橙	4	上	13.0				12.4		9/36
284	134号土坑	4層	ロクロ小甕	浅黄橙	5	上	13.4						煤付着。4/36
285	39号溝	1点	ロクロ小甕	橙	1	上			9.0				外側煤付着。内側浅黄橙色。
286	包含層	E-15Gr	ロクロ鍋	浅黄橙	6	上	35.0						内側煤付着。3/36
287	包含層	H-32Gr	ロクロ鍋	にぶい黄橙	1	中							外側煤付着。
288	包含層	F-47Gr	ロクロ鍋	浅黄橙	3	上	35.4						2/36

第16表 古代緑釉陶器観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	底径 (高台径)	釉調	備考(口縁部残存率)
1	130号溝		小椀	灰	やや粗	中下	11.4		オリーブ灰	近江系硬陶。5.5/36
2	包含層	C-35Gr、D-35Gr	椀	灰	緻密	中上		8.5	緑色	近江系硬陶。高台内面～底無釉
3	包含層	D-36Gr、D-37Gr	端反椀	灰	緻密	上	14.7		緑色	近江系硬陶。3.5/36
4	包含層	C-38Gr	無台皿	浅黄橙	緻密	上		6.2	明緑	近江系軟陶。全面施釉？

第17表 古代灰釉陶器観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	口径	器高	見込み高	高台径	釉調	備考(口縁部残存率)
1	38号溝	2063	椀	灰	密	上	14.3	5.9	4.3	5.8	灰白、内側灰オリーブ	見込み高4.3。見込み硯転用。高台内～底無釉。5/36
2	130号溝		椀	灰	密	中上				7.3	灰白	高台外付近～底無釉
3	91号溝(混入)		端反椀	灰白	粗	中	14.7				灰白だが濃い、青み帯びる	2/36
4	包含層	D-36Gr	端反椀	灰白	やや粗	中上	14.3				灰白	1.5/36
5	包含層	G-10Gr	椀	灰白	密	上				7.3	灰白	高台外付近～底無釉

第18表 古代土師質特殊遺物観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	長さ	幅 (高さ)	厚さ	備考
1	38号溝	1点	土馬	浅黄橙	3	上	(5.95)	(4.45)	(2.3)	(頭部)
2	38号溝	1点	土馬	浅黄橙	3	中上	(10.1)	(4.7)	(2.85)	(頭部)
3	38号溝	1点	土馬	灰白	3	中上	(8.05)	(3.7)	[3.9]	(後背部)
4	38号溝	3点接合	土馬	浅黄橙	3	中上		(4.6)	3.0	(左側後背部)
5	38号溝	1点	土馬	浅黄橙	3	上	(8.6)	(3.65)	(4.25)	(背部)
6	38号溝	1点	土馬	浅黄橙	3	上		(7.6)	2.5	(左後脚)
7	38号溝	1点	土馬	灰白	3	上		(9.4)	2.8	(左後脚)
8	38号溝	1点	土馬	浅黄橙	3	中上		(8.15)	2.7	(左前脚)
9	38号溝	1点	土馬	淡黄	3	上		(5.1)	2.7	(左前脚)
10	38号溝	e上	土馬	淡黄	3	上		(4.2)	2.5	(左脚)
11	38号溝	k上層	土馬	淡黄	3	中		(5.05)	3.45	(左脚付根?)
12	38号溝	k上	土馬	浅黄橙	3	中	(5.55)	(3.35)	5.1	(背部)
13	38号溝	3点接合	土馬	浅黄橙	3	中上	(15.0)	(10.55)	6.8	(前足、頭部、左後脚、尾欠損)
14	38号溝	3点接合、e上・下	土馬	浅黄橙	3	上	(18.05)	(9.4)	10.2	(頭部、左後脚、尾欠損)
15	38号溝	1点	土馬	浅黄橙	3	上		(2.95)	1.5	(右前脚)
16	170号溝(混入)	C区	土馬	淡橙	5	上		(3.3)	1.95	(右前脚)
17	170号溝(混入)	C区	土馬	にぶい黄橙	2	中		(3.85)	1.7	(右後脚)
18	包含層	K-34Gr	獣脚?	浅黄橙	2	上		(8.15)	3.8	
19	包含層	G-27Gr	土鈴	灰白	5	上	(4.0)	(3.3)		
20	包含層	D-31Gr	土鈴	灰白	9	中	(2.3)	(1.5)		
21	17号溝	1点	羽口?	褐灰	5B	中下	(8.15)	(7.5)	2.9	
22	38号溝	1点	台付鉢	浅黄橙	3	中上		(43.3)		残存高(12.3)。スカシあり。

第19表 古代井戸部材観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	法量	備考
1	1号井戸		板材	長さ83.4幅5.3厚さ2.8	西隙間調整部材
2	1号井戸		板材	長さ83.7幅5.4厚さ2.9	東隙間調整部材
3	1号井戸		板材	長さ68.8幅15.2厚さ2.1	西1段目
4	1号井戸		板材	長さ114.2幅13.3厚さ4.0	南1段目
5	1号井戸		板材	長さ116.4幅12.65厚さ3.3	北1段目
6	1号井戸		板材	長さ79.8幅12.0厚さ3.47破片幅2.4	東2段目
7	1号井戸		板材	長さ120.3幅23.1厚さ3.5	西2段目
8	1号井戸		板材	長さ116.0幅19.5厚さ3.8	南2段目
9	1号井戸		板材	長さ117.8幅19.0厚さ3.5破片幅2.1	北2段目
10	1号井戸		板材	長さ119.9幅35.0厚さ4.6	東3段目
11	1号井戸		板材	長さ111.1幅36.3厚さ3.65	西3段目
12	1号井戸		板材	長さ121.5幅34.5厚さ3.45	南3段目
13	1号井戸		板材	長さ120.4幅37.5厚さ4.05	北3段目
14	1号井戸		板材	長さ122.7幅24.1厚さ3.85	東4段目
15	1号井戸		板材	長さ120.7幅23.6厚さ4.15	西4段目
16	1号井戸		板材	長さ120.8幅24.3厚さ4.25	南4段目
17	1号井戸		板材	長さ124.7幅26.4厚さ5.0	北4段目
18-1	1号井戸		板材?	長さ99.6幅2.6厚さ2.55	北側
18-2	1号井戸		板材	長さ100.0幅17.8厚さ2.55	
19	1号井戸		板材	長さ102.6幅22.2厚さ2.8	
20	1号井戸		板材	長さ99.8幅22.6厚さ2.4	
21	1号井戸		板材	長さ103.5幅21.2厚さ2.5	南側

第20表 木製品観察表(古代)

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	法量	備考
1(1-1)	1号井戸		曲物側板	径24.8高さ19.3厚さ1.35	
1(1-2)	1号井戸		曲物底板	長径18.3短径16.85厚さ1.1	
2	1号井戸		横櫛	長さ5.05幅8.3厚さ0.7	
3	1号井戸		木製容器	口径19.7器高5.75	残存率24/36
4(4-1)	215号土坑		曲物側板	幅19.75、高さ8.65	
4(4-2)	215号土坑		曲物底板	長径20.4短径20.0厚さ0.7	

## 第 5 節 中世の遺物

### 第1項 概要

当該時期の遺物は、破片数で3,764点（接合・同一個体は1でカウント、以下同）出土している。そのうち、遺構から出土した遺物は総じて少なく5%未満で、殆どが遺構外からの出土である。これは、古代期における130号溝のような集中廃棄場所が検出されていないためである。当遺跡周辺の中世遺跡でも、遺物の集中廃棄場が検出されることは少なく、多くの遺物が調査区内に散乱した状態である。調査区外の地点に廃棄場が存在する可能性もあるが、中世の廃棄形態を考える上で興味深い現象であり、今後の課題である。遺構別にみると、約6割程度の遺物が井戸からの出土で、残りが溝や土坑からの出土である。掘立柱建物跡の柱穴からの出土は極僅かである。一方で、土師器皿に限って、古代遺構である38号溝及び130号溝から出土している。混入したものか、遺構が存続していたのかは判断できないため、ここでは便宜上遺構出土遺物として取り扱うこととする。ただし、仮に存続していたとしても、殆どが埋まっている状態であり、溝としての機能を果たすものではなかったと考える。

遺物は、土器・陶磁器類では土師器皿・加賀・越前・珠洲・古瀬戸・白磁・青磁・染付・朝鮮系陶磁器・瓦質土器等、多種多様なものが出土している。遺物報告においても、遺構と同様に中世土師器皿編年Ⅳ－Ⅰ期（14世紀後半頃）を境として、中世前期・中世後期に分けて捉えている。中世前期と後期の量比を土師器皿に代表させてみると、中世前期約44%・中世後期56%であり、中世後期の方が若干多い状況にある。中世陶磁器類は伝世するため一概にはいえないが、陶磁器類は、加賀以外は中世後期に出土量が増加する傾向にある。詳細な量比等の検討については、総括で述べることにしたい。なお、各遺物の器種分類及び年代観等については、観察表凡例を参照して頂きたい。また、土器・陶磁器類以外では、木製品・石製品が出土している。出土量は少なく、若干の板材や棒材を除外すれば、実測点数が出土量を示している。ただし、砥石に関しては遺構出土分のみを掲載している。

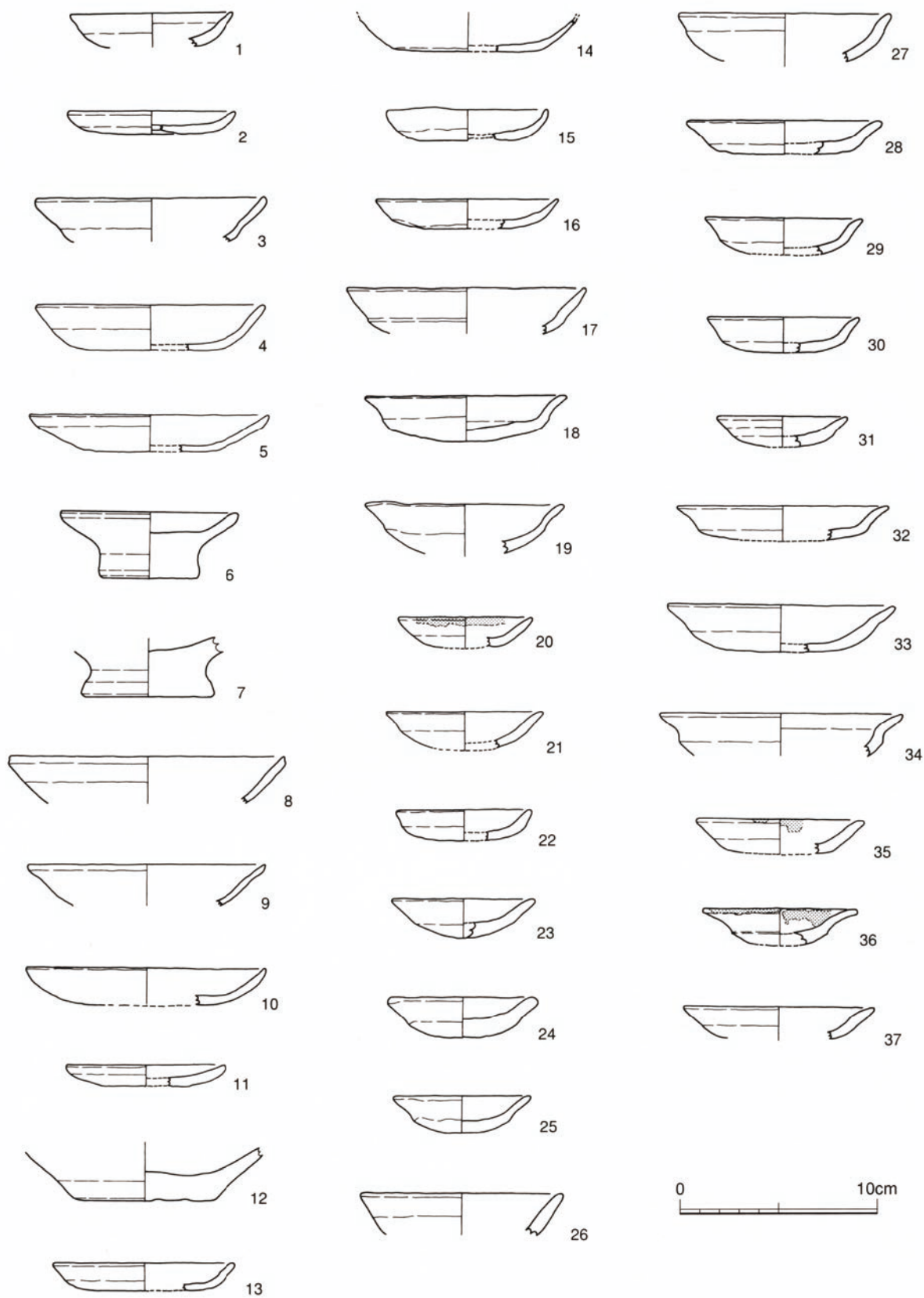
なお、遺物の個別説明については、観察表においてまとめることとし、以下補足説明を行うものとする。

### 第2項 土器・陶器類

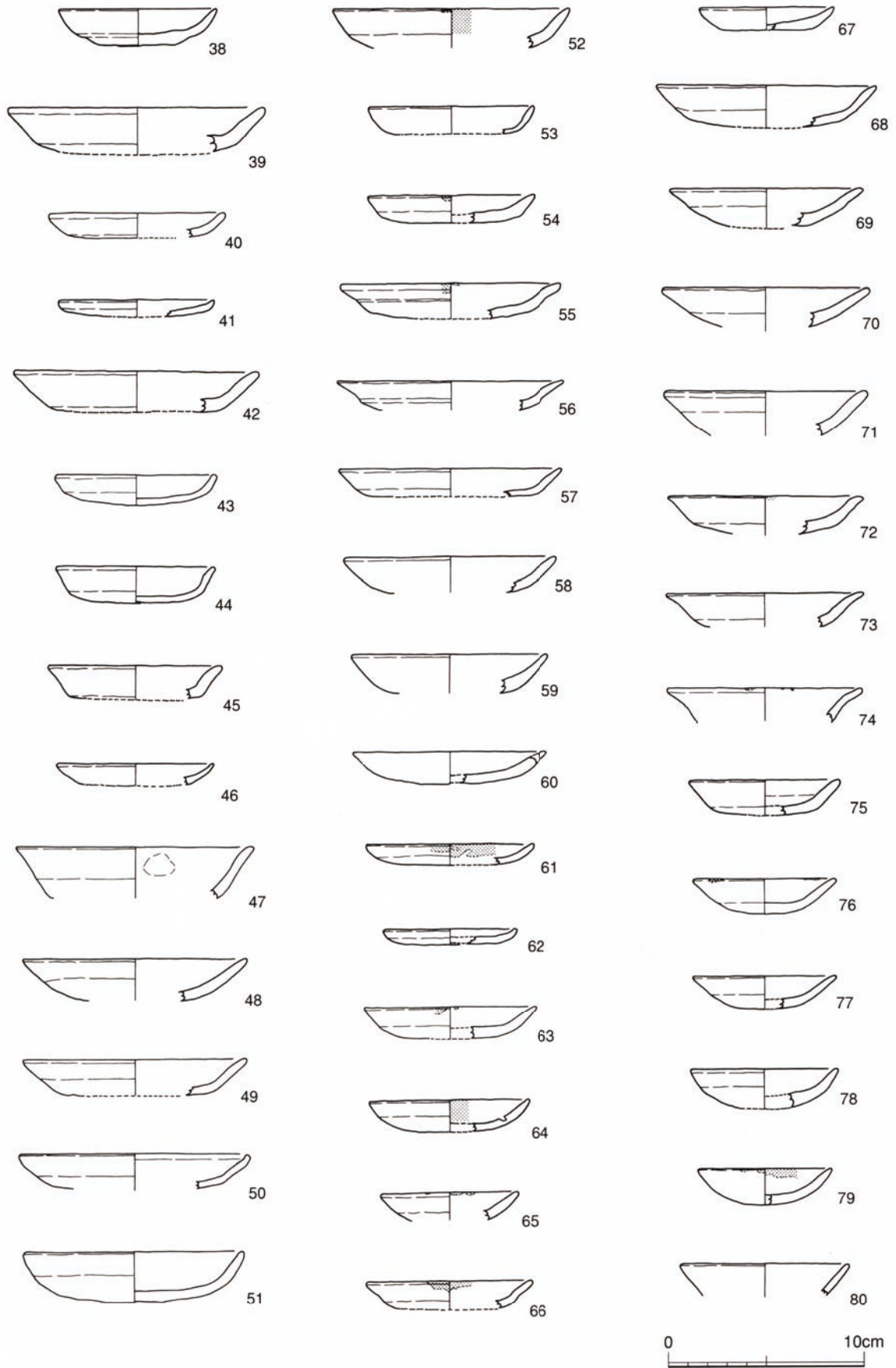
#### 1. 土師器皿（第190図～第192図）

出土した土師器皿は、総破片数で1,743点出土している。その内99%以上は非ロクロ土師器皿である。ロクロ土師器皿については、非ロクロ土師器皿と共伴する時期以降のみを中世段階と位置付けた。ただし、134号土坑遺物に関しては、遺構の時期を中世に位置付けたため、例外としてここでの報告となった。非ロクロ土師器皿は、藤田氏の分類で、Aタイプ（口縁部1段ナデ）・Cタイプ（口縁部1段ナデ、口縁端部面取り）・Eタイプ（口縁部外反）があり、在地色が強い。Eタイプには最終形態と考えられ、八里向山H遺跡で出土したものに類似する18・32も出土している。ただし、八里向山H遺跡のものとは胎土に違いがある。中世後期段階には、器肉が厚く丸底化したAタイプの小皿が多く出土している。また、Ⅴ－Ⅰ2期頃には36のように、非常に外反度の強い器形も存在している。当遺跡では、灯明皿が比較的多く出土している（網点により図示）。灯明皿はⅢ－Ⅱ2期頃から出現し、Ⅳ期以降に出土量が増加する傾向にある。使用頻度はⅣ期で約40%、Ⅴ期で約50%程度となる。また、灯明皿は100%ではないが、N4と分類した胎土（観察表凡例参照）に限定される傾向にある。

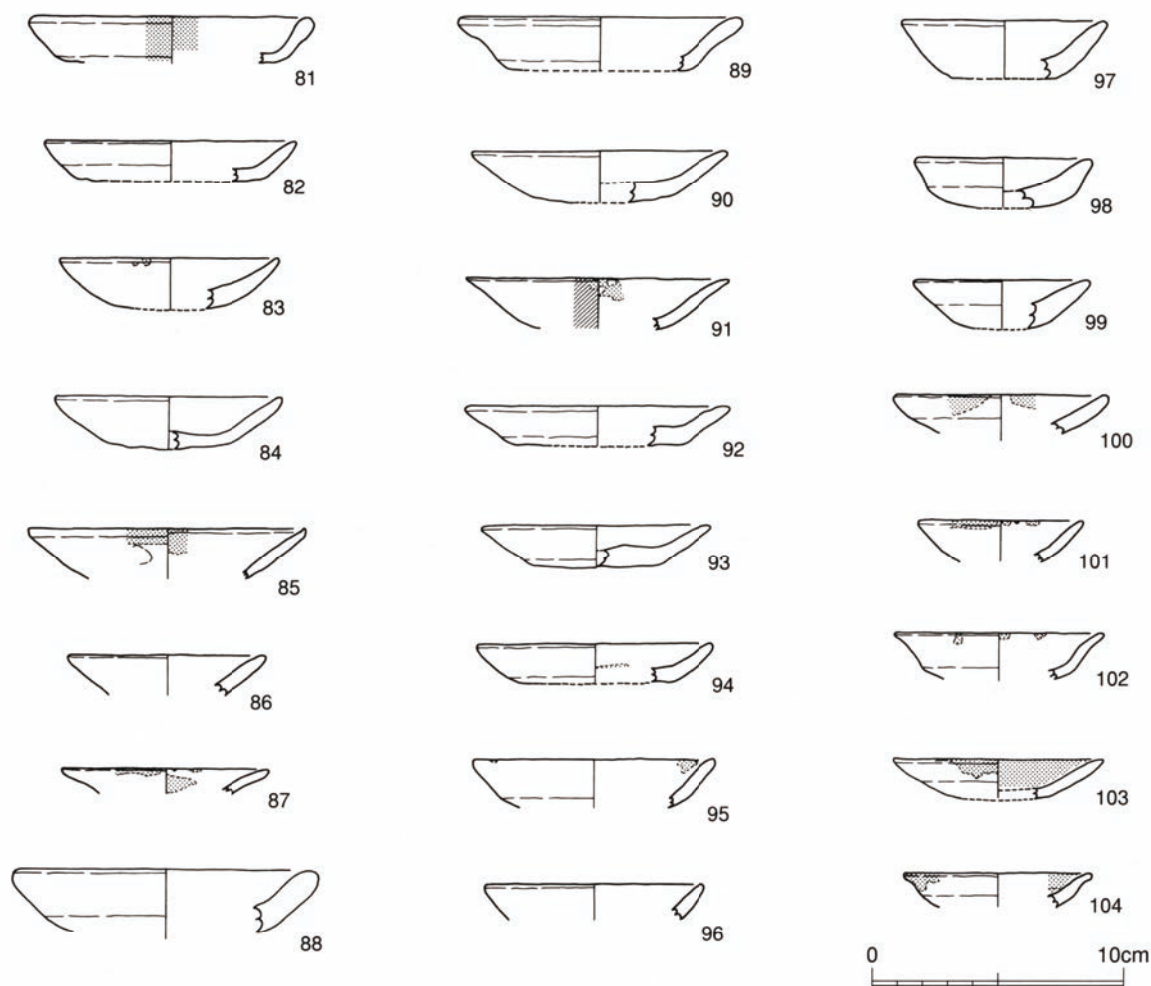
出土した遺構は、中世前期は掘立柱建物跡柱穴1棟・土坑（井戸）4基、土坑2基、溝3基で、中世後期は土坑（井戸）3基、土坑2基、溝4基である。特に、中世前期遺構である134号土坑（井戸）



第190図 遺構出土中世土師器 (S=1/3)



第191図 遺構外出土中世土師器 (S=1/3)



第192図 遺構外出土中世土師器 (S=1/3)

から42点、中世後期遺構である11号土坑（井戸）から19点出土とまとまった量が出土している以外は、目立った出土は認められない。

## 2. 加賀（第193図～第196図）

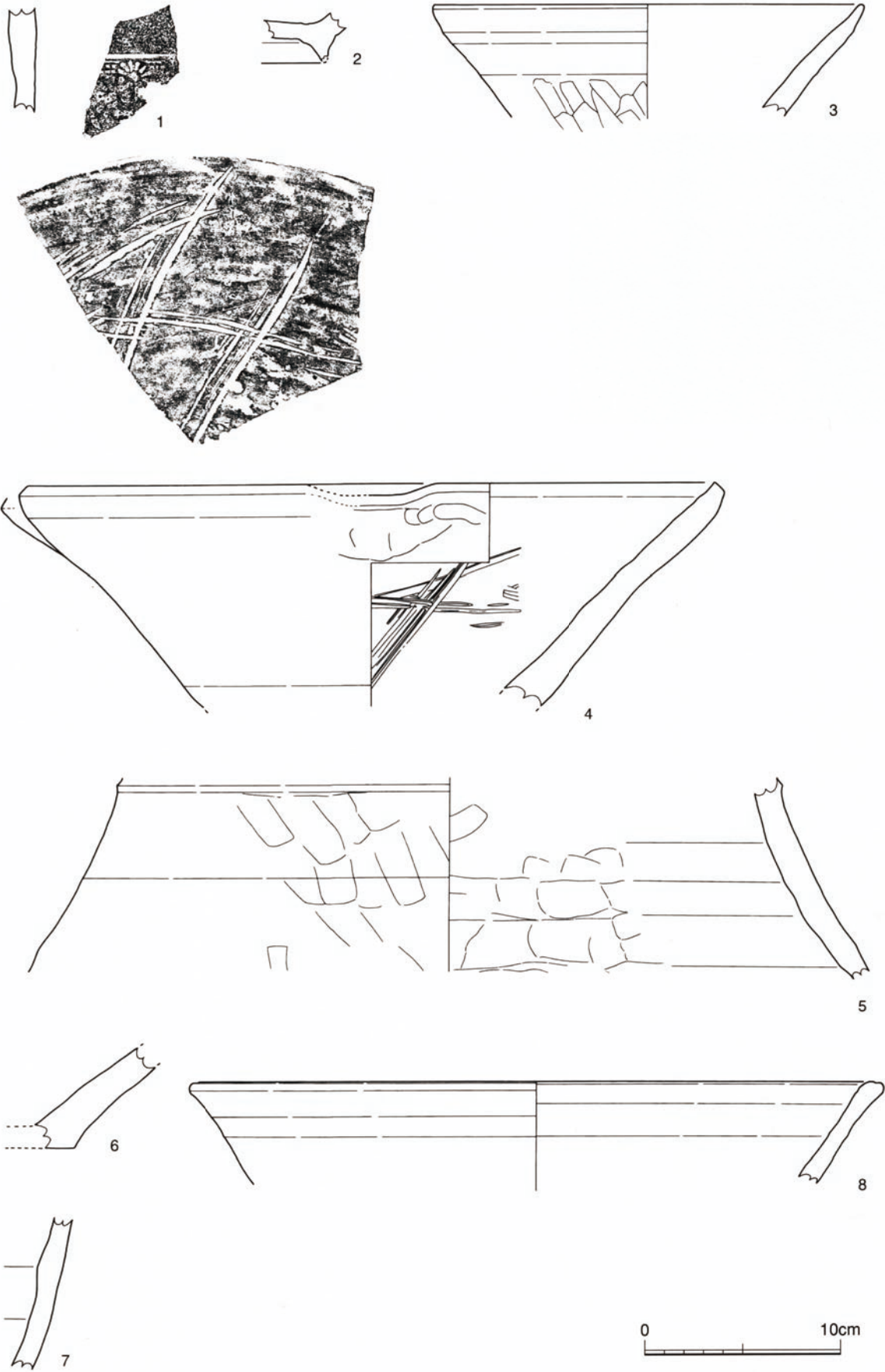
加賀は総破片数で629点出土している。その多くが小破片であり、実測可能点数は57点に止まった。ただし、押印の施された資料は全て図化しており、21点（1・36～55）を数える。その内訳は、ユノカミダニ窯系10点、カミヤ窯系2点、コテンノウダニ窯系1点、トリダニ系1点、不明7点であり、ユノカミダニ窯の製品が突出して多い。器種は甕・壺・鉢の三種が確認される。特に、加賀窯初期段階のものと考えられる小型鉢（3）及び、外面に刻書が施された56・57の出土が特筆される。文字の内容は、破片が小さく判読することができなかった。甕は口縁部破片を図化し、18～20がⅢ期頃、21～23がⅣ期頃、発達したN字状口縁をもつ24・25はⅣ～Ⅴ期前半頃と考えられる。壺には、26・27のような無頸タイプのものも出土している。また、内外面に漆が付着したものが出土している。甕1点（47）・壺3点（6・7・12）・鉢2点（3・4）であり、漆容器等の使用法を示唆するものであり、興味深い事例といえる。時期は、判別可能な個体のみでの判断だが、Ⅳ期以降の製品が多い。

出土した遺構は、中世前期は掘立柱建物跡柱穴1棟・土坑（井戸）2基、土坑3基、溝1基で、中世後期は土坑（井戸）2基、土坑3基、溝3基である。57号土坑（井戸）から出土した12は、157号土坑と接合関係にある。

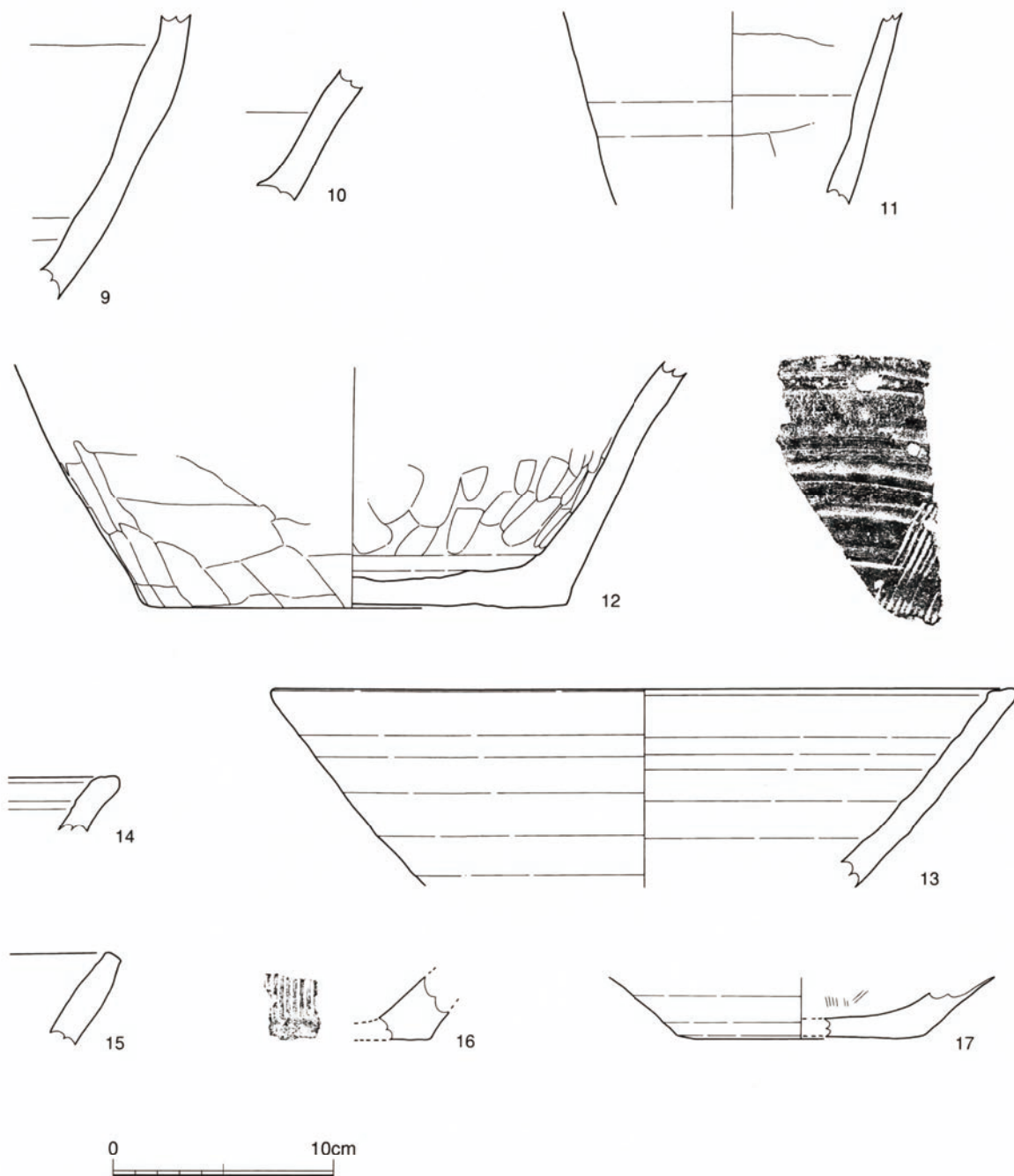
## 3. 越前（第197図～第199図）

越前は総破片数で273点出土している。実測可能点数は38点である。加賀同様、押印資料は全て図化



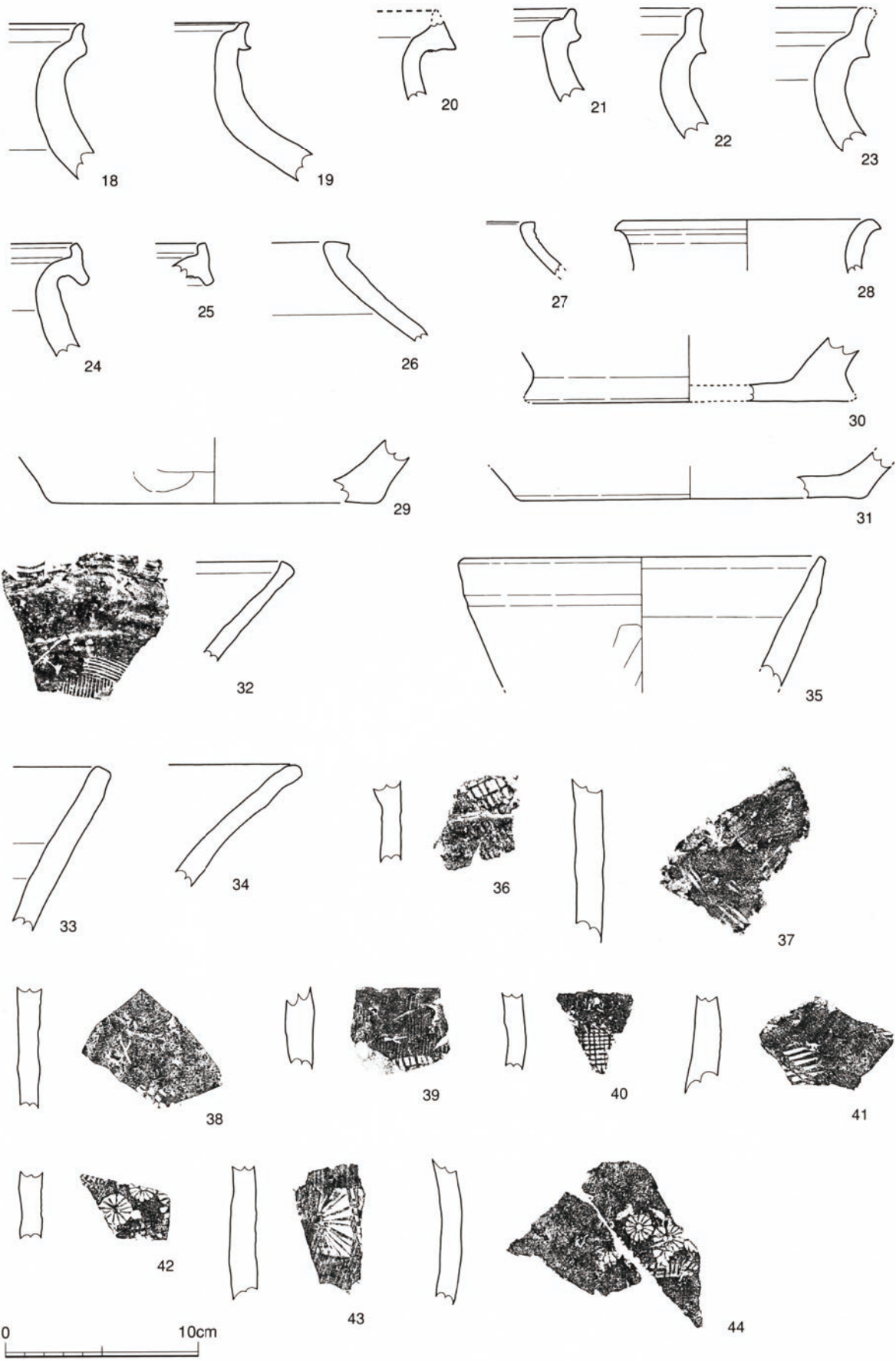


第193図 遺構出土加賀焼 (S=1/3)

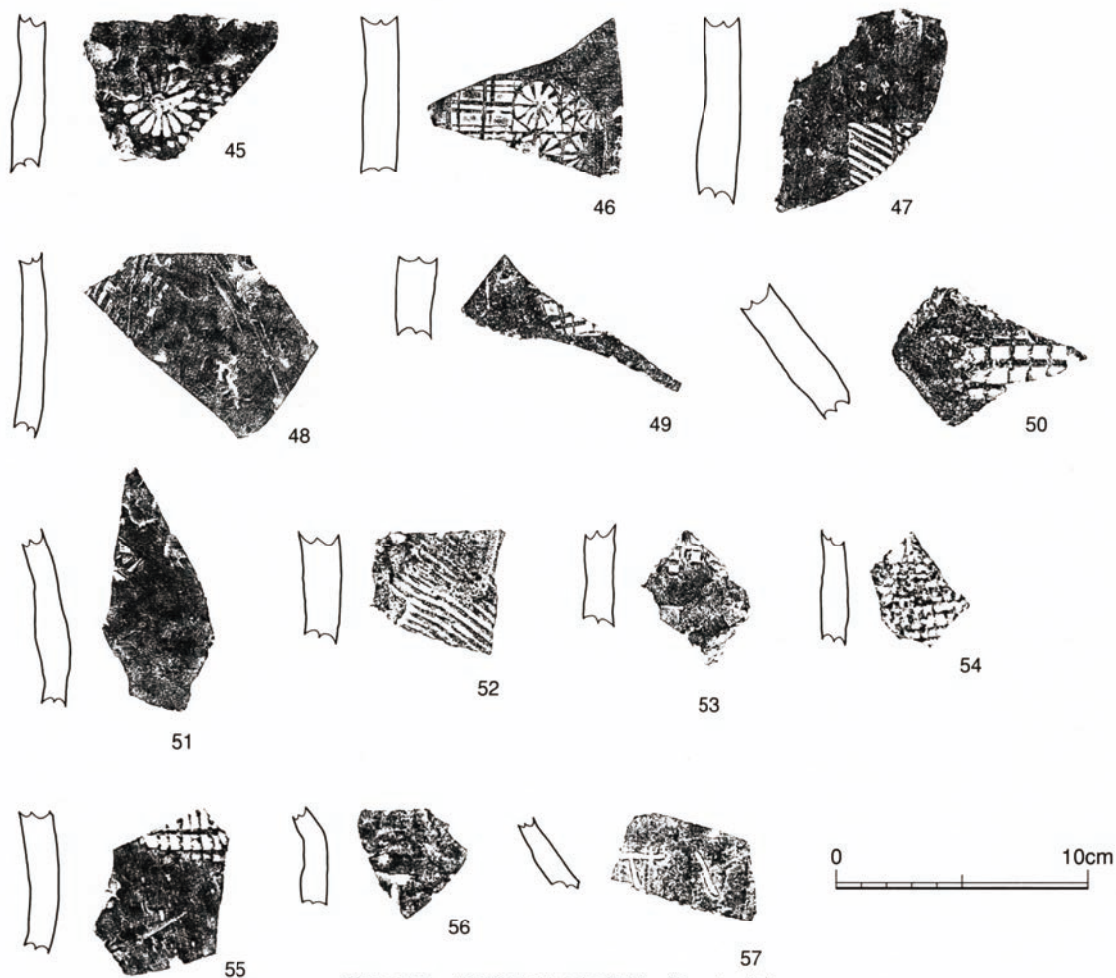


第194図 遺構出土加賀焼 (S=1/3)

してあり、3点 (5・9・19) を数える。全て格子文が押されたものである。また、刻書が施された破片も出土している。器種は甕・壺・鉢の三種が確認される。壺には、片口壺 (22) や三筋壺と考えられる破片 (20) がある。甕は口縁部破片を図化し、8・11~13がⅢ期前半頃、14~17がⅢ期後半頃、18がⅣ期後半頃、10がⅤ期後半頃と考えられる。鉢は、Ⅲ期以前の高台の付くもの (1~3・23~26) と、卸目が施されるⅣ期以降のもの (4・6・7・27~38) がある。2は、高台が付く形態のものだが、卸目とも考えられる櫛目が確認される。胎土及び、体部外面下半のヨコケズリ手法から越前と判断した。6・7は生焼け品であり、加賀終末期の西荒谷カマンダニ窯製品とも考えられたが、当窯の製品は流通していないとの指摘もあり、越前と判断した。越前は、Ⅲ期以降の製品が多く、特に、Ⅴ期に位置付けられる卸目が密に施された播鉢が多く出土している。よって、16世紀後半代まで確実に当遺跡は存続していたといえよう。



第195図 遺構外出土加賀焼 (S=1/3)



第196図 遺構外出土加賀焼 (S=1/3)

出土した遺構は、中世前期は土坑（井戸）2基、土坑1基、溝1基で、中世後期は土坑2基、溝4基である。15号土坑から出土した2は、16号溝と接合関係にある。

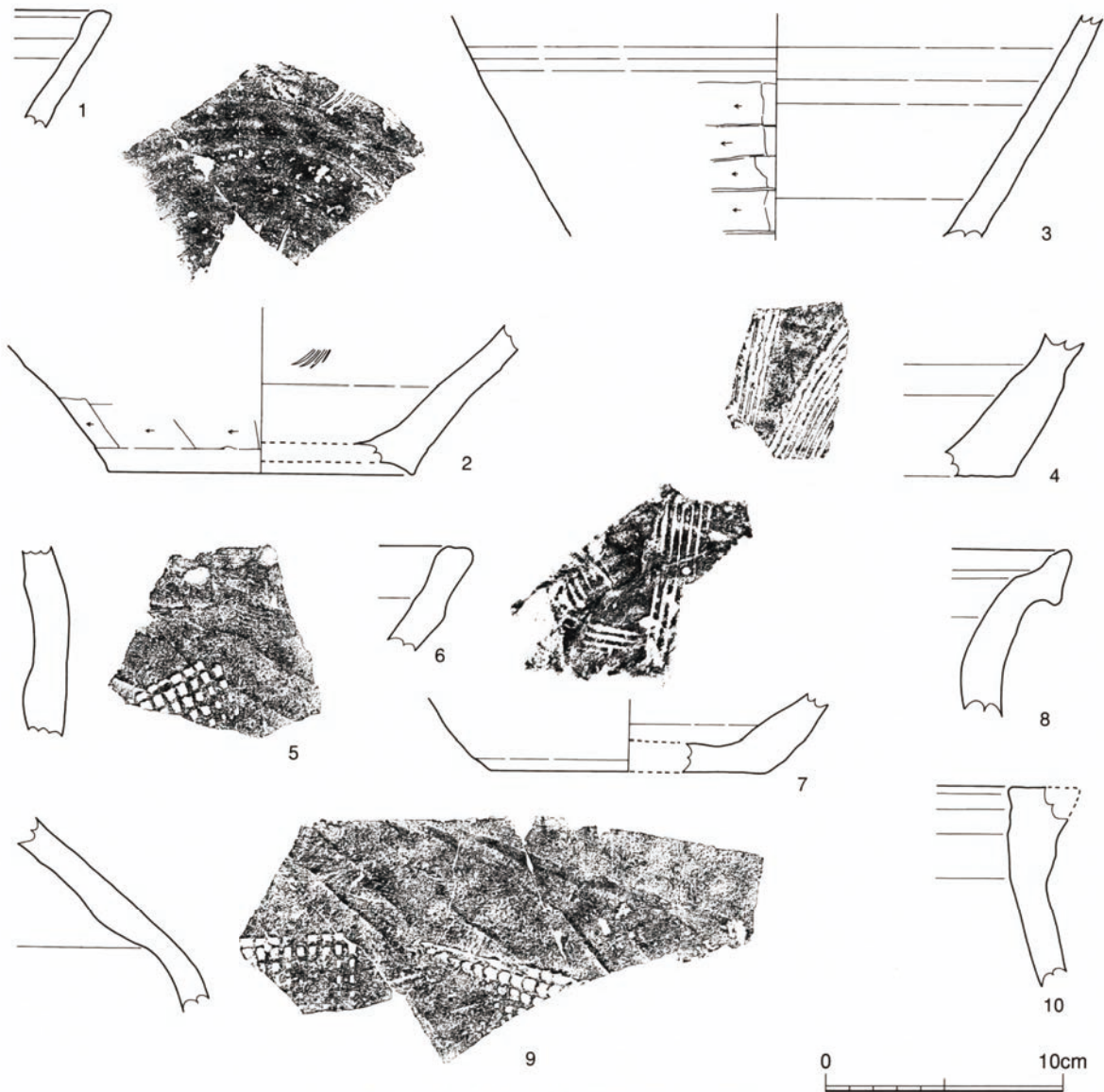
#### 4. 珠洲（第200図～第203図）

珠洲は総破片数で283点出土している。実測可能点数は41点である。器種は甕・壺・鉢の三種が確認される。壺には、体部外面に櫛目工具により波状文を二段施すもの（3）がある。この壺も、前述の加賀製品と同様に、漆の付着が確認され、同様の使用法が推察される。甕は口縁部破片を図化し、16がⅢ期頃、7・17～19がⅣ期頃と考えられる。7は、体部外面に刻印（記号文）が施されている。鉢は、口縁帯に櫛目工具により波状文が施されるⅤ期以降のもの（14・15・33～41）が多く出土している。38のように口縁帯が内側に入り込んだ、Ⅵ期以降に位置付けられるものも出土している。珠洲は、Ⅳ期以降の製品が圧倒的に多く、Ⅵ期頃（15世紀3/4）の製品までの出土が認められる。

出土した遺構は、中世前期は土坑3基で、中世後期は土坑（井戸）2基、溝5基である。155号土坑から出土した4は、33号溝と接合関係にあるが、33号溝は中世後期遺構と判断されるため、混入遺物であろう。また、14号溝から出土した11は、33号溝と接合関係にある。なお、57号土坑（井戸）と33号溝からは比較的多く出土している。

#### 5. 古瀬戸、瀬戸・美濃（第204図～第206図84）

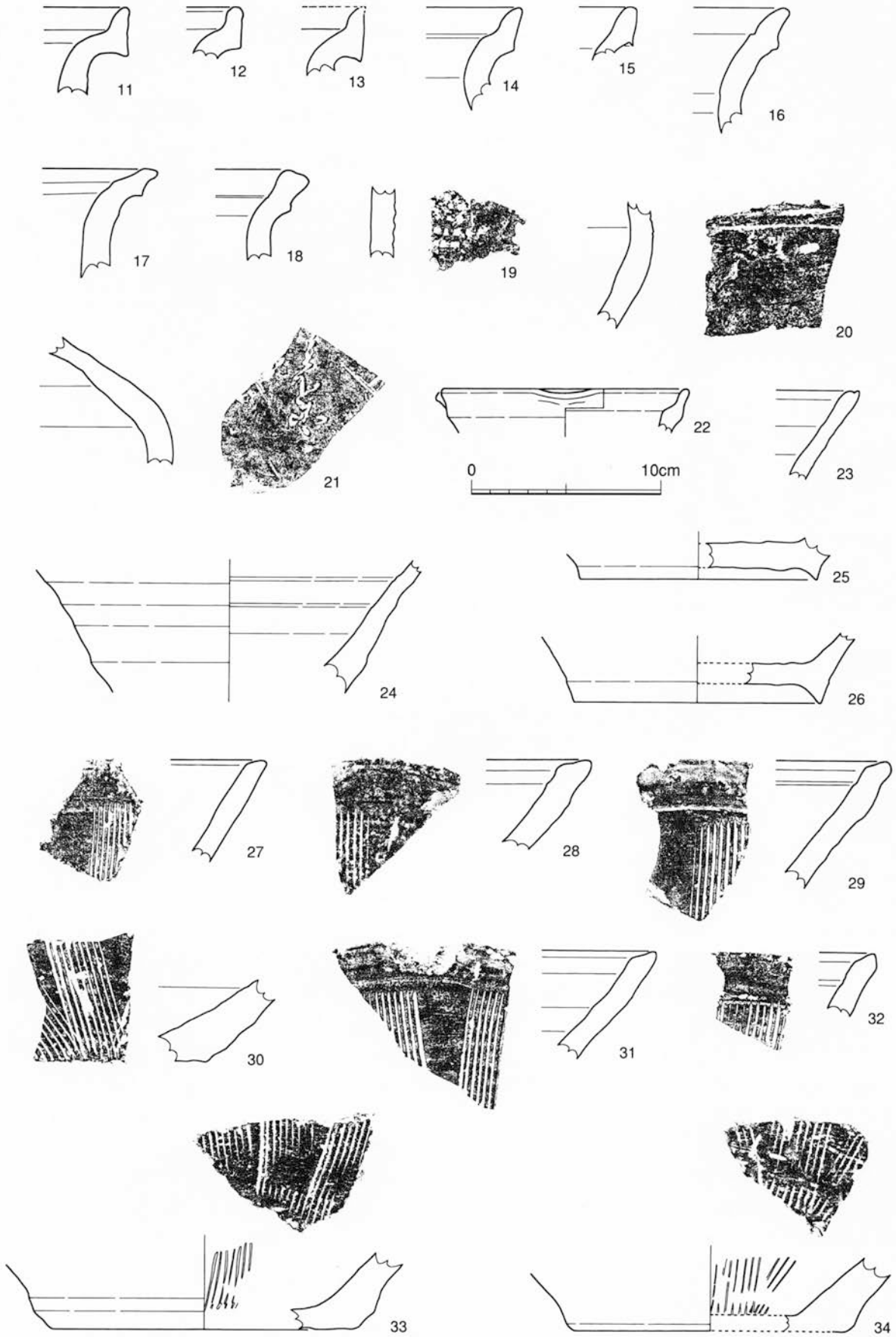
古瀬戸、瀬戸・美濃は総破片数で296点出土している。便宜上、大窯期より前を古瀬戸、以降を瀬戸・美濃として分けて取り扱っている。その内訳は、古瀬戸251点、瀬戸・美濃44点、志野1点であり、古瀬戸が85%を占める。ただし、古瀬戸は、前期・中期様式の製品も若干量出土しているが、後期様式以降の製品がほとんどであり、この時期から消費量が増加している。よって、両者は継続した一連



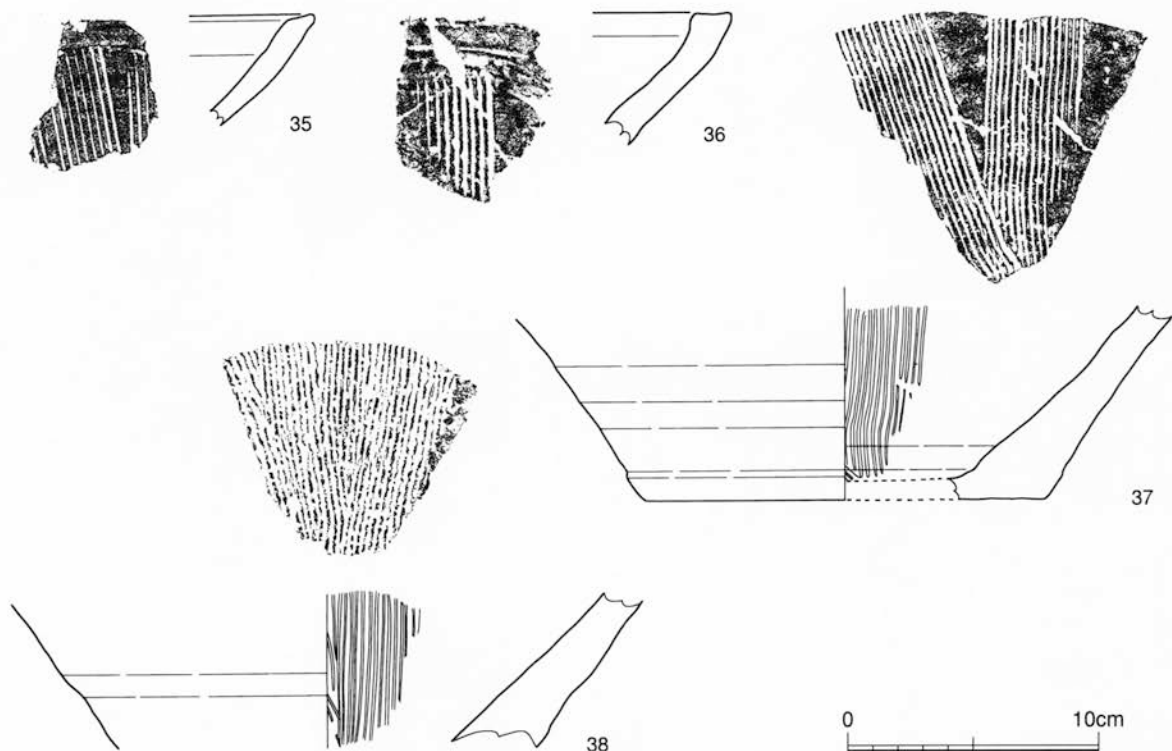
第197図 遺構出土越前焼 (S=1/3)

の消費活動であることがいえる。実測可能点数は84点である。器種は多種多様を極めているため、集計表を参照して頂きたい。前期・中期様式の製品は、水柱Ⅰ類(19)・水柱Ⅱ類(23)・瓶子Ⅱ類?(26)・合子蓋(54)・袴腰型香炉(58)があり、19・26が前期様式に遡る可能性がある。後期様式以降の製品では、平碗(3・10・11・20・37~41)と天目茶碗(12・16・62~83)の出土が目立つ。特に、天目茶碗は古瀬戸、瀬戸・美濃合わせて79点出土しており、出土量の約26%を占める。この天目茶碗と共に、茶入として使用されたと考えられる小型壺(6・18・55)や、花瓶Ⅲ類(27)・香炉(17・59)・指水(建水?)(61)が出土しており、茶道具が揃うことが特筆される。6は完形品で、木製蓋で栓がされた状態で出土している。他には、瓶子Ⅱ類(4)、特小型の碗(豆天目?・13)の出土が注目される。また、漆接ぎされたもの(29・50・51・68)も認められ、大事に使用されたことが分かる。志野は、丸皿(84)が1点のみ出土している。16世紀末頃と考えられ、この頃までは瀬戸・美濃製品が消費されていたようである。

出土した遺構は、中世前期は土坑(井戸)2基、土坑1基で、中世後期は土坑(井戸)3基、土坑1基、溝4基である。16号土坑から出土した16は、34号溝及び36号溝と接合関係にある。また、59号溝から出土した19は、34号溝と接合関係にあるが、34号溝は中世後期遺構と判断されるため、混入遺物であろう。なお、57号土坑(井戸)からの出土量は多く、新しい大窯Ⅲ期頃の製品もあるが、概ね後Ⅲ期頃にまとまりがある。



第198図 遺構外出土越前焼 (S=1/3)



第199図 遺構外出土越前焼 (S=1/3)

## 5. 瓦質土器 (第206図1～6)

瓦質土器は少なく、総破片数で20点出土している。実測可能点数は6点である。器種は播鉢(1・2)・火鉢(3～6)の二種が確認される。1は内面に卸目が確認できるため、確実に播鉢であることがいえる。5には底部付近に突帯が2条施されている。6は、高台の付く製品である。全て遺構外からの出土である。

## 第3項 輸入陶磁器

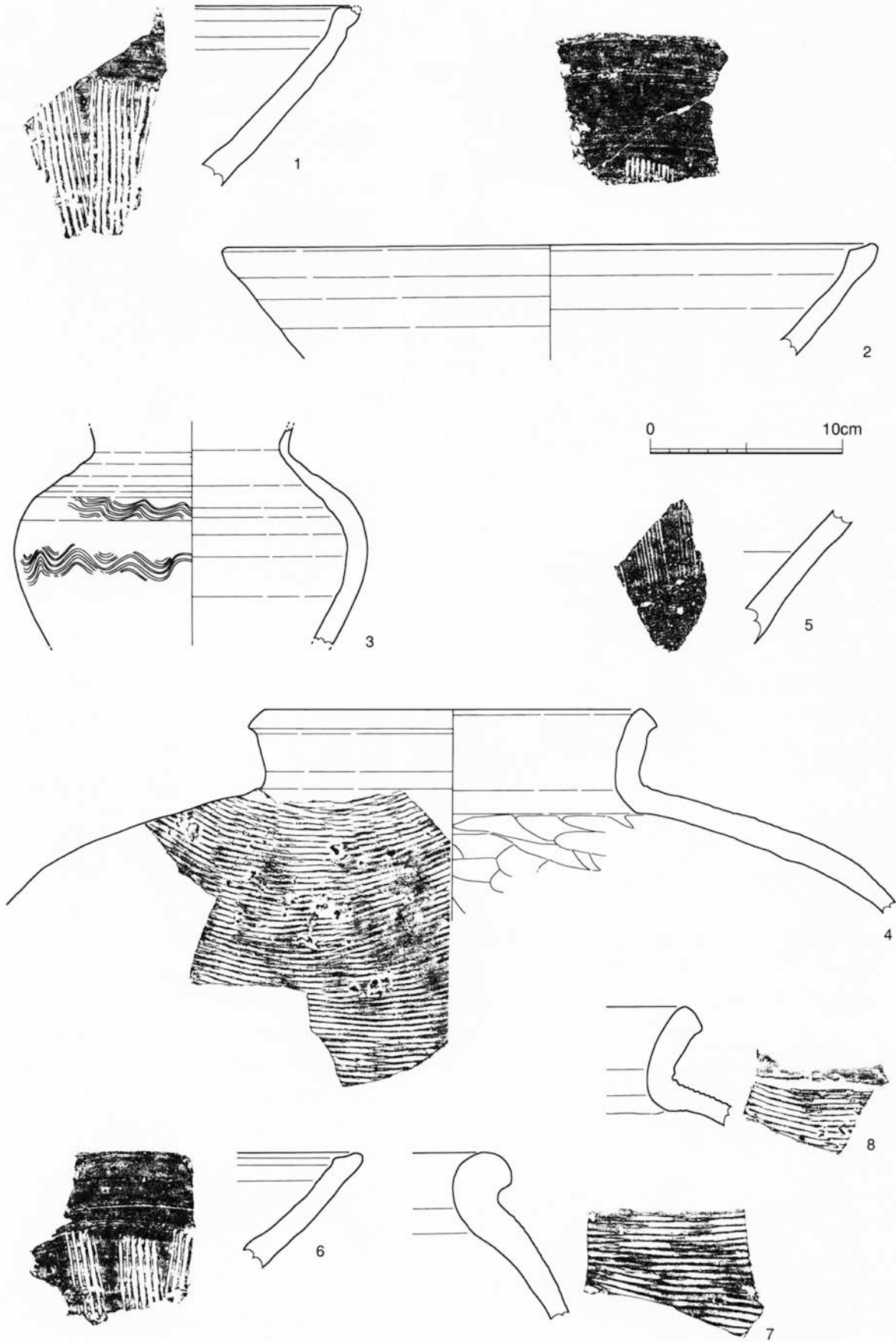
### 1. 白磁 (第207図1～11・第208図～第209図52～65)

白磁は総破片数で275点出土している。実測可能点数は65点である。器種は碗・皿類が主体である。特に、碗類の比率が高く、出土量の50%を占める。中世前期と中世後期の製品が見られる。中世前期では、玉口口縁を持つⅣ類碗(1・10・15～30)が目立つ。また、Ⅳ類碗に先行するⅡ類碗(12～14)の出土も確認される。皿には見込みに放射状の線文が施されるⅦ2類(48)などが確認される。中世後期の製品では、皿形態が主であり、角杯(52)も見られる。53・54のような、高台に抉りの入った底部破片もみられ、53は角杯の底部の可能性がある。主としてD群～E群の製品が出土している。他に、壺の口縁部と思われる84や、小型壺の体部と考えられる85が出土しており、注目される。

出土した遺構は、中世前期は掘立柱建物跡柱穴1棟で、中世後期は溝4基である。特に、重複関係にある33号・34号・36号溝内からまとまって出土していることが特徴である。その中でも34号溝からの出土が多い。

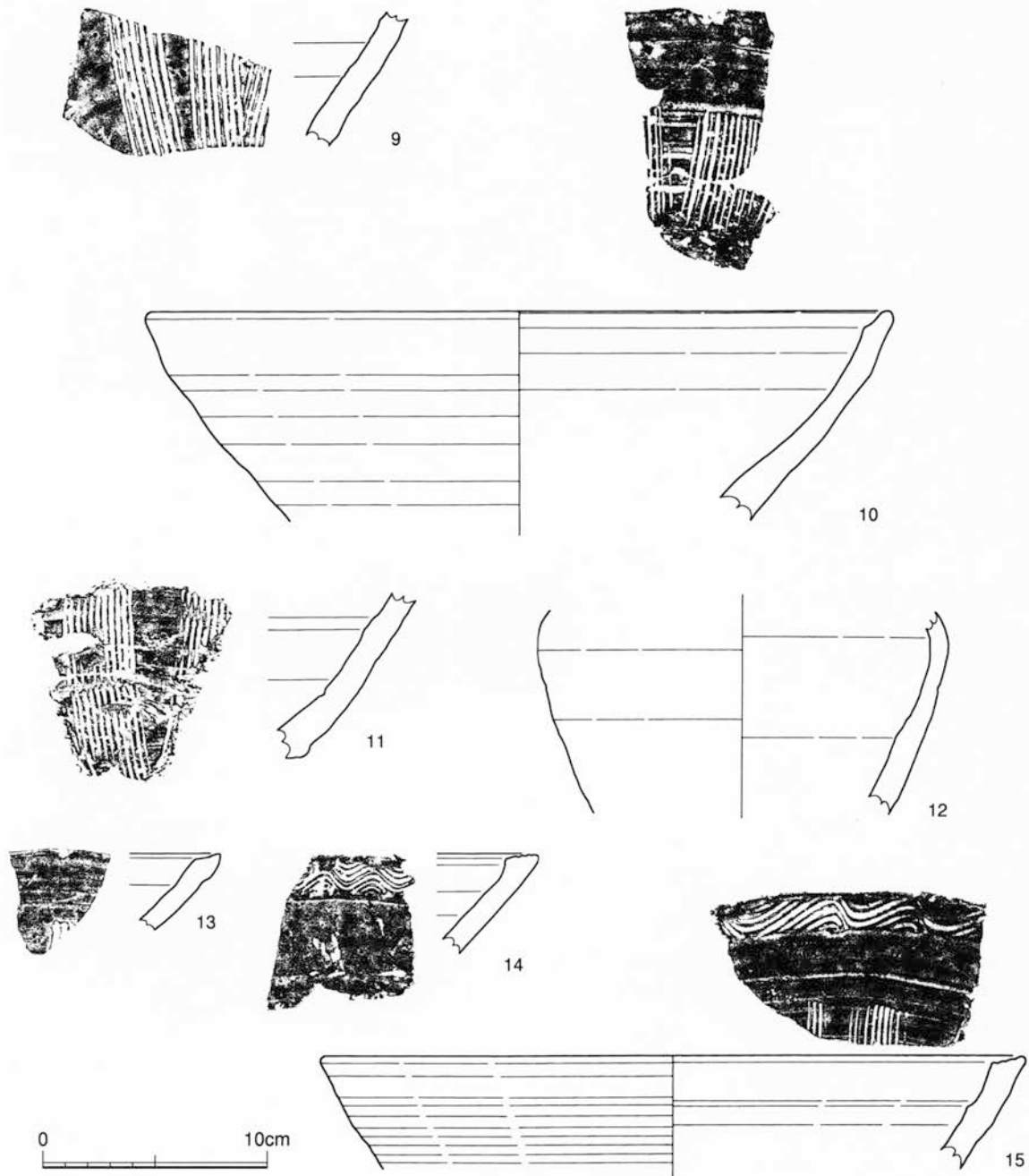
### 2. 青磁 (第207図1～8・第209図9～第210図48)

青磁は総破片数で205点出土している。実測可能点数は48点である。器種は碗類が主体であり、出土量の82%を占める。中世前期と中世後期の製品が見られ、ほとんどが龍泉窯系の製品と考えられる。その中で碗類には、初期のⅠ類(9～11・31・33)、外面に鎬連弁文が施されるⅠ-5類、(12～17)



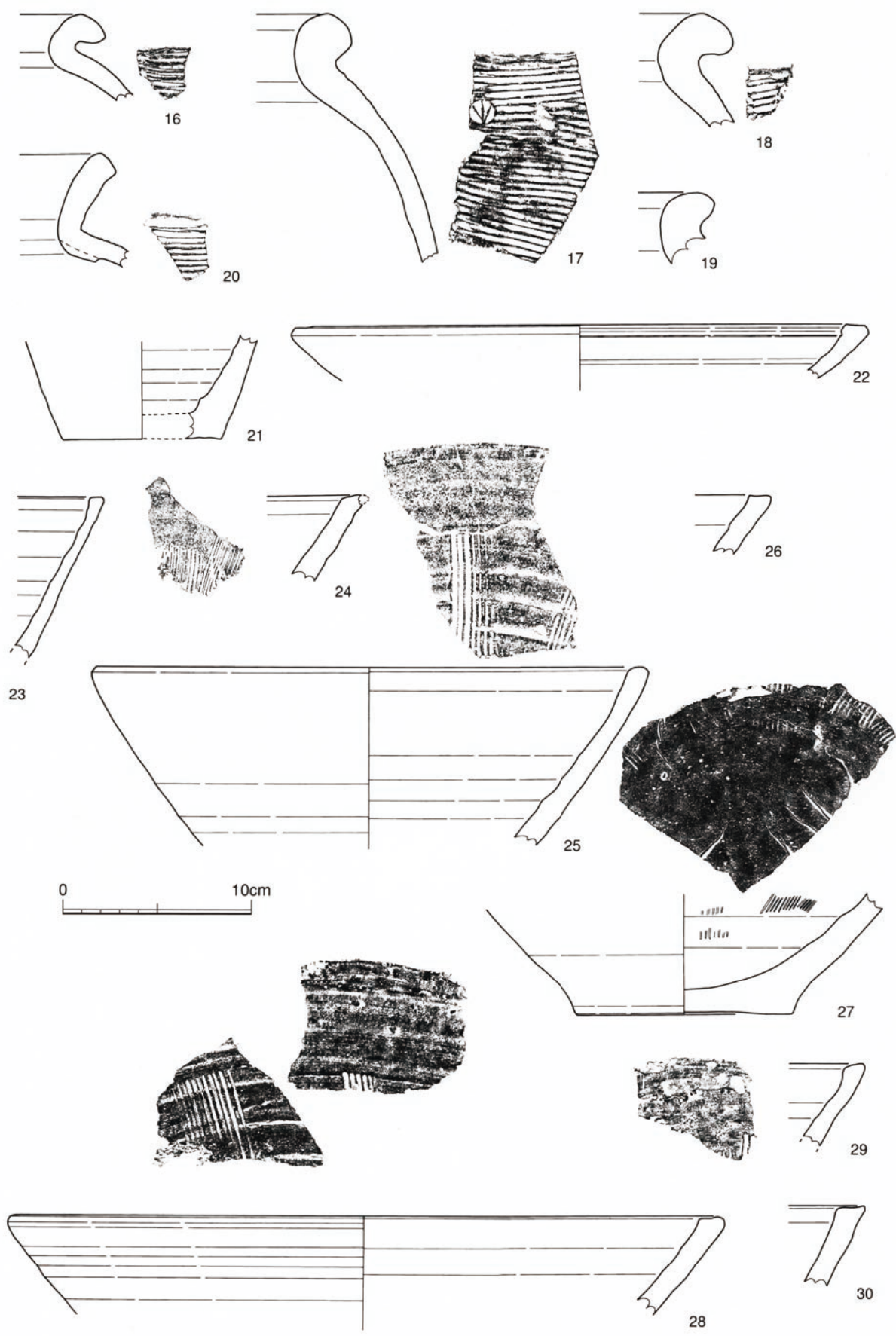
第200図 遺構出土珠洲焼 (S=1/3)



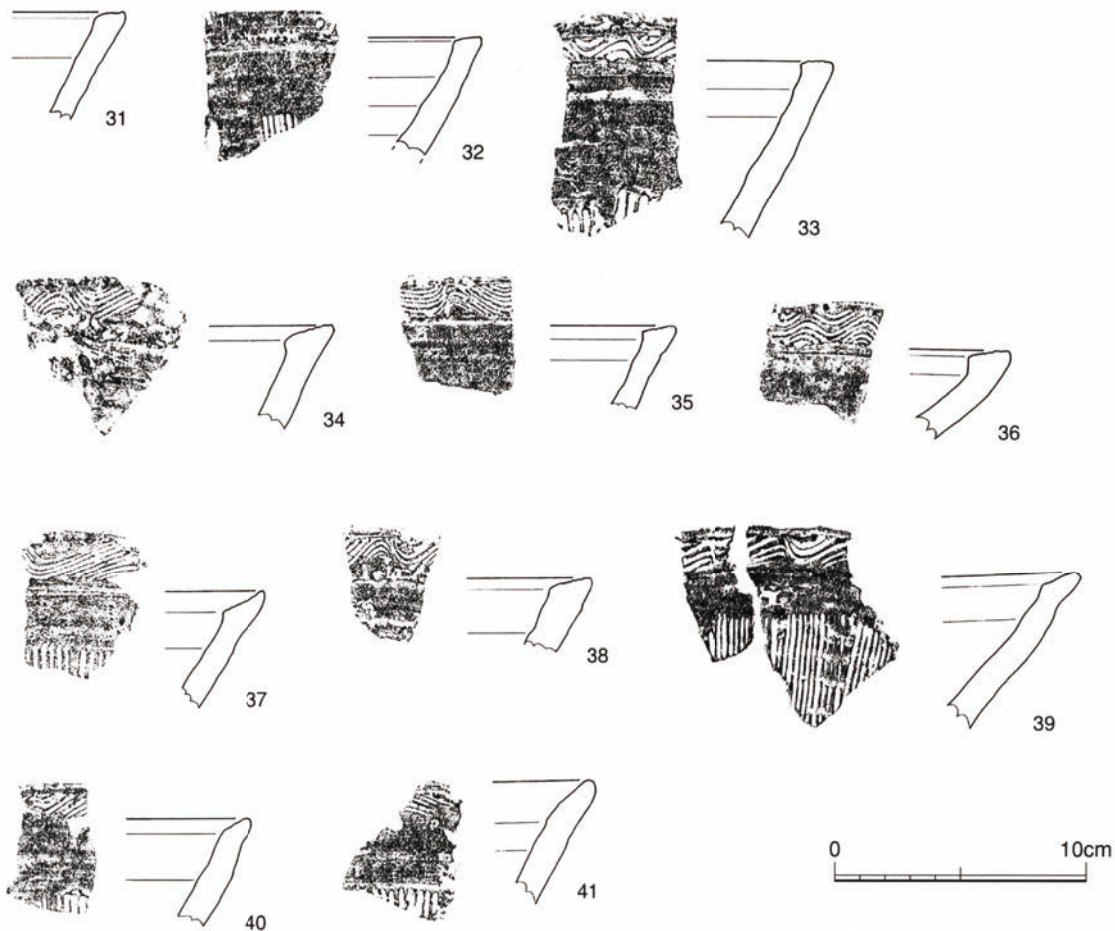


第201図 遺構出土珠洲焼 (S=1/3)

13世紀後半以降の連弁文が施されるB類 (1・18?~21)、口縁部外面に雷文が施されるC類 (22~24・32・34・35)、口縁部が外反するD類 (2~4・6・25~28)、口縁部が直線的なE類 (29・30)などが存在する。I類では、9・31に花文、33には草花文?が見込みに施されている。I-5類では、17は胎土が緻密でかつ釉調も良い優品である。B類では、体部外面に線描連弁文が施されるもの(1・19・20)がある。既に弁の単位を意識していないものであることから、15世紀後半~16世紀代と考えられる。また、20には漆接ぎの施された跡が見られる。C類では、雷文と連弁を合わせたような特殊な文様が施されたもの(21)がある。他に、口縁端部に輪花の施されたもの(5・7)や、盤(43)、香炉(44・45)、合子(47)等がある。5は紀淡海峡出土遺物に類例がある。48は形態及び透明感のある釉調から、同安窯系の製品と判断される。同安窯系の製品はこの1点のみである。青磁において、他の器種より碗の出土量が卓越する背景として、青磁碗は飲茶器として使用されたという指摘



第202図 遺構外出土珠洲焼 (S=1/3)



第203図 遺構外出土珠洲焼 (S=1/3)

がある。飲茶器（茶道における抹茶用のみを指す訳ではない）としての使用であるならば、碗や小碗が好んで使用された状況に説明がつくであろう。

出土した遺構は、中世後期は土坑（井戸）2基、土坑3基、溝3基である。中世前期遺構からは出土していない。57号土坑（井戸）から出土した3は、72号土坑と接合関係にある。

### 3. 朝鮮系陶磁器（第207図1～2・第210図3～6）

朝鮮系陶磁器は、11点出土している。器種は碗のみで、青磁碗が7点、藁灰釉碗が4点である。1以外は、基本的に全面施釉である。時期は16世紀末頃が考えられる。朝鮮系陶磁器は、現地では入れ子の食器であり、日本へは茶道における見立て茶碗として持ち込まれたものである。北陸では、一乗谷朝倉館跡からまとまった量が出土しており、茶道具として使用されたものである。当遺跡出土品も茶道具として使用されたと考えている。

出土した遺構は、中世後期は土坑（井戸）1基のみである。

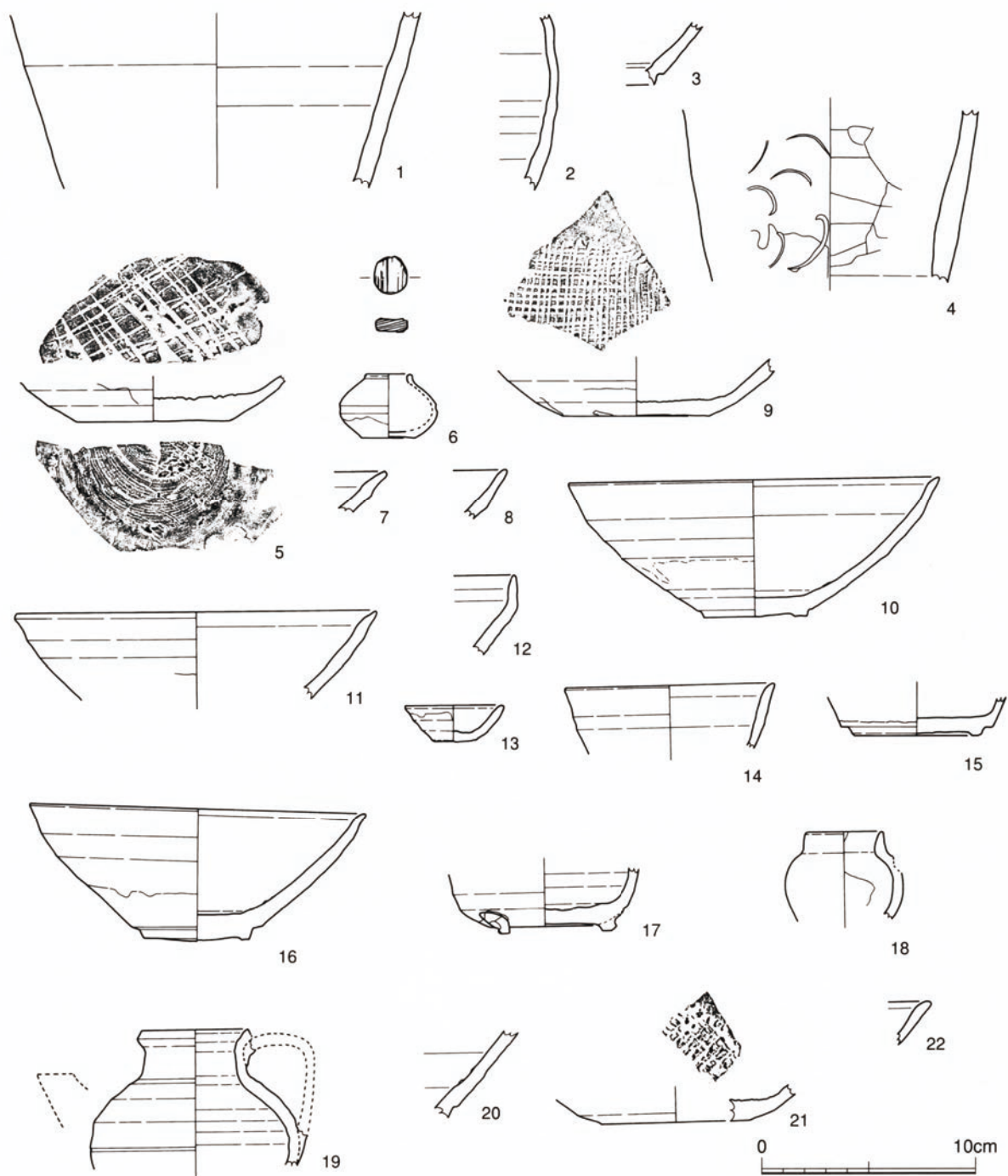
### 4. 染付（第210図1～10）

染付製品は、総破片数で18点出土している。器種は碗5点・端反皿11点・碁笥底皿2点がある。端反皿（3～8）の体部外面の文様意匠は、牡丹唐草文が多い。碁笥底皿の10は、体部外面に芭蕉葉文、見込みに花鳥文が施されている。遺構内からの出土はない。

## 第4項 木製遺物

### 1. 井戸部材（第211図～第213図）

縦板組井戸である2号井戸の部材である。1～28は板材であり、29～32は4隅の杭である。板材は、折り取られていたためか、下端部のみが残存しており、非常に残りが悪い状態である。板材は全て桧

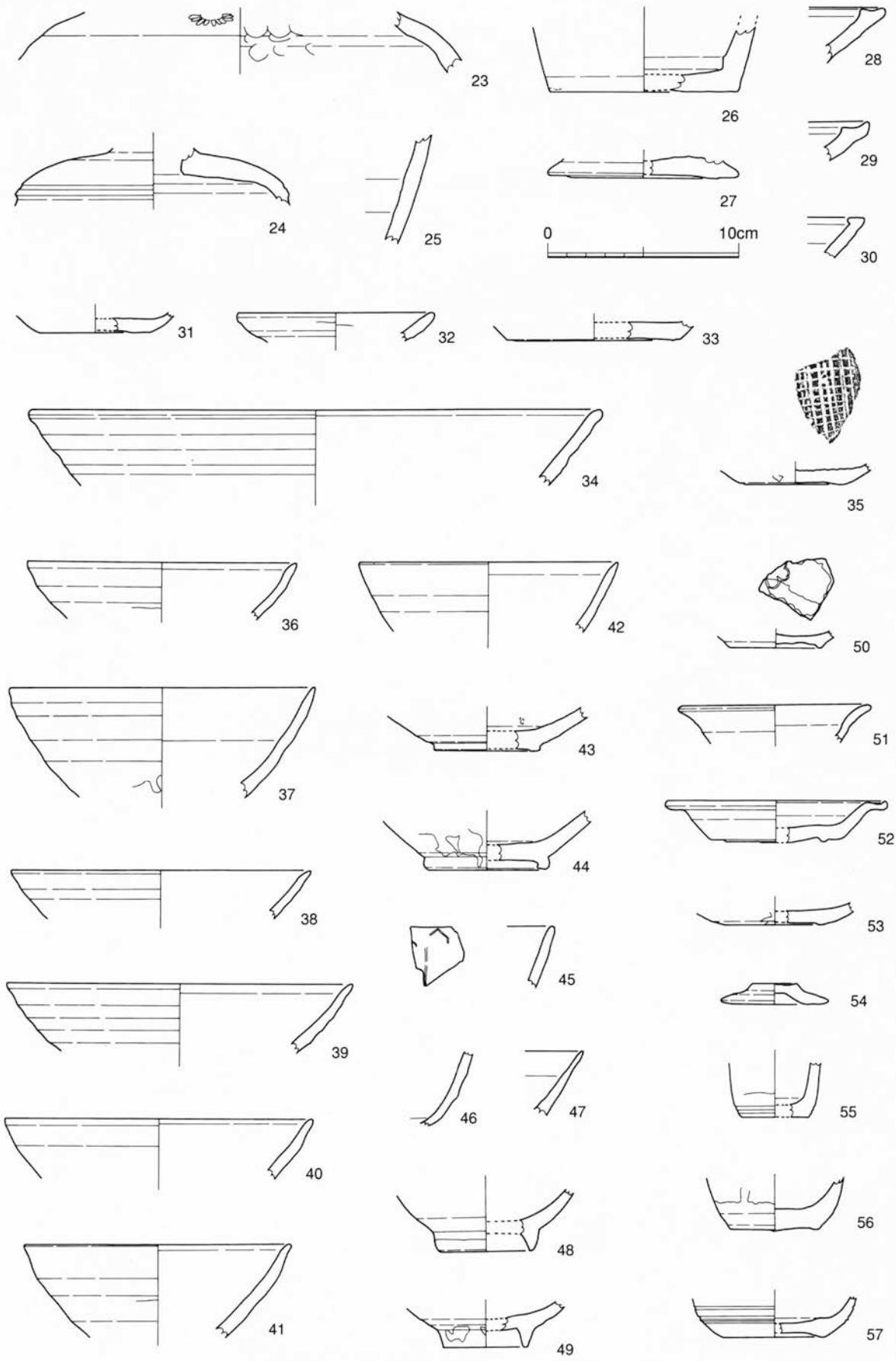


第204図 遺構出土瀬戸（瀬戸・美濃）焼（S=1/3）

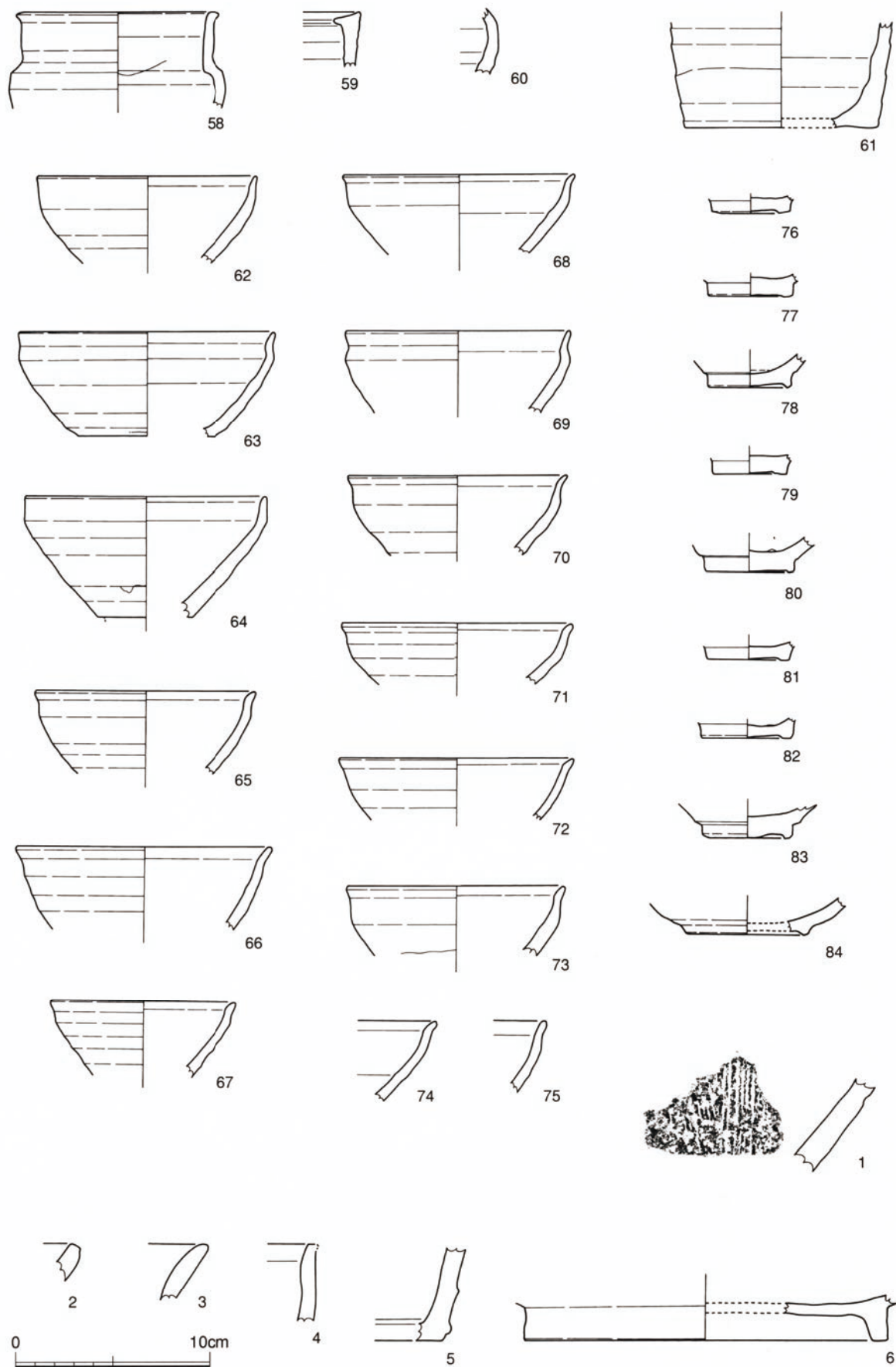
目材である。出土地点については、遺構平面図を参照して頂きたい。

## 2. 木製品（第214図～第215図）

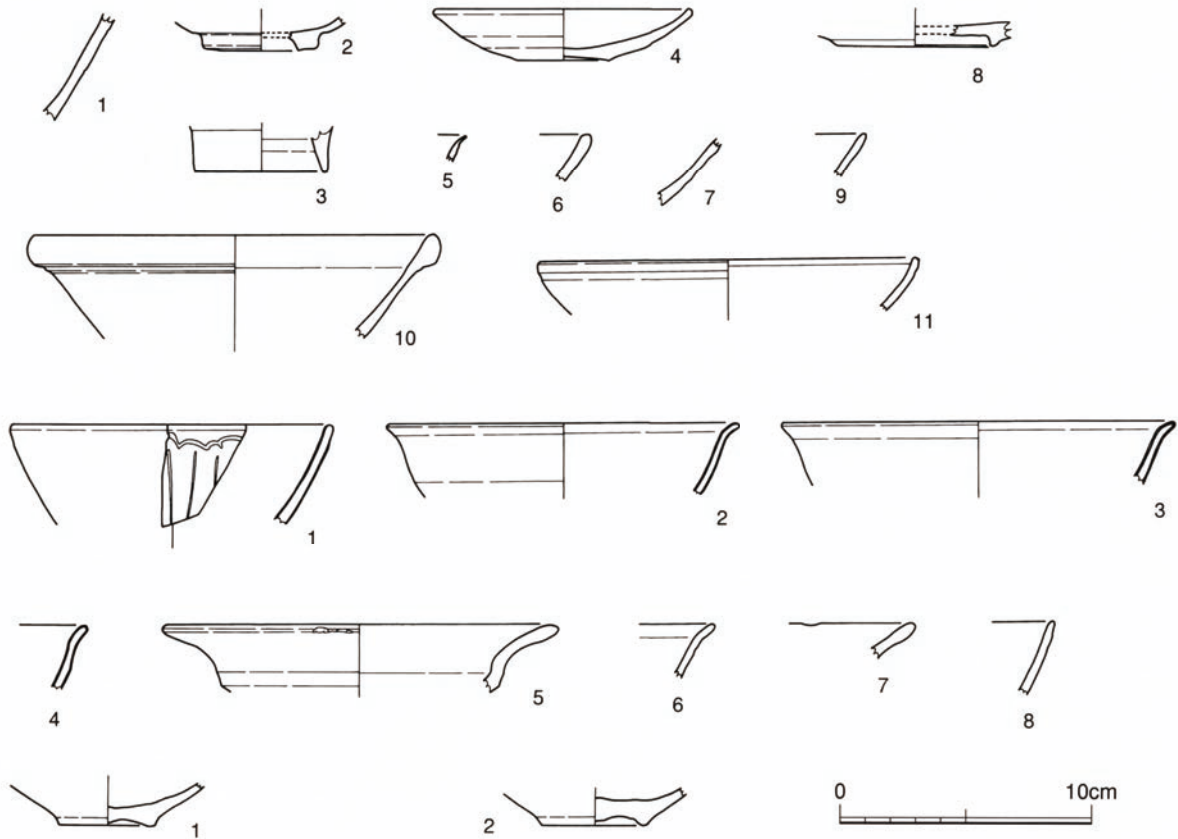
木製品は、箸・下駄・漆器碗・漆器皿・円盤・柄杓が出土している。箸（1～8）は、75号土坑（井戸）からの一括出土である。折れた部分が存在しない1を除き、残りは18cm前後の長さに統一されている印象を受ける。セット関係とすれば、4名分ということになる。9～12は134号土坑（井戸）から出土したものである。下駄（9・10）は、9は歯部を欠く以外は完形である。皿（11）は黒漆1色であり、轆轤引きのヒダを残す意匠である。円盤（12）は用途不明であるが、片面にケビキ線が多く見える。側面の面取りは雑である。漆器碗（13）は、14号土坑出土である。黒漆をベースに赤漆で内面に文様（草文？）が描かれている。14～16は、57号土坑（井戸）から出土したものである。14・15は別固体ではなく、1つの柄杓である。底板は柾目材である。漆器碗（16）は、内湾した体部を持



第205図 遺構外出土瀬戸（瀬戸・美濃）焼（S=1/3）



第206図 遺構外出土瀬戸（瀬戸・美濃）焼（58～84）・瓦質土器（1～6）（S=1/3）



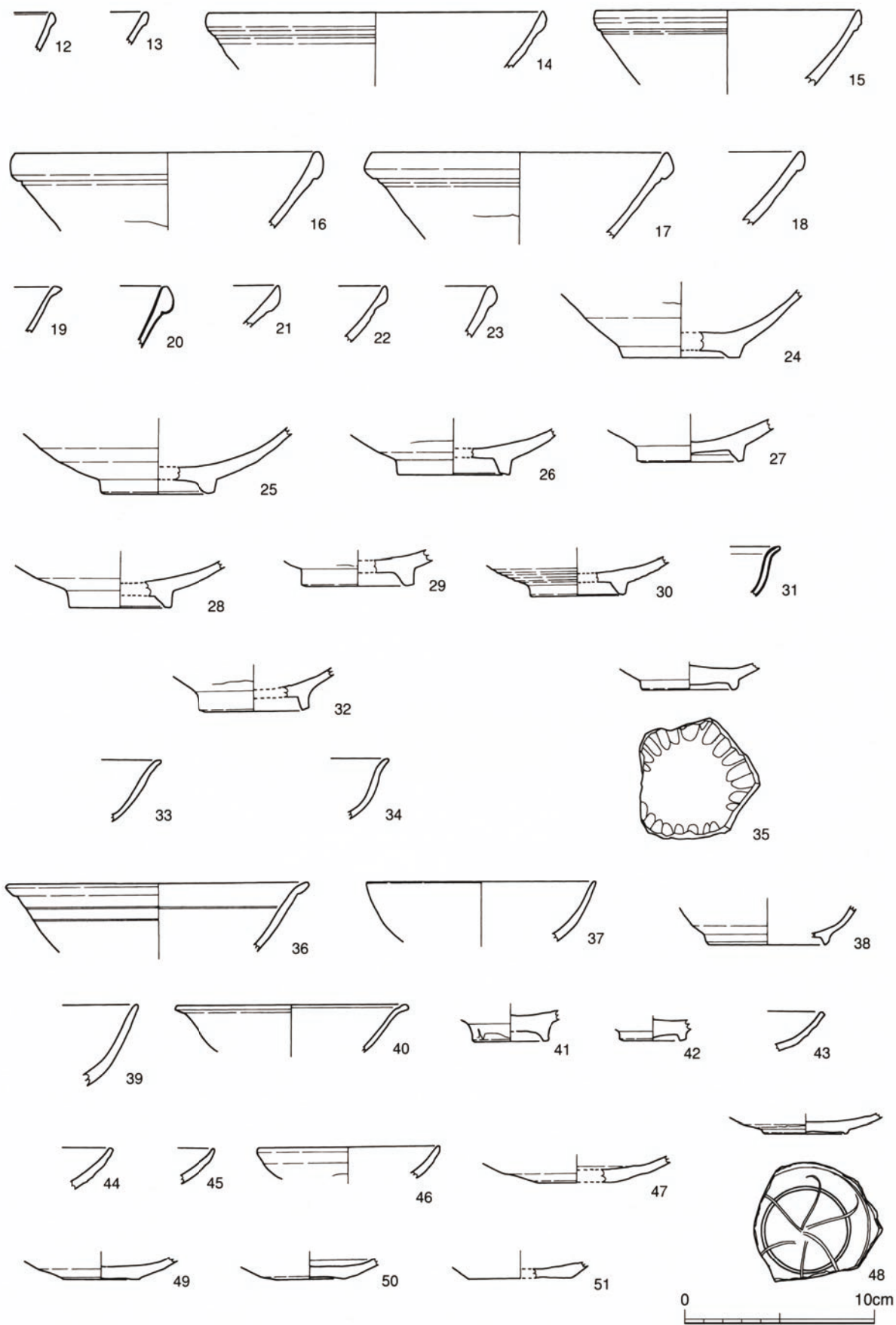
第207図 遺構出土白磁・青磁・朝鮮系陶磁器 (S=1/3) (上段白磁・中段青磁・下段朝鮮系)

つ形態で、体部内面下半に轆轤引きのヒダを残す意匠のものである。廃棄後に歪みが生じた可能性もあるが、底部中央が高台より突出しており、安定感のない器形である。

#### 第5項 石製遺物 (第216図～第218図)

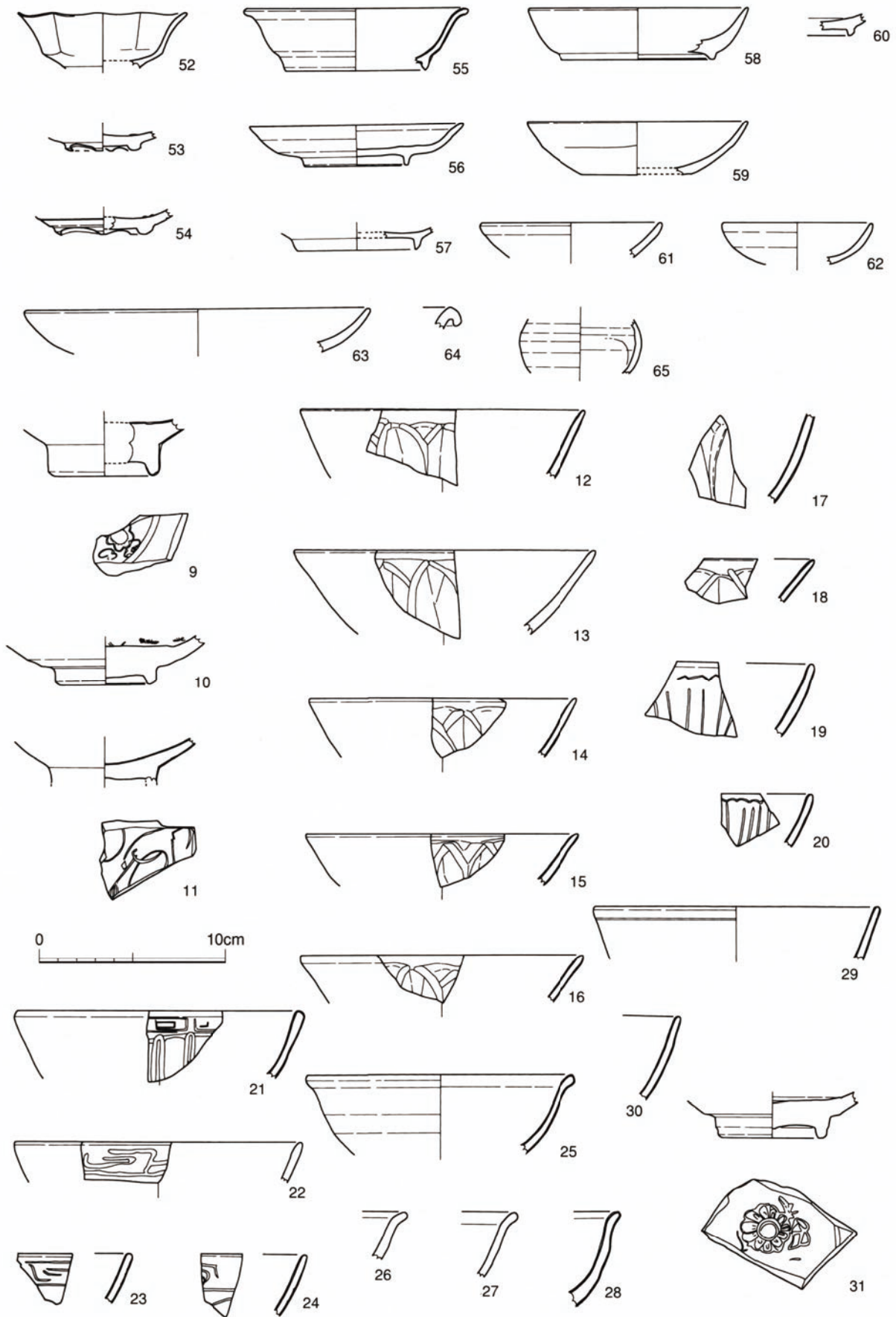
石製遺物は硯・行火・用途不明品・砥石が出土している。硯(1)は、緑色凝灰岩製で、残存部位から推測すれば、大型品であることがいえる。行火(2・3)は、57号土坑(素掘り井戸)から出土している。両者とも角礫凝灰岩製であり、外面全体が煤けている。2は、内側の背面と底面は、平滑に仕上げされていない状態である。4は用途不明品であるが、154号土坑出土である。完形はほぼ円形を呈すると考えられ、内側が平刃鑿により若干彫り窪められた状態である。

5～14は砥石である。石材は、変質項岩と珪質岩の使用頻度が高い。法量は、長さ3cm程度のものから20cm程度のもので様々であり、偏りはない。8・10～13は、4面全てを砥面として使用している。5は表裏面と片側側面の3面、6・14は表裏面の2面、7・9は表面の1面のみを砥面として使用している。5・7・14が中砥石と考えられ、残りは仕上げ砥石である。2は、原石をあまり加工していないものであり、片側に煤が付着しており被熱を受けている。石を割るときのものであろうか。14はその形態から、手持ちで使用したものと考えられ、丸い面を生かすことが必要なものに対して使用されたと考えられる。5が75号土坑(井戸)出土、6が134号土坑(井戸)出土、7が57号土坑(井戸)出土、8が74号土坑出土、9が55号土坑(井戸)出土、10が36号溝出土、11が33号溝出土、12が66号溝出土である。

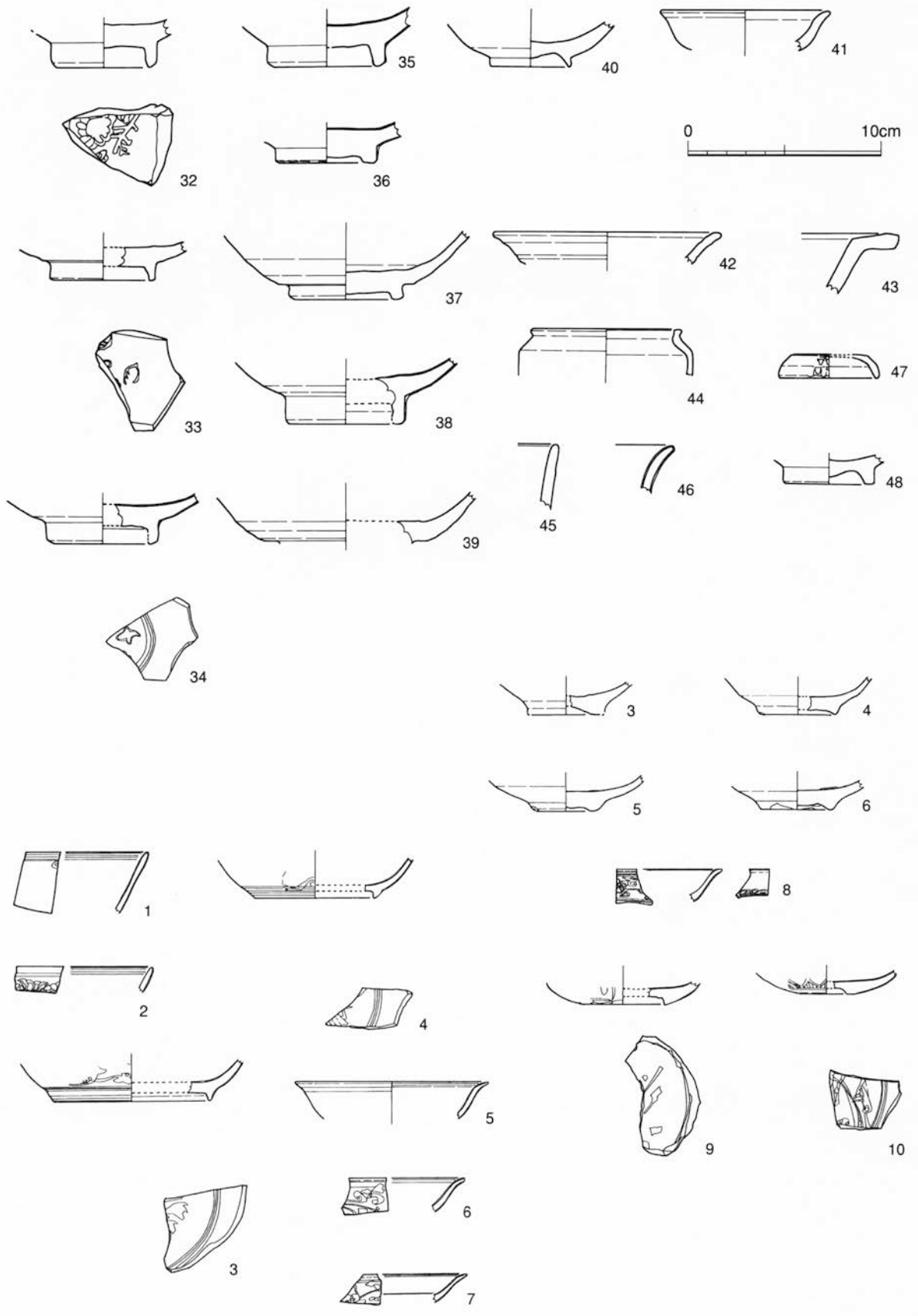


第208図 遺構外出土白磁 (S=1/3)

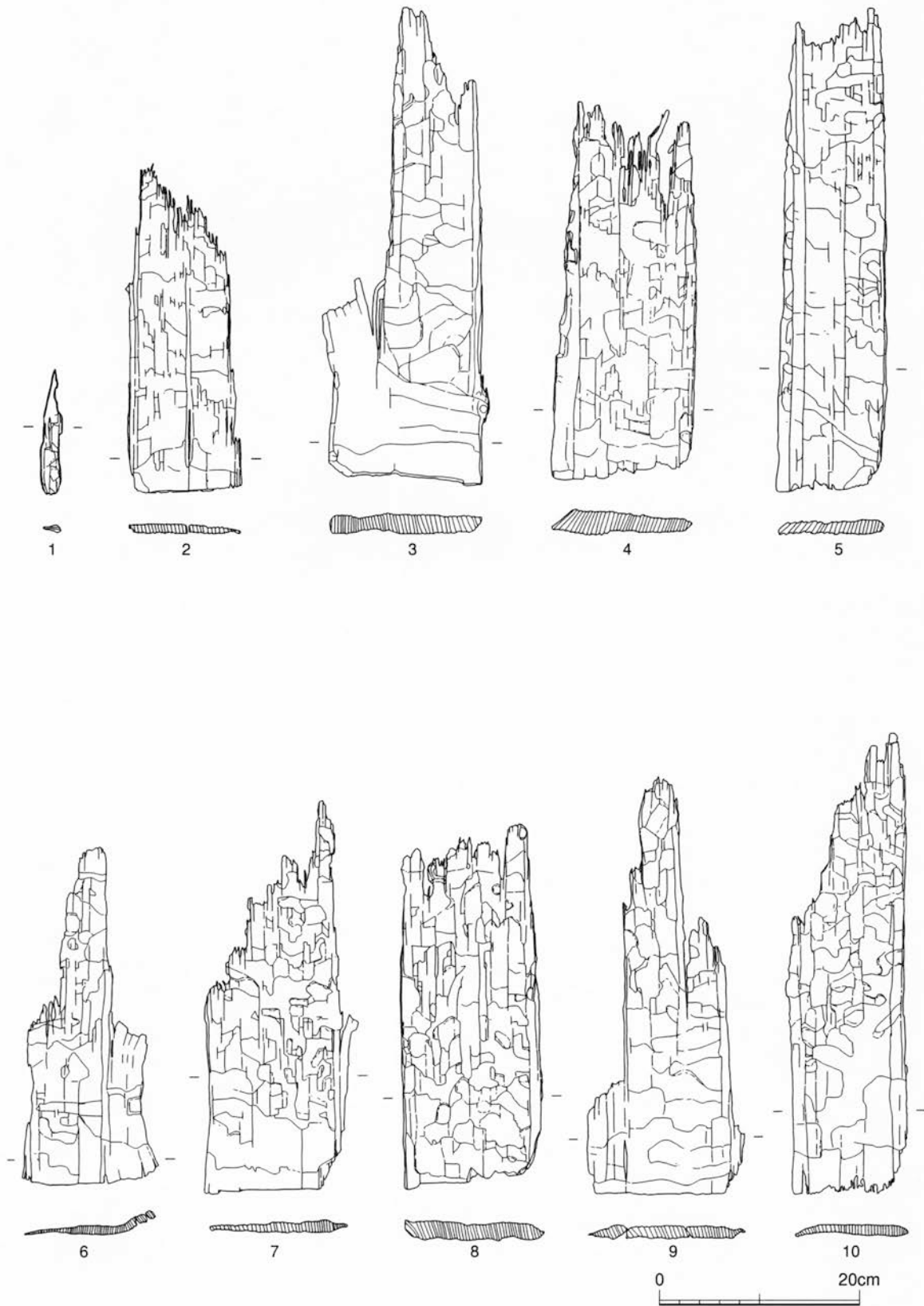




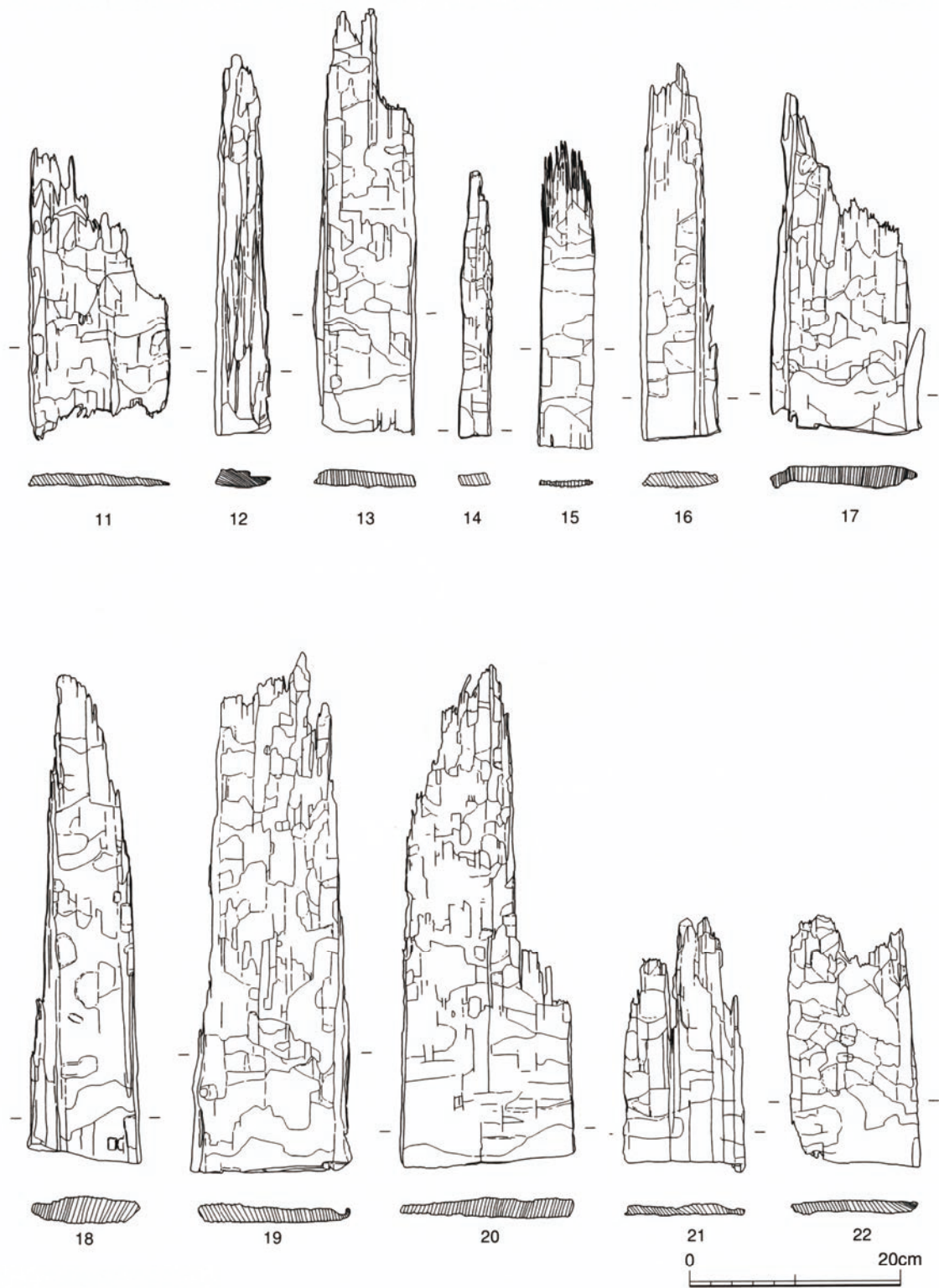
第209図 遺構外出土白磁 (52~65) ・青磁 (9~31) (S=1/3)



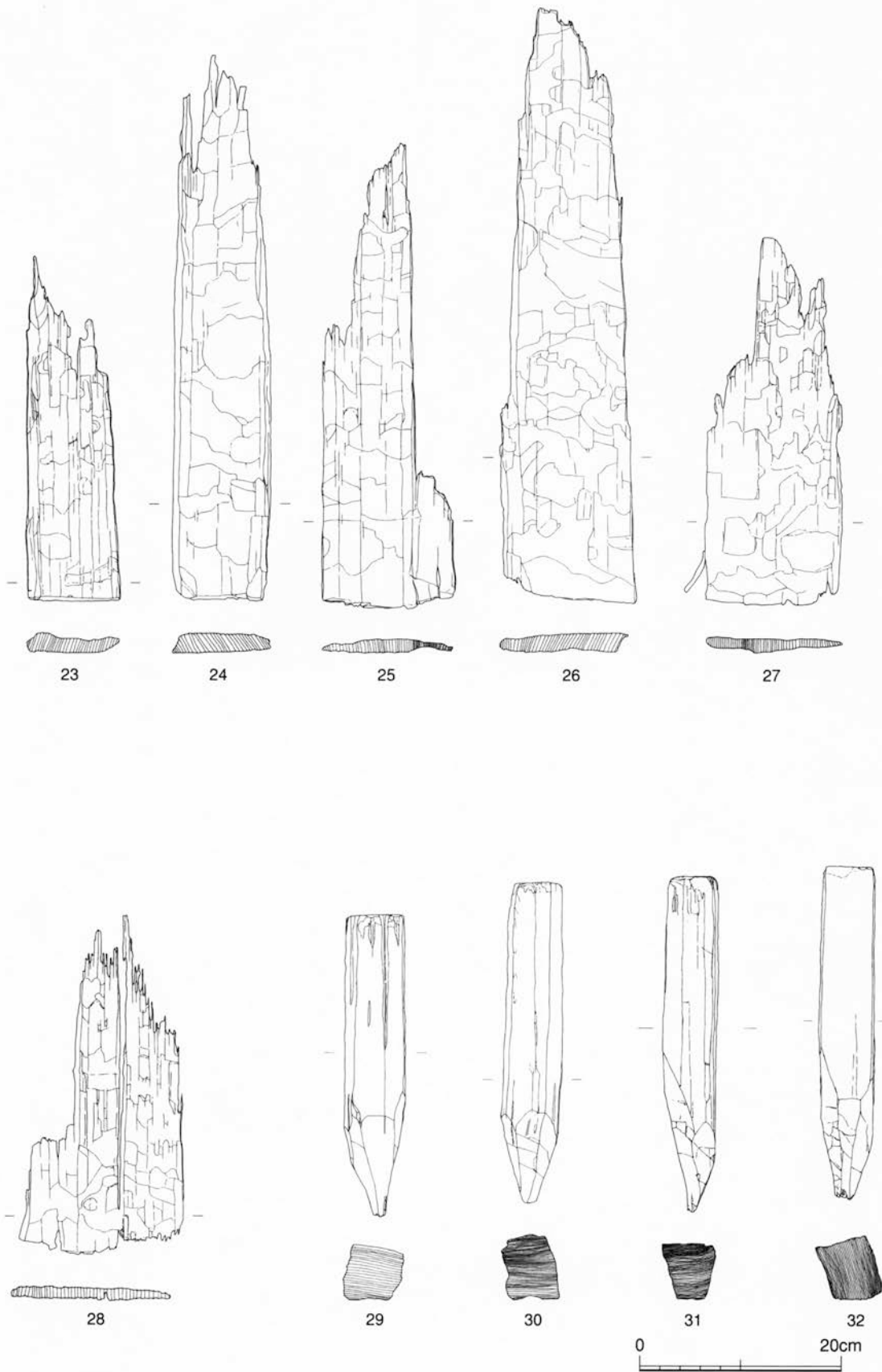
第210図 遺構外出土青磁 (32~48)・朝鮮系陶磁器 (3~6)・中国製染付 (1~10) (S=1/3)



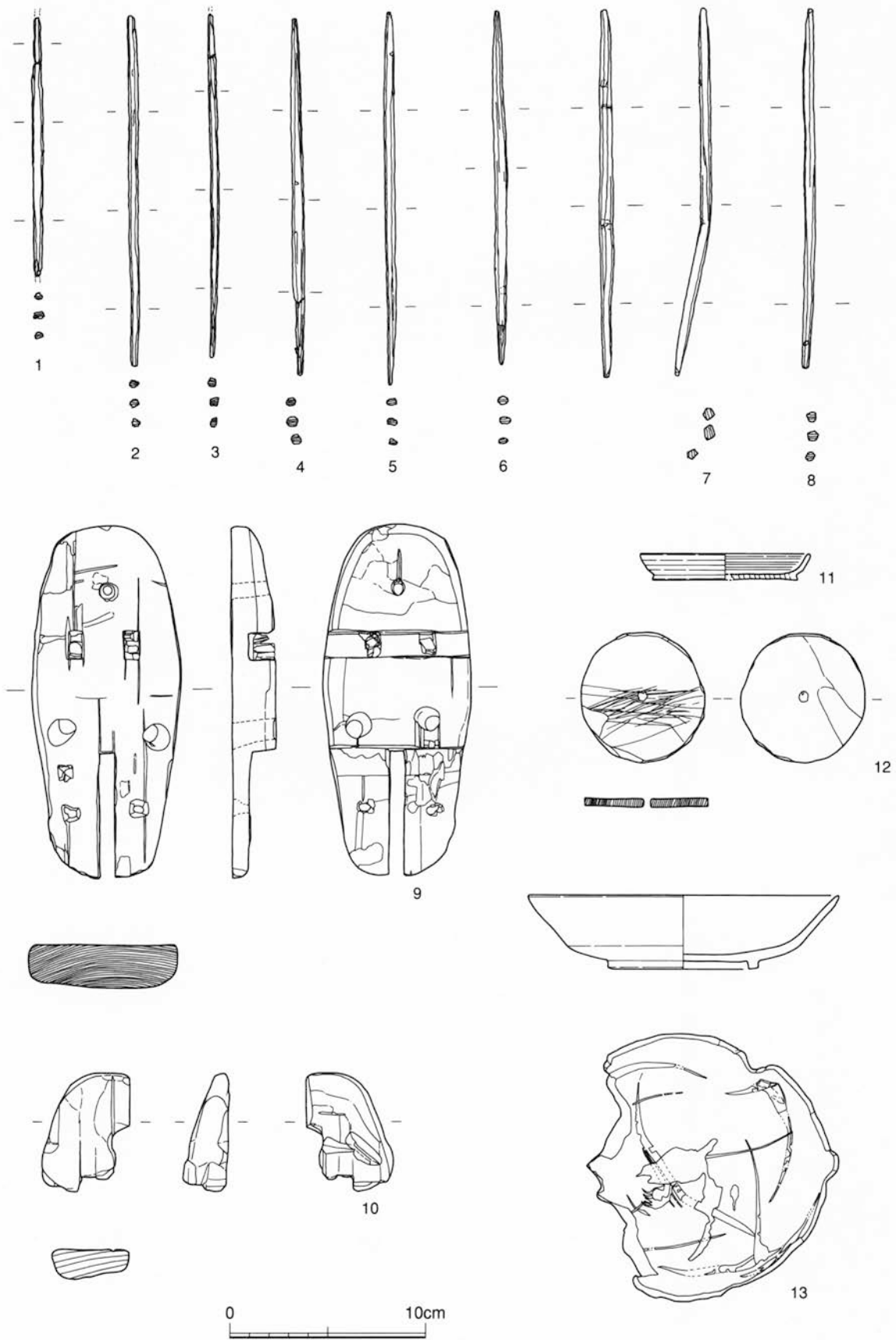
第211図 2号井戸・井戸側材 (S=1/6)



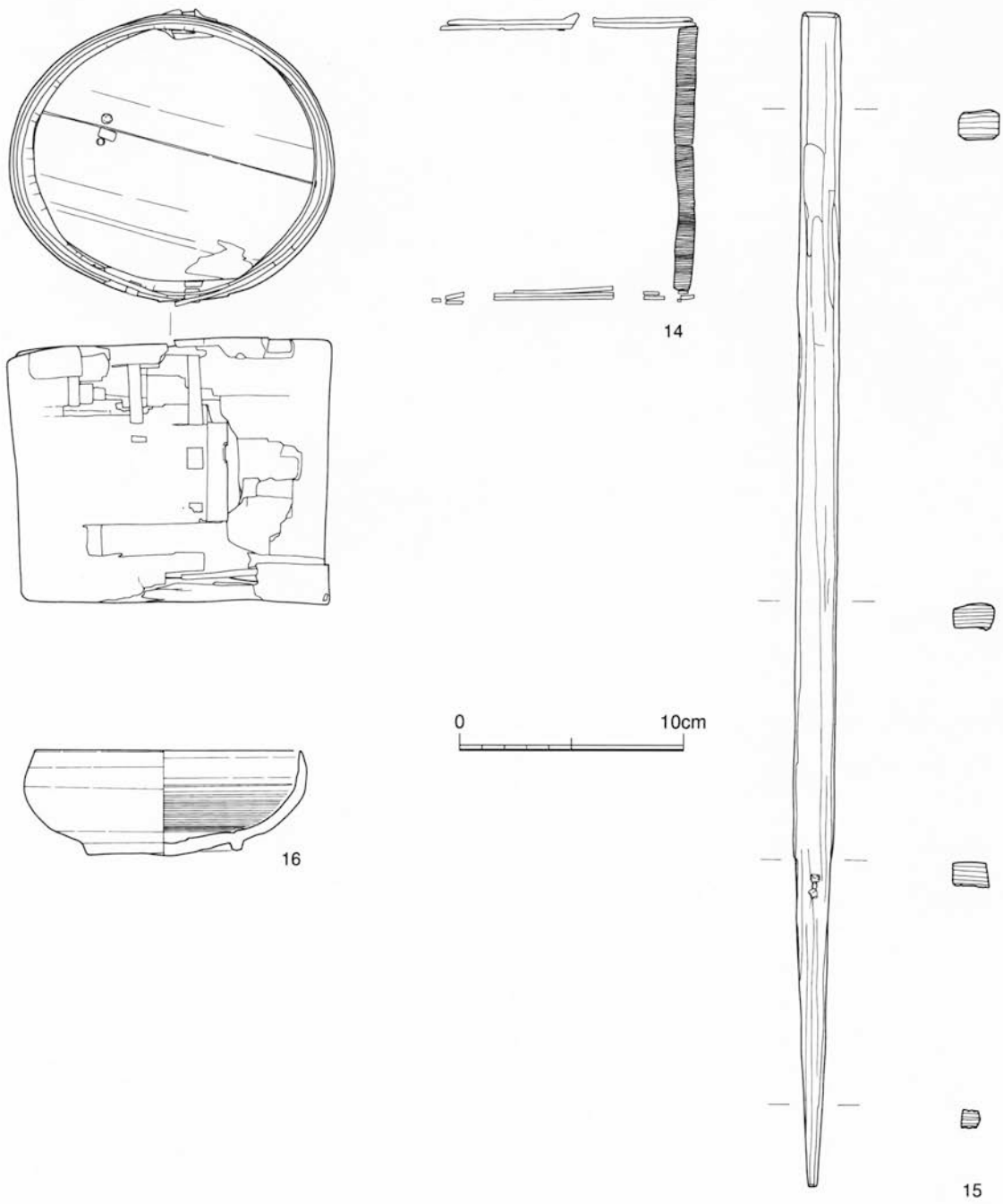
第212図 2号井戸・井戸側材 (S=1/6)



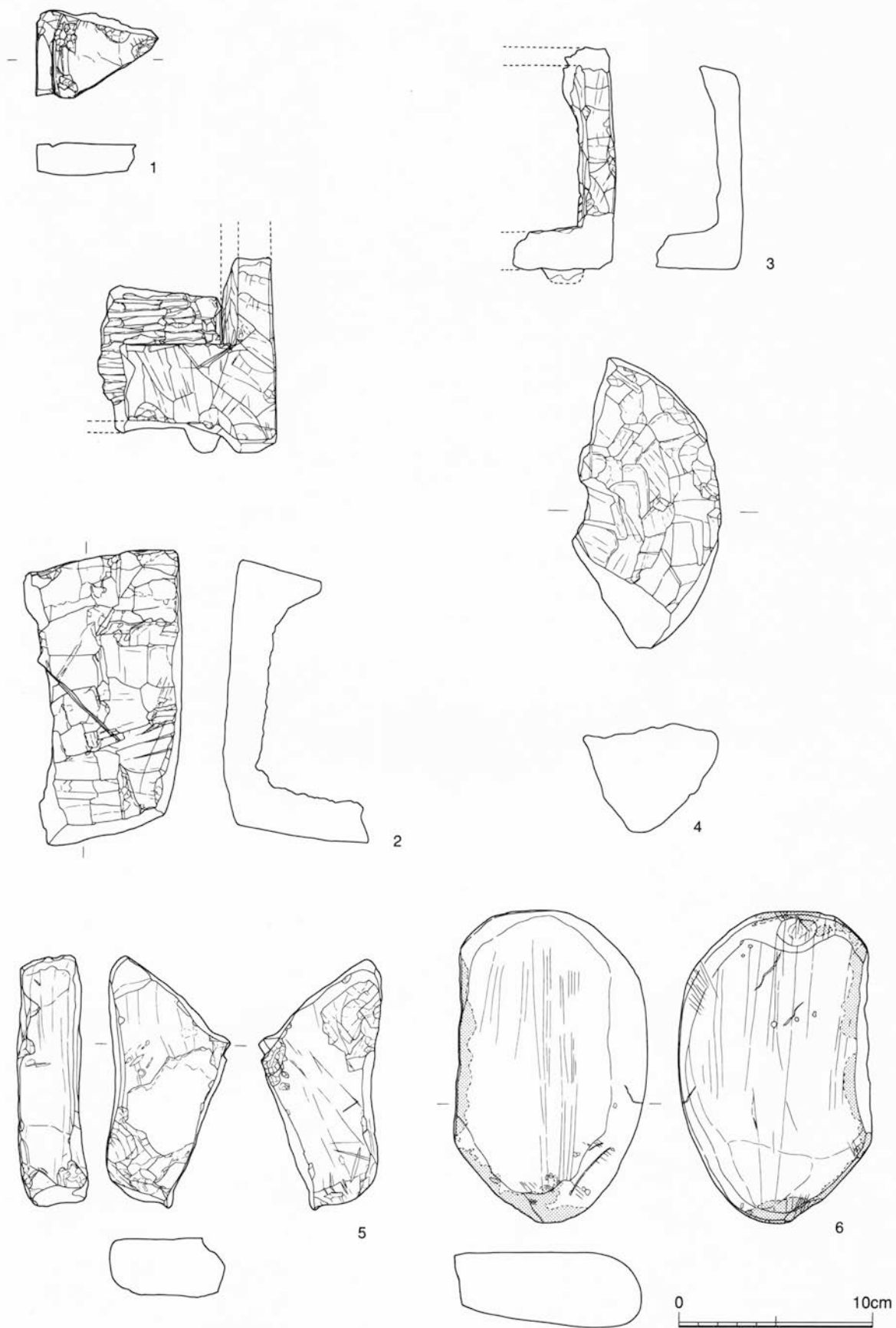
第213図 2号井戸・井戸側材 (S=1/6)



第214図 75号土坑 (1~8) ・134号土坑 (9~12) ・14号土坑 (13) 出土木製品 (S=1/3)

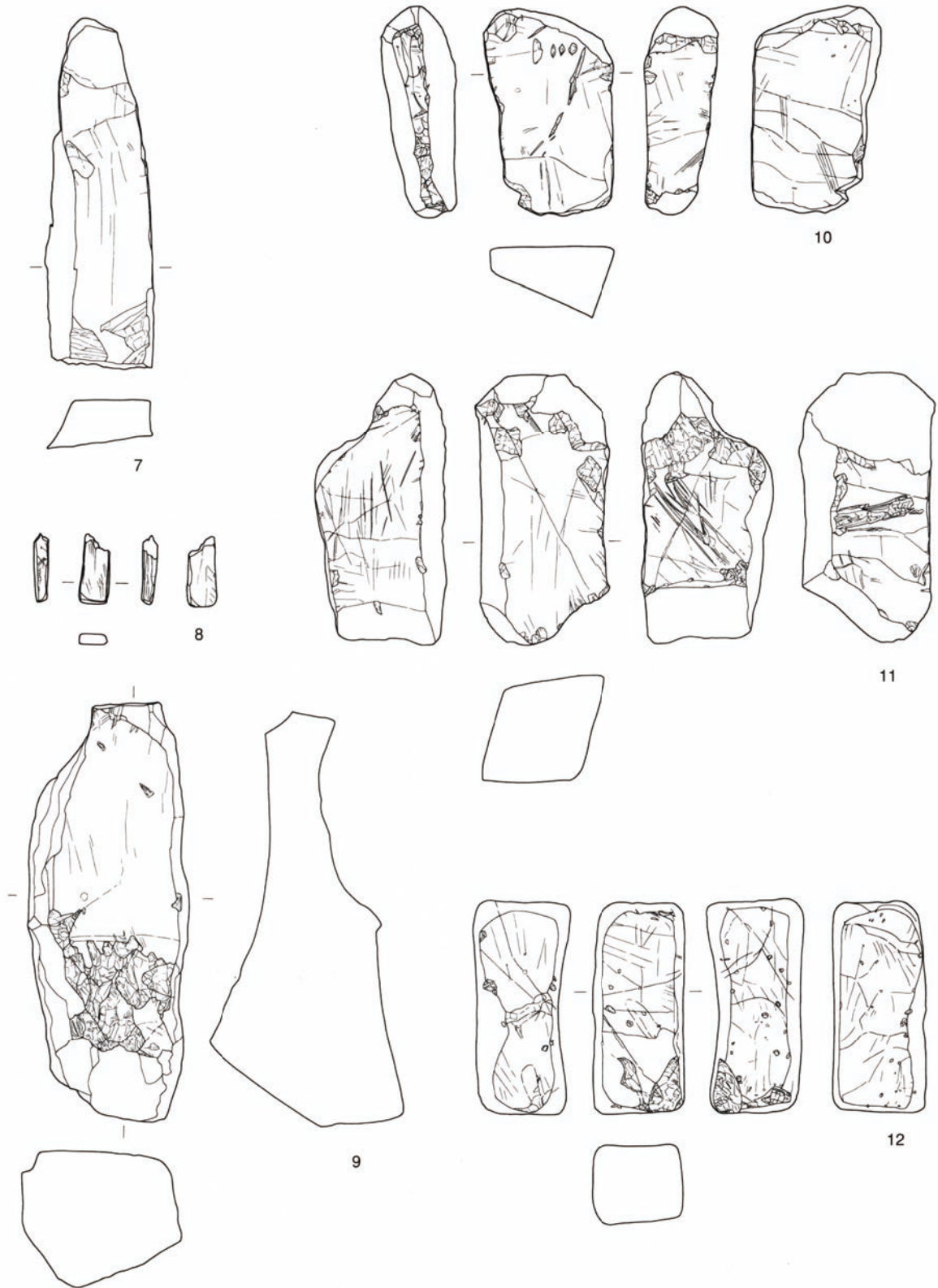


第215図 57号土坑出土木製品 (S=1/3)

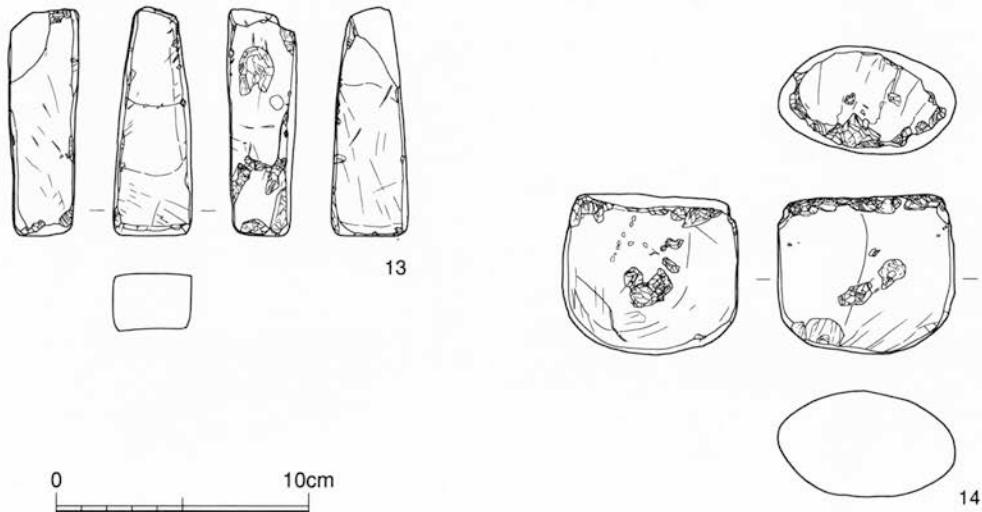


第216図 石製品 (1~4) ・砥石 (5・6) (S=1/3)





第217图 砥石 (S=1/3)



第218図 砥石 (S=1/3)

### 中世 観察表 凡例

1. 番号は掲載順であり、実測図と対応している。
2. 土器類・陶磁器類の器種分類と時期については、以下の論文を参考にしている。

#### 中世土師器

藤田邦雄1992年「加賀における様相—土師器—」『中世前期の遺跡と土器、陶磁器、漆器』北陸中世土器研究会及び北陸中世土器研究会編1997年『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房に基づいている。

#### 加賀焼・越前焼・珠洲焼

加賀焼は、垣内光次郎2001年「中世の焼物生産」『新修小松市史』資料編3 九谷焼と小松瓦 石川県小松市に、珠洲焼は吉岡康暢1994年『中世須恵器の研究』吉川弘文館に、越前焼は田中照久1994年「越前焼の歴史」『越前古陶とその再現』出光美術館及び北陸中世土器研究会編1997年『中・近世の北陸—考古学が語る社会史—』桂書房に基づいている。なお、加賀焼・珠洲焼においても前述の書籍を参考にした。

#### 古瀬戸、瀬戸・美濃焼

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター1996年『古瀬戸をめぐる中世陶器の世界』資料集及び(財)瀬戸市埋蔵文化財センター2001年『瀬戸大窯とその時代』に基づいている。

#### 青磁・白磁類

森田 勉、横田 賢次郎1978年「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『研究論集4』九州歴史資料館、上田秀夫1982年「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会、森田勉1982年「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究2』日本貿易陶磁研究会に基づいている。なお染付・朝鮮系陶磁器については、藤田邦雄氏に御教授を賜った。

3. 色調は、均質的な部分で判断している。内面と異なる場合は、備考に記した。
4. 胎土は、土師器皿は胎土特徴で以下に分類している。中世陶器（加賀・越前・珠洲）については、

含有物について詳述した。他については、緻密か粗かについてのみ記した。

土師器皿胎土 粘土系をN類、砂質系をS類に大別している。

- N 1 類 器表面はややツルツルし、やや剥離する。石英（微細粒）を含む。赤色粒は目立たない。白色粒は少量含む。黒色粒は稀に含む。
- N 2 類 器表面はツルツルしキメが細かく、剥離しない。石英（微細粒）・赤色粒を少量含む。黒色（微細粒）粒は極少量含む。
- N 3 類 器表面はツルツルせず、剥離もしない。石英（微細粒）を含む。赤色粒を少量含む。白色粒・黒色粒を多く含む。
- N 4 類 器表面はツルツルするがN 2類ほどではなく、互層状に剥離する。石英（微細粒）を極少量含む。赤色物質が帯状に入る。黒色粒は極少量含む。灯明器限定か？
- N 5 類 砂粒の含有が多いため、器表面はザラザラする。石英（微細粒）を多く含む。白色粒（1mm大粒もあり）を含む。黒灰色粒は少量含む。
- N 6 類 素地はキメ細かいが、器表面はややザラザラする。やや粒の大きい石英粒を多く含む。白色粒（1mm大粒あり）を含む。黒灰色粒は多く含む。他の砂粒も目立つ胎土。
- S 1 類 器表面はサラサラし、粉状化する。やや粒の大きい砂粒を少量含む。石英（微細粒）・赤色粒・白色粒・黒色粒を含む。
- S 2 類 器表面はややザラつくが、粉状化しない。石英（微細粒）を多く含む。赤色粒・白色粒（1mm大粒あり）を含む。黒色粒はやや多く含む。
- S 3 類 器表面がザラザラする粗い胎土。石英（微細粒・特大粒）を含む。白色粒（1mm大粒あり）・黒色粒（1mm大粒あり）を含む。赤色粒は少量含む。
- S 4 類 器表面はサラサラする。石英（微細粒）を殆ど含まない胎土。赤色粒・白色粒・黒色粒は含むが、粒が小さく表面上は目立たない。

5. 焼成は、焼締まりの段階に応じて上・中・下の3段階に分類した。

6. 計測値において、( ) は残存値、[ ] は復元値を表している。

7. 出土地点に関しては、出土地点の記録のあるものは接合点数で標記してある。出土状況図を参照して頂きたい。なお、区分けについては、2分法で調査した土坑は北ないし東からA区となる。4分法以上では、北西端がA区となり反時計回りに進む。溝に関しては、セクションベルトを境として、北ないし東からA区となる。該当しないものに限り、図示してある。

8. 備考については、口縁残存破片については、口縁部残存率を記してある。また、各遺物については、上記編年に基づき考えられる時期を付記しておいた。土師器皿については、油煙痕の付着した製品には、灯明と付記してある。施釉品に関しては、釉調について記してある。

[紙幅の都合上、本文で使用した引用・参考文献（凡例で記したものを除く）をここに列記した。]

中世土器研究会編 1995年『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社、金沢市教育委員会1996年『西念・南新保遺跡Ⅳ』、石川県立埋蔵文化財センター1986年『漆町遺跡Ⅰ』、石川県立埋蔵文化財センター1988年『佐々木アサバタケ遺跡Ⅰ』、石川県立埋蔵文化財センター1990年『高堂遺跡』、石川県立埋蔵文化財センター1992年『小川』石川県教育委員会、(財)石川県埋蔵文化財センター2004年『小松市幸町遺跡』、小松市教育委員会1996年『荒木田遺跡』、小松市教育委員会2003年『八日市地方遺跡Ⅰ』、小松市教育委員会2004年『佐々木遺跡』、小松市教育委員会2004年『八里向山遺跡群』  
2002年『新修小松市史』資料編4 国府と荘園 石川県小松市



(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外面	内面	底部	口径	器高	底径(高台径)	見込み高	備考(口縁部残存率)
72	包含層	A-17Gr	大皿	浅黄橙	N-4	下	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	9.9				IV-II期。灯明。1.5/36
73	包含層	C-39Gr	大皿	浅黄橙	N-2	中	ヨコナデ	ヨコナデ		10.0				IV-II期。4/36
74	包含層	E-14Gr	大皿	灰白	N-3	中	ヨコナデ	ヨコナデ		9.8				IV-II期-V-I期。灯明。4.5/36
75	包含層	H-12Gr	小皿	浅黄橙	N-4	上	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	7.6	[1.8]	4.8	[1.35]	IV-II期。6/36
76	包含層	B-16Gr	小皿	浅黄橙	N-4	上	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	7.0	1.8	1.7	1.2	IV-II期。灯明。9/36
77	包含層	C-11Gr	小皿	浅黄橙	N-3	中	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	7.2	1.7	4.0	1.2	IV-II期。3/36
78	包含層	E-30Gr	小皿	浅黄橙	N-3	中	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	7.4	[2.0]	2.6	[1.4]	IV-II期。7/36
79	包含層	C-13Gr	小皿	浅黄橙	N-4	上	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	6.6	1.85	2.0	[1.3]	IV-II期。灯明。8/36
80	包含層	G-23Gr	小皿	浅黄橙	N-3	上	ヨコナデ	ヨコナデ		8.4				IV-II期-V-I期。7/36
81	包含層	F-37Gr	大皿	褐灰	N-4	中	ヨコナデ	ヨコナデ	平底?	11.1	1.8	8.3		V-I期。灯明。3.5/36
82	表土除去		大皿	淡橙	N-2	中	ヨコナデ	ヨコナデ	平底	9.9	[1.6]	7.2		V-I期。4.5/36
83	包含層	C-11Gr	小皿	浅黄橙	N-3	上			丸底	8.6	[2.1]	2.8		V-I期。灯明。4/36
84	包含層	E-47Gr	大皿	浅黄橙	N-3	上		布目压痕	平底	9.0	2.0	4.7	[1.3]	V-I期-V-I期。10/36
85	包含層	L-20Gr	大皿	浅黄橙	N-4	上	ヨコナデ、指オサエ	ヨコナデ		11.0				V-I期。灯明。3/36
86	包含層	B-16Gr	小皿	浅黄橙	N-2	上	ヨコナデ	ヨコナデ		7.8				V-I期。6/36
87	包含層	C-15Gr	小皿	浅黄橙	N-3	上	ヨコナデ	ヨコナデ		9.0				V-I期。灯明。5/36
88	包含層	H-14Gr	大皿	浅黄橙	N-4	上	ヨコナデ、指オサエ	ヨコナデ		11.8				V-I期。3.5/36
89	包含層	B-17Gr	大皿	橙	S-1	中	ヨコナデ	ヨコナデ	平底?	11.2		6.9		V-I期。4/36
90	包含層	I-09Gr	大皿	浅黄橙	N-4	上	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	10.2	[2.1]	5.2	[1.3]	V-I期。1.5/36
91	包含層	K-28Gr	大皿	浅黄橙	N-4	中	ヨコナデ	ヨコナデ		10.4		4.6		V-I期。灯明。8/36
92	表土除去		大皿	浅黄橙	N-2	下	ヨコナデ	ヨコナデ	平底	10.5	[1.6]	6.4		V-I期。2.5/36
93	包含層	K-24Gr	小皿	浅黄橙	N-4	上	ヨコナデ	ヨコナデ	平底	9.2	1.7	5.0	1.0	V-I期。1/36
94	包含層	B-22Gr	小皿	灰黄褐	N-3	中	ヨコナデ	ヨコナデ	平底	9.2	[1.6]	5.9		V-I期。灯明。内側浅黄褐色。4/36
95	包含層	D-39Gr	大皿	黄灰	N-4	中	ヨコナデ	ヨコナデ		9.6				V-I期。灯明。 内側灰黄褐色。7.5/36
96	包含層	F-40Gr	小皿	浅黄橙	N-3	上	ヨコナデ	ヨコナデ		8.6				V-I期。内側褐灰色。6/36
97	包含層	L-34Gr	小皿	橙	S-1	下			平底	7.9	[2.3]	4.2		V-I期。6/36
98	包含層	J-19Gr	小皿	浅黄橙	N-3	中	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	6.8	[2.0]	2.2	[1.35]	V-I期。8/36
99	包含層	C-21Gr	小皿	橙	S-1	中	ヨコナデ	ヨコナデ	平底	7.0	[2.0]	2.1		V-I期。5/36
100	包含層	F-07Gr	小皿	浅黄橙	N-3	上	ヨコナデ	ヨコナデ		8.4				V-I期。灯明。7/36
101	包含層	E-38Gr	小皿	浅黄橙	N-3	上	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底?	6.4				V-I期。灯明。7/36
102	包含層	J-33Gr	小皿	灰白	N-4	上	ヨコナデ	ヨコナデ		8.1				V-I期。灯明。8/36
103	包含層	E-24Gr	小皿	にぶい黄橙	N-4	上	ヨコナデ	ヨコナデ	丸底	8.2	[1.6]	3.9	[1.2]	V-I期。灯明。7.5/36
104	包含層	G-13Gr	小皿	浅黄橙	N-3	上	ヨコナデ	ヨコナデ		7.4				V-I期。灯明。4.5/36

第22表 中世陶器観察表(加賀)

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外面	内面	底部	口径	器高	底径(高台径)	備考(口縁部残存率)
1	4号建物		甕	黒灰	密、~1mm大長石粒含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	降灰、押印エノカミダニV-111	ナデ					内側灰色
2	54号土坑	上層	鉢	灰褐	密、~1mm大長石粒多く含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	下	ナデ	ナデ					II期?
3	134号土坑	4層	鉢	黒灰	粗、5mm大礫有り、~2mm大長石粒多く含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	中	ナデ、漆附着	ナデ、漆附着		21.95			内側黒色。I期
4	134号土坑	4層	播鉢	灰白	密、3mm大礫有り、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	中	板ナデ、漆附着	ナデ、卸目、漆附着		35.0			II期。6.5/36
5	14号土坑		甕	灰黄	密、~2mm大長石粒含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒少量含	中	ナデ	ナデ					内側灰黄色。胴部径33.8。III期?
6	77号土坑	2層	壺	淡青灰	緻密、~2mm大長石粒含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	中	ナデ	ナデ、漆附着					III期-
7	155号土坑	D区	壺	褐灰	緻密、~1mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	ナデ	ナデ、漆附着					内側灰色。III期-?
8	75号溝	H区	鉢	褐	密、~2mm大長石粒多く含、石英微砂少量含	中	ナデ	ナデ		35.0			V期。3/36
9	11号土坑		甕		密、~2mm大長石粒多く含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	ナデ	ナデ					内側にぶい褐色。
10	11号土坑		甕	にぶい赤褐	密、~1mm大長石粒含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	中	ナデ	ナデ、指押え					
11	57号土坑	上層	壺	灰褐	密、~1mm大長石粒少量含、石英微砂少量含	中	ナデ	ナデ					内側青灰色。胴部径[15.2]。III期-
12	57号土坑/157号土坑	3層/A区	広口壺	灰白	粗、~1mm大長石粒多く含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	下	ナデ	ナデ、指押え、漆附着	未調整、漆附着			18.9	生焼け。IV-V期
13	16号土坑		播鉢	黄灰	粗、5mm大礫有り、~1mm大長石粒含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒含	中	ナデ	ナデ、卸目、波状文		33.4			内側褐灰色。II-III期?。2.5/36
14	45号土坑	A区	鉢	褐灰	密、~1mm大長石粒少量含、石英微砂少量含	中	ナデ	ナデ					IV-V期?
15	32号溝		鉢	黒灰	粗、3mm大礫有り、~2mm大長石粒含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	下	ナデ	ナデ					IV-V期
16	33号溝		播鉢	黒灰	緻密、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	ナデ	卸目					内側黒褐色。
17	64号溝	F区上層	播鉢	灰白	密、~1mm大長石粒少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒含	下	ナデ	ナデ、卸目	板目痕			11.0	生焼け。IV-V期
18	包含層	D-33Gr	甕	灰褐	緻密、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	自然軸	降灰、ナデ					III期
19	包含層	E-37Gr	甕	にぶい褐	緻密、3mm大礫有り、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	ナデ	ナデ					III期
20	包含層	E-10Gr	甕	にぶい赤褐	緻密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	ナデ	ナデ					内側灰赤色。III期
21	包含層	D-22Gr	甕	灰褐	緻密、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	降灰	ナデ					内側にぶい黄色。IV期

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外面	内面	底部	口径	器高	底径 (高台径)	備考(口縁部残存率)
22	包含層	G-24Gr	広口壺か?	灰褐	緻密、1mm大長石粒少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	ナデ	ナデ					Ⅳ期
23	包含層	C-41Gr	壺	灰褐	緻密、1mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	ナデ	降灰、ナデ					Ⅳ期
24	包含層	L-32Gr	壺	灰白	緻密、1mm大長石粒少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	下	ナデ	ナデ					生焼け。Ⅳ～Ⅴ期
25	包含層	G-13Gr	壺	灰	密、4mm大礫有り、1mm大長石粒含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒多く含	下	ナデ	ナデ					生焼け。Ⅴ期
26	包含層	D-07Gr	壺	褐灰	粗、3mm大長石粒含、石英微砂極少量含	中	ナデ	ナデ					Ⅲ期
27	包含層	F-10Gr	壺	灰	緻密、1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	ナデ	降灰					Ⅲ期～
28	包含層	G-39Gr	壺	灰	緻密、1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	ナデ	ナデ					内側青灰色。Ⅳ～Ⅴ期。4/36
29	包含層	F-10Gr	壺	にぶい橙	粗、1mm大長石粒含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒含	中	ナデ	ナデ			17.0		内側橙色。
30	包含層	E-24Gr	壺	にぶい赤褐	密、2mm大長石粒含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	ナデ	降灰、ナデ					Ⅲ期～
31	包含層	K-23Gr	壺	灰褐	緻密、1mm大長石粒少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	中	ナデ	降灰			18.4		
32	包含層	E-12Gr	鉢	灰白	密、1mm大長石粒少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒多く含	下	ナデ	ナデ、卸目					Ⅱ期
33	包含層	F-02Gr	鉢	黄灰	粗、8mm大礫有り、3mm大長石粒多く含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	中	ナデ、縦ハケ	ナデ					内側黒灰色。Ⅳ～Ⅴ期
34	包含層	D-07Gr、F-07Gr	片口鉢	にぶい赤褐	粗、2mm大長石粒多く含、石英微砂含	中	ナデ	ナデ、墨付着					Ⅳ～Ⅴ期
35	包含層	G-15Gr	鉢	青灰	粗、2mm大長石粒多く含、石英微砂少量含	中	ナデ、縦ケズリ	ナデ		18.4			Ⅳ～Ⅴ期。4.5/36
36	196号土坑(混入)		壺	青灰	粗、2mm大長石粒含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒少量含	中	押印エノカミダニV-111	ナデ					
37	包含層	H-09Gr	壺	黄灰	粗、1mm大長石粒多く含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	上	押印、籬	ナデ					
38	包含層	I-09Gr	壺	青灰	粗、2mm大長石粒含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	押印、斜格子	ナデ					
39	包含層	H-07Gr	壺	青灰	緻密、1mm大長石粒少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	板ナデ、押印、格子	ナデ					
40	包含層	F-12Gr	壺	にぶい褐	密、1mm大長石粒少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	押印、格子	ナデ					
41	包含層	G-12Gr	壺	灰	密、1mm大長石粒少量含、石英微砂極少量含	上	押印エノカミダニIV-301	ナデ					
42	包含層	I-11Gr	壺	黒灰	密、2mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	押印カミヤII-151	ナデ					内側灰色
43	包含層	F-16Gr	壺	黒灰	緻密、1mm大長石粒含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	押印エノカミダニII-201	ナデ					
44	包含層	H-09Gr、F-10Gr	壺	黒灰	粗、1mm大長石粒含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	押印カミヤII-151	ナデ					内側灰色
45	包含層	D-40Gr	壺	黒灰	緻密、1mm大長石粒少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	押印コテンノウダニII-111	ナデ					内側灰色。
46	包含層	L-32Gr	壺	灰	緻密、1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	押印エノカミダニII-412	ナデ					
47	包含層	C-40Gr	壺	青灰	密、5mm大礫有り、2mm大長石粒含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	押印トリダニ系	ナデ、墨か漆付着					
48	包含層	F-36Gr	壺	灰	密、1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	押印エノカミダニV-101	ナデ					
49	包含層	D-02Gr	壺	灰	緻密、1mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	中	降灰、押印、格子	ナデ					内側褐色
50	包含層	J-07Gr	壺	黒灰	密、1mm大長石粒多く含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	押印エノカミダニV-302	ナデ					
51	包含層	K-23Gr	壺	暗灰黄	緻密、1mm大長石粒極少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	押印エノカミダニIIかIII系	ナデ					内側黄褐色
52	包含層	D-30Gr	壺	黒灰	緻密、1mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	押印エノカミダニV-202	降灰					内側灰色
53	包含層	C-05Gr	壺	黒灰	緻密、3mm大長石粒少量含、石英微砂極少量含	上	押印、格子	ナデ					
54	包含層	F-13Gr	壺	灰白	緻密、1mm大長石粒少量含、石英微砂極少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	中	押印、格子	ハラナデ					
55	包含層	J-30Gr	壺	灰白	緻密、2mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	下	板ナデ、押印エノカミダニV-111	ナデ					生焼け
56	包含層	H-03Gr	壺	暗赤灰	密、2mm大長石粒多く含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	上	ナデ、刻書あり	ナデ					内側にぶい赤褐色
57	包含層	D-04Gr	壺	暗赤褐	密、2mm大長石粒多く含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	上	ナデ、刻書あり	ナデ					内側にぶい赤褐色

第23表 中世陶器観察表(越前)

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外面	内面	底部	口径	器高	底径 (高台径)	備考(口縁部残存率)
1	54号土坑	上層	鉢	にぶい赤褐	密、2mm大長石粒多く含、石英微砂極少量含	上	ナデ	ナデ					Ⅱ期後～Ⅲ期前
2	15号土坑/16号溝	/A区	播鉢	橙	粗、1mm大長石粒多く含、石英微砂極少量含	中	横方向ケズリ	ナデ、卸目			12.9		Ⅲ期前～後
3	75号土坑	1点	鉢	にぶい赤褐	密、2mm大長石粒多く含、石英微砂極少量含	下	ナデ、横ケズリ	ナデ					内側にぶい黄褐色。Ⅱ期後～Ⅲ期前

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外面	内面	底部	口径	器高	底径 (高台径)	備考(口縁部残存率)
4	61号土坑	上層	播鉢	暗赤灰	密、~2mm大長石粒含、石英微砂含、 鉄苦土鉱物微粒含	中	ナデ	ナデ、卸目					内側灰色。Ⅳ期後?
5	157号土坑	E区	甕	にぶい 褐	密、~2mm大長石粒多く含、 石英微砂少量含	中	板ケズリ、 格子押印	ナデ					内側にぶい赤褐色。 Ⅳ期頃?
6	14号溝		播鉢	灰白	粗、~2mm大長石粒含、 石英微砂極少量含	下	ナデ	ナデ					生焼け。Ⅳ期
7	14号溝		播鉢	灰白	粗、~2mm大長石粒含、石英微砂極少量含、 鉄苦土鉱物微粒極少量含	下	ナデ	ナデ、卸目				11.7	生焼け。Ⅳ期
8	33号溝		甕	にぶい 赤褐	密、~2mm大長石粒含、 石英微砂極少量含	中	ナデ	ナデ、指押え					内側灰赤色。Ⅲ期前
9	34号溝/ 36号溝	1点/	甕	にぶい 赤褐	緻密、~2mm大長石粒含、 石英微砂極少量含	上	板ケズリ、 格子押印	ナデ					Ⅲ期前
10	34号溝		大甕	にぶい 赤褐	粗、~2mm大長石粒含、石英微砂少量含、	下	ナデ	ナデ					内側褐色。Ⅴ期後
11	表土除去		甕	灰赤	密、~2mm大長石粒含、 石英微砂極少量含	下	ナデ	ナデ、降灰					内側灰褐色。Ⅲ期前
12	包含層	J-06Gr/ J-07Gr	甕	にぶい 赤褐	緻密、~2mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	上	自然軸	ナデ					Ⅲ期前
13	包含層	C-04Gr	甕	にぶい 赤褐	密、~2mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	上	ナデ	ナデ					内側灰赤色。Ⅲ期前
14	包含層	D-13Gr	甕	灰赤	密、~3mm大長石粒含、 石英微砂少量含	中	ナデ	ナデ					Ⅲ期後
15	包含層	L-19Gr	甕	濁灰	緻密、~1mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	上	ナデ	ナデ、降灰					Ⅲ期後?
16	包含層	C-36Gr	甕	にぶい 橙	密、~1mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	下	ナデ	ナデ、 頸部煤付着					Ⅲ期後
17	包含層	F-12Gr	甕	灰	緻密、~1mm大長石粒少量含、 石英微砂少量含	中	ナデ	ナデ					Ⅲ期後?
18	包含層	F-27Gr	甕	にぶい 橙	粗、~2mm大長石粒多く含、石英微砂少 量含、鉄苦土鉱物微粒多く含	下	ナデ	ナデ					Ⅳ期後~
19	包含層	D-40Gr	甕	にぶい 赤褐	粗、~2mm大長石粒含、石英微砂少量含	下	格子押印	ナデ					
20	包含層	E-15Gr	三筋 壺?	紫黒	密、~1mm大長石粒多く含、 石英微砂極少量含	中	板ケズリ?	ナデ					Ⅰ期後半
21	包含層	H-31Gr	壺	灰赤	緻密、~1mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	上	ナデ、刻書	ナデ					内側灰色。Ⅲ期前
22	包含層	E-16Gr	片口壺	にぶい 赤褐	緻密、~1mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	上	ナデ	ナデ、自然軸					Ⅲ期後半
23	包含層	I-36Gr	鉢	にぶい 赤褐	密、~2mm大長石粒含、 石英微砂極少量含	中	ナデ	ナデ					Ⅲ期後~Ⅳ期前
24	92号土坑	D区	鉢	濁灰	粗、1~3mm大長石粒多く含、 石英微砂極少量含	上	ナデ、横ケズリ	ナデ					内側にぶい赤褐色。 Ⅱ期後
25	包含層	I-32Gr	鉢	にぶい 赤褐	密、1~4mm大長石粒含、 石英微砂極少量含	上	ナデ	ナデ				12.4	内側灰色。Ⅲ期前
26	排土中		鉢	灰赤	粗、~2mm大長石粒多く含、 石英微砂極少量含	中	横ケズリ	ナデ				13.0	内側灰色、Ⅱ期後
27	78号土坑 (混入)		播鉢	赤灰	密、~2mm大長石粒少量含、 石英微砂少量含	中	ナデ	卸目					Ⅳ期?
28	包含層	F-16Gr	播鉢	浅黄橙	密、~2mm大長石粒含、 石英微砂極少量含	下	ナデ	ナデ、卸目					生焼け。Ⅴ期前
29	包含層	H-09Gr	播鉢	にぶい 赤褐	粗、~2mm大長石粒多く含、 5mm大長石粒含、石英微砂少量含	下	ナデ	ナデ、卸目					Ⅴ期前
30	包含層	F-10Gr	播鉢	にぶい 赤褐	密、~1mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	下	ナデ	ナデ、卸目9条					内側褐色。Ⅳ期
31	包含層	C-02Gr	播鉢	灰赤	粗、~3mm大長石粒多く含、石英微砂少量含	下	ナデ	ナデ、卸目					Ⅴ期前
32	包含層	G-06Gr	播鉢	灰赤	密、~2mm大長石粒多く含、 7mm大特大長石有り、石英微砂極少量含	中	ナデ	ナデ、卸目					内側にぶい赤褐色。 Ⅴ期前
33	包含層	E-02Gr	播鉢	にぶい 赤褐	粗、~3mm大長石粒多く含、 石英微砂含	下	ナデ	ナデ、卸目10条				16.2	内側褐色。Ⅴ期前
34	包含層	H-24Gr	播鉢	にぶい 橙	緻密、~2mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	下	ナデ	卸目9条					内側灰白色。Ⅴ期前
35	包含層	G-31Gr	播鉢	にぶい 赤褐	緻密、~1mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	上	ナデ	ナデ、卸目8条					Ⅴ期後
36	包含層	G-25Gr/ E-26Gr/ F-15Gr/ C-40Gr	播鉢	浅黄橙	密、~2mm大長石粒少量含、 石英微砂極少量含	下	ナデ	ナデ、卸目9条					生焼け。Ⅴ期?
37	包含層	C-30Gr/ C-33Gr	播鉢	にぶい 赤褐	密、~2mm大長石粒含、石英微砂含	中	ナデ	ナデ、卸目14条				15.8	内側灰赤色。Ⅴ期前
38	包含層	C-33Gr	播鉢	にぶい 赤褐	密、~2mm大長石粒含、石英微砂含	中	ナデ	卸目10条					内側灰赤色。Ⅴ期後

第24表 中世陶器観察表(珠洲)

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外面	内面	底部	口径	器高	底径 (高台径)	備考(口縁部残存率)
1	14号土坑		播鉢	青灰	密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂少 量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ、 卸目7条					Ⅳ2期-
2	14号土坑	A区	播鉢	灰	粗、~3mm大長石粒含、石英微砂含、 鉄苦土鉱物微粒含	中	回転ナデ	回転ナデ、卸目					Ⅳ期。3/36
3	153号土坑		壺	灰	緻密、~1mm大長石粒少量含、 石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ、 波状文、漆付着	回転ナデ、 漆付着					頸部径10.0。胴部径18.2。 Ⅱ期
4	155号土坑、 33号溝		壺	灰	緻密、~2mm大長石粒少量含、 石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	上	タタキ	タタキ		19.5			頸部径20.1。Ⅳ期。4/36

(単位:cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外 面	内 面	底部	口径	器高	底径 (高台径)	備考 (口縁部残存率)
5	47号溝		播鉢	黒灰	粗、~1mm大長石粒少量含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	回転ナデ	卸目					IV期?
6	55号土坑		播鉢	灰	密、~2mm大長石粒含、石英微砂含	中	回転ナデ	回転ナデ、卸目8条か?					IV2期~
7	57号土坑	下層/ 泥層上面	壺	青灰	緻密、5mm大礫有り、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	タタキ	タタキ、漆付着					IV期
8	57号土坑	4層	中壺	灰	緻密、~3mm大長石粒含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒含	中	降灰、タタキ	降灰、タタキ					IV期
9	57号土坑	2層	播鉢	灰	緻密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目7条					IV期~
10	57号土坑		播鉢	灰	緻密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目11条		32.8			内側青灰色。IV2~V期。2.5/36
11	33号溝、 14号溝		播鉢	青灰	密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	中	回転ナデ	卸目11条					IV期?
12	33号溝		壺	灰	緻密、5mm大礫有り、~1mm大長石粒少量含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒多く含	中	回転ナデ	回転ナデ					胴部径18.2。IV期
13	33号溝		播鉢	灰	密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	中	回転ナデ	回転ナデ、卸目					内側青灰色。IV期か?
14	34号溝		播鉢	灰	密、~1mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	上	回転ナデ	口縁波状文					V期
15	36号溝		播鉢	青灰	粗、4mm大礫有り、~1mm大長石粒含、石英微砂含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目10条、口縁波状文		31.0			V期。4.5/36
16	包含層	H-36Gr	壺	灰	緻密、~1mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	上	タタキ	タタキ					III期
17	包含層	K-23Gr/ K-24Gr	壺	青灰	密、~1mm大長石粒多く含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒含	中	タタキ、刻印、 漆付着	タタキ					IV期
18	包含層	C-39Gr	壺	青灰	密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	タタキ	タタキ					IV期
19	包含層	D-38Gr	壺	黒灰	粗、~1mm大長石粒少量含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ					IV期~
20	包含層	K-23Gr	壺	灰	緻密、~2mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒含	上	降灰、タタキ	降灰、タタキ					IV期?
21	包含層	G-23Gr	壺	灰	密、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ			8.3		IV期か?
22	11号溝		播鉢	青灰	密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒極少量含	上	回転ナデ	回転ナデ		30.0			I2~3期。3/36
23	包含層	D-30Gr	播鉢	灰	密、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ					I-II期
24	包含層	D-40Gr	播鉢	青灰	粗、~1mm大長石粒少量含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目					III期?
25	包含層	F-04Gr	播鉢	灰	粗、~1mm大長石粒含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目		28.8			III期。3.5/36
26	包含層	D-29Gr	播鉢	灰	粗、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	中	回転ナデ	回転ナデ					III~IV1期
27	包含層	F-31Gr	播鉢	灰	密、~1mm大長石粒含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒多く含	中	回転ナデ	回転ナデ、卸目	板目痕		11.4		III~IV期
28	17号溝 (混入)		播鉢	褐灰	粗、~1mm大長石粒含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒多く含	下	回転ナデ	回転ナデ、卸目11条		37.2			内側黒灰色。IV1期。2.5/36
29	包含層	J-22Gr	播鉢	青灰	密、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒含	中	回転ナデ	回転ナデ、卸目					IV期
30	包含層	G-16Gr	播鉢	青灰	粗、~1mm大長石粒含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	回転ナデ	回転ナデ					IV2期
31	包含層	G-16Gr	播鉢	灰	粗、3mm大礫有り、~1mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒少量含	中	回転ナデ	回転ナデ					IV期
32	包含層	I-20Gr	播鉢	青灰	粗、~1mm大長石粒少量、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目					内側灰色。IV期?
33	包含層	G-12Gr	播鉢	灰	密、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂少量含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目、 口縁波状文					V期
34	包含層	C-01Gr	播鉢	灰	粗、~3mm大長石粒含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	中	回転ナデ	回転ナデ、 口縁波状文					V期
35	包含層	E-13Gr	播鉢	青灰	粗、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂多く含、鉄苦土鉱物微粒含	上	回転ナデ	回転ナデ、 口縁波状文					V期
36	包含層	G-06Gr	播鉢	青灰	密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ、 口縁波状文					V期
37	包含層	I-24Gr	播鉢	灰	粗、~2mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒含	下	回転ナデ	回転ナデ、卸目、 口縁波状文					V期
38	包含層	E-13Gr	播鉢	灰	粗、~1mm大長石粒極少量、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ、 口縁波状文					V期
39	包含層	H-14Gr/ I-21Gr	播鉢	灰	緻密、~2mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒少量含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目10条、 口縁波状文					IV期
40	包含層	I-05Gr	播鉢	青灰	密、~1mm大長石粒極少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	中	回転ナデ	回転ナデ、卸目、 口縁波状文					内側灰色。IV~V期
41	包含層	D-07Gr	播鉢	青灰	粗、~1mm大長石粒少量含、石英微砂含、鉄苦土鉱物微粒多く含	上	回転ナデ	回転ナデ、卸目、 口縁波状文					VI期

第25表 中世陶器観察表 (古瀬戸、瀬戸・美濃)

(単位:cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外 面	内 面	底 部	高 台	口径	器高	底径 (高台径)	見込 み高	備考 (口縁部残存率)
1	76号土坑		瓶子類	灰	緻密	上	灰オリーブ	露胎、ナデ							胴部径(19.2)
2	76号土坑		壺?	灰	緻密	上	黒褐、ナデ	黒褐、ナデ							
3	77号土坑		平碗か 浅碗	灰白	密	上	灰オリーブ、 トチン跡有り	灰オリーブ、 トチン跡有り							貫入
4	153号土坑	A区	瓶子II	灰白	密	中	オリーブ灰	露胎、不整ナデ							胴部径(13.8)。後1期



(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調	胎土	焼成	外 面	内 面	底 部	高 台	口径	器高	底径 高台	見込 み高	備考 (口縁部残存率)
5	11号土坑		鉦皿	灰	緻密	上	灰オリーブ、体部下 半露胎、ナデ	灰オリーブ、 見込み露胎、卸目	糸切り、卸目、 露胎				7.2		中Ⅳ期～
6	55号土坑		小壺	灰	密	上	黒～暗赤褐、胴部 下位1/3露胎	口縁のみ 軸かかる	糸切り、露胎		2.0	3.0	2.5	2.7	木製蓋有り。胴部径2.25胴 部径4.55。後期～36/36 (瀬戸・美濃)貫入。大窰Ⅰ期
7	55号土坑	下層	端反皿	灰	密	中	灰オリーブ、 界線1条	灰オリーブ							(瀬戸・美濃)大窰Ⅰ期
8	55号土坑	上層	丸皿?	灰白	粗	上	灰オリーブ	灰オリーブ							(瀬戸・美濃)大窰Ⅰ期
9	57号土坑	上層	鉦皿	灰白	粗	中	灰オリーブ	灰オリーブ、 見込み露胎、卸目	糸切り、露胎				6.8		後Ⅲ期?
10	57号土坑	上層	平碗	灰	緻密	上	オリーブ灰、体部下 半露胎、ケズリ	オリーブ灰、 トチン跡有り	露胎		17.2	6.45	4.8	5.55	細かい貫入。後Ⅲ期。7/36
11	57号土坑	4層	平碗	灰	密	中	灰オリーブ、体部下 半露胎、ケズリ	灰オリーブ			16.8				貫入。後Ⅲ期。3/36
12	57号土坑	4層	天目茶碗	灰白	粗	上	黒	黒～暗赤褐							後Ⅳ期古
13	57号土坑	上層	豆天目?	灰	緻密	上	黒褐、 口縁部のみ施軸	黒褐	糸切り、露胎		4.55	1.7	2.0	1.2	31/36
14	57号土坑	上層	小鉢	灰	緻密	上	灰オリーブ、ナデ	灰オリーブ、ナデ			9.7				貫入。後～14/36
15	57号土坑	1点	筒形碗	灰	緻密	上	暗オリーブ、底部 付近から露胎	暗オリーブ	糸切り、露胎				6.0		(瀬戸・美濃)細かい貫入。 大窰Ⅲ期以降
16	36号溝/34号 溝/16号土坑		平碗	灰	密	中	オリーブ灰、体部下 半露胎、ケズリ	オリーブ灰、 トチン跡有り			15.6	6.2	4.9	4.95	貫入。後Ⅱ期。18/36
17	45号土坑		袴腰形 香炉	浅黄 橙	粗	下	黒、所々露胎	露胎	糸切り、 外縁に軸かかる				5.45		後Ⅳ期
18	33号溝		茶入?	灰白	粗	中	灰褐	暗赤褐、一部露胎			3.4				頸部径4.0、胴部径5.5。 後期～7/36
19	39号溝/34号溝		水注Ⅰ	灰	密	上	灰オリーブ、ナデ	灰オリーブ、ナデ			5.0				頸部径5.3、胴部径9.8。前期?、4/36
20	44号溝	1点	平碗	灰白	密	中	灰オリーブ、体部下 半露胎、ケズリ	灰オリーブ、 トチン跡有り							貫入
21	48号溝	E区下	鉦皿?	灰白	密	上	灰オリーブ、底部 付近から露胎	灰オリーブ、 見込み露胎、卸目	糸切り痕、露胎				7.0		
22	P1394		端反皿	灰白	粗	上	灰オリーブ	灰オリーブ							(瀬戸・美濃)粗い貫入。大窰?
23	包含層	J-23Gr	水注Ⅱ	灰白	緻密	上	灰オリーブ、 菊花文	露胎、ナデ、 指押え							細かい貫入。中期
24	包含層	C-32Gr	水注、 瓶面子	灰	密	上	黒	露胎							頸部径4.5、胴部径14.4
25	17号溝(混入)	2区	瓶子類	灰	緻密	上	黒～灰褐	露胎、ナデ							
26	表土除去		瓶子Ⅱ	灰	密	上	オリーブ灰	露胎、ナデ					10.0		貫入。前期?
27	包含層	C-28Gr	花瓶Ⅲ	灰	緻密	上	オリーブ灰	オリーブ灰、 見込み軸たまる	糸切り				10.0		後期
28	包含層	K-27Gr	卸目付大皿	灰	密	上	黄褐、ナデ	黄褐、ナデ							後Ⅳ期新
29	包含層	D-21Gr	播鉢	灰白	粗	上	にぶい黄、ナデ	にぶい黄、ナデ							漆接ぎ痕あり。後Ⅳ期
30	包含層	C-15Gr	播鉢形 小鉢	灰白	粗	上	灰オリーブ、 口縁部のみ施軸	灰オリーブ							後期
31	包含層	G-13Gr	折縁小皿?	灰白	密	中	露胎	灰オリーブ、 見込み露胎	糸切り、露胎				5.6		
32	包含層	H-11Gr	縁軸小皿	灰	緻密	上	灰オリーブ、 口縁部のみ施軸	灰オリーブ、 見込み露胎			10.2				粗い貫入。後Ⅱ期～3/36
33	包含層	D-13Gr	皿	灰白	緻密	上	黄褐	オリーブ灰、 見込み露胎	糸切り、露胎				9.0		
34	包含層	G-16Gr	直縁大皿	灰	緻密	上	にぶい黄、ナデ	にぶい黄、ナデ			29.6				後Ⅲ期。2.5/36
35	表土除去		鉦皿	灰	密	上	灰オリーブ	露胎、卸目	糸切り、漆付着				5.8		(瀬戸・美濃)大窰
36	包含層	H-14Gr、 I-14Gr	浅碗	灰	密	中	灰オリーブ、 体部下露胎	灰オリーブ			14.0				細かい貫入。後Ⅲ期。5/36
37	包含層	L-31Gr	平碗	灰	粗	中	オリーブ黄、 体部下方露胎	オリーブ黄			15.85				後1/36
38	包含層	F-36Gr	平碗	灰	粗	上	オリーブ灰	オリーブ灰			15.5				細かい貫入。後Ⅱ～Ⅲ期。4/36
39	包含層	E-12Gr	平碗?	灰	緻密	上	灰オリーブ	灰オリーブ			18.0				細かい貫入。後Ⅱ期～3.5/36
40	包含層	C-15Gr	平碗	灰	密	中	灰オリーブ	灰オリーブ			16.0				貫入。後Ⅳ期。3/36
41	包含層	H-32Gr	平碗	灰	密	上	灰オリーブ、 体部下露胎	灰オリーブ			13.8				細かい貫入。後Ⅲ期～ 2.5/36
42	包含層	E-16Gr	丸碗	灰白	密	中	オリーブ灰	オリーブ灰			13.4				(瀬戸・美濃)細かい貫入。大窰Ⅰ後半。3/36
43	包含層	I-08Gr	平碗	灰	密	上	露胎、ケズリ	灰オリーブ、 トチン跡有り	露胎			5.5			後Ⅱ～Ⅲ期
44	排土中層		平碗	灰白	粗	中	灰オリーブ、 体部下露胎	灰オリーブ	露胎			6.4			細かい貫入。後Ⅰ期
45	包含層	H-08Gr	丸碗	灰白	粗	中	灰オリーブ、 線描連弁文	灰オリーブ							(瀬戸・美濃)粗い貫入。 大窰Ⅰ期
46	包含層	F-16Gr	碗	灰白	粗	上	灰オリーブ、体部下 半露胎、ケズリ	灰オリーブ							貫入
47	包含層	F-09Gr	平碗	灰	粗	上	黒	黒							大窰Ⅲ期
48	包含層	H-07Gr	丸碗?	浅黄	緻密	中	黒	黒				5.0			(瀬戸・美濃)貫入。大窰～
49	包含層	I-12Gr	丸碗	明褐 灰	密	中	黒	黒	露胎			4.4			(瀬戸・美濃)大窰
50	表土除去		丸皿?	灰白	粗	中	オリーブ灰	オリーブ灰、 見込み花文	施軸			4.8			(瀬戸・美濃)漆接ぎ痕。 大窰Ⅰ期
51	包含層	H-12Gr	反り皿	灰白	密	上	灰オリーブ	灰オリーブ			9.65				粗い貫入。漆接ぎ痕あり。後Ⅳ期。4/36
52	包含層	C-29Gr、 H-37Gr	折縁皿(瀬 戸・美濃)	灰	緻密	上	オリーブ黒	オリーブ黒、 見込み無軸	施軸		11.3	2.2	5.1	[14]	貫入。大窰Ⅲ期。2/36
53	包含層	G-16Gr	内丸皿? (瀬戸・美濃)	灰白	粗	上	灰オリーブ	灰オリーブ、 見込み露胎	露胎			5.0			細かい貫入。大窰
54	包含層	J-23Gr	合子蓋	灰白	粗	中	黒褐	黒褐			5.6	1.1			全面施軸。中Ⅳ期?。11/36
55	包含層	J-30Gr	茶入?	灰	密	上	黒～暗赤褐、 胴部下1/3露胎	黒	糸切り、露胎				3.4		



番号	遺構名	出土地点	器種	色調(胎土)	胎土	外面	内面	底部	高台	口径	器高	底径高台	見込み高	備考(口縁部残存率)
26	包含層	E-17Gr	碗	灰白	粗	灰白、胴部下半露胎	灰白	露胎	断面ハの字、露胎			5.9		細かい貫入。Ⅳ2類
27	28号溝(混入)	上層	碗	灰白	粗	灰白露胎	淡黄	露胎	断面ハの字、露胎			5.6		細かい貫入。Ⅳ2c類。
28	包含層	H-15Gr/ H-16Gr	碗	灰白	密	露胎	灰白	露胎	断面ハの字、露胎			5.3		細かい貫入。Ⅳ類
29	包含層	E-09Gr	碗	灰白	密	灰白、高台付近露胎	灰白	露胎	断面ハの字、露胎			5.9		Ⅳ類?
30	91号溝(混入)	D、E区上層	碗	灰白	緻密	灰白、体部下半露胎	灰白	露胎	断面ハの字、露胎			5.0		Ⅳ類
31	包含層	G-02Gr	碗	灰白	緻密	灰白	灰白							XⅡ類?
32	包含層	D-23Gr	碗	灰	密	明オリーブ灰、高台付近露胎	明オリーブ灰	露胎	断面長方形、露胎			5.8		Ⅳ類
33	包含層	H-32Gr	皿	灰白	密	灰白、口禿げ	灰白							Ⅳ3類
34	包含層	E-26Gr	皿	灰白	密	灰白	灰白							貫入。軸透明感あり。E群?
35	包含層	G-09Gr	碗	灰白	粗	灰白	灰白、連弁文	一部軸 付着	断面台形、一部内 面まで軸かかる			5.1		細かい貫入
36	包含層	E-08Gr	碗	灰白	緻密	灰白、界線2条	灰白、界線1条			15.8				軸透明感あり。B群?。5/36
37	包含層	D-23Gr	碗	灰白	密	灰白	灰白			12.0				細かい貫入。6/36
38	包含層	G-09Gr	碗	灰白	密	灰白	灰白	施軸	断面台形、 畳付のみ露胎			6.5		
39	包含層	G-30Gr	碗	灰白	粗	淡黄	淡黄							細かい貫入
40	包含層	D-07Gr	碗	灰白	密	灰白	灰白			12.0				4.5/36
41	包含層	C-29Gr	小碗	灰白	緻密	明緑灰	明緑灰	露胎	断面ハの字、畳付 ~内面露胎			4.0		
42	包含層	H-28Gr	小碗	灰白	密	灰白	灰白	露胎	断面正方形、露胎、 一部軸かかる			3.5		貫入
43	包含層	H-03Gr	皿	灰白	密	淡黄	淡黄							細かい貫入。軸透明感あり。Ⅳ2類?
44	包含層	C-17Gr	皿	灰白	密	淡黄、胴部下半露胎	淡黄							Ⅳ23類
45	42号溝	B区	皿	灰白	粗	灰白	灰白							細かい貫入。Ⅳ2類
46	包含層	E-15Gr	皿	灰白	密	灰白	灰白			9.4				細かい貫入。Ⅳ類。5.5/36
47	包含層	AA-21Gr	皿	灰	緻密	灰白、底部付近から露胎	灰白、見込み円圈	露胎				4.0		Ⅳ類
48	包含層	B-21Gr	皿	灰白	密	灰白、高台付近から露胎	灰白、見込み円圈、 放射状文	露胎	小高台、露胎			4.45		細かい貫入。Ⅳ2類
49	包含層	C-40Gr	皿	灰白	粗	灰白	灰白	露胎				4.0		細かい貫入。Ⅳ2類
50	22号溝	C区	皿	灰白	粗	灰白	灰白、見込み円圈	露胎				3.7		細かい貫入。Ⅳ1類
51	包含層	H-28Gr	皿	灰	緻密	灰	灰					5.4		全面施軸。Ⅳ類
52	包含層	G-06Gr	角杯	灰白	密	灰白	灰白		露胎	8.9			(26)	D群。6/36
53	包含層	D-30Gr	角杯小皿	灰白	粗	灰白	灰白		挟りあり			4.0		目跡あり。全面施軸。D群
54	包含層	J-09Gr	皿	灰	緻密	灰	灰		断面台形、挟りあり			5.2		断面台形、全面施軸。D群
55	包含層	F-15Gr	皿	灰白	緻密	灰白	灰白	施軸	断面三角、 畳付のみ露胎	11.6	3.35	7.7		E群。4/36
56	包含層	I-35Gr	皿	灰白	密	灰白	灰白		断面長方形、 畳付のみ露胎	11.35	2.2	5.6	1.3	17/36
57	表土除去		皿	灰白	密	灰白	灰白	施軸	断面三角、畳付露胎			6.2		
58	表土除去		皿	灰白	粗	灰白	灰白	施軸	断面台形、畳付露胎	11.6	2.8	8.2		細かい貫入。2/36
59	包含層	I-14、15Gr	皿	灰白	粗	灰白、体部下半露胎	灰白	露胎		11.7		5.8		細かい貫入。5.5/36
60	包含層	L-25Gr	皿	灰白	密	灰白	灰白	施軸	断面台形、畳付露胎					
61	包含層	I-07Gr	皿	灰白	密	灰白	灰白			9.6				細かい貫入。連弁着。4/36
62	包含層	H-04Gr	皿	灰白	緻密	灰白、下底付近露胎	灰白			7.8				Ⅳ2類?。5/36
63	包含層	D-47Gr	皿	灰白	密	灰白	灰白			18.3				細かい貫入。3/36
64	包含層	F-31Gr	壺	灰白	密	灰白	灰白							
65	包含層	F-35Gr	小壺?	灰白	密	灰白	灰白、胴部下半露胎							胴部径6.5

第27表 輸入陶磁器観察表(青磁)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調(胎土)	胎土	外面	内面	底部	高台	口径	器高	底径高台	見込み高	備考(口縁部残存率)
1	11号土坑		碗	灰	密	オリーブ灰、 線描連弁文	オリーブ灰			12.6				粗い貫入。龍泉窯系B。 15C後半。3/36
2	57号土坑	上層	碗	灰	密	オリーブ灰	オリーブ灰			13.8				龍泉窯系D。4/36
3	57号土坑/ 72号土坑	4層/B区	碗	灰	密	緑灰	緑灰			15.5				粗い貫入。龍泉窯系D。4/36
4	16号土坑		碗	灰	密	オリーブ灰	オリーブ灰							粗い貫入若干入る。龍泉窯系D
5	58号土坑	上層	輪花皿	灰	緻密	オリーブ灰	オリーブ灰			15.4				15C~中頃。3.5/36
6	33号溝		碗	灰	密	灰	灰							細かい貫入。龍泉窯系D
7	34号溝		輪花小碗	灰白	緻密	灰黄	灰黄							龍泉窯系
8	48号溝	Cl区上層	碗	灰白	緻密	オリーブ灰	オリーブ灰							貫入。軸透明感あり
9	包含層	K-07Gr	碗	灰	緻密	灰オリーブ	灰オリーブ、見込 み円圈花文	露胎	断面長方形、 内面まで施軸			5.9		龍泉窯系I
10	包含層	J-35Gr	碗	灰	緻密	灰オリーブ	灰オリーブ、胴部に 草花文?見込み円圈	露胎、一部 軸かかる	断面台形、外面~ 畳付まで施軸			5.4		龍泉窯系I
11	包含層	G-22Gr	碗	灰白	緻密	灰白	灰白							粗い貫入。軸透明感あり。龍泉窯系I
12	包含層	E-11Gr	碗	灰	緻密	緑灰、鎊連弁文	緑灰			15.0				龍泉窯系1-5。2.5/36
13	包含層	D-33Gr	碗	灰	緻密	オリーブ灰、鎊連弁文	オリーブ灰			15.95				龍泉窯系1-5。3/36
14	包含層	H-13Gr	碗	灰	密	灰オリーブ、鎊連弁文	灰オリーブ			14.2				龍泉窯系1-5。3.5/36
15	包含層	G-14Gr	碗	灰	緻密	オリーブ灰、連弁文	オリーブ灰			14.5				龍泉窯系1-5。3.5/36
16	包含層	F-15Gr	碗	灰	密	緑灰、鎊連弁文	緑灰			15.0				龍泉窯系1-5。3.5/36
17	28号溝 (混入)	H区上	碗	灰白	緻密	明オリーブ灰、 鎊連弁文	明オリーブ灰							優品。龍泉窯系1-5
18	表土除去		碗	灰白	緻密	灰オリーブ、鎊連弁文	灰オリーブ							~13C
19	包含層	B-16Gr	碗	灰	粗	オリーブ灰、 線描連弁文	オリーブ灰							龍泉窯系B。15後半~16C
20	包含層	G-24Gr	碗	灰白	緻密	灰オリーブ、 線描連弁文	灰オリーブ							粗い貫入。漆つぎあり。 龍泉窯系B。16C
21	包含層	J-38Gr	碗	灰	密	灰オリーブ、雷文ナデ	灰オリーブ			15.2				龍泉窯系B。15C。3/36
22	包含層	C-04Gr	碗	灰	緻密	灰オリーブ、雷文	灰オリーブ			15.25				龍泉窯系C。4/36
23	表土除去		碗	灰	密	灰オリーブ、雷文	灰オリーブ							粗い貫入。軸透明感あり。龍泉窯系C

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調(胎土)	胎土	外面	内面	底部	高台	口径	器高	底径高台	見込み高	備考(口縁部残存率)
24	包含層	D-16Gr	碗	灰白	緻密	オリブ灰、雷文	オリブ灰							粗い貫入。龍泉窯系C
25	包含層	F-28Gr	碗	灰	密	オリブ灰	オリブ灰			14.2				14C後半～。龍泉窯系D。5/36
26	包含層	J-34Gr	碗	灰	密	オリブ灰	オリブ灰							龍泉窯系D
27	表土除去		碗	灰	密	オリブ灰	黄灰							龍泉窯系D
28	包含層	H-13Gr/ G-47Gr	碗	灰白	密	オリブ灰	オリブ灰							細かい貫入。龍泉窯系D
29	包含層	H-02Gr	碗	灰	緻密	灰オリブ、界線1条	灰オリブ			15.05				龍泉窯系E。3/36
30	包含層	C-23Gr	碗	灰	密	オリブ灰	オリブ灰							粗い貫入。龍泉窯系E
31	表土除去		碗	灰	粗	オリブ灰	オリブ灰、見込み円花文	露胎				5.75		細かい貫入。龍泉窯系I類
32	包含層	A-23Gr	碗	灰～ 橙	密	オリブ灰	オリブ灰、見込みスタンプ花文	露胎				5.35		龍泉窯系C
33	包含層	E-38Gr	碗	灰	密	灰	灰、見込み草花文?	露胎				5.4		龍泉窯系I
34	包含層	E-13Gr	碗	灰	緻密	緑灰	緑灰、見込み円花文様	露胎				5.6		龍泉窯系C?
35	包含層	C-22Gr	碗	灰白	密	明オリブ灰	明オリブ灰	軸カキトリ				6.1		龍泉窯系C
36	包含層	J-07Gr	碗	灰	緻密	緑灰	緑灰、見込み円花	露胎				5.3		粗い貫入。
37	包含層	D-33Gr	碗	青灰	密	灰オリブ	灰オリブ	露胎だが1/2に軸かかる				5.9		細かい貫入。龍泉窯系
38	包含層	D-40Gr	碗	灰	密	灰オリブ	灰オリブ					6.2		
39	包含層	H-07Gr	碗	灰	緻密	灰オリブ	灰オリブ、見込み円花							
40	包含層	I-23Gr	小碗	灰	密	灰オリブ	灰オリブ	露胎				4.1		細かい貫入。龍泉窯系
41	包含層	D-40Gr	皿	灰	緻密	オリブ灰	オリブ灰			8.65				龍泉窯系。4/36
42	包含層	C-05Gr	皿	灰	緻密	灰オリブ	灰オリブ			11.7				龍泉窯系。6/36
43	包含層	C-15Gr	盤	粗	密	灰オリブ	灰オリブ							貫入。龍泉窯系
44	包含層	G-41Gr	香炉	灰	密	灰オリブ、口縁露胎	灰オリブ			7.5				6/36
45	包含層	J-30Gr	香炉	灰	密	灰	灰							細かい貫入。軸透明感あり。龍泉窯系
46	包含層	G-10Gr	壺?	灰白	密	黄褐	黄褐							細かい貫入。
47	包含層	D-37Gr	合子	灰	密	オリブ灰	露胎			5.2	1.25			端部露胎。5/36
48	包含層	C-30Gr	碗	灰白	緻密	灰	灰					4.7		細かい貫入。軸透明感あり。同安窯系

第28表 輸入陶磁器観察表(染付)

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調(胎土)	胎土	外面	内面	底部	高台	口径	器高	底径高台	見込み高	備考(口縁部残存率)
1	包含層	C-41Gr	碗	灰白	緻密	界線2条	界線2条							
2	包含層	C-38Gr	碗	灰白	緻密	界線1条	界線2条							
3	包含層	H-25Gr	端反皿	灰白	緻密	界線2条、1条、牡丹唐草文	見込み界線文様					8.3		断面三角、 豊付き～内側露胎
4	包含層	G-37Gr	端反皿	灰白	密	界線1条、牡丹唐草文	見込み界線2条、 文様					6.25		断面三角、 豊付き～底部露胎
5	包含層	F-05Gr	端反皿	明オリブ灰	緻密	界線1条	界線1条			10.0				4/36
6	包含層	E-25Gr	端反皿	灰白	密	界線1条、唐草文	界線1条							
7	包含層	F-09Gr	端反皿	灰白	緻密	界線1条、牡丹唐草文	界線1条、 見込み界線1条	豊付き～底部露胎						豊付きのみ露胎
8	表土除去		端反皿	灰白	密	界線2条、下に2条、牡丹唐草文?	界線1条、 見込み文様							
9	包含層	A-21Gr	呉笥底皿	淡黄	粗	文様	見込み文様					4.2		
10	包含層	G-09Gr	呉笥底皿	灰白	緻密	芭蕉葉文	見込み界線2条、 花鳥文					3.2		

第29表 輸入陶磁器観察表(朝鮮系陶磁器)

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	器種	色調(胎土)	胎土	外面	内面	底部	高台	口径	器高	底径高台	見込み高	備考(口縁部残存率)
1	11号土坑		碗	にふい橙	粗	灰白	灰白					3.8		
2	11号土坑		碗	にふい橙	密	灰白	灰白					4.2		全面施軸
3	包含層	I-41Gr	碗	灰	密	灰白一部暗緑灰	灰白一部暗緑灰					4.0		全面施軸
4	49号土坑(混入)		碗	明褐灰	密	灰白	灰黄					4.0		全面施軸
5	包含層	E-08Gr	碗	灰	密	オリブ灰	オリブ灰、 見込み胎土目4ヶ所					3.5		全面施軸
6	包含層	J-37Gr	碗	灰	密	オリブ灰	オリブ灰、 見込み胎土目4ヶ所					3.9		全面施軸

第30表 石製遺物観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
1	包含層	K-07Gr	硯	緑色凝灰岩	54.28	(6.2)	(4.25)	(1.7)	
2	57号土坑	3層	行火	角礫凝灰岩	620	(10.1)	13.75	2.2	
3	57号土坑	上層	行火	角礫凝灰岩	220	(12.1)	(5.1)	2.0	
4	154号土坑		石製品	角礫凝灰岩	420	(14.2)	(7.0)	(4.35)	
5	75号土坑		砥石	変質頁岩	380	12.2	5.9	3.05	中砥石
6	134号土坑		砥石	安山岩	990	16.15	(9.7)	3.9	仕上砥石

第31表 石製遺物観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	石質	重量(g)	長さ	幅	厚さ	備考
7	57号土坑		砥石	変質頁岩	340	16.9	5.15	2.2	中砥石
8	74号土坑		砥石	変質頁岩	4.96	(3.4)	1.4	0.5	仕上砥石
9	55号土坑		砥石	変質頁岩	1530	20.5	7.8	6.6	仕上砥石
10	36号溝		砥石	珪質岩	220	10.0	6.1	3.4	仕上砥石
11	33号溝		砥石	珪質岩	630	(13.2)	6.0	5.0	仕上砥石
12	66号溝		砥石	珪質岩	410	10.4	4.5	3.9	仕上砥石
13	P7054		砥石	珪質岩	110	(9.15)	3.1	2.2	仕上砥石
14	P8217		砥石	泥岩	300	(6.3)	7.0	4.2	中砥石

第32表 中世前期井戸部材観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	法量	備考
1	2号井戸		板材	長さ12.5幅1.8厚さ0.7	西隙間調整部材
2	2号井戸		板材	長さ32.0幅11.1厚さ0.9	東隙間調整部材
3	2号井戸		板材	長さ46.6幅15.1厚さ2.0	西1段目
4	2号井戸		板材	長さ37.4幅14.0厚さ2.4	南1段目
5	2号井戸		板材	長さ46.8幅10.5厚さ1.5	北1段目
6	2号井戸		板材	長さ33.2幅13.0厚さ0.9	東2段目
7	2号井戸		板材	長さ38.2幅13.7厚さ1.2	西2段目
8	2号井戸		板材	長さ34.8幅13.8厚さ1.8	南2段目
9	2号井戸		板材	長さ41.4幅15.6厚さ1.35	北2段目
10	2号井戸		板材	長さ43.8幅11.2厚さ1.1	東3段目
11	2号井戸		板材	長さ27.5幅13.3厚さ1.1	西3段目
12	2号井戸		板材	長さ35.6幅5.25厚さ1.7	南3段目
13	2号井戸		板材	長さ39.6幅9.7厚さ1.5	北3段目
14	2号井戸		板材	長さ25.2幅3.0厚さ1.1	東4段目
15	2号井戸		板材	長さ28.5幅5.0厚さ0.65	西4段目
16	2号井戸		板材	長さ35.5幅7.2厚さ1.5	南4段目
17	2号井戸		板材	長さ30.8幅13.8厚さ2.0	北4段目
18	2号井戸		板材	長さ45.1幅10.2厚さ2.5	北側
19	2号井戸		板材	長さ49.0幅14.4厚さ1.8	
20	2号井戸		板材	長さ47.1幅16.35厚さ1.95	
21	2号井戸		板材	長さ23.1幅11.3厚さ1.0	
22	2号井戸		板材	長さ23.0幅12.0厚さ1.15	南側
23	2号井戸		板材	長さ33.8幅9.1厚さ1.8	
24	2号井戸		板材	長さ53.7幅9.7厚さ1.95	
25	2号井戸		板材	長さ45.6幅12.8厚さ1.4	
26	2号井戸		板材	長さ57.7幅12.7厚さ1.9	
27	2号井戸		板材	長さ36.2幅13.4厚さ1.4	
28	2号井戸		板材	長さ31.8幅15.6厚さ1.2	
29	2号井戸		杭	長さ29.75幅5.95厚さ5.5	
30	2号井戸		杭	長さ31.7幅5.7厚さ6.2	
31	2号井戸		杭	長さ33.35幅5.3厚さ5.55	
32	2号井戸		杭	長さ33.0幅6.6厚さ6.3	

第33表 木製品観察表(中世)

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	法量	備考
1	75号土坑	No26	箸	長さ13.1幅0.5厚さ0.35	
2	75号土坑	No27	箸	長さ17.85幅0.45厚さ0.4	
3	75号土坑	No31	箸	長さ17.5幅0.35厚さ0.45	
4	75号土坑	No32	箸	長さ18.15幅0.6厚さ0.45	
5	75号土坑	No33	箸	長さ18.95幅0.5厚さ0.3	
6	75号土坑	No34	箸	長さ18.0幅0.65厚さ0.4	
7	75号土坑	No35	箸	長さ18.75幅0.75厚さ0.75	
8	75号土坑	No36	箸	長さ18.25幅0.55厚さ0.5	
9	134号土坑		下駄	長さ18.0幅7.5厚さ2.2	
10	134号土坑		下駄	長さ5.65幅3.8厚さ2.2	
11	134号土坑		皿	器高1.35口径8.5底径7.3見込み高 [1.0]	残存率18/36
12	134号土坑		円板	長さ6.6幅6.3厚さ0.5	
13	14号土坑		椀	器高3.8口径15.7高台径7.7見込み高3.0	残存率24/36
14	57号土坑		曲物	径14.3高さ11.9厚さ0.9	
15	57号土坑		曲物の柄	長さ52.35幅1.8厚さ1.3	14に付く。
16	57号土坑		椀	器高4.8口径11.8高台径6.9見込み高4.1	残存率32/36

## 第 6 節 特殊遺物

### 第 1 項 金属製品 (第219図)

金属製品は、小刀 (1・2) 及び筭 (3) が出土している。1 は錆化しているが残りが良く、刀身部下位に紐状の繊維質のものが巻きつけられていた。単純に巻きつけたのではなく、特殊な巻き方をしているようであり、縦に垂らす部分も観察される。54号土坑 (井戸) 出土で、時期は14世紀前半代と考えられる。2 は錆化が激しく原型を留めていないため、残存していた刀身を図化したものである。上部及び下部を欠く。130号溝から出土しており、古代に属する可能性がある。3 は下端部を欠く。表面には菊花文が施されており、金箔が全面に貼られていたようである。図示した部分に、金箔が残存していた。11号土坑 (井戸) 上面からの出土であり、最終埋没年代である16世紀末頃以降の時期が考えられる。

### 第 2 項 古銭 (第220図～第222図)

古銭は総数で26枚出土している。その内訳は、唐銭 1 枚、北宋銭12枚、南宋銭 2 枚、明銭 4 枚、朝鮮銭 1 枚、国産銭 2 枚、不明 4 枚であり、約46%を北宋銭が占める。ほとんどが遺構外からの出土であり、54号土坑 (井戸) 出土の 1、47号溝出土の 2、11号土坑 (井戸) 出土の 3 の 3 点のみである。中国銭は13種類出土しており、初鑄年代で 1 番古いものは、開元通寶 (4) である。開元通寶は645年が最も古い、4 については845年に補鑄されたものと考えられる。また一番新しいものは、永樂通寶 (19・20) の1408年である。主体を占める北宋銭に限れば、咸平元寶 (5) の998年が最も古く、元豊通寶の1078年が最も新しい。

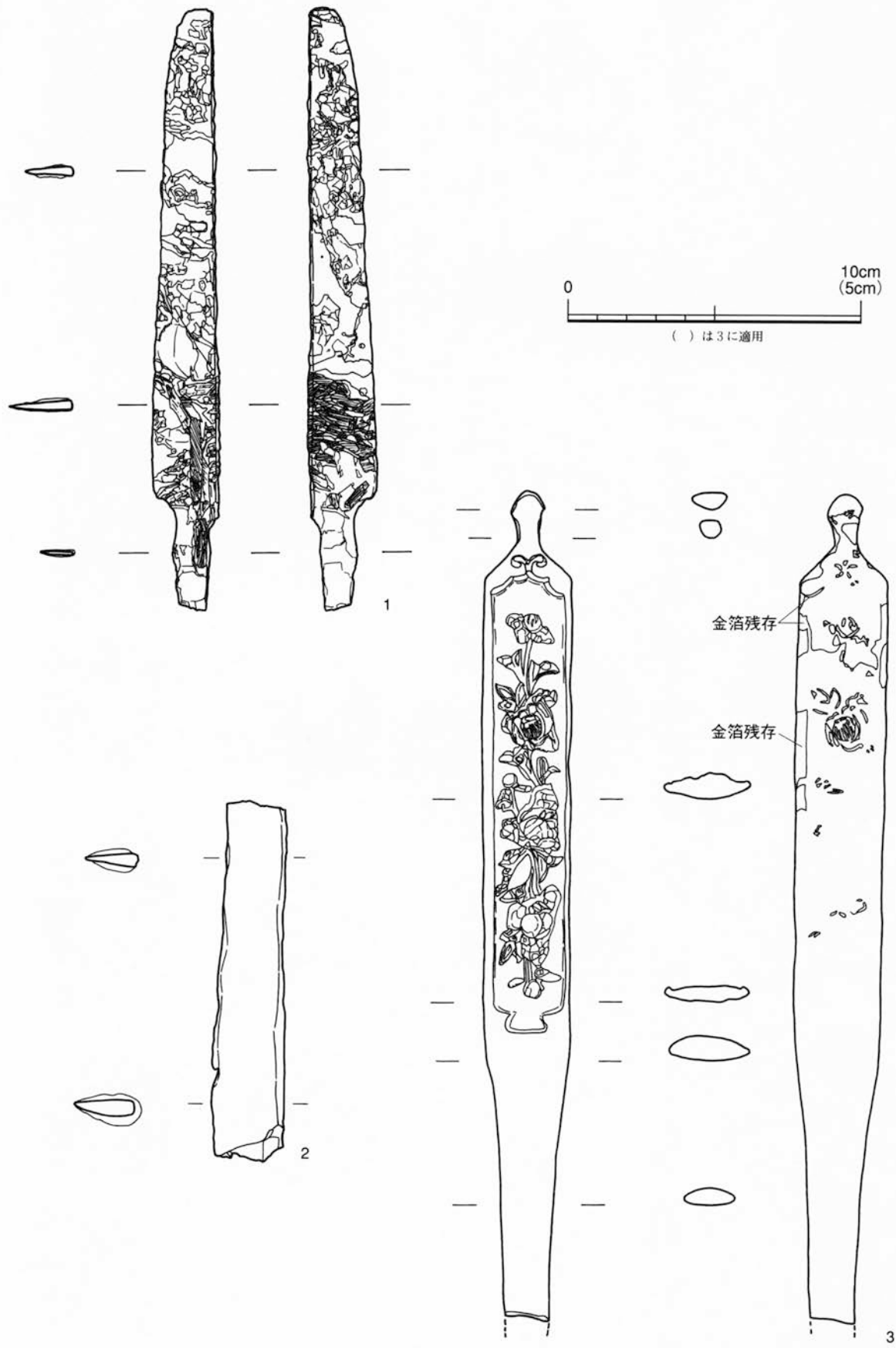
中国銭以外に、朝鮮通寶 (21) も出土している。初鑄年代は1423年で、輸入銭の中で最も新しいものである。

国産銭は、近世期の寛永通寶であり、初鑄年代は1624年である。

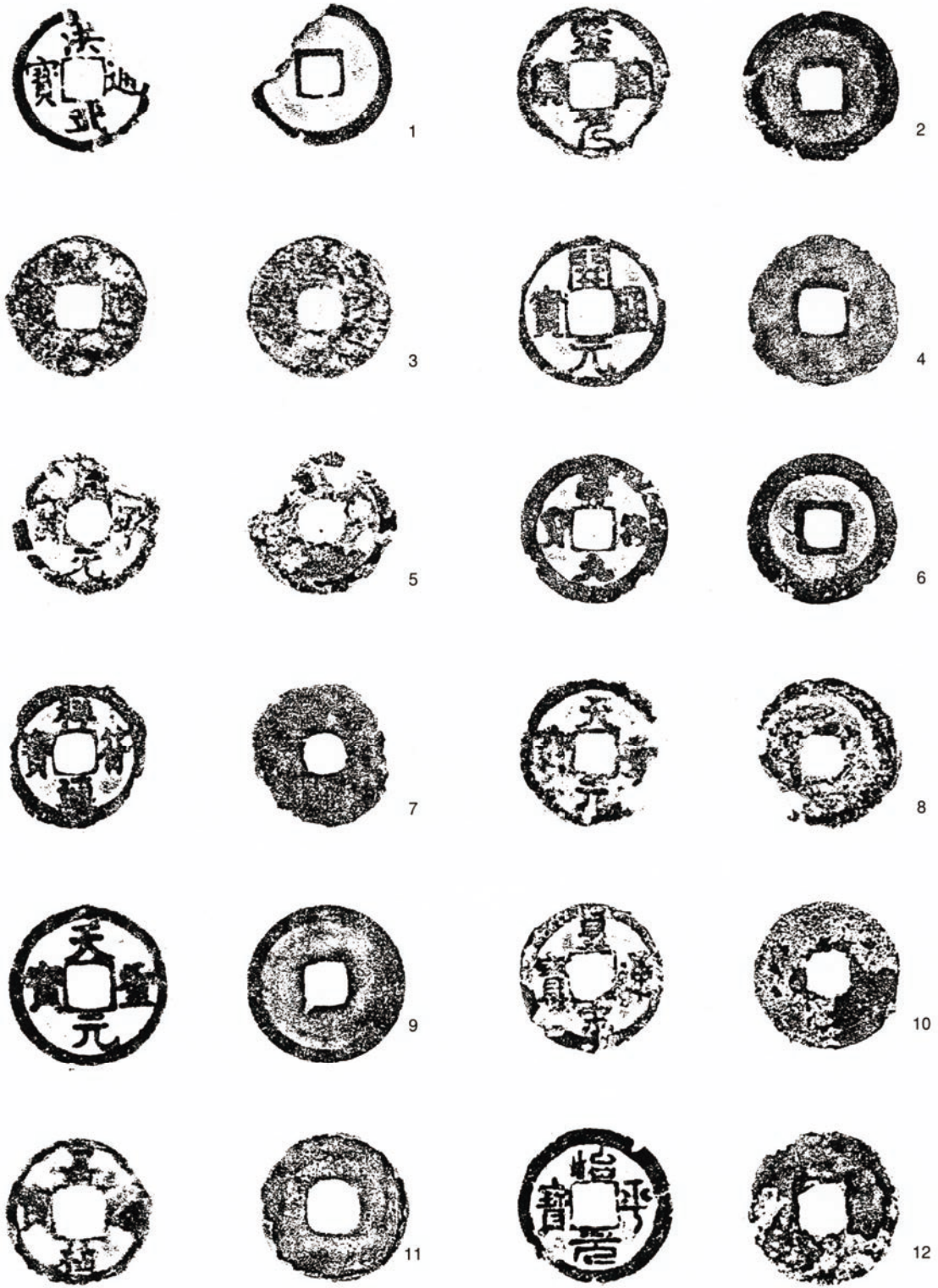
第34表 金属製品観察表

(単位:cm)

番号	遺構名	出土地点	種別	長さ	幅	厚さ	重さ(g)	備考
1	54号土坑	6層	小刀	20.6	2.4	0.3	55.5	鍛造。繊維が巻き付いた痕跡あり。
2	130号溝		小刀	11.9	2.5	0.5	63.3	鍛造。古代か? 腐食大。
3	11号土坑	上面	筭	14.1	1.5	0.45	33.7	銅製。金箔付着。

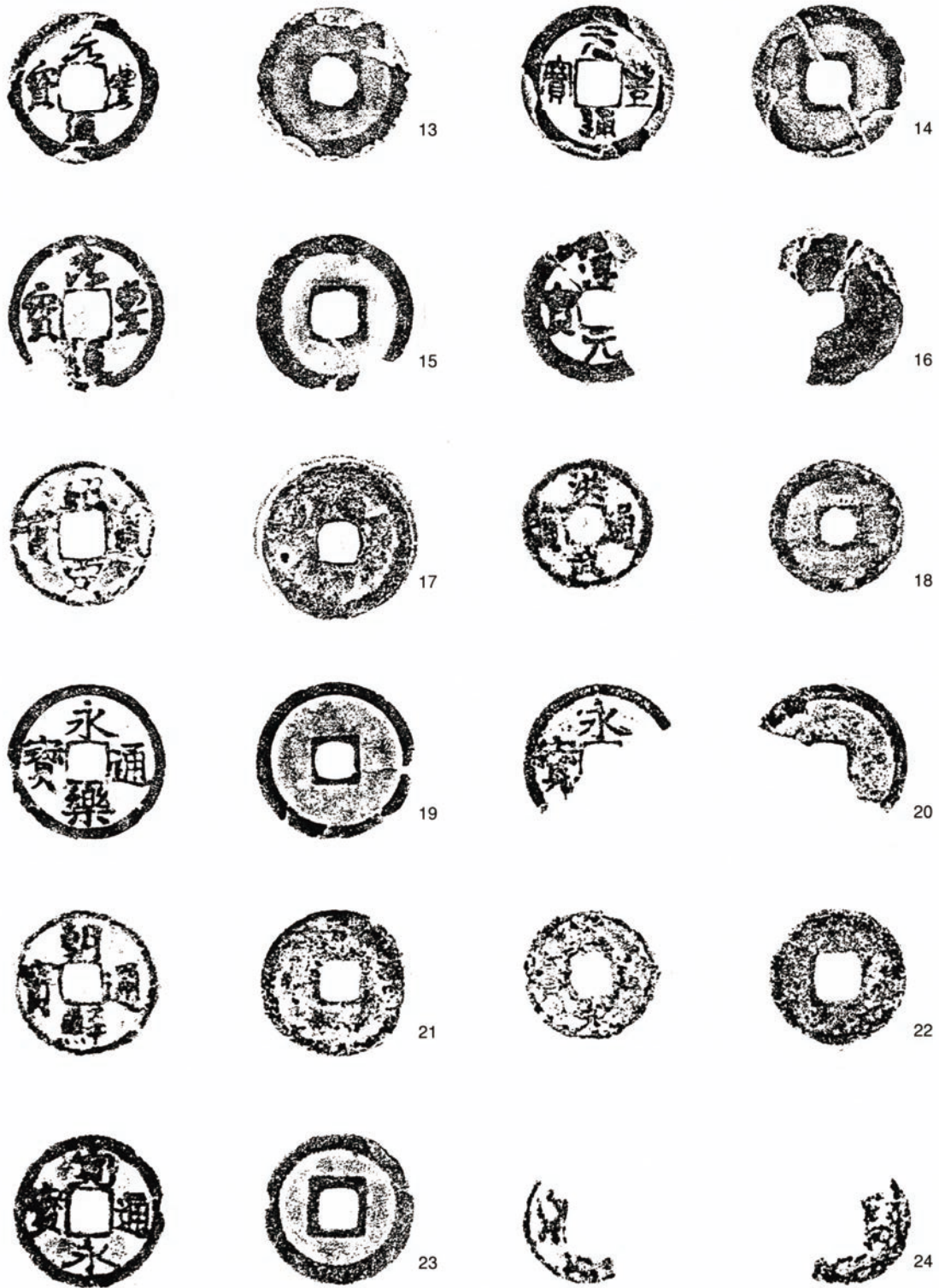


第219図 金属製品 (S=1/2・1/1)



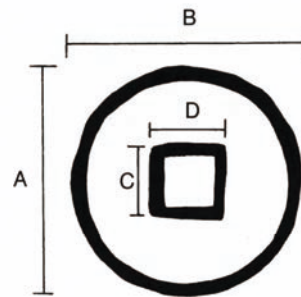
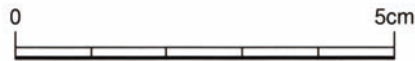
第220图 出土古钱 (S=1/1)





0 5cm

第221圖 出土古錢 (S=1/1)



第222図 出土古銭 (S=1/1)

第35表 出土古銭観察表

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	貨銭名	書体	重量(g)	A	B	C	D	初鑄年代
1	54号土坑	上層	洪武通寶		1.47			0.69	0.69	明 1368年
2	47号溝	A区、1層	熙寧通寶	篆書	2.09	2.41	2.45	0.81	0.82	北宋 1068年
3	11号土坑		?		1.44	2.24	2.24	0.7	0.73	?
4	包含層	H-03Gr	開元通寶		1.48	2.42	2.43	0.78	0.81	唐 845年
5	包含層	G-35Gr	咸平元寶		0.93		2.36	0.72	0.7	北宋 998年
6	包含層	G-14Gr	祥符元寶		1.68	2.39	2.39	0.7	0.71	北宋 1009年
7	包含層	I-25Gr	祥符元寶		1.33			0.74	0.73	北宋 1009年
8	包含層	J-26Gr	天聖元寶	真書	2.1	2.41		0.73	0.74	北宋 1023年
9	包含層	K-32Gr	天聖元寶	真書	2.4	2.54	2.53	0.76	0.77	北宋 1023年
10	包含層	G-14Gr	皇祐通寶	真書	2	2.36	2.32	0.75	0.76	北宋 1038年
11	包含層	F-11Gr	嘉祐通寶	真書	1.29	2.31	2.35	0.85	0.86	北宋 1056年
12	包含層	G-02Gr	治平元寶	篆書	8.58	2.45	2.42	0.75	0.75	北宋 1064年
13	包含層	D-16Gr	元豐通寶	行書	1.65	2.36	2.37	0.76	0.77	北宋 1078年
14	包含層	E-16Gr	元豐通寶	篆書	1.97	2.41	2.4	0.78	0.74	北宋 1078年
15	包含層	I-20Gr	元豐通寶	行書	1.63	2.47	2.5	0.77	0.79	北宋 1078年
16	包含層	L-05Gr	淳熙元寶	真書	1.16	2.4		0.64		南宋 1174年
17	包含層	D-33Gr	紹定通寶		8.69	2.34	2.34	0.76	0.75	南宋 1228年
18	包含層	F-10Gr	洪武通寶		1.84	2.1	2.1	0.66	0.65	明 1368年
19	包含層	F-13Gr	永樂通寶		2.52	2.48	2.48	0.66	0.68	明 1408年
20	包含層	G-16Gr	永樂通寶		1.15				0.63	明 1408年
21	包含層	J-26Gr	朝鮮通寶		2.05	2.33	2.25	0.69	0.7	1423年
22	包含層	D-10Gr	寬永通寶		1.5	2.14	2.17	0.7	0.7	1624年
23	包含層	H-32Gr	寬永通寶		2.24	2.4	2.38	0.74	0.75	1624年
24	包含層	K-34Gr	???		0.33					?
25	包含層	G-03Gr	?		3.53	2.32	2.36	0.66	0.68	?
26	包含層	G-13Gr	??通寶		1.66	2.31	2.31	0.8	0.86	?

### 第3項 土錘（第223図～第225図）

出土した土錘は、全て管状土錘であり、130点を図化した。遺構から出土したものは約35%であり、遺構外から出土したものが多。出土遺構別にみると、130号溝からの出土が最も多く、古代に属するものが主体を占めるようである。この130号溝は、古代を通じて土器の廃棄場として機能しており、多種多量の土器が捨てられていることから、土錘も同様に不用品が廃棄されたと考えられる。ただし、時期に関しては、弥生時代から存在するものであるため、時期比定は困難である。土錘は形態による分類を行った。分類基準は以下の通りである。

I類 側縁部が膨らむ形態

II類 側縁部が直線的な円柱形態で、平面方形。

III類 側縁部が直線的な円柱形態で、角部面取りにより平面隅丸方形。

IV類 球状形態。

さらに、長さとの関係から a～d に細分される。

a類 長さとの幅がほぼ等しいもの。

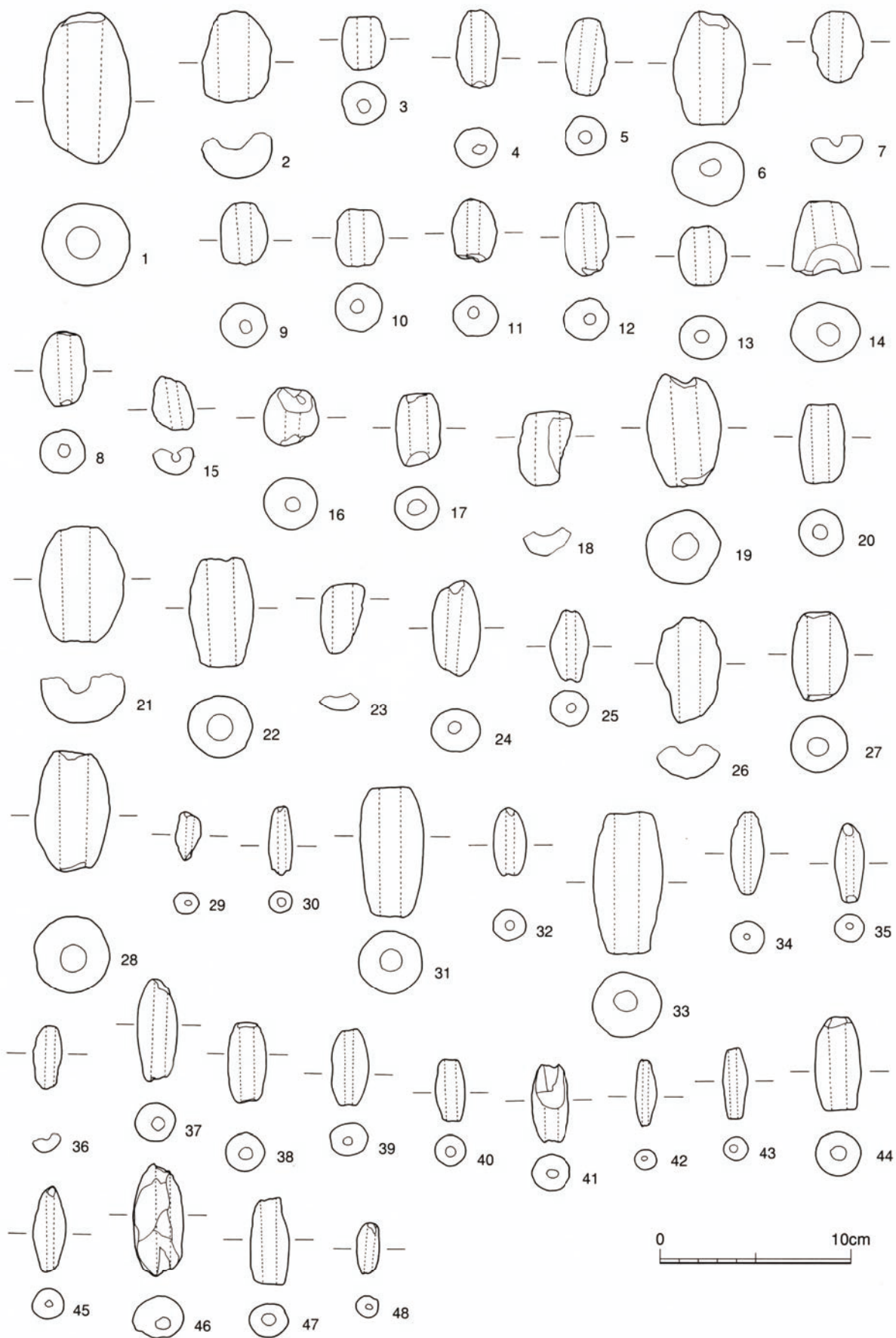
b類 長さが幅の2倍より短いもの。

c類 長さが幅の3倍より短いもの。

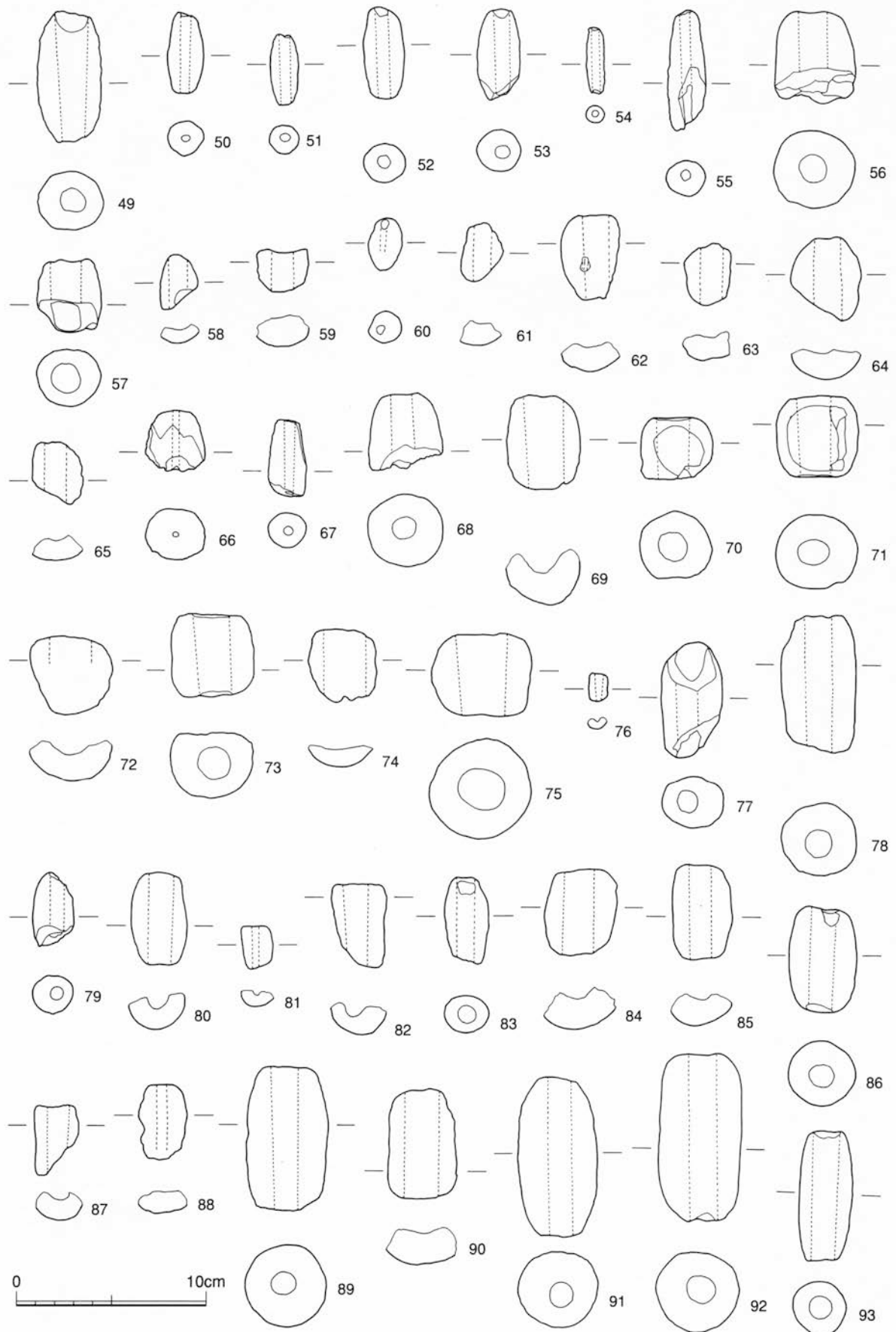
d類 長さが幅の3倍より長いもの。

当遺跡からは、I b類（1～29）29点、I c類（30～52）24点、I d類（54・55）2点、III a類（70～75）6点、III b類（76～90）15点、III c類（91～100）10点、IV b類（121～127）7点、細分不明のものがI類（56～69）14点、III類（101～120）20点、IV類（128）1点、全く不明（129・130）が2点であり、II類は存在しない。I類54%、II類0%、III類40%、IV類6%となる。次に完形品（使用による端部小欠け品含む）を対象に、重量分布を見ると、1～10g 7点、10～25g 18点、25～50g 5点、50～75g 5点、75～100g 3点、100～125g 1点、125～150g 1点、150g以上1点となり、10～25g代が突出して多い。最小値は1.95gで、最大値は157.65gである。最小値の54は細型であり、それに近い42・43は、従来いわれている魚網錘とは考えにくい。釣り具としての可能性も考える必要がある。また、150g前後の大型品は、III b・III c類のみである。IV類以外の各類型において出土遺構の主体は130号溝で、それ以外でも古代遺構からの出土が多い。中世遺構の出土はI b類1点、I c類1点、I類2点、III類1点の5点のみで少ない。IV類に関しては、出土遺構の主体は38号溝である。38号溝は弥生後期と古代に主体がある遺構だが、土錘の形態と、胎土が弥生土器の胎土と共通することから弥生時代後期頃のものと考えられる。

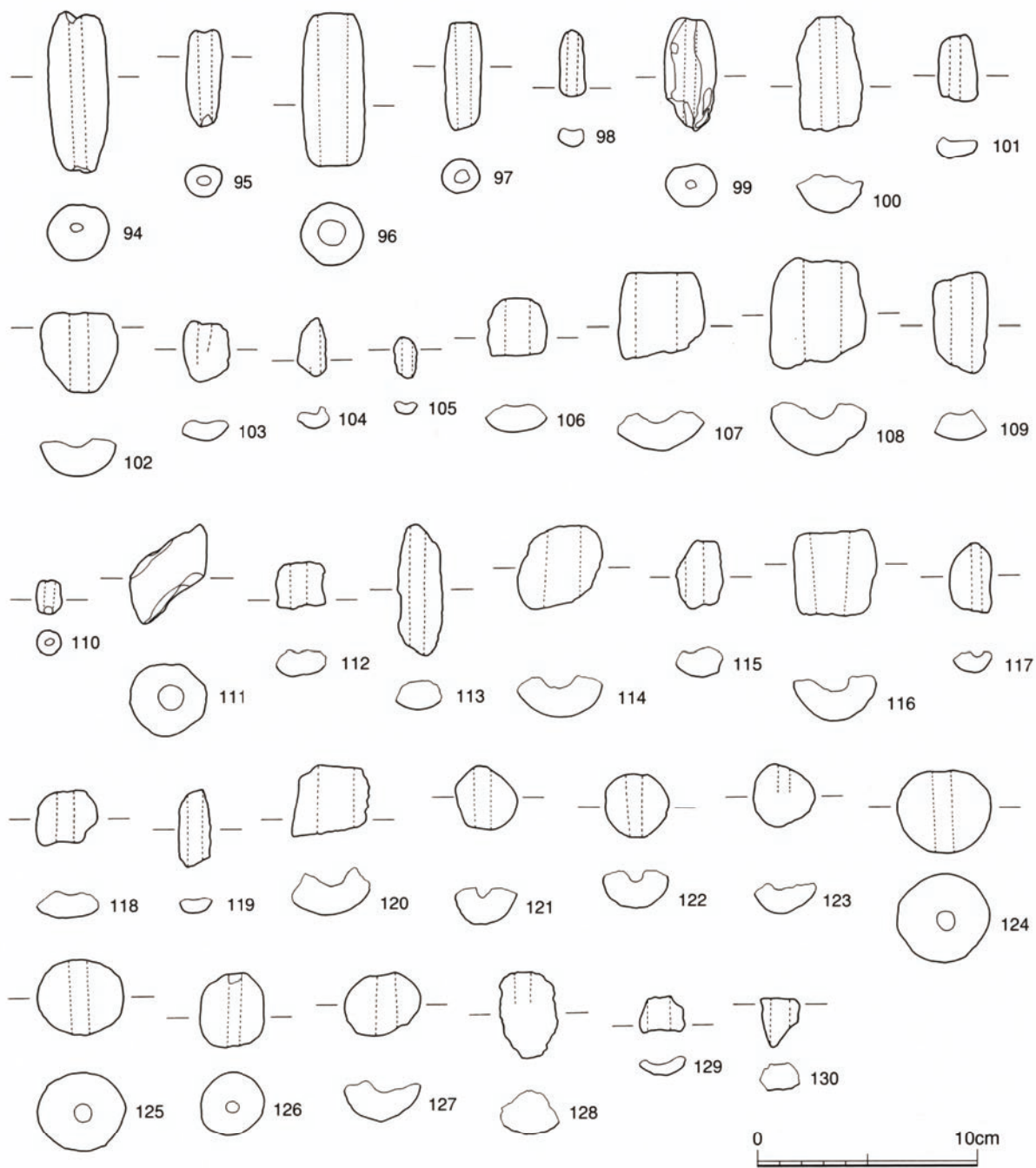
当遺跡に近接地域で、同じく梯川近接する荒木田遺跡から111点の土錘が出土している。この遺跡も、古墳時代初頭～中世前期までの複合遺跡である。出土傾向をみると、I類73%、II類2%、III類24%、IV類1%となっている。II類・IV類の出土量の少なさは共通するが、I類が突出して多い点で異なっている。また、重量分布では10～25g代が多い点は共通しているが、150gを超える大型品は見られない。このことから、10～25g程度のI類とIII類が多く使用された型式であったことが分かる。今後、土錘の使用実態（供給の問題も含む）の解明には、類例を増やすことや時代を特定することが課題といえる。



第223図 土錘 I b類 (1~29) ・ I c類 (30~48) (S=1/3)



第224図 土錘 Ic類(49~53)・Id類(54・55)・I類(56~69)・IIIa類(70~75)・IIIb類(76~90)  
 ・IIIc類(91~93)(S=1/3)



第225図 土錘Ⅲc類(94~100)・Ⅲ類(101~120)・Ⅳb類(121~127)・Ⅳ類(128)・不明(129・130) (S=1/3)

#### 土錘観察表凡例

1. 番号は掲載順であり、実測図と対応している。
2. 分類は、本文中の分類に基づき標記してある。
3. 計測値において、( ) は残存値を表している。
4. 孔径については、両端の孔径をA・Bで示している (A>B)。孔径Cは途中で欠損している場合における、その箇所での計測値を示す。
5. 出土地点に関しては、出土地点の記録のあるものは接合点数で標記してある。出土状況図を参照して頂きたい。なお、区分けについては、2分法で調査した土坑は北ないし東からA区となる。4分法以上では、北西端がA区となり反時計回りに進む。溝に関しては、セクションベルトを境として、北ないし東からA区となる。

第36表 土錘觀察表

(單位cm)

番号	遺構名	出土地点	形態	長さ	幅	A	B	C	重量(g)	備考(残存率)
1	159号土坑	1点	I b	7.80	4.54	1.85		1.80	119.07	1
2	13号溝	1点	I b	4.78	3.59	1.70		1.58	(26.06)	1/2
3	176号土坑		I b	2.73	2.29	0.71	0.65		12.03	1
4	38号溝	1点	I b	4.02	2.14	0.75	0.68		14.02	1
5	130号溝	1点	I b	5.95	3.70	1.29	1.14		(55.67)	4/5
6	130号溝	1点	I b	4.02	2.14	0.75	0.71		14.00	1
7	130号溝	I区	I b	3.70	2.63	0.72	(0.65)		(10.33)	1/2
8	130号溝	1点	I b	3.93	2.35	0.70	0.62		17.65	1
9	130号溝	1点	I b	3.23	2.37	0.73	0.63		15.30	1
10	130号溝	1点	I b	3.01	2.41	0.78	0.69		15.47	1
11	130号溝	1点	I b	3.24	2.32	0.55		0.55	(13.36)	2/3
12	130号溝	1点	I b	3.79	2.26	0.63	0.59		16.40	1
13	130号溝	I区	I b	3.12	2.45	0.75	0.72		14.58	1
14	130号溝	1点	I b	(3.90)	3.56	1.08		1.13	(33.72)	1/2
15	130号溝	I区	I b	(2.70)	2.08	(0.59)		0.48	(5.50)	1/3
16	33号溝		I b	3.10	2.83	0.82	0.77		(15.70)	2/3
17	包含層	J-08Gr	I b	3.73	2.25	0.95		0.95	(14.95)	4/5
18	包含層	C-09Gr	I b	3.90	2.60	1.75	0.62		(11.11)	1/3
19	包含層	G-11Gr	I b	5.85	3.89	1.33	1.31		(66.54)	4/5
20	包含層	I-22Gr	I b	4.16	2.32	0.90	0.82		18.08	1
21	包含層	I-28Gr	I b	6.05	4.35	1.47	1.37		(54.08)	1/2
22	包含層	C-31Gr	I b	5.65	3.39	1.42	1.38		47.31	1
23	包含層	C-32Gr	I b	3.55	2.14	1.05		1.05	(7.29)	1/4
24	包含層	C-36Gr	I b	4.98	2.49	0.68	0.55		(21.75)	4/5
25	包含層	D-38Gr	I b	5.56	3.33	1.14	1.10		(19.80)	1/3
26	包含層	C-40Gr	I b	4.61	2.85	1.20	1.08		32.08	1
27	包含層	D-40Gr	I b	6.33	3.85	1.50	1.35		79.22	1
28	包含層	G-06Gr	I b	2.54	1.30	0.38		0.35	(2.56)	2/3
29	包含層	I-45Gr	I b	3.66	2.10	0.48	0.47		12.13	1
30	215号土坑	中層	I c	(3.55)	1.20	0.40		0.44	(4.36)	2/3
31	38号溝	1点	I c	6.81	3.24	1.14	1.06		65.91	1
32	38号溝	1点	I c	3.59	1.70	0.46	0.45		8.95	1
33	130号溝	1点	I c	7.42	3.57	1.37	1.22		86.21	1
34	130号溝	1点	I c	4.30	1.72	0.33	0.32		9.63	1
35	11号建物	P-11	I c	4.09	1.51	0.42	0.37		(6.57)	4/5
36	P10497		I c	3.33	1.47	0.45		0.45	(2.70)	1/2
37	包含層	D-02Gr	I c	5.38	2.10	0.72	0.70		19.30	1
38	包含層	F-07Gr	I c	4.18	2.03	0.70	0.68		13.97	1
39	包含層	H-07Gr	I c	4.01	1.88	0.37	0.35		11.92	1
40	包含層	D-10Gr	I c	3.22	1.55	0.58	0.55		6.42	1
41	包含層	G-11Gr	I c	4.10	1.90	0.75	0.67		(12.13)	2/3
42	包含層	C-14Gr	I c	3.50	1.10	0.31	0.29		3.26	1
43	包含層	H-16Gr	I c	3.75	1.27	0.40	0.36		4.04	1
44	包含層	J-21Gr	I c	4.93	2.32	(0.88)	0.78		(19.84)	4/5
45	包含層	H-31Gr	I c	4.50	1.65	0.40		0.35	(8.67)	4/5
46	包含層	H-32Gr	I c	5.96	2.64	0.72	0.70		(24.13)	4/5
47	包含層	D-37Gr	I c	4.58	2.00	0.82	0.71		15.36	1
48	包含層	C-41Gr	I c	2.66	1.16	0.43	0.38		(2.55)	2/3
49	包含層	I-41Gr	I c	6.92	3.32	1.80	1.15		(54.69)	4/5
50	包含層	I-42Gr	I c	4.28	1.87	(0.52)	0.48		12.36	1
51	包含層	K-45Gr	I c	3.72	1.48	0.55	0.52		(6.78)	4/5
52	包含層	D-31Gr	I c	4.84	2.13	0.72	0.65		18.15	1
53	表土除去		I c	4.67	2.22	0.81		0.76	(20.34)	3/4
54	P302		I d	3.48	0.91	0.40		0.38	1.95	1
55	包含層	D-45Gr	I d	(6.12)	2.01	0.52		0.38	(16.07)	2/3
56	38号溝	1点	I	4.47	4.18	1.51		1.45	(67.89)	1/2
57	38号溝	1点	I	(3.75)	3.35	1.60		1.46	(23.25)	1/2
58	38号溝	J区上層	I	(2.80)	(1.95)	(1.00)		(0.95)	(3.32)	1/4
59	47号溝	B区上層	I	(2.12)	2.70	1.60		1.20	(7.93)	1/4
60	103号溝	B区	I	(2.72)	1.75	0.44		0.25	(3.94)	2/3
61	包含層	D-13Gr	I ?	(3.00)	2.10	(0.91)		(0.93)	(6.43)	1/4
62	包含層	I-13Gr	I	(4.40)	(3.00)	1.40		0.70	(15.14)	1/3
63	包含層	L-20Gr	I	(3.13)	2.46	(1.20)		(1.20)	(7.59)	1/4
64	包含層	D-33Gr	I ?	4.51	3.69	1.50		1.07	(16.14)	1/3
65	包含層	G-33Gr	I	(3.02)	2.64	1.30		0.85	(8.42)	1/4
66	包含層	K-43Gr	I	(3.14)	3.12	0.32		0.35	(24.44)	1/2
67	包含層	D-44Gr	I	(4.00)	2.00	0.58		0.43	(11.77)	2/3

(単位cm)

番号	遺構名	出土地点	形態	長さ	幅	A	B	C	重量(g)	備考(残存率)
68	包含層	J-44Gr	I	(3.89)	3.89	1.11		1.23	(53.60)	1/2
69	包含層	E-24Gr	I	(4.92)	3.85	2.08		1.85	(33.02)	1/2
70	包含層	E-16Gr	Ⅲ a	3.22	3.80	1.72	1.58		(32.94)	1/2
71	包含層	G-16Gr	Ⅲ a	4.28	4.22	1.76	1.55		(56.17)	4/5
72	包含層	H-16Gr	Ⅲ a	4.14	4.24	2.19		2.20	(21.27)	1/3
73	包含層	H-16Gr	Ⅲ a	4.40	4.32	1.89	1.67		(48.81)	4/5
74	包含層	C-17Gr	Ⅲ a	3.83	3.50	2.19		2.19	(13.48)	1/3
75	包含層	H-32Gr	Ⅲ a	4.35	5.21	2.70	2.30		91.53	1
76	32号溝	E	Ⅲ b	1.43	0.95	0.45	0.25		(0.90)	1/3
77	38号溝	1点	Ⅲ b	5.96	3.21	(1.31)		1.20	(39.19)	2/3
78	130号溝	1点	Ⅲ b	(7.28)	3.90	1.46		1.33	(104.14)	4/5
79	130号溝	1点	Ⅲ b	(3.80)	2.09	(0.74)		0.65	(12.97)	3/4
80	包含層	H-08Gr	Ⅲ b	4.86	2.92	1.36	1.24		(17.09)	1/2
81	包含層	G-09Gr	Ⅲ b	2.26	1.62	0.40		0.30	(2.40)	1/3
82	包含層	H-10Gr	Ⅲ b	4.40	2.90	1.34		1.08	(14.98)	1/3
83	包含層	D-11Gr	Ⅲ b	4.42	2.25	(0.92)	0.90		(15.36)	3/4
84	包含層	C-13Gr	Ⅲ b	4.43	3.72	1.54		0.85	(26.06)	1/3
85	包含層	J-20Gr	Ⅲ b	5.00	3.10	1.13	1.10		(18.21)	1/3
86	包含層	L-21Gr	Ⅲ b	5.50	3.51	1.28	1.25		69.56	1
87	包含層	D-33Gr	Ⅲ b	3.68	2.32	1.15		1.08	(7.17)	1/3
88	包含層	H-36Gr	Ⅲ b	4.03	2.55	(0.73)		(0.55)	(9.70)	1/4
89	包含層	F-38Gr	Ⅲ b	7.55	4.25	1.43	1.28		(142.18)	4/5
90	包含層	C-46Gr	Ⅲ b	5.74	3.58	(1.79)	(1.80)		(31.14)	1/4
91	130号溝	1点	Ⅲ c	8.40	4.16	1.24	1.17		145.00	1
92	130号溝	1点	Ⅲ c	8.81	4.28	1.46	1.45		157.65	1
93	130号溝	1点	Ⅲ c	6.85	2.80	1.29	1.20		46.37	1
94	包含層	F-12Gr	Ⅲ c	4.32	1.60	0.65	0.48		7.90	1
95	包含層	D-13Gr	Ⅲ c	7.30	2.66	0.60	0.55		(51.28)	4/5
96	包含層	C-34Gr	Ⅲ c	7.03	2.82	1.35	1.20		56.56	1
97	包含層	I-34Gr	Ⅲ c	4.93	1.65	0.74	0.60		12.72	1
98	包含層	D-38Gr	Ⅲ c	3.03	1.13	(0.50)	(0.48)		(2.49)	1/4
99	包含層	D-40Gr	Ⅲ c	5.08	2.31	0.45		0.42	(20.53)	2/3
100	包含層	I-42Gr	Ⅲ c	(5.19)	2.83	0.70		0.75	(17.87)	1/3
101	115号溝	E区	Ⅲ	(3.04)	1.75	(0.49)		(0.51)	(3.23)	1/3
102	38号溝	1点	Ⅲ	(3.62)	3.42	(0.86)		(0.84)	(18.10)	1/3
103	34号溝		Ⅲ	(2.75)	2.09	(0.65)		(0.49)	(3.89)	1/3
104	包含層	F-05Gr	Ⅲ	2.64	1.32	?		(0.49)	(1.91)	1/4
105	包含層	D-13Gr	Ⅲ ?	(1.80)	(0.98)	(0.48)		(0.46)	(0.88)	1/4
106	包含層	F-11Gr	Ⅲ	(2.60)	2.63	0.95		1.12	(7.90)	1/4
107	包含層	G-23Gr	Ⅲ	(3.87)	3.88	1.90		1.79	(21.10)	1/3
108	包含層	D-27Gr	Ⅲ	(4.85)	4.28	1.60		2.50	(35.19)	1/3
109	包含層	K-27Gr	Ⅲ	(4.56)	2.50	(0.98)		(0.91)	(14.51)	1/4
110	包含層	K-28Gr	Ⅲ	(1.50)	1.12	0.45		0.38	(1.43)	1/2
111	包含層	I-36Gr	Ⅲ	(3.13)	3.30	1.23		1.15	(28.97)	1/3
112	包含層	I-39Gr	Ⅲ ?	(2.11)	2.18	?		(1.18)	(4.39)	1/5
113	包含層	D-40Gr	Ⅲ	5.80	(1.96)	(0.76)	(0.74)		(12.17)	1/4
114	包含層	G-41Gr	Ⅲ	(3.60)	3.57	(1.46)		1.63	(16.67)	1/3
115	包含層	H-46Gr	Ⅲ	3.00	2.04	?		(0.82)	(8.46)	1/5
116	包含層	C-47Gr	Ⅲ	(3.88)	3.71	1.82		1.27	(21.6)	1/3
117	包含層	D-47Gr	Ⅲ	(3.05)	1.75	0.42		0.32	(6.21)	1/3
118	包含層	I-43Gr	Ⅲ	(2.42)	2.73	(0.79)		(0.75)	(6.39)	1/5
119	包含層	B-45Gr	Ⅲ	(3.31)	1.47	(0.60)		(0.62)	(3.20)	1/3
120	不明		Ⅲ	(3.13)	3.31	1.58		2.06	(14.08)	1/5
121	32号溝	D区	Ⅳ b	2.86	2.68	0.75	0.68		(11.21)	1/2
122	32号溝	D区	Ⅳ b	2.89	2.93	0.70	0.52		(11.53)	1/2
123	17号溝	B区	Ⅳ b	(2.90)	2.80	(0.57)		(0.54)	(9.99)	1/3
124	38号溝	1点	Ⅳ b	3.78	4.19	0.83	0.77		60.06	1
125	38号溝	1点	Ⅳ b	3.44	3.89	0.82	0.80		44.45	1
126	38号溝	1点	Ⅳ b	3.25	2.91	0.62	0.60		27.60	1
127	38号溝	m上	Ⅳ b	(2.75)	3.42	(0.71)		(0.97)	(12.49)	1/2
128	P12587		Ⅳ	3.93	(2.51)	0.82		(0.79)	(14.82)	1/4
129	包含層	J-35Gr	?	1.54	2.08	0.72		1.50	(1.30)	1/4
130	包含層	H-36Gr	?	(2.22)	(1.71)	(0.88)		(0.90)	(3.42)	1/5





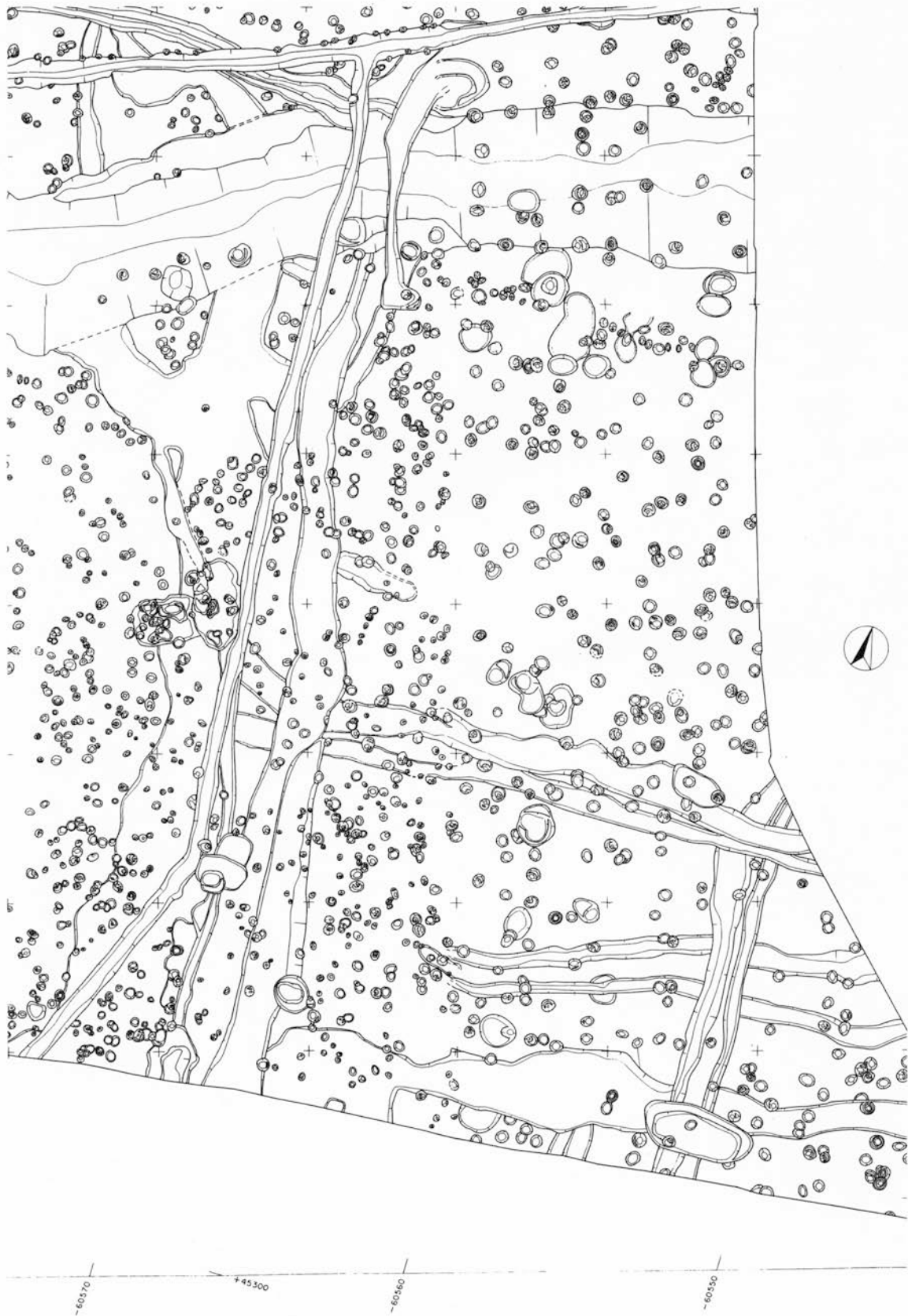
第226図 遺構平面図1 (S=1/200)



第227図 遺構平面図2 (S=1/200)



第228図 遺構平面図3 (S=1/200)



第229図 遺構平面図4 (S=1/200)



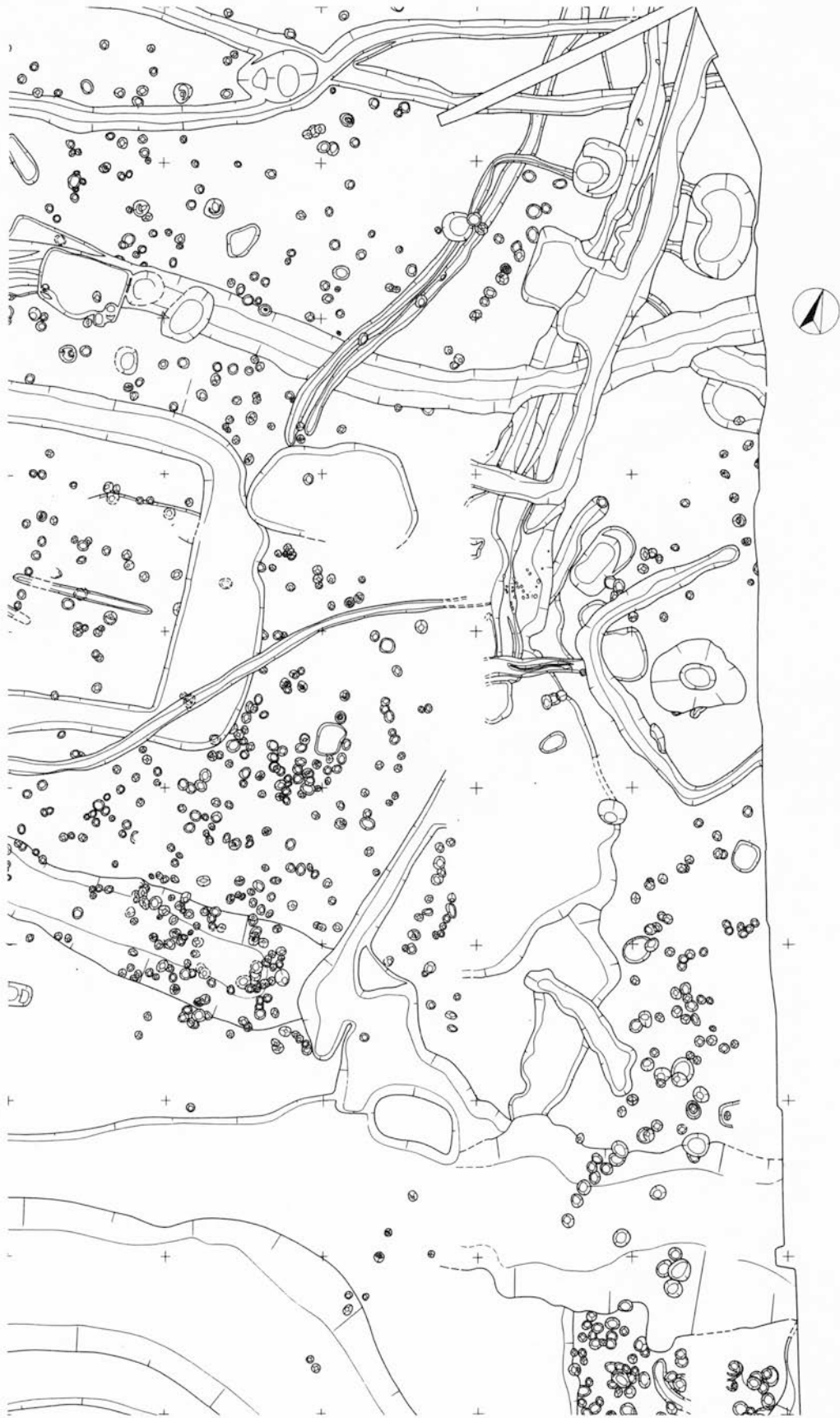
第230図 遺構平面図5 (S=1/200)



第231図 遺構平面図6 (S=1/200)



第232図 遺構平面図7 (S=1/200)



第233図 遺構平面図8 (S=1/200)

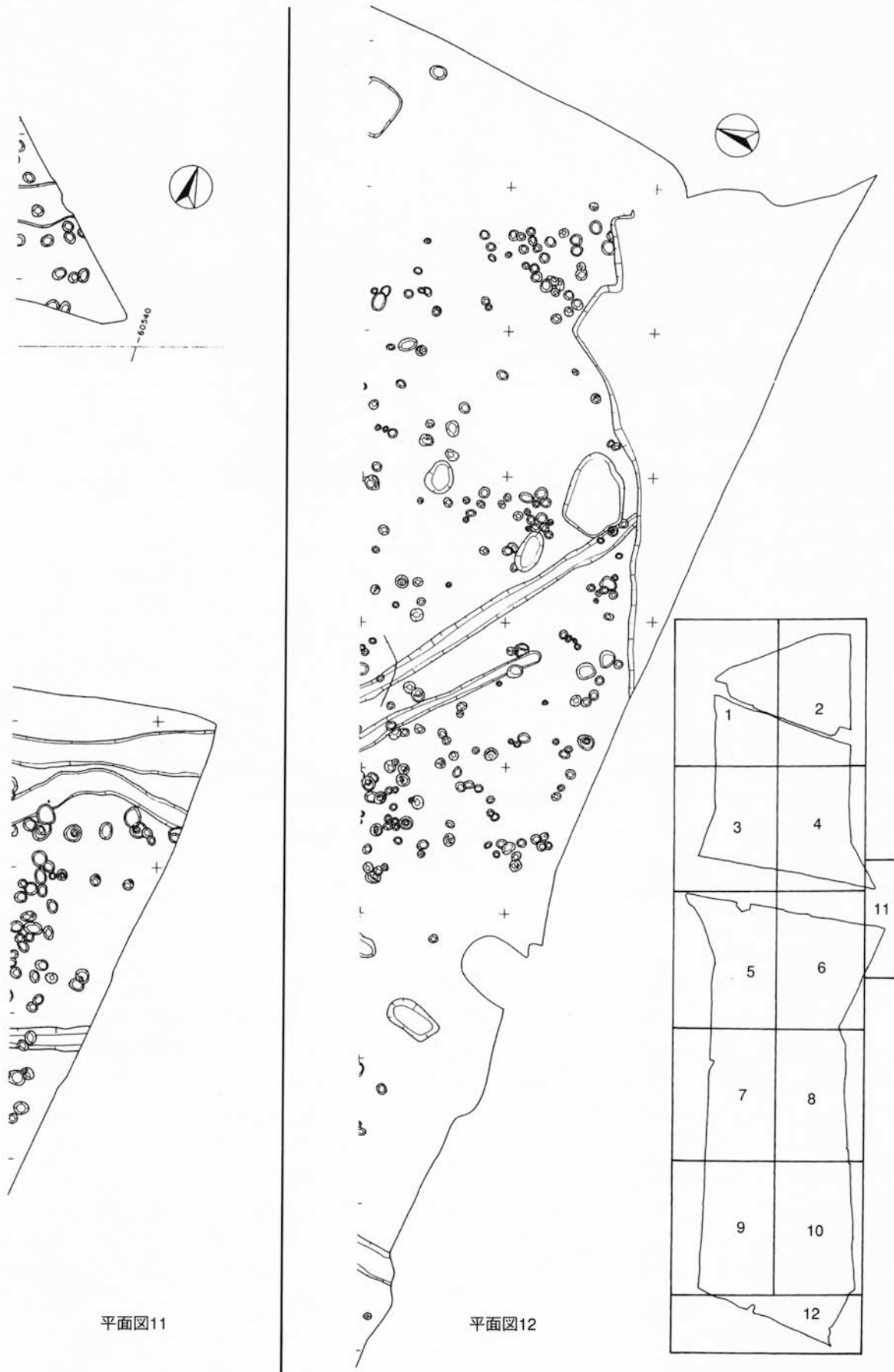




第234図 遺構平面図9 (S=1/200)



第235図 遺構平面図10 (S=1/200)



平面図11

平面図12

第236図 遺構平面図11・12 (S=1/200)

## 第 5 章 総括

### 第 1 節 縄文時代後期中葉から古墳時代前期

#### 第 1 項 遺構の変遷

弥生時代中期までの遺構については、本文中で述べた通り単独出土の様相が強い。縄文時代後期中葉遺物はピット 1 箇所からの単独出土であり、後期後葉も 250 号土坑が単独で存在するのみである。弥生時代でも同様の傾向が継続し、前期は 156 号溝のみで、中期でも 28 号溝に若干見られるのみである。県道南側調査区では、旧河道の流路が検出されていたが、遺物を全く含まないため、時期判定ができない。よって、今回の図には掲載していないが、何れかの流路が流れていた可能性はある。隣接地の調査において、大溝から磯部期並行の土器が出土しているとの指摘もあることから、中期後葉には確実に大溝があったのであろう。

弥生時代後期以降、当遺跡にも遺構がまとまって形成されるようになる。各遺構の時期については、第 3・4 章と同様に、漆町編年を基準に提示するものとする。また、全時期を通じて当該調査区域では、建物跡を見出すことができなかった。

#### 1 群前～4 群（猫橋～月影）並行期

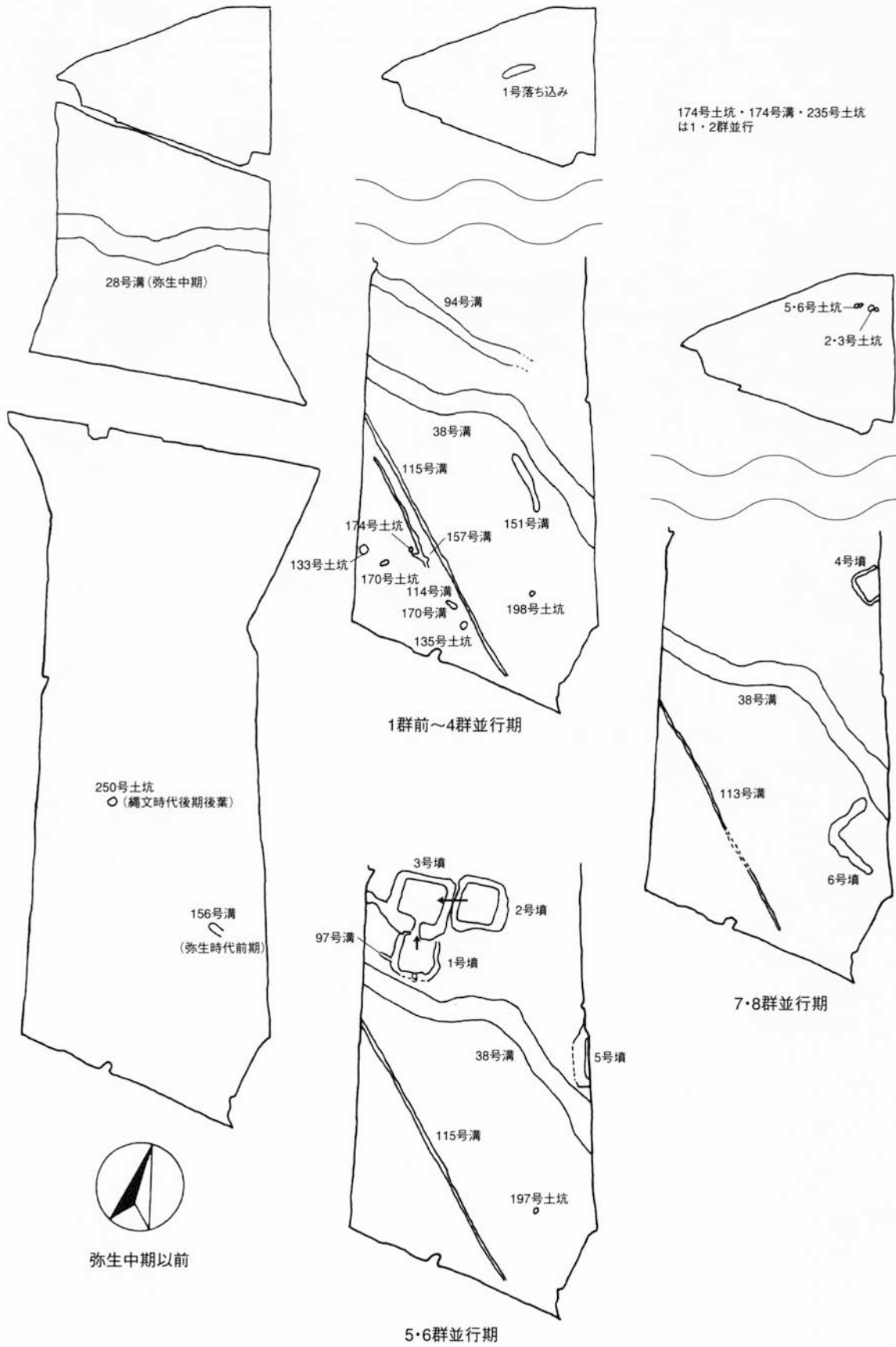
38 号溝は 1 群以前には流れていたようであり、土器廃棄が確認される。1～4 群には、土器の大量廃棄が行われるようになる。1・2 群には、174 号土坑・174 号溝・235 号土坑が掘削されている。この頃には 157 号溝・114 号溝も掘削されていたようであり、4 群に至るまでの間に、115 号溝・151 号溝・133 号土坑・170 号土坑・198 号土坑が出現している。これらの溝群は、38 号溝が調査区中央で流れを西へ変えるまでの方向である、北西方向に軸を合わせて掘られていることが特徴である。また、直線的であることも特徴で、特にしっかりした深さを持つ 115 号溝は、墓域となる次期にも存続している。さらに、最終期には 113 号溝に移行するが、当該期最後の時期までこの地点に同様の溝は存続している。この溝群と 38 号溝間は、約 27～30m の距離が保たれていることもあり、成立以降、継続して重要な意味を持ち続けたと考えられる。何らかの区域を示すことは確実視されるが、詳細は不明であり、今後の課題である。当該期では、115 号溝の南側に土坑が多く形成されており、北側は 198 号土坑のみで希薄である。38 号溝以北では、旧河道である 94 号溝の流れも確認され、調査区北端に 1 号落ち込みが単独的に検出されている。

#### 5・6 群（白江）並行期

38 号溝の流れは依然として確認されるが、土器の大量廃棄は前時期の後半頃には終息していたようである。94 号溝は既に埋ってしまっている。当該期最大の特徴は、38 号溝北側に墓域が形成されることである。墳墓は方墳である 1 号墳ないし 2 号墳が最初に形成されており、次いで 3 号墳が形成されたという変遷が確認できる。5 号墳との前後関係については不明である。ただし、3 号墳は造り出し部分を持つ墳墓であり、5 号墳もその可能性があることから同時期とも考えられる。また、1～3 号墳と 5 号墳の間には空白地帯が存在していることから、ある程度グループが形成されていたことが考えられる。また、3 号墳周溝から西側へ調査区外へと延びる溝が連結していることから、さらに西側へ墓域が拡張している可能性がある。当該期の墓域は、38 号溝北岸に沿う形で東西に広がって形成されていることが特徴である。墓域以北には、当該期の遺構は存在しない。38 号溝以南は、前述の通り 115 号溝が存続している。115 溝以北では 197 号土坑が確認されるのみで、前代に引き続き希薄な状態である。しかし、以南地区では前代の様相と異なり、遺構が全く見られなくなっている。

#### 7・8 群（古府）並行期

38 号溝の流れは確認でき、当該期の遺物も散発的に出土している。当該期においても墓域は存続しているが、最終段階となる。前代の墳墓がどのような状態であったのかは、判断できない。しかし、



第237図 縄文時代後期後葉~古墳時代前期遺構変遷図 (S=1/1,300)

第37表 38号溝出土遺物組成表（実測遺物対象）

時期	器種	壺	甕	壺か甕	小型壺	ミニチュア壺	鉢	高坏	器台	高坏か器台	蓋	甌	計	割合
猫橋～法仏		1	3	0	0	1	2	12	2	0	1	0	22	12.43%
割合(%)		4.55%	13.64%	0.00%	0.00%	4.55%	9.09%	54.55%	9.09%	0.00%	4.55%	0.00%		
法仏		26	46	2	0	0	7	14	4	1	3	0	103	58.19%
割合(%)		25.24%	44.66%	1.94%	0.00%	0.00%	6.80%	13.59%	3.88%	0.97%	2.91%	0.00%		
法仏～月影		9	24	0	1	0	0	8	0	2	0	0	44	24.86%
割合(%)		20.45%	54.55%	0.00%	2.27%	0.00%	0.00%	18.18%	0.00%	4.55%	0.00%	0.00%		
月影～白江		0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1.13%
割合(%)		0.00%	50.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	50.00%		
白江～古府		1	4	0	0	0	0	1	0	0	0	0	6	3.39%
割合(%)		16.67%	66.67%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	16.67%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%		
計		37	78	2	1	1	9	35	6	3	4	1	177	
割合(%)		20.90%	44.07%	1.13%	0.56%	0.56%	5.08%	19.77%	3.39%	1.69%	2.26%	0.56%		

(割合は、横軸での器種構成比を示す。)

当該期の墳墓形成をみると、前代期の墳墓部分を避けているようであり、当該期にも残っていた可能性は高い。当該期の特徴としては、墳墓形成域がより東側へ移っており、38号溝以南へも進出していることである。墳墓は前代に比べ、主軸がより西偏しており、周溝が全周しなくなっている。大きさについても、大小存在しており格差が発生している。ただし、4号墳と5号墳の前後関係については判断できない。115号溝については、その機能が同軸の113号溝へと移行している。6号墳を除き、113号溝の南北両側地域からは遺構が検出されおらず、無遺構地帯と化している。一方で、調査区北端区域において、小規模の土坑群の形成が確認されており、当該期には調査区北端以北地域での集落形成が想定されよう。

## 第2項 出土遺物の様相

出土遺物の様相については、猫橋～月影期（前1群？～4群）までは、その殆どが38号溝からの出土であり、白江期（5群）以降の遺物が、墳墓の供献土器が中心であることは本文中で述べた通りである。よって、ここでは38号溝出土遺物に代表させてその様相を見てみることにする。

まず、時期を把握できた遺物が実測遺物であるため、その個体数による統計処理である点を断っておく。また、個別時期を比定することは困難であったため、時期幅を持たせた表記となっている。

時期別廃棄割合をみると、猫橋～法仏期が約12%、法仏期が約58%、法仏～月影期が約25%、月影～白江期が約1%、白江～古府期が約3%である。約6割を占める法仏期にピークがあり、出土量が月影～白江期以降に激減している状況である。また、法仏期単独と法仏～月影期との割合の差を見ると、月影期には既に廃棄量がかなり減少していたことが想定される。

次に器種別の割合を概観すると、甕形土器が約47%と突出して多く、次いで壺形土器が約21%、高坏形土器が約20%と拮抗しており、他は数%ずつとなる。廃棄主体時期である法仏期では、甕形土器約45%・壺形土器約25%・高坏形土器約14%となり、法仏～月影期では甕形土器約55%・壺形土器約20%・高坏形土器約18%となり、若干の差異は認められる。この主体時期の数値が、当然全体結果に反映されているといえるが、甕形土器が約半数を占め、約2割程度ずつ壺形土器と高坏形土器が占めるといった傾向は見出せよう。煮炊具である甕形土器の消費率が高いのは当然の結果ともいえ、特異な廃棄状況を示すものではないと考えられる。ただし、猫橋～法仏期のみ、高坏形土器が約55%を占めるといった特異な結果になっているが、法仏期の高坏形土器の割合がやや低いことから、実際には法仏期に属するものが多かった可能性も考えられる。

## 第 2 節 古代

### 第 1 項 遺構の変遷

#### 1. 時期区分の設定

古代遺構の時期別変遷を提示するが、掘立柱建物跡からの出土遺物は非常に少なく、その帰属を判断することは困難であった。よって、ここでは遺物から導き出される年代および、建物跡の主軸方位を基に、最終的には切り合い関係も考慮して帰属時期を総合的に判断している。よって若干の時期幅を持たせて考えるしかなく、古代編年軸に基づいてはいるが、当遺跡での時期区分を設定し述べることにしたい。詳細な時期変遷は不明瞭な場合も多く、設定した期間内において切り取った一つの結果であると考えて頂きたい。なお、どこまでを古代と捉えるかという点については、本文等を参照して頂きたい。なお、38号溝と130号溝に関しては、6世紀初頭頃には既に存在しており、全時期の渡って存在しているものと考えている。

古代Ⅰ期 当遺跡における掘立柱建物出現期と考えられる。田嶋編年Ⅱ期頃が該当する。

古代Ⅱ期 遺構数・遺物出土量が増加傾向に転じる時期。田嶋編年Ⅲ期～Ⅳ-1期頃が該当する。

古代Ⅲ期 古代Ⅳ期と合わせて、遺物量が古代前半期でピークとなる時期。田嶋編年Ⅳ-2古期頃と考えられ、1号井戸と同時期と考えられる時期。

古代Ⅳ期 前代とほぼ同様であり、時期的には田嶋編年Ⅳ-2新时期頃が該当するが、古代Ⅲ期とⅣ期についてはどの時期で分けるか判断が難しく、前後する時期を含むと考えて頂きたい。

古代Ⅴ期 遺構数は前代とあまり変化していないが、遺物量は減少傾向に転じている。田嶋編年Ⅳ-2新时期～Ⅴ-1期頃が該当する。

古代Ⅵ期 遺構数が減少する時期で、古代前半と後半の転換期。田嶋編年Ⅴ期頃が該当する。

古代Ⅶ期 遺物量は前代と同程度だが、遺構数が再び増加傾向に転ずる時期。遺構には時期差があり、前・後半に細分可能である。建物跡が主として登場してくるのは後半期と考えられる。田嶋編年Ⅵ期～Ⅶ-2古期頃（出越編年Ⅱ期頃）が該当すると考えられ、建物跡の出現はⅥ-3期以降と考えられる。

古代Ⅷ期 遺構数及び遺物出土量は古代後半期のピークとなる時期。前・後期に細分可能である。田嶋編年Ⅶ-2新时期～中世Ⅰ-1期頃（出越編年Ⅲ期～Ⅳ-1期頃）が該当する。

古代Ⅸ期 遺構数及び遺物出土量は減少する。古代最終期であり、中世への転換期である。田嶋編年中世Ⅰ-Ⅱ1～Ⅱ2期頃（出越編年Ⅳ-2・3期頃）が該当する。

#### 2. 各時期の概要

##### 古代Ⅰ期

前述の通り、38号溝と130号は既に前代より流れており、38号溝以南地区には130号溝によって東西に分割された区域が成立している。当該期に入り、その両区域において、掘立柱建物が成立している。西側区域では、159号溝によって西側と南側を区画された敷地内に、80号～82号掘立が成立する。東側区域では、85・86号掘立が成立している。東西区画において、両者の建物は中穴のタイプは異なるが、ほぼ南北正軸をとるという点で共通している。また、38号溝の南岸に接した位置に建てられるという共通した特徴がある。80～82号掘立と85・86号掘立は、それぞれ3回と2回の立替が確認できるが、詳細な変遷は不明である。ただし、80号～82号掘立に関しては、80号→81号→82号という変遷が考えられ、総柱建物の段階を挟むが、建て替えの度に規模を大きくしているようである。これらの建物は、38号溝で検出された土馬とほぼ同時期と考えられ、土馬検出地点とも近接することから、土馬祭祀との関連性が指摘できる。遺物の廃棄場所としては、38号溝、130号溝、137号・158・159号土坑がその役割を担っている。一方、38号溝以北区域では、東西溝である32号溝が成立しており、やや時期差をもって31号溝が成立している。この溝によって、南北区画に分割されていたようである。38号溝と32

号溝間は、距離にして25m前後を測る区域であるが、当該期の遺構は確認できない。31号溝以北には、61号掘立が確認されるのみである。

#### 古代Ⅱ期

当該期には、東西溝である13号溝が成立していた可能性があり、それに連結した1号大落ち込み及び17号溝も成立したと考えられる。17号溝に関しては、おそらく99号溝同位置において38号溝と連結していたと考えられる。これらの溝の成立により、38号溝の南北域において、ほぼ同じ軸上に乗った南北溝に分割される4区画が成立しており、古代最終期まで維持されたようである。38号溝と13号溝間は、距離にして48m前後を測る区域である。掘立柱建物は、主軸を40°～55°前後西偏させた建物群が成立している。38号溝以南では西区画で、87号掘立が成立する。「田」の字プランであり、倉庫棟と考えられる。東区域では建物跡は確認されず、130号溝とほぼ同軸方向の52～54号溝が確認されるのみである。38号溝以北区域では、西側区域は18号溝が確認されるのみである。東側区域には、74号～76号・78号掘立の4棟が確認される。また、38号溝以北区域は、13号溝においても南北に分割されており、その以北区域では46号・53号・56号・57号・64号・66号掘立が成立している。「田」の字プランである66号掘立は倉庫棟と考えられる。柱穴及び建物規模から推定される主体的建物は、56号掘立である。掘立柱建物は、87号掘立を除き2棟ずつのグループに分かれるようである。ただし、建物主軸が40°付近と50°付近に偏る傾向が見られることから、若干の時期差が存在するのかもしれない。遺物の廃棄場所は、38号溝、130号溝、137号・158号・159号土坑が引き続きその役割を担っている。

#### 古代Ⅲ期

当該期にも、前代に成立した5つの区画が維持されている。掘立柱建物は、主軸を10°前後東偏させた建物群が成立しており、横板組の井戸側を持つ1号井戸と同軸方向である。38号溝以南では西区画で、88号掘立が成立する。東区域では96号掘立が成立し、溜め井戸的な214号土坑が確認される。38号溝以北区域では、西側区域は71号掘立が成立し、1号井戸との直接的な関係が推察され、廃棄土坑的な91号土坑も確認される。東側区域には、遺構は確認されていない。また、13号溝以北区域では、48号・60号掘立が成立しているが、小規模建物である。柱穴及び建物規模から推定される主体的建物は、71号掘立である。96号建物も規模的には71号建物に次ぐ大きさを持つが、1号井戸の存在から当該区画が主体的な立場であったと考えられる。各区画において、建物が1棟ずつ配されるような様相が看取される。遺物の廃棄場所は、依然として38号溝、130号溝、137号・158・159号土坑が主体である。

#### 古代Ⅳ期

当該期には、13号溝に11号溝が確実に並走するようになる。ただし、出土遺物の少ない11号溝については、その出現期を確定することは困難であり前代に遡る可能性がある。掘立柱建物は、主軸を21°～25°前後西偏させた建物群となり、11号・13号に沿った軸設定となる。38号溝以南では西区画で、171号土坑が掘削されるが、建物は確認できない。東区域では遺構が確認できなくなる。38号溝以北区域では、西側区域は68号掘立が成立する。「田」の字プランであり、倉庫棟と考えられる。東側区域には、77号掘立が確認される。また、13号溝以北区域では、43号・47号・55号・65号掘立が成立し、建物数がやや増加している。柱穴及び建物規模から推定される主体的建物は、65号掘立である。建物は散在傾向を示すが、38号溝以南地区に建物が確認できなくなる。遺物の廃棄場所は、依然として38号溝、130号溝、137号・158・159号土坑が主体である。

#### 古代Ⅴ期

当該期は、遺構分布の上では前代とほぼ変わらない様相を示す。掘立柱建物は、主軸を14°～18°前後西偏させた建物群となり、11号・13号により忠実に沿った軸設定となる。38号溝以南地区の状況は、前代と同様であり、建物跡は確認できない。38号溝以北区域では、西側区画に69号・70号掘立が成立する。建物に付随するような廃棄土坑である56号土坑も掘削されている。倉庫的建物（耕地？）から家的建物（宅地？）への変化が観察される。東側区画には、79号掘立が確認される。また、13号溝以北区域では、南北溝である85号溝が出現するようであり、東西区画が成立した可能性





第238図 古代遺構変遷図1 (S=1/1,300)

がある。その東区画側に42号・51号・52号掘立が成立している。柱穴及び建物規模から推定される主体的建物は、71号掘立である。遺物の廃棄場所は、38号溝や130号溝が主体であるが、137号・158・159号土坑は、ほぼその役目を終えていたようである。

#### 古代Ⅵ期

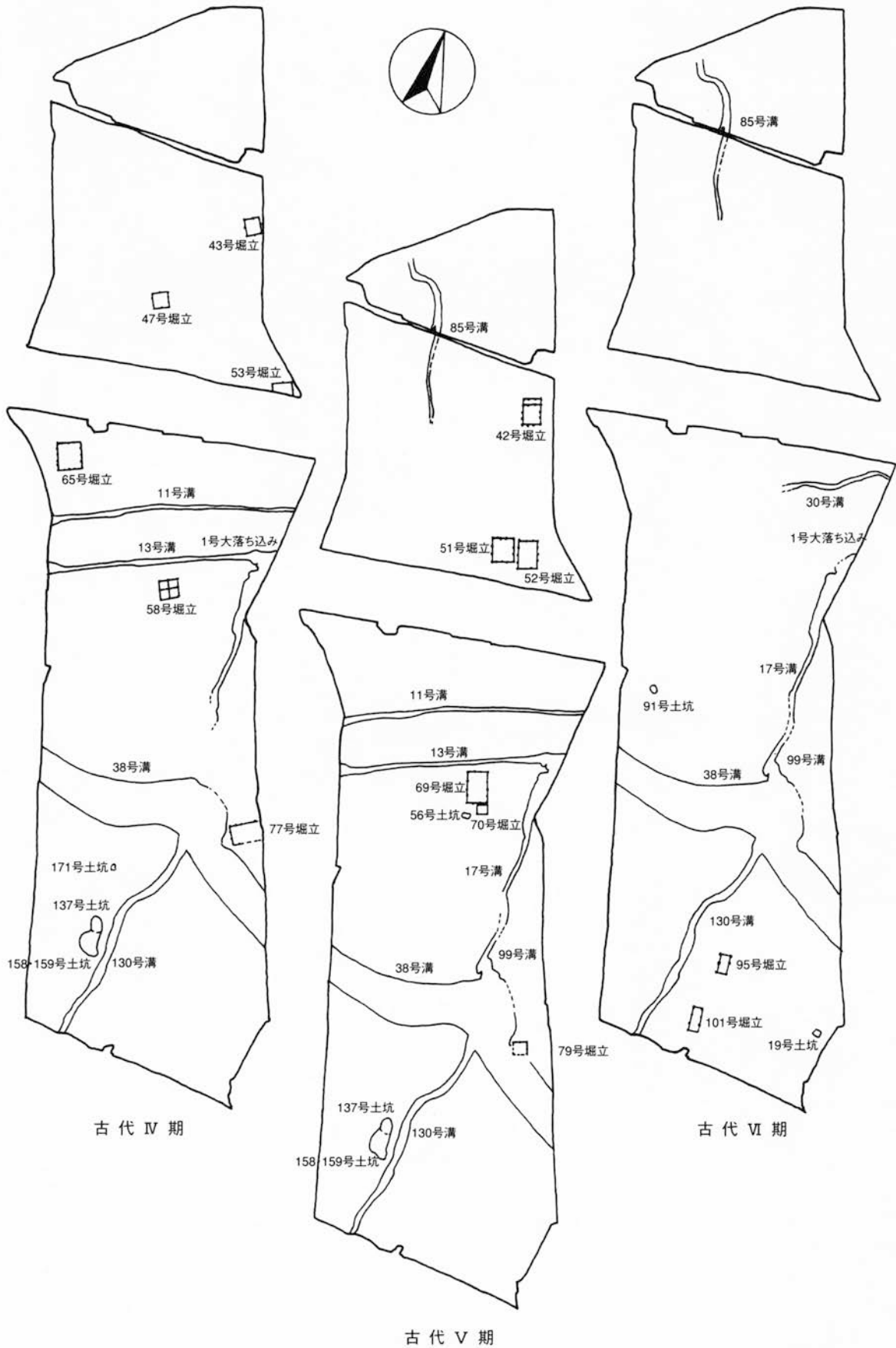
当該期は、集落のあり方が大きく変化する時期である。38号溝を中心とする4区分は維持されているが、11号溝・13号溝が機能を終えている（ただし、13号溝については、存続している可能性はある）。新しい東西溝として、30号溝が成立している。調査区北側を東西に分割する85号溝は存続していた可能性がある。全体的に遺構数が減少しており、38号溝以南では西区画で遺構が確認できなくなる。Ⅳ・Ⅴ期と建物が見られなかった東側区画で95号掘立・101号掘立が成立しており、19号土坑も掘削されている。当該期の建物跡はこれら2棟のみであり、主軸を3°前後東偏させている。遺跡の中心がこの区画周辺に移ったようである。38号溝以北区域では、殆ど遺構が確認できなくなり、西側区域で92号土坑が確認される程度である。ただし、遺物は定量出土しており、その廃棄場所はこの頃から130号溝が主体となっている。

#### 古代Ⅶ期

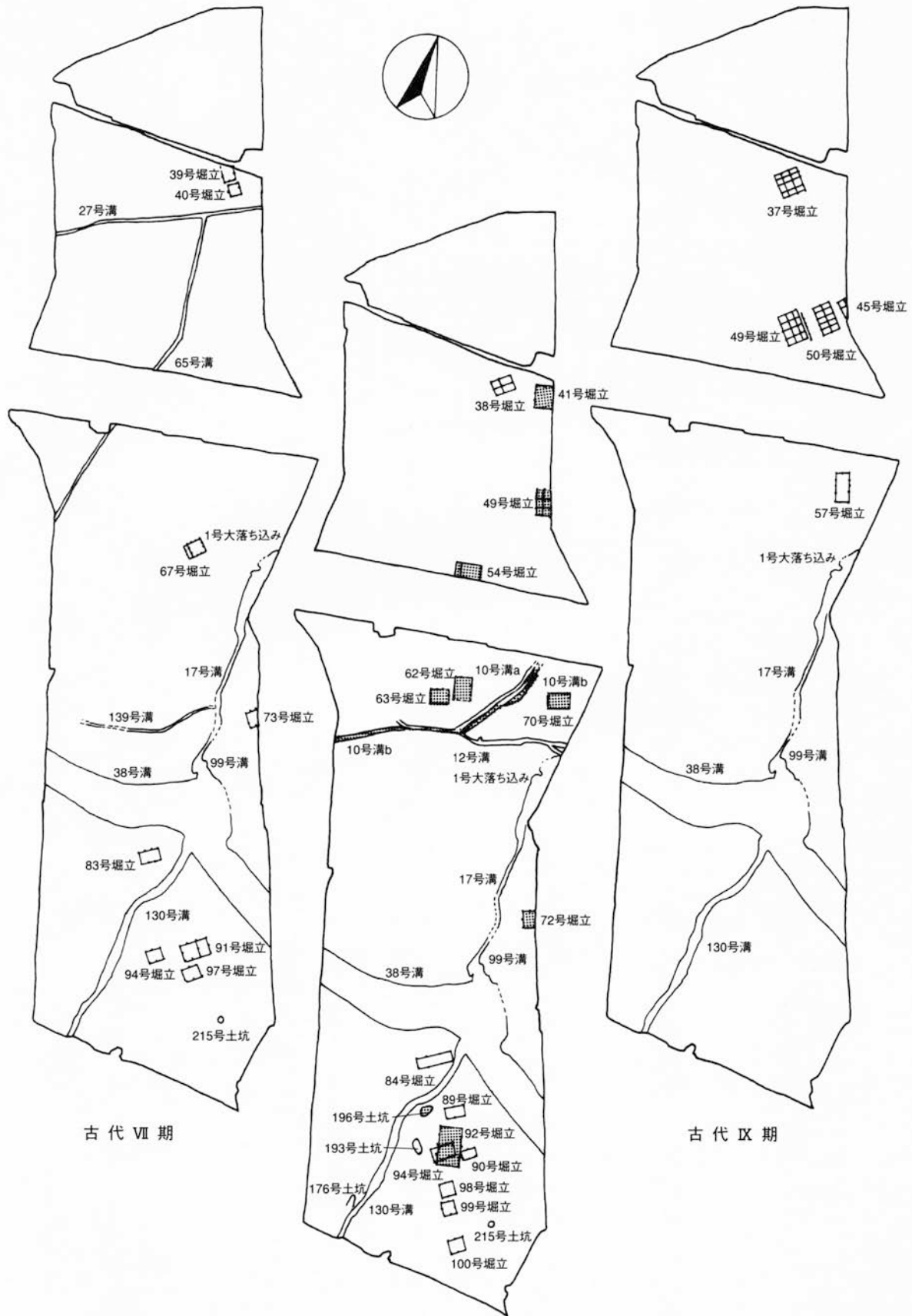
当該期前半は遺物出土量も少ない時期であり、建物が存在しなかった可能性がある。県道南側調査区北端付近での東西溝が見られなくなり、27号溝・65号溝による新しい区画が成立している。遺構は38号溝以北西側区域で、139号溝が見られる程度となる。新しい溝が敷設されていることを考慮すれば、調査区全体が耕地化したことも予想される。後半期には再び掘立柱建物が出現している。掘立柱建物跡は、主軸を50°前後東偏させた横向き配置の建物群となる。38号溝以南では西区画で、83号掘立が成立している。東区域では91号・94号・97号掘立がまとまって成立しており、井戸的な215号も掘削されている。遺跡の中心は、この区域と考えられる。38号溝以北区域では、西側区画で67号掘立が成立する。東側区画には、73号掘立が確認される。また、27号溝以北区域では、小型の39号・40号が成立し、耕地に付属する倉庫的な様相が推察される。柱穴及び建物規模から推定される主体的建物は、91号掘立である。建物分布は再び散在傾向となる。遺物の廃棄場所は、130号溝に集中している。

#### 古代Ⅷ期

27号溝・65号溝による区画は既に見られず、かつての県道南側調査区北端付近での東西溝による区画が復活している。前半期は10号溝bによるものであり、北方向に折れていることから、同時に東西も分割していたと考えられる。掘立柱建物は、主軸を10°前後西偏させた建物群となる。38号溝以南では西区画では建物は確認できない。東区域では92号掘立が単独で検出されており、特異な廃棄土坑である196号土坑が掘削されている。38号溝以北区域では、西側区画は前・後期を通じて遺構が見られない。東側区画には72号掘立が確認される。また、10号溝以北区域では、西側区画で41号・49号・54号・62号・63号掘立が成立している。各区画の中では建物数が最も多く、49号掘立のような総柱建物も見られる。東区画側には58号掘立が成立している。前述の通り、建物数で言えば10号溝b北側区域に遺跡の中心が移ったようではある。しかし、92号掘立は1×4間という柱配置でありながら、当遺跡最大の44.52㎡の面積を持ち、廃絶後柱穴への埋納行為が認められる建物である。この建物が単独で立地することや、196号土坑の様相も考慮すれば、この区域が特別な空間であった可能性も考えられよう。後半期は10号溝bから10号溝a及び12号溝へ区画溝が移行するが、基本的な区画のあり方は変わらない。しかし、10号溝a以北区域では建物数が減少し、38号掘立のみとなる。また、38号溝北側区域でも、遺構が見られなくなっている。遺跡の中心は、再び38号溝以南区域に移っており、西区画では84号掘立や176号土坑が確認される。東区域では89号・90号・93号・98号～100号掘立が検出されている。また、193号土坑が掘削されており、215号土坑は井戸ではなく廃棄土坑として利用されている。掘立柱建物は、主軸を52°～60°前後西偏させた建物群となる。小規模建物ではあるが、7棟が集中して一つの帯状ラインに並んで配置されていることが特徴である。遺物の廃棄場所は、前・後期を通じて130号溝に集中している状況は変わらない。



第239图 古代遺構変遷図2 (S=1/1,300)



古代Ⅷ前・後期（網掛けが前期）

第240図 古代遺構変遷図3 (S=1/1,300)

## 古代区期

当該期も、集落のあり方が大きく変化する時期である。県道南側調査区北端付近での区画溝が再び見られなくなり、建物分布が調査区北側東寄りの区域へと移っている。掘立柱建物は総柱建物である主軸を40°前後西偏させた37号・45号・49号掘立と、側柱建物である主軸を13°西偏させた57号掘立が成立している。他の区域では、遺構は確認されていない。集落のあり方が変容し、総柱建物が主体となっている点や、57号掘立の主軸が次期の建物に通じること等から、当該期を中世期と見なすこともできる。しかし、古代Ⅱ期以来の38号溝を中心とする区画が維持されている点や、出土量は減少するが130号溝が廃棄場として機能している点等から古代最末期と位置付けるものである。何れにせよ古代と中世の転換期であることはいえる。

## 第2項 出土遺物の様相

出土量の総量等については、既に本文中で述べているため、ここではその他の事項について補足的な説明を行いたい。

### 1. 坏B類の組成について

坏Bについては、大・中・小の法量が存在するため、その部分についての補足を行う。第38表は坏B・G蓋について分類した表である。「かえり有」の中法量には坏Aの蓋の可能性もあるが、坏A身において対応するものを見出すことが出来なかったため、坏Bとしてカウントしてある。よって、若干の変動はあろうが、大勢には影響ないと考える。「かえり有」製品では、中法量が約95%を占める結果となっている。それ以外の坏B蓋では、大法量約23%、中法量が約65%、小法量が12%を占める。

第39表は坏B身を分類したものである。大法量約20%、中法量が約68%、小法量が約12%占めており、蓋の統計数値とほぼ同数の数値となっている。また、総量比較でも両者は近似値を示している。当然の結果ともいえるが、蓋と身のセットでの搬入を示唆している。第40表は坏B蓋の端部を分類集計した表である。I類は「かえり有」のものであるが、純粋に坏Bと言えないことは前述の通りである。田嶋編年Ⅱ-Ⅱ期までの製品といえる。Ⅱ類は折り曲げ端部製品であり、a類のⅣ-2古期までの端部屈曲のないものと、b類のⅣ-2新期以降の端部屈曲のあるものに細分される。C類はⅢ期以降の小法量における折り曲げのない直線的な端部である。I類が約18%、Ⅱa類が約58%、Ⅱb類が約20%、C類が約4%となる。Ⅱa類が突出して多い結果となっており、Ⅳ-2期が多い須恵器総量比較の結果とほぼ合致する結果となっている。

### 2. 須恵器の胎土構成

須恵器の胎土は、A類が能美窯産、B類が末窯産、C類が南加賀産、C良類が南加賀産での砂粒混入の少ない胎土、D類が陶邑産に分類される。ただし、B類とD類は極少量であり、供給というよりは、人的移動に伴う等の特殊事情が該当すると考えられる。特にB類に関しては、対岸の佐々木遺跡での高松窯産・末窯産製品が瓶D類であることや、荒木田遺跡でも末窯産が瓶類中心である点は、当遺跡での様相とも合致している。内容物の流通に伴う容器として搬入された可能性が注目される。この点を考慮して、今回の分析からは除外している。また、時期を把握できた遺物が実測遺物であるため、その個体数による統計処理である点を断っておく（土師器についても同様）。

須恵器食膳具全体での胎土構成は、A類約26.5%、C類約47%、C良類26.5%となり、能美窯産約26.5%、南加賀窯産73.5%となる。貯蔵具全体では、A類約13%、C類約60%、C良類27%となり、能美窯産約13%、南加賀窯産87%となる。総計では、A類約23%、C類約50%、C良類27%となり、

第38表 坏B・G蓋組成表(大きさ判別可能破片対象)

製品	大	中	小	計
かえり有	0	41	2	43
割合	0.00%	95.35%	4.65%	100.00%
その他	67	189	36	292
割合	22.95%	64.73%	12.33%	100.00%
計	67	230	38	335
割合	20.00%	68.66%	11.34%	100.00%

第39表 坏B身組成表(大きさ判別可能破片対象)

製品	大	中	小	計
その他	64	215	37	316
割合	20.25%	68.04%	11.71%	100.00%

第40表 坏B・G蓋端部分類表(分類可能破片対象)

類型	点数	割合
I	43	18.38%
Ⅱ a	136	58.12%
Ⅱ b	46	19.66%
C	9	3.85%
計	234	100.00%

第41表 須恵器食膳具時期別・胎土構成（Ⅱ3～Ⅲ期）

Ⅱ3～Ⅲ期									
	坏B蓋	坏B身	坏A	盤A	盤B	高盤	椀皿類	計	
A	7	0	1	0	0	1	0	9	
割合	50.00%	0.00%	33.33%	0.00%	0.00%	100.00%	0.00%	27.27%	
C	5	10	0	0	0	0	0	15	
割合	35.71%	66.67%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	45.45%	
C良	2	5	2	0	0	0	0	9	
割合	14.29%	33.33%	66.67%	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%	27.27%	
計	14	15	3	0	0	1	0	33	
割合	42.42%	45.45%	9.09%	0.00%	0.00%	3.03%	0.00%		
Ⅲ～Ⅳ-2古期									
A	3	5	7	8	0	0	0	23	
割合	12.00%	26.32%	19.44%	47.06%	0.00%	0.00%	0.00%	23.23%	
C	17	12	22	5	1	1	0	58	
割合	68.00%	63.16%	61.11%	29.41%	100.00%	100.00%	0.00%	58.59%	
C良	5	2	7	4	0	0	0	18	
割合	20.00%	10.53%	19.44%	23.53%	0.00%	0.00%	0.00%	18.18%	
計	25	19	36	17	1	1	0	99	
割合	25.25%	19.19%	36.36%	17.17%	1.01%	1.01%	0.00%		
Ⅳ-2新～Ⅴ-2期									
A	1	8	11	17	1	0	0	38	
割合	7.69%	47.06%	21.15%	44.74%	12.50%	0.00%	0.00%	29.69%	
C	8	5	21	9	3	0	0	46	
割合	61.54%	29.41%	40.38%	23.68%	37.50%	0.00%	0.00%	35.94%	
C良	4	4	20	12	4	0	0	44	
割合	30.77%	23.53%	38.46%	31.58%	50.00%	0.00%	0.00%	34.38%	
計	13	17	52	38	8	0	0	128	
割合	10.16%	13.28%	40.63%	29.69%	6.25%	0.00%	0.00%		
Ⅵ-1～3期									
A	0	0	1	0	0	0	9	10	
割合	0.00%	0.00%	16.67%	0.00%	0.00%	0.00%	30.00%	23.81%	
C	1	0	4	4	0	0	14	23	
割合	100.00%	0.00%	66.67%	80.00%	0.00%	0.00%	46.67%	54.76%	
C良	0	0	1	1	0	0	7	9	
割合	0.00%	0.00%	16.67%	20.00%	0.00%	0.00%	23.33%	21.43%	
計	1	0	6	5	0	0	30	42	
割合	2.38%	0.00%	14.29%	11.90%	0.00%	0.00%	71.43%		

第42表 須恵器食膳具時期別・胎土構成（総計）

	坏B蓋	坏B身	坏A	盤A	盤B	高盤	椀皿類	計	
A	11	13	20	25	1	1	9	80	
割合	20.75%	25.49%	20.62%	41.67%	11.11%	50.00%	30.00%	26.49%	
C	31	27	47	18	4	1	14	142	
割合	58.49%	52.94%	48.45%	30.00%	44.44%	50.00%	46.67%	47.02%	
C良	11	11	30	17	4	0	7	80	
割合	20.75%	21.57%	30.93%	28.33%	44.44%	0.00%	23.33%	26.49%	
計	53	51	97	60	9	2	30	302	
割合	17.55%	16.89%	32.12%	19.87%	2.98%	0.66%	9.93%		

第43表 須恵器貯蔵具胎土構成

	つき鉢	広口鉢	小型壺・瓶	壺	瓶	横瓶	小甕	中甕	大甕	計
A	1	1	0	5	3	1	0	2	0	13
割合	100.00%	20.00%	0.00%	19.23%	9.38%	20.00%	0.00%	14.29%	0.00%	12.75%
C	0	3	3	12	23	3	1	7	9	61
割合	0.00%	60.00%	50.00%	46.15%	71.88%	60.00%	100.00%	50.00%	75.00%	59.80%
C良	0	1	3	9	6	1	0	5	3	28
割合	0.00%	20.00%	50.00%	34.62%	18.75%	20.00%	0.00%	35.71%	25.00%	27.45%
計	1	5	6	26	32	5	1	14	12	102
割合	0.98%	4.90%	5.88%	25.49%	31.37%	4.90%	0.98%	13.73%	11.76%	

(割合は、縦軸における胎土構成比を示す。ただし、最下段のみ器種別の構成比を示す。)

っていた可能性がある。坏Aに関しては、各時期とも一貫して南加賀窯産が高い比率を占めている。盤Aに関しては、Ⅲ～Ⅳ-2古期とⅣ-2新时期～Ⅴ-2期において、南加賀窯産が若干多いが、能美窯産の比率が高く、両者は拮抗した比率となっている。ただし、Ⅵ-1～3期には、南加賀窯産が全てを占めるようになり、能美窯の衰退傾向と一致している。また、Ⅵ期以降に出現する椀皿類については、約30%を能美窯産が占めており、比較的高い割合となっている。

### 3. 土師器の胎土構成

土師器の胎土構成については、産地同定まで判断することができないので、結果をそのまま述べるに止ませたい。土師器の胎土については、食膳具胎土を①～⑥類、煮炊具胎土を1～7類に分類している。本来は、両者を同一のものとして分類すべきであるが、両者の微妙な違いを個人的には判断し難く、そのまま載せる結果となってしまったことはお詫び申し上げる。推定される対応関係については、凡例を参照して頂きたい。胎土の特徴と大まかな傾向だけ見て頂きたいと考える。なお、食膳

能美窯産約23%、南加賀産77%となる。南加賀窯産が大多数を占める状況であり、能美窯産が補完的立場となっている。周辺の遺跡では、荒木田遺跡が能美窯産約40%、佐々木遺跡が約35%を占めるのに対し、低い割合となっている。当遺跡より下流に位置する松梨遺跡でも能美窯産が約35%を占めていたり、逆に能美窯産群内に位置し、一般集落ではなく山林寺院跡である八里向山B遺跡において南加賀窯産が39.2%を占めたりしている状況を考えると、遺跡ごとに異なる様相が存在することが看取される。よって、望月氏のいう「窯場と消費地との直接的な供給形態が主体的でなかったことを示す」という評価に合致する結果といえ、同流域に存在する遺跡群内でも一様ではなかったと言える。

次に食膳具における時期別及び器種別傾向についてみると、能美窯産と南加賀窯産の構成比については、どの時期においても食膳具総構成比とほぼ同様の傾向を示している。ただし、C類とC良類については、Ⅲ～Ⅳ-2古期にC良類がやや減少し、Ⅳ-2新时期～Ⅴ-2期には両者の比率が拮抗するという変動がみられる。器種別にみると、坏B類に関しては資料的制約からか、身と蓋でバランスのとれた数値となっていない。両者を合わせた数値でみれば、能美窯産が約30%を占めるⅣ-2新时期～Ⅴ-2期にやや比率を増したことで以外に全体傾向とほぼ同様である。ただし、能美窯産の多い方の比率を採用した場合は、Ⅱ-3期～Ⅲ期と、Ⅳ-2新时期～Ⅴ-2期において、能美窯産と南加賀窯産が拮抗する比率とな



第46表 土師器煮炊具時期・胎土構成

IV～V期				
	ロクロ甕	ロクロ小甕	ロクロ鍋	計
1	1	1	1	3
割合	12.50%	14.29%	25.00%	15.79%
2	1	2	1	4
割合	12.50%	28.57%	25.00%	21.05%
3	0	0	0	0
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
4	0	3	0	3
割合	0.00%	42.86%	0.00%	15.79%
5	5	1	2	8
割合	62.50%	14.29%	50.00%	42.11%
6	0	0	0	0
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
7	1	0	0	1
割合	12.50%	0%	0%	5.26%
計	8	7	4	19
VI～VII期				
1	1	1	11	13
割合	33.33%	100.00%	57.89%	56.52%
2	0	0	0	0
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
3	0	0	4	4
割合	0.00%	0.00%	21.05%	17.39%
4	0	0	3	3
割合	0.00%	0.00%	15.79%	13.04%
5	0	0	0	0
割合	0.00%	0.00%	0.00%	0.00%
6	2	0	1	3
割合	66.67%	0.00%	5.26%	13.04%
7	0	0	0	0
割合	0.00%	0%	0%	0.00%
計	3	1	19	23

第47表 土師器煮炊具時期・胎土構成(総計)

	ロクロ甕	ロクロ小甕	ロクロ鍋	計
1	12	2	2	16
割合	52.17%	25.00%	18.18%	38.10%
2	1	2	1	4
割合	4.35%	25.00%	9.09%	9.52%
3	4	0	0	4
割合	17.39%	0.00%	0.00%	9.52%
4	3	3	0	6
割合	13.04%	37.50%	0.00%	14.29%
5	2	1	5	8
割合	8.70%	12.50%	45.45%	19.05%
6	1	0	2	3
割合	4.35%	0.00%	18.18%	7.14%
7	0	0	1	1
割合	0%	0%	9.09%	2.38%
計	23	8	11	42

(割合は、縦軸における胎土構成比を示す。)

具については出越編年に、煮炊具は田嶋編年に基づいて述べるものとする。

土師器食膳具全体での胎土構成は、①類が約52.5%となり主体を占めている。次いで②類約25%、⑥類12%となり、これら3類型で9割弱を占めている。器種別に見ると、黒色食器では①類が主体で、次いで②・⑥類が多く、④・⑤類のものは存在しない。特に黒色椀Bでは、①類が約62%、②類が約15%、⑥類が19%となる。椀Bについても、①類が約60%、②類が約21%、⑥類が11%となり、②類と⑥類の量比は異なるが、ほぼ同様の傾向が見える。総合的にみても、①類は有台食器の主体を占めている。椀Aについては、①類が約43%、②類が約38%と拮抗し、他は補完的な様相であり、有台食器とは異なったあり方がみられる。小皿等については、時期が限定されるため、時期別解説のなかで述べたい。次に時期別に見ると、I期は個体数が少なく不安を残すが、①～③類のみが存在しており、①類が50%を占め主体となっている。II期に入ると、⑥類が出現する。黒色食器は①類と⑥類に偏る。椀Bは①・②・⑥類が、椀Aは①・②類が拮抗し、単独で主体となる類型は存在しない。その影響で、総合的にも①類が約44%と主ではあるが、②類も約33%存在しており主体性を減じている。III期には、新たに③・④・⑤類が出現する。当遺跡において⑤類は特異な存在であり、数点が確認されるのみである。黒色椀B、椀B、椀Aにおいて、①類が6割以上を占めるようになり、主体性が復活している。また、当該期から見られる小皿IIにおいても、①類が約66%を占め主体となっている。総合的にも①類が約62%となり主体を占め、②類が約20%、⑥類が約9%と割合を減じている。IV期に入ると、黒色食器以外での①類の主体性が失われる。椀A・B類及び、Ⅲ-3期から見られる小皿I類でも②類が約36%となり主体となる。当該期から出現する小皿(柱高)や皿A(柱高)

では、④類や⑥類が主体となり、前者では⑥類が約38%を占める。総合的には、①類が約28%と減少するのに対し、②類が約31%と主体となり、④類や⑥類も約19%ずつを占め増加している。

煮炊具についてはIV期以降の時期判定可能なロクロ製品に限定して述べる。そのため、8・9類胎土は分析から除外している。全体での胎土構成は、1類が約38%と主体を占め、他は2類約10%、3類約10%、4類約14%、5類約19%、6類約7%、7類約2%となる。食膳具に比べ突出した類型は見られない。器種別に見ると、甕は5類が約45%を、小甕は4類が約38%を占め主体となっている。両者に共通して見られない胎土は、3類である。鍋では1類が約52%と半数を占めている。7類胎土以外は、出土している。時期別に見ると、IV～V期では5類胎土が約42%と主体を占めている。3類と6類胎土は見られない。器種別では、甕と鍋がそれぞれ約63%・約50%と5類胎土に主体があり、小甕は約43%と4類に主体がある。VI～VII期では、前代に主体であった5類や2類及び7類胎土が見られなくなる。新しく3類と6類胎土が登場するが、主体は約57%を占める1類に移る。器種別では、小甕と鍋がそれぞれ約100%・約58%と1類に主体があり、甕は約67%と6類に主体があるようで、甕と鍋における主体が分離している。また、甕においては、3・4類も見られなくなる。しかし、煮炊具類は時期の特定できない体部破片が多量に存在するため、評価は確定できない。



## 第 3 節 中 世

### 第 1 項 遺構の変遷

#### 1. 時期区分の設定

中世遺構の時期別変遷を提示するが、掘立柱建物跡からの出土遺物は非常に少なく、その帰属を判断することは困難であった。中世では、建物跡の主軸方位もグルーピングの基準にはなるが、古代ほど重視できないと考えられる。ここでは遺物から導き出される年代及び、切り合い関係も考慮し、遺構配置も視野に入れて帰属時期を総合的に判断している。よって、かなり時期幅を持たせて考えるしかなく、藤田氏の編年軸に基づいてはいるが、当遺跡での時期区分を設定し述べることにしたい。当然ながら各期において、小期に細分されるものであるが、詳細な変遷過程を判断するすべもなく、古代以上に推測を含む結果となってしまった。しかし、当遺跡の中世の様相解明に少しでも資するため、あえて提示するものである。

中世Ⅰ期 中世前期集落開始期。藤田編年Ⅱ期頃が該当する。

中世Ⅱ期 遺構数が最も多い時期。藤田編年Ⅲ期頃が該当する。

中世Ⅲ期 建物跡が見出せなくなる時期。前・中・後期に細分可能である。前期が藤田編年Ⅳ－Ⅰ期前半頃、中期がⅣ－Ⅰ後半～Ⅱ期前半頃、後期がⅣ－Ⅱ期後半頃に該当する。

中世Ⅳ期 中世後期集落成立期。藤田編年Ⅴ期頃が該当する。

中世Ⅴ期 中世最末期で、遺構の様相は明確ではない。16世紀後半頃が想定される。

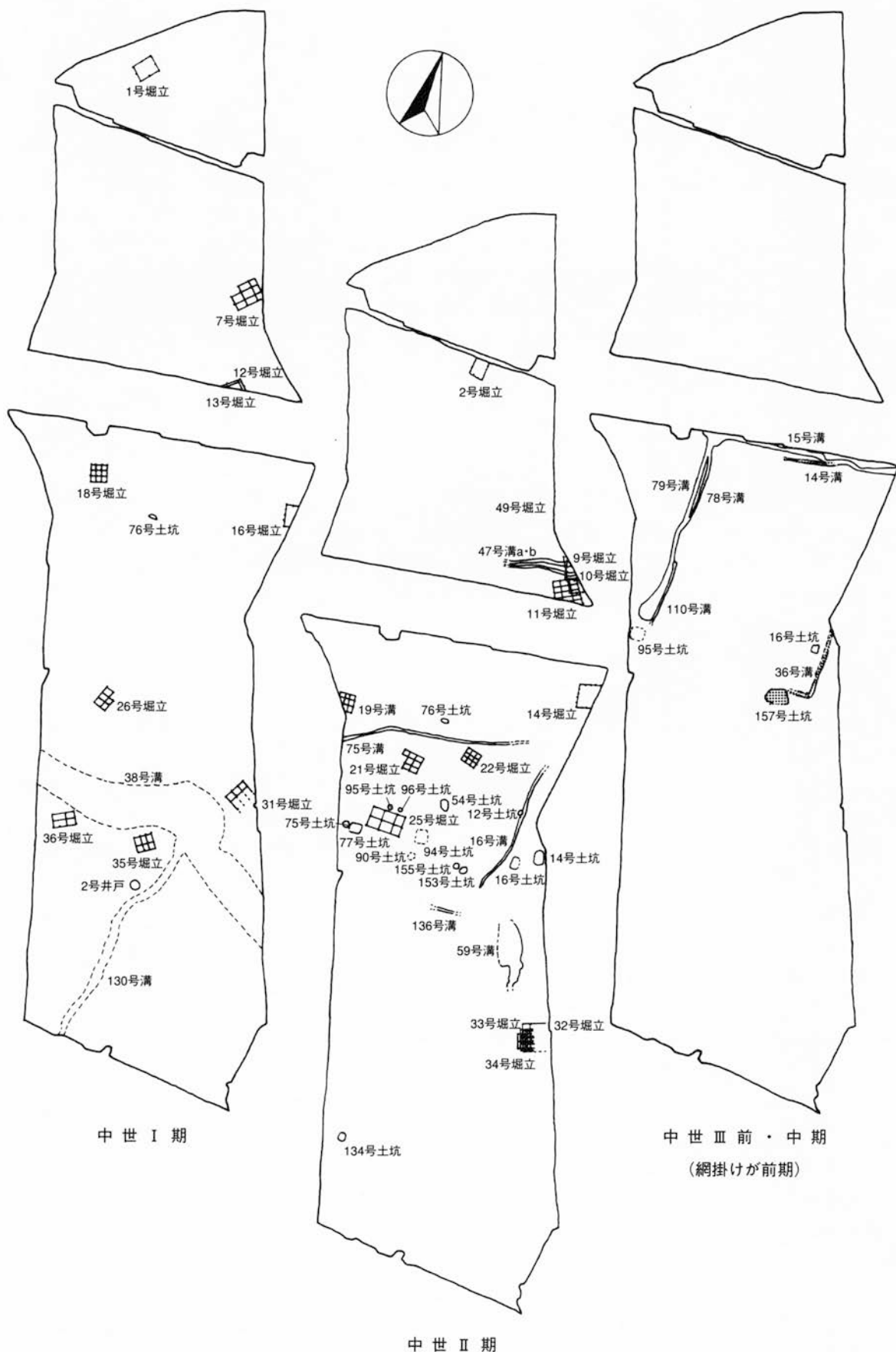
#### 2. 各時期の概要

##### 中世Ⅰ期

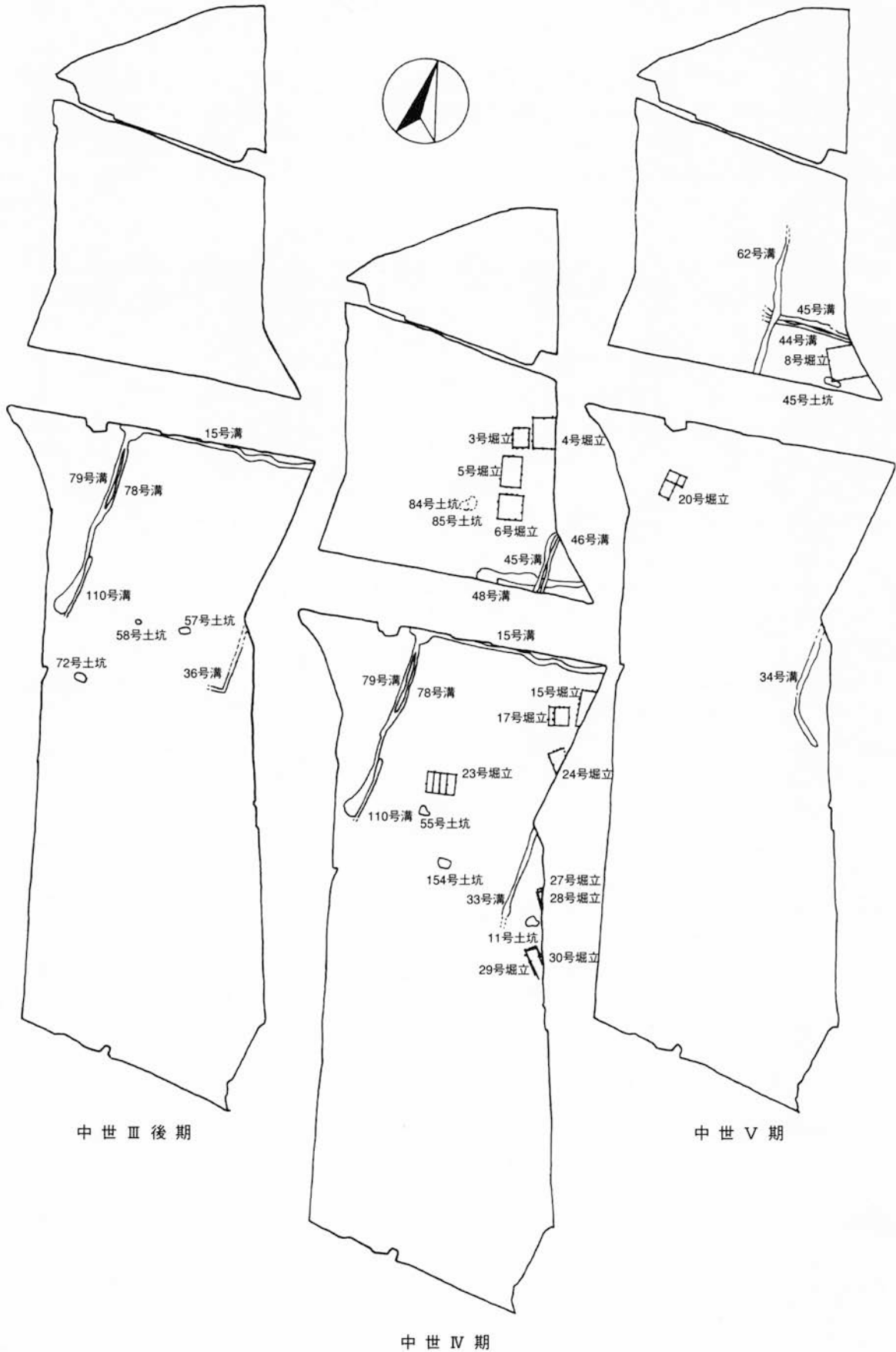
遺物では非ロクロ土師器皿が出現することが基準ではあるが、遺構においては古代Ⅱ期からの38号溝を中心とした地区割りが消滅したことをもって中世期と判断される。掘立柱建物は総柱建物が中心である。建物は主軸を40°～50°前後西偏させたA群（1号掘立・7号掘立・12号掘立・13号掘立）、10°前後西偏させたB群（16号掘立・18号掘立）、60°前後西偏させたC群（26号掘立・31号掘立）、60°前後東偏させたD群（35号掘立・36号掘立）がある。古代Ⅸ期の建物群と主軸方位が近い、A・B群が初期（Ⅱ－Ⅰ期頃？）の建物群と考えられる。D群については、近接した位置に縦板組の井戸側を持つ2号井戸があり、関連が想定できるなら、Ⅱ－Ⅱ期頃が考えられる。

##### 中世Ⅱ期

南北溝の16号溝や、東西溝の47号溝・75号溝・136号溝によって、南北38m前後を測る区画が形成された可能性がある。ただし、47号溝については、短期間で解消されたようではある。古代に17号溝が存在した地点付近での南北境界線が復活しており、それが中世期を通じて維持される点が注目される。掘立柱建物は総柱建物が中心である。建物は主軸を0°～10°前後東偏させたA群（2号掘立・19号掘立・21号掘立・22号掘立・25号掘立）、10°前後西偏させたB群（10号掘立・14号掘立）、26°～28°西偏させたC群（9号掘立・11号掘立）、16°～20°前後西偏させたD群（32号掘立～34号掘立）がある。9号～11号掘立は重複関係にあり、切り合いから10号→11号→9号という順序が確認できる。よって、B群が先行して出現した可能性があり、次いで11号掘立やA群が出現したと考えられる。やや離れた位置にあるD群については不明であり、34号→33号→32号という順序が確認されるのみである。特に南側区画が中心と考えられ、遺構数が最も多い。3棟の建物があり、井戸や土坑が多数掘削されている。井戸は77号土坑がやや先行していると考えられ、54号土坑が中心に設置されている。95・96号土坑は小型の井戸であり、前後関係が想定される。土坑については、77号土坑が竪穴状遺構と考えられる。特に25号掘立は、遺構配置から専用の井戸を持つと考えられ、中心建物であった可能性がある。区画の西側では、14号・15号土坑を確認しているのみである。やや南側に外れた箇所には池状を呈する59号溝がある。井戸である134号土坑は、集落域からかなり離れた位置にあり、時期的にも前代から存



第241図 中世遺構変遷図1 (S=1/1,300)



第242図 中世遺構変遷図2 (S=1/1,300)

在した可能性がある。井戸が単独で存在したとは考え難く、調査区西側に建物が存在した可能性が考えられる。

### 中世Ⅲ期

中世後半期への転換期と位置付ける。前代の区画及び建物群は廃絶している。前期には、東西溝である14号溝と南北溝である36号溝によって、南北50m程度を測る区画の基礎が形成される。当該期は、他に157号土坑がある。中期には、前代からの36号溝と14号溝から移行した15号溝に加え、新たな南北溝である78・79・110号溝により、南北約50m、東西約38m、面積約1,900㎡の区画が成立したようである。当該期は、他に16号土坑がある。後期は、基本的には中期の区画が維持された状況である。新たに58号・72号土坑が掘削される。さらに、井戸である57号土坑も掘削されている。ただし、井戸に伴う建物は検出されていない。井戸が存在した以上、建物が存在していた可能性が高いが、井戸の時期が下る可能性も若干残されている。

### 中世Ⅳ期

中世後期集落の出現期で、36号溝は33号溝へ移行するが、前代からの区画は維持されている。さらに、前代に遺構が存在しなかった区画北側及び東側への展開が確認できる。特に北側では、45・46・48号溝による区画設定行為も行われたようである。掘立柱建物は側柱建物が中心である。建物は主軸を9°～19°西偏させたA群（3号掘立・4号掘立・5号掘立・6号掘立・15号掘立・17号掘立・23号掘立）、33°～44°西偏させたB群（24号掘立・27号～30号掘立）がある。両群の主軸の差異は時期差を反映したものかどうかは判断できない。区画内には建物4棟と、井戸である55号土坑や竪穴状遺構である154号土坑で構成されている。区画北側には、建物4棟がまとまって所在している。区画東側には建物2棟があり、それぞれ一度の立替が行われている。近接して井戸である11号土坑が掘削されており、比較的多くの遺物廃棄が確認される。

### 中世Ⅴ期

前代の区画及び集落廃絶はしたようである。ただし、33号溝地点のみは34号溝への移行が確認されており、この地点の境界は維持された可能性がある。県道北側調査区では新たな区画が設定されたような形跡もみえるが、34号溝以外の遺構については、切り合い関係からこの時期に設定されたものであり、詳細は不明である。しかし、調査区内から当該期以降の16世紀末期から18世紀にかけての遺物が継続して出土していることから考えると、集落の消滅というよりは、当該期に現集落域に移動した可能性が高いと考えられる。

## 第2項 出土遺物の様相

千代オオキダ遺跡の中世出土遺物総数は、3,764点を数える。調査面積11,000㎡にしては少ない印象を受けるかもしれない。ただし、これは土師器皿の使用頻度低いことによる影響であり、他の器種を見れば決して少ないとはいえない状況である。土師器皿については、46.31%と周辺の中世遺跡と比較しても少ない割合である。加賀地域では、中世後期に遺跡の中心時期があるほど、土師器皿の使用頻度が低い傾向にある。しかし、当遺跡の場合、中世前期・後期判別可能資料を比較してもさほど大差はなく、中心時期の差異というよりは遺跡の性格が反映した結果と考えられる。

次に日常容器（甕・壺・播鉢）を見ると、31.93%と周辺遺跡と比較しても高い割合を示し、数量的にも佐々木アサバタケ遺跡に次ぐ量があり、使用頻度が高いことがいえる。総数では加賀焼の割合が約53%と高く、次いで珠洲焼が約24%、越前焼が約23%とほぼ同率で存在する。中世前期において加賀焼が主体的に消費されたことは間違いないが、補完的立場は珠洲焼が担っていたと考えられる。加賀窯廃窯後の中世後期において、越前焼の消費が増加したことによって総合的に珠洲と並ぶ比率となったと考えられ、珠洲焼は15世紀前半代までは定量消費されていたことが推察される。加賀焼と越前焼は貯蔵具が多く、前者は鉢の約4倍、後者は約2倍の量であり、貯蔵具類（特に甕類）の消費が主体であったことがいえる。逆に珠洲焼においては、鉢が多く貯蔵具に匹敵する量出土している。特

第48表 器種別破片数集計表

製品	点数	割合	製品	点数	割合			
加賀	甕	295	7.84%	瀬戸・美濃 (大窯・灰釉)	端反皿	4	0.11%	
	壺	22	0.58%		丸皿	4	0.11%	
	貯蔵具	53	1.41%		卸皿	1	0.03%	
	鉢	94	2.50%		反皿	1	0.03%	
	不明	165	4.38%		内禿皿	1	0.03%	
	計	629	16.71%		輪禿皿	1	0.03%	
越前	甕	101	2.68%		折縁皿	1	0.03%	
	壺	14	2.50%		皿類	4	0.11%	
	片口壺	1	0.03%		筒型碗	2	0.05%	
	三筋壺?	1	0.03%		丸碗	2	0.05%	
	水注	1	0.03%		碗類	1	0.03%	
	貯蔵具	40	1.06%		計	22	0.58%	
	鉢	79	2.10%	瀬戸・美濃 (大窯・鉄釉)	天目茶碗	16	0.43%	
	不明	36	0.96%		碗類	1	0.03%	
	計	273	7.25%		水指か建水	1	0.03%	
	甕	99	2.63%		壺類?	1	0.03%	
	壺	41	1.09%		不明	2	0.05%	
	珠洲	貯蔵具	1	0.03%		計	21	0.56%
		鉢	135	3.59%	志野	皿	1	0.03%
不明		7	0.19%		計	1	0.03%	
計		283	7.52%	中世陶器 (産地不明)	甕	1	0.03%	
古瀬戸 (灰釉)		平碗	22		0.58%	鉢	6	0.16%
		浅碗	2		0.05%	貯蔵具	1	0.03%
		碗類	17		0.45%	不明	9	0.24%
		卸皿	13		0.35%	計	17	0.45%
		小皿	5	0.13%	土師器	ロクロ碗A	1	0.03%
		直縁大皿	2	0.05%		ロクロ小皿	1	0.03%
	折縁深皿	4	0.11%	大皿(中世前期)		120	3.19%	
	折縁小皿	2	0.05%	小皿(中世前期)		98	2.60%	
	大皿	3	0.08%	大皿(中世後期)		138	3.67%	
	端反皿	2	0.05%	小皿(中世後期)		134	3.56%	
	卸目付大皿	2	0.05%	大皿		235	6.24%	
	腰折皿	1	0.03%	小皿		103	2.74%	
	皿類	5	0.13%	不明		913	24.26%	
	水注	3	0.08%	計		1743	46.31%	
	水注Ⅱ	2	0.05%	瓦質土器	火鉢	6	0.16%	
	小鉢	3	0.08%		播鉢	4	0.11%	
	播鉢形小鉢	1	0.03%		不明	4	0.11%	
	播鉢	1	0.03%		計	14	0.37%	
	筒型香炉	3	0.08%	青磁	小碗	3	0.08%	
袴腰形香炉	1	0.03%	碗		110	2.92%		
香炉類	1	0.03%	皿		9	0.24%		
瓶子Ⅱ	1	0.03%	盤		2	0.05%		
瓶子類	7	0.19%	香炉		2	0.05%		
花瓶	4	0.11%	合子		1	0.03%		
合子	1	0.03%	壺?		1	0.03%		
小壺	1	0.03%	小碗か皿		1	0.03%		
入子	1	0.03%	皿か合子		1	0.03%		
大皿か鉢	1	0.03%	不明		76	2.02%		
瓶子か水注	4	0.11%	計	206	5.47%			
碗か小皿	1	0.03%	白磁	小碗	12	0.32%		
不明	28	0.74%		碗	120	3.19%		
計	144	3.83%		皿	64	1.70%		
古瀬戸 (鉄釉)	天目茶碗	63		1.67%	角坏	2	0.05%	
	豆天目	1		0.03%	角坏か皿	2	0.05%	
	平碗	1		0.03%	端反皿	3	0.08%	
	丸碗	1	0.03%	小壺	1	0.03%		
	筒型碗	1	0.03%	不明	71	1.89%		
	碗類	1	0.03%	計	275	7.31%		
	播鉢	1	0.03%	染付	碗	5	0.13%	
	盤	1	0.03%		端反皿	11	0.29%	
	德利	1	0.03%		碁笥底皿	2	0.05%	
	袴腰形香炉	2	0.05%	計	18	0.48%		
	壺類	3	0.08%	朝鮮系陶磁器	青磁碗	7	0.19%	
	小壺	2	0.05%		濠灰釉碗	4	0.11%	
	茶入	2	0.05%	計	11	0.29%		
	仏食向具	1	0.03%					
	合子(蓋)	1	0.03%					
	水注	2	0.05%					
	瓶子	4	0.11%					
	仏器	1	0.03%					
	花瓶	1	0.03%					
	広口壺か大皿	1	0.03%					
	水注か花瓶	1	0.03%					
	小壺か德利	2	0.05%					
	水注か瓶子	1	0.03%					
	不明	12	0.32%					
	計	107	2.84%	統計			3764	100.00%

第49表 日常容器の産地別割合

産地	製品	壺	壺	貯蔵具類	貯蔵具計	鉢	不明	総数
加賀	破片数	295	22	53	370	94	165	629
	割合	59.60%	27.50%	56.38%	55.31%	30.52%	79.33%	53.08%
越前	破片数	101	17	40	158	79	36	273
	割合	20.40%	21.25%	42.55%	23.62%	25.65%	17.31%	23.04%
珠洲	破片数	99	41	1	141	135	7	283
	割合	20.00%	51.25%	1.06%	21.08%	43.83%	3.37%	23.88%
合計		495	80	94	669	308	208	1185

(割合は、縦軸における産地別の構成比を示す。)

第50表 器種別組成表

遺跡名	製品	土師器	日常容器	貿易陶磁器	瀬戸・美濃陶器	瓦質土器	計
千代オオキダ遺跡	破片数	1743	1202	509	296	14	3764
	割合	46.31%	31.93%	13.52%	7.86%	0.37%	100.00%
長田南遺跡	破片数	2277	422	96	59	20	2874
	割合	79.23%	14.68%	3.34%	2.05%	0.70%	100.00%
佐々木アサバタケ遺跡	破片数	9160	1898	274	191	26	11549
	割合	79.31%	16.43%	2.37%	1.65%	0.23%	100.00%
高堂遺跡	破片数	63	25	13	4	5	110
	割合	57.27%	22.73%	11.82%	3.64%	4.55%	100.00%
幸町遺跡	破片数	2344	631	232	154	27	3388
	割合	69.19%	18.62%	6.85%	4.55%	0.80%	100.00%
小川新遺跡遺跡	破片数	286	416	99	30	3	834
	割合	34.29%	49.88%	11.87%	3.60%	0.36%	100.00%

に、口縁帯に波状文が施されるV期の製品が多く見られ、当該期に消費量が増加したものと考えられる。一方で、VI期に下る製品は少ない状況にあり、15世紀後半以降は越前焼の製品に主体が移ったことが考えられる。次に器種別消費量を比較すると、壺では加賀焼が約60%と主体を占めており、越前焼・珠洲焼とも約20%であり補完的立場となる。壺については、珠洲焼が約51%と主体を占めており、佐々木アサバタケ遺跡の比率に類似している。ただし、他の製品に比べ珠洲焼壺の認識のし易さが数値に影響を及ぼした可能性も考えられる。貯蔵具総体として見れば、加賀焼が約55%と主体を占めている。鉢は、珠洲が約44%を占め主体となっているが、加賀焼も約30%を占めており、中世前期においては加賀焼が主体的に消費されたことが推察される。日常容器全体の比率については、越前焼鉢の消費率の高い点を除けば、周辺遺跡では佐々木アサバタケ遺跡が最も類似した数値を示している。

当遺跡において貿易陶磁器と古瀬戸、瀬戸・美濃焼の比率が比較的高いが、これは中世期を通じて遺跡が存続していることが影響しているものと考えられる。青磁において、碗の比率が高いことは通例である。また、白磁において碗や皿の比率が高いことも、古代末～中世前期と中世後期の遺跡が存在することを考えれば通例であろう。古瀬戸では、特に後期様式の消費量が多く、器種も豊富である。特に、天目茶碗の消費量の多さが朝鮮系陶磁器碗の出土と伴に注目される。瓦質土器は少なく、加賀国における共通した特徴となっている。暖房用具である火鉢の他に、播鉢が4点確認されていることが注目される。

組成表を比較すると、遺物の総出土量には差があるが、高堂遺跡と小川新遺跡の中間的な比率となっている。高堂遺跡は14世紀末～16世紀前半頃の集落跡と考えられるが、調査地点が溝と土坑の分布を中心とした箇所であり、遺跡の性格までは判断できない。小川新遺跡は白山市小川町に所在している遺跡で、主として12世紀～14世紀前半と15世紀中葉～16世紀後半の二時期の遺物が出土しており、後者に主体がある港湾集落遺跡である。当遺跡とは、加賀窯の消費に大差があるが、主体となる時期及び地理的要因によるものと考えられる。当遺跡においては、盛期は13世紀後半～14世紀中葉頃と15世紀後半～16世紀前半頃ということになる。「千代」の語句は中世史料には見出せず、証拠となるような遺物も存在しないが、立地的には能美庄関連の集落と考えられよう。時代背景としては、前者は能美庄内に石清水八幡宮が領有権を持ち始める時期であり、後者は一向一揆の時代であるが、それ以上の解釈に踏込むことは現時点ではできない。

さて、これらの遺物の多くは梯川の水運により当地に運び込まれたと推測されるが、入手先として14世紀前半頃の資料に見える「軽海郷市」の存在を候補の一つとして挙げておきたい。

[引用・参考文献は309頁参照]



遺跡全景



遺跡俯瞰（西より）



遺跡俯瞰（東より）





遺跡俯瞰（北より）



遺跡俯瞰（南より）



平成11年度調査区俯瞰



平成12年度調査区俯瞰



1号墳（西より）



2号墳（北より）



2号墳 周溝内遺物出土状況



3号墳 (東より)



3号墳 周溝内遺物出土状況



4号墳 (西より)



6号墳（北より）



92号堀立 P-5遺物出土状況



1号井戸 掘り下げ状況



1号井戸 曲物出土状況



1号井戸 底面遺物出土状況



1号井戸 木製容器出土状況





1号井戸 木製櫛出土状況



1号井戸 井戸側 (3・4段目、東より)



1号井戸 井戸側（南西より）



1号井戸 組合せ部（北西隅部）



2号井戸 全景 (西より)



2号井戸 井戸側 (西より)



196号土坑 遺物出土状況



196号土坑 土層断面



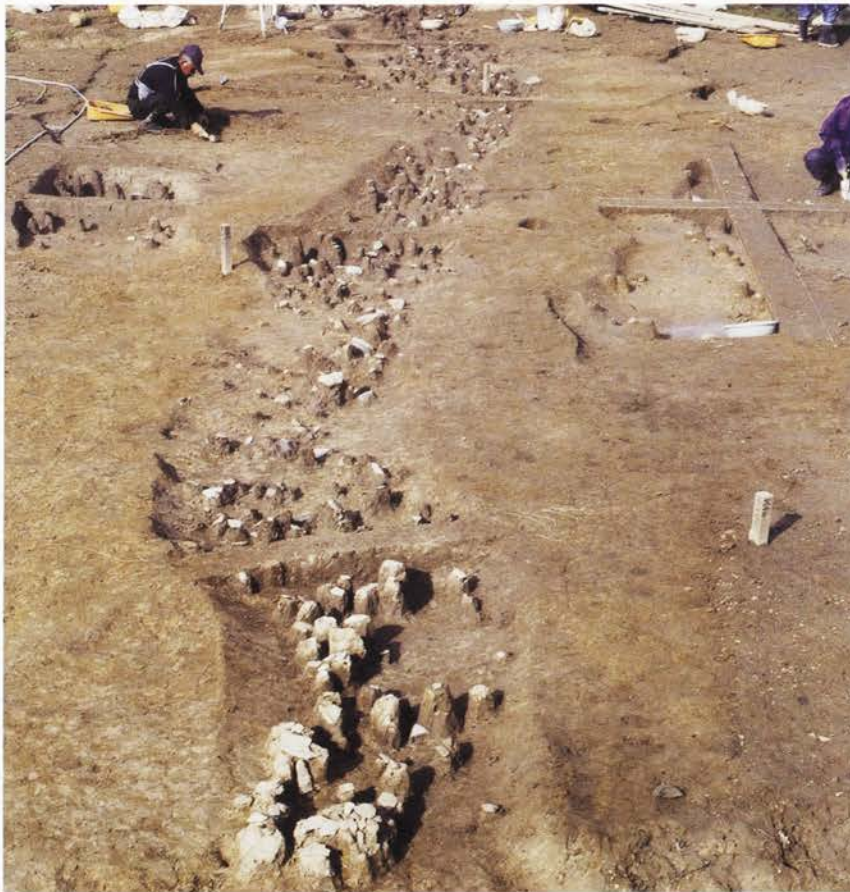
38号溝 遺物出土状況



38号溝 遺物出土状況 (近影)



38号溝(東より)



130号溝 遺物出土状況(南より)



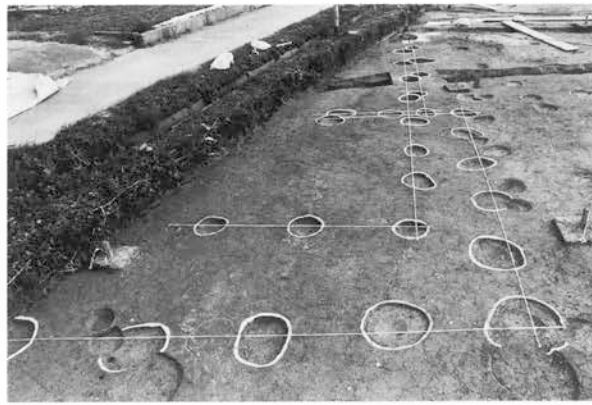
表土除去



遺構精査



56号堀立



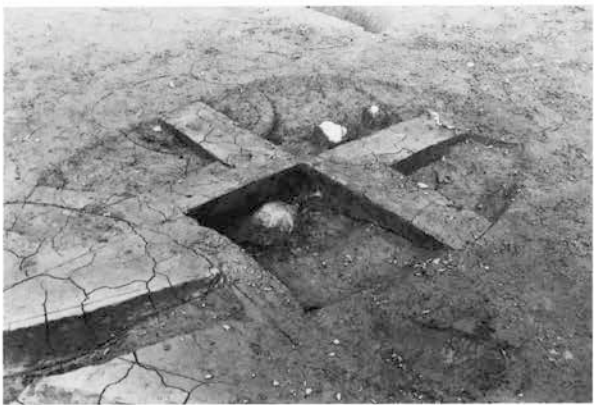
14~16号堀立



1号大落ち込み・17号溝



11号土坑



6号土坑



27号溝 土層断面

〔平成11年度調査写真〕



表土除去



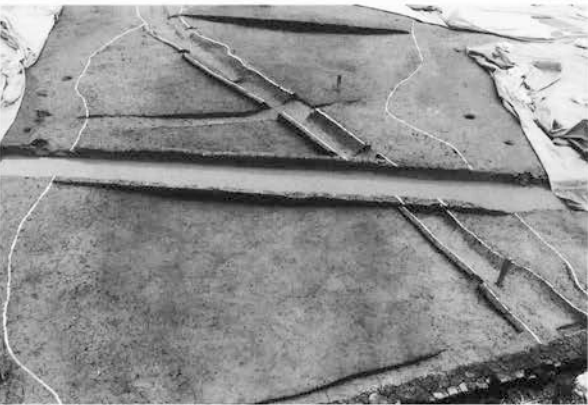
調査の様子



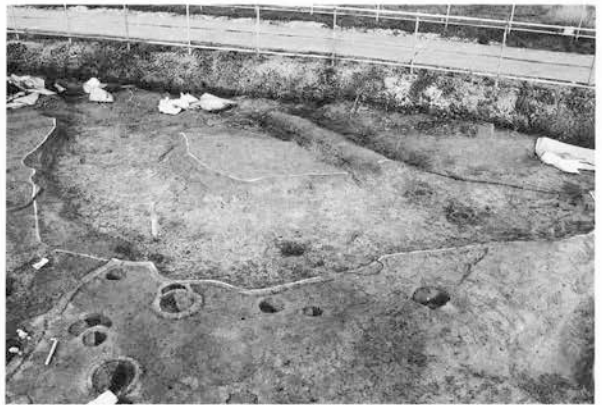
250号土坑 遺物出土状況



156号溝 遺物出土状況



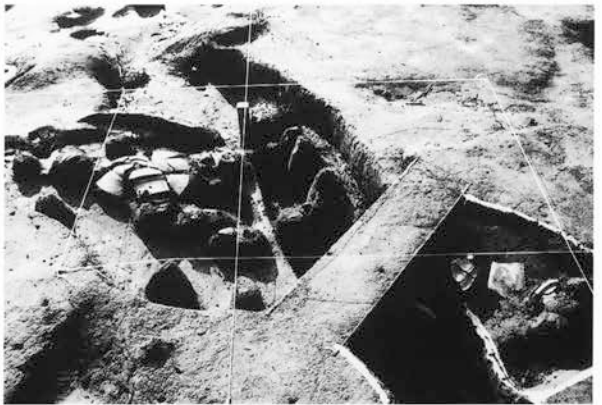
28号溝



6号墳 (西より)



197号土坑 遺物出土状況



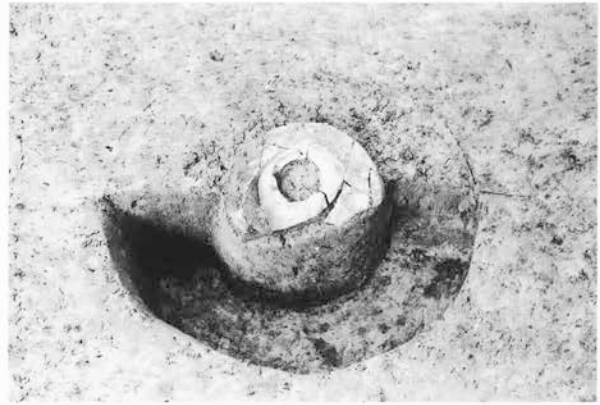
157号溝 遺物出土状況

[平成12年度調査写真、以下図版27まで]





P-4425 遺物出土状況



P-12701 遺物出土状況



80号堀立



81号堀立



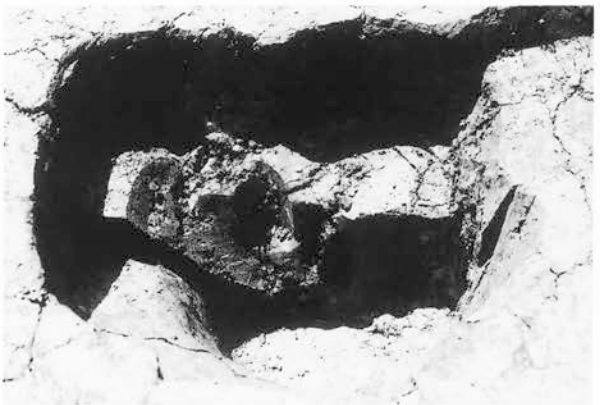
82号堀立



85号堀立



86号堀立



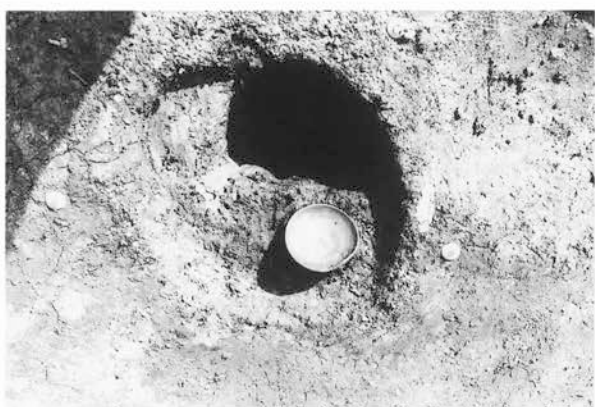
71号堀立 P-1柱根



71号堀立



96号堀立 P-3



96号堀立 P-4



96号堀立



64・65号堀立



69号堀立 P-12



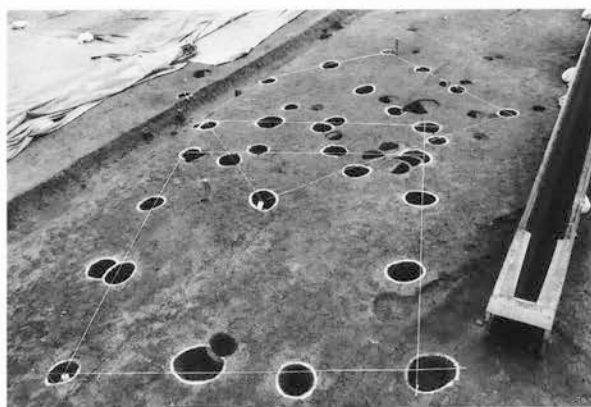
68・69号堀立



95号堀立



101号堀立



22・67号堀立



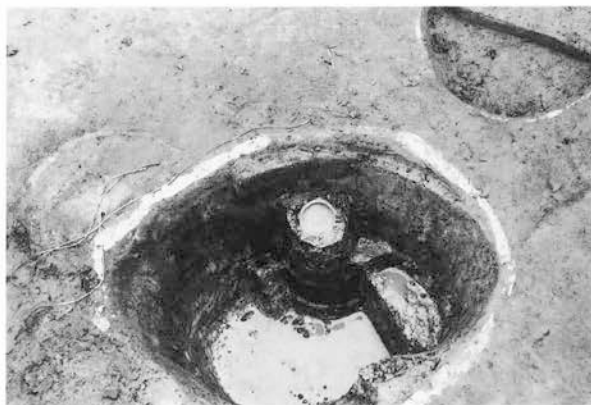
83号堀立



92号堀立 P-4上層



92号堀立 P-4下層



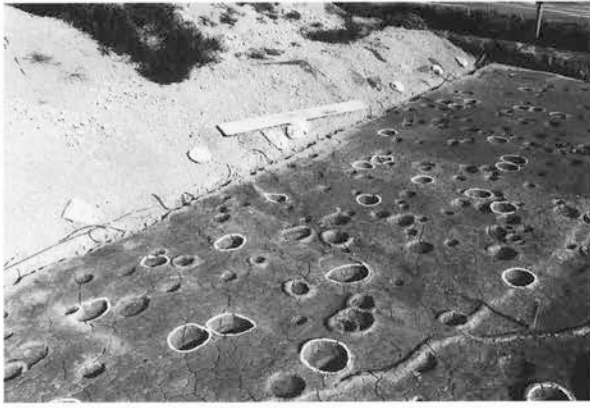
92号堀立 P-10



98号堀立



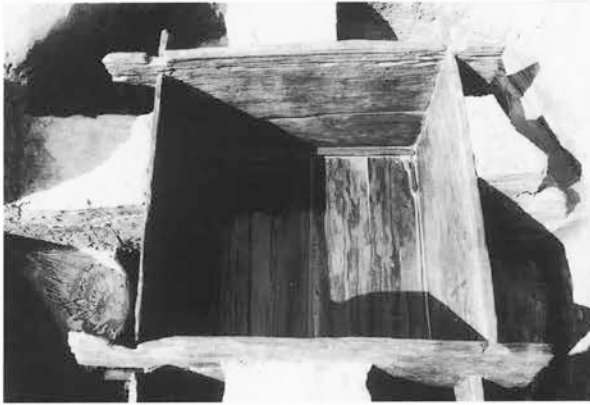
100号堀立



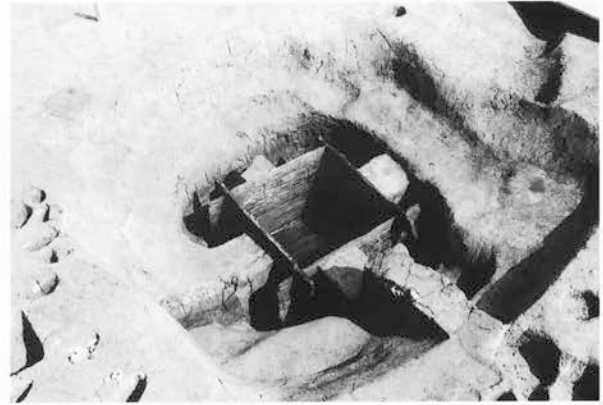
49号掘立



1号井戸 調査風景



1号井戸



1号井戸



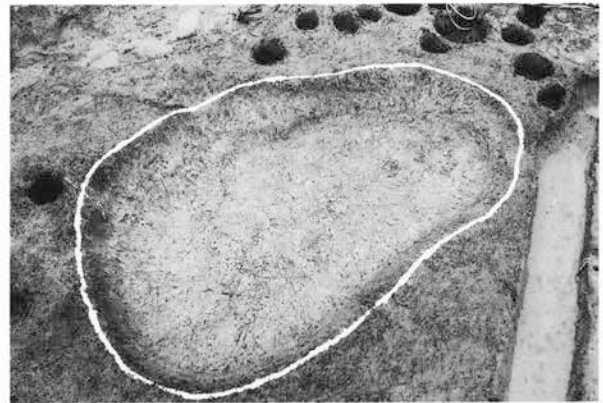
1号井戸 井戸側取り上げ後



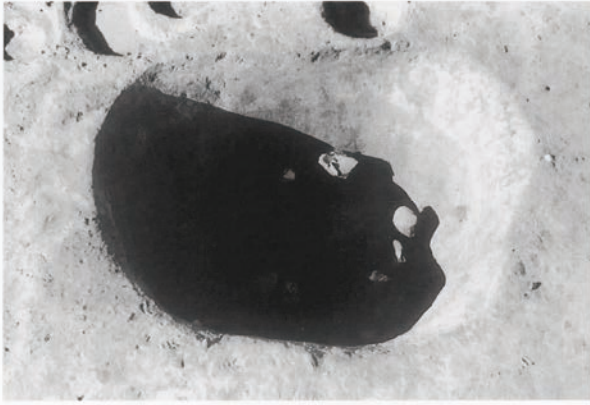
158号土坑 遺物出土状況



196号土坑 遺物出土状況



196号土坑



215号土坑 遺物出土状況



215号土坑 曲物出土状況



215号土坑



32号溝



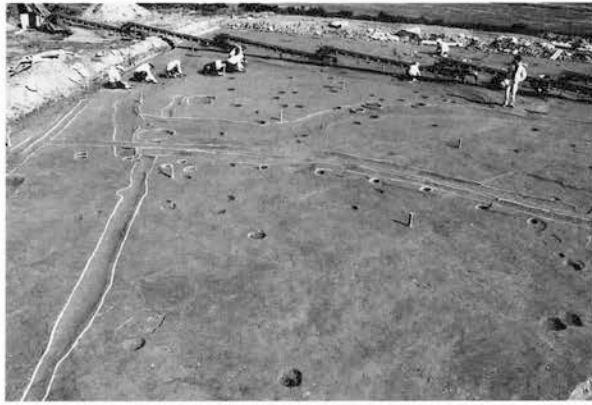
32号溝 (東より)



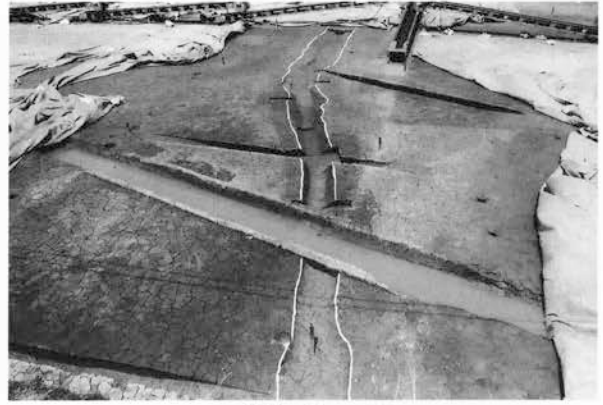
13号溝 土層断面



99号溝



調査区北端部分調査風景



27号溝 (東より)



38号溝 遺物出土状況



38号溝 (西より)



85号溝



130号溝 遺物出土状況



130号溝



130号溝



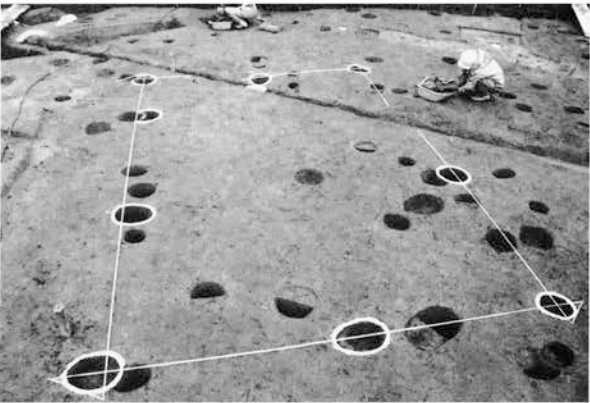
152号溝 遺物出土状況図



26号掘立



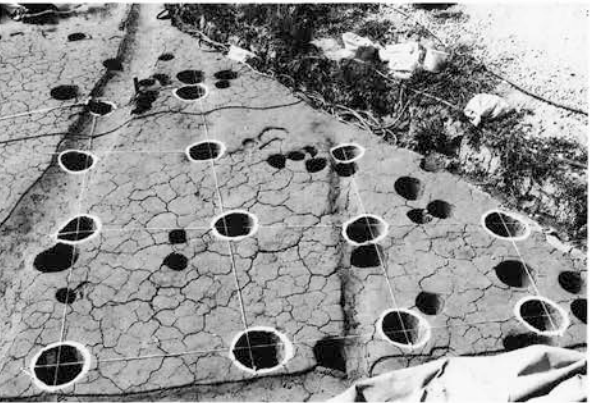
35号掘立



36号掘立



18号掘立



19号掘立



2号井戸 井戸側取り上げ後



54号土坑（井戸）



75号土坑（井戸）遺物出土状況



75号土坑（井戸）



95号土坑（井戸）遺物出土状況（1）



95号土坑（井戸）遺物出土状況（2）



95号土坑（井戸）



96号土坑（井戸）



134号土坑（井戸）





90号土坑



77号土坑



57号土坑（井戸）曲物出土状況



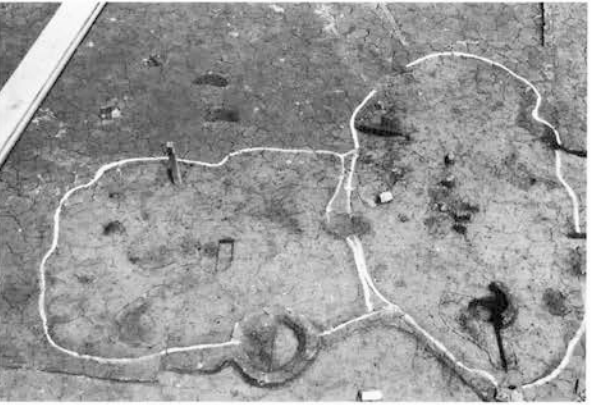
57号土坑（井戸）遺物出土状況



57号土坑（井戸）



55号土坑（井戸）



84・85号土坑



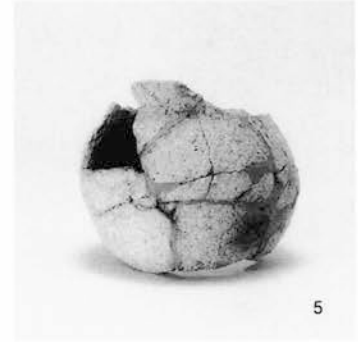
84・85号土坑 Pit完掘



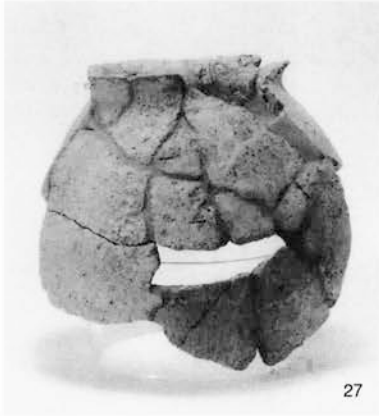
縄文土器



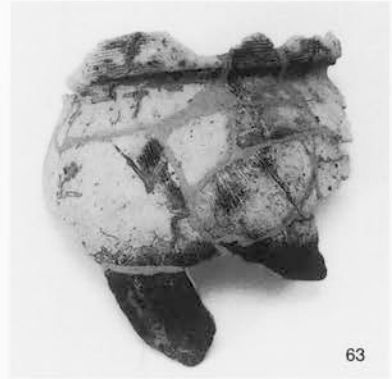
弥生時代前期の土器



弥生時代後期～古墳時代前期の土器



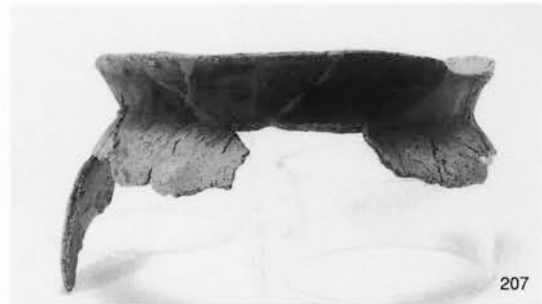
弥生時代後期～古墳時代前期の土器



弥生時代後期の土器



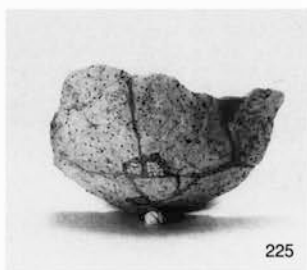
弥生時代後期の土器



弥生時代後期～古墳時代前期の土器



217



225



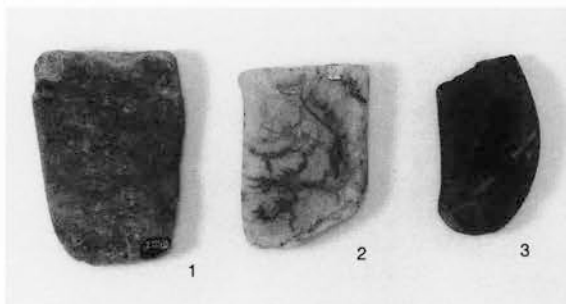
234



244



253



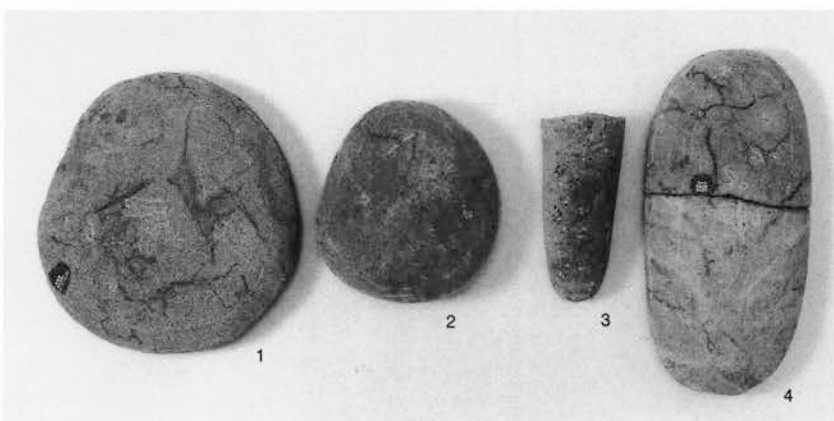
1

2

3

弥生時代後期～古墳時代前期の土器

砥石



1

2

3

4

礫石器



1

大型蛤刃石斧



1

2

石鋤



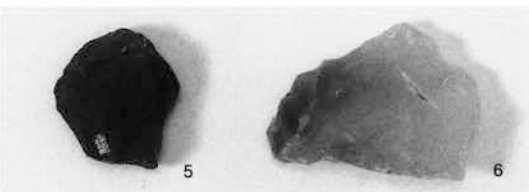
1

2

3

4

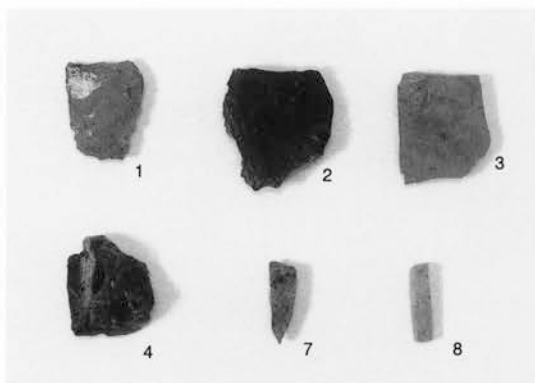
打製石鋤



5

6

管玉製作資料



1

2

3

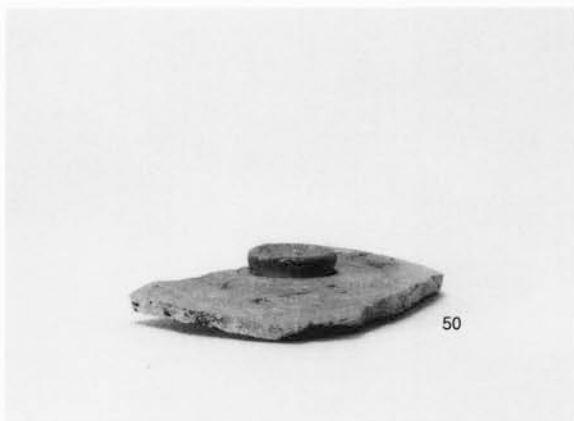
4

7

8

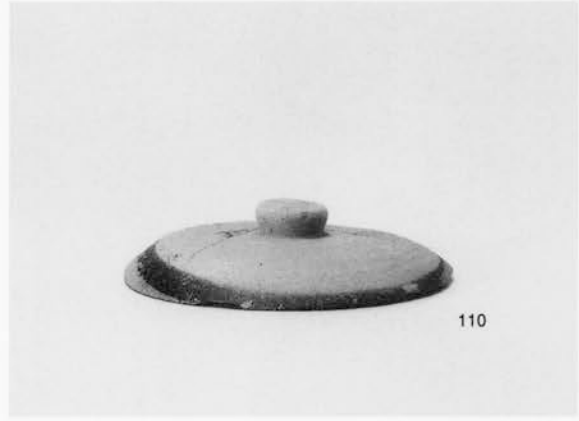
弥生時代の石製遺物

管玉製作資料

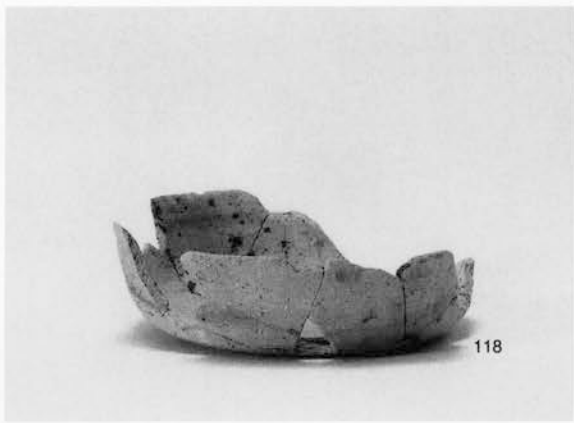
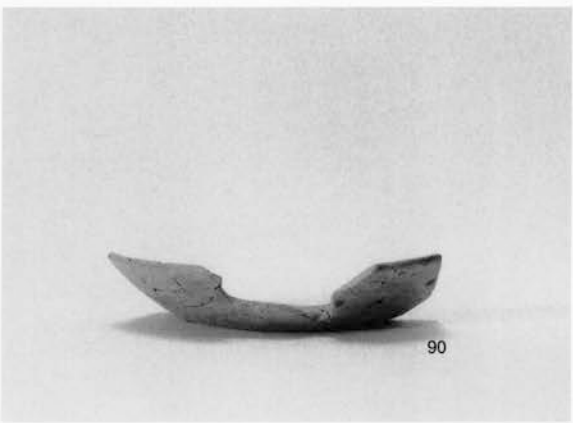
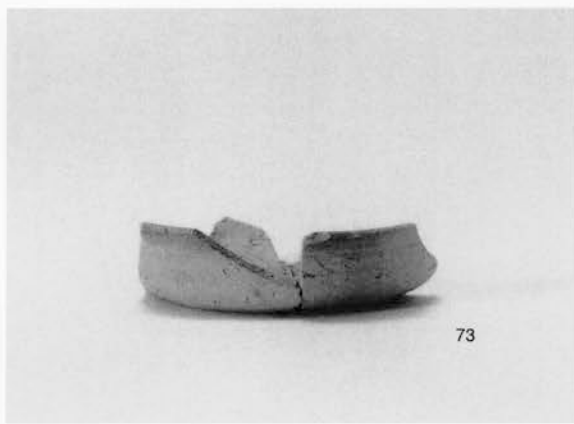


古代の土器（須恵器）





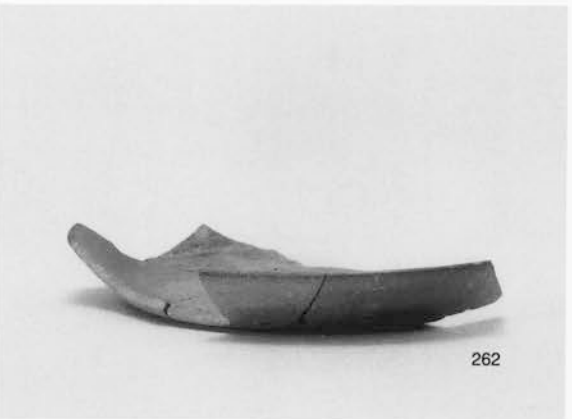
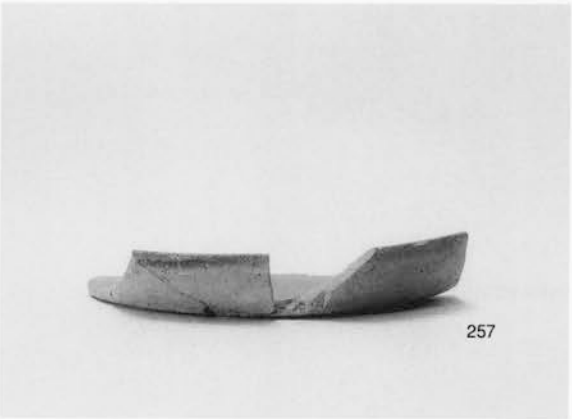
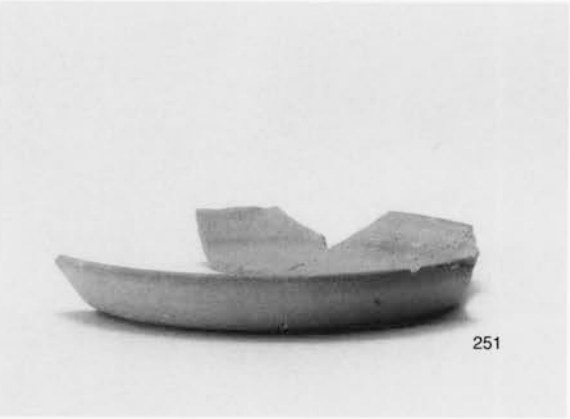
古代の土器（須恵器）



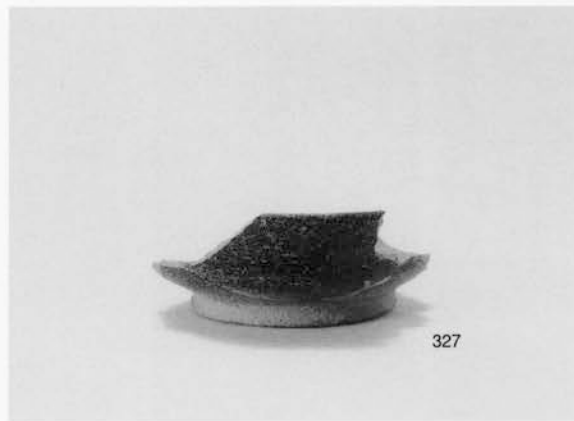
古代の土器（須恵器）



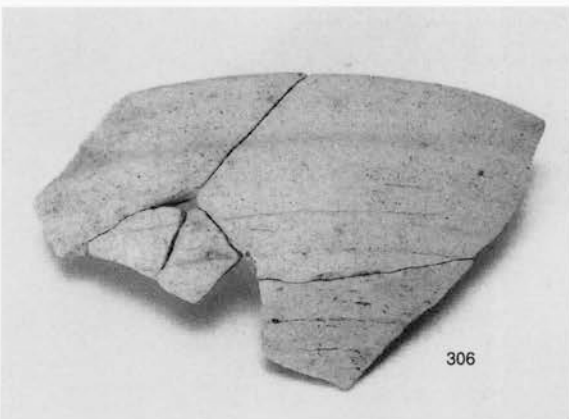
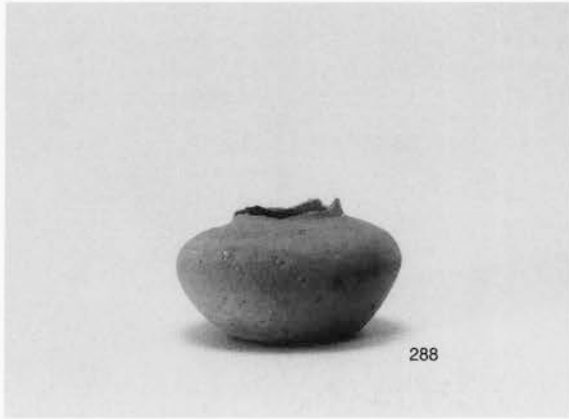
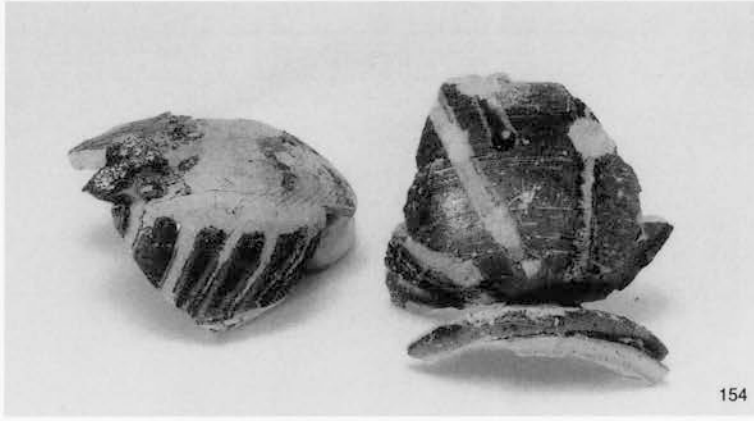
古代の土器（須恵器）



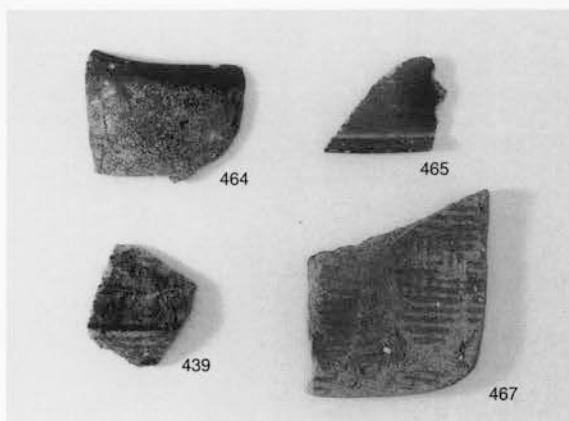
古代の土器（須恵器）



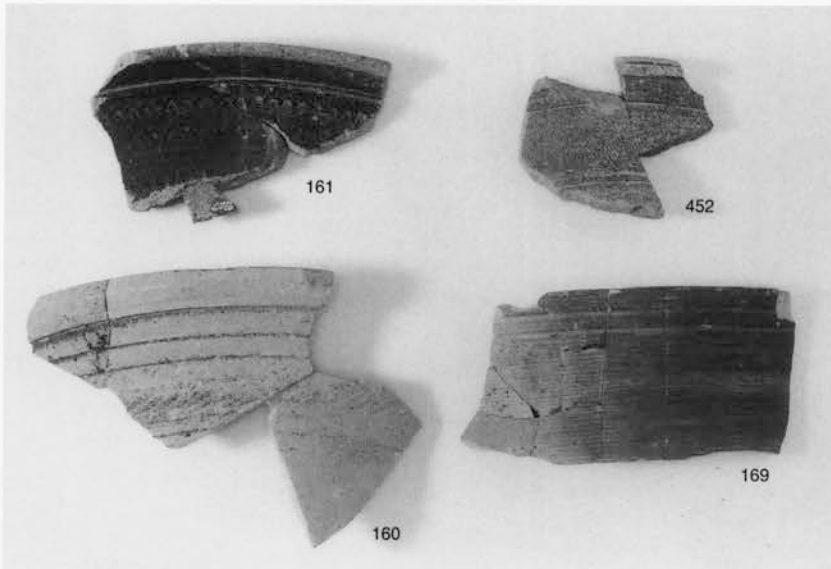
古代の土器（須恵器）



古代の土器（須恵器）



古代の土器（須恵器）

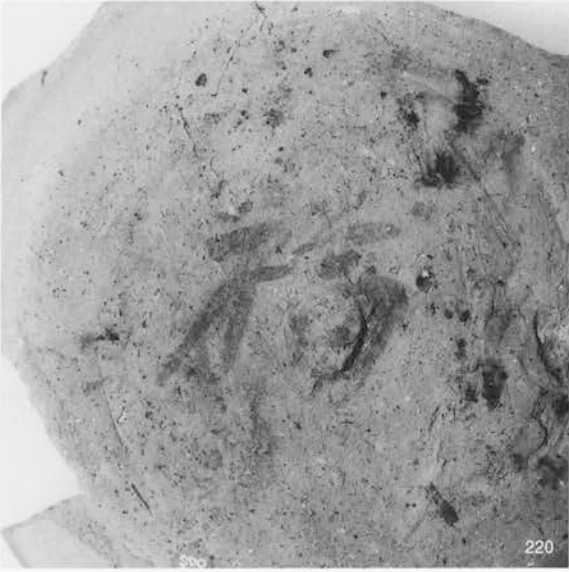
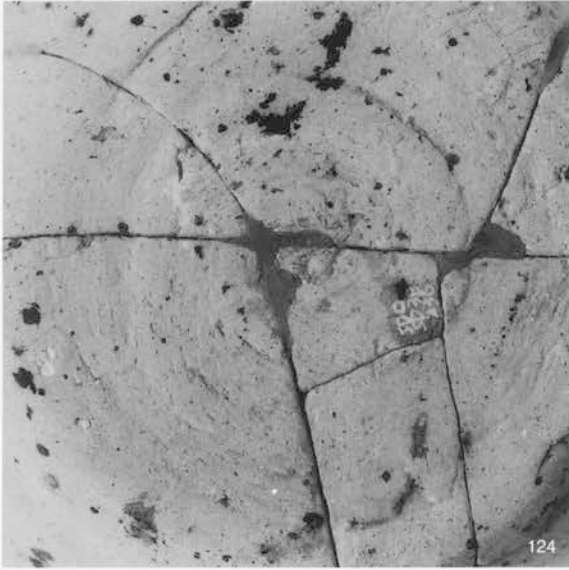


古代の土器（須恵器）



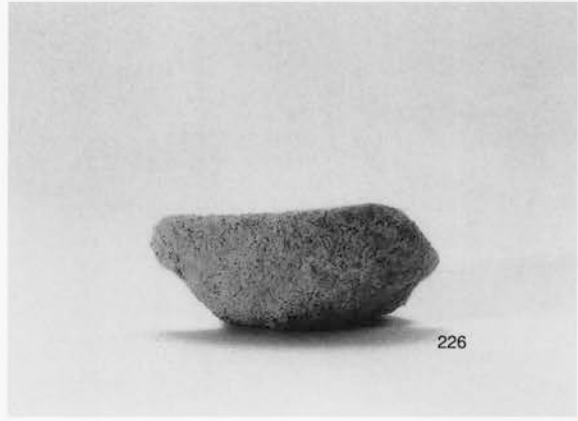
墨書土器





墨書土器





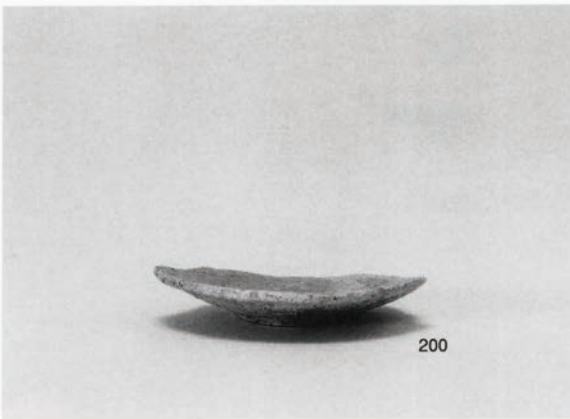
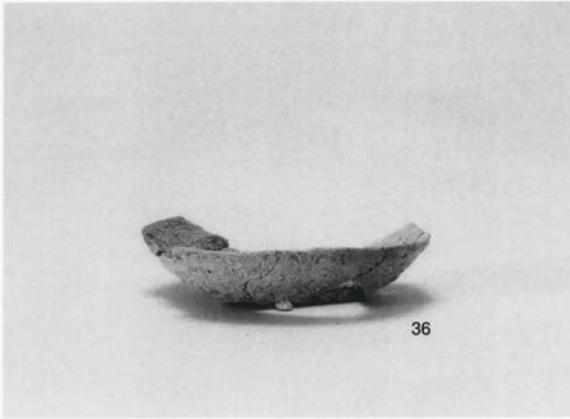
古代の土器（土師器）



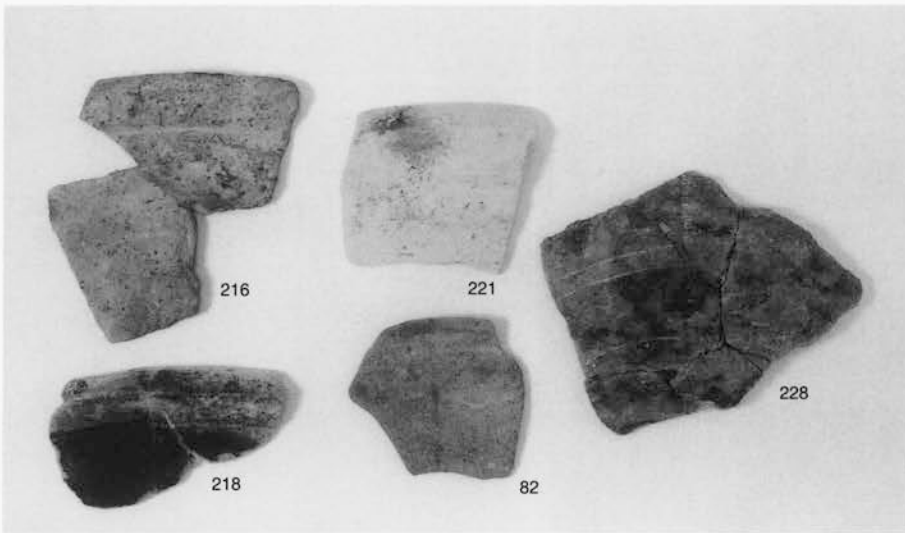
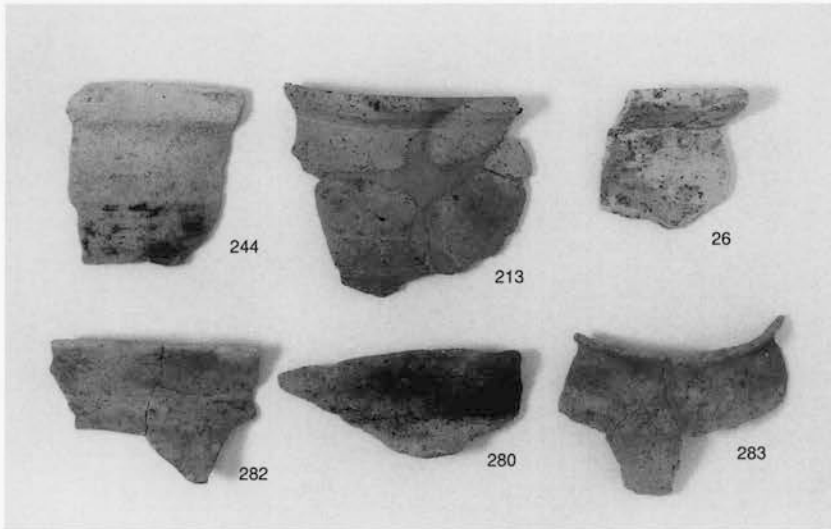
古代の土器（土師器）



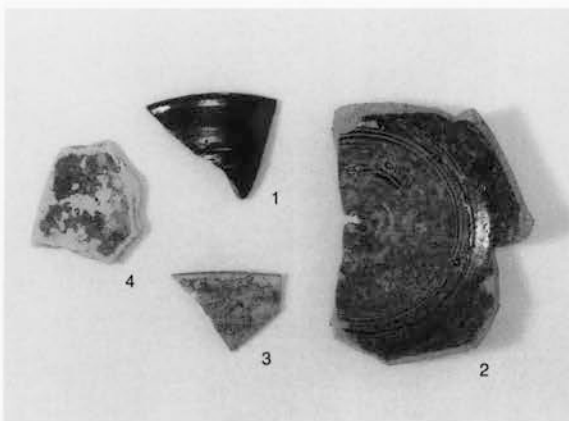
古代の土器（土師器）



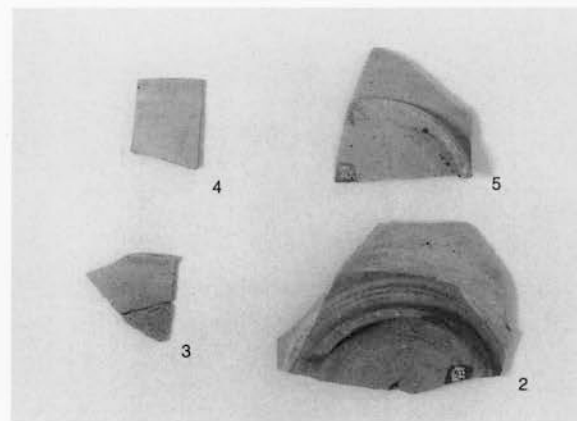
古代の土器（土師器）



古代の土器（土師器）



緑釉陶器



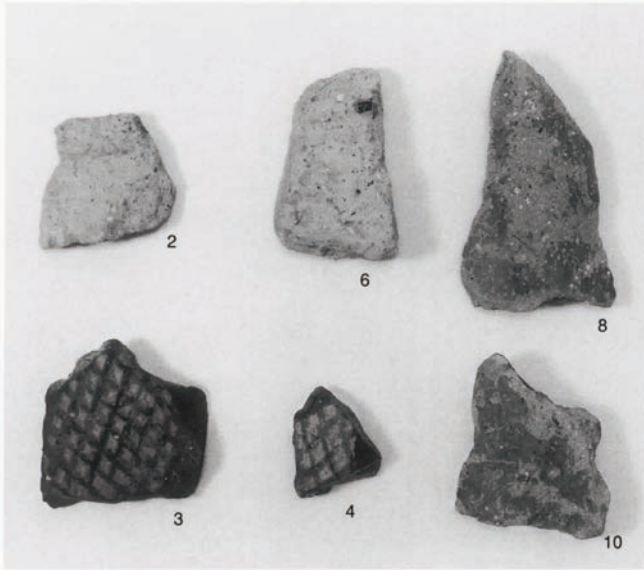
灰釉陶器



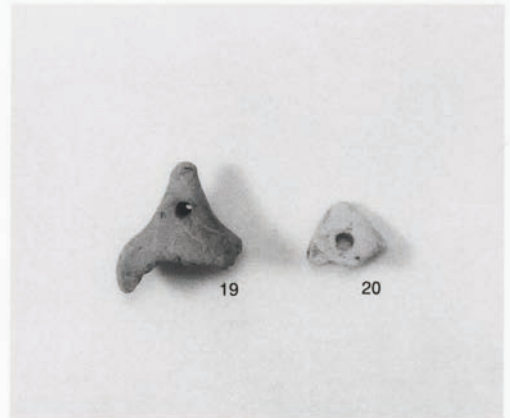
軒丸瓦



台付鉢



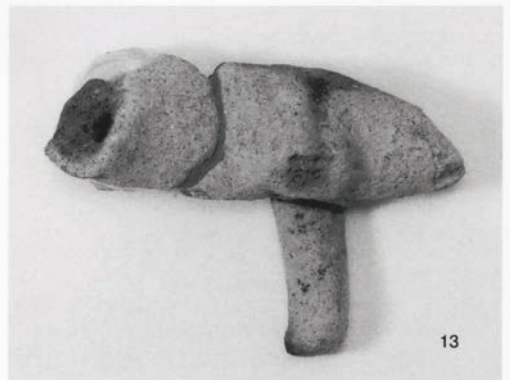
丸瓦・平瓦



土鈴

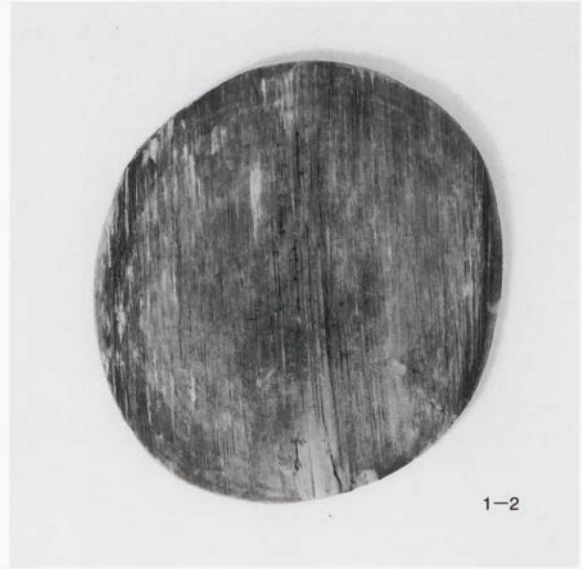


土馬・獸脚



土馬

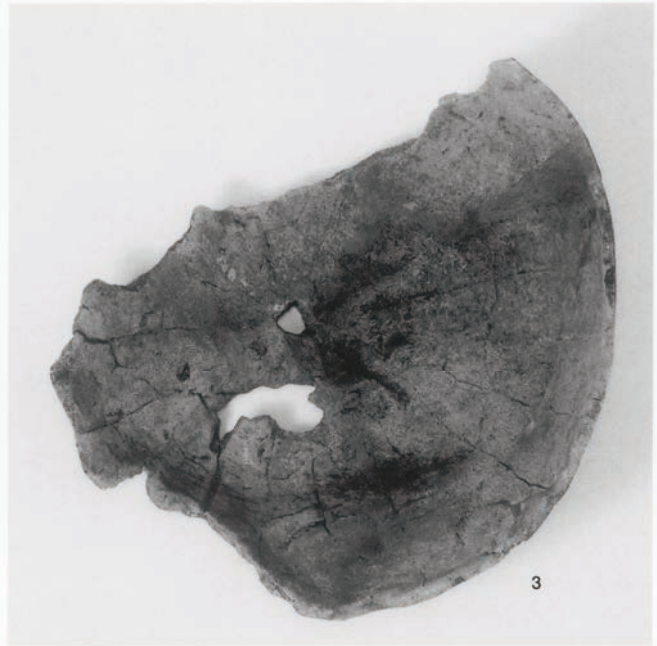




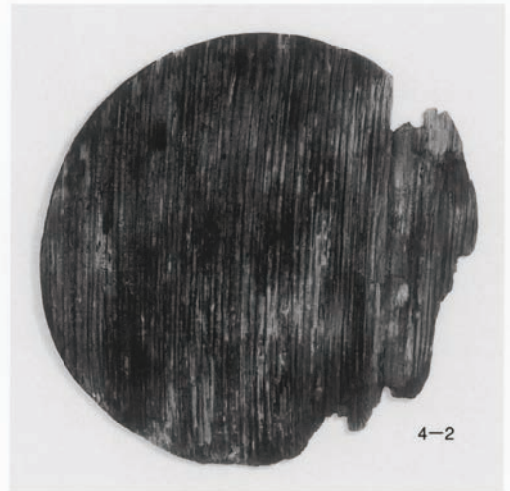
曲物 (1号井戸出土)



櫛



木製容器



曲物 (215土坑出土)

古代の木製遺物



権状錘



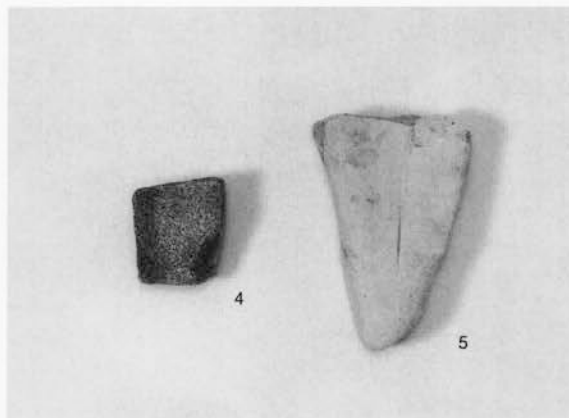
紡錘車(表)



紡錘車(裏)



不明石製品



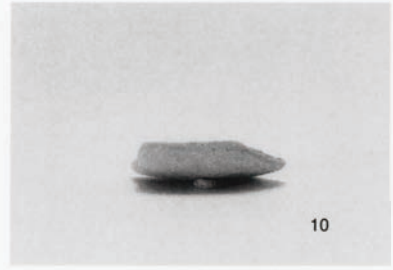
砥石



2



6



10



15



18



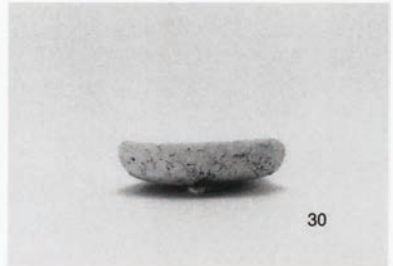
24



25



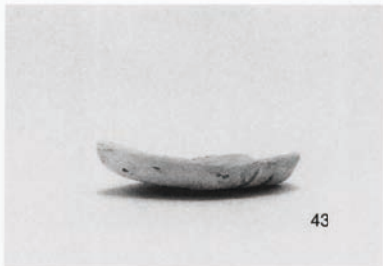
28



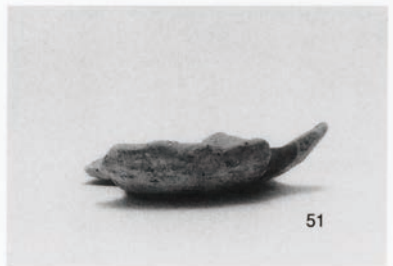
30



32



43



51



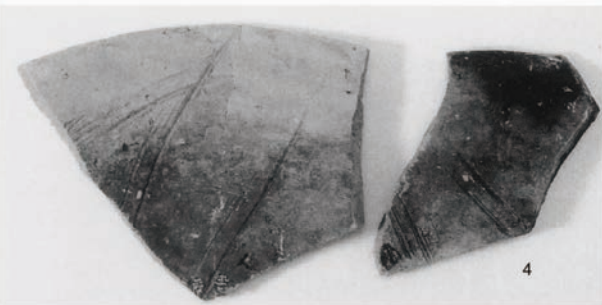
76



84



3

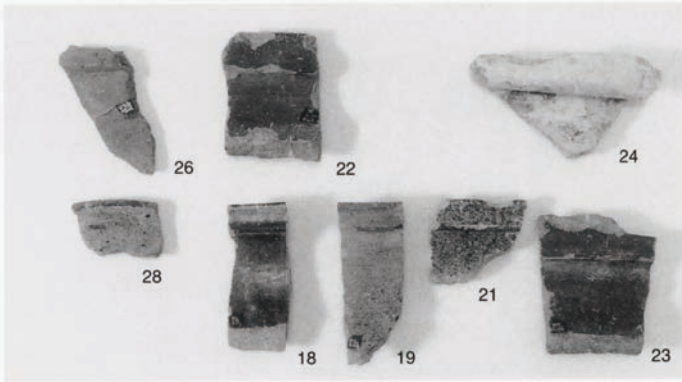


4



12

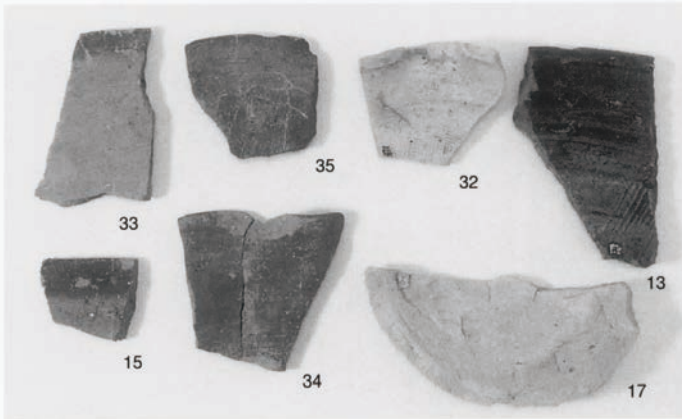
加賀  
中世の土師器・国産陶器



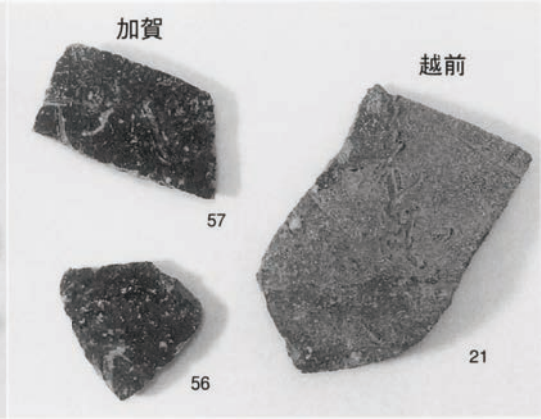
加賀



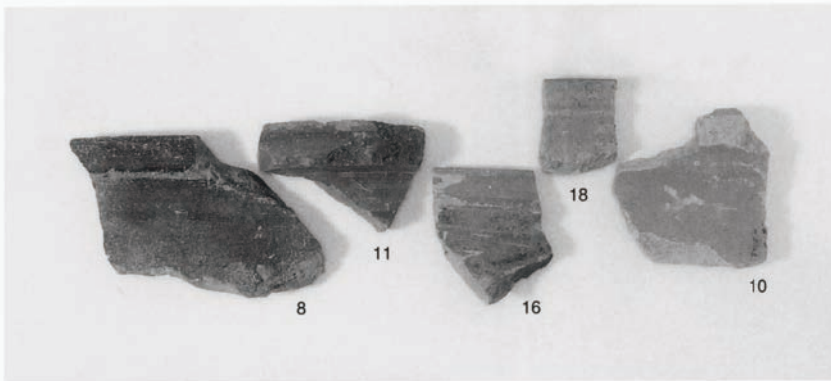
越前



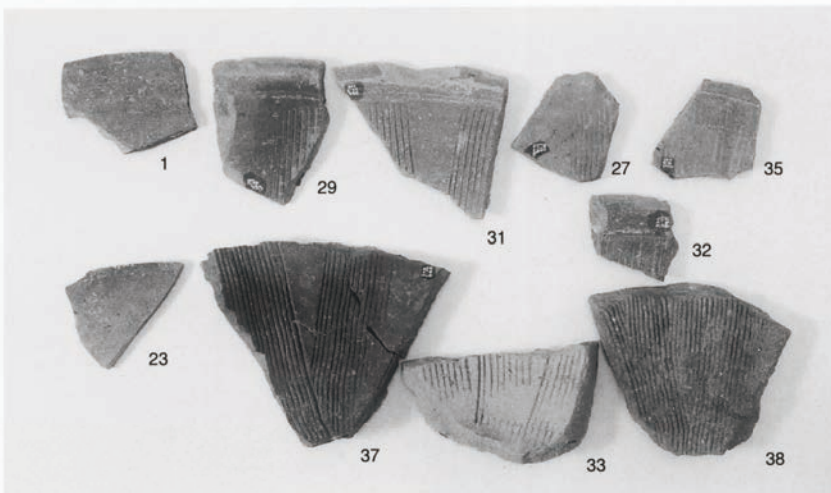
加賀



文字刻書資料

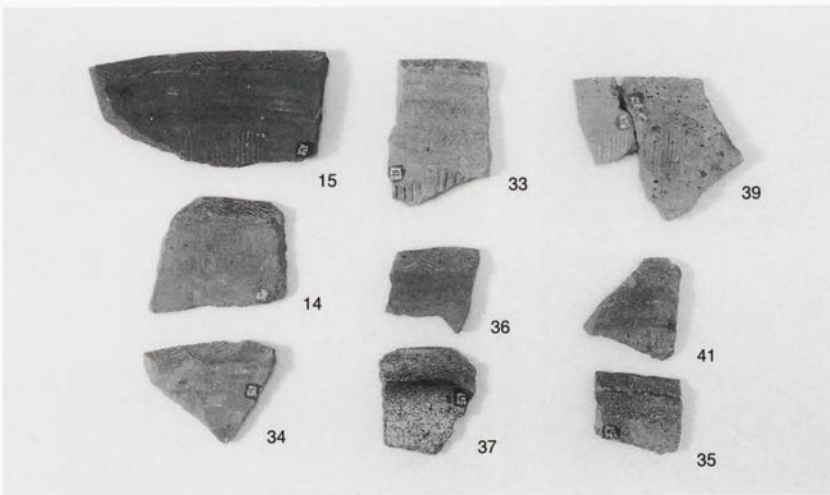
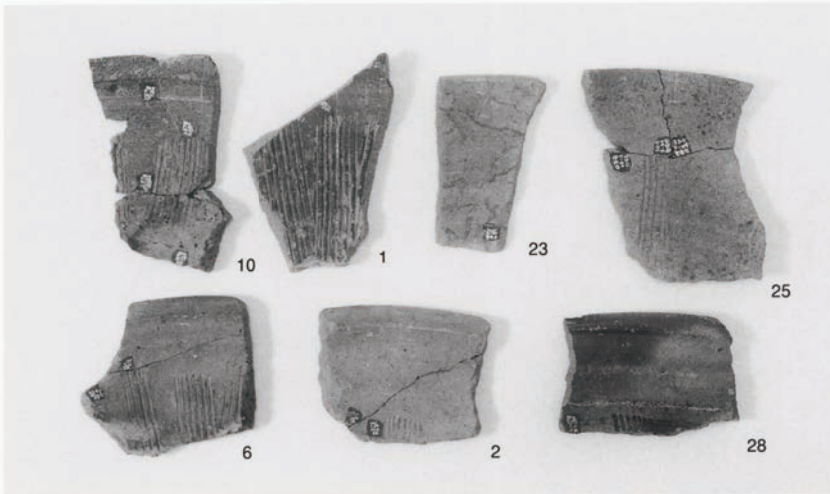
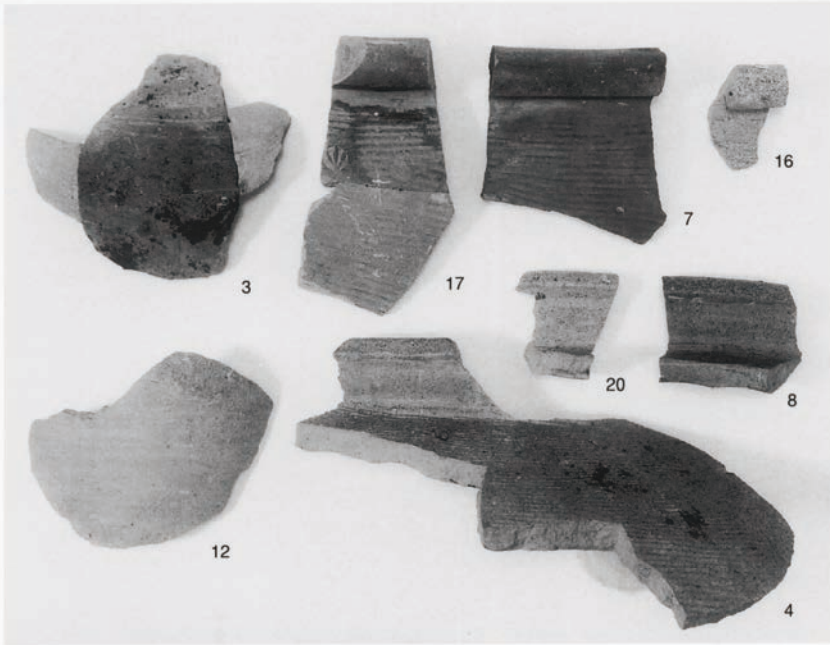


越前

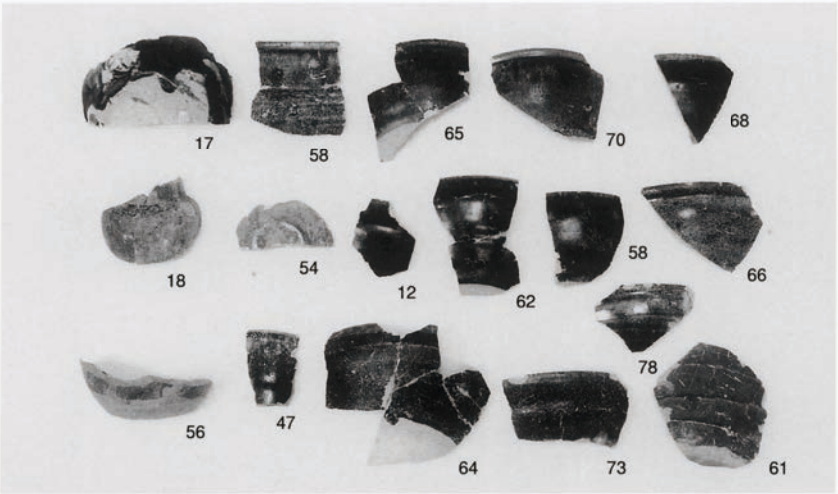
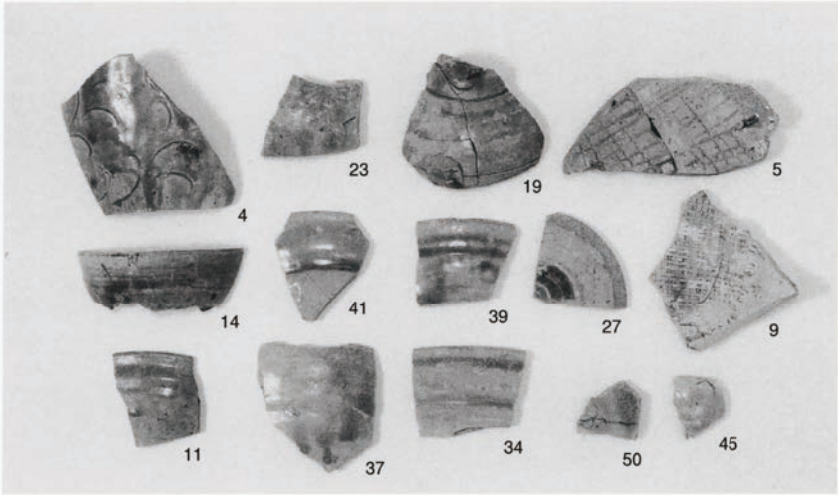
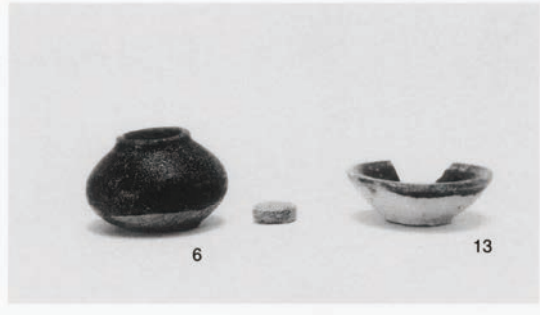


越前

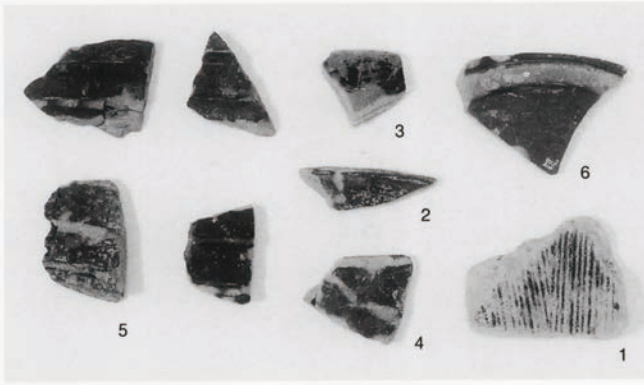
中世の国産陶器



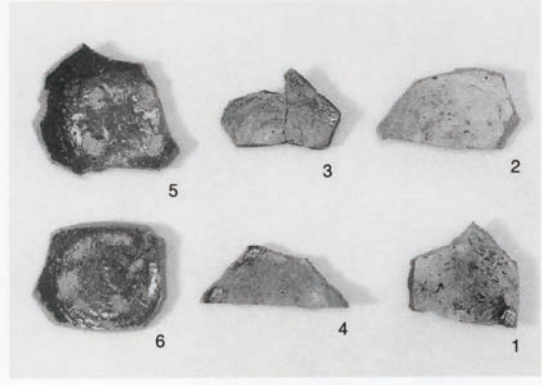
珠洲



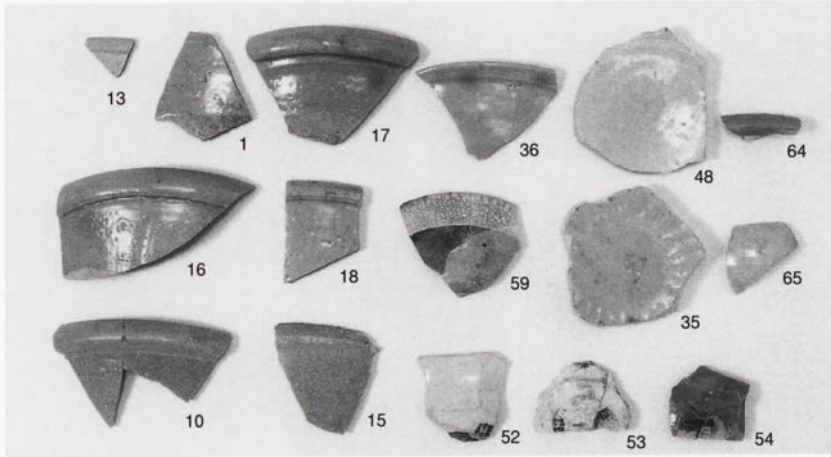
古瀬戸、瀬戸・美濃



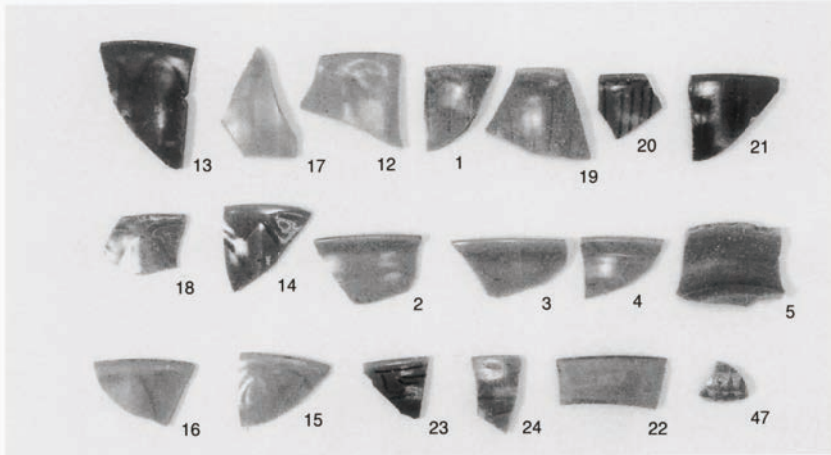
瓦質土器



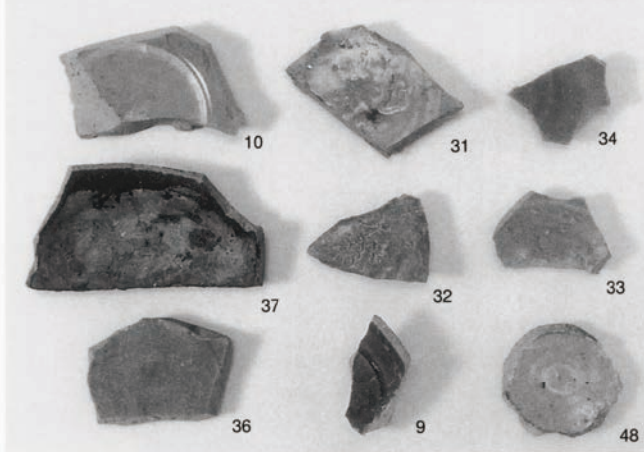
朝鮮系陶磁器



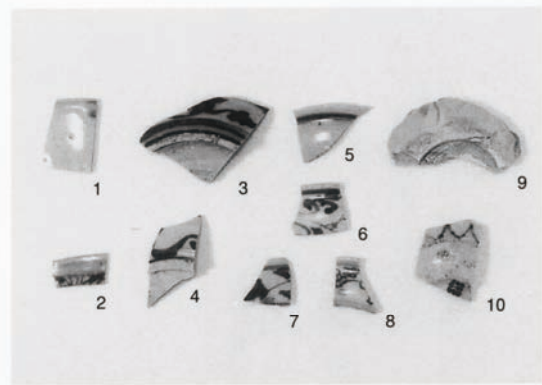
白磁



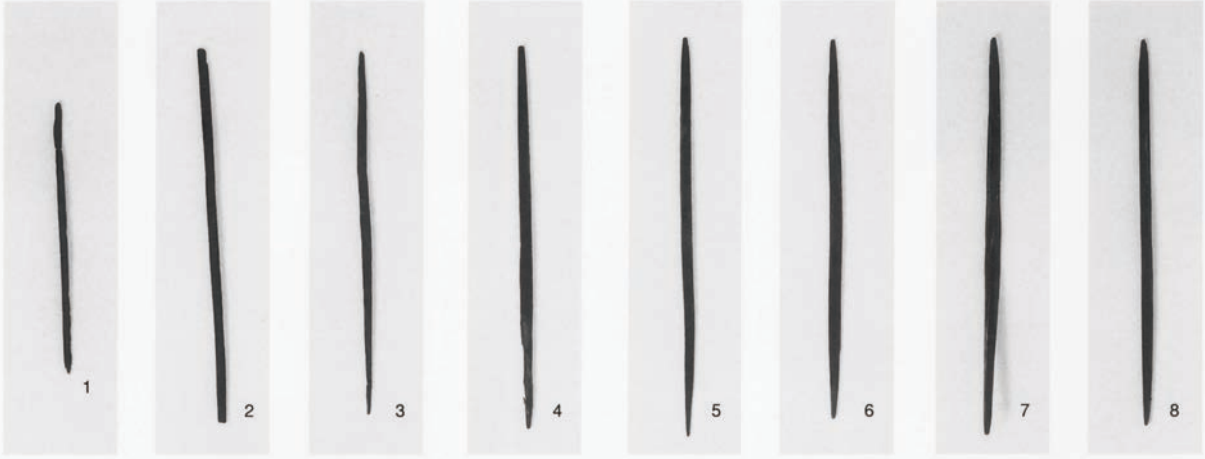
青磁



青磁



染付



下駄 (表)



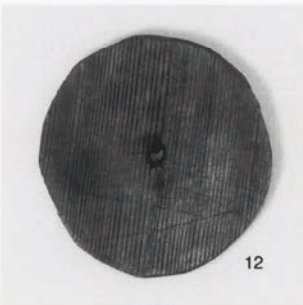
下駄 (裏)



下駄



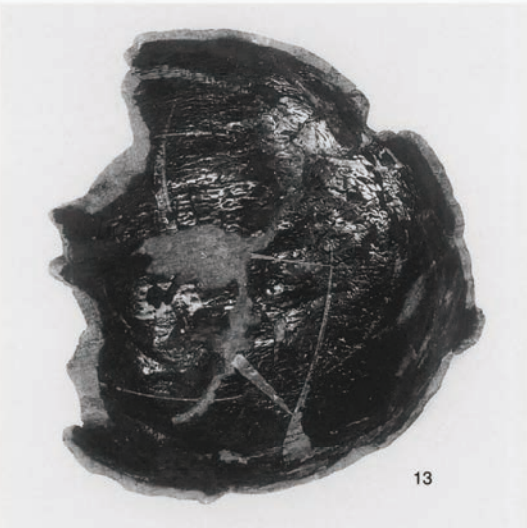
漆器皿



円盤



曲物の柄



漆器碗



曲物

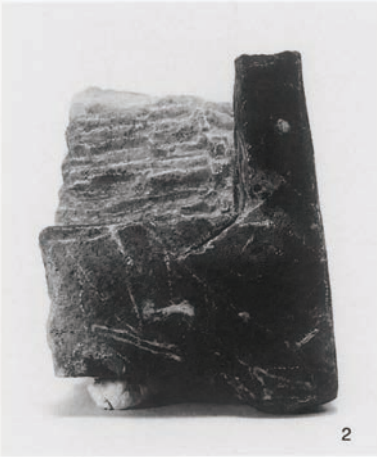




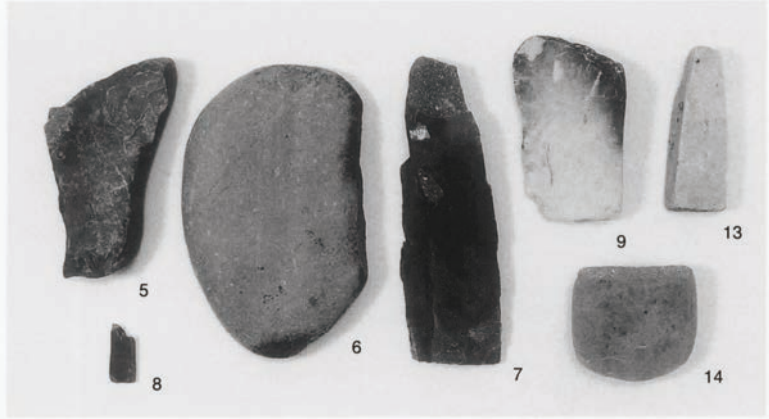
木製椀



硯



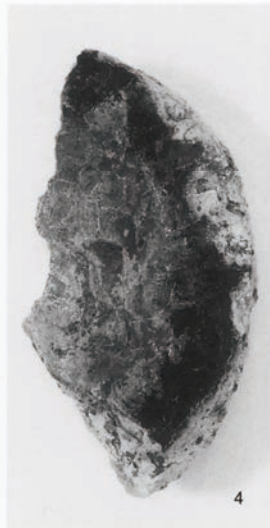
行火



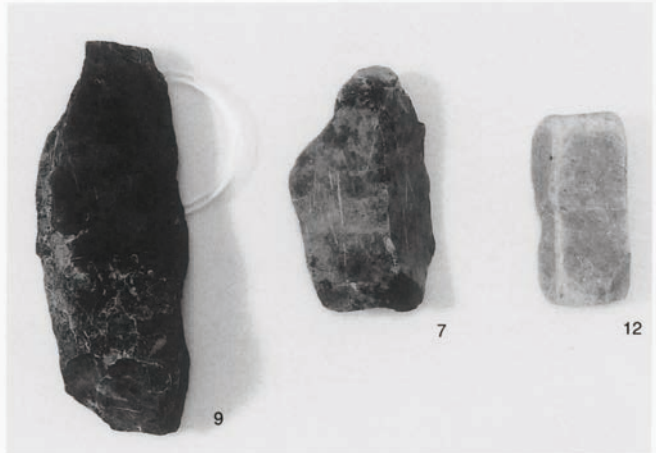
砥石



行火



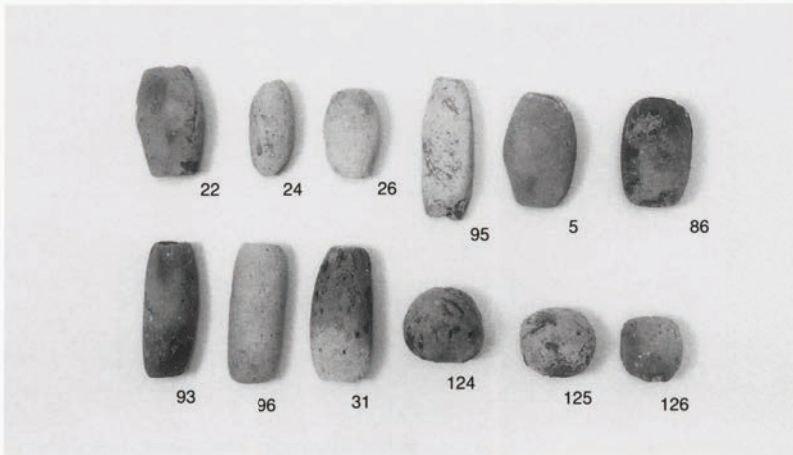
不明石製品



砥石



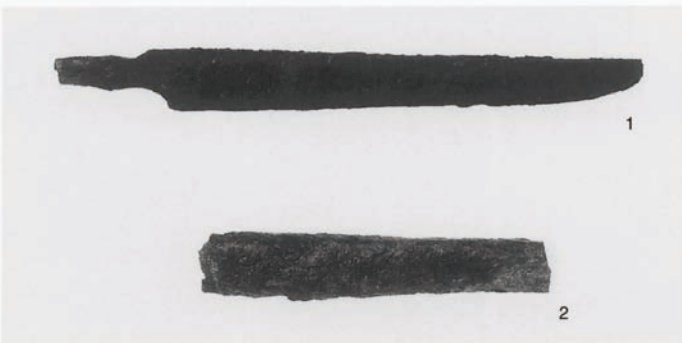
土錘 (大)



土錘 (中)



土錘 (小)



小刀

その他の遺物



筭

# 報告書抄録

ふりがな	せんだいおおきだいせき							
書名	千代オオキダ遺跡							
副書名	一般国道8号小松バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名								
編著者名	川畑謙二							
編集機関	小松市教育委員会							
所在地	〒923-8650 石川県小松市小馬出町91番地 TEL 0761-22-4111							
発行年月日	西暦2006年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
せんだい おおきだ いせき 遺跡	いしかわけん 石川県 こまつし 小松市 せんだいまち 千代町	17203	03165	36° 24′ 33″	136° 29′ 18″	1999.8.5 ) 2001.3.19	11,000m <sup>2</sup>	一般国道8号 小松バイパス 建設工事
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
千代 オオキダ 遺跡		縄文時代後期中葉 ～弥生時代中期		土坑 溝		縄文土器、 弥生土器、石鏃		
	集落跡 古墳	弥生時代後期 ～古墳時代前期		土坑 溝 墳墓(周溝)6		弥生土器、礫石器、 磨製石斧、石鍬、 管玉製作資料、 砥石		38号溝において、土 器の大量廃棄あり。 梯川右岸下流地域で は初の墓域検出。
	集落跡	古墳時代後期後半 ～古代		堀立柱建物跡65 井戸 土坑 溝		須恵器、土師器、 土馬、緑釉陶器、 灰釉陶器、瓦、 権状錘		土馬祭祀場、横板組 の井戸を検出。軒丸 瓦の瓦頭紋様は北陸 地方で類例なし。
	集落跡	中世		堀立柱建物跡36 井戸 土坑 溝		土師器皿、 中世陶器 (加賀、越前、珠洲、 瀬戸・美濃)、 輸入陶磁器 (青磁・白磁・染付、 朝鮮系)、 銅銭		

## 千代オオキダ遺跡

一般国道8号小松バイパス建設工事に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行日 2006年3月31日  
編集・発行 石川県小松市教育委員会  
〒923-8650  
石川県小松市小馬出町91番地  
TEL 0761-22-4111  
印刷 (有)ゲンダ美術印刷



